
東方紅蓮瞳 ~ Pupil with red Destiny ~

学徒兵叩き売り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方紅蓮瞳（Pupil with red Destiny）

【Nコード】

N5851K

【作者名】

学徒兵叩き売り

【あらすじ】

運命を切り開く。

それは、言葉だけで語るならば易いものだが、実際にそれを為すとなれば、果てしなく困難なものである。

ザフト軍に所属する少年、シン・アスカは、ある時突然、原因も理由も分からないまま、魑魅魍魎が跋扈する（というほどではないが、
・）幻想郷へとやってくる。

元の世界へと戻るために旅をしつつ、多くの妖怪や、あるいは人間達と出会う中で、シンは、自分の価値観を改変するかけがえのない

経験を重ねていく。

平和とは何か。

運命を切り開くために、何をすべきなのか？

シン・アスカは、幻想の旅の中で、その答えを、少しずつ見つけ出していく。

というわけで、東方と種死を題材にした、ほのぼのありシリアスありのよう分らん小説です。

Conversation『君は僕と似ている』（前書き）

まずは、前置きの文となります。

この小説は、TVアニメ、『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』と、同人作品『東方Project』を題材にした、幻想入り小説です。

主人公は、あらずじに書いてある通り、シン・アスカ。ストーリーは、スペシャルエディション込みで、本編終了後から始まります。

いいキャラなのに、主人公の座からあつさり引き剥がされて、あまりにかわいそうだったので、よくよく考えてみると、実は滅茶苦茶立派なシン。

せめて、こういう小説でもいいから、ちゃんと主人公をさせてやろう、という気持ちで、この小説を執筆しております。どんな気持ちじゃ・・・

小説においては、シンを始めとするキャラクターに、著者独自の性格などを設定しており、いわゆるキャラ崩壊が起きているかもしれません。

特に、シンに関しては、著者の中のイメージを全面的に押し出しているのです、それが顕著に表れているかもしれません。ですので、それらについて、ご了承くださいませ。

あと、作者はシンが好きですがキラが嫌いというわけでもありません。キラの考え方を肯定的に受け止めつつ、それを勝手に都合よく

改変しています。

また、本編のエピソードや会話を改変している場合もございます。顕著な例をあげるとすれば、本編では、シンの家族を死なせたのはキラではないということになっていますが、この小説では、キラが死なせたことになっており、本人はそれを悔やんでいる。シンもそれを知っているとこの設定にしています。

このように、小説中の設定と、原作との齟齬が発生する場合もございますので、これについても、ご了承くださいませ。

長くなってしまって申し訳ございません。

それでは、私のつたない文章ではありますが、お楽しみください。

Conversation『君は僕と似ている』

小さな切り立った崖に、一つのちつぱけな墓標が佇んでいる。

吹き付ける微かな風を一身に浴びるその墓標の前には、二人の男が立っていた。

一人は、黒い髪をした、日系の特徴を感じさせる少年だ。

しかし、その少年の瞳の色は、焼けつくような紅蓮の色である。

もう一人は、茶色い髪をした、前述の少年よりかは大人びている、青年と呼べるような男だった。

彼らは、ただ二人で、眼の前に、物言わず、しかし、明確な存在感、魂の息吹を感じさせる墓標を、じっと眺めていた。

その墓標の周りには、いくつもの花が束となって供えられていたり、あるいは、墓標の周りの地面に、直接植えられたりしている。

種類も多く、色とりどりの花が、墓標の周りを彩っていた。

墓の周りが綺麗で、美しいというのは、死者を悼む心の現れである。

墓標を眺めながら、青年、キラ・ヤマトは呟いた。

「どんなに綺麗に花が咲いても、人はまた吹き飛ばす．．．なら、またもう一度花を植えて、咲かせればいい」

その言葉に対し、赤い瞳の少年、シン・アス力が応える。

「だけど、そんなこと。いつまでも続けるわけにはいかないだろ」

現実を思い知った声音のあるその声に対し、キラがさらに呟く。

「そうなんだ．．．だから、今度こそ、吹き飛ばされないような強い花を咲かせるんだ．．．誰も吹き飛ばす者がいないような、美しい花を．．．その時が来るまで、僕たちは、いつまでも花を植え続ける」

そう語りながら、墓標を見つめ続けるキラの眼には、確かな覚悟が

あつた。

今までは、曖昧なものでしかなかった覚悟が、である。
シンが応える。

「いつ、それが実現するかも分からないのにですか？」

「．．．．．僕たちは、確かに、無責任なことをしたのかもしれない．．．だけど、それでも僕は、人の心を信じている。人々は、平和を望んでいると．．．そして、盲目の眼でも、手探りでも、いつか、平和の温かみに触れることができる．．．僕たちはそれを信じている．．．だから」

「分かってます．．．俺だって同じなんだ．．．同じだった、はずなんだ．．．」

キラの想いは、シンにだって充分伝わっている。

シンだって、平和を心の底から望んでいる。

もう、誰かが傷ついたり、大切な人を失ったりする悲しみを増やしてはいけない。

それは、彼が、愛する家族を失い、軍人となることを決意していから、変わっていない心だ。

だが．．．

「どうして、同じことを考えていて、同じことを願っているのに、お互いに争ったりするんだろうな．．．」

平和を願う心は同じはずなのに、シンとキラは、幾度となく互いに殺し合ってきた。

それが正しいことだと信じて。ひたすらに、互いを理解しようという心を捨てて。

「だけど僕たちは、心が望めば、簡単に分かり合うことができるんだ．．．今みたいに」

キラの言葉の通りである。

全てが終わって、こうやってお互い、その姿を見て、言葉を伝えあうことで、理解できる。

だが、あの時二人は、そうすることを放棄していた。
二人がそうであるということは、人類全体にしてもそうなのである。
相互理解を拒み、今ある価値観だけにとらわれ、戦うことしかできない。

そして、それが愚かなことだと理解しながらも、やめることができないでいる。

人類の果てしない悲哀だ。

だが、一つ言えることもある。

かつて、お互いを敵としか認識していなかった二人の若者は、今は、互いの心を理解し、それを尊重し、分かり合っている。

理解を拒むこと、価値観にとらわれること、そして、争うことをやめた。

やめることができている。

ならば・・・

シンが呟く。

「だから、いつか、人類全てが分かりあえるように・・・今は、花を咲かせ続けるんですね・・・」

いつか人々が、その美しさ、尊さに気付き、吹き飛ばすことなく、力を合わせて守っていく。

そういう時代になることを祈って・・・

だが、結局それは、キラが語る通りのことではない。

「僕の語っているのは、夢物語だ・・・願望ではない」

だが、願望すること、すなわち、願うことは、人の強さでもある。
願いを叶えるために、人は力を手に入れる。

復讐を果たすという願いがあるなら、そのための力を手に入れることもできる。

シンがそうだった。

そして、平和を願う心があれば、いつかきっと、それを実現させる力が手に入るはずなのだ。

キラはそれを、心の底から信じているし、シンだって同じだ。

だからこそ、キラは言う。

「だけど．．．シン。僕達に、力を貸して欲しいんだ．．．」

かつて、殺すための相手としか考えていなかった者からの、切なる願い。

かつてのシンならば、これをどう受け止めていただろうか．．．

それを考えたとしても、かつてが『かつて』でしかなくなってしまった今では、答えが分かるはずもない。

そして、今このとき、多くの出来事を経て、その心を強くし。キラの平和を願う心を理解し、憎しみのなくなったシンならば、快く、キラの願いを聞き入れることができる。

それは、確かなことだった。

むしろ今なら、ただ憎しみに突き動かされて戦い続けてきただけの自分に対し、力を貸してくれとまで言われ、申し訳ないとすら感じる心があった。

それこそ、シン・アス力という者の、本来の人の良さ、というものである。

彼特有の、不敵ながらも、人懐っこそうな笑みを浮かべたシンは、応える。

「分かりました．．．俺なんかの力なら、貸します。それで、世界が平和になるのなら．．．今まで死んでいった人達の心が癒やされるなら．．．俺は、あなた達を信じます」

その言葉に、キラは、彼にしかできない、優しさそのものが形になったような笑みを浮かべ、応じる。

「ありがとう．．．」

その日、因果な運命の下、互いに殺し合ってきた二つの命が、力を

合わせた。

自分達の、いや、全ての人々の願い。
本当の平和を、手に入れるために。

ユニウス戦役と仮称される戦いの終結から、幾ばくの月日を経た時分のことであつた。

しかし、シン・アス力は、心の奥底で思っていた。

—— だけど、何も見えないまま、手探りで平和を探すことに、みんな不安なのは確かなんだ．．．

そしてもし、平和の灯、希望の光を、いつまでも見つけることができなければ、人々はまた、同じ過ちを繰り返す。

それじゃ．．．

それじゃ駄目なんだ．．．

平和を、言葉で語るだけじゃ駄目なんだ。

もつと、もつと知らないと、駄目なんだ．．．——

その思念は、過酷な現実に、徹底的に打ちのめされたシンだからこそ感じる、現実的な不安であつたし、これは、全面的に正しい考えでもあつた。

この考えは、キラの人間性を少しばかり否定するものであるかもしれないが、紛れもない事実なのである。

今の人類には、平和を手に入れるためにしては、あまりに視界が悪すぎた。

まったくの暗黒が、その眼前に広がっていたのである。

手を伸ばせば、その先から消えてなくなるような、深淵なる闇が．．

.

PHASE・0『墓前で』

冥福を祈る、というつもりはなかった。

気がつけば、そこにいた。

そう．．．『そこ』にいた。

オーブ首長国連合。

地球連合とプラントの確執に対し、中立の立場にあるこの島国は、二度の大戦においても、その姿勢を崩すことなく、どちらかの勢力に与することもなく中立の立場を貫き通してきた。

だが、それをよしとしない各軍によって、数度の襲撃を受け、その国土が、幾度となく焼かれることもあった。

それでもなお、首長、ウズミ・ナラ・アスハ、そして、戦いの最中命を失った彼に変わる現首長であるウズミの娘、カガリ・ユラ・アスハの頑な姿勢が、国を支え、最終的には、二度の大戦を、無事生き残ることができた。

同盟国であるプラント、特に、ラクス・クラインと、彼女に賛同する者達の協力が影響していたところも大きいだろう。

プラントの象徴たる歌姫ラクスと、中立の立場を貫き続けた事実を有するこのオーブの価値は、終戦後にこそ発揮される。

ラクス主導の一派は、地球とプラントの友好のために尽力し、そのかけ橋になり得る者こそ、オーブであった。

また、戦後の疲弊した世界情勢の復興を担うのも、中立であるオーブの役目である。

平和の国であるオーブは、紛れもなくこの後の世界の安定を一身に背負うことになるだろう。

地球とプラントにしても、終戦後の政治に関しては、オーブを主体として行うつもりのようなのだ。

現実的な言い方をすれば、クライン派の少数精鋭により、大きな損害もなく、全面戦争を終結にまで向かわせたオーブには、反抗する気になれないのだろう。

歌姫様には頭が上がりません。といったところか・・・

だが、そういうことを抜きにしても、オーブという国には、ラクス・クラインのような協力者がいなくとも、戦禍を乗り越えるだけの誇りがある。

そして、そんなこの国は、どこよりも美しい国家であると言えた。

そしてそんな国で、シン・アスカは生まれ、育ち。そして、愛する者を失った。

数年前、解放作戦と称される地球連合軍からの侵攻の折、プラントからオーブ軍救援のため駆け付けたMS、フリーダムが戦闘中に放った流れ弾が、避難中のアスカ一家を襲った。

シン一人残して、家族はみな死んだ。

腕だけになった妹の亡骸を見たシンの赤い瞳に、憎しみだけが満たされた。

家族を殺した当事者への憎しみ。

こんな戦争を起こした連合軍への憎しみ。

そして、敵の侵略をむざむざ受け入れたオーブと、その長に対する憎しみ。

家族の死を眼の前にし、一人で生き残ってしまっている自分自身に対する憎しみ。

戦争そのものに対する憎しみ。

ありとあらゆるものに対する、莫大な憎しみ。

それが、シンの瞳を、より一層赤々と、狂気じみた色に染めた。いや、滲ませた。

その後、二度と誰かを死なせたりしないという誓いの下、プラントの軍隊、ザフトへと入隊したシンだが、確かに心に固く在るその決意の奥には、あの時感じた行き場のない憎しみを、暴力という形で発散したい、復讐を果たしたいという気持ちがあったのも、確かなことであろう。

そして、その後に待っていたのは、過ちと哀しみばかりの日々だった。

「俺たちは、どうして．．．こんなところに来てしまったんだろう．

．．．」

ある日シンは、オーブ領のある場所にある、墓標のところを訪れていた。

忘れもしない。キラ・ヤマトに協力を誓った、その場所だ。

あれから、かなりの時間が経っている。

もう、一年以上は過ぎているかもしれない。

何で今になって、こんなところを訪れたのだろう。

それは、当人であるシンにも分からなかった。

突然、理由もなく無性に、ここに来たくなったのだ。

そして、それを疑問に思う言葉。

何故、『俺』という個人ではなく、『俺たち』という複数名を使っ
てしまったのだろうか．．．

何もかも、シンには分からなかった。

まるで、意識があるままに夢遊病にでもかかっている気分だ。

自分の身体に糸がついていて、どこかの誰かがそれを手繰り寄せているかのように、シンは、見えない何かに引っ張られてここまで来た。

少し前までは、無いに等しいほどだった穏やかな風が、段々と強くなってきた。

「風が強くなってきた．．．これだと、その内突風になるぞ．．．」

「

そう呟くシンだが、ここから帰ろう、という気分にはならなかった。「また、花が植えられている．．．」

風に吹きつけられるシンの目前に佇む墓標の周りには、多くの花が植えられていた。

大分前の記憶ではあるが、以前よりも、その数は、増え、より一層、死者の魂に対し、彩をもって供養せんと咲き誇っていた。

「誰かが植えたんだ．．．キラさんか．．．それとも、どこかの誰かが？」

それは分からなかったが、このちっぽけな墓標に眠る死者を悼む気持ち、墓前の花を増やしているのだろうということを、シンは、確かに感じていた。

吹き付ける風が、俄然一層強くなる。

いよいよ、本当に突風になってきた。

草のかすれる音と、波がうなり打ち付ける音が、風が空を切る音と共に、シンの鼓膜を揺らした。

このまま身体が浮き上がってしまいそうな風を一身に受けながらも、シンの眼は、未だ、墓前に植えられた花を見ていた。

強風にあおられ、激しく茎を揺すりながらも、大地にしっかりと根を張っている花は、決して吹き飛ばされることはない。

風が吹く程度のことでは、花は決して、吹き飛ばされたりはしないのだ。

——花って本当は、とても強いものなんだ．．．そう簡単に吹き

飛ばされたりはしない．．．少なくとも、自然の力では．．．なら、花を吹き飛ばすのは．．．——

人の悪意を以って降りかかる、災いだろう。

結局、悪いのは全て人、なのかも知れない。

自然に対しても、そうだ。

自分達の進化に躍起になった人類は、地球環境を汚染し続け、億を超える歳月を経て蓄積された資源を、一瞬で使い果たした。

環境が生み出した個々の違いが差別となり、差別が、弾圧と戦争を生んだ。

そして今では、自然の摂理に逆らって、人の遺伝子を細工して生みだしたコーディネーターという存在を理由に争いを続けている。

自分達が、自然の摂理、神が与えた在り様を身勝手に変えたというのに、そしてそれを認めたというのに、そのことで、また多くの罪を重ねる。

自分の人格を変えていく中で、運命に半ば絶望したところもあるシンとしては、人類全体の、もちろん自分自身にもある罪に対してもまた、冷ややかな諦観、絶望があった。

この罪を認めて、乗り越えない限り、人類に平和は有り得ないだろう。

いくら全ての人が平和を望んでいたとしても、罪を認める心を放棄しては、それは、永遠にかなわない。

———こんなことを再認識するために、俺は、こんなところに来たのか．．．？———

全ての物事から虚脱し、ここではないどこからこちらを眺めているように見える、ちっぽけな墓標。

それをじつと眺めるシンの心は深く打ち沈んだ。

風は尚も強くなる。

そろそろ、ここにいらなくなるほどの暴風に変わりそうだ．．．これほどの風になるとは、聞いていなかった。

いい加減、帰らないと、良くないことになる。

こんなところに長いしたところで、落ち込むだけというもの、よく分かったのだから。

この場を立ち去ろうとしたシンだが、最後の最後に、強風に吹きつけられながらも、静かに佇む墓標に、一瞥をくれた。

墓標と言ったって、所詮はただの形の整った石でしかない。それこそ、そこらの石ころと同じだ。

だが、それを人は尊び、悼む。それは、墓というものには、人の魂が宿っているからだろう。

そして、それを供養しようという気持ちを、一つの形としたもの。それが、墓というものののだ。

だからこそ墓は、ただの石でありながら、人の命と、それを悼む心の重み加わり、言いようのない存在感を醸し出しているのだ。

それが、シンを呼んだのかもしれない。

あるいは、この墓だけではない。多くの死者の心が、殊更、戦争で死んでいった者達の心が、彼の心呼びかけたのかもしれない。

戦争で死んだ人々の願っていることは一つだろう。

自分達の死が、無駄にならないこと。無意味なものにならないことだ。

「...俺たちは、戦争で死んだ全ての人達の命に、応えなければいけないんだ...全てを懸けて」

どれほど現実打ちのめされ、平和を作ることの難しさを思い知ろうと、決して諦めない。

それが、シンの決意だ。

今度こそ、この場を立ち去ろうとしたシンだが、その時だった。

墓標に背を向けたシンの身体に、正面から、信じられないような強

風が吹き付けた。

そのまま魂がもっていかれそうな風に、シンは咄嗟に、眼をふさぎ、身体を強張らせた。

だが、足元から、大地に立っているという感覚がなくなるのを感じたシンは、眼を見開く。

そして、眼の前に映し出された光景に、驚愕した。

誇張などではない。むしろそれ以上だ。

魂はおろか、魂ごと身体全体が、風にあおられ吹き飛んでいたのだ。今しがた立っていたはずの小さな崖が、その断崖をこちらに向け、遠くに見えていた。

足元には、地面はない。

あるのは、荒巻く海だけだった。

シンは一瞬、何が何だか理解できなかった。

自分の身体が風にあおられ、木の葉のように宙を舞っていると理解できたのは、さらなる強風が身体を吹き抜け、視界が、ジェットコースターのように目まぐるしくスライドしたその時だった。

「う、嘘だろ・・・っ!？」

これは何かの冗談だろうか？信じられない。

このままでは、海面に落下してしまう。

現に、シンの身体の真下には、海しかなかった。

「う、うわっ！うわぁっ！」

必死に身体を動かしても、バタバタと、虚しく宙をかすめるだけだ。元いた場所に帰ることは愚か、さらにそこから遠のいていくばかり。そして、確実にシンの身体は、少しずつ海面に向かって落下していった。

風にあおられ、海中の波の動きは、半端なものではないだろう。このまま落ちれば、まず無事ではすまない。

——冗談じゃないっ！——

シンの頭の中に、混乱が充満した。

考えることができなくなった脳裏では、その言葉だけが、何度も錯

綜していた。

だが、そんな中突然、別の言葉が脳裏をよぎった。

——君は．．．心の底から平和を望んでいるようだな．．．——

「う．．．っ!？」

それは、シンの声ではなかった。

シンの知っている何者の声でもない、初めて聞く声だった。

誰かの声に似ているとは思うが、しかし、同じ声ではないと、確信できる、誰かの声。

その声が、今シンが置かれている状況を考えれば、あまりに静かな調子で、言う。

——だが、同時に、今の人類では、それを手に入れることができないことも、知っている．．．かつて私が思い知り、そして諦観したのと同じように．．．——

「な、何の声だ．．．誰が喋ってるんだ．．．!？」

混乱のベクトルが別の方向に傾いたシンの叫びは聞こえぬ様子で、声はさらに語る。

——人は所詮、己の知ることしか知らぬ。だからこそ、自分に分らないことに不安を抱き恐怖する。そしてこの世界は、知らぬことを知るにはあまりに狭く、暗すぎる．．．この闇は、世界を知り、他者を知り、あらゆるものを知ろうとする心を呑みこんでしまう．．．だからこそだ．．．この世界の姿を見るならば、内からではない、外から見なければならぬのだ——

「誰なんだあんた．．．あんたは一体何なんだ．．．?」

——私とあの男、そしてあの少年にできず、できなかったことを、君に託す．．．シン・アスカよ、行くがいい。こことは違う世界へ、そしてそこで、知るべきことを、己の知りたいと欲することを知らない。そして改めてこの世界を見つめなおし、私達が見つけれなかった答えを見つけ出すがいい、見つけ出してくれ．．．私はそ

れを祈っている．．．――

「．．．議長．．．違う、あんたは．．．」

――ギルの言っていた通りだな．．．良い眼をしている．．．．
．その眼で見据えるものを、決めつける者はもうおらぬ！全ては．
．君が、己の心で決めることだ．．．．．！――
「．．．．．」

その言葉。人の持つ熱を感じさせる、心を鼓舞し、励まし、そして願うような声。

そして、背中を打ち付ける、水の感触とは違う、もっと別の、正体不明の感覚を最後に、シンの思考は、一旦途切れ、長い沈黙の淵へと打ち沈んだ。

PHASE - 1 『傘の妖怪』

人は、何も知らない。

何一つ知らないまま、この世に産み落とされる。

自分が誰なのか。

誰が自分を産み、そして育てていくのか。

言葉とは何か、何をどう言葉として表わせば、自分の心を伝えることができるのか。

そもそも、心とは何なのか。

どうすれば、自分は生きていけるのか。

そもそも自分は生きているのか、死んでいるのか。

生きているとはどういうことか、死んでいるとはどういうことか。

それは幸福なことなのか。それとも不幸か。

自分がこの世に生を成し、そしてそれを享受し、生きていく。それに、価値はあるのか。

何も知らないまま人は生まれ、そして、長く、同時に短い人生の中で、少しずつ、知っていく。

自分の知るべきこと、価値のあるものを。

だが、全てを知ることとはできないし、知ろうとは思わない。

それは、不可能なことであるからだ。

そして、己の知らぬこと、知ろうと思わぬことに直面した時、人は不安を抱き、時には恐怖する。

そして、その心を何とかして解消したいと願う。

それが、理解しようとする 것인가、あるいは、不安の種そのものを排除することなのか。

どちらが正しいのか。

それも知らないまま、人は生まれる。

そして、それを知ることができるかは、それからの人生にかかっているのだ。

「ねえ。お兄さん？起きてよ」

少女の声が聞こえる。

相変わらず聞いたこともない声だが、今度は、頭に直接響くような奇妙な感覚は無い。

紛れもない、鼓膜を直接響かせる、『外』からの声だ。

その声に、シン・アスカの意識は再生する。

背中には、固いようで、柔らかいような、地面の感覚がある。

ということとは、ここは大地の上だろう。

海に叩きつけられ、本来ならば、身体がびしょびしょに濡れているはずだし、最悪、海面に落下した衝撃やら、海中で盛大にかき回された衝撃で、五体無事であるのかも怪しいはずのシン身体だが、不気味であるほど、何の害もないことを、目覚めたシン自身が確認した。

全身打撲やらはないにしても、身体が濡れているような感触すら一切ないのだ。

服は、一滴の水も吸っていない様に、乾いている。

気を失っていたのは確かなようだが、海に叩きつけられたのも確かだ。

ならば、服がまったく濡れていないというのはあまりにおかしい。乾くまで気を失っていたにしても、水を吸いきった服が完全に乾くまで、一体何時間かかるのだろうか？

下手すれば、時間は愚か、日数で数えたほうが早いかもしれないほどの時間を要するはずだ。

それに、先ほど吹き荒んだ、身体を吹き飛ばすような突風も、すっかり止んでいるらしい。

一体これはどういうことだろうか．．．？

何もかも夢で、実際のところは何も起こっていないのか？

そう錯覚するほどに、シンの身体は、五体完全な状態だった。

だが、先の一瞬（なのは分らないが）の出来事は、幻覚にしては、デテールがはつきりしすぎているし、現に、今しがたまで、シンは気絶していたのだ。

何も起こっていないのに気絶するはずがない。

とにかく、意識が覚醒し、閉ざされた眼を開いたシンの視界には、一人の少女が映っていた。

今しがた声をかけてきた本人だろうが、中々ファンタジックな外見をしていた。

水色の髪の毛に、左右で色の違う眼、オッドアイというやつだろうか。そして、あまりいい印象の持てない色彩の傘を差している。

「．．．．．」

未だぼやけている意識のまま、寝そべっている姿勢のシンの傍らに座り込む少女の顔を、シンはじっと見つめていた。

もしかしたら、この少女が、自分を介抱してくれたのだろうか。

だが、少女の顔の向こう側には、透き通るような、雲ひとつない青空が広がっている。

ならば、ここは外だろう。

わざわざ外で、気絶している者を介抱するのだろうか？

服が乾いているなら、相当長い間介抱していたのか、あるいは、乾かして、また着せてくれたのかもしれない。

にしても、びしょ濡れの服を天日干しにはしまいし、外に延々寝かしておくわけもない。

どうも、やはりよく分からない。

目覚めるなり、早速頭が混乱してきたシンに対し、少女が、言う。

「あ、起きたねお兄さん。うらめしやー」

「・・・あ、ああ・・・うらめしや?」

「うらめしや」

「・・・・・・」

目覚めるなり声をかけてくれたのはいい。やはり、この少女が介抱してくれたのだろう。

にしても、何がうらめしやなのだろう。

目覚めのあいさつに、うらめしやなんて言う者はいない。

古く日本と呼ばれた国を先祖とするオーブ出身のシンは、うらめしやという言葉の意味は分かる。

当然、目が覚めたばかりの相手に言うような言葉ではない。

「・・・うらめしやって、何?」

呆氣にとられた様子で聞いたシンに、少女は、不思議そうな顔をして応える。

「あつれ・・・驚かないの?」

「・・・いや、驚くわけがないだろ」

確かに、うらめしやという言葉は、いわゆる『おばけ』やら何やらが、現れるなり相手を驚かすのに使う言葉ではあるが、それにしたって、正しい用法というものがある。

目覚めの相手に使うにはあまりに滑稽だし、何より、人間の、少なくとも人間にしか見えない少女が言ったところで、何一つ驚かないし、怖くない。

何のつもりだろうかと、固まっているシンに、少女は驚くべき、というか、呆れるような言葉を放った。

「だってあたし、妖怪だよ? あんた、人間ならさ、普通驚くはずなのに」

「・・・は?」

これはどうやら、そっち方面の事態らしい。

この女の子、もしかして、頭がちよっぴりどうかしてしまっている

のかもしれない。

「ほら、あたし妖怪なんだから、驚きなさい、驚け！うらめしやー」
「……………」

気絶していた者が眼が覚めるなり、こういうことを言うのだから、
どうやら、本当にそうらしい。

あるいは、こちらをからかっているのか？

ちよつと嫌な気分をしたシンは、ぴしゃりと言いつ放った。

「あんまり馬鹿にしていると、怒るぞ」

「え…………別に馬鹿にしてないよ。あたしはただ、お兄さんを驚
かせようと思っただけよ」

ますます不思議そうな顔をしてこう言うあたり、どうやら、その言
葉に嘘はないらしい。

からかっているつもりはなさそうだが、となれば、いよいよそつち
方面なのだろう。

さすがに妙な気分になってきたシンの心に、彼の悪い方の性質、少
し意地の悪い部分が現れてきた。

どうやら本気らしいこの少女を、逆にからかって、混乱させられた
仕返しをしてやろうと考えたのだ。

しかしまあその前に、彼女がシンを介抱してくれたのは確かなよう
だし、一応、そのことは感謝しておこう。

それに、ここがどこなのかも気になる。

オーブ領内ではあるだろうが、一体どこなのだろうか。

ひとまず、横になった身体を起き上がらせたシンは、一度あたりを
見回した。

地平線の果てにまで広がる緑の草原。

数？先まで見渡すことができるが、その先には、ビルの類はともか
くとして、舗装された道路やら、街頭やらも確認できなかった。

せいぜい、小さな林やらが、所々に見えるだけだった。

これほどの広い草原を、シンは今まで一度も見ることがなかった。

それに、こうまで広い土地なら、公園やら何やらで、どうしても利用できるはず。山腹のような不整地ならともかくとして、この草原は、なだらかな平地だ。公園にしても建造物を建てるにしても、最適の場所であろう。

だが、どうみても、まったくの手つかずの状態に見える。

オーブ領内のありとあらゆる場所を見回したわけではないシンだが、こんな場所、オーブ領内にあっただろうか．．．

試しに、すぐ隣に座る少女に聞いてみる。

「いきなりですまないけど、ここって、どこ？オノゴロ島かな？それともカグヤ島？」

シンの言葉を聞いた少女は、ますます不思議そうな、きょとんとした表情を浮かべた。

どうも、変なヤツと思われているような気がして、気分がすぐれない。

こちらとしては、むしろ向こうを変なヤツと思っているのだ。

そして、少女は応える。

「おのごろ．．．かぐや．．．どこそこ？」

「．．．．．」

まさか．．．オーブ国を構成する島の名前する知らないとは．．．これはいいよ、いいよだ。

シンは、いい加減呆れかえったような口調で言う。

「じゃあ一体どこなんだ。まさか、ユーラシア大陸だとか言わないよな？」

ほとんど冗談のつもりで言った言葉に対し、少女は、それ以上の冗談を返してきた。

「だから、ゆらーしあたirikutteどこ？ここは幻想郷だよ？どうしたのお兄さん」

「ど、どうしたじゃないよ！どこだよそこ」

ユーラシア大陸なんて、小学生でも、勉強してれば知っている。

それに、幻想郷？

それこそ、シンのまったく知らない名前だ。

日本名らしいが、オーブにそのような土地はない。

そろそろ本気で怒ってきたシンは、念のために、もう一度だけ聞く。

「お前、俺をからかっているのか？」

少女は、すぐさま応える。

「違うよ。驚かせてるだけよ」

「．．．冗談じゃない」

これはもう、話のしようがない。

呆れかえってもものも言えないというのは、こういう気分か．．．

しかしまあ、この少女だって、こちらをからかう気はないし、言っていることは本気らしい。

そういう相手を邪険に扱うのは申し訳ないのではないか、と思うだけの人の良さが、シンにはあった。

彼女の言うことは一切無視することに決めたが、とりあえず、相手にはしないといけない。

それに、介抱してくれた礼もしなければならない。

あと、ついでだ、この少女を逆にからかってやろうというイジワルも、実行しておこう。

一つ大きなため息を吐いたシンは、人の悪そうな笑みを浮かべて、少女に言った。

「でもま、君が俺を介抱してくれたんだろ。それは感謝するよ、ありがとう」

「感謝されるほどのことじゃないよ。あたし、今さっき、ここで気持ちよさそうに寝てるお兄さんを偶然見つけたただだから」

「．．．はっ？」

もう訳が分かん。

本当の本当は、やはり彼女はこちらをからかっているのではないかと疑ってしまう。

もういい、そっちがその気なら、こちらとて、もう聞く耳はもたない。

シンは次いで、言う。

「それで君、俺を驚かせたいそうだね．．．だったら、ほら、驚かせてみなよ」

言うなり、立ちあがったシンは、どうぞ？という具合に、両手を広げて、少女に対し、見下しているような眼をくれてやる。

明らかに、馬鹿にしていますよという態度だった。

しかし、そんなシンの態度に対し、少女は、逆に喜び勇んで、シンに倣うように、すくつと立ちあがった。

改めてみるとこの少女、ファンタジックとかいう問題ではない外見をしている。

裸足に下駄なのに、着ている服はどちらかといえば、西洋風なものを感じる。

何より奇抜なのが、手に持っている傘だ。

はつきり言って、あまりにセンスが悪い。

眼玉と、舌を出している口が書き込められている、毒々しい色の傘だ。確か、これそっくりの見た目の傘の妖怪が言い伝えられていた気がする。

とてもじゃないが．．．いや、とてもと言い切れる。

余程の思い入れがなければ、こんな馬鹿みたいな傘、恥ずかしくて差そうと思わない。

まあ、それはともかくとして、シンに馬鹿にしている態度がありありなのを知ってか知らずが、不敵な笑みを浮かべて、少女は立ちあがった。

まさか、本気でこちらを驚かそうという気なのだろうか。

だったらそれでいいだろう。

向こうが何をしてこようと、眉一つ動かすことなく、冷ややかに眺めておけばいい。

最終的には、厳しい一言でも投げかけて、泣かしてやろう。

その後は、適当に辺りを歩いていけば、何らかの建物は見つかるだろうし、こいつよりかはマシなことを言う人間とも会えるはずだ。

そう考えていたシンだが、次の瞬間に眼の前に映った光景に、一切の思念は吹き飛んだ。

中空に現れる数え切れない数の傘の大群に、それが発する無数の光る物体。

多いとか少ないとかいう形容ができない。

まさに無数としか言えないような、光り輝く弾のようなものが、シンのいる方向目掛けて、さながら雨粒のように飛来してきたのである。

青空の光景は、少女の発する奇妙なオーラの色に染められ、光り輝く弾丸の雨が、シンの視界を埋め尽くす。

まるで世界の背景のような映りこむこのオーラは・・・傘か？傘の怨念？

とても、この世の光景には見えなかった。

「え？いいいいいいいつ！！？」

さすがにこれには、シンも驚愕して、素っ頓狂な叫び声をあげる。

「あ！」

少女のやったという感じの声が聞こえる中、一斉に襲い来る光の弾丸の内の一つが、シンの頭を直撃した。

衝撃で、その身体が、大きく仰け反り、そのまま、地面に仰向けに倒れ込んだ。

結構、というかなかなり痛い。

しかし、この痛みは、肉体的な痛みとは違う。

銃で撃たれたとか、斬られたという痛みとは違う。

もっところ、精神に及ぶような痛みだ。

細かく表現することはできないが、たとえるなら、実際に怪我をして痛いと感じるとして、その『痛い』という感覚だけがある、という感じの具合だ。

怪我を負ったように感じて、負ってないということだろうか。

事実、光の弾が直撃したシンの額には、大きな怪我はない。せいぜい、ちよつと腫れてるぐらいだ。

実際に戦いつていないのに、戦って、負けた、という感覚でもあるかもしれない。

とりあえず、痛かったのは確かだ。

命中したのが一発だけなのが、幸いだろう。

というより、そもそも無数の光の弾は、一発だけ当てるつもりで放たれたのだろう。

要は、その一発以外は全て、見た目が派手なだけの囃、ということだろう。

あるいは、一発を避けても、また次の一発が来る。それを延々続けて、最後の最後にはどれか一発は命中する、ということか？ 数うちや当たるとの発展系か。

にしても、地面に倒れ込んだシンの頭は、いよいよ混乱の極地に至りつつあった。

もしかしたら、自分の頭の方が、おかしくなっているのかと疑いはじめる。

気絶して目が覚めるなり、訳の分からない少女に会って、果ては無数の光の弾幕を浴びせられる。

もしかして自分は、海にぶつけられた衝撃で、頭がいかれたのだろうか？

あるいは、長い間海中で溺れて、酸素欠乏状態になってしまっているのか？ これはそれで見える幻覚だろうか？

あるいは、もしかして、自分は死んでしまったのか？

ここは、死者の世界なのか・・・？

それはともかくとして．．．だ。

不気味な傘を差した、件の少女。

シンの、彼女に対する考え方が、大きく変わった。

まさか、ではあったが、彼女は、本当に．．．？

今の今まで、変な女の子の趣味の悪い冗談だと思っていた言葉に、奇妙な説得力が出てくる。

もしかしたら、あの少女は、本当に妖怪なのかもしれない。

少なくとも、人間が人間に対し、あんなとんでもないものを繰り出すわけではない。

まあ、とりあえず、心を落ち着けよう、と、シンは心に念じる。落ち着いて、まずは眼の前の現実をしっかりと受け入れるのだ。

そういえば、自分がこんなことになったのは、あの少女に、どうぞ俺を脅かしてくれと挑発したからだ。

で、結局、彼女の思惑通り、シンは思いつきり驚いてしまったわけだ。

にしたって、あんなもの見せられれば、誰だって驚く。

妖怪がうらめしやと言うような驚きとは、ベクトルも規模も違いすぎるのだ。

人を驚かすことにルールなどないわけだが、シンは、これでは卑怯じゃないかと、妙に納得いかない気分だった。

ひとまず、その場に立ちあがったシンの眼に、少女の顔が映った。

ようやくシンが驚いて、実に満足げな表情をしている。ざまみる、といった感じに、ぺろつと舌を出していた。

改めて見ると、結構かわいい顔をしている、ような気がする。

まあ、それはそれとして、少女が、せいせいしたような口調で言った。

「ようやく驚いてくれたね。よかったよかった」

人を驚かすというだけなのに、何がよいというのやら．．．
しかし、このままでは、シンの心はどうも釈然としない。

「ちょ、ちょっと待てよ！あんなのは卑怯じゃないか！」

「え？だって、お兄さんが驚かしてみろって言ったんだから、驚かしたんだよ？」

「そうだけどな。あんな驚かし方はセオリーに反するとは思わないか？お前、妖怪なんだろう？」

シンの方からそう聞くのには抵抗があったが、さすがに今は、そういう気持ちも忘れていた。

ひとまずは、この少女が妖怪であるという話を信じておくことにする。

少女は応える。

「そうだよ」

「だったらだ、妖怪だったら妖怪らしく驚かしてくれよ。あんな光の弾なんかで驚かさないでさ」

「えー？でも、スペルカードだって、妖怪の立派な能力だよ」
スペルカード？

あの光の弾幕は、そういう名前らしい。

それはそれとして、シンは続ける。

「だけどああいうのは、他人をやっつけるような能力だろう！」

その声に、少女は、納得したような表情を浮かべた。

「ああ、確かにそうだね！スペルカードって、相手をやっつけるためのものだよね」

「そうだろう？人を驚かせるのに使うようなものじゃない」

「そうだそうだ」

「妖怪だってんなら、妖怪らしく人を驚かせろよ」

「その通りだ！そのとおりだよお兄さん！目が覚めた！」

シンには、いいことを言ったつもりは微塵もなかったが、少女は、えらく感動している様子だった。

何だこいつ？人を驚かすことを生きがいにもしているのだろうか。

しかし、とりあえず今は、全てのことを信じてみることにしたシンは、それはそれで面白い性格なのかもしれない、と思えるだけの心の余裕を取り戻していた。

心を改めたらしい少女は、言う。

「だったら早速、妖怪らしく、もう一度驚かせてあげるよ！うらめしや〜」

「いや、そういうのはもういい」

「……………」

この少女の言うこと、ただの世迷いごとのように聞こえる言葉の数々も、もしかしたら、真実かもしれない。

だとすれば、確かめる必要があった。

ここが本当に、少女の言う、幻想郷という土地なのか。

彼女が本当に妖怪なのか。知らねばならない。

そのためには、まずは行動だ、行動あるのみ。

未だに納得はいかずとも、目の前の事態に対し、理解だけではできはじめてきたシンは、少女にこう切り出す。

「驚くかもしれないけど。俺、ここが幻想郷ってことが、全然分らないんだ……。っていうか、幻想郷が何なのかすら、よく分かってない……。もしかしたら俺、ずっと遠い場所から来たのかもしれない。多分そうだ」

「へえ〜。そうなんだ」

シンの言葉に対する少女の反応は、思いの外普通だった。

今のシンは、たとえるなら記憶喪失か、あるいは、遠い外国からの漂流者といった感じの外見であるはず。

少なくとも、そういう相手にするような反応ではなかった。

まあ、そういうことまで気にし始めたら、仕様がな。

シンは続ける。

「だからさ、ここがどういうところなのか、詳しく見て回りたいんだ。それに、いろんな話も聞いておきたい……。あんたにも、いろ

いろ話してもらうけど、いいね」

「ああ、そういうこと。いいよ。お兄さん、驚いてくれたし、いいこと教えてくれたからね。そのお礼だよ」

「いや、そういうことでお礼されても困る・・・」

この少女、最初は頭がアレなだけのように思えていたし、それは今でも変わらない。

だが、いろいろな要素が、彼女の言葉に現実味を持たせていた。

もしここが、シンの知らない幻想郷という場所ならば、そこで最初に出会った人物が、この少女なわけだから、彼女から詳しい話を聞くしかない。

まったくまいったものだ・・・

近い内、軍人としての職務を増えて忙しくなるという時期に、こんなことになってしまうとは・・・

早い内に、オーブか、プラントでもいいから、戻らなければ。

さて、改めて、だだっ広い草原の周囲を見回すシンだが、

やはり、何一つ文明的なものが手をつけていない、自然そのもののような光景に見える。

しかし、一面の青空に、風にかすれる草原は、紛れもなく、この世の光景のはずだ。

ただ、ここ最近は見ることが少なくなっているというだけのことにはすぎない。

そのはずなのだが、シンは、この光景に、この世在らざるものの存在を感じた。

何か、言いようのない嫌な予感がした。

今、事態は、思ったよりもすごいことになっているのではないだろうか・・・

それを、今から調べに行く。

善は急げ、行動を起こすのが早くて損はしない。

「さて、早速、幻想郷つてのがどういうところか、見て回るか．．．
なあ、あんた、ついてきてくれるな．．．．．」

そういえば、この少女の名前を聞いていない。

同行を頼んでいる手前、いつまでも『あんた』などと呼んでおくわけにもいくまい。

「あんた、何て名前なんだ？．．．俺は、シン。シン・アスカ」

シンの問いに、少女は応えた。

「多々良 小傘よ。小傘って呼べばいいよ」

「．．．変な名前なんだなあ」

「そっちこそ」

なんとも奇妙な縁で出会ってしまったが、奇妙であつても一つの縁だ。

この幻想郷がどういうところなのか理解し、オーブなりプラントなりに帰る方法が見つかるまでは、この、小傘とかいう、妖怪（らしい）に付き合ってもらおうしよう。

「悪いけど、俺、幻想郷とかいうところがどんなところか、全然分からないんだ．．．いやだっつっても付き合ってもらうぞ」

「任せときんしゃい」

「よし。そんじゃ、よろしく頼むぞ．．．行くか．．．何か、ここに行くといいつてところ、知らないか」

「知らないよ」

「知らないって．．．あんた、ここの住人なんだろ？」

「でも、あんたが行くようなところなんて、分かるはずないよ。適当に歩いてくしかない」

「こ、こいつ．．．分かったよ、分かった分かった」

かくして、シンは、妖怪（らしい）の少女小傘と共に、永遠続いていそうな草原を、納得のできない心のままに、歩きはじめた。

それが、シンが今この時思っているよりかは遥かに長く、そして、

貴重な経験となる、幻想旅行の始まりの時であった。

PHASE・2『二回目の邂逅』

人が生きていく上で大切なことに、他者との交流があるのは確かだろう。

何かを知るにしても、自分一人では分かるはずもない。

全ては他者から教えられることである。

そして、自分の中の価値観を構築するにしても、他者の価値観を知り、その上で、同じ価値観を持つか、あるいは、違う価値観を手に入れようとする。

他者がいなければ、生きていけないなどというものではない。

自分という命は、父と母という他者が愛し合った末に、この世に成してくれたものなのだ。

そこからすでに、他者がいなければ、そもそも命が成立しないということが分かってくる。

小傘から細かい話を聞く中で、この幻想郷という場所の、大まかな在り様が分かってきた。

幻想郷というのは、厳密に言えば土地ではなく、大地全体を表す、いわば世界そのもののようなものらしいのだ。

そこには、多くの妖怪や、あるいは妖精が住み、ごく普通の、シンと同じような人間達と、形はどうあれ共生しているらしい。

何でも、シンのように、幻想郷というところをまったく知らない。別のところから来たという者も、少なくないらしい。

そして、一度幻想郷に来てしまえば、他の場所へ帰るのは相当難しいという。

小傘にも詳しいことが分からないが、幻想郷という世界と、それ以外の別の場所との距離は、遠いというものを超越したところがあるらしいのだ。

ただ歩いただけでは、一生かけても、幻想郷から別の場所へ行くことは叶わないらしい。

幻想郷は、他のところとはまったく別の次元に存在するらしい。と、小傘は言う。

彼女にも、詳しいことは分からないそうだが。

それだけ聞けば、絶望的なだけなのだが、実際は、幻想郷に訪れた者達も、何らかの方法で元の場所に帰してもらえているそうだ。

すなわち、この世界に迷い込んだ者でも、帰る方法は確かにある、ということだ。

そこまで聞けば、まだ希望はある。

その、元の場所へ帰るための方法を知ればいい。あるいは、知るものところへ行けばいいわけだ。

とはいえ、小傘は、その方法も、方法を知る者も知らないという話だったが。

さて、幻想郷のなんたるかを調べるべく行動を開始したシンと小傘であるが、早速、その雲行きが怪しくなってきた。

延々、まさに延々と続く、爽やかな青空と、美しい草原。

だが、そんな光景も、何時間と続けて見せられては、気が滅入る。

心境としては、カシミールの大地を、心身ともに乾き切って歩き続けることよりはずっとマシではあるが・・・

いい加減嫌になってくる。

そろそろ、何でもいいから見えてこないのか？

「おい、おい小傘・・・そろそろ何か見えてくるんだよね？」

「・・・知らない」

「知らないじゃないだろう！もう、どこだっていい！どこでもいいから、人がいるとこに案内してくれ！」

「それは．．．山々だけど．．．」

「だったら．．．！」

「あ、あたし．．．迷っちゃった、はははは．．．」

「な、何だつてえーっ！！」

空気が凍りつく。

どこまでも冗談じゃない。

シンは、小傘がどこに連れていけばいいのかわからないというから、自分で、何かを探して行動を始めたのだ。

いざ、何も見つからずに迷いそうになったときは、今度こそ小傘に頼ろうという考えだったのだ。

が、その当人が、こんなことをのたまうのだから、お笑いだ。

初めてくるような場所で遭難などと、嘘も大概にしてほしいという気分だ。

焦燥しきった様子のシンが、小傘の襟首を掴んで、乱暴にブンブン振り回しながら、叫ぶ。

「ふざけるなあーっ！だったら最初から、どこでもいいから案内してくれば良かったんだあ！別に幻想郷がどんなところかわからなくてもいいから、人に会えば良かったんだっ！！くあああーっ！！」

「ら、乱暴しないで．．．」

「ぬ、ぬ．．．ごめん」

「人に会いたきゃ、人間の里にいればいいけど、あたしじゃついていけないよ。なんせ妖怪だからね」

「人間はいるってことだな？」

振り回すのはやめるが、小傘の襟首は掴んだままのシンが続けて言う。

「ついていけないってのはどういうことだ？妖怪だったら、人を驚かすもんだろう？それにしても、タイミングってのが大事ってこと

か？」

「そ、そうそう．．．こつちから人間を驚かしにいつちゃ、反感を買っちゃうからね．．．人間と妖怪って、あんまよろしくない関係だから」

「へえ．．．ま、そういうことも納得しておくか。なら、その人間の里とやらに行くのは、今のところはよそう．．．で！それはそれだ！じゃあこれから俺たちはどこに行けばいいんだよっ！」

「そ．．．それは．．．」

言葉を濁した小傘だったが、ふと、彼女が、何かを発見したようだ。釘づけになった小傘の視線の方向に、シンも振り向く。

「なんだあゝ？」

「あそこ〜？」

二人が、ほぼ同時に、素っ頓狂な声をあげた。

二人の視線の向こう側には、家があった。

一軒ではない。家というよりは、集落といった方がいいかもしれない。

時代錯誤的な、木造住宅だ。

シンも、古い資料にあるような写真やらでしか見たことがないような、言っちゃ悪いが、古ぼけたような印象を受ける。

というか、古ぼけているとかいう問題でもない。

訂正する。シンは、写真ですら、あんな建物は見たことがない。あれほどの『ナリ』の建物など、写真は愚か、戦国時代か、あるいはもつと遡った、鎌倉とか、奈良時代の歴史の資料にある絵でしか見たことがないのではなからうか？

そついう家々が、地平線を遮るように、草原の一角に佇んでいた。見えるだけでも、四軒ほど見える。

他にあるというのなら、これはもう、村と言ってもいいのかもしれない。

「ほら！あつたじゃない！あつた、あつた」

小傘が、集落の方向を指さして、嬉々として叫んだ。

シンとしても、いきなりこんなところを見つけて驚くと同時に、ようやく人の気配がありそうな場所を見つけることができたのは喜ばしかった。

が、腑に落ちないこともある。

確か、あの集落がある方向は、今しがたまで見ていたはずだ。

さっきは、集落なんてあったか？

なかったから、焦りで怒っていたのではないか？

こうもただっ広いところに、ああもたくさんの家があれば、すぐに気付くはず。

何故今この瞬間に気がついたのだろうか？

もっと前に気付くのが普通だ．．．

どうも、並々ならぬ雰囲気、視界の最中に佇む集落から感じるシンだったが、我先にと、集落の方向へ駆けていく小傘の背中を見て、考えることは後にしようという結論に至る。

少なくとも、延々変わり映えのない緑色の地面を眺めていたところ、ようやく見つけた新しい光景が、あれだったのは確かなのだ。

シンも、小傘の後を追って、集落、というよりは、村の方向へと駆けていく。

かくして、村の中へと入った二人であつたが．．．

改めてみると、やはり、ここは村だ。

辺りに建っているのは、最初に見たのと同じような、古ぼけた家屋だが、その数は中々に多い。

どれもこれも同じような見た目ではあるが、そんなこと言ってしまう、シンが通っていた士官学校の寮などは、部屋まで一緒なのだ。そういうのに比べれば、ずっとマシで、見栄えはいいものだ。

だが、だとして、シンが、この村から、妙な雰囲気を感じるのは何

故だろうか・・・
簡単な話である。

中々大きい村らしいはずなのに、人の姿が全く見えないのである。
気配すら感じない。

試しに、眼に見える家一つ一つを訪ねて、人を呼んでみても、誰も現れない。

失礼を承知で、中を覗いてみても、誰もいない。

生活している、あるいはかつてしていたような跡は見えるので、外出中なのであるとは思えるが、だとして、全ての家が同じ様子なのはどうしたものか？

小傘と手分けして、せめて人の気配だけでも探るが、

「どうだい？」

「いや、全然」

こんな有様である。

しかも、だ。

「人はいないのに、猫ばっかたくさんいるんだよねえ」

この村、猫が相当に多い。

野良猫は、まあどこにでもいるものだが、だとしても、この村だけでも、何十か、下手すれば百に達する数の猫を見ている。

これは、少し普通ではない。

これではまるで、猫のための村ではないか・・・

シンの感じる、この村の不気味さというのは、こういうところにもあった。

しかも、なお恐ろしいのが、この村が猫の村なのではないかと錯覚させるほど、ここで見る猫達の眼に、ただならぬ気を感じたからだ。まさしく、ここが自分達の支配下であるといわんばかりの眼で、シン達を眺めている。

とりあえず、敵対心とか、虎が獲物を見るような威圧感を感じない（というか、そういう感覚こそ、まったく知らない）。まるで、シン達が、迷った末にここに辿り着いて、立ち往生していることを知

っており、そういう彼らを歓迎しているようだと、感じさせる眼つきをしていた。

だから、怖いわけではないが、不気味さは異様に感じる。

どうも、ここにいるのはやめた方がいいのではないかと、シンは考えた。

人がまったくいないらしいし、猫に話を聞く訳にもいくまい。

歩いていけば、こういう村が見えてくるというのは分かったんだから、ここ以外の村だって、その内見つかる、そこで今度こそ、話のできる相手を見つければいいのだ。

「おい、小傘。ここからいい加減出ていこう。どうせ人がいないんだ・・・その、なんだ・・・この猫達も、迷惑してるみたいだし・・・」

小傘にそういうシンの耳に聞こえた返事は、小傘のものではなかった。

「このマヨヒガに迷い込んだら、最後！」

「んっ!？」

突然の人の声に、シンも小傘も、あわててその声の方向に振り向く。集落の間に通る、街道とでもいうのだろうか、大きな道の真ん中に、少女が一人立っていた。

小傘よりも一回り幼く見える、まさしく少女だ。

が、その様相の奇抜さといえ、小傘以上だった。

何より眼につくのが、中国人っぽい帽子の間から覗く、明らかに人のそれではない、獣の耳だった。

「・・・なあんてね。あんた達、道に迷ったんだね・・・今回は歓迎するよ。おいでませ、猫の里マヨヒガへ!うちの猫達に気を使ってくれて、ありがとうね」

元気よくそう言う少女の声など、驚きで固まったシンの頭には、聞こえなかった。

「こ．．．ここ、これは．．．っ!」

少女の頭から、直接生えているようにしか見えない、猫のような耳が、ぷるぷる揺れる。

それは、どう見ても、偽物だとか、『つけてる』耳のする動きではなかった。

いや、まずは落ち着こう。

そうだ。小傘の言うことを信じるならば、ここは幻想郷。妖怪の住まうところだ。

そりゃ、猫の耳の生えた少女もいるだろう。固定概念は捨てるのだ。深く深呼吸したシンの心は、何とか、この状況を受け入れるだけの余裕を手に入れた。

むしろこれで、まだ確信の持てなかった小傘の言葉に、確証が出てきたわけだ。

「私の名前は橙。どうしたの？」

傍から見れば、挙動不審にしか見えないシンに、橙と名乗る少女が言う。

シンは、応えた。

「いや、何でもない。気にしないでくれ。俺の名前はシン」

「そう。ようやく話ができそうな相手が出てきてくれたから、嬉しいんだね？」

「え？あ、ああ、まあ、そういうことだな。困ってたんだ、なあ小傘？」

「そうそう」

一応落ち着いた様子で応えるシン。それに対し、橙が言う。

「始めのころはちょっかい出してやろうと思ったけど、あんまりうるたえてるみたいだったから、その気もなくなっちゃった．．．にしてもあんた達．．．」

改めて、シンと小傘の姿を眺めた橙は、続けて言う。

「人間と妖怪がぴったりくつついてるなんて、面白いねえ．．．妖怪にそんな近くまで寄れる人間なんて、あたしもちよつとしか知らないよ」

「そうなのか？」

「そうなんじゃない？」

シンの声に対し、小傘が応える。

その様子を見た橙は、愉快そうに笑った。

「あはは、あんた、さぞ強い人間なんだね。腕試ししたくなってきた」

その声に、シンは、先ほど、小傘の放った光の弾幕の光景を思い出す。

そうなれば、落ち着いた心が、もう一度混乱するというものだ。

「ちょ、ちよつと待て！俺は別に強くもなんともない！」

「そうだよ、滅茶苦茶弱いよ、一発もかわせないんだから」
うるたえるシンに、小傘が続く。

弱いと言われると癪に障るが、事実、もう一度さっきの弾幕を放たれたら、どうにもならないから、弱いということなのだろう。

橙が、不思議そうに言う。

「そうなの？」

「そうだよ。シン、あんたから事情を話してよ」

「．．．ああ、分かった」

小傘に促され、シンは、ここに来たいきさつを、橙に話した。

どうやら自分が、幻想郷の外の世界から来たらしいこと。

だから、幻想郷がどういふところなのか、まったく知らないこと。

元の世界に戻る方法を探していた折、迷ってしまって、最終的にはここに辿り着いたことを詳らかに話した。

シンから事情を聞いた橙は、言う。

「分かった。神隠しにあったんだね？」

「神隠し．．．？」

まあ、そう言われるとそうかもしれない。

別の世界に送り込まれることを、神隠しと言う、という話を、シンも聞いたことがある。

橙の口から、あっさりとそういう言葉が出てくるということは、小傘が言っていた通り、神隠しに会い、幻想郷に迷い込んでくる者は多いようだ。

橙は、続けて言う。

「あたしのご主人は、幻想郷に詳しいから、そうになると、あたしだって、ある程度のことなら分かるよ。幻想郷の案内をしてほしいなら、任せといてよ」

「本当か!？」

そう言ってもらえると、何より有難い。

「元の世界に戻る方法も知ってるのか？」

「知ってるような．．．知らないような．．．」

「なんだよ、もったいぶらないでくれ」

「タダで教えてくれっていうの？」

「う．．．っ？」

そりゃあ、会うなりいきなり、あれをこれを教えてくれなんて言うのはおこがましいと思う。

だが、

「なら、どうすればいい？どうすれば教えてくれるんだ？」

そう言うシンの言葉に、橙は、小憎らしい笑みを浮かべて、言う。

「そりゃ、あんた。決まり切ってることでしょ」

その笑みに、先の一瞬、小傘が見せた笑みと同じ雰囲気を受けた。まさか．．．

「スペルカードの勝負をしようっていうのか．．．？」

恐る恐る言うシンの言葉に、橙は威勢よく応える。

「その通り!さあ、いくよ!」

「待て!待てよ!!何でそういう話になる!」

「問答無用！」

「問答無用じゃない！そういうことはしないってさっき言ってたじゃないか！」

「シン違いで、サザンクロスの人も言ってたでしょ？『女の心変わりは恐ろしいのお！』って」

「何の話だこらっ！！」

すでに、橙は聞く耳は持たないと言った具合だった。

むしろ、ブラッディクロスな冗談をぬかして、臨戦態勢に入っている。

シンの頭上に、死兆星が・・・っ！！

・・・冗談はやめる。

が、これは冗談抜きに冗談ではない。ややこしいが。

小傘といいこいつといい、なんて身勝手なヤツだ。

迷ってる人間に、よく襲いかかるうなどという考えに至るものだ。

シンのいる世界では、犯罪に扱われる行為だ。

しかしもう、これはどうしようもないらしい。

すでに、ぐっと身構えている橙は、今にも攻撃を仕掛けてきそうだが、何でおれがこんな目に・・・などと毒づきつつも、シンは覚悟を決めた。

こうなったら、やられる前に向こうをやってやる。

伊達にザフトレッドではないというところを、あの妖怪に見せつけるつもりでいく。

放たれる無数の弾。小傘が放ったものとは、また違う光を放つ弾が、シンに向かって放たれる。

改めて覚悟を決めて見てみれば、この弾幕、『見かけ倒し』と言えなくもなかった。

MSのパイロットとして、過酷な戦場で戦い続けてきたシンとしては、橙が放つ無数の光の無数の弾も、数が多いだけで、戦場で敵の

MSが放つ火線と大した違いはないように思えた。
むしろ、それ以上に、ある種パターン化された『単純さ』を見出した。

見た目は派手だが、実際にシンに当たるつもりで向かってくる弾は、ほんの数発だ。

それさえ避ければ、それでいいのだ。

これは、いける！シンは確信した。

どうせ当たっても、痛いだけだ。喰らえば命が吹き飛ぶ戦場と比べれば、リスクはどこまでも少ない。

頭の中で、種のような何かが弾け、シンの紅蓮の眼が、より一層赤々と、血の色ように濃い色になった。

玉碎覚悟で、弾幕に向かって駆けだすシンの姿に、橙にしても小傘にしても、意表を突かれる形となった。

共生しているとはいえ、幻想郷における力の差は、人間よりも、妖怪の方がはるかに高い位置にある。

妖怪としては、人間など、喰うか脅かすかくらいの存在でしかないのだ。

多少の例外はいるが、とても、スペルカードに対し果敢に向かってくるようなものではないのだ。

妖怪だって、スペルカードに対し、あえて接近戦をしかけてくるようなヤツなどほとんどいない。

しかも、ただ向かってきて派手に砕け散るだけではない。的確に、弾幕の一発一発を避けていつているのだ。

「うおおおおおーっ！！」

しかも、必要最小限の動きで、かわすべき弾だけをかわしている。

シンの動きを垣間見た橙は、彼が、神隠しに会って幻想郷に迷い込んだ人間だというのを、疑いたくなくなった。

これは・・・完璧なグレイズ技術ではないか・・・

弾幕の海の中を、一切止まる気配もなく突破し、眼の前に躍り出たシンの姿を見たとき、橙は、『負けた』と確信した。

—— 外の世界にも、すごいヤツっているんだ…… ——

弾幕を完全に回避し、橙の懷へと飛び込んだシンは、そのまま、身体全体でぶつかるように、橙に対し、タツクルを浴びせた。

「ぐっ！」

「ひぎやつ!？」

大きく仰け反って倒れこむ橙の身体と一緒に、そのまま押し掛かるように倒れ込んだシンは、すかさず起き上がり、橙の身体をうつぶせにひっ繰り返すと、軍隊で覚えた近接格闘術に倣って、その手足の動きを封じた。

「う、うぎゅうう……!!！」

橙が、苦しそうなうめき声を発する。

いざこうやってみると、この橙、思いの外弱い。

いや、スperlカードという弾幕自体は強力で、一切の油断ができない脅威的なものであったが、それに対し、肉体的な強さは、それほどでもないのだ。

じたばたと抵抗する身体の力は、せいぜい見た目相応だ。

とはいえ、伊達に妖怪ではないといえるぐらいの力はあるわけだが、頭の中で種が弾けたシンの力もまた、人在らざる領域にまで達しているのである。

というか、妖怪である橙に、いかほどの力があるうとも、それを、発揮できないようにさせていたのだ。

理由はともかく、妖怪であるはずの橙が、人の姿をしていることは、非常に都合がよかった。

場所によってCQBとも呼ばれる軍隊格闘術にしても、柔道などの武道にしても、自分よりはるかに力が勝る者を相手にし、それをやりこめるための業というものは、多かれ少なかれ、ある。

無理やり脱力させ、しかも、以後力がまったく入らないようにする業が、だ。

妖怪相手を想定していなくとも、人の姿をしている以上、ある程度

の効果はある。

それに、世の中には、体術を通り越して、ある種の殺人術とまで言えるような業もある。用途は、当然ながら、『そのつもり』の時のみだ。

そして、シンが今、橙に対して使っているのも、軍隊でも禁じ手扱いされ、教わることは無かったそれだった。

妖怪を相手にするのだ、殺すつもりでかなければ、どうなるか知れたものではなかった。仕方がなかったのだ。

だが、このままでは、本当に橙が死んでしまうかもしれない。

そうでなくとも、軍人を、というか、キラ・ヤマトを相手にするつもりで組み伏せていると、下手すれば、手足を折ってしまう危険がある。

当の橙が、非常に苦しそうなので、シンは、身体に入れる力を幾分か弱めた。

赤々とした瞳の色も、すでに元の色に戻っている。

橙も、すでに懲りているらしい。

「ま、負けたよ．．．完敗だ．．．も、もういいよあゝ」

「何？」

「も、もうやめてよゝ」

拘束を解くように懇願する橙。

シンとしては、もう少しぐらい懲らしめてやってもよかったのだが、いい加減なところでやめておかないと、さすがにかわいそうだった。「悪いな、大丈夫か？」

そう言いつつ、身体を組み伏せる力を抜く。

苦痛から解放され、「はああゝ．．．．．」とため息を吐いた橙が、疲れ切った様子で言う。

「いや、こつちこそごめんよ．．．やっぱ、困ってる人に仇を返すと罰が当たるんだね．．．」

身体を仰向けにして、顔を真っ赤にして汗だくの身体で喘ぎながら、橙は続ける。（こつという姿を見ると、妙な背徳感と、それに反比例

する興奮に襲われるのは、最早男の性である)

「幻想郷の話を知りたいんでしょ？何でも聞いてよ．．．でもその前に、休ませて」

「ん？あ、ああ．．．」

事態の收拾はついたが、そんな中、突然小傘が割って入ってきた。

「すごいじゃないシン！だけど、今はちよつと、ルール違反じゃない？」

「な、何だよ！」

「あ、また驚いた。やりい」

「ちよつと待てよ！今のが驚いた内に入って、何で俺のがルール違反なんだよ！」

「だってさ、かつこよくないんだもん」

「かつこよくないいつ！」

かつこよくないのがどうしてルール違反なんだ。

冗談も大概にしてほしい。

そろそろ怒るのにも嫌気がさしてきそうなシンは、小傘に噛みつくように抗議した。

「もつと詳しい話をしろ！詳しい話を！」

それに対し、小傘はすぐさま返す。

「スペルカードに対してあんな乱暴なことしちゃ、かつこ悪いですよ。スペルカードには、スペルカードで対抗するもんよ」

「な、何い．．．っ？そ、それがルールだったのか？急に襲いかかってきた相手まで、そうやって相手にしなくちゃいけないのかよ？」

小傘にのっかるように、橙も加わる。

「そうだねえ。襲われようが何されようが、弾幕勝負に弾幕以外を使うってのは、礼儀に反するよねえ．．．」

「ま、待てよ！俺、スペルカードも弾幕も、出し方すら知らないんだぞ！？それでどうしろっていうんだよ！」

「そんなこと言って、礼儀知らずなことしたら、容赦なく食べられ

「ちやうよ？」

小傘のその言葉に、シンの身体が、びくつと凍りつく。
なるほど……

そうだ。小傘も橙も、人の姿をしていても、妖怪なのだ。

シンは、今なお、その本当の恐ろしさを知らない。

橙は、本気を出していなかったのだ。少なくとも、単純に相手を殺すつもりの方は、だ。

今までののは、全て遊びだったのだ。

本気で殺しにいったシンが、これでは馬鹿みたいだ。

本気で戦えば、シンに勝ち前など万に一つもなかったわけだ。

むしろ、下手に橙を刺激して本気にさせたら、いまごろ、ひき肉一丁の出来上がりだったわけだ……

悪寒が、身体を通り抜けた。

「あはは、まだ驚いてる。シンと一緒にいると楽しいな」

「そうか、はは、あたしって、実際のところは勝ってたんだ」

愉快そうに笑う小傘と橙に対し、シンは、すっかり落胆していた。

改めて、とんでもないところに来てしまった。これから、どうすればよいのやら……

シンに気を使っただけか、むしろ逆に、余計にからかうためか、仰向けのままの橙が言う。

「でも、すごかったよ、あんたの力。そこらの人間よりもずっと強かった。あんた、ホントに人間？」

「ああ、人間だよ。今のだって、ほとんど死ぬつもりになってたから出せたんだ。奇跡みたいなもんだよ」

「にしたって、すごいよ。力もそうだし、あたしの弾幕をかわしたんだから。シンだっけ、才能あるよ？楽しかったよ」

「ほめたってなんにもでないぞ」

「じゃあ、あたしの方から何か出す。マヨヒガでおもてなしするよ。

幻想郷の話もしてあげる」

「本当か？」

「さっきそういう話になってたじゃん」

「だったら、案内してくれ」

「そうしたいのはやまやまだけど、あんたのせいでくたくただからね、おんぶしてよ」

「なにーっ？」

「身体が動かないんだよ、お願い」

そう言いながら、橙は、仰向けのまま、にたにた笑いながら、身体をじたばたと揺らした。

どうみても動かないようには見えない。というか、今すでに動かし
ているではないか。

だが、しょうがない。

「・・・分かったよ」

もうどうにでもなれといった具合で、シンは、橙の身体を抱えて、
背中におぶった。

「お人よしだねえ」。人が出来てるう」

小傘が茶化すように言う。

「うるさい！馬鹿にしてるようにしか聞こえないぞ！」

「だって馬鹿にしてんだもん」

「・・・今に見てるよお前・・・」

かくしてシンは、橙をおぶさって、彼女の案内の元、マヨヒガの里
の中にある何十という家の中の一つへと案内された。

何だかんだ言って、橙は、割と話せる妖怪らしかったので（話せない妖怪というのがいたら、それこそどうしようもないが）、良かった。

一応、シンの幻想郷散策は、一つの成果を出したわけだ。

先の草原で目覚めてから数時間ほどこか経っていないの考えると、
まあ、いい傾向ではなからうか？

PHASE - 3 『Houses of the Holy』 幸福の家 (前書)

タイトルは、『Led Zeppelin』の曲と、その訳詞より。

人が良いからといって、悪いことは何も無い。

正直者が馬鹿を見る時代だとよく言われ、こすズルイことをする者が得をするように見えるし、確かに、表面上はそうかもしれない。

だが、見てくれだけの成功者は、いざ、失敗したときに、自分の愚行の『ツケ』を払う羽目になる。

そして、人も天も、決して許してくれない。

だが、人間がよくできた者ならば、多少の失敗はすぐに埋め合わせることができる。

人も天も、許してくれるし、それはおるか、失敗の埋め合わせを手伝ってくれることだつてある。

得したいだけなら、方法はいくらでもある。だが、いずれ必ず、失敗する時がやってくる。

得することが当然だと考え、何の満足もしない。しかしいざ失敗すれば、余計な不幸を感じる。世の中に対してナーバスになる。そういう不安ばかりを抱えて生きている。

それで、本当に成功していると言えるだろうか？

人が良いからといって、悪いことは何も無い。

さて、奇妙ないきさつで、橙と知りあったシンは、彼女の案内のもと、マヨヒガと呼ばれる屋敷の中へとやってきていた。

というより、橙の話では、マヨヒガというのは屋敷それだけではな

く、村全体を言うらしい。

マヨヒガというよりは、マヨヒガの里というわけだ。

屋敷の中は、外見同様古ぼけているが、逆にそれが、奇妙な憩い、『わびさび』とでも言うのだろうか？そういうものを感じさせる。

囲炉裏とか襖とか、畳の敷かれた座敷とか、名前すら聞く機会も少ないような、シンの初めてみるものの数々も、言いようのない、落ち着いた雰囲気を漂わせていた。

しかも、古ぼけていると言ったのは、どうも、『古い建築方法の建物』という表現だけで、実際のところは、新築同然の清潔さがあった。

同時に、悪く言えば古ぼけているといえそうな、何十年と形を保っているような、ある種の威厳が同化しているのである。

なんともまあ、いるだけで快適だと思える場所があるものだな、と、シンは、場違いな感心をする。

ほとんど寝そべるような姿勢で座れる座敷も、随分と居心地がいいものだ。

しかも面白いのが、このマヨヒガ、人をもてなすための準備が完全に整っているのだ。

囲炉裏が焚かれて中は快適な温度だし、座敷には、ちょうどシンと小傘の二人分の座布団まで敷かれていた。

シン達が、そろそろ空腹を覚えてきたのを見計らうように、膳も容易されていた。

白米に焼き魚、味噌汁の、日本食のジェットストリームアタックだ。これは、正直、その辺の高級ホテルよりもよっぽどいいもてなし方だ。

「ここまでしてもらえて、何かありがたいなあ・・・橙が、こうまでしてくれただろ？」

「違うよ。伊達に『マヨヒガ』じゃないってわけ」

「え・・・そうか・・・」

そういえば、『マヨヒガ』という名前は、シンも聞き覚えがある。

遭難した者の前に忽然と現れ、無人であるはずのそこでは、食膳が用意され、快適な環境が整えられているという。

そして、そこにあるものを、何でもいいから持って帰ると、幸運になれるそうだ。

妖怪の一種で、家の妖怪だという話。だった気がする。

まさしく、今シン達がいるここではないか。

橙曰く、「このマヨヒガの里は、なんてことないただの廃村だったはずなんだけどね。最近、本当にこういう面白い家が村の中にあるつてのが分かったの。元から村にあったのか、あるいは、マヨヒガなんて名前をつけちゃうから、こんな家が出来ちゃったのか．．．」という話だ。

病は気からというわけではないが、妖怪やら怪談というのも、ほとんどの場合、元はといえば根も葉もない噂が起源とされる、という話を、シンもよく聞く。

しかし、根も葉もない噂なら、実際に眼の前に妖怪が現れたりはいないわけだが．．．

とりあえず、そういう、意識的なものが、妖怪を生み出すというのも、決していないことではないだろうということも、考えられる。

たとえそれが、『マヨヒガ』と、名前だけ同じという些細な意識でも、本物を呼び寄せることだってあるのかもしれない。

「でもまあ、勝手にご飯とか出してくれるから、ありがたいんだよ。まあ、誰かが迷ってここに来ればの話だけどね」

というのが、橙の結論だった。

シンとしても、果ては美味しい飯まで食わせてくれるんだから、ありがたい。

妖怪にも、こういう非の打ちどころなくありがたい妖怪もいる（ある？）のだから、捨てたものではない。

さて、妖怪マヨヒガからのもてなしを存分に受けたシンは、橙もすっかり元気になったようだし、本題に入ることにした。

小傘は、飯を食ったら眠くなつたのか、座布団を枕にして畳で寝ている。

「どうやら、彼女が一番疲れていたようだ。」

「よくよく考えると、これまで数時間歩きっぱなしだったのだから、まあ、疲れるだろうが、

にしても、疲れて寝るなど、なんとも情けない妖怪だ。」

「妖怪といっても、中々愛嬌があるもんだなと思いつつ、シンは、橙に切り出した。」

「それで、さっきの話なんだけど・・・」

「橙は、すぐさま返事をした。」

「分かつてるよ。幻想郷のことだね」

「ああ、そうだ」

「あんたの方でも、そこできれいなあんよ晒してすやすや寝てる妖怪から話は聞いてるんでしょ？」

「あ、ああ・・・」

「シンは、小傘聞いた範囲での、幻想郷に対する認識を、橙にあらかた話してみた。」

「幻想郷にも人間はいて、妖怪との関係はあまりよくないということも話しておいた。」

「なるほどねえ・・・これじゃ、あたしの話すことほとんどないや・・・」

「橙としては、シンが、幻想郷のことをあらかた理解しているようで感心するが、同時に、自分の知っていることのほとんどを、すでに理解しているようで、何を話せばいいのかわからなくなって、困るという心境だった。」

「だが、話すことは、ないわけではない。」

「シンが一番知りたいという、元の世界への戻り方だ。」

「あたしは戻してあげられないけど、戻せそうな人はいるよ」

「そうなのか？」

「うん、博麗神社つてところがあつてね。そこに行けば、元の世界に

戻る方法があるそうだよ。あたしのご主人のそのまたご主人がその巫女と知りあいで、あたしにも教えてくれたんだ。だから、そこにいけばいいよ」

「そうか・・・」

これはいい傾向だ。

早くも、元の世界に戻る算段が見えてきた。

その、博麗神社とかいうところに行けば、おそらく、万事解決することだろう。

後で行き方を聞いておこう。

「それが一番知ってたかったんだ。ありがとう」と、礼を言うシン。

「なんてことないよ、これくらい、軽いもんさ」

「しかも、飯まで食わせてもらったんだ・・・って、これはあなたのやったことじゃないんだよな・・・でも、それはそれとして、さすがにいろいろしてもらいすぎて、申し訳ないよ」

「だったら、何かお返ししてもらわないとねえ・・・」

「お、お返して・・・また、スペルカードで遊びましょうとか言うんじゃないだろうな」

「あはは、もういいよ。他のこととして遊びたいな」

「危なっかしいことじゃないだろうな」

「全然」

「よし、それならいい。任せとけ」

数時間歩き続けて、シンも疲れている。

その疲れがなくなるまでの間遊んでやるぐらいのことは、それこそ、お安い御用だ。

尻尾をくすぐったりしながら、シンは、橙とじゃれついていた。

「ほらほら」

「にやは、にやはははっ！」

耳だけじゃなく、どうもこの橙、いろんなところが猫そっくりだ。

おそらく、猫の妖怪なのだろう。

と、思いきや、何と橙は、妖怪というよりは、一種の式神だという。式神なら、ほとんど名前を聞いたただだが、シンも知っている。まさか、妖怪だけでなく、式神までいるとは、幻想郷というところも、どこまでも不思議なところだ。

しかし、

「式神って、一人つきりているもんなのか？何か、ほらさ、何師が知らないけど、式神を使うヤツがいるだろ？」

とシンが聞くと、橙はこう応えた。

「うん、あたしにもご主人はいるよ？最近、ご主人の言うことを聞くことがないから、あたしもちょっと心配なんだ、いろいろね」

「そうなのか、おら、ほらほら」

曖昧に返事しつつ、またしても、橙の尻尾を掴んで、こちょこちょこそばす。

「にやははははは！」

続けて橙とじゃれつく中で（途中で、眼が覚めた小傘も加わった）、シンは、橙を式神として使役する『ご主人』である、八雲 藍の話も聞かせてもらった。

驚くべきは、橙を式神として使う、その藍自身も、八雲 紫という妖怪の式神だそうなのだ。

何でも、ものすごく頭がいいらしい、しかも、情にも厚くて優しいそうだ。

橙が、小生意気な人間にいじめられた時は、主人である紫に罰を受けることを承知で、かたきうちに出たらしい。

なるほど、それは中々、人の良さそうな人物・・・いや、妖怪、でもなくて、式神だ。

何でも狐の耳と、尻尾をしているらしい。しかも尻尾は九本あるという話だ。

九本の尻尾。

確か、そういう妖怪にも、シンは覚えがあった。

何だかんだ言って、シンも妖怪には詳しいものだ。

何でも、古来の中国では美女に化けて、一国の皇子をたぶらかしたという、化け狐の代表格、『九尾の妖狐』というのがいて、『羽衣狐』という呼び方もされている、という話を聞いた気がする。

中々有名な妖怪だ。

厳密にはそれと同じではないだろうが、そんな有名な妖怪までいるとは、幻想郷とはつくづく．．．

もうこういう文体も飽き飽きなほどに、つくづく奇妙なところだ。

小傘も加わって、シンと橙達の遊びはエスカレートしていく。

マヨヒガの里の猫達も巻き込み、ねこじゃらしを振り回したり、マタビをありったけ与えたりして、遊んでいた。

傍から見ればまるで子供みたいなことをしているが、これで、中々楽しい。

「マタビ攻撃だ、そらー！」

「喰らえーい！」

散々遊び回って、そろそろ疲れも取れてきたし、橙も満足したようなので、シンも、そろそろ、橙に教えられた、博霊神社なる場所に向かうべく、出発しようと考えていた。

とりあえず、あともうちょっただけ遊んで行こうと、何匹もの猫を一か所にかき集めて、何事かしようとしたシン達だが、その動きは、突如、どこからともなく聞こえた声に、止められた。

「ちえーん！」

小傘でも、橙でもない。またしても、シンが初めて聞く声だ。

声のした方向に振り向いてみたところ、一人の少女が立っていた。中国人っぽいでたち（両腕の裾をぴったりと合わせて、手首から先が見えない様にしているところなど、いかにもだ）をしており、深くかぶった帽子に隠れながらも、長い耳が生えているのがはつき

りと分かる。

そして眼を引くのが、なんとも毛並みの良さそうな、九本の尻尾だ。事前に橙から話を聞いていたシン達としては、その九尾を見るだけでも、その少女が誰なのか、見当がついた。

「あ、藍しゃまー！」

橙の声を聞くまでもない。彼女が、式神、八雲 藍だ。

一目散に、彼女の方へと駆けていき、その胸に飛び込んだ橙を、藍は受け止める。

「久しぶりだなあ」

橙の身体を抱きしめた藍は、愛嬌たつぷりに、頬ずりした。

なるほど、橙の言う通り、賢そうな雰囲気が漂っている。というか、背丈が高い。

小傘は、シンと比べて小柄で、せいぜい、中学生くらいの背丈でしかなかったし、橙は、それ以上に低い。

だが、この藍は、下手すれば、シンよりも身長が高いのではなからうか。

背丈からして、何と言おうか・・・大人の風格、か？そういうものを感じる。

顔つきも、眼とかは橙に似通ってくりくりしてるが、かわいいというよりも、端正だ。

これは、いかにもインテリな雰囲気が漂っている。

下手すれば、三途の川の距離ぐらいなら計算で導きだせるんじゃないか？などと考えたところで、シンは、自分のこの途方もない考えを自嘲した。・・・実はその通りなわけなのだが・・・

「藍しゃま、どうしたの？」

「紫様から、マヨヒガに行くように命令されてね。理由は分からないんだけど。なら、そのついでに、お前のところにも来ようと思っただ」

橙の言葉にそう答えたところで、藍は、シン達の存在に気がついた。

視線をシン達のいる方に向けた藍が、聞く。

「あなた達は誰だ？」

橙が、代わりに説明する。

「あの眼の赤い人はね、シン・アスカって言って、神隠しに会った人なんだ。迷って、ここに来たんだ。あたしとたくさん遊んでくれたよ．．．もう一人は、ただの化け傘だよ」

「ああ、そうか．．．そう、か．．．」

橙の言葉を聞いた藍は、しばらく、考え込むように黙り込んでいたが、それも、すぐに終わった。

どうやら、彼女の中で、何かが合点いったようだ。

一体何がどう合点いったのかは、シン達に知れたことではないか。橙とぎゅうぎゅう抱き合うのやめ、橙の身体を離れた藍が、シンに言う。

「橙と遊んでいてくれたんだね。ありがとう．．．私は八雲 藍。

橙の主人だ」

「あ？ああ、橙から、話は聞いてるよ．．．」

「幻想郷のことも、橙から話は聞いているんだよね？」

「ああ、大方の話は聞いているし、博麗神社に行けば、元の世界に戻ることができるらしい、ってことも聞いた。あんたの主人が、その巫女と知りあいなんだろう？」

「知りあい．．．か、うん。簡単にいえば、知りあいだ．．．じゃあ、早速出発するのかい？」

「今、出発しようかな、って考えてたところだ」

「そう．．．私達も、同行したいところだけど、別の用事があるのを今思い出したんだ。まあ、私も、ゆくゆくは博麗神社に訪れると思うから、また会う機会はある」

「んじゃ、その時は、あたしも会いに行くよ」

橙が、おつかぶさるように言う。

その声に、シンが返す。

「そうか．．．会って早速お別れってわけでもないわけだ」

「そうだね。準備もすんだの？」

と、藍。

「準備つつたつて、何も持ってきてきじゃない．．．あ、いや」

後はもう出発するだけだと考えていたシンだが、ここで、この場所が、マヨヒガの里であることを思い出す。

「なあ、橙。マヨヒガから、何か持って帰れば、幸運になれるんだよな？」

シンの問いに、橙は応える。

「うん、そうだよ」

「だったら、何か持って帰るか．．．箸とか、いいよな？」

「多分ね、いいよ、お好きに持ってたつて」

マヨヒガの長である（と自称する）橙の許可を得たシンは、先ほどまでいたマヨヒガの屋敷に入り、食膳に使った箸を持ってきた。

「へへっ、ホントに幸運になるのかはともかくとして、いい土産にはなるよな．．．」

せっかく、幻想郷なんてところにきたのだ。訳の分からないことにくらたえるばかりでなく、何かの記念やら、思い出が欲しい。

まあ、元の世界に帰って、思い出話にしても、馬鹿扱いにされるだけだろうから、このことは、自分の頭の中だけの秘密にはしておくが、それならなおさら、思い出の品ぐらいいは欲しい。

改めて、マヨヒガを帰つたために、準備万端整った。

「それじゃ、改めて、そろそろ出発する。博麗神社の方向は、こっちであつてるよな？」

シンの言葉に、橙が応える。

「うん、そつちをずーっと真っ直ぐ行けば、そのうちつくよ」

それに、藍がおつかぶさる。

「それでは、故あればまた会いましょう」

「ああ、そんなときや、俺も元の世界に戻るときだろうな」

「．．．結論を出すには、まだ早いとだけ、いつておきますよー」

別れのあいさつも済ませたことだし、シンは、いろいろと、いい機会を与えてくれたマヨヒガの里から、明確に決定した目的地、博麗神社に向かって歩き始めた。

最後の最後に聞こえた藍の言葉は、意味もよく分からないので、どうでもいいあいさつとして受け止めておくことにする。

そして、博麗神社に向かって歩くシンの後ろを、小傘がそそくさについてきていた。

彼女には、明確に、ここで別れるとは言っていない。

だが、彼女の話はあらかじめ全部聞いたし、次の目的地、博霊神社に向かうための道のりも知っているから、案内もいらさない。

彼女がシンと一緒にいる理由は何もないのだから、何もいわずとも彼女の方からシンを放ってどこへなりといくとばかり思っていた。多少の未練は残るが、それでいいのだろう、とシンは考えていたのだ。

だが実際は、小傘は、なおも、シンの行く道についてきている。

「どうした？俺についてきたって、何も面白くないぞ？」

そろそろ、マヨヒガの里も見えなくなるというほどの距離まで歩いたところで、ようやくシンは、後ろをついてくる小傘の方に振り返って、こう言った。

小傘が返す。

「面白いよ。シンってよく驚いてくれるからね。あんだといると楽しいよ。後2、3回くらいは驚かせたいな」

「．．．分かったよ。せいぜいがんばってくれ」

「うん、頑張る。うらめしや」

「．．．2、3回くらい驚くのは、当分先みたいだな．．．」

小傘がそういうなら、もう止めはしまい。

何だかんだ言って、旅の道程は、一人より二人より賑やかで楽しいものだ。

だが、これから向かう先で、おそらくシンは、元の世界に戻る方法

を知り、それを実践するかもしれない。
妙な未練などは、必要ない。

いぎ、戻るといふときに、この世界が恋しくなったりはしないだろうか。

まだシンは、この幻想郷がどういふところなのかも、よく分かつていない。

だが、そろそろ、ここも、面白いところだな、と思えるようになってはじめているのだ。

いざ元の世界に戻った時、後悔の念が残らなだろうか？

．．．．．

そんなことを考え始めたら、キリがない。

シンは、今のところは、考えることをやめ、小傘と共に、博麗神社へと向かって、幻想の大地を歩み続けた。

シンが去り、マヨヒガに残った藍達だが、シンに対し、用事があると言ったのは、嘘ではない。

シン達の出発を見計らって、すぐさま、彼女達も行動を開始することにした。

「橙。これから、白玉楼に行く。その次は、彼岸の向こうの世界にも顔を出すよ」

「白玉楼に．．．無縁塚とかの、死者の世界に？どうして？」

「神隠しにあったのは、あのシン・アス力だけではない．．．と思う」

「え．．．？」

主人紫からの命を受け、マヨヒガに向かうことになった藍だったが、

その折、気になる言葉を、紫から聞いたのだ。

『そこで起こる出来事は、本筋であって本筋ではない。空想の少年が現れるその裏で、世事から解き放たれしものが、野心を抱いてやつてくる』

最初聞いた時は、その言葉の意味が分からなかったが、今なら、分かる。

今回の紫の言葉は、かなり分かりやすい表現をしており、藍が、これから何をすべきかを、的確に伝えていた。

主人紫は、これから起こり得る出来事を予見しており、藍に、その狂言回しの役を与えたわけだ。

「今からするのは、紫様が直々に与えてくださったお仕事だ」

「紫様が？」

「そうだ、橙、張りきっていくぞー」

「分かった」

藍と橙も、猫達を放って、目的の場所へと向かい、動き始めた。式神であり妖怪である彼女らの行動の速さは、シン達とは比べ物にならない。

コマのように回転しながら（回転の速度でいえば、ロータリーエンジンと言った方が正しいかもしれない）中空を飛び、弾丸のように空を切る、二つの式神。

シンが見れば、またしても驚愕するような光景だが、これでもまだ、幻想郷の妖怪の中では、ちよつと速い程度のものだ。

コンピュータとは、処理の速さにこそ価値がある。

そして式神は、主人の命を果たすことに全力をかける。

藍にしても、紫の命令は、迅速に果たすよう、そう『プログラミング』されている。

橙にしても、紫の命令を果たすために全力を尽くす藍のために全力を尽くすよう、プログラミングされている。

コンピュータとは、多少のバグがない限りは、プログラムの実行を的確かつ迅速に行うものだ。

シン・アスカは、いずれ博霊神社に辿り着くが、そこで終わりではない。

むしろ、そこが出発点となるのだ。

八雲 紫が思い描き、藍が読み取ったシナリオでは、そうになっていた。

PHASE - 4 『博麗の杜』

自分の生きる目的、為すべきこと、それが全て分かっているのなら、幸運であるだろう。

だが、実際のところ人は、自分の人生の目的も、それを果たすために何をすればいいのかも分からない。

どうすれば、己の望むものを手にすることができるのかも。

何も分からないまま、手探りのまま、人生の中にある闇から、結果だけを手に入れる。

全てが終わって初めて、自分が何を求め、何を為し、そして、その先に何が待っていたのか分かる。

だが、せめて、自分が得たものに対し、自己満足できるだけの啓示がなければ、あまりに虚しい。

博霊神社へ向かうシン達の道中は、一応、問題ないものだった。

何度か、妖怪や式神とも違う、妖精と呼ばれる者に喧嘩をふかけられることもあったが、そういう連中は、小傘が相手にしてくれたし、もしもの場合は、ルール違反承知で、力技で無理やりねじ伏せて、懲らしめてやった。

どうも、この幻想郷に生きる者の多くは、唯我独尊、自己中心的な考え方の者が多いらしい。

こちらの言うことなど一切聞いてくれないし、何か応えると思えば、『弾幕勝負』だ。

妖精の放つ弾幕は、小傘や、橙のものよりは単純で、シンが本気を出せば、安易にかわせるが、そういう問題ではない。

せめて、話し合いの機会ぐらいは欲しいものだ。

だが、聞く耳を持たない相手に対話を求めることは、相当難しい。それについては、シンも、元の世界でよく分かっている。

当のシンだって、その内の一人であつたわけだ。

連合とプラントの関係を見ればよく分かる。対話なんてものは、頭に思い浮かびもしない。

まず第一に、戦いで解決しようとする。

こういうところは、元の世界も幻想郷も、大して変つてはいないな

ただ、この幻想郷においての戦いは、まず礼節を重んじる（んだと思う）。相手を殺すつもりなどは微塵もないのだ。

戦いというものを、スポーツのような、あくまでも勝敗を決するためだけの手段として扱っているらしい。

戦いに臨むような対抗心というか、向上心は、正直言って認めているし、こういうところは、なるほど、参考になるかもしれない、とシンは考えていた。

にしたって、初対面の相手にいきなり喧嘩腰なのは如何なものか

幻想郷中の者がどれもこれもこんな感じなら、先が思いやられる。が、小傘の話では、妖精とは、幻想郷の中でも特に頭がアレ、いわゆる『バカ』らしいので、話をするだけ無駄なのはどうしようもないらしい。

妖怪や人間の中には、ちゃんと話ができる相手もいる、ということか。

マヨヒガであつた橙や藍は、こちらの話は一応ちゃんと聞いてくれたし、応じてくれた。

確かに、話のできる相手はいる。幻想郷に住まう者達は、少し好戦的なところがあるだけで、決して、話ができない相手ではない。

『バカ』扱いされている妖精はともかくとして、妖怪相手ならば、話せば分かってくれるはずなのだ。

博霊神社へと向かう道中、シン達は、どうも、周りが寒くなっているに気がついた。

マヨヒガを抜けてからは、草原の光景も途切れ途切れになり、やがてなくなった。

続いて見えてきたのが、針葉樹林が所々見える、固い大地が続く平地だった。

随分と様変わりしたものだ。

地理的なことには詳しくないシンだが、視界に移る木々は、寒いところに生えるものだということぐらいは、分かった。

気候が変わっているのだろうか？でないと、肌寒さなど感じない。

先ほどまで草原だったのが、ちょっと歩くと、針葉樹林の生える寒冷地というのは、さすがに気候の変化が急過ぎる気がするが、まあ、妖怪がいるような幻想郷だ。一歩歩けば気候が変わったって、不思議ではなからう。

それに、肌寒いとは言っても、せいぜい、秋の中頃ぐらいの寒さでしかない。冬の始まりを感じさせる、ぐらいのことだ。

幻想郷全体が、おそらく、そういう季節で、ここだけ特別寒い、というだけだろう。

夏より冬が好き、というわけでもないが、こういう涼しい気候は、嫌いではない。いきすぎて寒い訳でもないし、まったく暑さを感じないこういう気候を、嫌いだという者自体、ほとんどいないだろうが、気にせず歩き続けたシン達は、少しずつ、寒さが増しているのを感じた。

増している、という表現は正確ではないかもしれない。

何と言おうか・・・寒さが、正確にシンの身体に当たっている。といえはいいのかもしれない。

風が吹けば、体感気温は低くなるし、湿度なども、気温には関わっ

てくる。

そういうものが影響しているのだろうか？

なんにしても、涼しいと感じていた気温が、というより、体感温度か？それが妙な力を発揮して、寒いと言えるレベルのものにまで高まっているのである。

まあ、まだ楽に我慢できる程度だ。

たまたま、そういう、無駄に寒いタイミングに出くわしているだけだろう。

気にせず歩き始めたシン達だったが、その考えは、すぐに覆ることになる。

どれほど歩いて、寒さが収まる気配はない。むしろ、より一層、ある種計算ずくのように、シン達に寒波を浴びせていたのだ。

そして、針葉樹が周りに生い茂りできている天然の道の向こうに、一人の少女が見えたとき、シンは、考えを改めた。

もしかしてこれは、妖怪とか、妖精の仕業ではなかるうか？そう、あの少女の。

道のと真ん中をフラフラ歩いている少女には、いかにも、目的がなさそうに見えたが、それが、余計に妖しい。

もしそうなら、この寒波を止めてくれ、などとおこがましいことは言わないが、確かめる必要はあった。

「おーい！ちよつと！そのあんだ！」

遠くをフラフラ歩く少女の背中に向かって、シンは叫ぶ。

その声に気付いた少女が、くるりとこちらを振り返って、言い返してきた。

「なにー？」

今すぐ眠ってしまいそうな、気だるい声だった。

シンの方に向いた顔も、まるで寝起きのそれだ。眠いのだろうか？それとも、いつも寝ているのと変わらないような、だらしない性格をしているから、顔つきもこうなのか？・・・などという言い方は失礼か・・・

たとえば、橙と藍が中国人とすれば、彼女は、ロシアの人か？そういう格好をしている妖怪だった。

橙達のように、耳も生えていない。

正直、普通の人にはしか見えなかったが、この幻想郷に限って、それはなかるう。

普通の人間なら、大抵の場合は人間の里ににいるという話は、すでに聞いている。

少女の方に歩み寄りつつ、シンは言う。

「この寒さって、あんたが？」

少女は応える。

「そうだよー」

「そういう能力があるんだな」

「そう。あんたに能力は？」

「え？．．．あ、いや、能力なんてないよ、俺、普通の人間なんだから」

「だろうね。人間だもんね、知ってる」

「そ、そうそう」

やはり、この少女、妖怪なのだろうが、どうも、印象が他の妖怪とは違う。

とはいえ、まだシンは、この幻想郷において、妖怪と呼べるものには、三人、厳密には一人しか会っていないのだから、印象もくそもない。

だが、会うなり弾幕を放ってくる妖精には、何度も会った。

だからかどうかは知らないが、まず一番に、こちらの話を聞いてくれるこの妖怪には、ある意味呆氣にとられた。

それにこいつ、随分と態度がおっとりしている。

まあ、これは単に性格の違いか．．．妖怪にも、性格があるのか？マヨヒガのように、一度会ってみてもいいと思う妖怪はいるし、逆に、死んでも会いたくないような妖怪もいる。

そついう、話だけで語られるような妖怪に対し、いろいろな印象を

受けるのと同じように、妖怪にだって、個々の違いはあるのだろう。一概に、妖怪だからどうだとか考えるべきではないのだろう、と、シンは考えを改めた。

シンが、続けて言う。

「寒いのが好きなのか？」

少女は、愛想良くへらへら笑いながら応える。

「そりゃ、寒いのが嫌いだったら、自分の能力で寒さを操ったりしないよ」

「寒いのが好きで、寒さを操れるのか・・・便利だな」

「寒さを操れるから、寒いのが好きなんじゃない」

なるほど、そっちなか、と、勝手に納得するシンに、少女が続ける。

「こっという寒さなら、冬眠も気持ちいいよ」

「と、冬眠で・・・」

「馬鹿にしちゃいけない。そっちが、春になったら眠るのと同じだよ」

「ああ、なるほどな」

島国であり、地球上では、ちょうど、寒くもなく暑くもない位置にあるオーブは、四季の移りとともに気候も変わる。

夏の暑さも、冬の寒さも、よく感じることができる。

だからというわけではないが、寒い場所に住む人間には、寒さに馴染むことができるし、逆も然りなのだろうということを考えることができる。

ロシアに住む人間が、真夏の赤道直下に行けば、それこそ苦にしかならないだろう。

寒い場所や、寒さが好きなように生まれた者には、それなりの個性がある。

妖怪にしてもそうなのだろう。

寒波を起源とする妖怪ならば、寒さは好きだろうし、暑さは嫌いなのだろう。そういう生まれなのだから。

そう考えると、なるほど、妖怪だって、人間と同じではないか。

ここだけの出会いではあるだろうが、何かの縁だ。

シンは、この、寒さを操る妖怪と、付き合いを持っておこうと考えた。

名前だけでも、知っておいていいだろう。

「いきなりですまないけど、俺の名前、シンて言っただ。あんたは？」

シンの問いに、少女は応える。

「レティ・ホワイトロック．．．あんたって、道行く人にいちいち名前聞いてんの？」

「いや、そういうわけじゃないけどな．．．今回はいろいろ特別なんだよ」

「へえ．．．」

そうこうしている中、突然、二人の間に、小傘が割って入ってきた。

「ねえあんた。寒いのが好きなのね？」

いきなりの小傘の声に、レティが応える。

「そうだよ？」

「だったらさ、あたしが寒くしてあげるよ。ほら、うらめしや．．．
．．．どう、背筋ゾーンとするでしょ？」

「．．．．．あはは、本当だ、寒くなってきた」

これは多分、小傘が考えているのとは別の寒さだ。

「あんた達、面白いね．．．特に、シン、だっけ？あんた、妖怪が全然怖くないんだね」

レティが言う。

シンは、正直に応えた。

「いや、正直めちゃくちゃ怖い．．．スペルカードなんてものはおっつかなくて見たくもないし、下手すりゃ、喰われて死んじまうかもしれない．．．まさかお前も、弾幕勝負しようと言っくんじゃないだろうな？」

その言葉に、レティはまた笑いながら、応えた。

「怖がらなくていいよ。食べるつもりなんてないし、あたし、戦いはあんまり好きじゃないんだ．．．でも、人を食べようとする妖怪がいるのは確かだよ．．．シンも気をつけてね」

「そ、そうなのか．．．」

「でも、それにしてもだよ。あんた、妖怪に、まるで友達みたいに話かけるんだから、面白いよ．．．悪いことじゃないと思うよ」

「そう．．．か．．．」

確かに、レティにしても、小傘や、橙にしても、妖怪なのだ。

そういう者達と、こつも普通に話ができているというのは、普通のことではない。のだろうか？

だが、今現に、シンは、妖怪達と話をしている。

これはもう夢でも、幻覚でもない、確かなことだった。

レティは、この辺りに住みついており、春などは、冬眠ならぬ春眠をして、温かさをしのぐらしい。

なるほど、レティがいるおかげで、この境界は気候そのものが変わってしまったているのだろう。

にしたって、寒冷地に生えるような木々がいきなり生えるなんてことはなかるう。

元から寒い気候だったこの地を、レティが気に入って住みついたといったところか。

「これからは冬が始まる、もつと寒くなってくる．．．ねえあんた、冬は好き？」

「好きか嫌いかは知らないけど．．．まあ、冬って季節にも、いいところはいっぱいあるよ」

「そうだよね．．．そうだね」

寒波を操る妖怪、レティに別れを告げ、シン達は再び、博霊神社へと向かって歩き始めた。

橙から聞いた話を思い出せば、あと少し歩けば、到着するはずだ。

視界の中に見える、一つの山。そこに、目的地があるのだろう。針葉樹林の林に違う木々が混ざりはじめ、やがてそれらは、一つの森となって固まっていった。

一面の緑、ところどころ秋口特有の赤や黄色に染まった葉が空を覆う、植物の屋根である。

風にかすれる無数の葉が、独特の旋律を奏で、シンの鼓膜を震わせる。

同時に、シン達の道程が、生い茂る木々に遮られることは一切なかった。

木々はある一点を避けて寄り集まり、一つの道を形どっていた。平らだった道が、少しずつ傾斜をおびていき、やがて、山道となった。

まるで、博麗神社へと向かうシン達を案内しているようだ。

これは最早、天然のものではない。

何らかの手が加えられているのではないか？

確かに、この道が神社に続いているのなら、それも当然だろう。

行くための道がない神社など、訪れる者はいない。

やがて、森の中に真っ直ぐ通った一本道は、石の階段へと変わっていった。

いかにも神社といった感じの、高々と何段も積み重なっている石の階段。周りには木々が生い茂り、葉のざわめきに囲まれている。

木々の間を覗く陽光に照らされ、部分的に苔むしているところなど、まさしくいかにも感じた。

ここまでくれば、ついたも同然だ。この石段を上っていけば、ようやく、博霊神社に到着するのだろう。

何だかんだ言って、シンが最初に草原で目覚めてから、五時間もしない内に、ここまでくることができた。もっと短いかもしれない。長いようで、短い道のりだった。

「結構、早くつくもんだな」

シンの言葉に、小傘が続く。

「これなら、あとウン時間は歩けそうだよ」

良く言う。マヨヒガで疲れて寝ていたのはどのどいつだろうか。
続いて、小傘は言う。

「そうそう、この神社にや、巫女がいるんだけどね、気をつけた方がいいよ、そいつ、ロクなヤツじゃないから」

「そうなのか？」

まあとりあえず、二人は、石段を、一步一步と上り始めた。
しばらく上っていくとすぐに、赤い色の鳥居が見えてきた。

そこが、神社の入口であることを如実に示している。

鳥居をくぐったその先には、まあ、当然ではあるが、目的地である
博麗神社があつた。

見てくれは悪くないはずなのだが、全体的に漂う、『寂れてますよ
の』空気はなんだろうか。

敷地の端には、最近できたような小さな分社があるのだから、神社
としても、割と立派なものに見える。

しかし、寂れて見えるのは、きれいだが、どうも整備が行き届いて
いないように見えるのが原因だろうか。

下手すれば神社にも見えないような印象を、シンはこの神社から受
けた。

参拝客が来たような痕跡も見られない。

シンにそう見えるだけで、実際のところは参拝客もちゃんといるの
かもしれない。

が、神社全体を漂う空気からは、とてもではないが、人が来るよう
な雰囲気を感じなかった。

しかしながら、人の気配自体はある。

というより、すでに見えている。

レティの下を離れてから、秋口には赤く染まる落葉樹も増えてきて、
紅葉が美しくなっていた。

この神社の周りにはあまり紅葉はないらしいが（桜とかの、他の樹

木が多いのだろうか)、それでもそろそろ木々の葉も落ちてくるという時期である。

シンの視界に、枯れ葉を簞で集めている一人の巫女の姿が見えた。巫女・・・というには少々格好が奇抜な気がするが、巫女に見えるのだから巫女なのだろう、多分。

彼女が、さつき小傘が言っていた者なのだろうか？

この神社の巫女なら、話をつけておくべき人物である。

「あー！その人ー」

シンは、巫女に対して呼びかけた。

「はいはい、なんでしょうかねえ」

それに対し巫女は、シンの方を振り向きつつ、いかにもやる気なさそうな声で返してきた。

仮にも、神社の巫女がする口調ではない。

シンは、この神社が寂れて見える理由を垣間見た気がした。

巫女の方に歩み寄るつつ、シンは、次いでこう言った。

「ちょっと、話があるんだけど・・・」

そう言うなり巫女は、シンの話を遮って、ぴしやりとこう言った。

「参拝客なら、お賽銭出しなさい」

「・・・・・・・・」

まあ、確かに、神社に来れば、賽銭を投じているとお願い事をするものだが、だからといって、その神社の巫女が、訪れた者に対して一番に呼びかけることではない。

「さ、お賽銭、ですか」

「そうよ。神社を信仰するなら、お賽銭を出すもんでしょ」

「・・・・・・・・」

「・・・・駄目だこりゃ」

小傘がこう言うのも納得できる。

神社で賽銭を出すのは、そりゃ、正しいことではあるが、この場合は話が別だ。

この巫女、参拝客を馬鹿にしているのだろうか。

この態度、シンが言えたことではないが、神社の巫女の風上における。

もしかしてこいつ、神社の巫女と名乗っているだけの妖怪ではなからうか？

しかし、神社で賽銭を出すことは、前述通り何も悪いことではない。巫女の態度に嫌気がしつつも、何だかんだ言って、賽銭を出す気になるのがシンだ。

幻想郷に飛ばされる前から、財布をポケットに入れていたし、それは今も持っている。

シンは、それを取りだした。

「え、ホントに出してくれるの？」

巫女が、以外そうな声をあげる。

何なのだろうか．．．どうやらこの神社、本気で参拝客がいなくて、賽銭が全くないのかもしれない。

まあ、巫女がこの調子なのだ、そりゃ、参拝客が来ないのも当然だ。で、当然といえば当然だが、シンの持っている金銭は、全てコズミツク・イラの、しかもオーブ領内でのものである。

そんな硬貨やら紙幣が、この幻想郷で使えるのか？

神を敬う意味を持つ神社の賽銭に、これこれの金を使えという決まりはなからうが、賽銭というのは、神社の経費にもなる。

試しに、シンは、巫女に向かって、一枚の硬貨を差しだして、聞いてみた。

「賽銭出したいのはやまやまなんだけど．．．こういう硬貨でも使えるのか？」

コインを受け取った巫女は、それを手にとって、じろじろ眺めまわした。

使える硬貨なのか否かは、一目見れば分かるはずなのだから、この様子では、単に、初めて見る硬貨に興味があるだけだろう。

これではやはり、神社の賽銭には使えそうにない。

「神社の賽銭には使えないけど、一応、あずかっておくわ．．．ね

え、他にもないの、これ」

生憎、巫女が返してきた返事はこういうものだった。

余程珍しいのだろうか、自分で持っているつもりらしい。

神社の賽銭にも使えずに、誰が差したすものかといった気分だが、まあ、機嫌がよさそうなので、それは悪いことではない。

なんせ、シンはこれから、この巫女から、いろいろとまた話を聞くつもりだったのだ、話相手の機嫌は伺っておいた方がいい。

この辺りは、シンも大人になったのである。

まあ、そのために金を渡すなどと、ほとんど収賄みたいなものだが。向こうは、金というより、もの珍しい石ころみたいな印象しかないようだ。

それに、神社の賽銭に出す程度の（と言ったら失礼だが・・・）金なら、シンはいくらでも出せる。

軍人をやつてくるくせに、世俗的な欲求のあまりないシンとしては、金を使う機会は少ない。

おかげで、この歳にして、貯蓄は馬鹿にならないものになっていた。

「そんなに珍しいなら、ほら、もっとやるよ」

シンは、さらに、あるだけの種類の硬貨を、巫女に差しだす。

それを受け取りつつ、巫女は言った。

「これがお金だったの？・・・こんなの、初めて見たんだけど・・・もしかして、うちの神社って、初めて見るお金があるくらい、賽銭に恵まれてないの？」

「いや、そういうんじゃない」

そういえば、話をするに当たって、大事なことを忘れていた。

彼女に対し、最も重要なことを説明するのを忘れていたのだ。

改めて、シンは、彼女に対して、切り出した。

「実は俺、この幻想郷とは、別の世界に来たんだ、これはその世界の金なんだよ」

巫女に対して、事の成り行きについて、詳しく説明する。

墓参りをしていたら、突如突風に身体を飛ばされて、気がつけばここにいた。

そして、元の世界に戻る方法を探していたところ、この博麗神社に行くように、式神橙に言われたことまでだ。

それを聞いた巫女は、いろいろと納得言ったようで、こう言った。

「なるほどねえ。また神隠しってわけね」

『また』というあたり、先に小傘が言った通り、幻想郷に神隠しに会う者は多いらしい。

そして、次いで巫女が言った言葉に、シンは多少なりとも驚いた。

「んで、元の世界に戻りたいっていうんでしょ？んなら、簡単簡単。すぐにでも戻してあげられるわよ」

「そ、そうなのか!？」

「あ!こいつ、シンを驚かせて...シンを驚かしているのはあただけだよ!」

いきなり、どうでもいいことをのたまう小傘。

彼女の言う通り、博霊神社の巫女はロクでもないやつだが、それ以上に、この小傘自体がロクなヤツではない。

化け傘の言うことなどどうでもいいといった具合で、巫女が続ける。「なんなら、今すぐにも戻してあげられるけど、どうする?」

そりゃあ、よろこんで戻してくれ、と言いかけたところで、シンは口をつぐんだ。

これは...?未練があるとしても言うのだろうか?

もう少しぐらい、ここにいたっていいのではないかという気持ちが心の中にあるのを、シンは感じた。

が、そんなことを考え始めたら、キリがない。二度と元の世界に戻れなくなるだろう。

シンには、元の世界、コスミック・イラで、やるべきことがある。キラと約束したのだ、世界を平和にすると。これから、そのための準備で忙しくなるのだ。

自分を頼りにしてくれるキラのためにも、何としても、すぐに元の世界に帰らなくてはならない。

未練などは、ないものと考えたシンは、改めて、巫女に対して言った。

「分かった、だったら、すぐに戻してくれ」

これで、やってきてすぐに、幻想郷ともお別れというわけだ。

橙と藍は、いずれ会えると言ってくれたが、結局その機会もなかった。

小傘とも、これでもうこれっきりということか・・・

まあ、一度この世界に来れたなら、二度目ということもあるだろう。世界が平和になり、シンの命を誰が必要ともしないときが来てから、もしもう一度この世界に来ることができれば、その時改めて、ゆっくり見て回るとしよう。

そう思うことで心は納得するのだから、シンは、ひたすらこう思い続けた。

「んじゃま、さっそく準備に取り掛かるとしようかしら」

巫女がそう言った、ちょうどその瞬間だった。

「お待ちなさい、霊夢」

また、初めて聞く新しい声が、シンの耳朵をうった。

咄嗟に辺りを見回すが、巫女と小傘以外、人はいない、気配もない。それに、さっきの声、シンは幻想郷に聞こえる直前に聞いた、謎の声に似ていた。

声質はまったく違うが、頭に直接語りかけてくるような、空間そのものが喋っているような雰囲気などは、同じものではないかと思える。

声は聞こえるが姿が見えないという事態に、シンが少し混乱する様子を見て、それを眺める小傘が、いかにも不服そうにしている。

しかし、その小傘の方でも、この謎の声を、奇妙に思っているらしい。

ただ、巫女一人は、この声にあまり驚きはしなかったし、声の正体
が何なのかも分かっている様子だった。

「またあんなね・・・」

シンから、見たこともない硬貨を受け取って機嫌がよさそうだった
のが、一転、露骨に嫌そうな顔になる。

一体なんだというのだろうか・・・

改めて、周囲を見回して、誰もいないことを確認したシンだが、次
の瞬間、眼の前に現れた光景には、さすがに驚愕せずにはいられな
かった。

何もないはずの中空に、薄皮を刃物で切るかのように、一本の切れ
目が奔り、縦に奔ったその線が、生物が口を開けるように開いたの
だ。

空間に、裂け目ができた。

その向こう側には、形容することもできないような、奇妙そのもの
な空間が広がっていた。

そしてその中から、一人の少女、といよりは、女性が出てきたのだ。
裂け目を潜り抜けて、神社の石畳の上へと足をつける。

彼女の身体が全て空間の裂け目の向こう側に出たところで、その裂
け目は、時間が逆行するかのように、閉じ、元の状態に戻っていっ
た。

これは一体なんだ・・・

ファンタジーか、ホラーか、サイエンスフィクションか、あるいは
その全部だろうか。

空想でしか見たこともないような光景が、シンの眼前で、はっきり
としたディテールを以って展開されたのである。

この幻想郷は妖怪の住まう世界だ。

が、小傘にしても、獣の耳の生えた橙と藍にしても、いまいち、妖
怪であるという実感はなかったし、ここが、妖怪の世界であるとい
う意識も、正直言って薄かった。

レティと会ったときなどは、妖怪と言っても、自分達人間と同じではないかという意識が芽生えたほどだ。

だが、今しがた眼の前で起こった光景。

何が起きたのかすら、いまいち判然としない事態。理解の向こう側で展開される世界。

こんなもの、人間が見るものなのだろうか？

少なくとも、人間は、人間の世界では、こんなものを実際に見ることができないはずだ。

だから人は、フィクションという形で、不可解なものに形を成す。

だというなら、そのフィクションのような光景が眼の前に映し出されるということは、すなわち・・・

シンは、改めて、ここが、妖怪の住まうこの世に在らざる世界、幻想郷であることを思い出した。

完全に固まったシンに対し、今しがた、空間のスキマから彼の前に現れた女性は、言った。

「初めまして、八雲 紫です」

PHASE-5『Glass Onion』から覗いてみよう』(前書き)

タイトルは、『The Beatles』の曲とその訳詞より。

物事を知るとは、まずは見ることから始まる。

百聞は一見に如かずという言葉もある。

百の言葉から何かを想像するより、実際に見たほうが、ずっと早
し、よく分かる。

それに、百の言葉を伝えるにしても、まずは見て知っていなければ、
空想に彩られた支離滅裂な説明にしかないだろう。

知識や価値観、あるいは政治に関しても、それは同じだ。

計算だけの科学に価値はなく。何が正しく、何が間違いなのかは、
その結果を実際に見なければ分からない。

民衆のための平和な政治と言ったって、民衆が実際に何を望んでい
るのかを見て知らなければ、民衆のためなどではなく、ただの自己
満足のための政治になってしまう。

何かを伝えるにしたって、こんな風に、無駄に言葉を飾る必要はな
いのだ。

見て知れば、それでいいのだから。悩む必要も、考える必要もない。
何を求め、何を成すにしても、同じことだ。

「八雲・・・紫だつて・・・？」

「だあ・・・翠香も天界の二人組もちょうどいないっていうタイミ
ングで、一番めんどくさいヤツが・・・」

おうむ返しのようにその名を反復するシンに、吐き捨てるような巫

女の声は聞こえなかった。

未だ混乱が消え去る気配すら見えないシンだったが、八雲 紫という名には、聞き覚えがあった。

そうだ、式神である藍を使役する妖怪、だったはずだ。

たしか、彼女が、博霊神社の巫女と関係がある、という話も聞いていた。

ようやく、ほんのわずかに混乱が解け、何が起こったのか、彼女、八雲 紫が、何をしに来たのかを考えるだけの余裕はできた。

そんなシンと、紫の視線がぴたりと合う。

こちらの心境を完全に読み取っていきそうな、心の深淵まで読み取りそうな瞳には、シンに対しての既視感を感じられた。

シンという人間が、誰なのか知っているような雰囲気、である。

当然だが、シンは、紫という妖怪がどういうものなのかは知らないし、せいぜい、名前を知っている程度だ。

それに対し、紫の眼には、シンという人間を．．．それだけでない、ひどく曖昧な表現になるが、『ありとあらゆること』を知っているような、一種の不気味さがあった。

ありとあらゆるとは言っても、それこそ、何もかも知っているという意味ではない。

シンと、シンが幻想郷に訪れたことに関するなにかも、をだ。

それらを全て知り尽くしているということを暗に示しているかのような瞳に、シンは、自分が畏怖していることに気がついた。

そして、その瞳がシンに語りかけてきた。

シンにとってはそう見えただけで、実際は、紫の口から発せられた声なのだが、しかしシンには、紛れもなく彼女の瞳が直接心に呼びかけているように聞こえていた。

「あなたのお名前は？」

「え．．．？」

「聞いているのよ？」

「あ．．．ああ。シン．．．シン・アスカ」

「改めて、私は八雲 紫です。よろしくね」

そうまで言ったところで、シンを瞥見することをやめた紫は、次いで、巫女の方に振り向いて、こう言った。

「あなたは自己紹介したの？」

「は？何で」

「折角の参拝客に対して、無礼ではなくて？」

「いや、参拝客ならなおさら、自己紹介なんて必要ないでしょ。いちいち参拝客に自己紹介する巫女がいるか」

「そう、なら、あたしの方から紹介させてもらうわね」

「いや、いい、他人に紹介されるぐらになら、あたしの方からするわよ．．．まったく、何のつもりか知らないけど」

つくづく不遜な態度で、シンの方を向いた巫女が、面倒くさそうな態度を微塵も隠さずに言う。

「あたしは霊夢。まあ、見たとおりの人間よ」

「あ．．．ああ．．．．．」

見たとおりの人間．．．ということは、まあ、面倒くさがりで、態度が悪い、ということか。

にしても、紫の出現には驚かされたが、それに呆気にとられるのも、大概にせねばならない。

早く、元の世界に戻る準備をせねばならない。

そこまで考えたところで、ようやく、今しがた紫が放った言葉が再認識された。

その、シンが元の世界に戻るための準備を、紫に制止されたのだ。一体何のつもりで．．．？

シンは、未だ混乱の解けきれない、とうか、空間のスキマから現れた紫の声を聞き、眼を見たことによりことにより、一層、地に足が付かないような奇妙な感覚になったまま、聞いてみた。

「ゆ、紫とか言ったな。あんたのことは、名前だけなら知ってる。

あんたんとこの式神から教えてもらった」

「そう」

「それはそれで、何で止めるんだ。俺は、早く元の世界に戻らなきゃいけない。あんた、俺に用事でもあるのか？ないんだったら、失礼な言い方だけど、放つといてくれよ」

「用事ならあるわよ」

「な、何だって？」

「話は、神社の中でしよう．．．桜餅でも食べながらね、案内します」

「え．．．ああ、わ、分かった」

混乱したままだから、返事が思い浮かばないということもあるが、紫の言葉に何の反論もできないまま、話は、まるで最初から筋書でもあるのではないかと思えるほど、スラスラと進んだ。

結局、シン達は、半ば強引に紫に導かれて、神社の本堂の向こう側へと導かれた。

霊夢が、口を挟む。

「一つ言っとくけど、ここはうちの神社だし、出すのはうちの桜餅だからね」

博霊神社の本堂は、表から見れば、いかにも神社といった感じだが、裏に回った途端、神社などとは、とてもじゃないが言えないような様相になる。

話に聞けば、この博霊神社は、霊夢と愉快な仲間達役三名の住処として機能している、見た目などは、本当にただの、古き良き日本家屋といった具合だった。

これでは、表の厳かな神社の姿がハリボテなようだ。というか、霊夢はともかくとして、紫と小傘に関しては、完全にそうだと考えることで結論づいているらしい。

中もまた、どう考えても神社には必要でない生活環境が整えられており、畳が敷かれた、それなりに広い部屋がいくつか設えられてい

た。

神社としては考えものだが、しかしまあ、ここで生活するということなら、不都合はなさそうだ。

そんな博霊神社の部屋の一つに招き入れられたシンは、机の上に置かれた桜餅を食べながら、紫の言葉を待った。

「うま．．．うまつ．．．うらめしや」

我関せずといった具合で、小傘は、餅を頬張っていた。

さて、シン達を呼びとめ、博霊神社に招き入れた紫の第一声といえ

ば。

「最近寒くなってきたわね」

というものだった。

そういうことを聞きに来たんじゃない。

どうも、向こうから何かを語る様子を感じられないシンは、いつそ

こちらから聞いてみることにした。

「なあ、あんた、どうして俺が元の世界に戻るのを止めたんだ？さ

つき聞いたよな？」

「さて。何故でしょうねえ」

「馬鹿にしてるのか。理由がないんだつたら、早く帰してくれ」

「この幻想郷に訪れた者達の多くは、元の世界に戻ってから、口々にこう語るのよ『ここ在らざる境界の向こうに、桃源郷が広がっていた』と．．．ここも中々楽しいところなのだから、もう少しぐらい、遊んでいてもよいのではないかしら？」

「そういう問題じゃないんだ。俺は、元の世界に帰って、やらなければならないことがある。だから．．．」

「やらなければならないこととは？」

「え．．．」

「何なのかしら？」

「．．．平和だ」

「．．．．．」

「平和をつくる」

シンの言葉を聞いた、紫は、一瞬だけ黙り込んだ後、何が愉快なのか知らないが、笑い出した。

「ふふ、ふ．．．あはははははは！面白いことを言う」

「な、何なんだよ、あんた」

「外の世界の人間は、我々妖怪よりもはるかに頭が固いくせに、考えてることは、我々以上に途方もなく曖昧なのだから、お笑いだわ」

「何が言いたいんだ．．．」

「平和をつくるとは言いますが。あなた、どうすれば平和なんて大雑把な言葉を現実に出来るか御存じなの？」

「う．．．っ？」

「平和をつくるために何をすべきか、あなたは知っているのかしら．．．？」

完全な図星をつかれた。

そうだ、シンは、平和をつくるためにどうすればいいのか、何一つ分からない。

キラ・ヤマトや、ラクス・クラインだって、分かっているとは言えない。

そうである以上、シンは、紫の問いに対して、こう応えるしかなかった。

「．．．分からない」

その答えに対し、紫は、不敵な微笑を浮かべつつ、言う。

「そうでしょう。この幻想郷に住まう者達は、無駄を好む。しかし、非現実的かつ、非生産的な思想は好まない。夢物語を語るぐらいなら、まずは実行に移す者達よ。無理を承知で方法を模索する向上心がある。結果の伴わない願望などは、持っているだけ無駄だと知っている」

彼女の、紫の言っていることは、正しい。

というか、シン自身だって、紫と同じことを考えていたのだ。

実際に現実のものにできなければ、平和など、ただの空虚な言葉ではないし、それを目指す過程で多くの犠牲を出しておきながら、何

の結果も出すことができないとなれば、それはあまりに不幸であるし、犠牲となつた者達を侮辱する行為だ。

そして、それでも諦めないという思想も、ただそれだけでは、現実逃避と変わりのない、マイナス思考だ。

そこに実をつけなければ、ただ単に、空を漂い消えていく、何の重みもない言葉の羅列でしかない。

紫は、その現実をシンに突き付け、同時に、その先の何かを伝えようとしているのだ。

「．．．．．だ、だったら、どうすればいい．．．どうすれば、俺の、俺達の心は無駄じゃなくなる！平和を実現できる！」

「本気でそう思っているなら、簡単な話よ．．．それが空虚な願望でなくなるほどの、確かな方法を見つけ出せばいい」

「．．．それは、それはどうすればいいんだ！」

「あなたは何でも他人に聞くのね．．．だけどまあ、一つだけ教えるわ．．．時間をかけることが大切です。人生、牛になることも必要ですと言つてしょ？」

「．．．．．時間．．．」

時間をかける．．．そうか。

今だつてそうだ。

シンは、シン達は、あまりに急ぎ過ぎていた。

一刻も早く、平和を手に入れようと、躍起になっていた。

世界がそれほどに窮しているということもあるだろうが、平和を手に入れることに、急ぎ過ぎていたのだ。

キラ達だつて、戦争をいち早く終わらせようとしたがために、彼らの正義である、対話を、最後までやり続けることができなかった。

話すだけ無駄だということもあるだろうが．．．それでも、最後まで呼びかけ続けければ、せめて機会だけでも得られなかったのか、と、考えることを放棄した。

終戦後にしてもそうだ。

人心の不安を抑えるために、それ以上に、自分達の不安を忘れるた

めかもしれない。

平和というものを語り、それを現実にしようとすること自体に注力するようになっていた。

どうすればそれができるのか、考えてもいない。

方法が分かってもいないことを、どうすれば実行できるというのだろうか．．．

まずは、その方法を考えることが先なのだ。

人々の心に、不安と猜疑心と憎しみが残っていようと、口先だけの慰めに意味はない。そうやって得た平和は、やがて破綻する。

不安も、猜疑心も、そして憎しみも、元を断って初めて、平和と言えるようになるのではないか？

そのための、確かな方法が、シン達には必要なのである。

「．．．分かり始めてきた．．．」

そう呟くシン。

だが、

「それと、俺を元の世界に戻さないと、何の関係がある？」

「ふむ．．．あなたは、中々理解力のある人間みたいだから、こうだけ言っておけば分かるでしょう．．．この幻想郷はね、外の世界以上に、心というものを教えてくれるわ」

「心．．．」

「そう、幻想郷は精神の世界であり、己のエゴに正直な者達が住んでいる．．．外の人間以上に、人間味はあると考えているわ．．．あなたは思いませんでした？自分の住む世界の人々は、あまりにもいろいろなものを隠し過ぎていると」

「．．．確かに、そうかもしれない」

隠しているというか、伝えることを拒絶しているのだ。

しかも、本当の心のうわべに、世渡りのための別の考えをおっかぶせ、それが、本当の心のように偽って生きている。

それは、戦争における、大義名分と同じように、果ては、自分の生き方を拘束していく。

シンの友人であり、戦争の中で、自分の心を開くことができずに死んでいった者いる。何よりシン自身、自分の心を誰に伝えることもできないまま、大切なものを失って、戦禍の中でボロボロになっていった。

シンは、紫に聞く。

「幻想郷は、そうじゃないっていつのか？」

紫は、すぐさま応える。

「少なくとも、他人よく見られたいという理由で嘘をつく者はいないわ。自分が得をしたいためか、あるいは、他人の向上心を刺激するためか・・・」

「・・・だから、そういう幻想郷を見て、勉強しろとも言つのか・・・？」

「さてねえ。それは、あなたが考えればいいでしょう」

紫の言うことを、完全に信用はできない。

当の紫が、彼女の語る言葉に対し、あまりに胡散臭いのだ。

が、間違ったことを言っていないのも確かだ。

紫が、もう少しこの幻想郷に留まり、勉強しろというのなら、それもいいかもしれない。

が、何をどう勉強すればいいのか分からない。

それこそ、今しがた言ったように、方法がなければどうにもならない。ただ勉強しろと言われたって、どうしようもない。

シンが、紫に言う。

「それはそれとして、じゃあ、どうすればいいんだ・・・ただほつき歩いているだけじゃ、どうにもならないだろ」

「問題ないわ。それなら、私の方から、あなたの次の目的地を指示しておきましょう・・・あなたは今度は、冥界の庭白玉楼と、彼岸の無縁塚へと向かいなさい。案内役も用意しています・・・ちょうど、帰ってきたしね」

紫の言葉のすぐ後に、部屋の向こう側、神社の外から声が聞こえた。「紫様、只今戻りました」

聞き覚えのある声だ。

声のする方向を振り向いたシンの眼には、藍と橙が見えた。

そういえば、藍は紫の式神である。となれば、藍の式神である橙もまた、突き詰めれば紫の式神であると考えてもよからう。

藍達にとある使命を与えており、それがひと段落ついたらしいことを確認した紫が、改めて言う。

シンは、再び紫の方に向き直った。

「うちの藍を同行させましょう．．．いえ．．．橙、あなたもどう？」

「ついてついていいんですかー？」

「あなたがいいのなら、いいわよ」

「そうですねえ、マヨヒガに籠ってるのもあれだし、藍しやまにっ
いてきます」

「ということで、橙も同行します。二人がいれば、この幻想郷の大抵の場所には案内してくれます。それに、橙はともかく、藍は、我ながらというお世辞も抜きに最強の式神です、道中も安全よ。白玉楼にも彼岸にも、問題なくいけるし、あなたの方でどこか行きたいところあるというなら、相談に乗ってくれるわ」

「二人が？」

紫の言葉に、シンはまた、藍達の方を振り向いた。

藍が、九尾の妖狐らしく、狐目のように眼を細くした人の良さそうな笑みを浮かべて、言う。

「よろしく」

「よろしくー」

同時に、橙も同じ台詞を言う。

「あ、ああ．．．こっちこそ」

二人に曖昧な返事をしつつ、シンは、またまた紫の方に振り返りつつ、言う。

「それで、その白玉楼と、彼岸の無縁塚ってのは、どういうところなんだ？」

「行けば分かるけど．．．そうねえ。簡単にいえば、死者の棲むところよ」

「死者の？あの世ってことか？」

「そうねえ、外の人間的には、そう言ってもいいわ」

「そ、そんなところに、俺なんかが行つていいのか？何があるっていうんだ．．．」

「それも、実際に行けば分かる話よ．．．あ、そうそう。別に両方行く必要はないわよ。どちらか片方に行けば、もう片方は、気が向いたらでいいわ」

「なに？また何でだよ」

「説明するのがめんどくさいわ．．．そうねえ、どっちかに行くなら、白玉楼に行った方がいいと、私的には思うわ。あそこには、私の友人もいることだし、距離も近いからね」

「そういうことなら、そっちに行くけど．．．」

紫は、つくづく説明することをしない。

何をするにしても、確実な方法が必要だと言っておきながら、詳しいことは教えようとしない。

確実さは必要だが、それを自分で考えることも大切、だということか？

とにかく、この紫のせいで、シンは、すぐに元の世界に戻ることができなくなった。

シンを元の世界に戻せる当事者であるらしい霊夢も、紫の話に納得して（いるのかは知らないが）、シンを戻すのは後にすることで結論づいているようだ。

こうなったら、紫の言うことに従っておくしかない。

下手に逆らえば、空間に裂け目を作り、そこから出てくるようなこの得体の知れない妖怪に何をされるか、知れたものではない。

シンが元の世界に戻るのは、紫の言う、勉強とやらをした後のことなのだろう。

だったら、それを早くこなさなければならない。

急ぎすぎではいけないということが重々分かったが、だからといって、もたもたしていてもいいというものではない。

なんせ、ことは世界情勢に関わる。

「だったら、早いとこ出発しよう。時間が惜しい」

言いながら、桜餅と一緒におかれた茶をすすりつつ、行動を始めるべく、畳の上に立ちあがろうとしたシンだが、その動きを、紫の声が制止した。

「まあ待ちなさい。まだまだお菓子がいっぱいあるんだから、それでも食べながら、ゆっくりしていったね」

「そ、そうは言うけど、俺も、元の世界でやることがあるんだ」

シンの言葉を聞きながら、紫は、湯呑に入った茶をすすりつつ、妙に妖しい上目づかいで彼を眺めつつ、湯呑から口を離して、言った。

「ふうん。あなた、元の世界で、就いてる役職があるの？どんなの？」

「え．．．いや、別に大した役職じゃ．．．」

「そう。あなた一人なくなったら、世界情勢が破綻するようなお仕事なのねえ？」

「うつ？」

「そんなに向こうの世界でやらなきゃいけないことがあるんだから、それこそ、そこらの下っ端みたいな役職じゃないんでしょうね」

この妖怪、見事に凶星をついてくる。

実を言えば、所詮はザフト軍の赤服であり、一兵士でしかないシンは、戦後においても、重要な役職にはついていない。それこそ、戦争から、政治に移った情勢においては、下っ端のようなものだ。

やることが多いといっても、シンよりやることの多い者など、星の数ほどいる。

元ザフトレッドであり、今はクラインの幹部であるイザーク・ジュールの仕事量などは、シンの五倍、いや、五十倍はあることだろう。そういう現実をちくちく突き付けるように、胡散臭い口調で紫が言

う。

「大変ねえ、あなたみたいな人がいなくなつて、今頃大混乱じゃない？ そんなにすぐ戻りたいなら、やっぱり戻してあげてもいいのよ？ それこそ、三日寝なくても終わらないようなハードワークが待ってるのでしょ？」

「だあー！ もう、分かったよ。ゆっくりなりなんなりしてつてやる。おいあんだ。幻想郷に嘘をつくやつはいないっての、それこそ嘘だろ」

「ふふ。何事にも例外っていうのがあるでしょう。折角なんだから、くつろいでいきなさい」

突然、霊夢が口を挟む。

「あの、改めて言つとくけど、ここあたしの神社だから。お菓子もうちのお菓子だから」

その言葉に、シンの分の桜餅までむしゃむしゃ食べながら、小傘が返す。

「うるさいなあ、ゲンキなヤツ」

「退治してやるのかこの化け傘・・・」

紫の言われるがまま、大人しく神社でまんねりとしていたシンだったが、紫に「いつになったら出発させてくれるんだ」と聞いたところ、「いつでもいいわよ？」と返された時は、いよいよ本気で怒りそうになったが、そこは何とか堪える。

折角出してくれたお菓子は腹八分くらいに喰つておいて、シン達は、博麗神社を発つことにした。

神社と思えない本堂から外に出て、鳥居の前まで来る。

紫が藍に、「では、とりあえず今のところは、シンを私の代わりと考え、彼の言うことを聞きなさい・・・そうすれば、万事うまくいきます」と言い、それに藍が「委細承知です。お任せください」と応える。

「橙もね」と、さらに紫が言い、橙も返す。

「分かってます」

そういうやりとりを傍から聞いていたシンに対しても、紫は歩み寄り、こう言った。

「急ぐあなたの気持ちも理解はできるけど、外の世界にだってことわざであるでしょう？『急がば回れって』。ことわざってのは、真理をついてるから言い継がれるものよ」

「分かってるよ．．．俺達のやろうとしてることは、三日三晩ぐらいじゃできっこないことだ。それこそ、何代も世代を重ねて初めて見えてくるものだ．．．だから、急ぐ必要はないってのは分かる．．．
．．．だけど、あんまりもたもたしてると、何もできないまま、また間違った方向に進んでいくかもしれないんだ」

「そういうのも、分かるわね。だったら、自分が何をすべきかも、見えてくるのではなくて？」

「そうだ．．．なんだかんだ言つて、あんたもいいこと言うんだよな」

「今回は、通常の三倍いいこと言ってるからね．．．普段はそりゃあもう．．．あくどいことしか考えてないわ」

「にしたって、0だったら三倍しても意味ないんだ。あんたも、悪い人、じゃなくて、悪い妖怪じゃないみたいだな．．．それじゃあ、行ってくる。今度こそ帰つてもいいと思つたら、ここに帰ってくる」

「そうなさい」

「藍、ちえーん！あと小傘。行くぞー」

シンが、小傘達に呼びかけると、みなそれに応じた。

神社を出て、石段を下りていくシンの後についていく。

紫達は、その背中が見えなくなるまで見つめていた。

とはいえ、石段を下りていくと、ほんの数秒で見えなくなるわけだが．．．

シン達が去り、紫と霊夢だけが、神社に残る形になった。

彼らを神社でもてなしている間に、また、秋の落葉が、いくつか神

社の石畳の上に落ちていた。

そんなにたくさんではないが、神社の掃除が、シン達がきたおかげで中断することになった以上、それもまとめて、掃っておくか。

そう考えつつ、霊夢は紫に言う。

「あんたの考えてることが理解できないけど．．．まあ、あいつら楽しそうだし。暇があればちよっかい出しに行こうかな」

「好きになさい」

「それはそれで。シンとかいうヤツの言う通りよ。あんた、今回は妙に魂胆が丸くなってたじゃない、らしくないわ」

つくづく理解できない、と、口外に付け足す言葉を聞いてか聞かずか、紫は、胡散臭さが抜けたような笑みを浮かべて応えた。

「そりゃあ、私だって鬼の子じゃない」

「鬼の子なら他にいるしね」

「それに、種明かしをさせてもらうとね。今までの私の言ったことは、私が発してはいるが、私の言葉に在らず」

「種明かしになってない。ますます訳分からんわ」

「分かってもらうつもりで言っていない．．．では、私もここでないとまさせて頂こうかしら」

言うなり、紫の眼前に、先ほどのような空間の裂け目が現れる。

紫の能力、スキマによる、万物の境界だ。

「は？ちよ．．．っ」

霊夢の声に耳を貸さず、スキマの中へと入る紫。

その時点で、彼女の身体は、ここに在らざるところに移動したのだ。そのままスキマは、ジッパーが閉まるようにぴたりと閉じ、何事もなかったかのように消滅した。

結局、とうとう一人になってしまった霊夢は、「はあ．．．訳分からん」と、ため息混じりに呟きつつ、神社の掃除を再開するしかなかった。

そこがどこであるのか詳しく言及することはしないが、シン達の目的地である白玉楼の一角であると言えは言える。

幽霊を見ることが出来る者なら、賑やかに見えるだろう白玉楼の中にあつて、その場所だけは、怖いほどに静かな場所であつた。

冥界の名物である美しい桜も、あまり見かけることができない。

紫は、スキマを介し、そこに先回りしていたのだ。

別に、シン達を待ち構えるというつもりではない。

知らせに来たのだ。

シンとは別の、もう一人の来訪者に対し、シン達のことを知らせるために、紫はやってきた。

その者は、紫に対し一つの頼みごとをし、紫も、あえてそれを承つたのである。

「あなたの望むようにしておいたわ。お膳立てはしておいたから、後は、あなたが何をし、彼がどうするかに任せる」

紫の声に対し、その者が応える。

「感謝する．．．後は、あなたの言うように、彼に任せるしかない」

「それはそうとして、あなたも酔狂な方ですね。この幻想郷、我ながら、勉強になるようなところなんて、ないわよ」

「そうでもない。あなた達が外の世界に対して幾ばくかの憧れを抱くと同じように、我々のようなものにとつては、このような世界に来るというだけで、価値観が変わるものだ」

「そう。そこまで仰つてくださるなら、あなた、ここで永遠に住んでみます？白玉楼は快適なところでしょう」

「いや。そうはいかん．．．私は、あの世界に絶望しきり、足掻くことを放棄し、多くの者達に、エゴを押し付けた罪がある．．．それから逃れるつもりはない。私は、狂人としてあの世界で死した以上、あの世界で、罪人として裁かれる必要がある」

「そう．．死してなお罪を問われるのがあなた方人間なら、そういう生き方だけは、羨望できませんわ．．」

「．．そうだろうな．．確かにこの世界は、ずっと生きやすい．．」

幻想郷に吹き抜ける風は穏やかで、地には、温かい熱がこもっている。

人妖は今日も、自分達の生きたいよう、勝手気ままに生きている。それで、世界が成立している。

シン達の旅はまだ始まったばかりであり、彼は、まだ何も知っていない。

PHASE - 6 『魂の庭』

何かを知るためには、まずは、今知っていることを改めて認識してみるのがいいかもしれない。

所詮、自分の知らないことはどう考えても分からないのだから、すでに知っていることから、新しい考えを巡らして、求める答えを導き出すほうがいい。

それができるだけの知恵が、人にはある。

人類だって、そうやって進歩してきたのではないだろうか。

無から生まれた存在を始祖とする人類には、無から何かを生み出すことは、今はできない。

だから、今あるものから、新しい何かをくみ取るのだ。

冥界の庭、白玉楼。

かつては、強固な結界により、外界との繋がりを断っていたその地は、転生や成仏を待つ霊が住まう場所である。その他にも、もう一つ大きな意味を持っているが、それについては言及しない。

そのような性質であるため、本来は、決している場所ではないが、庭中に咲き乱れる桜の美しさがあり、雰囲気は非常に明るい場所であった。

ここに住まう霊も、何だかんだといって、生きやすい場所だと思っていることだろう。幽霊だが。

少し前に、故あって結界の効果が弱まってからは、花見の訪問客も

多い。あまりいいことではないが・・・

それに、桜が見事なもの、時には考えものである。

数え切れない花が咲くということは同時に、数え切れないほど散るということである。

春から夏に、そして夏から秋になるころは、掃いても掃いても掃除が終わらない。

ちょうど秋口の寒くなってきた時分、落ち葉の数も多かった。

だが、白玉楼に住まう幽霊、西行寺 幽々子に仕える半妖、魂魄妖夢としては、終わらない落ち葉掃除よりも、少し前にやってきた紫と、彼女が紹介してくれたある人物の方が気にかかることだった。その者は、外の世界から、ほとんど偶然に、幻想郷にやってきたらしい。

戦争によりその命を落としたのだが、執念（だろつか）により、ほとんど思念だけの状態で生きながらえてきたらしい。幽霊とほぼ同じだ。

だからこそ、幻想郷に来やすかったのかは分からない。だが、幽霊として幻想郷、しかもこの白玉楼にやってきておきながら、妖夢も幽々子も、その者の存在に気が付かなかった。

所詮はただの幽霊であり、言われなければ、神隠しに会ったなどとは分からないのだから仕方がないが・・・

そして、その者の存在に初めて気がついた紫は、その者と友好を深めていた。

どうやら、相当の知識と、人間ばなれした思考を持っているらしく、紫としても、話せる人物だったのだろう。

紫は、その者の頼みなら、一つくらいは聞いてやろうという気持ちだったらしい。

そこからの事の経緯はよく知らないが、今しがた、また一人、外の世界からの来訪者がやってきたらしい。

当人は言わなかったが、おそらく今回は紫の仕業だろう。主人幽々

子もそう言っていたのだから、妖夢としてはそう確信している。

で、彼がこの白玉楼にやってくるという話だから、気を損ねない程度にもてなしてやってくれという話だった。

また、先に幻想郷にやってきたその者のことは、決して言うなとも言っていた。

何を考えているのかは理解できないが、そう言われた以上、妖夢はそれに従う。

言われたことができないのでは、人の従者としては終わっている。今庭の掃除をしているのも、シン・アス力というらしい彼の前で、見栄え良くするためだが、予想以上に落ち葉が多い。

ここで妖夢は、そのことに屈託するようになった。

「こつも枯れ葉が多くちゃ大変だ．．．後で焼き芋でも作る。お嬢様もお喜びになられる．．．まあ、それ以前の問題だけだ」

秋口になると、枯れ葉を集めて、それで焼き芋をつくる光景を良く見るし、幽霊だってそれは同じだ。

秋から冬にかけては空気が乾き、火も良く燃える。

食べることに喜びを見出しているらしく、秋の風物詩である月見も団子を食べるための行事としか思っていない幽々子としては、焼き芋でも食べないと秋になった気持ちがない。

そんなこともあるのかと、豊穣の神様にお祈りして彼女の香水の元でもある生焼き芋、すなわちただのサツマイモを嫌になるほど仕入れておいた。

折角だから、シン・アス力達と一緒に、食べようか。

「はあ．．．疲れるな．．．剣に生きる身ならば、こんなことで疲れてちゃいけないだろうけど．．．」

しかし、疲れると言える分には、まだ幾分か動けるといって証拠である。

しずしずと庭の掃除に勤しんでいた妖夢だが、ふと、庭の幽霊達の様子が、妙にそわそわしているのに気がついた。

外の世界から訪問者が来るというのは、冥界の幽霊の多くも知っている。

となれば・・・

「来たのかな？」

件のシン・アスカが到着したのかもしれない。

十中八九そうであろうし、そうでなくとも、何かあるのは確かなのだから、妖夢は、急ぎ、冥界の入口である結界の方へと向かった。

「幽霊って・・・本当に幽霊だなあ・・・」

気がつけば、シン達は冥界へとやってきていた。

一昔前までは、強固な結界が展開されており、外部との接触を拒んできた冥界だが、今やそれもないに等しい。

だから、冷やかし程度でも、それこそ、入ったことが分からないほどにあっさり中に入れるわけだ。

冥界が幽霊の住まう場所ならば当然だが、冥界は、他の場所と大きく違うところはないが、幽霊は多かった。

また、その幽霊というのが、改めてみると奇妙なものだった。

丸い火の玉のようなものが、ゆらゆらと辺りを漂っているのである。このあたりは、シンが元いた世界における『火の玉』と大差ない。

博霊神社で紫から聞いた話だが、幻想郷と、シン達が本来いる外の世界は、元は根幹を同じものとする世界だそうだ。

だから、外の世界で妖怪の伝説として語り継がれているものの多くは、幻想郷においては事実存在しているらしい。

火の玉なんて、実際はさぞ恐ろしいはずだし、夜道で見れば、さすがのシンでも震え上がらずにはいられないだろうと考えられるが、いざ、幻想郷というところで見てみると、逆に滑稽なものにさえ見える。

しかし、この、触れると冷たそうな火の玉だが、これも死んだ人の魂なのだろう。

そう思うと、なおのこと不思議な気分がした。

幻想郷で見る火の玉は、幻想郷で死んだ人の魂であろうが、だとすれば、シン達のいる世界、コズミック・イラで死んだ者達の魂も、こんな風に火の玉になって、どこかで漂っているのだろうか．．．シンの初恋の人になったのかもしれない少女、ステラも、無二の親友だったレイもみな、どこかで魂だけの存在になって生きているのか？

そう思うと急に、ただの火の玉でしかない幽霊の姿が、妙な存在感を醸し出し、言いようのない気分になった。

それを知ってか知らずか、シンの隣を歩く藍が言う。

「お早い到着だね。疲れたんじゃないか？」

シンは返す。

「いや、そうでもないさ」

「そう．．．冥界というのは、死者の住まうところの割には、妖怪もよく訪れる場所だ。その由縁も、そろそろ見えてくると思うよ．．

．いや、今は秋だからそうでもないか」

冥界をしばらく歩いていけると、博霊神社に向かう時に見たような、石造りの階段が見えてきた。

が、博霊神社の石段に比べると、形も整っていたし、きれいに清掃されているらしく、汚れがまったくなかった。

こういうところから、すでに分かってくるものなのだと、シンは改めて思った。

どうやら、これから向かう、この階段の上にある屋敷、白玉楼というのは、中々に格調高いところなのだろう。

藍が言う。

「ここは桜が特に有名だ。博霊神社も桜はきれいだけど、こっちの方が遥かに花見には向いてる場所だ。数が多いからね。こうところがあるってことが分かったときは、霊夢も、神社に花見客がいなく

なるって喜んで．．．いや、嘆いていたかな。まあ、今でも神社で花見する人は多いけど」

「巫女は鬱陶しいけど、好き勝手に花見する分にはあっちの方が落ち着くしね」

小傘が続く。

藍が次いで言う。

「でも、一応気をつけておくといいよ。白玉楼に住まう幽霊のお嬢様には、人を死に至らしめる能力がある」

ちなみに程度の口調で言われた言葉だが、シンとしては聞き捨てならない。

「は！？ちょ、ちょっと待て！」

「心配ない。会うだけで死んだりはしないよ。気楽にしていれば、シンも幽々子様とは仲良くなれると思う」

「そ、そうなのか？」

「ちょっと喰い意地悪くて、お腹に一物抱えてそんな感じはあるけど、愛想のいいお方だから」

「そ．．．そうか」

つくづく、幻想郷はとんでもないところだ。

悪いところではないんだろうし、住めば都とはよく言うが、シンには、どうもここで生きていくのは難しそうだと思えた。

人を死に至らせる能力？世が世だから信じられるが、どこまでも嘘みたいな、冗談みたいな話だ。

だが、藍のような者が冗談を言うこともあるまい。

気楽にしろと言われて、そうしようとしたが叶わないシンは、ぱーっと高く続く白玉楼階段を眺めているばかりだった。

「ん？」

そんな中、ふと、その階段を下って、こちらに向かってくる一人の少女の姿が見えた。

「お供役の人が来た」

藍の声が耳を打つ。

「お供の人？．．．西行寺 幽々子とかいう人の遣いか？」

そう呟きつつ、階段を下りてくる少女を見据えるシン。

白っぽい色のおかつぱ頭は、シンの先輩である元ザフト・レッド、イザーク・ジュールを思い出す。

背中に負った身の丈ほどの刀らしいものに、目が奪われる。

彼女、剣道というのを心得ているのだろうか？

幼い顔つきは、とてもじゃないが、そういう風には見えないが。

などと、とりとめのない考えを巡らせる内に、その少女は、階段を下り、シン達の前までやってきていた。

そして、慎ましくお辞儀した後に、彼女は言った。

「ようこそおいでくださいました。私、魂魄 妖夢と申します」

「え？あ、ああ．．．シン・アス力です」

名前を聞くときはまず自分からとは言うが、そういうのを眼の前で実践されるといのは、こういう気持ちか．．．などとシンは、場違いなことを考える。

妖怪にだって、いろんなヤツがいるというのは承知のことだが、こういう礼儀正しい態度を取られると、やはり呆氣にとられる。

なんせ、シンがこれまで会ってきた幻想郷の住人の七割方が、話を聞かない馬鹿か胡散臭い妖怪なのだから。

話が脱線するが、この冥界に来る以前にも、そういう者達には大勢会った。

レティとは違うが、ところ構わず冷気を振り撒き、自分こそ最強だとか何とかのたまうヤツもいたし、会うなり訳の分からない歌を歌ったかと思えば、シン達の視力を奪い、うちの八目鰻焼きだかおでんだかを喰えば治るよ、などと詐欺みたいなことをぬかすヤツもいたし、そこら一帯を虫だらけにするヤツもいれば、ひどい時には、いきなり辺りが真っ暗になり、その原因が妖怪だったということもあった。

そういう能力を持っているのだから仕方がないとは思えるのだが、

使わないこともできるのをわざわざ使うのだから、確信犯だろう。こういう、いるだけで災害みたいな連中がわんさかいるのも、シンが幻想郷で生きていくことは難しいだろうと考える理由の一つだ。案外楽しいとは小傘達の談だが、そりゃ、楽しもうと思えば遊園地みたいで楽しかるうが、今のところのシンには、そういう余裕はない。

幸い、こういう厄介な連中は、まとめて藍が相手にしてくれた。

シン達としては、藍の戦いを観戦するだけだったので、いい休憩になり、おかげで、最初に目覚めた草原から博霊神社までの行程以上の道のりも、さほど疲れることはなかった。

それはそれとして、紫が、最強の式神などと言っていたのも嘘ではないと思えるほどの実力が藍にはあった。

妖精達のばらまくアホみたいな弹幕に対し（スペルカードに勝ち目のないシンでもそう思える）、藍の弹幕は、数も、的確に相手に当てようという配置も完璧だった。

ある種全て計算づくのような鮮烈された弹幕こそが、藍の強さだった。

式神であり、いふなれば集積回路と同じである藍の頭脳においては、あらゆる物事が高速演算される。

シンが冗談のつもりで思っていた、三途の川の川幅も図れるのではないかということも、藍は暇つぶしで実行してしまったらしい。

だからこそ、弹幕も、計算されつくした完全に近いものとなるのだそう。

しかも、明確に主人紫からの命令があれば、さらにその実力は主人と同等なものにまで上がるらしい。

そういう話を聞けば、シンにも段々と分かってきた。

スペルカードとは強弱は、力の強さで決まるのではない。おそらく、力も関わっているのだらうが、それだけではない。

頭の良さ……だけでもない。

いくなれば、もつと抽象的で概念的な、精神と呼べるものの強さが関わってくるのではないか？

スペルカードは何より無駄で、しかし美しい戦いだと誰もかれもが言う。

要は、いかに見事に、美しい弾幕を放てるかの勝負なのだ。

相手を負かすのではない。自分達がいかに華麗でいられるかが、スペルカードの戦いの決着をつけるのだ。

正直いって、かなり面白そうだとシンは思う。自分にスペルカードの撃ち方の見当もつかないのが残念だ。

自分の美しさで勝負をつけるなど・・・まるでミスコンな戦いもあったものだ。

だが、相手を負かすのではなく、自分達の能力を見せるという考え方は、参考になるのではないか？

紫は、平和のために勉強しろといった。

だったら、こういうところからも、くみ取るものがあるのではなからうか？と、シンは考えた。

大分話は逸れたが、要するにシンとしては、彼女妖夢は、そこらの妖精よりかはずっと好感が持てそうだった、ということだ。

「お嬢様がお待ちです。どうぞ、お進みください」

そういう妖夢についていき、シン達は、ゆっくりと白玉楼階段を上っていく。

改めて見ると、ゆさゆさ揺れる藍の尻尾が、柔らかそうだと、いか美味そうだと考えたり、前触れなく驚かせてくる小傘を小突きまわしたりするうちに、長い白玉楼階段も終わる。

だが、そこで白玉楼に到着というわけではないらしい。

白玉楼の敷地ではあるが、屋敷はまだ見えない。

ここは、白玉楼の庭だ。

きれいに並んだ石畳の周りには、数え切れない数の木が、規律正し

く植えられていた。

花に詳しくないシンだが、博霊神社でも同じ木を何本か見たし、先ほど白玉楼は桜のきれいなところだと言われていたので、すぐに分かった。

これは、桜の木だ。

何本もの桜の木が、この白玉楼を埋め尽くすように生えているのだ。今は秋口で、枯れた葉が落ちるばかりだが、春になり花が咲く季節になれば、さぞ美しい光景になるだろうということは、容易に想像できる。

「すごいなあ、これがみんな桜だなんて・・・こんなところ、俺初めて見たよ。春に来たかったなあ」

感嘆の声をあげるシンに、妖夢が、「ありがとうございます」と愛想良く返事する。

続けて、「屋敷はあちらです」と言う妖夢が掌で示す方向に、幽々子が住んでいるらしい白玉楼の屋敷が、桜の木の合間から見えた。最初に白玉楼階段を見たときの印象をそのままに引き継いだ、格調高そうな屋敷だ。

ここに住まう幽々子は、さぞお嬢様な性格をしているのだろう、と考えるのは、幻想郷以外でのことだ。

この幻想郷に限って、お嬢様と呼ばれる者に、まともなお嬢様がいるわけではない。

まあ、それはそれとして、近づけば近づくほど立派な屋敷だ。

平安時代には寝殿造りというものがあつたと聞くが、そういうものだろうか？

日本家屋の類の建築を見る機会自体が少ないということもあるが、シンは、かつてこれほどの屋敷を見たことはない。

なんともまあ、時代劇のような時代にタイムスリップしたような気分だが、それならまだまともな方だろう。

この屋敷は、あの世のあの世に建つ屋敷なのだから。

後に分かることだが、見事な枯山水の様相を持つ庭園を有するこの

屋敷に入り、妖夢の案内のもと、一つの部屋に案内されたシン達。そこにはすでに先客．．．ではなく、この屋敷の主である幽々子が待っていた。

たとえば、古き日本に、書院造と言われた建築様式があつたが、それを彷彿とさせる落ち着きのある部屋におかれた机の前に座る幽々子に、シンが、よそよそしく挨拶する。

「シン・アスカ．．．です。お邪魔します」

何事にも、礼は失せずというのは、この世の常識であり、あの世だと言える幻想郷でだって当てはまる。

シンのあいさつに、幽々子は座ったまま応じる。

「こんにちは」

「お座りになられてください」

次いで聞こえた妖夢の声に、シンと小傘は、幽々子に向かい合うように座った。

藍と橙は、幽々子の斜め後ろ三步くらいのところで正座する妖夢の隣で、同じように座っていた。

「あれ？あんだ達は？」

まるで自分達も幽々子の従者だと言わんばかりの姿に、シンがこう聞く。

藍は応えた。

「私達は客人じゃない。紫様の式であり、シン、あなたの遣いだ。

それに、紫様のご友人である幽々子様の前で、粗相のないようにしないかね」

「そ、そうはいうが、別にそんなとこに座ることはないだろ」

「それもそうだ、じゃ、あなたの隣に座るよ」

「あたしもー」

シンがちよつと言った途端に二人は、掌を返すように立ち上がり、そそくさとシン達と同じところに移動して、そこに座った。

態度が変わるのが早すぎる。粗相のないようにという言葉はどこにいったのだろうか．．．

まあ、誰がどこにどんな風に座っても、それでいいならそれでいい。

さて、いざ白玉楼に到着し、そこに住まう幽霊である幽々子と対面したのはいいが・・・

そこからどうすればいいのだろうか？

思えば、紫から、白玉楼に行けとは言われたが、そこで何をしろなどとは一言も言われてなかった気がする。

勉強するなら、最終的には自分で考え自分で行動する必要はあるが、それにしても、である。

切り出す話も思いつかないシンは、ぎこちない口調で、「あ、あの・・・」と漏らすばかりである。

それに対し幽々子が、「別にそんな恭しい態度じゃなくてもいいわよ？」と返す。

「そ・・・そうか？」

それならそれでいいのだが、態度を変えても話す内容がなければどうしようもない。

部屋の中に、えもいえぬ沈黙が漂っている。

このままではいけないので、いつそシンは、直接的なことを聞いてみることにした。

「なあ、ここで、何か勉強になるようなものってないのか？」

「べんきょうになるもの・・・？」

シンの言葉に、幽々子は、呆氣にとられたような、きょとした表情を浮かべた。妖夢でもある。

そりゃ、こういう反応も当然か。

勉強になるなんていう曖昧な表現をされても、何がどう、どういう意味で勉強になるのか言える者などそうそういないだろう。

せめて、何を勉強したいのか、何を知りたいのか言わなければならぬだろうが、シンにはそれも分からないのだ。

シンの曖昧模糊な質問に、幽々子は小首を傾げ、こう呟きつつ、しばらく考えていた。

「紫から、この白玉楼にあなたを行かせたという話は聞いてるわ」
そのまましばらく黙り込んでいた幽々子だが、結論がまとまったらしく、言葉を続けた。

「ここは死者の魂の住まうところ。だったら、死者から何か学ぶことがある．．．ってことじゃない？」

「死者から学ぶこと．．．」

結局、何を学ぶのかは分からないが、さすがのシンも、そこまで他人に考えさせるほど落ちぶれてはいない。

仮にも軍人。戦場の中で、確固たる判断を下し行動する戦士の端くれだ。

それに、世界に平和を作ろうとする賢者達の一員になろうと決意した身だ。

これぐらいのことも自分で分からないようでは、勉強も糞もない。

死者から何かを学ぶ。シンが知りたいこと、知るべきことを．．

「死者から学ぶ．．にしても、それなら、実際に死者の魂を見て話をしなきゃならない．．当分は、ここでぶらぶらしてることになるのかな．．」

そう呟きつつ、シンは、どこでもないところに眼を向け、たそがれていた。

どうも、これではいけない。

途方に暮れてたすがれている間は、大事なことは何も知ることができない。

そうは分かっているけど、たそがれずにはいられないシンは、突然、すぐ耳元で聞こえた声に驚かされた。

「あ！そーおそう！」

「うわっ！？」

小傘だ。

「な、なんだよ！今は驚かすようなタイミングじゃないだろ！」

そう怒鳴るシンに対し。

驚いてくれたのはうれしいが、そうではないと無言に前置きしつつ、

小傘が言う。

「そういえばさ。シンって、元の世界では何してたの？」

「え？」

「そうだ。そういえば聞いてなかった。シンは、外の世界で何をしてるんだ？」

言われてみればといった具合で、藍も続いた。

「．．．」

確かに、思えば、シンは彼女らに、元の世界での身分を一切話していなかったような気がする。コズミック・イラの世界についてもだ。自分が軍人であり、軍人として、平和な世界を作ろうとしているということは、話しておくべきことだろう。

随分と遅れてしまったが、シンは、今そのことを話そうと考えた。

「実は俺、軍人なんだ」

「軍人．．．兵隊ですね？」

そう聞き返す妖夢に、「ああ」と返事しつつ、続ける。

「俺の元いた世界、コズミック・イラは、簡単にいえば、遺伝子を改良した人々と、そうでない人々が地球と宇宙に分かれて生活しているんだ。そこで俺は、遺伝子を改良した方の人類、コーディネイターと呼ばれる人類の軍隊、ザフトの軍人をしてるんだ．．．自慢じゃないけど、新参者としては、大分いい立場にいたんだぜ？」

「遺伝子を改良？いじくってるってことか？それまたみようちくりんなことを」

藍のこう言う言葉も理解はできる。しかし。

「まあ、そう言うなよ。人類は、環境問題や人口増加を解決するために、宇宙空間に解決の糸口を求めたんだ。人類の生活の場とすることな．．．でも、宇宙で生きるって言ったって、簡単に言えることじゃないだろ？」

「私達だって、年がら年じゅう水の中にいると言われたらツライ。無重力って結構厳しい環境だからね。血流は安定しないし、使わない筋肉は弱まっていく．．．なるほど、そういう環境で生きていく

なら、遺伝子を変えて身体を強くするのも必要かもな」

こういうことになる、藍がいてくれて助かる。シンよりもずっと賢いのだから。

藍の相槌に、シンが続ける。

「少なくとも、最初のころのコーディネイターには、そういう事情があった。でも、その存在が明らかになってくると、もっというんな理由で、遺伝子を改造する人も増えてきたし、生まれる前から遺伝子进行操作するようになってった」

「でもそれって、ちよつと不気味じゃない？」

橙が言う。

「確かにそうかもしれない。でも、コーディネイターにとっては、特に、生前から遺伝子操作された人にとっては、それは当たり前のことなんだ。俺だってそうだし、でも、確かに、遺伝子操作をしていない人類、ナチュラルにとつては、不気味なことだったのかもしれないし、自分達よりもあらゆる能力が優れたコーディネイターは妬みの対象だったのかもしれない。だからって、それを理由に、差別と暴力が当然のようにまかり通るっていうのは、許せないことだ。それは絶対に言える」

「妬ましいからいじめてやれっていう考え方は、確かにどうかと思うわねえ……」

幽々子が言う。

シンとしては、大体のことをみなに説明するために話をしていたのだが、段々と、この話が、非常に重要なことをついているのではないかと思えてきていた。

改めて、コスミック・イラの世界を見つめなおすことで、何かが分かってくるような気がした。

声にして、言葉と文章にして再認識することで、見えてくるものもある、ということなのだろうか……

何も知らないみなに、正しいことを伝えるべく、自分がコーディネイターだからという意識も抜きに話をしているからかもしれない。

そういう考えを巡らせつつも、シンは続ける。

「一度暴力で訴えられたら、同じ暴力で対抗するしかない、つてのは、仕方がないのかもしれない。そうなると、もうどっちが先に仕掛けたとか、どっちが悪いのかつてのも関係なくなる。お互いを否定して、自分達が絶対に正しいんだと思いこんで、それで、戦争が始まった」

「戦争か．．．」

藍が呟く。

「自分が軍人である手前、こういうこと言つのもどうかと思うけど、戦争つてのは、酷い。何が正しいのか分からないまま、ただ、状況の一部になることしかできない。それもそうなんだよ。正しいことつて、何も無いんだものな。あるはずもない正義を見つけることなんてできやしない。だから、かりそめの正義を掲げて、それにすがるしかない。そうすることで、心が楽になる。麻薬やつてみたいに、何も考えることができなくなる。そして全てが終わった後に待ってるのは．．．」

愛する者、親しい者、関係の無い、名前も知らない多くの者の死。そして、痛みの麻痺したままボロボロになってしまった自分の心．．

最後の言葉を、シンは言えなかった。

喉につかえて、どうしても口に出すことができなかったのである。全身に電撃のような鋭い何かと共に悪寒が奔り、金縛りにあったような身体が動かなくなる。冷や汗が額を流れおちる。

顔をうつむけるシンの表情に落ちた影の暗さがそのまま、シンの心の暗さなのだろう。

これには、気楽で楽天的な幻想郷の妖怪達もさすがに、何がどうなっているのか分からずに戸惑うか、神妙な顔つきになるしかなかった。

「．．．シン．．．まさか、あなたも．．．？」

言えなかった言葉を聞き取ったらしい藍の声に、シンは静かに応え

る。

「そうだ．．俺もそうだった．．何かも間違ってたと気づいたのは、全てが終わった後だった．．．．自分のやっていることが絶対に正しいことなんだと、そう思い込んでいたところが、情けなくてたまらない．．．だけど俺は．．俺は！」

「．．．．．？」

「ずっと、頑張り続けてきたんだ．．正しいと思いこんだことを信じて．．それが、みんなを助ける方法だと信じて．．．．．だけどそれは．．みんな間違いだった．．．．．」

「．．分かったよ、シン、あなたの言いたいこと」

「．．だから俺は、俺達は今度こそ、正義なんてものにすぎなくともいいように．．人々が、無駄なことで必死になって、あがくこともないように、平和な世界をつくらなきゃならないんだ．．平和を作りたいんだ．．それが、俺が初めて、誰かの声じゃなくて、憎しみに縛られた気持ちでもなくて、穏やかな自分の心で決めた、初めての決意だったんだ」

そこまで言ったところで、シンは黙り込んだ。

彼らのいる空間に、しばし重苦しい沈黙が流れるが、それを、藍の声が破った。

「安心したよ。そこまで本気になってるなら、こっちだって協力する気分になる．．平和なんて言って、実際何のやる気もなかったら、あなたは何の答えも見つけられないまま、永遠この幻想郷に生きることになっていた」

その声にシンは、静かに応える。

「その通りだ．．平和のために何か得るものがあるのなら、ここで勉強する。だけど、いずれ必ず、元の世界に帰る．．．」

少なくとも、平和をつくるという決意は、生半可なものではない。そのためにできることならなんでもやるつもりだった。

だからこそ、本当に何か得るものがあるのか確信が持てなくとも、この幻想郷で勉強しようという気にもなったのだ。

そのことをシンは、言葉で表すことで、改めて認識することになった。

そこまではいい、のだが。

「でも、勉強するには実りがないとねえ．．．」

橙の言う通りであるが、そんなことを言い出したらきりがない。

何とかして、何でもいいから何かを知る必要がある。

が、その何とかしての部分が分からなければ、やはり意味はない。

どうも、これでは堂々巡りな気がする。

しかし。

「時間をかけるのが大事だと言っていた．．．急ぎ過ぎず、ゆつくりと、分かる範囲、できる範囲でやるべきことをこなしていく．．．平和っていう曖昧なものを求めるなら、なおさら、急ぎ過ぎちゃいけないんだ」

こう考えるだけの余裕も、シンは手にしていた。

とりあえず今は、幻想郷というところがどういうものか知ることがら始まる。

どういう妖怪達がいて、どう考えて生きているのか。

それを知っていく中で、分かることはあるはずなのだ。

だからこそまずは、この白玉楼に住まう幽霊達の姿を見、その心に触れる。

黙り込んでそう考えていた矢先、シンの耳に、幽々子の声が聞こえた。

「考えるのはいいけど．．．お腹空いてちゃ頭も回らないでしょう？」

「．．．え？」

「何事にも、腹ごしらえは必要でしょ？」

「それって要するに．．．あんだ、腹が減ってるのか？」

「そうそう、その通り」

「．．．．．」

重苦しい空気を破る言葉に、シンは、妙な気分になりつつも、幽々子の言う通りでもあった。

正直、シンもそろそろ空腹を覚え始めるころだった。

結論の出ないまま考え込んで座っているよりかは、まず何か喰う方が、行動的なのも確かなのかもしれない。

妖夢が言う。

「そう言うと思ひまして、すでに準備はしておきました。秋の風物詩、焼き芋ですよ」

PHASE - 7 『記憶』

人は死んだ後、どこにいくのかは、生きている間に分かることはない。

だが、死した命の尊さは、分かる。

人の命がなくなろうと、その命が残した記録は確かに残り続けるし、記憶もまた、思い出として人の心に遺り続ける。

もしかしたら、死した者の魂は、どこにも行かないのかもしれない。その思い出は、ただ、心の中に在り続ける。

腹が減ったという幽々子のために、皆で焼き芋を作ろうということになった。

白玉楼の庭の一角に集まった一同の前には、妖夢が掃除して集めた、本気で山になつていような無数の枯れ葉と、これだけで何日かは喰うのに困らないのではないかと数々のサツマイモがあった。焼き芋をつくるための串と、火種も用意しているので、準備は万端だ。それにしても．．．数だけは多い。

「そりゃあ、俺だって焼き芋は嫌いじゃないけど．．．これはやりすぎじゃないか？数が多すぎるよ．．．」

呆気にとられるシンの声に対して、次いで放たれた幽々子の言葉は、少し信じられないものだった。

「ちよつと足りないわねえ．．．」

「い？」

足りないって、何が足りないのだろうか？

まさか、これだけ大量の．．．ミネルバのクルー全員で食べても余りあるのではないかと思えるほど大量の芋で焼き芋をつくっても、喰い足りないというのだろうか？

なんなのだろうか？もしかして、幽々子以外にも、たくさんの幽霊が焼き芋を喰いにくるのだろうか？

訳も分からず固まってしまったシンを見向きもせずに、幽々子にはこやかに続ける。

「というのは冗談よ。これだけあれば、わたしも満足満足」

その声に、シンは安心する。

どうやら、ただの冗談だったらしい。

だが、幽々子は今しがた、『わたしも』と言ったわけだが、それはそれでどういう意味なのだろうか．．．？

まあ、とりあえず、そろそろシンも腹が減ってきた。早速作れるだけ作っておこう。

サツマイモを串刺しにして、枯れ葉の一部を少しだけ集めてそこに火をつける。

乾燥しきった葉は、一度火がつけば、後はよく燃える。

秋口に枯れ葉は多いし、数だけは多くとも、使い道はほとんど燃やすだけだ。だったら、せいぜい盛大に全部焼き払ってしまおう。

後は、火が消えない様に、かつ、大きくなり過ぎないように適当に枯れ葉を継ぎ足しつつ、芋を焼いていけば、しばらく後には焼き芋の完成だ。

随分と簡単なものだが、これでも喰えるし、結構美味しいものだ。

シン達は、芋が焼き上がるまでの間、枯れ葉の山から赤々と燃える火を眺めていた。

そして、ふと頭の中に思い浮かんだことをシンは、幽々子に聞いてみた。

「そっぴや、ここって、死者の世界なんだよな．．．俺達みたいな

生きてるヤツが入るのって、どうなんだろう？」

「さあ？」

すでに焼き芋のことしか考えていない様子で、曖昧に返事する幽々子に代わって、妖夢が応えた。

「確かに、平然とあつていいことではないんですけど。でも現に、生きている者も容易に冥界に入れるようになっていきます」

「だけどそれって、死者の世界と、それ以外の世界の区別がつかないじゃないか・・・たとえば、生きてる人間がずっとこの白玉楼に住むようなことになったら、どうなる？」

「分かりません・・・もしかしたら、生と死の境界があいまいになつてるのかも・・・」

「要するにさあ」

話に割って入る小傘の声に、シンも妖夢も、すぐさま彼女の方に振り向いた。

「生きてるのが死んでるのが分かんないってことでしょ？」

その声に、さらに藍も続く。

「あるいは、生きてても死んでもどっちでもいい。ということか？」

「どっちでもいい・・・か・・・」

生きていても死んでいても変わりがない、だから、どっちでもいい。妖怪とは・・・少なくとも、今までのシンの中の考えでは、妖怪と幽霊はほとんど同義の言葉だった。

二つの共通点は分かりやすい。どちらも、実在しているのか分らない曖昧な存在だということだ。

妖怪も、幽霊、人の魂というものも、言葉で語られてはいながらもそれが本当にあるのかは分からないものだった。

この幻想郷に、それらが実際に存在しているというのは分かったが、それを踏まえてだ。

シンも段々と理解してきていた。この世界には、シンの世界において、伝説や幻でしかなかった存在が生きている。だからこそ『幻

想郷』か．．．

それこそ、存在としての命があるのかも分からない、曖昧なもの。混沌とした世界が、この幻想郷だ。

そこにある数少ない違い、生者と死者の違い。それが今、無くなるうとしている、というのか？

「曖昧で不可思議なものが、本当の意味で一つになろうとしている．．．」

無意識に呟くシンに、藍が続く。

「元にあるべきものに戻っているのか。あるいは、間違った方向に進んでいつているのか．．．」

「あんたでも分からないのか？」

「そりゃあ、幻想郷に生きてれば幻想郷の何でも分かるってことでもない」

「それもそうか．．．」

シンだって、自分いるの世界のことをほとんど理解できていないのだ。

幻想郷においても、それは同じことなのだろう。

そうこう話をしている内に、そろそろ芋が焼き上がる頃合いになっていた。

試しに、串焼きにされた芋の一本を取って、皮を剥いてみる。

「あつっ．．．これならもう十分だろう、焼けた焼けた」

皮をむいて出てきた中身は、いい具合に黄色く焼けて、湯気を立ち昇らせていた。

世の中には、見てるだけ美味そうなものもたくさんあるが、それは、事実美味いからだろう。

「．．．．．」

「．．．．．」

橙と小傘が、よだれを垂らしながら、シンの手元を眺めていた。火にあたらない様に取りれるようにと刺しておいた串を抜き差しつつ、

シンが言う。

「お前らの分はちゃんとあるんだから、俺のを見てることはないだろ」

そう言った矢先、シンの持っていた焼き芋が、誰かにくすね取られた。

幽々子だ。

「あ、ちよっ．．．言ってる傍から」

「ごめんなさいねえ」

シンとしては、幽々子にはそれなりにおしとやかそうな雰囲気は感じていたし、今もそうだと言えた。

よもや、人のものを横取りするようなヤツだとは．．．

まあ、別に他にも嫌というほどあるのだから悪くはないが、それならなおさら、わざわざシンの持っているものを取り上げることはないだろう。

そういう部分は、さすがに癪に障る気分だった。

しかも、シンの分だけではない。

幽々子は、シンから取り上げた焼き芋に口をつけつつ、他の串焼きも燃える木の葉の山から引っぱり出していた。

「な．．．なんて横暴な喰い方．．．」

シンも、さすがに呆れそうになった。

確か、藍から幽々子は喰い意地が悪いとは聞いたが．．．こういうことだったのか．．．

それにしても．．．

「ふむ．．．はふ．．．あふっ、あつい」

幽々子は、いちいち美味そうに焼き芋を頬張っている。

リスみたいに頬を膨らませて、口の中から湯気を立ち昇らせている。いかにも、喰うことが幸せそうな顔をしているものだ。

そういう顔を見ると、非難する気もなくなる。

前述通り、串焼きはまだあるし、それ以前に、まだ焼いてない芋だ

って多いのだ。

幽々子に取られたところで、怒るようなシンではない。

残った串焼きの一本を抜き取りつつ、シンは言う。

「改めて、俺達も喰うか」

「そうしよう」

「いただきます」

「うらめしやー」

「うらめしやってなんだよ」

改めて喰ってみると、焼き芋というのも美味しいものだ。

ただ焼いてるだけのはずなのに、中々に甘いのだ。

また、芋なんだから当然だが、妙にパサパサしてるような食感も、いいものではないか。

「うまつ・・・うらめしやっ」

「だからうらめしやってなんだよ」

これは、いい腹ごしらえになると思いつつ、そういえば、こういうものを喰うことも、最近は滅多になかったと、シンは考えていた。軍人になつてからは、芋を焼くような機会なんて、当然ながらほとんどなかった。

自惚れではないが、シンは、新兵としては、もともと優秀な者達である赤服として扱われ、新造艦のMS要員、しかも、新型に乗り込むエースパイロットとして配属された。

それから、戦い以外にすること、できることはなかった。

そして、全てが終わった後も、ザフトの軍人として犯した多くの過ちへの償いのために、まともな人生を歩むことなどできなかった。

だが、軍人となる以前。軍人となる決意をする以前には、家族達と焼き芋をつくるわけではないが、いろんなことをしてきた。

自然に触れる機会もあったし、料理をつくる手伝いだって、何度かやった。

純粹に、余計なことを考える必要もないような、楽しい記憶もあった。

た。今はもう、昔のことだが・・・

どうも、この幻想郷に来てから、妙にセンチメンタルになってるな・

焼き芋を頬張りながらシンは、ぼんやりとそう考えていた。

しかしそんな考えも、すでに四、五本目の焼き芋を食べ始めている幽々子の姿に、頭の中から吹っ飛んだ。

「な・・・なあ、そんなに喰って大丈夫なのか？」

恐る恐るシンが聞く。

幽々子は、平然な顔で答えた。

「大丈夫じゃなきゃ食べないわよ」

「それもそうか・・・」

「あと倍くらいは食べられるかもしれないわ」

「・・・」

言葉を失うシンだが、実際に幽々子は、倍は愚か四倍近い量をぺろりと平らげてしまったので、さらに絶句することになる。

しかも黙々と、一心不乱に食べるものだから、彼女はもしかしたら腹に何か無いと死ぬ体質なのかとすら疑ってしまう。まあそんなことはさすがになかう。幽霊だし。

ひとまず、それだけ喰ったところで、幽々子も腹八分ほどで満足したようだ。

シン達も、二、三本喰えば、それで十分すぎるほどだった。

山のように積まれていた枯れ葉も、大方燃え尽きて、随分とすつきりした。

サツマイモはまだちょっと残ってあるが、まあそれを今この場で喰う必要はない。

「残った分は、また今度食べましょう。サツマイモを使った料理というにはたくさんありますから」

妖夢の言葉を聞きつつ、シン達は、ちょっと胃もたれしそうな昼食を済ませた。

腹ごしらえも済ませたことだし、本題に入りたいところだが、腹が減っては考えことができないとは言うが、逆に、食事をした後では、胃に血がいくせいで、いまいち考えることができない。

「何か食べた後には、散歩するといいのよね」

そういう幽々子に従い、シン達は、白玉楼をぶらぶらと歩きながら、適当に考えを巡らせることにした。

桜というのは、秋になると、いまいち誰も見向きしない。

もみじやイチヨウの樹が、色鮮やかな葉を見せる時期だからだろうが、しかし。いざ、桜に囲まれる白玉楼の庭を歩いていると、単なる枯れ葉だって、それはそれで魅力的な感じがある。

華々しいだけが、きれいで美しいというわけではないのだろう。

そうこう考えながら、ぶらぶらと散歩するシンの眼に、殊更大きい、というか、大きさの度合いが違う桜の巨木が見えた。

まるで、白玉楼の全ての桜が、単なるお供でしかないような、ある種異様なほどの巨体を誇る桜だ。

これほど大きな桜の木は、シンも見たことがない。まったくもって幻想郷には初めて見るものばかりだ。

山のように大きく、根をしっかりと大地に這わせている幹からのびるいくつもの枝は、まるで巨大な血管のようにさえ見えた。

そこから生えるいくつもの枯れた色の葉に混じって、桃色の花が垣間見ることができたのは、単なる錯覚でしかない。

だが、咲かないはずの花が咲いているように見えるほどの生命力が、この桜にはあった。

まるで、人一人、いや、それ以上の命を養分にでもしたようだ。そうでなければ、こんなに大きな、生き生きとした桜の木にはならないのではなからうか？

「あの桜、おつきい」

感嘆詞を先に小傘に言われたシンは、それにおっかぶさるように、「そうだな」と相槌を打った。

その声に、妖夢が、説明口調で語る。

「あの桜は、西行妖といって、この白玉楼の庭でもっとも大きな、いえ、この幻想郷でもっとも大きな桜です．．．白玉楼の象徴のよな、素晴らし桜です」

その声に、幽々子が続く。

「でも、こんなにでつかいくせして、満開にはならないのが情けないのよね」

「満開に？」

「そうよ。幻想郷中の春をありったけ集めても、満開になる気配も見せなかったわ」

「春を、集める．．．？って？」

また訳の分からないことを言った。

おうむ返しをしたシンに、妖夢が応える。

「桜の花びらのような春の力の一つに集めて、西行妖に与えたのです。博霊神社の霊夢とかその他もろもろも、協力．．．ではないけど、春を集めてきてくれたので、相当な量の春は集まったはずなんです、それでも、西行妖は満開することはありませんでした」
幽々子がおっかぶさる。

「冥界と外の境界がなくなったのに、この桜が満開にならないってのは気に入らないわ」

「．．．．．」

春を集めるといふのはよく分からないが、西行妖とかいうこの桜が、どうあがいても満開しない桜だということは分かった。

要は、完全に管理整備された環境の中でも、咲かない桜ということだ。

さらに分かりやすく（はない）言えば、常人の十倍のカロリーを摂取するのに、まったく太らない人間と言ってもいいかもしれない。

それって幽々子のことではないか．．．彼女は幽霊だが。

そういう状況が普通でないことぐらいは、シンにも分かる。ここがシンの常識においては何一つ普通ではない幻想郷であることを踏ま

えてだ。

「そんな変な桜なら、無理に満開にさせることはないだろ」

シンの言葉に、妖夢は応える。

「確かにその通りですが．．．あの桜には、何者かが封印されているらしいんです。そしてその者は、西行妖の満開と共に現れるという話なんです。それで当時は、封印を解くためにも、春を集めていたんです」

「封印．．．ねえ。封印してるものも、無理して解くことはないんじゃないか？」

「まあ、そりゃそうなんですけど」

シンは改めて、奇妙なる西行妖の姿に目を向けた。

世の中には、シン達のいる世界も、幻想郷も関係なく、多くの謎に包まれている。

そして、その謎を解明しようという心を持つものが現れるのも当然のことである。

だが、その謎が解き明かされたとき、待っているのは何なのだろうか。

プラントのかつての主導者にして、シンを戦いに駆り立てた張本人であるギルバート・デュランダルは、地球に巣くう戦争商売人口ゴスの正体という謎を解き、世界に知らしめた。

その末に待っていたのは、二度目の全面戦争と、デステイニープランという名の野望の始まりだった。

謎を解き明かすことで、世界は未曾有の混乱に陥ったのだ。

結果としては、戦争を引き起こす存在を消し去ることはできたが、そのために流れた血の量は量り切れない。

謎を解明した先に待っているのは、混乱と哀しみかもしれない。

シンは、まるで人が樹の姿になったような生気を放つ西行妖に、何か、大いなる悲哀がこめられているように思えた。

理由は分からないのだが、呼ばれたような気がしてふと振り向いて垣間見た藍の表情には、何かを知っているような雰囲気があった。

そう考えつつ、西行妖を眺めているのもやめ、再び歩き始めたシン達だが、突然聞こえた声に、一同ぴたりと立ち止まった。

「そろそろおやつ時間だわ」

幽々子だ。

「さっきあんなにたくさん。腐るほど喰ったのに、まだ喰うってのか？」

これにはさすがに、シンも本気で呆れかえった。

彼女の胃袋には何が住んでいるのやら・・・

まあ、だが、小傘や橙も、何か食べたそうな顔はしていたので、散歩を適当に切り上げて、屋敷に戻ることにした。

ということ、先ほどいた部屋に戻って、お菓子やらなにやらを喰うことになったが、ここでも幽々子の異様な喰い意地は発揮される。この白玉楼には、幽々子と妖夢以外、住人はいないらしく（庭には幽霊が多くいたが）、ということは、幽々子の世話をしているのは妖夢だろうし、普段の食事をつくるのも妖夢の仕事だろう。

バキュームカーのように飯を喰う幽々子の食事を一体どうやって作るのか考えなくなったが、すこし考えたところで、あまりにかわいそうだったのでやめた。

さて、適当な間食も済ませたシン達だが、また散歩をする気にはなれなかった。

とりあえず、屋敷の中で、まんねりとしていることにした。

適当な空き部屋の中で、この前のように、橙とじゃれついたりする。「必殺、もふもふ殺しだ」

面白半分で、藍の尻尾に包まれたときは、その言いようのない素晴らしい感触に、「これ・・・すげー！これすげー！柔らかすぎて死ぬ！」と歓声をあげるしかなかった。

「う・・・うらめしい、じゃなかった、うらやましい・・・」

そうこうしている内に、とうとう日も暮れていく。

結局、いまいち勉強になることは得られなかったが、来た価値はあったのではなからうか。

今のところは、幻想郷というところを見て回るだけでいいのだ。急ぐ必要はない。

今晚は、屋敷の中に泊めてもらうことになった。

至れり尽くせりだが、いつまでもここにいるわけにもいかない。

明日になれば、適当な時間にまた出発しよう。

行くあてはないが、近場に何か面白いところがないか藍に聞いて、応えてもらったところに行けば、それでいい。

そろそろ幻想郷の雰囲気にも慣れてきた。

シンとしては、一刻も早く元の世界に戻らなければならないし、今幻想郷に留まっているのも、平和をつくる勉強のためだ。

だが、少しぐらい、幻想郷見学を楽しむ程度の気持ちはあってもいいはずだ。

そう考えつつ、シンは、床を整え、眠りにつくことにした。

が、ある時、鼓膜を揺さぶった声に、眠りを覚まされることになった。

「ねえ、起きてよ。シン、起きてよ」

小傘の声だ。

まだ夜が更けて間もないという時期であるはず。

こんな時に、一体何だというのだろうか・・・

不愉快そうにしながらも、シンは、目を開けた。

そこに飛び込んできたものは。

「ばあーっ！！」

大声をあげながら、視界いっぱい迫る小傘の顔と、その周りに漂う幽霊だった。

うす暗い中で、発光する幽霊に、小傘の顔が不気味に照らされた。

「うおっ!？」

突然のことにシンは、身ぶるいして驚いた。

その様子を見た小傘が、愉快そうに笑う。

「あははは！また驚いた！」

「じよ、冗談じゃないぞ！こんなことのために俺を起こしたのかよ。お前だって、眠いんだつたら、こんなことするなよ」

「ごめんごめん、謝るよ。謝るけど、あたし達は妖怪はさ、なんでか知らないけど、あんまり寝なくてもいいんだよね」

「それはそうかもしれないが、人間はな、寝ないと疲れるんだよ」

「そういうもんなの？」

「そうだよ、まったくさ・・・」

とんだ迷惑だ。

今ので眠気もすっかり吹き飛んでしまった。今すぐには寝付けそうにないので、仕方なくシンは、また眠くなるまで待つことにした。

しかし、ただじっとしているのもあれだ。

「お前のせいで寝れなくなっちまった・・・そこらへん散歩するか」

・ お前も付き合えよ」

そういうシンの言葉に、小傘は、「分かった」と返事する。

二人は、夜の白玉楼庭園に繰り出していった。

すでに夜更けのはずだが、庭を照らす光は妙に明るかった。

庭に住まう幽霊が発光し、明かりになっっていることもあるし、この幻想郷の月は、シンのいる世界の月よりも、特別明るい気がした。

しかも、太陽のような、刺すような光ではなく、目を閉じれば消えてしまいそうな、穏やかな光であった。

だから、明るくとも、眩しいと感じることはなかった。

不思議なのが、太陽のように目に痛い光でないから、直視することできる月の姿だが、あまりに長く見過ぎていると、妙な眩暈がしてくることだ。

満月も近いとい時期の、ほとんど円形に見える月を見てみると、気

分が落ち着かなくなる。

直視しなければ、特別何かあるわけではないから、要は見なければいい話だが、シンは、この幻想郷の月には、何か特別な力があるのではないかと思えた。

そんな月の光に照らされながら、淡く照らされた庭を歩くシンは、小傘に一つ聞きたいことがあった。

なぜ彼女は、やたらと自分を驚かせようとするのか、ということだ。人を驚かせるのが好きらしいが、シンに対しては少し過剰である。今回ばかりは、彼女の驚かせ癖にも、怒りを通り越して興味を持ったシンは、一度はつきりと聞いてみることにした。

「なあ小傘、お前。何でそんなに俺を驚かせようとするんだ？」

その問いに、小傘は応える。

「だって、シンは何度も驚いてくれるんだもん。嬉しいから、こっちも何度も驚かせるんだよ」

「いや、お前が人を驚かせてうれしいようなヤツだったのは分かってるんだ．．．だから、どうしてそこまで人を驚かせようとするのか、知りたいんだよ」

「うらめしいから、って言うのはどうかな？」

「馬鹿にして．．．いや．．．そうなのか．．．」

人が、世がうらめしいから、うらめしやと言って驚かせるというのも、納得できる話だ。

要は、昔のシンと同じなのだ。

だが、そう言う小傘当人の顔は、世を恨んでいるような顔には見えない。

だが、シンとしては、彼女の言葉が嘘ではないようにも思っていたのだ。

「何かあったのか？．．．昔．．．」

そう聞くシンに、小傘は応える。

「あたしね、実は、捨てられた傘の妖怪なの。センスが悪いってね」
「それで、その捨てた人間に復讐するために、脅かすようになった

のか？」

自分の不幸に対して、他人への復讐で気持ちを晴らすとする気持ちは、シンも、身をもって理解している。

小傘も、同じようなものなのだろうか・・・

だが、シンの言葉に対する小傘の言葉は、彼が考えていたのとは少し違うものだった。

「昔はそうだったけど、今はそうでもないね」

「そうでもない、って？」

「最近、人のことうらめしいと思ってたって、気持ちが落ち込むだけだったのが分かったからね。だったら、妖怪ってのは人を驚かすものだから、妖怪らしく、人を驚かせようって思うようになったの。そしたらね、人を驚かせることが、妙に楽しくなってきたの」

「復讐を果たすこともできていないのにか？」

「そうだよ」

「・・・そうか・・・」

シンは思った。

やっぱり、同じなのかもしれない。

いや、違う。

シンも、復讐を己の生きる目的にしていた。

だが、そのために入った士官学校の中で、彼は多くの友人をつくった。

その中で、荒んだ心が、少しだけ和らいだ気がした。

恨みではない。もっと別の何かのために戦いたい。そう思うようになった。

しかし、仇敵であるフリーダムとの邂逅で、再び憎しみの炎は燃え上がり、彼は、相手を殺すことだけを考えるようになった。

しかし、それを実際に果たし、絶対的な自信を得て、『ハイ』と言えるほどの状態になったシンの心の奥底には、言いようのない虚しさがあった。シン自身がそれを自覚できるようになったのは、戦争

が終わった後のことだが．．．

仇を倒した後でも、家族は帰ってこない。後に残ったのは、今考えればあまりに滑稽な、意味のない虚勢を張り周りを馬鹿にする自分の姿だけだった。

だが、復讐を果たした瞬間、フリーダムを仕留めたその瞬間。胸の中にあつたものが取れ、天に昇るような気分になつたのをシンは今でも覚えてるし、今でも、その時の気持ちを否定することはできない。

自分の人生の目的を達成できた喜びを、少なくとも感じることはできたのだ。

だが、その後に、どうしようもない虚無感と、それに抗うための虚勢が心を満たしたのは確かだった。

今度こそ、新しい自分の生きる目的を求めようとしたシンに待っていたのは、ギルバート・デュランダルから託された、プラント最高の兵士である特務隊の称号、F A I T H だった。

後にそれは、デステイニープラン実行のために、シンを手駒にするためのデュランダルの策略だったことが分かるが、当時のシンは、自分がザフト軍の代表として、プラントの未来を担うことができるのが、ただ嬉しかった。その気持ちは、今でも変わらない。

シンは、プラントの兵士として誇りを持ち、自分にその誇りを与えてくれたデュランダルのために一心に戦った。

結果的に、それは間違いであつたのだが、それを承知で、シンには、その時の自分のひた向きさを否定するつもりはなかった。

あの時のシンの心の中には、フリーダムを倒した時にも感じなかった、もっと別の、輝かしい何かで満たされていたのだ。

それが、自分の良心さえ麻痺させ、混乱させ、狂暴な感情を引き出すことになつたとしても、シンは、その輝かしい何かが悪いものではないと、今でも信じている。それが何なのかは、今でも分からないが．．．

何かに対し一心に、ひた向きになる力が、あの時のシンにはあつた。

シンは、キラの考えに尊敬を抱いているが、一つだけ受け入れることができないことがある。

それは、キラが、敵の兵士を意地でも殺さないことである。

人の命の尊さは分かるし、それを無闇に奪おうとしないことは、素晴らしいことだ。

だが兵士というのは、例外はあっても、戦いの中で死ぬということを受け入れて、それを覚悟して戦っているのだ。

自分の戦いが、命が、世界をよりよくすると信じて。

死して世界を変えようと考えているのだ。

それは、戦争が生みだした狂気なのかもしれない。だが、どんな形であれ、世界をよくしようとする気持ちは、次の世代が、自分達のように狂気にとらわれないことがないという願いではないのだろうか。

それだけの気持ちを持って、兵士は戦いに臨んでいる。

何もかも間違っている戦争に対する、最大の抵抗として。

それでも、キラは、絶対に兵士を殺そうとしない。

四肢をもがれたMSに乗って、むざむざ生きているという屈辱、あるいは、いづどこからか放たれた流れ弾に撃ち抜かれるかも分からない恐怖の中に取り残される気持ちは、どれほどのものなのだろうか。

敵を殺せ、相手を呪え、そう心に念じその上で、罰を、裁きを一身に受けると覚悟しておきながら、結局生きている身が感じるのは、どのような気分なのだろうか。

まだ若いシンには、それほどの心を持つことはできないが、長年軍人として役目を果たし、自分の職務を誇りにしているベテランを何度か見たことがある。

そして、キラに完膚無きまでに打ちのめされ、戦争が終わっていく様を傍観することしかできなかったシンが、あの時流した涙は、何

もできないまま、ザフトの役にも立てず、自分の信じる者のために戦い抜くこともできなかったことの悔しさから流れたものだった。これなら、生きていたって仕方がない．．．と。

もしかしたら、他の兵士も、同じことを考えていたのだろうか？

シンは、今でもそう考える。

しかし結果として今のシンは、平和のために生き残ることを決意し、生きていけることを感謝した。

だが、ある時キラが放った言葉に対して、シンは、戦場で彼と邂逅した時以上の、静かな怒りを込めて、反感を現した。

「戦争は人々を狂わせる．．．間違った正義のために命をかけるなんて、いけないことなんだ。だから、狂気に取りつかれた人々の命は、奪ってはいけない」

その言葉に、シンは返す。

「あんた、分かっているのか？兵士はみんな、自分達が間違った正義のために戦ってるってこと、薄々だけど、分かっているんだよ」

「え．．．？」

「だけど、それでも、その正義のために戦い抜くことで、何かがいい方向に進んでくれるって．．．世界が少しでも良くなるって、信じて戦ってるんだ．．．例えそこで自分達が死ぬことになっても、いつかみんなが、自分の死に応えてくれる、報いてくれるって信じてるから．．．だから、死だって受け入れることができるんだ．．．あんたは、それを分かって。いけないことだと言い切るのか？」

「．．．．．」

「戦争は間違ってる。でも、そこで戦う兵士達が間違ってるなんて、絶対に言わないでくれ．．．みんな、一人の人間として、何かを変えするために戦ってるんだ」

「．．．．．」

キラには、返す言葉がなかった。

小傘は、あの時のシンと同じようだ。だが、どこかが違う。何かが自分の生きる目的を見つけて、それを素晴らしいものだと思える。盲目的になりながらも、突き進む。

だが、自分と小傘は、何かが違う。

小傘は、途中で、自分の心で復讐の心を捨てたことだ。

それと、シン自身が、小傘の言う人を驚かせようという目的には、シン自身のときと違い、虚しさや、悲しさを感じなかった。

誰かが掲げた正義を信じるしかなかった悲しさを、感じなかったのである。

「人を驚かすのが好きになってきたから、驚かすのか・・・でもさ、だからって、どうして俺ばかり相手にするんだよ」

そう聞くシンに、小傘が遠慮がちに応える。

「いや、正直言うとき。あんた以外驚いてくれる人なんて、いないんだよ」

「そうなのか？」

「そうよ。誰もかれも、うらめしやうって言うぐらいじゃ驚いてくれないし、暴力に訴えたら返り討ちに会うし・・・」

「いや、うらめしやうって言うぐらいじゃ誰も驚かないだろ。それに、暴力に訴えるのも駄目だ」

「そうだねえ・・・そうなんだろうけど、難しい話だねえ」

「そういうところを、努力するんだろ？頑張れば少しは、いろんなヤツを驚かせるようになるさ、頑張ればな」

シンとしては、幻想郷で初めて出会った妖怪であり、今までこの短いなからもの旅路についてきてくれた小傘の事は、変なヤツとは思っているが、嫌いではない。

むしろ、彼女からは、妙な親近感を覚えていた。

だから、シンは、表ではツンケンしつつも、小傘のためなら協力しようという気分でもあったのだ。

「俺もここに居る間は、助けてやるさ。だから、頑張れ」

斜に構えつつも、そうまで言ってやれる人の良さがあるのが、本当のシンの姿なのだ。

シンの言葉に、小傘は、シンが驚いた時以上に嬉しそうな顔をした。純粹にうれしいとしか思っていない、やましいことの何もない笑みだった。

「分かったよシン！あたし、会うヤツがみんな腰抜かすようなすごい妖怪になって、幻想郷中を驚かせてやる」

「いや、それは無理じゃ・・・」

「いや、やれるはずだよ、やるよ！」

「・・・はっはは！はははは！そうか、やれるか！」

自信満々に応える小傘の姿に、シンは思わず噴き出した。

何でもできるつもりでいるらしい小傘に、昔の自分の姿が重なって、可笑しかったのかもしれない。

いや、そういうのとも違う。もっと純粹な意味で、愉快だったのかもしれない。

肩を揺らして笑いながら、シンは小傘の頭を掴むようにして撫でまわした。

「あっははははは！」

つられて小傘も笑いはじめる。

そのまま、他愛のない話をしながら白玉楼庭園を歩いていたシン達だったが、まるで導かれたように、とある場所にまで来ていた。

見間違はずもない。

白玉楼の中のもっとも大きな桜、西行妖の前に、いつの間にかシン達は訪れていた。

何故この桜の前に来てしまったのかは、見当もつかない。

シンは、突然頭の中が真っ白になって、ぼーっと、眼の前の現れていた巨大な桜の姿を眺めることしかできなかった。

そして、真っ白になった頭の中に、はっきりと、その姿が焼き付い

たのである。

幽霊の放つ淡い光と、幻想郷の月のある種妖艶なまでの光に照らされ、西行妖は、夜になって一層、その偉容をたたえていた。

巨大な血管のような幹と枝から感じる生命力はより一層強くなっている。

まるで、夜こそが、この桜の目覚めの時であるように。

夜になると映えるなどとは、まるで妖怪みたいな桜だ。

ぼんやりとそう考えながらシンは、静かに、しかしどこか活き活きと佇んでいる西行妖を眺めていた。

そんな中、背後から声が聞こえてくる。

「興味があるようだな」

藍の声だ。

ハッと彼女の方に振り返ったシンに、藍は続ける。

「お望みなら、この桜の本当の在り様というものを、あなたに教えてあげるが」

「え？」

本当の在り様？

本当の、姿ということか？

「どういうことだ？」

そう聞くシンに、藍は応える。

「あなたの考えている通りの意味だと思う」

「この桜の正体・・・か？」

「うん」

「また、どうして今になって？」

「さあね・・・そこそこだけど、私もよく分からない。バグだね、バグ。でも、何でもかしくないけど、あなたに話たくなった。多分、紫様も許可してくれると思う」

「そうか・・・」

「そつだよ。だけどシン。話す前に、あなたに一つ聞きたいことがある」

「なんだよ」

「幽々子様と、仲良くなれそうか？幽々子様のこと、好きになれそうか？」

西行妖の話をする前にと語られた藍の問い。

何故そんな質問をしたのかは分からないが、シンはこの問いに対し、自分の正直な気持ちを答えた。

「まだ会って間もないんだ。好きになれそうとか、そんなこと分からない．．．でも、嫌いじゃないと思う．．．俺、短い間だけど、今までこの幻想郷でいろんなヤツに会ってきたし、ロクでもないヤツもいっぱい見たけど．．．嫌いなヤツは一人もない。この幻想郷なら、その気になれば、多分どんなヤツとでも仲良くなれると思う．．．だから、幽々子とだって仲良くなれると思うし、好きになれるとも思う．．．そうとまでしか言えない」

「そうだね．．．それでいいんじゃないか？」

「どうして、そんなこと聞いたんだ？」

「さあねえ．．．何だろう．．．」

そこまで言ったところで、少しの間だけ黙り込んだ藍は、しばらくした後、「この話、他の誰にも話さないでね、私達だけの秘密だ」と前置きしてから、語り始めた。

「シン、あなたは、この桜から、何かを感じなかったか？」

「何かを．．．？．．．まるで、人の命を養分にしたような雰囲気を感じた」

「その雰囲気、あながち間違いないかもしれないんだ」

「どういうことだ」

「この桜の下には、多くの人の命が眠っている。この桜の下を死に場所を選んだ人達がね．．．美しく咲き誇るこの桜に魅せられた人々が、桜の下で眠ることを望んだんだ．．．そして、そんな者達の死を経て、桜はますます大きく、美しく咲き誇った．．．まるで、人の命を吸い取っているように．．．この西行妖は、妖怪の桜なんだ」

「．．．．．だけど、この桜、満開にならないんだろ？そんな桜が、美しいからって、人の命を吸い取ったりするの？」

「満開にならないことにも理由がある．．．実は、この桜の下には、幽々子様の亡骸も眠っているんだ」

「．．．．．何だって．．．？」

「紫様は、あの方の死により桜を封印し、まるで、幻想郷の全ての命を魅了し、吸収するように成長する西行妖を止めた」

「な、何でそんなことを．．．いや、この桜が人の命を吸い取るような危険なものだとして、封印するのはいい。けどなんで、幽々子の亡骸で封印するんだよ」

「あの方が．．．死を望んだからだよ」

「え．．．？」

「あの方の、人を死に至らしめるという能力は、彼女の周りに生きる人々を、そしてあの方自身の心を苦しめた．．．周りにいる人々が、みな死んでいくんだ、訳も分からずに．．．あなたなら、どう思う？」

押し量って余りある。

「．．．．．それで．．．死を？」

「自分が死ぬことで、周りの人達が死なずに済むなら、とね．．．幽々子様は、若くしてその命を断った．．．式である私には分からないけど、死ぬことが怖くないわけがなかっただろう．．．」

「だけど、彼女は．．．」

「そう、幽霊として、この世に留まっている．．．彼女が死に至らしめた者達の霊達の庭、白玉楼と共にね．．．何故あの方が幽霊としてこの世に留まったのか、何故白玉楼にあの方が住むようになったのか、それを説明するのは、今はよしておく」

「あの人の昔には、そんなことがあったのか．．．」

シンが初めて西行妖を見たときに感じた雰囲気の原因が分かった。藍は、全て知っていたわけだ。

しかし、正直なことを言えば今の話は、幽々子の暢気そうな風貌か

らは、想像もつかないことだった。

藍の口から放たれた言葉も、正直嘘のように聞こえる。

いや、そうではない。

シンの中で、何かが弾けるように、考えが思い浮かんだ。

悲しい運命に翻弄される者は、その心も悲しく暗くなる。

だが、初めから暗い心を持っている者などいわしない。

幽々子は救われたのだ、死して、幽霊となることで。

嘆くことしかできなかった自分の人生への決着をつけることによつて、彼女の心は救われ、何も気に病むことがないようになり、ああいう、自分の本当の性格を取り戻すようになったのかもしれない。

「シン．．．？」

「話した甲斐があつたみたいだね」

小傘がどうしたという具合にシンの顔を覗き込む傍から、藍が言う。

死をもって救われる、か．．．

シンの脳裏に、閃光のように何かが奔った。

記憶だ。

それほど遠くもないはずなのに、ずっと前のことのように思える記憶が、シンの網膜の裏側で、鼓膜の裏側で、心の中で蘇ったのだ。いつしか聞いた言葉、友の記憶が。

レイ・ザ・バレルは、シンの人生の中での最初の親友だった。

若くして青春を捨て、復讐に走ったシンが、初めて敬意を抱いた相手だった。

同期でシンと同じザフトレッドになり、同じミネルバのクルーとして配属された。

彼は、不遜で怒りやすいシンに対して、あくまで冷静沈着だった。

シンは、自分に無い何かをレイから感じていた。個人的な感情に突き動かされるシンを、彼は度々制止した、あるいは、励ました。

それらが、心の荒んだシンの助けになったことは確かだろう。

レイは、自分の心をうち明けるようなことはしてくれなかった、というか、彼の心を読み取ることができなかったが、シンは、レイのことは、誰よりも頼りにできると思っていた。

そんな彼も、今はもういない者になってしまったが・・・

そんなレイが、ある時、シンに語った言葉だ。

それを聞いた当時は、シンには、レイの言葉の真意を確かめることはできなかった。

だが彼が、寿命を司るテロメアが短く、命が永くないこと。そしてそんな命自体が、デュランダル野心を叶えるために、半ば作弄的につくられていたことを知った今なら、レイの言おうとしていたことは、なんとなくが分かる。

それは、シンが、レイと共にFAITHとなった、その日のことだった。

シンのいた部屋に前触れなくレイがやってきて、シンの同意を得ると、ベッドの上に腰掛けた。

相変わらず、何を考えているのか分からない顔をしていたレイだが、少しうなだれるように腰を落ちつける彼からは、初めてレイから感じる何かがあった。

そのまま、視線を床のどこかに落としたまま、レイは言った。

「シン・・・俺は、死んだ後どこにいくんだろうか」

「・・・え？」

「俺達は兵士だ。いつ死んでもおかしくない。だが、戦場で死んだとして、俺達の魂はどこにいくのか、それを考えたことがある」

「・・・そんなことを考えるなんて、お前らしくないじゃないか」

「そうかもしれない．．．だが、俺だって人であり、一つの命だ。こ
ういうことを考えることもある」

「そうか．．．俺には、分からないな。死んだら、何処にいくなん
て．．．」

「生きている間には、分かるはずがないのだから、仕方がない、俺
だって分からん．．．だが、だとすれば何故俺は、分かりもしない
ことを考えているのだろうか、とも考えていた」

「．．．難しいことを考えてるんだな」

「．．．これは俺の個人的な考えだが、きっと、自分が死んだ後、
どこにいくのかを知って、心を安心させておきたいからなのだと思
う．．．天国に行けると分かれば、安心して死ぬこともできる。生
きている間には、どれほど苦しかろうと、命を全うすることができ
る．．．そうは思わないか？」

「．．．よく分からない．．．でも、死んだ命が、最後の最後には
救われるって言いたいなら、その考え方はいいぜ」

「そうなのか？」

「そうだよ。死んだ後にも苦しいままだと、あまりにも救われない
だろ？」

その言葉は、家族と、先輩、そして恋人をことごとく失ったシンだ
からこそ言える、純粋な気持ちだった。

シンの言葉に、少し熱のこもった眼差しと共に、彼の方を振り向い
たレイには、哀しみのようなものを感じた。

何がどう哀しいのかは、その時のシンには分からなかったが．．
レイは、呟くように言う。

「．．．人は、どんなに苦しい人生であろうと、いつか救いがある
と、それを信じられるから、生きていくことができる．．．逆に言
えば、何の救いもなければ、生きていくことさえできない．．．そ
ういうことなんだな？」

「．．．そうなんだろうけど、ちょっと違うかもしれない．．．救
いがないと分かったなら、もっと別の何かを求める、と思う．．．

俺は、そう思うと思う．．．でも、きつとそんなことはないさ。人の命は、きつと救われるはずだ。俺やお前が戦場で死んでも、いつかきつと救われる。俺はそう信じてる」

家族も、ザフトレッドの先輩であるハイネも、恋人のステラも、みんな救われている。

それこそ、シンの心からの言葉であり、願いであり希望であつた。そんな純粋な言葉を聞いたレイの眼から、炎のような熱が消えた。その代わりに、柔らかくやさしい光が灯つたように、シンには見え

た。

その時シンは思った。

レイが、自分の心を語ってくれたのか．．．と
「そうだな．．．俺も、信じてみようと思う．．．それを信じて、兵士として、俺としての役目を全うする」

言いながらレイは徐にベッドから立ち上がり、シンの部屋を後にしようとした。

そして、ドアの前に立つその背中が言う。

「感謝する．．．シン．．．ありがとう」

「レ、レイ？」

頭の中での追憶でしかない言葉。

だが、今の一瞬、シンには、その言葉が、初めて聞くような、レイの静かで穏やかな声が、すぐ耳元で聞こえたような気がした。

思わず彼の名を呼び、辺りを見回すが、当然、レイがいるはずがない。

いるのは、戸惑った眼をこちらに向ける藍達だけだ。

「どうしたの？」

そう聞いてくる小傘に対し、シンは慌てて、「いや、何でもない．．

．何でもないよ」と応える。

今のはただの幻聴だ。

そう納得しつつもシンは、もう一度、幽々子が眠っていると知った

西行妖に眼を向けた。

なるほど．．．まるで、ではない。本当にあの桜は、人の命、魂によって咲いているのだ。

魂の庭である白玉楼の中で。

静かに佇む巨大な桜の木を眺めつつ、シンはもう一度、頭の中で、レイの言葉を響かせた。

後にキラ達から教えられたことだが、レイは、とある男のクローン人間であいい、その男が果たそうとした野望を叶えるために生きている、いや、生まれてきたと言ってもいいかもしれない。

テロメアが短いのも、その影響なのだろう。

彼は、その男の遺志を受け継ぎ、野望を、デステイニープランへと昇華させたデュランダルに、我が子のように育てられたという。

そして最後には、彼の手駒として兵士になったのだ。

レイもまた、デュランダルの事を信じていた、信じるしかなかった。その心は、シン以上に固いものであり、ひた向きで、だからこそ哀しかった。

だがレイ自身、デュランダルへの信頼を信じていながらも、その心の奥は、苦しかったのかもしれない。

与えられた使命ではなく、自分の心で、人生を選択したかったのかもしれない。

救いを求めていたのだろうか。

そして、絶対にデュランダルを裏切ることのできないレイにとっての救いは、死ぬこと以外になかった。

そしてレイは、本当にその命を散らせたのだ。

しかし、キラが言っていた。

最後の最後に彼は、自分の本当の心を語ったと．．．

レイの魂もまた、死ぬことによって救われたのだろうか．．．彼の心は、どこかへ旅立ったのだろうか．．．

シンには、何も分からない。

だが、一つだけ言えることがある。

レイは確かに生きていた、そして、シンの友人になったのだ。その思い出だけは、今もシンの心の中で生き続けている。

——よく来てくれたな、少年よ——

「・・・っ!？」

突然、頭の中で声がした。

今度は間違いない、あの声だ。

シンが元の世界で気を失う直前に聞いたあの声。

それがまた、直接心に呼びかけてくるように聞こえたのである。

シンは、追憶の中から抜け出し、我に返った。

そして、未だに西行妖の方に向いていたその眼が大きく見開かれる。

西行妖の前に、一つの人影が見えたのである。

さっきまで西行妖を見ていたはずなのだが、あんな人影はあったか？

まるで、今さっき出現したようだ。

幽霊か？だが、それにしても姿がはつきりしすぎている。

しかしはつきりといっても、シルエットだけである。何故かは分からないが、細かいディテールまでは捉えることができず、ぼんやりとしか見ることができなかった。

しかし、男のようであるのは確かなことのようなのだ。

小傘達も、その姿が見えているらしい。

もしかしたらあの人影が、声の主なのだろうか？

今のシンには、そうとしか考えられない。

「おい！あんた！」

急いで、その人影に駆け寄るシン。小傘達も後を追った。

だが、近くまできたところで、人影は、ふっと見えなくなる。

シン達の視界には、間近に寄ってきた西行妖の大きな幹しか見えな

くなつた。

「な、何なんだ．．．今のは？」

立ち止りつつ、啞然とした様子になつたシンが呟くのと、同時だつた。

——私の存在を確かめたか？シン・アスカよ——

「う．．．っ？」

「誰の声．．．？」

あの声が、まだ聞こえる。

どうやら、小傘達にも聞こえているらしく、彼女の声も小さく聞こえた。

今一度辺りを見回すシンだったが、やはり、藍達以外に人の姿はない。

幽霊の姿は多く見えるが、先ほどの人影は気配もない。

だが、声だけは依然聞こえるのである。

——分かるかシン。この地には、多くの幽霊が住んでいる。穏やかに、あるいは無念の内に死んだ、多くの幽霊達がな．．．その存在を見て、何かを知ることができたか？——

「な、何を．．．？」

——お前の求めるもの、知るべきことを、知ることはできたか？だが、それが全てではないはずだ．．．まだ、知るべきことはある——

「あんた、一体何者なんだ．．．！？」

——シンよ、今しがたお前の感じていた想い、心を忘れるな．．．もう、お前の中で心は決まっているはずだ．．．後は、それを信じるがいい．．．——

「．．．はっ！？」

背後に、何かを感じた。

言いようのない、『気』のようなものを。

咄嗟にそちらを振り返つたシンの眼に、先ほどの人影が映つた。

シンの、すぐ目の前に立っている。

眼の前で見ることによって、その男の顔を見ることができた。まだ、ぼんやりとしか見ることができないが．．．

やはり、シンの初めて見る顔だったが、どこことなく、レイに似ている気がした。

声も、最初に感じたように、レイの声に似ている。

「．．．まさか．．．っ!? あんた!」

何かに気付いたようにシンが叫ぶのと同時に、人影は、浮き上がるように空に上つていき、そして、空気に溶け込むように消えてなくなった。

心に直接語りかけるような声も、もう聞こえない。

「なんだったの? 今の．．．」

さすがに戸惑っている様子の小傘がそいう。

その声は、シンには聞こえなかった。

彼は、ただじっと、あの人影が消えた空を眺めているばかりだった。それしかできなかった。

あの声、そしてあの人影の正体．．．あれは、もしかしたら．．．脳裏に浮かんだ考えに対して、結論を出すことも、今はできなかった。

ただ、あの声が最後に言った言葉。

それが、頭の中で何度もエコーとなって反響し、シンの心を震わせていた。

心は決まっている．．．か。

そうかもしれない。

平和を願う決意。自分のように、戦争に取りつかれて、自分を見失うような者達を増やさないという決意。そして、そのために、この幻想郷で学べるものは学ぶという決意。

シンの心は、もう揺るがない。

追憶の中で聞こえたレイの言葉も、後押ししてくれている。

「……レイ、もう苦しむこともないなら、見ていてくれ。あんたと議長がつくることのできなかつた平和を、俺達でつくってみる……それを見ていてくれ……」

そう呟くシンの声は、とても小さくとも、天高くまで昇っていった。心がすつとするのを感じた。

そこでようやく、「シン！返事しなさい、こら！うらめしや〜！」と何度も呼びかける小傘の声も聞こえた。

シンはその声に返事する。

「なんだよ」

「さっきの人影といい声といい。一体なんだったの？」

「そんなの、俺だって知らないよ」

そう応えるシンに、藍が続く。

「私も知らないな。誰だ今のは」

その言葉は嘘である。

藍達は、幻想郷にやってきた彼の者の存在も知っていたし、今の声は彼のものだった。

だが、彼の存在をこちらから話してはいけないという命令なので、話すことはしない。

シンもまた、知らないとは言いつつも、何もかも知らないというわけでもなかった。

彼の考えが正しければ、先ほどの声の主は、世界に混乱を振り撒いた、大罪人であるはずだ。少なくとも、記録の中ではそうなっている者だ。

だが、その確証を得ることは、今のところはするつもりはなかった。

あの声の主が誰なのか、そんなことは、今はどうでもよかった。

ただあの声があったこと。自分の心を信じて、そして学べ。

今はただ、それを実行するだけだ。

それに、

「そんなことより、そろそろ本気で眠たくなってきた・・・屋敷に戻って早く寝よう・・・」
ということだ。

人間は、生まれてから死ぬまでずっと起きておくことはできない。

眠ることと一日というものを終え、また新しい一日を迎える。

そして、生まれ変わるように、目を覚ますのだ。

明日をもらったなら、その明日を迎えるために・・・

シン達はとりあえず、白玉楼の屋敷に戻ることにし、今度こそシンは、床に入って、眠りについた。

明日をもらったのだ。

改めて、知るべきことを知るために、幻想郷を旅する、明日を・・・

翌日、適当に朝食を頂いたシン達は、また別のどこかへ向かうために、冥界を発つことにした。

幽々子達も、快くシン達を送ってくれた。

「お達者で、またいらしてください」

「次来た時は、なんかお土産もってきてね」

相変わらず、幽々子の態度は暢気なものだった。

が、苦しそうな顔をするよりも、ずっと幸せそうには見える。

幻想郷の夜は妖艶なほどに美しいが、朝焼けもまた、元の世界のよりも、きれいに感じた。

旅の再開にはもってこいの朝だ。

「それじゃあ、機会があったら、また会おう」

「はい」

「いつてらっしゃい」

幽々子達に別れを告げて、シン達は出発した。

レイ達、戦争で死んでいった者達に報いるために。
彼らの願う救いを、自分達でもたらすために。

PHASE・8『ザフトレッド』

世の中、十歩歩けば世界が変わるかもしれない。

地球など、実際のところとても狭いところであるはずなのだが、得てして隣の国家に住む者達の生活はどうなっているのかと聞かれても、容易には答えられないものだ。

ましてや隣の大陸とまでなると、見当すらつかないことも多いはずだ。

世界全体で、人々の生活の様式が変わるなら、身近なところだけで、違いはあるはずだ。

人間は、眼に見える範囲でしかものを見ることはできない。

眼線のすぐ後ろで何が起っているのかすら、見て確かめない限りは分からないのである。

人種、国家の違いから、個人の違い。

世の中には、ありとあらゆる環境が存在しており、それぞれの環境で生きる人々の、それぞれの考え方もある。

さて、白玉楼を発ち、旅を再開したシン達だったが、実際のところ、行くあてはなかった。

幻想郷のどこにどんなところがあるのかシンには分からないから、どうしようもない。

このままでは、最初の、当てもなくふらついていたところと同じになっってしまう。

それではいけない。なら、紫から言われていたもう一つの死者の世界、彼岸まで言ってみるか？彼女はいく必要はないと言っていたが、

そう考えている最中、小傘が言った。

「行くあてがないなら、あたしに付き合ってもらってもいいよね」
「ん．．．？ああ．．．何だ？」

何事だという具合にシンが聞き、小傘が応える。

「あたし、人を驚かせる修業をしたくてね」

「しゅぎよお．．．ふっ、はははは！」

突然、橙が噴き出した。

それにのっかるように、肩を揺らせて笑いながら、藍が言う。

「人を驚かせるのに修行って．．．ふふ」

他人の戯言と言った具合の藍に対し、小傘は、いかにも癪に障るといった顔をして、続ける。

「いっとくけど、本気だからね。あたしも妖怪として、成長したいわけよ．．．ねえ？シン」

突然聞かれたシンは、曖昧に、「あ？ああ．．．」と応えておいた。どうやら、昨夜の出来事は、小傘にとっては予想以上に心動かされるものだったらしい。

シンとしても、ふざけて言っただけはなかったので、小傘がその気になったというなら、約束通り協力するつもりではあった。

平和というものは、まずは他人を助けることにこそある。こういうことも、勉強になるはずだ。

それはそうと、

「で、一体どうするっていうんだ？」

そう聞くシンに、小傘が応える。

「地底に言ってみようと思うの」

「地底に？」

橙が聞き返す。

シンとしては、地底なんてところに聞き覚えはなかった。言葉自体は知っているが．．．

「地底って．．．なんだ？」

シンが藍に聞き、彼女が応える。

「まあ、名の通りの地の底．．．いくなれば、地下世界だ．．．そこには、この地上に住む妖怪とは違う、地霊と呼ばれるもの達が住んでいる」

「地霊って．．．どんなヤツだ？」

「正直、あまり会いたいと思うような者達じゃない。昔、地上に多くの災厄を振り撒いたから、地下に追放されるような妖怪ばかりだ。地霊の人達には悪いけど、望んで会うような連中じゃないね」

「迷惑．．．ってわけか？」

「そう言っていていいかもね」

二人の会話に、小傘が割って入る。まあ、この話の当事者が彼女なのだから割って入っても何も悪くないのだが。

「そういう、迷惑で誰もかれもビビらせるような妖怪なの。それって、まさしく妖怪の鑑かがみとは思わない？」

「思わない」と橙。

「なんともいえない」とシン。

最後に、藍が返す。

「別に地霊は妖怪としての力が強いというわけでもないし、人を驚かせるような力がわるわけでもない。まあ、そこらの妖精よりかは一緒にいると怖いかもしれないが．．．」

「だから、その怖い部分から勉強して、あたしの妖怪としてのスキルを高めようっていうの」

「すぎる、って．．．ふはっはははは！」

またしても橙が嘖き出す。

どうも、幻想郷の住人は、他人を小馬鹿にしているところがある。そういうところはただだけないと思いつつも、シンとしても、今の小傘の台詞には笑いそうになった。

小傘がスキルなどと言うと、理由は知らないが妙におかしい。

藍が言う。

「正直、地霊から学ぶようなものなんて何もないと思うけど」

しかし、他にやることもないのも確かだ。

「でもまあ、お前が行きたいってんなら、行ってみてもいいかもしれない」

シンの言葉に、一同賛成だった。

地底に住まうという地霊がどういう者達なのか知りたい気持ちもある。

ひとまず、次なる目的地は、地底ということになった。

「地底なら、行く道を知っている、巨大な洞穴から、中に入れるんだ」

という藍の案内の下、シン達は、地底に向かうべく歩き始めた。

地底に向かって歩くシン達だったが、途中で、大きな湖のある森へと来ていた。

そういえば、地底へ向かう道程は、マヨヒガから白玉楼へと向かう道を後戻りするような道のりだった。

地底の場所はマヨヒガから遠いのだが、少なくとも最初のうちは、シンが以前見た光景をもう一度見ることになった。

この湖は初めて見るところだが。

大分大きな湖だ。何か住んでいても不思議はないほどに。

しかしまあ、所詮はただの湖だし、今のところはここに用はない。湖の外周に沿って歩けば、何の問題もなかった。

森の木々から覗く陽光を反射して輝く水面を眺めながら、歩き始めたシン達だったが、あまりに突然のことだった。

「ここで会ったが・・・えっと、ウン年目だわ！」

シン達の脇に立ち並ぶ草木の間から、声が響いた。
初めて聞く声ではない。

確か、いつか聞いた声だ、この幻想郷で．．．
いつどこで聞いた誰の声なのか思い出したシンは、思わず「あ、あ
いつかよ．．．」と呻いた。

同時に、草木の間から、複数の人影が飛び出してきた。
妖精が５人ほどだ。

そしてその中に、やはり、シンの見覚えがある者がいた。
水色の髪に、背中からは氷のような羽が見える。

氷の妖精とかいう、チルノというヤツだ。

マヨヒガから白玉楼へと向かう最中に会った馬鹿な妖精の内の一人
だ。

有無を言わず弾幕勝負を仕掛けてきたが、あの時は、小傘が無事
に追い払ってくれた。

そいつが、今度は仲間らしい妖精を大勢連れて現れた。

まさか、この界限はチルノ達の住処なのか？

木々の間から飛び出して、シン達の行方を塞いだ妖精達の中で、チ
ルノが叫ぶように言う。

「この前の借りを返して、あたいの強さを思い知らせてやる」

「．．．藍、やってくれ」

こんなヤツと面倒事を起こしたくはない、ここは、あいつの相手は
藍に任せておこうと、彼女に呼びかけたシンだが、それと同時に、
チルノが言う。

「弱虫ー！あんた自分で戦いなさいよ！」

「な、なんだと！？」

弱虫と言われると癪に障るが、しかし、シンにはスペルカードを使
う技術はない。

こんな挑発に乗るつもりはなかった。

が、続けてチルノが言う。

「こんなこともあるのかと、今度は仲間を連れてきたわよ！」
仁王立ちして叫ぶチルノ。

その隣に立つ、緑色の妖精が言う。

「ね、ねえねえ。ホントにやるの？あの人達強そうだよ？」

その声に、チルノが噛みつくように言う。

「だーいじょうぶだって！言うほど強くないって」

「でもチルノちゃん負けたんでしょ？」

「あの時はあの時よ！ほら！いけ！」

チルノに押されて、他の妖精達も、しぶしぶながら、その気になったようだ。

各々、藍達を相手にするつもりだ。

万一にも藍達が負けることはなかるうが、いくらなんでも、5人の妖精を3人で相手しきることはできないだろう。

となれば、嫌でもシンは、チルノと戦うことになる。

なんとということだろうか．．．スペルカードも持っていないのだから、弾幕勝負ができるはずがない。

「お、おい、藍。どうする？」

さすがに焦った様子で聞くシンに対し、藍は平然とした顔で応えた。

「なに。スペルカードと言ったって、力で放つものじゃない。要は、相手を打ち負かせるだけの力をもつ弾丸を放てれば、それがスペルカードとなる．．．たとえば、この小石とかも、使いようではスペルカードだ」

そう言いながら、身体を屈めた藍は、地面に落ちていた小石を拾い上げる。こぶし大よりちょっと小さいぐらいの石だ。

同時に、藍の相手をするようになった2人の妖精が、同時に弾幕を藍に対して放った。

数が少ないうえに、ひどくパターン化された軟弱な弾幕であっても、二人分、二倍の量があつては、回避は容易ではないはずだ。
しかも、これではほとんど不意打ちではないか。

有無を言わずというわけか。

だが、小石を拾い上げると同時に藍は、迫りくる無数の弾丸をことごとく回避した。

当たらない弾に対しては無闇に動かず、必要最小限、それこそ、身体をちよつと逸らしたぐらいの動きで避ける。

場合によつては、派手に動かない方が安全なのがスペルカードだ。そして、絶え間なく飛来する弾丸を曲芸でもしているような動きでかわしながら、その合間をぬって、「ほれ」と、拾った小石をシンの方に投げ渡した。

それを片手で受け止めつつシンは、続く藍の言葉を聞いた。右手が握った小石からは、奇妙な熱のようなものを感じた。

藍の力がこめられているのか？

「その小石に、式神をつくるような要領で妖気を纏わせておいた。威力としては、スペルカードといってもいい。ただし、弾数はその一発のみ」

「こ、こんなのいいのかよ。ルール違反じゃないのか？」

襲来する弾幕を次々回避し、どう見ても質問できるような様子ではない藍だったが、シンとしては、こう聞かずにはいられなかった。

藍は、ほとんど回転しているようにしか見えない壮絶な動きとは裏腹に、涼しい声で応えた。

「ルールを決めるのは、当事者達だ。スペルカードの戦いに、お決まりの枠組みなんてものは存在しない」

「当事者達・・・か」

その声にシンは、自身の前方で臨戦態勢に入っているチルノに眼を向けた。

「この前はよくもやってくれたわねえ、今度は本気だからね！」
などとのたまって息巻いている。

なるほど。双方の合意さえあれば、スペルカードなどといっても、結局何でもありというわけか・・・

しかし、なんでもありだからといって、本当になんでもしてしまうわけでもないのが幻想郷の妖怪達だ。

弾幕勝負に明確なルールがあるとすれば、一番は、余裕をもつことだ。

シンは、藍の戦いを何度か見るうえで段々と学んできた。

弾幕勝負の勝敗を決するのは、余裕だ。

最後まで余裕をもっていた者が勝利し、少しでも焦りを見せれば敗北する。

玉碎覚悟、などとはもつての他だ。

シンが初めて橙と勝負したとき、シンはあの時すでに負けているのと同じだったわけだ。

ならば今度は、余裕をもつて事に臨む。

そう意識して、心に落ち着きを持つていると、眼前で仁王立ちする氷の妖精も、大したことのない相手に思えてきた。

この前藍が彼女と戦ったときも、彼女の弾幕なら、容易にかわせるとシンは確信していた。

「なあ、俺、スペルカードが使えないんだ。だから一つルールを決めさせてもらうぜ」

そう言うシンに対しチルノが、「あん？ 一体何かしら？」と、小馬鹿にしたような口調で言う。

もともとシンがスペルカードを使えないことを知っていたらしく、彼を御しやすい相手だと思っているのだろう。

が、シンからすれば、滑稽なものだった。

低い身長でせいぜい威張って、精いっぱい見下すような視線をつくるチルノに対して、シンが言う。

「俺の使うスペルカードは、この小石一個だ．．．こいつでお前を倒せなきゃ、進退極まって、俺の負けだ」

そう言って、右腕に握った小石をチルノの方に向ける。

それを見たチルノは、腹を抱えて笑いだした。

「あひやつはははは！そんなのでこのあたいに勝とうなんて．．
ひ、ひひ！バツカじゃないの！」

「バカはお前の方じゃないのか？」

「な．．なにいゝ！？」

「いいからかかってこいよ、自分の馬鹿さ加減を思い知らせてやる」
「こ、こ．．こいつうゝっ！？」

シンの挑発に見事にのったチルノが、弾幕を放つ。

氷の結晶、あるいはツララのような弾幕だ。

チルノは、冷気を操る妖精である。

そして、余裕を持てば勝てるのが弾幕勝負なら、逆に言えば、冷静でない状態では勝てないというわけだ。

妖精というものは、さして弾幕が上手くないらしいが、その理由が、シンにはよく分かった。

妖精は、頭に血が上りやすいのだ。

だから、多少計算された弾幕であっても、少しつづけば、あっさり崩れてしまう。

今にしてもそうだ。

シンの挑発にバカみたいに（バカだが）頭に血が上ったチルノの弾幕は、何の計算もされていなかった。

これなら、目をつぶっても回避できるという確信をシンが持てるほどの単純な攻撃だった。

相手にそうとまで思われる時点で、チルノの勝利はないといっても問題ないだろう。

狙いが見え透いているし、敷き詰められる弾幕の間隔も広い、これなら、それこそかわす必要すら感じられなかった。

中空に水玉模様が浮かび上がるように放たれた弾丸の合間を縫って、シンがチルノに向かって駆けだす。

数十発に一発くる直撃コースの弾丸だけ、飛びのくようにかわしつつ、チルノの懐に迫る。

「うえ？な、なにいゝっ！？」

意表をつかれたようなチルノの声が響く。

弾幕勝負で至近距離を取ることがいかに脅威的かは、すでに橙との戦いで知っている。

案の定、チルノの精神にさらなる揺さぶりをかけることに成功し、弾幕がさらに薄くなつた。

その様子を、2人の妖精からの弾幕を軽々回避しつつ、藍も垣間見ている。

「シン、上手いぞ!」

シンの予想以上の弾幕のセンス、というか、戦闘のセンスは、驚くべきものだった。

外の世界では軍人をやっていたという話だが、この分では、相当な腕前だったに違いない。

妖精二体分の弾幕を優々と回避している藍も相当といえば相当のものだが...

シンに何の問題もない、むしろ、思つて以上に強かに勝負を決めれそうなのを確かめた藍は、呟く。

「さて?そろそろこつちも攻めるとするか...」

弾幕を回避しつつ、袖を合わせて隠していた両の手をぱつと出し、印契のようにいろいろな形で次々と指を組み合わせていた。

「我、所持する処に八雲紫の力在り。見様見真似の質実剛健、向こうに見せるは四面楚歌...それ、喰らえ!」

別に意味のない台詞と共に、右腕を開いて一人の妖精の方へと突き出した。

同時に、そこから、一条の鋭い光線が奔り、弾幕を蹴散らしながら、まっすぐに妖精の身体へと伸びた。

ただ一条の青白い光線、しかし、優れた外科医の打つ注射針以上に正確に放たれたその一撃が、妖精に命中しないわけがなかった。

「うそっ!?!うへえー!」

見えたときにはすでに目前。藍の放ったレーザーの直撃を受けた妖

精の身体が、スパークのような光をまき散らしながら、大きく吹っ飛ぶ。

殺傷能力は無に等しいスペルカードであっても、痛いときは痛いものだ。

吹っ飛んだ勢いのまま地面に激突し、妖精は事切れるように気を失った。

さて、残ったもう一人といえば、まったく倒せる気配もない相手が、片手間ぐらいの感覚で仲間を仕留めてしまったものだから、完全に戦意を失いつつあった。

「どうする？今なら逃がしてやってもいいぞ」

そんな時に藍からこんな台詞を聞かされれば、従うほかなかった。元より藍にとつては無いに等しかった弾幕が、完全に停止する。

勝負は、藍の完勝だった。

そして、もう一方・・・

「さて、シンはどうだ？」

「もらったーっ!!」

チルノのほぼ至近にまで近づいたシン。

ここからなら、石ころ一発、簡単にぶつけられる、絶対に外さない。右手に握られた藍の力でスペルカードとして強化された石ころを、思いっきり投げつける。

ほんの数mの距離から放たれたら、余程の反射神経が無ければかわせないだろう。

ましてや、心境的に油断しきったチルノがかわせる道理など、あるはずがなかった。

シンが投げつけたその次の瞬間には、小石は、チルノの額に強かに命中していた。

「いいーっ!？」

しかも、ただぶつかっただけではない、藍の力で強化されたスペル小石が、ただのちよっと硬いくらいの石ころで終わるはずがなかつ

た。

石の中に凝縮された妖気が一気に発散される。点のようにぎゅうぎゅうに圧縮された妖気が一瞬で膨張する。その反動が、エネルギーの爆発となってチルノの顔面で爆ぜた。

「ぎやはっ!!」

笑い声のような悲鳴を上げながら、チルノの身体が、仰け反れるように吹き飛ぶ。

地面に強かに背中を打ち付け、顔からは煙のように妖気の余韻を立ち昇らせるチルノは、寸前のところで気を失うことはなかったが、少なくとも、弾幕勝負などとは言っていない状態ではなかった。

「な、なんでえ〜。っ!？」

仰向けに横たわったまま呻くチルノに対し、シンが言う。

「喧嘩を売るんなら、まずはそれなりの力を身につけるんだ。でない、と、今みたいに返り討ちに会うだけだぜ」

そう言って、へらへらと笑った。

チルノとしては憤慨の極みという様相だったが、今しがた負けたばかりの身では、返す言葉もない。

「ほら、さつさとどっかいけよ」

「ぐ、ぐぬう〜。っ」

「あの人の言う通りよ! ほら、逃げるの!」

シンの言葉のすぐ後に、大人しく降参した妖精達がチルノの方に駆け寄り、気絶した妖精共々身体を抱えて、そのまま脱兎のごとく森の中へと逃げていった。

向こうも向こうで少しかわいそうな感じもするが、あっちが喧嘩をふっかけてきて、シン達はそれを買ったにすぎない、まあ、自業自得だ。

自分の行動でどんな目に会うのか考えていなかった向こうも悪い。それに、こうも完璧に勝つと、さすがに気分がいい。

戦争に反対し、戦いを嫌う心を持つと思いつつも、相手を負かすことは、少なくとも嫌な気分ではなかった。

戦いに勝つということは、自分の立場を有利にし、実力を自他ともに認めるということだ。

それに優越感やカタルシスを感じないのは、人間では少し難しいことだ。

場合によっては、また新しい勝利を求め、相手を蹴落とそうと考える場合だってあるし、そう考える気持ちを否定し切ることはシンにはできない。

シンだって、数年ほど前には、同じようなことを考えていたのだから。

勝つことに何の快感を感じず、ただただ相手の立場に立って戦いを考えられるのは、キラぐらいの、ある意味人間を超越したほどの者ぐらいだろう。

それはともかくとし、さて、藍は圧勝、小傘と橙も、まず負ける気配もなかった。

なにより、シンである。藍から小細工を施されていたとはいえ、チルノのスペルカードを回避したのは、単にシン自身の能力だった。

藍が感嘆の声をあげるのも納得できるほど、シンのグレイズは完璧に近いものだった。

「すごかったな、シン。あなたの戦い方」

そう言う藍だが、シンとしては、藍の方こそすごいと言えた。謙遜ではなく、どうひいき目に見ても、シンでは、藍の力のつま先にも及ばないだろう。

が、しかし、藍は妖怪である紫の式であり、彼女の能力のほぼ同等の力を発揮する藍と、幻想郷の人間以上に平々凡々なるただの人間であり、スペルカードのことなど知ってもいなかったシンとの違いとなると、話は別である。

藍は、シンと同じく人間であり、弾幕勝負に無頼の（？）強さを持つ者を何人が知っているが、シンに関しては、その者達以上の『セ

ンス』を感じた。

戦いのセンス。しかも、戦闘を遊びにした今の幻想郷から、失われつつある、実戦的なセンスを、である。

妖精達が失せ、改めて地底へと向かおうとするシン達だったが、その前に、藍はシンに聞いた。

「あなたは、外の世界では軍人をやっていたそうだけど。その分なら、相当の実力だったんじゃないか？」

「え？」

シンが、皮肉抜きに、そうだろうかという具合の声を返す。

「武勇伝ってやつ、あるんでしょう？それ、聞かせてほしいな」

「武勇伝って．．．どういう風な戦いをしてきた．．．ってことか？」

「あ、それ、あたしも聞いてみたいな！。驚くべき武勇伝ってヤツ」
小傘がおつかぶさる。

「そうだな．．．」

武勇伝などとは言いが、シンとしては、あまりいい気分はしない思い出である。軽々と話す気分にはなれなかった。

だが、小傘達が聞きたいというのなら、シンは、ザフト軍の赤服としての自分の戦果について語った。

思えば、仇であり最悪の敵であったフリーダムの出現さえなければシンは、ザフト軍のエースパイロットとして申し分ない戦果をあげることができていただろう。

フリーダムのせいで戦場が混乱し、大きな戦果をあげることとはできなかったが、それでも、シンは続く戦闘の中で、高い潜在能力を少しずつ覚醒させていった。

その撃墜数は、フリーダムの介入があつたとしても、当時のザフト軍では最多のものであつただろう。

彼に匹敵するのは、レイと、数人の元ザフトレッドの兵士ほどのものだが、後者の場合、多くは階級が上がり、左官クラスの昇格、例

外はあるとも、前線に出ることは少ない。

そう考えると、やはりシンこそが、当時のザフト軍の最高級の戦力であったのだろう。

しかも、フリーダムが存在もまた、シンの能力を高める要因ではあったのだろう。

ヤツを倒すために、シンは全ての力を注力した、勝利するために、合理的な戦法を考え出し（レイの多大な協力もあった）それを実行できるだけの操縦技術も身に付けた。

そして実際にフリーダムを撃墜することに成功する。

そこからのシンの成長は、不気味なほどであった。

極限の高性能を実現したMS、デスティニーと、自身の能力と相まって、シンの力は連合軍の虎の子の大型MS数機を、一瞬で全滅させるほどのものになっていた。

すでにシンの敵になり得るものは、ほばいないといっても良かった。しかし、新たな力を得て再び戦場に介入したキラの手によって、その快進撃も虚しく終焉することになった。

だが、キラさえいなければ、シンの力により、ザフト軍は戦争で勝利を収めることができただろう。

デュランダル野望は、無事実を結ぶことになっていたわけだ。

シンとしては、結局は負け犬になってしまった自分の身の上話とは思えないが、それを聞く小傘達としては、驚嘆に値することだった。

MSというものがどういうものか見当もつかない彼女らだが、たった一つで町の一つや二つを壊滅させられるほどの相手を数機相手にして、無事勝利したという話が、どれほどのものなのかというのは、バカでも理解できる。

藍からすれば、シンの力も、すでに、彼がキラに対してそう思う気持ちを持しきれないのと同じように、人間の域を逸脱しているものだと思えた。

そしてそれは、半ば正解であるかもしれない。

遺伝子を改造したコーディネーターの肉体。そして、シン自身知らない、脳裏で弾ける種子の存在。

シンの持つ力は、すでに、古から神が生みだした人の子のそれとは違っているのかもしれない。

人間の革新、とも言えようか．．．

なるほど、スペルカードのセンスがあるのだから、納得できる。

人間と言っても、馬鹿にはできない。

シンの話を聞き、それに感心した一向は、今度こそ改めて、地底へと向かうことにした。

地底に住む妖怪は、ただの妖怪ではない。

いき過ぎて強大な力を持ち、時には害悪にすらなり得る者達だ。

人間は、会うべきではない者達だが、シンならば、そうにかなるだろう。

もしも場合は、紫からの命に従い、彼を守ればそれでいい。

藍が脳裏でそう答えを導き出す。

しばらく歩いていると、だんだん、周りの空気が温かくなっていくのをシンは感じた。

その理由はすぐに分かる。

高音の水を噴出する間欠泉が、いくつか地面から噴き出しているのだ。

間欠泉は、シンの世界にあるものだが、実際に見るのは初めてだった。

「へー！これが間欠泉か．．．幻想郷って、ホントに何でもあるんだな」

「こんくらいで感心されちゃ困るね。ちょっと前までは、こんなのにならないくらいいっぱいあったよ」と、橙。

「温泉に混じって、怨霊が湧いて出たりもしたしね。実害はなかったけど、いいことじゃなかった」

藍が続けて言う。

「そうなのか？今は、随分大人しくなっただんな」とシンが聞き、藍が応える。

「幻想郷では、どんなことが起こったって、いずれは大人しくなる、そういう風にできてる．．．誰かがそういう風にしてる、のかもね」

「たとえば．．．あいつ、とか？」

シンのその声に藍は応えなかったが、無言でも、不思議と答えを読み取ることができた。

そうかもしれないし、そうでないのかもしれない。

そこから湧き出る間欠泉に眼を向けつつ、藍が言う。

「どうして間欠泉が湧くのか、分かるか？」

シンは応える。

「地下にたまってる水があつて．．．それが地熱で熱せられて吹き出てくる、のかな。火山とかも同じだろ？」

「だとすると、もしかしたら、その地下の水をためているヤツがいるかもしれないし、熱しているヤツもいるかもしれない」

「．．．それって、どういう．．．」

「そろそろお望みの場所、地底への入口が見えてくるよ。今は昔、地の獄と呼ばれていた世界がね」

PHASE - 9 『地の底の原理』

どこまでも人に劣っている能力、また、逆にあまりに過ぎた能力は、自分を不幸に追い込むだけである。

しかもそれが、生まれついて天から授けられたものであるなら、捨てることもできない。

そうなれば、忌むべき自分の力と、永遠につきあっていくしかない。後は、自分自身を呪って生きていくか。あるいは、全てを認めて、自分なりに人生を楽しもうと努力するか。その二つしかない。

どちらに好感を持てるかと言われれば、選択の余地はないだろう。

藍の言葉に、改めて、地面より湧きあがる高温の地下水の噴出する様を眺めながら、シンはこう返事した。

「地下の入口って．．．こういうのが、か？」

「いや、この間欠泉はむしろ出口だ．．．言い方を改めると、要は、この近くに地下への入口があるんだ」

そうことはシンにも分かる。

だが、気になるのが、今しがた藍が言った言葉であった。

「地獄って．．．あの、地獄か？」

現世で罪を犯した者達が死後送られるという世界。

ただただ過酷で悲惨な場所であり、苦痛を表現する代名詞となっている名だ。

今、藍はその名を言った、地の獄と。

シンの問いに、藍は、「そうだ」と応えつつ、続けて言った。

「でも、今は地獄としての機能は失っている．．．複雑な話になるから詳しいことは省くけど、死者を裁く方法が変わって、地獄というものが必要でなくなっただ。それで、敷地だけをそのまま地底へと移転させ、地霊の住処にした．．．今では、旧都という名前になっている」

「旧都、か．．．」

藍が続けて言う。

「地獄だけじゃない。地底には、古から人々に忌み嫌われる災厄の全てが封じ込められている。それを司る妖怪達と共にね．．．地底には、ありとあらゆる負の力が充満している」

「それが、地底ってわけなんだな．．．」

藍の言葉から、只事ならぬ雰囲気を感じながらも、ここまで来てしまった以上、シンの地底に行こうという気持ちに変わりはない。地底への入口である幻想風穴なる場所へと向け、シン達は再度歩き始めた。

にしても、この界限は本当に間欠泉が多い。

それでも、藍の記憶にも残っているとある異変が発生していた当時と比べれば、随分と大人しいものだ。

10歩歩けば別の間欠泉が見えてくるほどだったのだから。

しかし、その当時を知らないシンとしては、3つも4つも間欠泉が吹いている光景というだけでも、驚きに値していた。

これほどのものなら、温泉でも作れば大儲けできそうだと思うが、そうしているという話は聞かない。

温泉と言ったって、ただ湧いてくる水をためればいいという話ではないのだ。

間欠泉から湧き出てくる水に直接触れば、火傷では済まないだろう。温泉をつくるにしても、それなりに整った環境が必要なのだ。

幻想郷の妖怪では、それほどの設備を整えることができないのだろ

う。

技術もそうだし、めんどくさくてやろうとしないのだろう。幻想郷の住人はそういう者達だ。

そうこうしている内に、シン達は、地底の入口である、幻想風穴、大きな洞穴の前へと来ていた。

先の見えない深淵を穿たれる巨大な穴からは、先ほど藍から聞いた話を抜きにして、どこか物々しい雰囲気を感じさせる。

ただの洞窟であっても、少し恐ろしいものを感じることがあるのは、シンだけだろうか？

一度ぼつかりと空いたその口に飲み込まれると、その後どうなるかは見当もつかない。

そういえば、ミネルバのクルーがいつぞやこう言っていたのを思い出す。

「人が寄り付かないようなでかい洞窟に一人で入るってことほど怖いことってない」と。

確かに、その通りかもしれない。

穴の中へと吸い込まれる風に逆らって、言いようのない瘴気のようなものが漂ってくるのをシンは感じていた。

所詮、それはただの勘違いであるわけだが・・・

どうも、行っただけはいけないところのように見えるが、しかし、前述の通り、ここまで来たら引き返すわけにはいかない。

なに。入っただけで死ぬような場所ではない。

楽観的な考えを持てば、案外楽しい場所かもしれないのだ。

地底に入る目的が、成果も分からない小傘の勉強のためということを半ば忘れたシン達は、ゆつくりと、洞穴の中へと入り、奇妙な由縁のある地の底へと向かっていった。

洞穴に入って最初のころは、まさしく洞窟の中といった具合の、土の壁で造られた無骨なトンネルが続いた。進むにつれて、入口から差し込む陽光は少なくなり、視界がうす暗くなっていく。

でこぼこに盛り上がったたりへこんだりしている壁面が、濃い陰影を、少ない明かりの中で映していた。

その広さは、それだけで一つの空間であると言えそうなほどに広大だったが、同時に、異様なまでの閉塞感を感じる。

無限の空間でない以上、多少閉め切っているという印象を持つことはあろうが、洞窟のなか、などとなると、それも殊更であった。

シンの耳には、風が空を切る音と、彼らの足音が、必要以上に大きく響いて聞こえていた。

．．．
雰囲気は上等．．．後は後ろから大きな声でもかけられたときには．

「こんにちはーっ!」

「どわーっ!」

「ひぎゃあーっ!」

「もぼわああーっ!」

言った傍からだ。

いきなり、頭上から落ちてくるように眼前に現れ、大声を出してきた少女に、シンは腰を抜かす寸前になるほど驚いた。

橙と小傘などは、寸前ではなく、本当に腰を抜かしてしまった。

うす暗く、ただでさえ並々ならぬ雰囲気が漂う中では、ちょっとした大声でも、驚いてしまうものだ。

「バ、バカ!こんなうす暗い中んな大声出すんじゃない!」

そう叫ぶシンの声に、ふと我に返った小傘は、

「なるほど、うす暗い所で大声出せば人は驚くのね。メモメモ．．．」

と呟きながら、どこから取り出したのかも分からないメモに、同じ

くどこから取り出したのかも分からないペンを走らせメモ書きした。
「いや、お前はお前で、そんなことすら知らずによく人を驚かせるのが好きとか言えたな・・・」

「あなた達、地底に何の用？」

何かに吊るされているらしく、さかさまになって、ビヨンビヨン跳ねながら、ツインテールの髪の少女が言う。

またしても、おかしい風貌をしている。その奇抜さたるや、並みではない。

桶のようなものの中に全身がほとんどすっぽり入りこんでいるのだ。ここまで来ると、意味が分からない。

こういう風になるように生まれてきたのだろうか、と考えるしかなかった。

まあ、とにかく、桶のようなものに入って、しかもさかさまで何かに吊るされている少女に、シンは改めて、言葉を失うほど驚愕した。彼女の質問にも、「あ、あ？えゝゝと・・・」と、答えを考えることができないでいた。

そんな中、頭上から、また別の声が響いた。

「人間かいー？」

「ん、ん？」

すぐさま声のした方向に振り向くと、声の主らしい少女が、トンネルの壁面の横に張り付いていた。

その表現は誇張ではなく、右手のひらが壁面にべったりと張り付いていて、その身体を支えていたのである。残った左手は、細い糸が握られており、それは、真っ直ぐと桶のようなものに入ってぶら下がっている少女の、その桶らしいものに繋がっていた。これに吊るされていたわけだ。

さすがにここまで来ると、シンは、自分の見ている光景は夢なのではなかるうかと疑いたくなった。

しかし、すぐさま常識というものを頭から吹き飛ばすことで、現実逃避しそうなところを堪えることができた。

そうだ、幻想郷には常識は通じない。なんせ、妖怪の住まう世界なのだ。

手のひらで壁に張り付くようなヤツがいてもおかしくはない。

それに、ああいう光景を、確か一度見たことがある。現実で、ではないが。

自称『鉄十字キラー』だとか、『ボクシング世界チャンピオン』だとかで、エアロスミスが主題歌をカバーしたクモ男。

ビルをよじ登り、手のひらから糸を出す男！

君は鍋。

とまあ、そんなことはともかくとして、手のひら一つで壁面にへばりついていた少女は、その手を離し、地面に降り立つと、シン達の方へと歩み寄ってきた。

呆気にとられてぼーっとしているシンの前に来ると、少女はこう言った。

「人間がここにくるなんて珍しいね、どうしたの？」

「あ？・・・あ、ああ。いや、まあね・・・あんた、名前は？俺はシン」

「名前？あたしは黒谷 ヤマメ」と、少女が、

「あたしはキスメ」と、桶のようなものに収まるもう一人の少女が応える。

二人の名前を聞いたところで、改めてシンが応える。

「いろいろあってね。地底ってのがどういうところなのか、知りたいたったんだ」

ちようどそう言ったところに、小傘の勉強のためにもここに来たということを思い出したが、この際だからそれは言わないことにした。

シンの言葉を聞いたヤマメは、「へえ、もの好きな人間もいるんだな」と、笑いながらも、「でも、そういうの嫌いじゃないよ」

と、シンを歓迎する素振りを見せた。

中々、人がよさそうではないか。と、シンは思う。

事前に藍から、地底は、大きな災厄と、それを操る妖怪を封印した場所だと聞かされていた。

その時は、さすがに、どれほど恐ろしい妖怪が待っているのかと不安にならずにはいらなかったが、そんな地底で初めて会った妖怪であるヤマメとキスメは、初見こそ仰天したが、とてもじゃないが悪い者達には見えなかった。

少なくとも、災厄をもたらすような存在には、である。

かつて地獄と呼ばれていたらしい地底とはいっても、別にそれほど特別ではないのか、と思いつつ、よければ、ヤマメ達に簡単に地底を案内してもらおうとシンが考えた、その矢先だった。

「ごほう」

何の前触れもなく、シンは軽い咳をした。

まあ、洞窟の中で砂埃でも吸いこんでむせたのだろうと気にしなかったが、しばらくしない内に、また咳が出た。今度は少し大きい。さらに、ただでさえぼーっとしていた頭がさらに虚ろになってくるような気がしてきた。

軽い眩暈が起こる。

一体何事だろうか？

咳はさらに強くなり、次々と、段々短い間隔になって吐き出された。それに呼応して、眩暈も激しくなっていく。

体調が極端に悪くなっている。しかも、あまりに突然にだ。

先ほどは咳も眩暈もまったくなかったのだ。

そりゃあ、多少気分が悪くなったりすることはあるだろうが、これは異常だ。

シンの身体の不調はさらに刻々とひどくなり、立っているのも辛いほどになっていた。

何もしていないのに、フルマラソンを完走したような疲労感に似ただるさが全身にまとわりついていた。

何故こんなことになっているのか考えようにも、頭痛と眩暈が起きてそれどころではなくなる。

今のシンの頭では、ただ、今自分の身体で起きている事態に対して、混乱するしかなかった。

突然の事態に、小傘も戸惑っているらしく、「どうしたのシン？冗談にしては演技が迫真だけど・・・」と、心配そうな声を出してシンの方に歩み寄る。

かく言う小傘も、「何か、あたしまで具合悪くなってきた・・・」と呟いた。

どうやら、突然の身体の不調は、シンだけの話ではないらしい。程度は少ないが、小傘、それに橙も、調子が悪くなってきたらしい。

藍の身体は、ほとんど異変はないようだが・・・

それに、ヤマメとキスメも、何も変わったところはないらしい。

・・・まさか？

シンの脳裏で憶測が飛ぶと同時に、藍の傍らの橙が言う。

「藍しゃま、これってやつぱり？」

その声に、すぐに藍が応える。

「そうだろうな・・・」

呟くように応じた後、今度は、ヤマメ達の方に向かってぴしゃりと言った。

「いきないで申し訳ないが、あなた達、どこかにいってもらえないか？」

「え？なんで？」

ヤマメが、まさに言葉通りの具合で素っ頓狂な返事をした。

藍が続けざまに言う。

「理由は察しているだろう。ここから去らないのなら、痛い目にあ

うことになるが、いいのか？」

こんな喧嘩の売り方をすれば、もれなく買っるのが幻想郷である。

ヤママメも、「へー、一度あつてみたいね、痛い目・・・」と、挑発に挑発を返すような声を出す。

だが、その声に応じるように、藍が臨戦態勢に入ると、手のひら返して、「と、言いたいところだけど」と、言いなおした。

「ここは大人しく、失せることにするよ」

ヤママメが、藍の能力を察知し、勝ち目がないと判断したのか、あるいは、最初から藍と事を構えるつもりがなかったのか。藍に畏怖している様子がまったくの姿がない様子なので、後者だろう。

とうとう、吐き気を催し本気で立っていらなくなり、その場で座り込んで、ぼやける頭でこのやり取りを傍聴するシンだが、この会話が意味することの意味を判断するぐらいの思考力は充分残っていた。

やはり、シンが考えた通りのようだ。

この突然の体調不良の原因は、あのヤママメにこそある。

「ちょっとからかってあげようと思ったただけなんだけど、かわいそうなことをしたかもしれない。素直な人に迷惑をかけるもんじゃあないね」

「分かっているなら、さっさとどっかいけ」

「はいはい。ごめんね、シンとか言うお兄さん。そいじゃ」

「またねー」

シンをほったらかしにして話は進み、ヤママメ達は、そそくさとシン達の元を離れ、うす暗い洞穴の中へと消えていった。

同時に、ヤママメ達の姿が見えなくなるにつれ、シンの身体の不調も、少しずつ引いていき、最終的には、嘘のように消え去ってしまった。完全になくなつたわけではなく、まだ多少、肩こりのような疲労感が残っているが、それも僅かだ。

病気の『核』の部分がなくなつたような気分だった。

行き過ぎたたるさもすっかりなくなり、シンは再び立ちあがった。藍に、「今は、まさか．．．？」と聞くが、すぐさま、「いや、分かる」と言いなおした。

その声を聞いた藍は、やれやれといった感じの表情で、静かに話した。

「これで、よく分かったと思う」

「あ．．．ああ」

先ほどの体調不良は、全てあのヤマメかキスメが原因だったのだ。先に、藍の言っていた言葉の意味を、シンは身をもって理解した。地底には、時に大いなる災厄となり得る能力をもった妖怪が封じられている。

その内の一つであろうヤマメ達が、シン達のその能力の脅威を見せつけたわけだ。

人がよさそうだと思っていたし、実際そうなのだろうが．．．それにしても、である。

「今のは土蜘蛛。病を操る妖怪だ」

「土蜘蛛？」

確か、その名は聞いたことがある。

源なにがしとかが退治したという、蜘蛛の身体に獣の頭をしているとか言い伝えられている妖怪だ。

九尾の狐らしい藍に続いて、またしても、シンにも知られている妖怪が、あのヤマメだったらしい。

そういえば、先ほど彼女は、糸でキスメを吊るしていたが、あれは蜘蛛の糸だったのか．．．

地獄の罪人を助けようと天から垂らされたのと同じ、蜘蛛の糸だ。払えば簡単にちぎれるその糸だが、髪の毛よりも細いことを考えると、実際の強度は想像よりも遥かに強いという話を聞く。

そんな蜘蛛の妖怪であるヤマメには、病を操る能力があるという話だ。

「ウイルスを周囲に蔓延させ、素早く、しかも広い範囲で一斉に感

染させることができる．．．今は、インフルエンザの一部の症状だったな？早い内に彼女が能力を解除したおかげで、症状が定着する前に、能力と共に菌が消えたからよかったけど．．．もっとひどいウイルスを振り撒くことだってできたかもな」

「もっとひどいウイルスか．．．」

風邪ぐらいで死ぬようなはずがないとタ力をくくる人が多いが、毎年のように、新型の感染症で多数の死者が出ているというニュースを聞く。

ひどければ、ただの風邪でも人は死ぬということは、周知の事実のはずだ。

それは、シン達のいるコスミック・イラの時代でも同じことだった。ウイルスほど、人の進化の速さに対抗しているものはない。

程度が軽かったから良かったが、下手をすれば、本気で死んでいてもおかしくなかった。

せいぜいすぐに治る程度の風邪をうつしていったのは、ヤマメがただからかうつもりだっただけで、シン達を殺そうというつもりが微塵もなかったからである。

要は、ただの遊びだったわけだ。
遊びでこれだ。

「正直．．．無事でいられるのか不安になってきた．．．でも、ここまで来たんだしなあ．．．」

「心配しなくていいさ。さっきも言ったけど、会っただけで死ぬような妖怪なら、封印するまでもなく幻想郷は滅亡してる。大人しくしてれば、何も無い。もしもの時は、紫様の命に従い、私達があなたを全力で守る」

「そ、そうか？」

「そうさ．．．さて、そろそろ、本当の意味での地下世界への入口が見えてくるはずだ」

「．．．本当の意味で．．．？」

おうむ返しにするシンの言葉に、藍は応えず、シン達は、再び歩を進めた。

しばらく歩いている内に、土が壁をつくりだす洞窟の光景までも様変わりしていき、内なのか外なのかもよく分からない奇妙な空間がシン達の周囲に展開された。

まるで、この先で世界が変わり、今は、先ほどまでの世界と混ざり合っている、といった雰囲気だった。

そんな中で、シン達は、また別の少女と出会った。

「あなた達は人間に、妖怪・・・一体何の用？」

藍曰く、橋姫という嫉妬を操る妖怪で、その名を水橋 パルスイと言った。

ヤマメ同様、人柄はよさそうに見える。

興味があつて地底世界にやってきた、別に、妖怪達を襲うようなつもりはまったくないと伝えると親切に、案内をしてくれたのだから、やはり悪い妖怪ではなさそうだ。

ただ、しきりに小声で、「妬ましい・・・」と呟いているのが、非常に不気味だったのだが・・・

それに、彼女に案内されている道中シンは、妙に気分が落ち着かなかった。

並々ならぬ嫉妬のパルスを放出するパルスイに威圧されたわけでもない。

嫉妬を操る彼女の能力にあてられたのだろう。

強力なスペルカードをつかい、どんな敵でも倒す藍に対し、何もできない自分が惨めに感じ、その感情が、やがて藍への嫉妬へと変わっていた。

嫉妬というのは恐ろしいもので、一度そういう感情を持つてしまうと、藍に対し嫌な印象が次々と浮かび上がってくるものだ。

しまいには、小傘や橙ことまでも、気に喰わなくなってくるのである。

気の短い人間なら、殺意すら湧いてしまいそうなほどにまで、その念は強くなりはじめていた。

が、嫉妬心などの、そういう負の感情を散々持て余し、それがどれほどあくどいものなのか、絶望と共に思い知ったシンとしては、嫉妬心を持つわけにはいかないという気持ちは強固であったし、多少の不愉快さなら、すぐに消し去ることはできた。

シンは今まで、嫉妬よりも遥かに強い負の感情を永らく抱き続けてきたのだ。

言い方は悪いが、この程度の気持ちなど、慣れっこだったし、どうということはないかった。

気持ちが落ち着いてさえいれば、嫉妬狂いの妖怪であるパルスィも、親切な案内人であった。

彼女の案内に従い歩き続けていく内に、どうやら、この奇妙な空間の出口が見えてきたらしい。

「後は、ここから少し歩けば、地霊の都、旧都が見えてくるわ」
そういうパルスィに、「そうか、ありがとう」と礼をする。

「いえいえ、どういたしまして。その優しさが妬ましい・・・」

パルスィと別れ、彼女に言われたとおりに、さらに歩き続けるシン達の視界で、世界が混じり合ったような奇妙な光景も終わりを告げる。

やがて見えてきた新しい光景にシンは、眼を見張って驚いた。

「な、何だあーっ!？」

シンの視界には、多くの木造建築の家屋が建ち並び、華やかな雰囲気
の大きな町が見えていた。

眼に見える範囲ではなんとも言えないが、相当に広そうだ。

これは、もう町というよりかは都と言ってもいいかもしれない。
自分達は今まで、地下を進んでいたはずだ、とシンは思い出す。
地下に、こんな大きな都があるのだろうか？

幻想郷に、常識は通じない、それを重々理解していても、驚くときは驚くしかないものだ。

理解はできても、納得しきることとはできないといった様子のシンは、しばらくの間立ちつくして、眼の前に広がる光景をぼーっと眺めていることしかできなかった。

真っ白になった頭では、藍の語る言葉も、ほとんど馬耳東風、聞いたはなから忘れ去られた。

「ここが旧都。かつては地獄の一部であり、鬼の手で繁栄を遂げた地下の楽園・・・といったところかな」

ようやく、細かいことを考えるのはやめて、とりあえず『こういうこともある』と考えることで落ち着くことができたのは、しばらくした後のことであった。

それにしても、この華やかな都、シンの抱いていた地の底というところのイメージとは随分とかけ離れている。それは当然だが・・・にしても、地の底にある都としても、シンとしては、思っていたより華やかだと感じた。

固定概念がよくないことは承知だが、地底というところは、もっとじめじめしてうす暗いところだと思っていた。しかも、かつての地獄を移転させた地というではないか。

そしてそこに住まう者達が、災厄を振り撒く能力のために封じられた者達だというのなら、それらもまたうす暗い性格をしているのだろうと、正直な話思っていた。

が、眼前に広がる華やかな都は、そういったよくない方向でのイメージを一切払拭するほどのものだった。

そして、視界に垣間見る、この都の住人である地霊達もまた、シンが思っていたような雰囲気はまったく出していなかったのである。何と言おうか・・・苦に思うことが何もない。そういう印象を受けることができた。

鼓膜を微かに震わせるのは、賑やかな喧騒の声だった。

幾分か気持ちの落ち着いたシンは、改めて、

「ここが地の底か．．．」と呟いた。

さて、シンの想像を遙か斜め上にいく地底の都旧都にやってきたのはいい。

そして、その目的は、具体的な目標のない小傘の修行なわけだが．

「こんなところで、何をどう修行するっていうんだ？っていうか、行くあてはあるのか．．．？」

シンとしては、こう呟くしかなかった。

「いや、行くあてはないけど．．．」

小傘としても、こう返すしかなかった。

「．．．．．」

こうなってくると、お互い何も言うことがなくなる。

一体どうしたものか．．．

そう思案しようとしたところでシンは、すぐそばに便利なヤツがいるのを思い出した。

こういうときこそ、藍が役に立つのだ。

シンに頼られるまでもなく藍は、

「行くあてがないのなら、適当な場所に案内しよう」と言った。

「ああ、頼む」というシンに、続けて言う。

「今から、ある人に会ってもらおう、でも、心しておいた方がいい。その人は、地霊と呼ばれる者達の中でも、特に忌み嫌われた力を持つ。一緒にいても、まずいい気分はしない相手だ」

「そ、そういう相手に会いに行くのか？」

「そういう相手に会ってみるのも、いい勉強だと思うよ、あなたにとってもね」

「そういうもんか．．．」

かくして、シン達の次なる目的地は決まった。

旧都からさらに進んだところにある、地霊殿と呼ばれる屋敷だ。

そこに向けて、旧都の中を歩くシン達。

そんな中で垣間見る地霊達の様子からは、やはり、シンの思っていたような、地の底で暮らす忌み嫌われた力を持つ者達という印象はまったく感じる事ができなかった。

ただの事象だけで他人を決めつけることは、偏見と差別であり、それがよくないことであるのもシンはよく知っている。

そのような悪い先入観は、いち早く捨てることにしたが、それを踏まえて、である。

地霊と呼ばれる者達が、その能力によって人々から嫌われ、地の底に封じられたのは事実のはずなのだ。

そのような仕打ちを受けたというのは、確かなことなのだ。

それで、気持ちが暗い方向に落ちて行っていないというのは、さすがに不思議だった。

差別や迫害を受ける者が抱く感情というものは、シンもよく理解している。

自分自身、戦争の引き金にまなったコーデイナーなのだから、一度そのような、差別的な眼で見られたら、その時に生じる劣等感、相手への不信、憎悪は、そう易々と消せるものではない。

この地底に住む地霊達だって、それを感じたはずなのだ。感じていないわけではない。

どれほど楽天的であろうと、自分達が忌み嫌われて封印されたという意識があれば、永遠にそれと付き合っていくしかない。

だが、シンの眼に垣間見る地霊達の姿は・・・

何事にも、きっかけは必要である。

きっかけさえあれば、どんなことでも変わることができる。人の気持ちも、世界の在り方も、どんなことでも、簡単に変革する。

この地底の都旧都にも、それが、きっかけがあったのかもしれない。それが、地霊達の心を、よい方向へと変えていったのだろうか・・・きっかけというものは、シン達にだって大切だ。

平和を創るにしても、何か大きなきっかけがあれば、すぐにでもそれは叶う。

人生を肯定しているような雰囲気醸し出す華やかな旧都の中を歩くシンは、この都を変革するだけのきっかけというものを、知りたくなった。

そして、しばらく歩いている内に、華やかだった旧都の様相も、段々と変わって、寂しい地底の荒野になっていく。

だが、それも少しの間のことだった。

「あれが・・・？」

地平線の（地底線か？）向こう側に、大きな屋敷が見えてきた。どこかうす暗い雰囲気を受ける。

前述の言い方をすれば、地底らしい。と言えそうな屋敷だった。

印象だけで物事を決めつけるのはよくないことだが、屋敷から放たれる、言いようのない暗さを、シンはどうしても払拭できそうになかった。

まるで、そう思われるのを肯定しているようだ。

そんな屋敷を眺める中でシンは、ふと思った。

地霊の能力が人から嫌われるようなものなら、地霊同士でも、お互いの能力を嫌うことはあるのだろうか、と・・・

PHASE - 10 『MY Iron Lung』私の鋼鉄の肺 (前書き)

タイトルは『Radio head』の曲とその訳詞より。

人は変わる。

苦しい状況にあれば人は、それを耐え抜くために、己の精神をより強く、冷ややかに成長させることもある。

人から蔑まれる者ならば、時にそれを苦に思わないような精神を手に入れる。

手に入れようと欲する。

そしてそれを手に入れるということは、苦しみを作る状況そのものを打破するための橋頭保にもなり得る。

だが、そうなっていく内に、人の心は、さらに冷めていくのだ。

人らしい熱はなくなり、柔らかく、温かい心は鋼鉄へと変貌する。

そんなことが、あつて良いのだろうか？

弱い者は、弱いままでいい。

己を殺してでも状況を乗り越える屈強さを手に入れる必要などないのではないか。

そうせざるをえない状況を作ることなど、あつてはならないのではないか。

旧都から離れた、僻地にて見えてきた大きな屋敷、その名を地霊殿歩を進め、少しずつ屋敷に近づいていくにつれ、その様相がはつきりと見えてきた。

幻想郷に限っては普通のことだろうが、シンからすれば時代錯誤気味の洋館であつた。

何百年か、あるいは千年以上も前の中世の洋館、といった感じだ。これもまた、写真とかならともかく、実際に眼で見るのは初めてだった。

全体を漂う、えも言えぬうす暗さからは、吸血鬼でも住んでいるのではないかという印象を受けた。失礼なことだが。

しかし、藍の話では、吸血鬼などは住んでいないらしい、血は吸われないし、害はないから安心していいらしい。

ちなみに、実際に吸血鬼が住んでいる屋敷は別にあるという話だ。やはり居るには居るわけだ。

屋敷自体は結構な大きさがあり、威厳というものは、中々に醸し出している気がした。

幽々子の住む白玉楼とはまた、違った品位というものを感じられた。この中に住む者も、結構な身分がある者なのだろうか？

それはそうとして、殊不思議なのが、屋敷から醸し出される不気味なまでの暗さだ。

雰囲気で、暗いとか不気味とか感じることは当然あるわけだが、これは少し異常だった。

眺めれば眺めるほど、心が不安になるほどの不気味さを、この屋敷は放出していたのだ。

まるで、心の奥底を見えざる眼で覗かれているような、落ち着かない気分だった。

それに、ただ形としては特別なところのない洋館を眺めているだけなのに、こんな気分になるというのが、さらに妙なことだった。

だが、この幻想郷では、妙に思うことなど星の数ほどある。一々気にしては、勉強などと言ってられない。

むしろ本来気になるべきところをあげるとすれば、これから訪問するつもりの屋敷に対して、何のアポイントメントもとっていないところだ。

まあ、それを言ってしまうえば、白玉楼にしても博麗神社にしても、

ほとんど押しかけたが、とくに問題はなかったのだ。多分今回も大丈夫だろう。

さらに屋敷に近づき、入口らしいドアの前に立つシン達。

「おじやましー——」

間髪いれずドアを開けようとする小傘をシンが、

「こら待て！礼儀しらずめ！」と、制止する。

「すっ！？．．．え？なに？」

「押しかけるみたいいきなりドアを開けるようなものじゃないだろ」

「じゃあ、こういうときにはどうすれば？」

「こつ、ノックするんだよ。それで中に誰かいないか確認する。で、いるならその人を呼ぶ」

言うなり、小傘と立ち位置を入れ替えたシンが、ドアを二度ほど軽く叩く。

それに呼応して、橙と藍がドスの聞いた声でいう。

「おうフレ！はよ借りたもん返さんかいっ！」

「借りたもんはよ返すんが社会のルールちゃんかい、おおんっ！！？」

「馬鹿だろお前ら！」

大声で怒鳴るシンに、藍がヘラヘラ笑いながら、「いやいや、今は軽いジョーク、お茶目サンだ」と応じる。

続けて、「しかし、こう言っておけば、大抵のヤツは出るか居留守を使うかする」と言う。

「二通りある時点でそりや大抵だろうよ．．．てかこれじゃ押しかけよりもずっとタチ悪いって．．．あんたもこういうふざけた冗談言う時があるんだな」

「紫様の能力と共に、その性格もコピーしようと思つた結果だ。あのお方、たまに理解し難い言動をなさる」

「理解し難いのベクトルが違う．．．あんた、思つてたより賢くな

いな」

「いやゝはは、面目ない・・・とまあ、それはともかくとして・・・

「今しがたの漫才の間に、結構な時間が経っているわけだが、ノックしたドアの向こう側から人が現れることはない。その気配もない。結構な広さだから、人が来るのが遅いのか、あるいはノックが聞こえてもいないのか。

念のためにもう一度、少し強めにノックし、もう少しの間待つ。

が、

「来ないねえ・・・」

小傘がくたびれた声を出す。

「この調子なら、いつまで経っても人は来ないね」と、橙が続く。二人の声にシンが応じる。

「もしかして、誰もいないのかな？なあ、藍」

聞かれた藍は、平然とした表情で応えた。

「ごめん、言い忘れた。この屋敷、住んでるヤツは基本的に一人なんだ。だから、ノックしようが大声で呼ぼうが、人はこないぞ」

その声に、シンの身体が石のようにぴたりと固まる。

視線は、藍にぴたりと合い、その眼は、極限までに鋭く細められていた。

「お前、これも計算づくのことなのか？」

呻くようなその声に、藍は申し訳なさそうに言った。

「悪気があった。だが私は謝らない」

「その尻尾引きちぎるぞ」

「それは困る。ごめん」

「それじゃ、待ってたってどうにもならないってわけか・・・それなら、もう入ってもいいわけだな」

「まあ、そういうことだろうね」

藍が最初からこう言っていれば、わざわざ長ったらしく待っている

ことはなかった。

それはそれで失礼な感じはするが、呼んでも誰もこない以上、シン達は、勝手に屋敷の中に入ることにした。

幸い、ドアには鍵も何もかかっていないので、簡単に開いた。無用心というか．．．あるいは、待っていたのだろうか？

屋敷全体から漂う言い様のない瘴気のようなものをその身に感じていれば、そう考えることもある。

ゆつくりとドアを開く。

開け放たれたドアの向こう側に見えたのは、妙に幻想的な色彩の光を映す洋館の内装だった。

床面には、豊かな色彩で、まるでそのものが発光しているかのような光が反射していた。

いや、反射ではないのかもしれない。

たとえるならば、陽光差し込むステンドグラスの光のような雰囲気があったのでそう思ったただだが、いざ、屋敷の中に入ってみるとその類のものは一切見受けられない。

光が差し込むような窓自体が少ないのだ。

ましてや、そもそも、反射するような陽の光が、この地の底に差し込んでくるわけがない。

「失礼しまーす．．．」

とりあえず、断りないながらも、こういつつ屋敷の中に入るシン。

「誰かいませんかー」

さらに、やや大きな声で、こう呼びかける。

が、シンの放った声は、広大な屋敷の中を反響したが、だからと言って、誰か人が来るというわけではなかった。

まるで廃墟のように静まりかえっている屋敷の中で棒立ちになりながら、シンは呟いた。

「誰もいないのかな．．．？」

もし本当に誰もいないのならば、これではただの家探しみたいではないか。

藍の話では、この屋敷に住んでいる者は一人と言っていていいらしい。厳密には一人とは言い切れないそうだが。

なら、もう少しだけその人を探して、いないようであれば、一度帰って、次の機会に訪れるとしよう。

が、しかし、その人を探す、とはいっても、どこにいるのか分からない。

「探すにしても、変にそこらの部屋荒らし回るのはさすがに・・・なあ？」

というシンに、小傘が返す。

「勝手に人ん家に入っているヤツが何言うの」

その声におっかぶさり藍が言う。

「私たちは泥棒じゃなくて、礼儀正しい訪問客だ。失礼極まりない行為は、品位を落とすぞ」

「品位・・・ねえ？」

藍の言葉にこう呟くシンとしては、幻想郷にそもそも、落ちるほどの品位があるのかどうか疑いたい気分であった。

が、藍の意見には全面的に賛成である。

とりあえず、失礼ないように、この屋敷に住むという人に会わなければならぬ。

とはいえ、ここでずっと待っていても会えるかどうかは分からないし、これはこれで失礼だ。

やはり、多少はこの屋敷内をうろついて探し回るぐらいのことはするべきなのだろうか。

そう考えた矢先のことだった。

「ん？」

どうしたものかと屋敷の中を眺めまわしていたシンの視界に、一つの黒い影が映り込んだ。

どこかへつながっているらしい廊下の陰から、じつとこちらを見据える二つの眼。その瞳孔は大きく見開かれている。

猫だ。しかも黒猫だ。

「おい橙。お前の友達だ」

呟くシンの言葉に、橙が彼の方を振り向く。

そして、同時に、シンの指差した方向を見た橙は、言った。

「あ、ホント、だ？．．．いや、確かに黒猫だけど．．．」

「まあ、猫同士だからって友達ではないわな」と、藍が続く。

「それもそうか」

二人の言葉にこう返事しつつ、シンはなおも、こちらをじつと見る黒猫の影と、視線を合わせ続けた。

何の変哲もない猫だろうし、何の変哲もない猫の眼なのだろうが、シンは、こちらを見据える眼から、普通ではない雰囲気を感じた。

マヨヒガで会った猫達も、ここが自分達で縄張りか、あるいは楽園であると誇示するような雰囲気は見せていたが、そういうのは、蛇が威嚇するのと同じように、感じて当然のものであった。

それに、相手が動物であっても、ある程度は、好かれているとか歓迎されているということは察することができる。マヨヒガの猫達はシンを一応に歓迎してくれていた。

それはともかくとして、しかしこの猫は違う。

言うなれば、動物は同種を選別しても人間を選別はしない。異種である人間を量ることなどではしないからだ。しかし、この猫は違う。

まるで、シンをじつと見据える中で、シンがどういう人間なのかを観察し、選別しているようだ。

まるで、人間が動物にするのと同じような高慢さで．．．

「う．．．？」

何かある。

妙なうめき声をあげながら、シンはそう思った。

奇妙な感覚を抱いたまま、猫を見据えるシンだったが、ふと、その猫は、そつばを向いて廊下の向こう側へと消えてしまった。

「・・・あの猫、追うか？」

そう呟きながら、猫が消えていった廊下の方へと歩いていくシンに、小傘が、「え？何で？」と聞いた。

何でと聞かれたら、上手く答えることはできないが、「人は居なくとも、ペットらしい猫が見つかったんだ。そいつを追っていけば、飼い主にも会えるかもしれない」と言うぐらいの考えはあった。

「うん、そうだな。あてもなくフラフラしてるよりは実りがある」と藍が応える。

そういうことなら、「よし、行こう」と、廊下の方へと歩きはじめるシン。

そしてちょうど、その一步目を踏み出した時だった。

猫が消えていった廊下の周囲に、突如、無数の火の玉が出現したのだ。

何もない空気中から、まるで湧き出てくるように、数十の火の玉が現れたのだ。

シンには、この火の玉に見覚えがあった。確か、白玉楼でこれとそっくりの火の玉を見たことがあるはずだ。

「なんだこいつ！？幽霊か？」と驚嘆するシンに、藍が応える。

「いや、似ているけど違う。これは怨霊だ」

「怨霊？」

幽霊というのは死んだ人の魂の姿。怨霊は・・・執念、感情的なものだろうか？

よく分らないし、正直な話、幽霊も怨霊も、言葉としては同じものとは思えなかった。

だが、いざ藍から言われてみると、確かに、怨霊と呼ばれるこの火の玉は、幽霊とは違う感じがした。

上手くは言えないが、熱い、と思える何かを感じた。

白玉楼の幽霊からは感じなかったものである。

幽霊と怨霊の違いはともかくとして、その怨霊が、突如シン達の眼前に大量に出現したのだ。

しかも、今先ほど猫が廊下の中へ消えていって、それを追おうとしたちょうどそのタイミングでのことである。

ただでさえ、あの猫は普通ではないと思っていたのだ。そしてこんなことになれば、いよいよ、である。

この怨霊は、もしかしたら、あの猫が出現させたものかもしれない。

それはそれとして、廊下の前に現れた多くの怨霊達は、シン達が入ろうとしていた廊下をきれいに覆い隠していた。

これでは進むことはできない。

あの猫、怨霊を使って足止めをしてくるつもりなのか？あるいは、ただふざけているのか。幻想郷なだけあって、後者の可能性も大いにある。

しかし、こうまでされれば、理由はなくとも、意地でもあの猫を追いかけてやうという気持ちになるものだ。

「藍、どうする。この怨霊とかいうヤツらをやっつけていくか？」と、シンが聞く。

藍はすぐさま応えた。

「いや、大丈夫だ。別に警戒しているわけじゃない、見てみる」

その声とほぼ同時に、廊下の前を封鎖していた怨霊達が、まるで、というよりまさしく道を開けるようにその場を離れた。

「現れたのがそこってだけで、元から私達の行く手を遮ろうってわけじゃなかったんだ」と、藍が言う。

ということはずなわち・・・

「俺達に出ていけって言うてる、ってわけじゃないんだな？」と、シン。

「そつだろっねえ」と藍が応じる。

どうやら、二列に並ぶように道を開けてくれたあの怨霊達は、こち

らをそれなりに歓迎しているらしい。

「ということは、さっきの猫も．．．」と呟くシンの声に、橙が、
「猫は別にそうでもないんじゃない？」とおっかぶさった。

が、藍はこう言う。

「いや、そうでもないかもしれない．．．この怨霊達を出現させて
いるのが、あの猫だと考えてるんだな？」

「あ？ああ」

「なるほどねえ．．．もしそうだったら、あなたの言おうとした通
りだ」

「それはそれとして、早くその猫たらなんたらをおっかけようよ」
と、小傘が言ったので、とりあえずシン達は、怨霊達が開けた道を
通って、廊下の中へと入っていった。

にしても、中々広い廊下だ。

横幅だけでも、一つの短い廊下ぐらいの広さはあるし、天井も高い。
そこだけで、すでに一つの部屋、空間であるように思えた。

そんな廊下も、様相に飽きてくるぐらい歩いていると、やがて終わ
る。

廊下を抜け出たシン達は、当然ながら先ほどとは別の部屋に出た。
怨霊達に導かれ、奇妙な猫を追ってやってきた部屋というわりには、
別段目立ったところはない。

先にいた大きな空間、エントランスだろうか？そこと似たような風
をしていたが、こちらの方が幾分か狭かった。

書斎のように見えなくもなかった。

階段が一つあり、そこを昇れば、また別の空間があるようだった。
手すりも見える。二階だ。

そして、相変わらず、妙に殺風景で人の気配を感じらない。

いや、違う。

多少、何かがいそう、あるいはありそうな雰囲気はあった。

屋敷に入る前から感じていた、何かに見られているという感覚が、

より強くなっているのである。

誰がいるのか？あの猫はどこだ？そしてあいつは、何故俺たちをここへ呼んだんだ？

シンが脳裏でこのように考えた、その矢先だった。

「私に会わせに来たのです」

声が聞こえた。

「何か言ったか？」

シンが、小傘達に聞いた。

「いや」と小傘。

「何も」と藍。

「同じく」と橙。

どうやら、誰も何も言っていないらしい。

シンとしても、そんなことは承知だった。

今の声は、耳元で発せられたものではない。

もつと離れた場所、この広い部屋のどこから発せられたのだ。

一体、どこから？

「ここよ」

まるでシンの思考に示し合わせたように発せられた声は、今度はより一層明瞭に聞こえた。

位置は、階段を上ったその上。

声の方向に振り向いたシン達の視界には、誰も映ってはいなかったが、それは、声の位置が階段を上った上、ちょうど、シン達に見えない位置であるというだけにすぎない。

しばらくすると、手すりの陰から、一人の少女の姿が現れた。

彼女が声の主だ。

何者なんだ？

「古明地 さとり、この地霊殿の主人と思って構いません」ということは、彼女が、藍の言っていた者なのだろうか。

「そうじゃないんですか？ 私には分からないけど」

「・・・？」

こいつ、何か変だ。

「そうでしょうか？」

俺が考えたことにすぐさま応えている。何一つ口に出してはいないのに、思っていることにぴしゃりと応答している。

これではまるで・・・

「そうです。申し遅れましたが、私は、人の考えていることを読み取る程度の能力を持っています」

「そ、そうなのか？」

「ええ」

そんな者が本当に・・・

「ええ、実在するの」

「・・・」

今しがた思ったことに対しすぐさま応じる、しかも、随分と清かにだ。

態度もそうであるし、事実、シンの思ったそのことに対しちょうど応答している（という風にしか思えない）のを考えると、彼女、さとの言っていることは間違いなく本当であろう。

人の考えていることを読み取る能力か・・・
さすがに、不気味と思わずにはいられない。

藍の言っていた言葉の意味が分かる気がした。

「そうでしょうね。さぞ不気味でしょう」

不気味と思う心も限なく読み取られてしまうということは、すなわち、相手としても、こちらを『そう思われている』という風にしか思わなくなるということだ。

お互いが相手を警戒、あるいは拒絶している上に、社交辞令も何も通用しないのでは、人間関係が上手くいくはずもない。

地の底に封じられた妖怪達というのは、何も災厄をもたらす者だけではないのだ。

だが同時に、シンは、さとりのことを少し不気味に思いながらも、自分の親友、レイのことを思い出した時、その思いはふっと消え去った。

それを読み取ったのだろう。

今しがた、シンに対して、信用しないという意思表示ともとれる発言をしたさとりが、少し不思議そうな顔をした。

そして同時に、これより続くシンの追憶の内容を読み取ることによって、頭の中に沸いた奇妙な感覚が、納得へと変わっていった。

人の心を読み取る。

確かにそれは、人としては有り得ない能力ではあるだろうが、何事にも例外はあるし、それは、シン達のいるコズミック・イラの世界においても同じだった。

レイには、さとりと同じように（程度は大きく違うが）人が何を考えているのか、大体分かる能力を持っていた。

厳密に言えば、高い空間認識能力を含む、情報認識能力である。要は、感応する才能があった、ということだ。

たとえば、死角からの音のない攻撃であっても、レイならば完璧に認識し、回避することができる。

逆に、相手がどれほどの回避行動を取ろうとも、レイならばその軌跡を読み、正確に攻撃を命中させることができる。

敵の殺気を肌で感じ、戦場を意思の力で支配することができる能力、

とデュランダルは言っていたし、レイ自身、殺気を感じるといふことは確かだと言っていた。

それは、シンにもない能力である。

そして、その優れた認識能力が働くのは、何も戦場だけではない。人の思念を感じ取る能力は、平時より発揮されていた。

他人が何を考えているのか、ある程度なら分かるのである。

もしかしたらレイは、シンの過去のことと憎しみのことも、全て承知だったのではないか？

おそらくそうだろう。

その上で、シンに対し、一人の戦友として付き合ってくれていたのだろう。

デュランダルの野望を実現するために、シンの憎しみによる力は利用できる、とも考えていたのだろう。

兵士として、役目を果たすために、使えるものは使っておこうという考えだ、それはシンにも否定できない。

思えばレイは、その能力により、全てを、何もかも知っていたのだろう。

そのことを、シンは彼が死んでから理解することになったが。

だが、他人の考えを読み取ること、戦場で、相手が発する殺意の念を受けることは、そんな力を持たないシンが考えるよりもずっと、過酷なものではないのだろうか。

たとえば、彼の親代わりであるデュランダルも、心の奥底ではレイのことを、野望を利用するための手駒と想っていたかもしれないし、レイもそれを感じ取っていたかもしれない。

もしそうだとしたら、彼の心はどれほどのものだったのだろう。

それだけではない。

相手の考えを読み取ることができる。だが、他人にはできない。

自分が相手がどう思っているのか分かるが、その相手は自分が何を思っているのか分からない。

そのことが、多大なコンプレックスにもなったのではないだろうか？
レイは、MSの操縦技術も高い。兵士としての精神力も確固たるものだ。

だがそれ以前に、一人の人間のはずなのだ。

シンと同じ、何も変わるところのない、ただの少年であつたはずなのだ。

レイは・・・

そう思うと、今自分がさとりに対し抱いた不気味さが、どれほど忌むべきもののなのか、理解することができた。

そういう心は、捨てる。

人を不気味だとか、変なヤツだと思うその心こそが、平和を殺しているのだ。

シンの心からやましい考えが消え去ると同時に、さとりもまた、シンに対する警戒心を解いていった。

どうということはない。

考えを読み取られるというのは、時には付き合いやすいものなのだ。純粋に、やましい考えが何もない素直な気持ちでいれば、簡単に意思疎通ができるのだから。

レイとだって同じだった。シンが彼に対しやましい気持ちを捨てられていたからこそ、いや、多少の疑念などはあっても、彼を戦友として思っていたからこそ、彼の方も、シンを信頼してくれていたのだろう。

それと同じだ。

純粋な気持ちを持てば、どうということはないのである。

書斎のような（本当にそうかは分からない）部屋の二階から、階段で下りてきながら、さとりは言う。

「一体何の用？」

シンは、さとのその声に対し、改めて、ここに来た理由を思い出

してみた。

口に出すことはない。考えた時点でさとりには伝わっている、はずだ。

「勉強．．．って、具体的には？．．．．．その、傘の妖怪の、勉強ねえ．．．それに、あなたも？平和？それが望みなのか？」
そう、その通りだ。

階段を下りたさとりは、シンの傍まで歩み寄りさらに会話を続けた。シンの方はおし黙っていて、さとりだけが独り言のように喋っている、という風にしか見えない状況に、思わず小傘が呟いた。

「なんかよく分かんないけど、こわ」

「妖怪のあなたがそれを言うか」という藍の言葉もごもともである。

が、小傘が不気味に思ふ気持ちも、はっきり言ってしまうえば、ごもともなのである。

一人がベラベラ喋っているだけなのに、意思疎通が成立してしまっているという状況が、まともじゃないように見えるのは、仕方がないことだ。

しかし、そんなことは放っておいて、シンとさとりは、奇妙な会話を続ける。

「平和の勉強のためとは言うけど、どうしてここに来たの？．．．大した理由もないのね．．．なら、どうする？折角ここに来たんだから、何か役に立つことがあったら協力するわ．．．．．地霊についての歴史？．．．私は、地底に住む者としては新参者だから、分からないところも多い。話を聞きたいのなら、もっと詳しい人を紹介できるわ。けど、私が話せる範囲でなら、よろこんで説明して差し上げましょう」

「そうか？ありがとう」ここでようやく、シンが、感極まった言葉

を發した。

と、ちょうどその時、さとの足元に一匹の猫、シン達が先ほど見た猫が現れ、さとの胸に飛び付いた。

それを両腕で受け止めつつ、さとりが言う。

「．．．そう、こいつも、あなたに興味があるようね」

「え？」

猫を両腕で抱えるのもしばしの間、さとりは両手を離し、その腕から落ちた猫が床にすっと着地した。

そして、さとりが言う。

「紹介するわ。私のペットで、お隣よ」

その声と同時に、さとりからやや離れた場所に移動した猫の身体が、直視しきれないような眩い輝きを放った。

「うわっ！？」

思わず手を掲げて光を遮るシン。

が、その光も一瞬だけのことである。

光が止んだことを確認したシンは、猫が発光していた位置へと、改めて目をやった。

が、そこには猫はいなかった。

代わり、といったは何だが、人間の足が床に立っている様子が見て取れた。

「はっ？」

素っ頓狂な声をあげながら、視線を少しずつ上に上げていく。

「よろしくねえ、おにいさん！」

先ほどまで猫が立っていたはずのその場所には、一人の少女が、人懐っこそうな笑みを浮かべて立っていたのである。

シンと同じような真っ赤な眼に、三つ編みにした髪の毛、そしてその頭には、猫のものらしい耳が生えている。

それが確証というわけではないが、どうやら彼女が、先ほどの猫な

のだろうと理解できた。
変身・・・したわけだ。

「・・・」

もう何でもあり。

何が起こっても驚かない。

常人ならにわかに信じられない事態だが、しばらく幻想郷にいたおかげでよくも悪くも常識の麻痺したシンには、冷やかな感情しかなかった。

「あは、はは、は・・・よ、よろしく」

「久しぶりに人間の死体が来てくれたねえ」

「し、死体って、俺はまだ生きてるよ・・・」

まあしかし、あまりにも常識はずれな登場をしてくれたこのお隣なわけだが、一度理解し、納得できると、なるほどと合点のいくところも多い。

お隣とは、猫の妖怪なのである。

妖怪だからこそ、人の姿にもなれるし、それに、先ほど多くの怨霊を出現させたのも、妖怪だからこそ成せる業、といったところか。ちなみに彼女の本名は火焰猫 燐なわけだが、誰も言っていないのだからシンに分かるはずもない。

ひとまずシンがお隣に適当な挨拶を済ませたところで、さとりは言った。

「あなたがお望みなら、こちらまでできる限りの協力します。一晩ぐらいなら、泊めてもいいわよ」

「本当か？」

「ええ。それに、あなたのおかげで、久しぶりにセンチメンタルな気分になれたから」

「どういう・・・ああ、なるほど、そういうことか」

「そういうことですよ・・・仲良くしましょう」

PHASE - 11 『遠い足跡を追って』

差別や偏見にしても、人類史の負の遺産にしても、記録というものが残る。

人々が遺伝子を受け継ぐように、記録は脈々と受け継がれ、世俗から離れたような冷やかさをもって、人の業を見ている。

そして、二度と過ちを犯してはならないという声も、記録があり、そこから次ぐ人々の記憶があるからこそだ。同時にそれは、人々がどうあってもそれを意識するしかないということの^{あら}頭われではないだろうか。

差別をしてはいけない、過ちを犯してはいけない。

そのような言葉を連ねている間は、それを叶えることはできない。その言葉そのものが、差別を、あるいは負の歴史を意識していることに他ならないのではなからうか。

記録というものは、遙か過去より冷ややかに、今、そして未来への人の業を見ている。

ひよんなことで、シン達は、人の考えていることを読み取ることができる能力を持つ古明地 さとりの住む地霊殿にて、しばらくの間、世話になることになった。

シンも改めて、自分が幻想郷の外の世界の人間であることも話したが、さとりはそれほど驚くことはなかった。

どうも、幻想郷においては、転移とかそんなものは、驚くべき事項

ではないらしい。

少し付き合ってみると、さとりは、人の考えを知ること以外は、随分と物腰も柔らかく礼儀正しい、人のいい少女であることが分かってきた。

嘘や建前を言わないつもりで付き合っていけば、むしろ付き合いやすい人柄に思えた。目つきは少々悪いが。

とはいえ、その、人の考えを知る、というただ一つの能力が、致命的にさとりに他者との交流をしづらくさせているのは間違いないだろう。

嘘や建前を言わない、とは、言葉で言うよりもはるかに難しい。

会話の端々で感じた気分や感情というものを、包み隠さず曝け出すということなのだ。

相手に対し妙だとか、変わってるとか、そういう気持ちを少しでも思ったら、それすらもはつきりと申告しなければならぬ、ということなのである。

さとりと付き合うということは、すなわちそういうことだ。

シンだって、自分の心が清廉潔白であるとは思えないし、それをさとりは知っているだろう。

シンだって、さとりに対して何も思うことがない、というわけにはいかないのだ。

だが、さとりや、あるいはレイのように、人の考えや感情をある程度感じる能力を持っていようといまいと、他人が自分をどう思っているのかは、時としては誰だって察することができるのだ。

ただ、確信がない、というだけなのである。

自分が嫌われているのなら、相手の態度からそれを少しばかり感じることはできるし、あるいは、もしかしたら自分は嫌われているのか、と不安になる気持ちを抱くこともある。

さとりやレイは、確かに特別ではあった。だが、異常だ、などと言い切ることもよくない。

彼女らは、シンもそうであるように、多くの人がある程度他人の気分を察することができるという性質が、特別に強いというだけのことなのだ。

そして、人には、自分が嫌われているということを知っていようと、あるいは相手がそう確信していることを知っていようと、それでもなおその相手と付き合っていくことができる性質がある。

多少の後ろめたさがあっても、関係というものはそう簡単にはなくならないものである。

嫌いに思われていても別にいいと、それだけ、人間関係というものが希薄になっている、とも言えるかもしれないが．．．

お互いが嫌いだと知っていたら、人づきあいも糞もないと前述はしたし、確かに大概はそうである。

だが、そうだと言い切ることはできないほどの凶太さも、人間にはあるかもしれない。

そういうことを思えば、別にさとりとだって、普通に付き合っているわけだ。

むしろ、やましいことを含めて、自分の考えの全てを相手が読み取ってくれるというのは、ある意味で清々しいところもあった。

キラも言っていたことだ。

平和のためには、まずは相手の気持ちを知ることだ、と。

また、デュランダルもこう言っていた。

レイの持つ特殊な能力は、人類がこの先の宇宙開拓の未来を生きていくためにも、そしてその中で人類が共存していくためにも、必要なものだ。

すなわち、平和のために、だ。

もしかしたら、さとりの能力は、相互理解の新しい形、言うなればニュータイプではないのだろうか？

そう思うシンの心も、当然さとりには読み取られてしまうわけだ。

「誇張表現をし過ぎです」

「あ？あ、あはは」

「でも、そう言ってもらえるのって、嫌じゃないわ．．．そういうこと言ってくれた人、あなたが初めて」

「そう、なのか？」

何よりも新しいのは、人々から忌み嫌われてきたさとの力に対して、純粹にそう思えるシンの方なのかもしれないなかった。

まだほんの短い間ではあるが、お互い、仲良くなれそうだと、シンは思った。

さとりも、それに同意した。

さて、勉強のために地霊殿を訪れたシンとしては、何か役に立つ資料があれば、それを拝見したと思っていた。

そこで、さとりが言う、「本ならいくつかあるけど．．．」

そして、最初にさとりと出会った部屋は、当初思っていた通りに、書斎と呼べる部屋だったらしい、が、本の数は、それほど多くはなかった。

しかし、幻想郷の書籍というならば、それだけでも幻想郷を知ることには役立つし、ある程度は学ぶこともあるかもしれない。

早速その本を拝見すべく、シンはさとりと藍と共に部屋の二階、本棚の並ぶ空間へとやってきていた。

ちなみに、人を驚かす修行をしたいと言っていた古傘は、死体収集家であり、それを操るネクロマンサーだというお隣に師事を仰いでいた。

しかし、教えられることといえば、「とりあえず殺すんだよ」とか、「死体は鮮度が大事だよ」、とかいうものばかりだった。人を驚かすことには、何の関係もない。

ちなみにお隣は。猫同士だからかは分らないが、橙と気が合うらしく、仲良くじゃれついていた。

まあ、そういうのは今は放っておいて、こっちはこっちでやることをやる。

さて、本棚の数は多く、倒れれば全身が覆い隠れるほどの大きさのものが、数個並んでいたが、そのほとんどが空であり、一つの本棚がようやく埋まっている、という具合だった。

さとりは、別に本を読むのが好きというわけではないという。好きでもないなら、そりゃあ、数も少ないわけだ。

今ある本も、必要だからということと、とある場所にある、蒐集家が営む雑貨屋から仕入れてきたそうた。

そういうことなら、なおさら役に立つだろう。

そう思いつつシンは、本棚の前に立ち、整列されている本の数々を軽く眺めていた。

が、ここで一つのこと気づく。

眼の端々に見える本の題名といえば、

『核融合と核分裂』、『原子力発電の仕組み』、『次世代を担うエネルギー』、『チエルノブイリの全て』、『人類の負の遺産、核兵器』、『国際社会、戦略兵器廃絶への歩み』、『米ソ宇宙開発競争』、『ロケットとミサイル』、『キューバ危機、人類滅亡の脅威』などど諸々だったが、よくよく見てみると、そのほとんどが原子力を題材にした、あるいはそれに関連するものを題材にした本ばかりなのだ。

核反応の基本的な仕組みはもちろんのこと、それを応用した原子炉の概要、原子炉の関連するさまざまな歴史と事件の資料、核兵器についての資料、さらには、より掘り下げた内容で、宇宙開発競争と並行して行われる核ミサイル競争の資料まであった。どれもこれも少なくとも原子力というものの存在を感じさせるものではあった。さらにもう一つ、気付いたことがある。

シンは、ほんのタイトルにある固有名詞に、はつきりと覚えがあったのだ。

間違いない、シンの元いた、コズミック・イラの世界にも確かにある言葉なのだ。

チエルノブイリは、実在していた原子炉であるし、アメリカとソビエト連邦も実在していた国家だ（今はもう、地球連合の設立とともになくなっているが）。キューバ危機も、人類を全面核戦争一步手前の状態にまで追い込んだ世紀の大事件として、今なお語り継がれている。おかげで、全ての原子炉を停止させ、深刻なエネルギー不足をもたらすニュートロンジャマーも、ある程度は正当化されているのだ。核戦争が起こることはなくなった、と...

もっとも、それを無効化するニュートロンジャマーキャンセラーの出現により、再び世界は核兵器の脅威に晒されることになったわけだが。

また、もう一つ気になる点がある。これは、少し考えないと分からないことではあったが。

核に関する文献を有するというのなら、それこそ、ニュートロンジャマーキャンセラーに関する文献だっていくつでもあるはずなのだが、どれほどさがしても無い。

というより、コズミック・イラの時期に関する、あるいは、そこからやや遡る時期の原子力に関する文献が、一切無かったのである。この本棚にある本のほとんどは、人類が本格的に宇宙開拓を開始する以前、いうなれば、人々の記憶から、記録へと移った出来事だ。勉強して知らない限りは、分かることもない事象だ。ここにある本のほぼ全てが、そのようなものだった。

それは今はいい。重要なのは、シンの世界に実在する。というか、まず間違いないシンのいた世界にしかないものであるはずの名が、幻想郷の書籍として眼の前にある、ということなのである。一体どういうことだ？

まったくもって分からない。

混乱するシン。

そのシンに対して応える言葉が分からず、不思議そうにしているさ
とりに代わって、藍が言った。

「あなたのその疑問については、私から説明しよう」

「どういうことだ？」

「まあ、話すと長くなるから、どこかに座ろう」

そういう藍についていき、本棚の近くに適当に設えてあった大きな
丸机に並べられた、人数分余りある椅子に、3人、それぞれ腰掛け
た。

シンと向かい合うように座った藍が言う。

「あなたは、自分が元いた世界から、この幻想郷に飛ばされてきた
んだ」

「あ、ああ、そうだけど」シンが応じる。

「そして、そういう事象は、結構多い．．．幻想郷というのは、そ
の根底を、あなたのいる世界と同じものとしているんだ」

「ああ、それは聞いた」

幻想郷というのは、コズミック・イラとは違う、一つの異世界のよ
うなものだと認識しているし、それは正しい。

そして、その根底が、要するに大元が同じものだと、紫から聞いて
いた。

藍は続けて言う。

「そして今も、この幻想郷と外の世界には、ある程度の関係性があ
るんだ．．．たとえば、外の世界で忘れ去られたもの、ある種の空
想とか、歴史に埋もれるどうでもいい記録、とかいうものは、幻想
となつてここにやってくる。例外はもちろんある、あなたとかもそ
うだね」

「．．．．．ということとは要するに．．．」

頭の中で思案を巡らせるシン。

こういうことも、さとりには全て読み取られている。

「あの本棚にある本は、外の世界で幻想となったもの、ということね。私、知ってる」

シンに代わってこう答えを出したさとりは、シンが、「あ、ああ、そういうことになるよな。ってか、知ってたんだな、あんた」と相槌をうった。

「そうだ。賢いじゃないかシン、すごいよ」藍は、感心した様子で言った。

幻想郷という得体の知れない世界に対し、戸惑いながらもすぐに順応してきたシンの適応力、とでもいおうか？それは相当なものだ、と藍は思う。

その考えを読み取ったさとりも、そういうものなのかと納得しておく。

外の世界で幻想となった出来事がこの世界にやってくる。

どうも、にわかには信じられないことではあるが、信じるしかない。頭の中でそう結論付け、納得するシンだったが、そうになると、また別の疑問が浮かんでくる。

「どうして原子力に関係する本ばかりを置いているのか、ですって？」

シンの問いを先読みしたさとの声に、シンはまたしても、「あ、ああ、そうだ」と返事をした。

さとりは、すぐさまこう答えた。

「そりゃあ、必要だからよ」

「いや、必要って・・・まさかこの幻想郷に核融合の技術があるなんてこと・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・まさか・・・あるのか？・・・核融合」

「ええ」

それこそまさか、だ。シンは啞然とした。核融合などというのは、自然においてはそう簡単に見れるものではない。

人類が、作為的に発生させることができるようになってから、表舞台にその名が知られるようになったものだ。

要するに、人が確立した、技術力の一環である。

この幻想郷は、そんな技術力などとは無縁の場所だと思っていた。時代的には、せいぜい産業革命すら起こっていないような時期。さらに言ってしまうえば、鉄砲がおばけの親戚ぐらいに思われていたような時期だ。

それぐらいの環境が、この幻想郷であるはずなのだ。

原子力はおるか、せいぜい電力があれば珍しい、というぐらいのところであるはずだ。

シンの脳内の混乱を読み取ったさとりが、こういう。

「私だって以前は、原子力なんてもの、言葉自体知らなかったわ」

「だったらどうして？」

「私のペットがね、ひょんなことで、原子力を身につけてしまったのよ」

「原子力を．．．み、身につける？」

「核反応を自在に操る能力を手に入れてしまったのよ」

「ま、マジかよ．．．．．ペットって、あのお燐が？」

「お燐ではないわ、もういくつかペットがいるんだけど、その内の一羽よ」

「一羽？．．．鳥なのか？．．．手に入れてしまった、って．．．最初から持ってたわけじゃないのか？」

「ええ、何者かから、エネルギーを操る神の力を与えられ、その結果、核融合の力を身に付けたそうなのよ」

「なんてヤツだ．．．神様の力がどうか、もうよく分かんなくなってきたよ」

「そして厄介なのが、そのペットが頭が『ハイ』になっちゃったのか、核融合の力を使って暴れだしてね、地上の世界にまで影響を出して大変だったの」

「それって．．．」

地底にいく前に見た間欠泉、そして、一昔前には、その噴出が特にひどかったという。

その理由が、今のさとの話なのだ。

さとりは続けて言う。

「その時は、お燐が私に内緒でいろいろと手を尽くしたらしくてね、一応、解決はしたわ。私に内緒でつてのが気に入らなかつたけど、まあ、それはよしとするわ．．．だけど、核の力というのは、思っているよりもずっとすごいものだっていうのが、最近分かってきたの」

「そうか、だから．．．」

「そう、原子力というものをもっとよく知るべきだと思ったのよ。ちょうどいい所に、原子力の歴史の初期が、幻想になりはじめていたからね」

「そういうことだったのか．．．」

「本当は、原子力を身に付けた本人に読んでもらいたんだけど、あいつ、本を読むような性格じゃないから」

「それって、言っちゃ悪いけど．．．」

「その通り、バカなのよ。鳥頭なの」

「あ、あはははは」

本棚の中にあつた原子力の書籍の真相とは、要するにこういうことだったらしい。

外の世界の出来事が幻想郷に現れるとか、原子力を与える神がいるとか、つくづく、この幻想郷は不思議なところではあるが、だからといって、納得できないままではどうしようもないのだから、シンはとりあえず、いつも通り、そういうこともあるといった具合に納

得しておく。

が、しかし、幻想郷での出来事の書籍を期待していたのだが、原子力ならシンにも分かるし、それについての本なら、読む必要はない。しかしまあ、改めて原子力を勉強するのには使えそうだが、それ自体も、また必要のないことだ。ほとんど、すでに知っていることばかりなのだから。

が、それでも、元の世界でも出来事がこの幻想郷に関係しているというのは、勉強にはなった気がする。

幻想郷とその外の世界がある程度関わりを持っているということはつまり、幻想郷で感じたことを、元の世界でも活かすことはできるということなのだ。

それはそうとして、

「その、原子力を身に付けたペットってさ．．．」

「ええ、妖怪よ」

「そうか．．．一度会ってみたいな．．．原子力を自在に使って、
どという気分なんだ？」

「さあ、知らない。多分その内会えるから、その時聞くといいわ」

「あんたのペットなんだから、呼んでくることはできないのかよ」

「私、放任主義だから．．．」

「で、気がついたらペットがとんでもない力を身につけてた、か．．
それがすでにとんでもない話だよ」

それはともかくとして、だ。

シンとしては、一度この地底の歴史というものを知っておきたい気分だったし、何とか、そういう機会は欲しかった。

「それなら、私よりもずっと詳しいのがいるから、そいつに会うといいわ．．．そいつ、鬼なのよ。旧都にいる」

「鬼？」

鬼というと、日本の妖怪の中でも屈指の有名な存在である。

鬼というものが、妖怪そのものを表現する言葉であるかもしれない。それほど、妖怪の中でも存在感の強いものだった。

ご多分にもれず、それもこの幻想郷に住んでいるわけだ。

その鬼が、地底について詳しく知っているということなら、是非会ってみたいものだ。

そこでさとりが言う、「でも、旧都は広いし、その鬼。まさしく神出鬼没で、どこにいるか分からないわよ?」

「それでもまあ、探してれば会えるさ...早速会いに行きたいところだけど、もうちょっとだけ、ここでゆっくりしていくとするか」
「そう。ごゆっくり」

以前から言っていることだ。急ぐ必要はない。

何事にも余裕と落ち着きが大事だ。

ひとまず今は、しばらく間この地霊殿でまんねりとしておくことにした。

天真爛漫、とは多分違うが、そういう可愛い性格をしているお燐とも、すぐに仲良くなれた。

しかし...

猫らしい(というのがどういうものかは分からないが)ふにゃふにゃした笑みを浮かべながらお燐がシンに言う。

「それにしても、久しぶりだよ。おにいさんみたいになかったいい男の人の死体がこっちにくるなんて」

「だ、だから死体って言うな。俺は死んでない」ぴしゃりとシンが応える。

さっき聞いた時も妙に気がかりだったが、このお燐、何故シンのことを死体などと呼ぶのだろうか。

ただ他人誰でも死体と呼ぶちょっとアレな性格、というだけなら別にそれで構いはしないわけだが、もしかしたら、ちょっとした理由があるのかもしれない。

自分が死体呼ばわりされている手前、シンとしては、一度お燐にはつきり聞いておきたかった。

「なあ、何で俺のこと死体なんて呼ぶんだよ」

「ん？ああ、そうだねえ、あたいのこと、あんまり話してなかったね。ここいらで一つ、いんとろぢゅーすさせてもらっよ」

「イントロ・・・ジューズ？」

かくして、お燐は、自身のことを簡単に紹介してくれた。

彼女の言う話では、彼女は地獄の火の車だか猫車だかの妖怪らしく、地獄の火焰で焼かれた死体を運ぶ妖怪であるらしいのだ。

博霊神社へ向かう道中であつた、寒気を操るレティのように、そういう性質をもった妖怪である、という。

そついう、死者と密接に、というか常に死体と付き合うような性質のためか、怨霊を操るのも得意、という話だつた。

それに、お燐は始めから妖怪であつたわけでも、人の姿になれたわけでもなく、長年の間、怨霊の力を吸って蓄え続けた結果だという。

お燐曰く、「涙ぐましい努力だねえ、くうくう！お空じゃないよ」

だそうだ。そついうこともあつて、怨霊を手足のように操ることができるという。

そして、レティの時に知つた通り、妖怪には、自分の性質がそのまま好みや趣味、生きがいにまでなつてしまう場合もある。小傘だつてその一種ではなからうか。

お燐もその例に漏れることはなく、彼女にも一つの趣味があつた。というのが・・・

「し、死体集めえ？」

さすがにそんな趣味を聞いてしまえば、シンといえども『引かず』にはいられなかった。

が、そんなことは露とも気にせず、お燐は凜々とした口調で続ける。「もう、いっぱい集まつたんだよ？大人から子供、老若男女とわず、おっきいのからちっちゃいのまで」

「そ．．．そ、そりゃあ、すごいこつたね．．．」
まあ、世の中にはいろんな人が（お燐は人ではないが）いるという話ではある。

人の趣味に対して悪い印象を持つことはよくない。
が、全面的に肯定するわけにもいかない。

さすがに死体集めが立派な趣味だとは、シンには思えなかった。

ちよつと待てよ．．．

ここでシンは、あることに気がつく。

死体を集め、それを趣味としているらしいお燐が、シンを死体呼ばわりする。

それが意味することが、分かったのではないか？

要するに、シンを死体として見ているということは、つまり．．．

脳内で答えを導き出したシンの身体に、猛烈な悪寒が走り、大きな身震いが起きた。

「ちょ、まつ、待てえ！俺を殺す気かあんだっ！」

「いや、おにいさんみたいになかつこいい死体、大好きだよあ〜」
まさしく猫なで声で、まさしく猫のように身体を摺り寄せてくるお燐。

シンの肩のところに頭を摺り寄せながら、上目づかいでこちらを見てる。

そう思うと、両腕でシンの身体にがしつと抱きついてきた。

「ば、馬鹿！俺は殺されないぞ！絶対に殺されないから、ちくしゅー！」

女の子（ではない）にこんな風にされるのは、男である以上、シンも嫌ではない。

だが、今回ばかりは話が別だった。

このお燐、どう考えてもシンを死体にする、要するに殺す気だったのである。

そんな相手では、どんなにかわいくて抱きつかれようがキスされようが結婚しようと言われようが引き剥がそうとするのは当然のことだ。

べったり張り付いてくるお隣の肩を掴んで、無理やり引き剥がそうとするが、どんなにぐいぐい引つ張ろうと、こちらに抱きつく腕が離れる気配は一切ない。

別に渾身の力がこめられている様子はない、むしろ、適度な力加減と女の子らしい柔らかい感触があつて心地よいほどであつた。いや、今のシンにはそんな気分はまったくくない。

「にやはー！」

シンに抱きついたまま、お隣が愉快そうな笑みを浮かべる。

このまま、噛みつかれてハラワタやら引きずりだされそんな気分だつた。

「だあーっ！くっそおーっ！！」

最早万事休す。

俺はこのままこの猫耳のかわいい女の子に殺されて彼女のコレクションに加わってしまうのか・・・

嫌な気分ではない、などとは冗談でも言えなかった。

しかし、もう覚悟を決めるしかないのか？

そう考えていた時であつた。

さつきまで肩から胸、背中にかけてべったり張り付いていた腕が離れた。

そのまま、シンの身体から少し離れたお隣が、清々した様子の笑みで、こう言つた。

「大丈夫だよー。今のところは、おにいさんを死体にするつもりなんてないから、安心してよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・今のところは・・・・ね・・・・・・・・とほほ・・・・・・・・」

とほほなんて言葉を実際に口に出すことがあるとは・・・・

キラと戦ったときにさえ意識しなかった死というものを、こんな間抜けな形で意識することになるとは。

一生の恥、とまではいかないが、随分と情けない気持ちだ。

しかしまあ、今のは、お隣流のスキンシップだったのだ。多分。

一線を越えれば死ぬようなスキンシップがあるのか、と疑いたい気分ではあるが。

シンとしても、最初からお隣にこちらを殺す気がないとすれば、彼女なりに自分と仲良くなろうとしたのだと思えた。

そういうことなら、よろこんで友達にでも死体にでも、いや、死体は駄目だが、とにかくなくなつてあげよう。

「ま、結構楽しかったよ。これから、仲良くやろうぜ、お隣」

そう言いながら改めてこっちからお隣の身体を抱き寄せて、まるで猫にそうするように頭をなでるシン。

「にゃーん」

猫そのものな鳴き声でシンの腕の中で、気持ちよさそうにもぞもぞするお隣は、改めてみると、中々、いや、べらぼうにかわかった。

「う．．．ううゝむ．．．」

何かこう、『男の男たる何か』がムズムズするのを感じるシンにも、こういうことを自然にしてしまう自分のことを、随分とラッキー스ケベなヤツだと思ふ意識はあった。

とそんな中でのことであつた。

「シン！うらめしやー！殺してやるー！」

こんなトチ狂った台詞を口走りながら、小傘が突然、シンに飛びかかるように抱きついてきた。

まさか、今しがたのお隣の行動に恐れ慄いていたシンの様子を見て、今のが有効な驚かせ方だと勉強したのだろうか。

「いや、お前じゃこんなことされてもぜんぜん驚かない」

シンが冷ややかにこう言い放つと、ぱつと身体を話した小傘が、不思議そうに、「え？うそー」と言ったので、やはりそうなのだろう。

小傘が、つまらなかつたギャグを丁寧に解説するような口調で言う。
「いやね、だつてさ、さっきので勉強したんだよ。ほら、さっきの
つて、いわゆるさ、やんでれ？ いや、めんへら？ かな？ そういうの
でしょ？ そういうのって怖いでしょ？」

「いや違うだろ。つてか、そういう言葉知つて何で人の驚かせ方
を知らない」

「まあそれはそれとして、だつたらさー、あたしがやったつて、驚
くはずなんだよ。全然驚かないつてのはおかしい、おかしいですよ」

「いやおかしくない。ぜんっぜん驚かない」

「そ、そんな馬鹿なあゝ・・・」

「まあ、まだまだ勉強不足だな、お互い」

とまあ、そんな具合に、お隣達とみんなでいちゃこらじゃれついて
いた。

ついでに、本棚にあつた原子力の本も、少しだけ見せてもらった。
実を言うと、原子力というものを知っていても、その昔の歴史とい
うものは、せいぜいそういう出来事があつた、程度にしか分かつて
いないのである。

しかも、シンが物心ついて、幾分か、という時期には、すでにニュ
ートロンジャマーキャンセラーにより、核の力も、過去の遺物にな
りはじめていたのである。（今はそうとも言い切れないが）

だから、たとえシンの世界でに書物といえど、参考になるものはあ
るかもしれない、と考えたのだ。

物事を知るためには、知っていることを改めて掘り下げていくのも
大切なのである。

原子力というものが最初に発見されたのは、西暦1938年、さら
に掘り下げて、放射線だけの発見ならば、1895年まで遡る。
そして、発見から十年経たずに、マンハッタン計画により兵器への
転用が開始され、そして、シンとてよく知っている。原子爆弾の初

の実践投下である旧日本、広島と長崎での起爆により。その、脅威という言葉ですら形容できない威力を世界に知らしめることとなった。

そこから、世界各国はその力を得ようと、核開発競争を開始する。1951年、ようやくその力を生産的目的に転用した原子力発電に成功することになるが、少し賢い考え方をすれば、それも所詮は核兵器開発のための副産物ということは想像できるだろう。

シンはその時代の世界情勢など知らないが、当時は、冷戦という昏迷した時勢であつたとは知っている。

どんな技術であろうと、それが戦争へと終結する、そういう時代である、という話だつた。

藍とさとり（後の者たちは興味がないらしく付き合つてくれなかつた）と共に、原子力という物の経緯を追つていくシンの心境は、幻想郷の住人であるさとり達とほとんど同じものだつた。

いくら同じ世界でのことと言っても、もう、何世紀と以前の歴史なのである。

「こつやつて、文字を羅列されただけじゃ、いまいち実感というものが無いわね」というさとの言葉にも、シンは、「そつだな、俺だつて、同じ世界に生きてるとはいつても、まるで別の世界でのことつようだ」と、応えるしかなかつた。

が、しかしだ。

「核兵器つてのは、恐ろしいもんだつて気持ちには、確信が持てるよ。実際、かなり近いところからその威力は見る機会があつた」

ニュートロンジャーマンキャンセラーを得、核兵器を再び使用できるようになつた地球連合軍は、すぐさま水を得たように、プラントへの核攻撃を実行する。

シンがまだ憎しみのはけ口を得られない少年だつた時期、すなわち前大戦の時でもそつだつたし、その後の戦争でも使用される機会があつた。

だが、どれも宇宙空間での使用であり、地球上での爆発はなかった。だから、噴き上がるキノコ雲も、抉れ飛ぶ大地も、溶けて蒸発する、あるいはその過程の状態で冷酷に生かされた人の姿も、百年残る大気汚染も見ることにはなかったが、まるで一つの星が誕生したような巨大な火球を見れば、それがどれほど恐ろしいものかという意識は嫌でも持てるはずだ。

核兵器の脅威というものは、重々知っているのである。

そうなれば、言い方は悪いが、対岸での火事のような、広島、長崎の原爆投下も、チェルノブイリの原子炉事故も、全面核戦争の危機に直面したキューバ危機も、まったくその恐ろしさが分からない、というわけでもなかった。

そういう気持ちをシンが抱くというのは、『知る』という点では、さとりには非常に助かった。

シンの抱く核への意識を通して、核の脅威を知ることができるのだから。

「.....」

さとりとしては閉口するばかりであった。

下手をすれば、世の中が破滅するような力を、自分のペットが得ているというのだから、おしのように黙り込むのも仕方がない。

しかも、自分自身、正直いって、そういう意識が少なすぎたのである。

今回ばかりは、放任主義とか放し飼いなどとは言っていられない。本気でよく言い聞かせる必要があるだろう。

そんなことを考えていた、その矢先だった。

「ただいまー！なにごちゃごちゃしてんのー？」

当人が、ちよつとした外出から帰ってきた。

エネルギーの神、ヤタガラスを吸収したカラスの妖怪というややこしいヤツ、霊鳥寺 空、通称お空がだ。

書斎に入ってきたお空に対し、お燐が、「あ、お空、いいところ来たね。今ね、お客さんが来てたんだよ」と、シン達の事を紹介しようとするが、その前に、先にさとりがこう切り出した。

「お空、いい所に戻ってきたわ、ちよつとこっち上がってきて」

「ええ？なんですか？」

「いいから」

さとりに言われたとおり、書斎の階段を上り、二階に上ってきたお空と、シン達は対面した。

お空が心底きよとした表情を浮かべる中、シンも同様、ぽかーんと、視界に現れたお空の姿を眺めていた。

「あのカラスが、原子力を身に付けた私のペットの、お空よ」というさとりの言葉も、曖昧に聞こえるだけだった。

まあ、ざっと見た見た目は、（幻想郷における）普通の妖怪だったわけだが、奇妙なのが、左右で違う靴と、それが霞むほどの存在感を放つ右腕だった。いや、腕なのかどうかさえ分からない。

二の腕あたりのところから、棒状のものが真っ直ぐに伸びているのである。義手、だろうか？にしたって、本当にただの棒なのである。手の形を模しているというわけでもなく、特別な機能もなさそうな棒だ。腕として機能させるならば、これではない方がマシ、という感じだ。

そんな、奇妙な棒状の腕が、お空が原子力を制御するために重要な役割を持つ制御棒であることが分かるのは、もう少し後のことだ。まあ、そんな奇抜極まりない（こう感じるのも何度目だろうか）見た目のお空だが、もう一つ印象として感じるものがある。

神様から原子力を自在に操るという能力を授けられるような者なのだ。

それほどのものだから、それはもう相当な智慧と見識を兼ね備えた、聖者のようなものだろうとばかり思っていたが、そういうイメージ

に反して、お空の見た目は、ごくごく普通だったのだ。

顔つきも、別段賢そうには見えない。

まあ、見た目だけで人を判断してはいけない。顔がどうであろうと、その者が持つている賢さには関係ない。

が、藍を初めて見たときは、すでに見た目から賢そうだと察することができたのだ。

お空に対しては、そんな気持ちは微塵も感じない。

というかむしろ、いつぞやに会ったチルノと同じような印象すら受けるのだ。

要するに・・・？な頭、ということだ。

が、それこそまさか、な話だろう。

原子力なのだ。そんなとんでもない力を自在に操るといっものが、馬鹿であっていいはずがない。

そういえば、さとりがすでにお空は馬鹿だと言っていた気がするが、そんなことは忘れる。あるいは、さとりの冗談なのだろう。

原子力を操るには、ちょっと足りないだけで、充分賢いのを大げさに言って、馬鹿だと言ってるだけなのだ。

きつとそうだ。

シンにお空を紹介し、次いで、「で、お空。彼がお隣の言っていたお客さんの、シンです。その隣の狐は、まあ気にしないでいいわ」と、逆のことをする。

「失敬だな」と狐目で笑う藍のことを。本当にまったく気にしない様子で、「ふん」とため息をつきながら、なおもシンのことを眺めるお空。

よくよく見ると（その必要もないが）、彼女、それなりに大きな袋を両手で抱えている。

何が入っているのか分からないが、いっばいにそれが入っているらしく、大きく膨れていた。

一体何が入っているのだろうか？原子力とかいうのだから、ペレッ

トとか、劣化ウランとか、モックス燃料とかだろうか・・・いや、そんなものを袋詰めにするなど狂気の沙汰だが。

まあ、それはともかく、袋の中身は、すぐに判明した。

ゆで卵だ。

「うにゅ」

袋の中からつやつやになった卵を取り出したお空は、すぐさまそれを口元に運んで頬張った。

続けて、ゆで卵がパンパンに入っているらしい袋をシンの方にさつと掲げて、言った（？）。

「ふぁふえふ（食べる）？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いや、まさかのまさかのまさかだ。有り得ない。

原子力だぞ？馬鹿なわけがない、絶対がない。

必死に自分自身に言い聞かせるシンだったが、その心をさとりが容赦なくうち砕いた。

「残念だけど、お空は中々の馬鹿よ・・・30分前の自分の行動が分からないほどの」

「えー・・・・・・・・・・」

「まあ、それはそれで、お空、こっち来て座りなさい」

「うにゅ？」

絶句するシンを余所に、さとりは机の方にお空を招いた。

ゆで卵をむしゃむしゃ咀嚼しながら飲み込んだお空は、机の上にゆで卵入りの袋を置いて、さとの隣の隣の空いている椅子に腰掛けて、もう一度シンに対して言った。

「食べる？間欠泉センター土産、核融合卵」

「・・・・・・・・げ、核融合、卵・・・？」

「うん、おいしいわよ？」

「じ、人畜無害なんだな？放射線とかないよな？」

「うん」

「じゃ・・・じゃあ、食べる」

半分放心して妖夢みたいになったシンは、お空曰く核融合卵なるゆで卵を袋から一個取って、頬張った。

「・・・うん、うまい・・・」

「私も食べよ」とさとりも袋に手を伸ばす。

「気に留められていないのをいいことに私も核融合卵をいただくのであった、っと」藍もついでにゆで卵に手を伸ばす。

「まあ、それはともかくとして」と、さとりが切り出す。

さとりは、お空に、シンのことを詳しく話した。

外からこの幻想郷に飛ばされ、幻想郷を知ること、そして、平和というもののために各地を回っていること、そして、今しがた、原子力についての勉強をみなでしていることも話した。

「お空、あなたも、シンと一緒にちよつと勉強しなさい」

「えー、やですよ」

「お仕置きするわよ？」

「すみませんでした、慎ましくお勉強させて頂きますわ」

「・・・」

ということ、原子力を操る張本人であるお空を加え、シン達は、さらに原子力の資料を読み漁っていた。

そんな中で分かったことだが、このお空、本当に相当な馬鹿で、同じことを何回も繰り返し言うような見事なほどの鳥頭だったが、それでも、原子力の知識は相当なもので、その点に関しては、シンの想像通りの、智慧と見識を備えていた。

もともと、そんな博識さも、持前の鳥頭のせいで台無しだが。

それはともかくとして、だ。

原子力、すなわち核反応には、二つの方法がある。

核物質に対し中性子をぶつける方法は同じであるが、二つの軽い原子核を融合させ、一つの重い原子核に変換する融合反応と、その逆で、一つの核を二つに分裂させる分裂反応。まあ、名のとおりだ。

また、核分裂の場合には、分裂するための元の物質がいる。それは一般的には、ウランだ。

そして、お空の話では彼女は、核融合も核分裂も、左右で形の違う足で自在に操るらしい。

そして、殊更奇抜な右腕は、それを調節するための制御棒であるという話だ。

制御棒というのは、実際の原子力発電所でも使用されるものの名称である。

また、お空の場合、核反応に使う原子は水素である。

水素爆弾がクリーンな核兵器などと称されるように、水素の核反応では、放射能も、廃棄物などもでない。

コズミック・イラにおいても、いまだ普及していない（というか、普及する以前にニュートロンジャマーによりその機会を失った）水素の核反応が、お空の具体的な能力なわけだ。

また、その制御も、お空はほぼ自在に行える。

右腕の制御棒は、たった一本で、本来原子力発電所で使われる数十本の制御棒の機能を一手に担っている。というか、それ以上の機能を有している。

たとえば核分裂なら、続けざまに発生する分裂の連鎖反応を一瞬にして止めることができる。だから、本来ならば、核燃料数gで液体燃料数十分に相当する莫大なエネルギーを、カレーでも煮込めそうな微々たる熱量に留めることだって、その気になれば不可能ではない。

もっとも、お空いわく、「せっかくものすごいパワーを出せるようになったっていうのに、それを小出しにするなんて馬鹿な話だよ

え〜」ということだった。

要するにお空は、連鎖反応を途中で止めるよりも、むしろその逆、連鎖反応を一切留めることなく、分裂反応からもたらされるエネルギーをもれなくすべて発揮するほうが気分がいい、という話だ。そういう問題ではないと思うが・・・

比類なき鳥頭を有するお空であつたが、なんだかんだといって、原子力に関する勉強には興味があつた。

と、いうよりは、外の世界からやってきたシンに興味があり、そのシンが話す、もっと現実的な方向での原子力の話に興味があつたのかも知れない。

シンとしても、彼女達と勉強する中で、原子力というもののへの価値観というものを、改めて認識することができた。

人類というのは、古代より多くのエネルギーを発見し、それを生活に活かしてきた、火も水も、太陽の光もそうかも知れない。それらを始祖とし、人類は、エネルギーとともにその文明を、そして技術力を進歩させてきた。

火を起こすための技術、そこから発生する熱をより強く、大きくするための技術、そして、そしてその熱を、別の力に変換しようとする技術。

その中で、多くのエネルギーを生成するために利用される物質、すなわち資源が発見され、その恩恵とともに、人類の文化は倍々ゲームのように、飛躍的に進歩していった。

その最たるものが、莫大なエネルギーを発生させる原子力であり、大気汚染を食い止める原子力発電であり、一発で戦略を塗り替える核兵器なのである。

原子力への理解を深めることは、人類のエネルギーとの歩みを理解するということなのかもしれない。

シンはそう感じていた。

気が付けば、ちょっと目を通すぐらいのつもりだったのに、原子力の資料も、もう3、4冊目に目を通し始めていた。

お互い身を寄せ合って、ほんの内容を熟視するシン達の眼には、（シンはともかくとして）まるで何も知らない子供のような色があった。

「原子力にしても、他の何にしても、真っ先に戦うために利用しよう、とか考えつくのが人類だ」と語るシンに対し、さとりが、「そうなの？」と返事する。

「そうだよ。多分、そうだ。俺にはよく分からないけど、人類って、その先祖が生まれて、石を加工して使うようになってから一番最初に作ったのが、獲物をしとめるための刃とか矢じりだったんだ」

「狩りは生きるために大事なことだ。その日食べるものが、その成果で決まるんだから、そのための道具を真っ先に作るってのは、当然なんだろうね」と、藍が返す。

それに対して、シンは言った。

「そりゃ、必要なだからな。そうだよ。でも、原子爆弾なんて、喰っていくために必要な？銃にしても戦車．．．って、みんな分かるかな？それにしても、なかったら生きていけないってわけでもないだろう．．．それでも、どんな技術だって戦いに利用しようっていうのはさ．．．」

「人間って．．．何をするにしても戦って決着をつけようとする、馬鹿な生き物、ってこと？」と、さとり。

「かもしれない．．．」

原子力にしてもそうだが、過去の歴史をひも解いていけば、ぼんやりとも分かってくる。

人間、政治とか経済とかは苦手なのに、戦争だけは人の得意なのである。

政治がどれほど破綻しよう、戦争になると、勝利のためのアイデアが湯水のように湧いてくるのだから。

人類史の歴史が、戦いの歴史であることは、否定のしようがないだ

ろう。

だが、同時に、分かっていることもある。

「それでも、人間の賢さというものは、馬鹿にはできない」

シンの脳裏で浮かんだ言葉を、さとりが代弁する。

「ああ．．．」シンは、さとりの、同時に自分のその言葉に静かに返事しつつ、続けた。

「人類つてのが、本当に戦うしか能のない生き物なら、原子力なんてものが見つかるずっと以前に滅んでるさ．．．大事なのは、戦う以外の道を、ちゃんと探そうとしてること、そして、見つけていることなんだ」

「そうなの？」お空が言う。

「そうさ．．．インターネットつてのがあってな。世界中のいたるところを電気の道みたいなので繋いで、いつでも情報が伝達できるつてものなんだ、すごいだろ」

「うん」藍が返す。

「それだつて元は戦争のための技術だったんだ、兵隊同士が、簡単に戦況を知るための技術だったんだ。でも、戦争が終われば、もっとマシな使い方があってのはすぐに分かる。だから、実際に、社会の動きをもっとよくするために使われだしたんだ。多分そうだと思う。インターネットつて、俺の世界ではもうずっと昔からある技術だから、実はよく分らないんだ．．．でもさ、それつて要するに」

「技術力の生産的応用の方法を．．．」

「人類はよく知ってるってことなんだな？」

シンの考えを代弁するさとりの声に、藍がおっかぶさった。

「ちよつと．．．？」いぶかしむさとりに、藍が返す。

「私だつて理解力はいいんだ．．．それに、考えを改める、つてのも、上手そうだね」

その藍の言葉に、「そうかもな、いや．．．そうだよ」と返しつつ、シンはさらに続けて言う。

「それに、その方法をすぐに実現する能力もすごかったんだ。核兵器だって、原子力が見つかったからちよつとの間で発明されたんだぜ？それってすごいだろ？お空、あんたはそういうのを自在に操る能力を身に付けたからどうしようもないけど、たとえばさ、幻想郷の妖怪達に、核爆弾作れって言って、十年やそつとで作れるか？」

「．．．作れるな」

「えっ？」

さらりと言つてのける藍。

頭の中が巨大集積回路と同等の思考力を持つ彼女がこう言うのなら、そうなのだろう。

どこまでも拍子抜けだ。

しかしまあ、幻想郷なら確かに、十年といわず、その半分の年月があれば、原子爆弾の一つは作れそうだという気持ちは、確かにあった。

まあ、それはともかくだ。

「人類自身の眼で見ているから、そんなに意識してないだけで、人の持つ科学力とか技術力とか、そういうものに対する理解力とか、あるいは、判断力か？そういうのって、他の生き物が追いつけるとかそういう次元のものじゃないと思うんだ．．．そういう、人類だけが持つ能力ってのは、俺、大事にするべきだと思う。たとえば、人同士で傷つけあうような事態を呼んでも、だ」

「そして、平和のためには、そういう高い能力が、お互いを傷つけるようなことがないように、よりよく使っていく必要がある、ってことなのね」さとりが言う。

「．．．俺、そんなこと考えてなかったぞ？」

「でも、分かるわ」

「．．．そうだな．．．あんたの言う通りだ．．．人類の高い技術力が、地球環境を悪化させたとは言われてるし、それはそうだろうけど．．．」

「人の持つ個性をわざわざ押し殺す必要はない」今度は藍が言う。

「一々、言いたいことを、いや、言いたいことが思いつく前に、大事なことを言われてしまう。」

「．．．まいったな、すごいよ二人とも．．．きっかけさえあれば、俺でも思いつかないような答えがすぐに出てくるんだな」

「でも、きっかけがなければどうにもならないさ。公式がなけりゃ解答することはできないんだ」自嘲気味なシンの声に、藍がこう返す。

「きっかけか．．．」

そう、きっかけだ。それも大事なことだ。

平和を作ることだって、きっかけがいる。きっかけさえあれば、平和はすぐにも手元に寄ってきてくれる。

そしてそのきっかけこそが、この幻想郷での旅なのかも知れないのだ。

「．．．いい勉強になった気がする．．．さとりも藍も、ありがとう」

「いえ、どういたしまして」

「この程度の頭なら、いつでも貸してあげるよ」

「ねえ．．．あたしは？」

「あ？ああ．．．お空、お前は、その．．．ゆで卵うまかった、ありがとう」

「それかい．．．」

原子力というのも、その歴史の初期こそは、破壊と混沌ばかりだったが、時を経て、もっと安全に、そして人道的に、モラルをもって使われるようになっていったのだ。一時の狂気はともかくとして、だ。

その危険性をよく知った上で、よく熟慮し、同時に、その恩恵を最大限に、有効に、有意義に使ったための努力を、人類はしてきた。それこそ、人の知恵というものの良心の裏付けではないのだろうか。

平和のためには、それを信じるしかないのだ。

信じるとか、きっと、という言葉ではなく、確固たるものが必要であるというのは分かる。

だが、信じることの大切さを、シンは知っているのだ。

さとり達のおかげで、大事なことを勉強できた気がする。

特別、幻想郷でなければ学ぶことのできない、ということではなかったが、こういう場合には、関係ない。

重要なのは、幻想郷というところで、いろいろな者達に出会い、いろいろなことを勉強したという、『そのもの』なのだ。

出会い、分かり合うこと、そして知ること、改めること、それは、平和以上に、生きていくために必要なことなのだ。

これ以上は、今のところ学ぶことはないだろう。

原子力についての勉強だって、いわば、既存の知識の復習であり、はつきりと言ってしまえば、シンには必要のないことであった。

ということなので、原子力の本を読み漁るのも大概のところでは止めることにした。

それに、いつの間にやら、日も暮れるという時間になっていたようだったのだから。

陽の光が差さない地底なので、いまいち時間の間隔がなかった。

そのため、この地霊殿に着いたころの時刻もよく分からなかったが、それを含めて、さとりに会うために幾分か的时间がかかったことも込みで、結構な時間を読書ばかりに使ったらしい。

「はっはは。何か、学者にでもなった気分だ」愉快そうにそういうシンに、藍がぴしゃりと応えた。

「本ばかり読んでれば学者さんだって考え方は、どうかなあ？」

妖怪の山の麓の湖に佇む洋館に住む、無数の本に埋もれる図書館にて年中過ごすある少女を思い出しながらの発言である。

「それもそうだけどさ」

ここで、シンはとあることを思い出した。
一度さとりに対してした質問である。

その時は、お空に聞けばいいと応えられたが、今、ちょうどそのお空がいるのだ、ここで聞いておくべきだろう。

「なあお空、お空」

「なに？」

「原子力を操るってさ、どういう気分なんだ？」

何に使うにしても過ぎた力、それこそ、全てのものを破壊しつくしたって余りあるかもしれないほどの力を持つという気分は、どういうものなのだろうか。

しかもそれが、何人もの人の手で、慎重な思案の果ての判断に、多くのものの命運という巨大なものに委ねられるものでもなく、たった一人の意思で、どうにでもできるのだ。

原子力の二面性を理解しているシンとしては、一度その気持ちを聞いてみたかったのだ。

さて、そんなシンの期待に対して、お空の出した応えといえば．．．

「さあ？」だった。

「．．．．．」

「だってさ、気分なんて、ちょっとすれば変わるわよ。原子力とか核とか言っただって、普通に暮らしてる分には何でもないよ」

「．．．．．」

まったくもって、こいつの頭の単純さには呆れかえるばかりであったが、しかし、お空の言うことにも、確かに一理はある気がした。どんな技術力でも、それが普及していくにつれ、生活の中で意識することは少なくなる。

原子力だって、それが普遍のものになり、核兵器の脅威も、その削減条約の発足と共に、徐々に薄れてきた。やがて、人々の心には、当たり前のものであり扱われるようになる。現に、ニュートロンジ

ヤマーが出現する以前には、空気と同じように、当たり前にあるものだと思っていたのだ。

技術など、人の気持ちには関わらないのかもしれない。

そして、気分は変わる。これもよく分かる。

コズミック・イラ以前に、『核抑止』とか、『相互確証破壊』とかいう言葉があった。

たとえば、核兵器を敵国に撃つ、そうすれば、敵国も核を撃ち返す、そうなれば、被害を受けるのはお互い同じだ、それ以上に、核による汚染は世界中に広がる、最悪、全面核戦争から、人類の全滅戦争に発展するかもしれないのだ。

それを承知で、核を撃つわけがない。だから誰一人として、核は撃たない。それが核抑止だ。

だがそれは、所詮は『推測』だけの話なのだ。

お互いが滅びることを承知で、核を撃つことはないかもしれない。だが、撃つかもしれない。

それこそ、人の心は移り変わるものだ。

端的な言い方をすれば、人は、気分次第で世界を滅ぼすことだってあるかもしれないのだ。

どれほど巨大で脅威的な技術力であろうと、それを扱う人の心が一つに定まることはない。

技術が人の心を縛りつけるのではなく、むしろその逆である。

人の心は、技術力であっても置き去りにする。

要は、身勝手なのだ。

それにシン本人としても、自分が原子力を操ることができるようになったとしても、どうせ使うことがないと、すぐに忘れるかも知れないのだ。あるいは、ひよんなきっかけで、使うかもしれない。

その答えがはつきり出ないことこそ、人の技術力に対する意識そのものへの答えなのだろう。

全ては、時代、思想すなわちモラル、そして、個人の心の問題なのだ。

そう、全ては．．．

だが、もしそれを、その移りやすい人の心を、一つの確かなことで固めることができれば、技術力というものは、何よりも確固たる、そして強靱たる人類の、森羅万象に対する最大のアドバンテージになるのではないだろうか。

人類の後の歴史、宇宙開拓、それに続く新しい世界を乗り越えるための、強い力に．．．

PHASE - 12 『心の声』

どんな人間だろうが、できることがある。

それは、生きること、そして、自分の心を信じることだ。

それが、人に許された、絶対的な権利であり、誰にも侵されることのない、最高の力なのである。

またその命は、何も自分一人のために尽くすものではない。

その日の夜は、地霊殿にて過ごさせてもらうことになった。

広い割には、住んでいるのがさとりと、何匹ものペットだけのなので、空き部屋の数に相当にあり、シン達を休ませるぐらいのことは、どうでもなかったのである。

さとり達も、シンのことを信頼しているらしく、居たいのならずつといればいい、なんなら、この屋敷の住人になってほしいとまで言ってくれた。

だが、それはできないことであろう。シンは、そもそも幻想郷の間ではないのだから。

だが、こうまで言うてくれることは素直にうれしかったし、それなら、その言葉に甘えて、もう二、三日はゆっくりしていこうとも思えた。

そんなことを考えながら、宵は更けていく。

そして翌日。陽の光の差さない地霊であっても、朝の訪れは感じるものだ。

シン達は、朝早くから、行動を開始した。さとりが言っていた、地底について詳しい鬼を探しにいくと思ったのだ。

地底の歴史というか、移り変わりを知っておきたいというのは、大分前から思っていたことなのだ。

いずれは知っておこうということなら、今すぐ行動を起こす必要はなからうが、逆に、のんびりしておかないといけない、というわけでもない。

幻想郷での日常に、忙しさはない。時間なら、やりたいことをやるための時間はいくらでもあるのだから、いつ行動を起こそうが、それは個人の自由なのである。

それは、産業革命以前の世界における日常と同じだった。時間における規律がなく、この時に必ずこれをやれ、という決まりがないから、いつ何をしてもいい。

適当に朝食を済ませた後、シン達は、件の鬼を探すため、以前通りがかった旧都へと向かうことになった。

折角なのだから、「さとり達も一緒に行こうぜ。どうせ退屈してるんだろ？」と、彼女達も誘ってみたが、それに対し、さとりはこう応えた。

「駄目よ、いけない、いきたくない」

「．．．なんでだ．．．いや、そうか．．．」

その返事の原因を聞こうとしたシンだが、そこで、あることを思い出した。

旧都を幾分か歩き、地霊殿が見えてきたところに感じたことだ。

忌み嫌われて地底に封印された地霊達が、お互いもまた忌み嫌うこともあるのだろうか、と。

その答えを、今さとりが教えてくれた。

病を操るとか、嫉妬に狂わせる能力というのは、こちらも同様に、それと対抗できるほどの力を持っていれば問題はない、互いに打ち

消し合つて無害になることはあろうし、肉体を苛むなら肉体を強く、精神を狂わせるなら精神を強く持てば問題はないのだ。

だが、人の、あるいは妖怪の思考を読み取る能力というのは、どうやっても対処のしようがない。

心が筒抜けでは、人間関係も糞もないというのは、何度も述べていることである。多少の例外はあるとしてもだ。

さとの能力は、地霊の持つ能力の中でも、一層特殊なものなのだ。それはすなわち、特別嫌われているということでもある。

彼女の仲間、といつてもいいはずの地霊であっても、誰もさとりを好いてはいないのだろう。

そんな者達が多くいる旧都には、とてもじゃないがいきたくないのだろう。

そう考えるシンの心を、さとりは読み取り、こう呟いた。

「『またあいつだ、来なきやいいのに』と呟く声が何度も頭の中で聞こえるっていうのは．．．そりゃ、嫌な気分にならないわけがないもの．．．いきたくない」

「．．．．．」

シンとしては、返す言葉がない。

だが、これではあまりにさとりがかわいそうだ。そんな気持ちも、それ以上に強かった。

なら、どうにかしたいという気持ちも、だ。

何をどう言えばいいのか分からずとも、シンの口は、無意識に動いていた。

「それでも、一度いつてみようぜ、みんなのところに、みんなの前に。嫌われるのが嫌なら、俺の陰に隠れていてもいい。人の心を読むのが嫌なら、俺の考えてることだけを読み取っていればいい。そうやってもいいから、みんなと同じところに立ってみるんだ．．．どんなに惨めでもいい、それでも、みんなの前に出てみるんだ．．．そうしないと、ずっと寂しいままだ．．．」

「．．．．．」

さとりは、俯いて視線を落とし、黙り込んだ。

それでもなおシンは、穏やかな口調で語りかける。

「大丈夫だ．．．どうしても嫌になったら、俺が何とかしてみる．．
．何とかする」

「．．．．．」

「それでも嫌なら、それでいいよ．．．．．あんたは、どうしたい．．．？」

やさしく語りかけるシンの声に、さとりは再び、ゆっくりと視線を上げた。

そして、シンの瞳を吸いこまれるように見つめるその眼は、今にも泣きそうになっていた。

シンは思った。

妖怪がなんだ、幻想郷がなんだ。

何もかも同じ、同じじゃないか。

命も心も、生活も、戦うことも、自分勝手な考え方も、そして、寂しさも、全て変わりはないじゃないか．．．

怖いことなんて、恐ろしいものなんて何もない。

さとりは何も応えることはなかった。

だが、何もいわず、ゆっくりと、シンの身体にしがみついてきた。

それだけで、彼女の答えを知ることができた。

その丁寧な物腰から、妙に大人びた雰囲気さをとりから感じていたが、今回ばかりは、彼女のことを、見た目相応の、か弱い少女として見る事ができた。

そして今になって、さとりの背丈が、自分よりもずっと小さいことにも気付いたのである。

すぐるように抱きついてくるさとりの身体を両腕で包み込みながら、シンは思った。

元の世界に戻って、本当に世界が平和になったなら．．．そうでき

るだけのものを次の世代に伝えることができたなら、その準備ができたなら、その時は、もう一度この幻想郷に、必ず戻ってこよう。そして、この地霊殿に、住まわしてもらおう、それがいい。

ステラもレイもデュランダルもういない。ルナマリアにも、当の昔にフラれてしまった。

ザフトの軍人として果たすべき使命も、捌け口を求め、心の中を蛇のようにつたうつ憎しみの炎も、もうない。

キラ達がいれば、世界の平和を維持していくことなど簡単だ。

今の世界に、本当の意味でシンを必要とする者は、もういない。

そして、世界に対し、ボロボロにうち負けたシンが、本当の意味で世界に求めるものなど、平和になつて欲しいという願い以外には、なかったのである。

だから、この幻想郷で生きていくことだつて、いいはずだ。

小傘が、会うヤツみんなを驚かせるような大物になるのを見ているのもいい、そのために、力を貸そう。

藍と橙とも、もっと仲良くなろう。

そしてさとり。

彼女には、もう少しばかりのやさしさが必要だ。

彼女の心を幾分か強くするまで、彼女もまたシンを必要としなくなるその時まで、地霊殿の、幻想郷のシン・アス力として生きていく。

誰かのために、それだけのために、生きる。

それは、かつての、自分の憎しみのために全てを破壊しようとしていたころのシンには、考えることもできないことであつた。

だが、憎しみの虚しさを、命の、関わり大切さを知り、本当の自分の心を取り戻すことができたシンは、世界の、人々の、そしてあるいはたった一人の個人に献身する、清い心が目覚めていた。

キラでさえ、持っているのか分らない心。

何の見返りもなく、人の友となる、恋人となる心。あらゆる気持ち

を、一身に受け止める心。

それは、利己的でありながらも、誰もが友人になれるこの幻想郷でこそ、活かされていく心なのかもしれないのだ。

そして、幻想郷で活かされる心は、また、あらゆる世界で生きていく。

「俺．．．その内必ず、ここに住むよ．．．」

さとりにには全て分かっていること。

だがシンは、あえてそれを口にする事で、地霊殿の住人になると、すなわち、幻想郷で生きていく決意を、確かなものにした。

「お燐、お空、あんたらも来るか？」

さとりの心は決まった。

シンは、お燐達にも呼びかける。

「いくいく。シンとさとり様のいくところなら、どこだってついてくよ。」とお燐。

「そうそう！で、どこいくのかしら？」とお空。

「いや旧都だって」

お燐達も、今のシンとさとりのやり取りを見て、シンに対しての信頼を、より強く感じた。

シンほどのお人よしなど、生まれてこの方初めて見たかもしれない。それは、藍としても同じだった。

これほどの甘い人間、お人よしにもほどがある人間は久しぶりに見た。

自分勝手な者ばかりの幻想郷では、絶滅したのかもしれないと思っていたほどの人種だ。

シンのような人間は、この幻想郷で生きていくには、ちょっと難しいものがあるかもしれない。

なんせ、恩を仇で返すようなことを平気でするような者ばかりなのだから。

だが同時に、人にやさしくするという性格は、よく好かれるはずだ。

それだけでも、シンなら、幻想郷でも、立派にやっていけるだろうとも思った。

シンの身体から顔を離し、柔らかな笑みを浮かべるさとの顔を見れば、なおのことそう思えるのだった。

—— いい具合になってますよ。紫様——

藍は、無言のうちに、本当の主人に対して、こう報告した。

かくしてシン達、そしてさとり達は、旧都へと出かけていった。

陽の光が差し込まない地底に朝はなく、また昼もなく、常にうす暗い。

だが、賑やかなところというのは、多少うす暗い方がより見栄えがよくなることもあるのだ。

周りが暗いなら、明るくするために、篝火なり行灯なり提灯を灯せばいい。

そしてそれらの明かりが、むしろ遠い天から降り注ぐ陽光よりも鮮やかに自分達を照らしだし、暗いところだからこそその活気を作り出すことができるのだ。

宵越しに行われる祭りが、一層活気あるのと同じようなことだ。

そう、旧都の賑やかさは、まるで祭りのそれだった。

酒に踊りに盤戯に、道行く中で出会う地霊達のほとんどが、まるで人生を謳歌しきっているようだった。

そして、自分達のことになんて夢中になっているおかげで、シン達、すなわちさとり達のことなど見向きもしないのは、今のところは助かることだった。

しかしそれはそうとして、やはり、シンには気になることがあった。何度も述べるが、かつて忌み嫌われて地底に封印された地霊達だが、今こうやって旧都を練り歩きながら彼らの姿を見ていると、とても

そうは思えないのである。

自分達の不幸な生い立ちなど、まるで気にしていない。
むしろ、なまじ普通の生き方をするよりも、ずっと豊かそうであった。

一体何故か？

かねてから、このことは疑問に思っていた。

が、今一度、こうやって旧都を歩いて、多くの地霊に眼を向けることになった今、分かったこともある。

封印された地霊達だが、まず、その数が相当に多い。

百、あるいは千を超えていたって納得できそうだ。

旧都の広さもそうであるし、そこで湧きおこる喧騒が、それだけのことを想像させたし、その想像は間違いではないだろう。

そして、それほど数の地霊達が、旧都、あるいは地底という、限られたコネクションの中で生活している。

狭い枠組みというのは、人間関係においては、時として多大な効果を出す時もある、ということもある。

不特定多数の者達と、広く関係を持つ場合と、限られた環境で、限られた関係を作る。この二つに違いがあるのは、大体想像できることだ。

横の関係と、縦の関係という違いでもあるし、それ以上に、限られた関係、つまり極端に言えば、普通なら十人に対して、一人だけとしか関係が持てないという状況になれば、その一人との関係は、普通以上に深いものになることだろう。

地霊達においても、こういうことが言えるのかもしれない。

同じ地霊、という枠組みでしか関係を作ることのできない彼らは、だからこそ、地霊同士の絆を重んじるようになったのかもしれない。もちろん、関係が深くなるということは、いい関係だけでなく、悪い関係も深くなるだろう。

嫌いな相手は、徹底的に嫌うこともあるだろう。嫌いな相手を意識すること自体に嫌悪を抱くのなら、徹底的に無視する。

もしかしたら、さとりに対してもそういう態度を取っているのかもしれない。

が、シンのその考えを読み取ったさとりはこう応えた。

「大丈夫よ。別に今はどうということはないわ」

今のさとりにには、シンと、そしてお燐を始めとする地霊殿のペット達がいれば、それ以外はどうでもよかった。

前述の話を当てはめれば、さとりこそ、その最たる例なのかもしれない。

さて、地霊同士は、互いの関係を重んじる。そして、その規模が、千に達するという、それなりの広さを持つていれば、並々ならぬ賑やかさをもたらすこともありなんだろう。

だが、それだけで、忌み嫌われた者達の住む地の底を、楽園のような様相に変えることはできなかったはずだ。

互いの絆を大切にすることも、所詮それだけではせいぜい、お互いを慰め合うことしかできないはずだ。厳しいようだが、間違はなくそうであろう。

だとすれば、このうす暗い地底を、楽園たる世界にまで変えた何かがある、または、何者かがいるのだろう。

そう、言うなれば、革命、そして、革命家だ。

間違いなく、そういう者がいるのだろう。

封印され、打ちひしがれたまま生きていくことを余儀なくされた地霊達をまとめ、地の底に都市を築き、そこを楽園へと昇華させたほどのものが、この、地の底のどこかにいる。

共通点がある。

何が何と、という主語を欠いたその言葉が、突然脳裏で湧きあがったその瞬間、その理由もなければ途方もない考えに没頭しそうになったシンを、現実と呼び戻す声が聞こえた。

「あ、危ない」橙の声だ。

が、結果として、その声が聞こえたときには、すでに遅かった、と言うことだろう。

その橙の声が聞こえた、とシンが認識したその瞬間には、周りが見えなくなっていたシンは、何かに盛大に身体をぶつけたのだ。

「うわっ!？」

「んわっ?」

自分のうめき声と一緒に起こる別の声。

恐らく、人、いや、地霊とぶつかったのだろう。

ぶつかった衝撃で後ろに倒れこみそうになったところを、藍と橙が受け止めた。

二人に身体を預けつつ、シンは、咄嗟にぶつかった相手がいるであろう前の方に視線を上げて、詫びる声を出した。

「ご、ごめん。前見てなかった」

視界に映った衝突相手は、ぶつかった勢い、にしては少し過剰にフラフラと身体を揺らしながら、「いや、かまわんよ。前を見てなかったのはこっちも同じだからねえ。私の方こそすまなかった」と、返事をした。

千鳥足でよたよたと姿勢を正している様子は、まるで酔っ払いのようだ。だが、本当に酔っているわけでもなさそうだ。

今しがたびしゃつと返された少女・・・というには、少々大人びている声は、酔っ払いのそれではない落ち着きというものがあつた。

幾分かふらついた後、ようやく姿勢をただした彼女は、もう一度、

「いや、本当にすまなかった」と繰り返しつつ、右手に持っていた皿のようなものクイツと頭上に掲げてそれに口をつけて、「んぐつ」

と、喉を鳴らしながら何かを飲んだ。多分、酒だ。

初対面の相手な上に、自分が不注意にもぶつかった相手にしては失礼だが、シンは、彼女のこの妙な態度に対し、飄々としてるヤツだな、と思わずにはいられなかった。

しかし、そんな印象をかき消すのが、彼女の外見の奇抜さだった。まったくもって・・・幻想郷にはまともの外見をした者はいないの

だろうか。

シン達がこれまで会った者達の中で、ぎりぎりかろうじて普通だと思える外見をしていたのは、霊夢と紫と幽々子と妖夢ぐらいのものだ。彼女らだって、大分怪しいものだ。

今シンの眼前にいる衝突相手の少女（と、今のところはしておこう）の様相も、相も変わらず奇抜そのものだった。

眼を引くのが、額のとっぺんあたりから生えた一本の長い角だ。それに限る。

まるで体操服な上着と、ほんの少し透けているように見えるスカートなどは、幻想郷のファッションに、不意ながら馴れてきたシンとしてはあまり気にならず、とにかくにも、その一本の長い角が眼を引いた。

それだけではない。

最近シンは、雰囲気だけで相手を見ることが多くなっていた。見た目とか、雰囲気で相手を決めつけるようなことはよくないと思うのだが、幻想郷では、そうだと言い切れないようなのだ。

まるで、その妖怪が持つ気質そのものが姿形を作るように、相手を一目みて感じた印象が、ぴたりと合致することも、少なくなかったのだ。

馬鹿そうだとか、暗そうだとか、賢そうだとか、そういう、見た感じの雰囲気がだ。

多分、この幻想郷の妖怪達は、外見以上に、そこから放たれる気で、自分の存在を相手に知らしめているのだろう。

自分の力を、雰囲気として周囲に伝播させる。確かに、妖怪なら得意そうなことだ。

さて、それはともかくとして、シンが、件の、一本角の少女に対して感じた雰囲気、それは、『器がでかそう』、だった。

世の中には、海容、という言葉がある。
それを、あの少女から感じ取ったのだ。

さらにちよびちよびと酒を舐めながら（今気付いたが、先ほどの衝突で大きく身体が揺れていたはずなのに、その手に持たれていた酒は一滴もこぼれていない）、こちらを見ていた少女は、あることに気づいて、声をあげた。知人が、シンのすぐそばにいたのだ。

「さとりちゃん？さとりちゃんじゃないかー！これまたいろいろと引き連れて．．．珍しいじゃないか」

少女のその声に呼ばれたさとりも、シンの身体の陰に身を寄せつつも、「ああ、あなたは．．．」と呟いていた。

どうやら、お互いに知り合い同士らしい。

となると、もしや．．．？

頭の中で考えを巡らしたシンに対し、さとりが応える。

「そうです。あの人が、私の言っていた鬼。星熊 勇儀さん」

その声に、勇儀という名の鬼が、「よく分からないけど、よろしく」と続いた。

と、それに次いで、彼女が不思議そうに、シンに対して言う。

「で、あんたは一体誰なの」

その声に、シンはすぐさま応えた。

「俺、幻想郷の外の世界からここに飛ばされてきたんです。それで、幻想郷のことをもつとよく知りたいと思って、それで、地底に来たんです．．．で、このことで詳しい鬼がいるって話を聞いて探してたんだけど．．．あんただったのか．．．」

「くわしいひと．．．あたしが？誰がんなこと言ったの？」

「え？．．．さとりが」

「さとりちゃんが．．．いやまあ、あつはははは！嬉しいこと言ってくれるねえ。しかしまあ、さとりちゃんの言う通りだ。あたしも、そこの馬の骨よりはずっと、この地底のことについては詳しい。なんせ、ここがまだ地獄の一丁目だった時から知ってる身だから

「らねえ、旧都の最古参の一人さ」

「地獄．．．？」

確か藍も地底に入る前に言っていた。

ここはかつて、地獄だった場所だと。

いろいろあつて、かつての地獄が、今のこの華やかな都市に様変わりしたという話だった。

その詳しい事情を知らない、藍からも聞いていない（おそらく知らないのだろう）シンとしては、それについても、聞いておきたいと思っていた。

またしても皿のようなものに入った酒をくいつと飲んで、勇儀は言った。

「とりあえず、話を聞きたいって言うなら、付き合うよ。どれ、地霊殿に帰るかね？」

「いや、いいわ」さとりが返す。

「なに？」勇儀が不思議そうに聞き返した。

「もう少し、旧都を眺めながらもいいわ．．．久しぶりに、ここを見て回りたいから」

「．．．．．」

そんなさとりの声を聞く勇儀の表情は、不思議そうというよりは、最早疑い深いほどのものになっていた。そしてそんな中に、わずかばかりの『情』がこもっていたのである。

勇儀もまた知っているのだ、さとりが、地霊殿に籠って、他者との接触をとことん拒絶していることに、そうせざるを得ないことに。

さとりのことを卑下にするつもりではないが、こんなことを言うような娘じゃない。勇儀はそう思っていたのだ。

周囲で湧きあがる喧騒が、少し大きくなったように聞こえたのは、それだけ、シン達がいる場だけが静かになったからだろう。

そんな状況が少しだけの間続いた後、勇儀が、さとりに対して、静かにこう聞いた。

「またどうして．．．？」

「シンが、そうした方がいって言ったから」

「シン？．．シン．．あんたのことか．．」

勇儀は、ゆっくりとシンの方に振り返り、一步一步、じりじりと彼の方に歩み寄ってきた。

こちらを見据える眼に、奇妙な威圧感を感じたシンは、思わず後ずさりしそうになったが、そこは堪えた。

だが、生唾を飲み込むのだけはどうしても止められなかった。額から一滴だけの汗が流れるのもだ。

とうとう、彼の眼の前にまで勇儀が歩み寄る。

先ほど、勇儀のことを少女と形容したが、今しがたシンの眼の前に立つ彼女の姿は、とても少女とは思えなかった。

身体がかなり大きいのだ。

身長も、シンを幾分か越している。

身体は割と細身で女性らしいはずなのだが、時折、まるで男のような屈強さを錯視することもあった。

鬼．．そう。彼女は鬼なのだ。

古き時代より、その名を恐れられた妖怪。

その恐ろしさが、今眼の前に迫っているのだ。

「さとりちゃんを、たぶらかすつもりか．．？」

低く唸るような声で勇儀が言う。

その声に気押されそうになったが、それでも、その心根は強かった。勇儀のその問いに対して、シンは、強く応えた。

「違うよ、その逆だ．．俺、さとりの助けになりたい」

「．．．．．」

睨みつけるようにこちらを見下す勇儀の眼を、シンは確と見返していた。

悪寒と幾分の恐怖が身を苛むが、シンは、それに、敵として逆らい続けた。

しばらく、お互いの視線が衝突した後、勇儀は、静かに呟いた。

「いい眼をしてるなあ．．．いい。いいヤツだ」

「．．．？」

「ふっ！」

囁くようにこう言ったと思うと、次いで勇儀は、突如、シンの股ぐらを右手で掴んできた。

「んおっ！？」

潰されそうな勢いで股ぐらを掴まれたシンが、素っ頓狂な悲鳴を上げる中、勇儀が、先ほどまでの威圧感が嘘のように愉快そうに大笑いしながら言った。

「縮んどうぞおっ！まだまだ甘いな、しっかりせい！はっはっはっはっは！」

「ほ！？ほおうおっ．．．っ！？」

すぐさま勇儀の手が離れた股間を、両手で押さえ、シンは珍妙なうめき声をあげた。

そんなシンの姿を見やりつつ、勇儀が言う。

「シンって名前らしいな、あんた」

「んあ？．．．あ、ああ．．．」

「気に入った。たかだか人間が、この私に気合いで張り合おうなんてねえ」

「え？」

「聞きたいことがあれば何でも聞けばいい、あたしが応えられることなら、何でも応えよう．．．ついてこい、さとりちゃんも、みんなもな」

多くを語ることなく、勇儀は、身を翻してどこに行くともなく歩き始めた。

何のつもりでどこへいこうというのか分からないが、ついてこいと言われた以上、シン達は、彼女についていくことになった。

勇儀の歩はそれほど早くなく、ぴったりとついて歩くのは簡単だった。

どこへ行くつもりなのだろうか？と考えつつ、さとりと共に、勇儀のすぐ後ろをついて歩きながら、旧都の光景を眺めるシン。

そんな中、勇儀がいきなり、こちらに振り向きもせずこう聞いてきた。

「いいところだろう？」

旧都のことだ。

シンはすぐに、「そうですね」と応えた。

勇儀が続けて言う。

「だけど、ここだって、ずっと昔からこうだったわけじゃあない．．．腹減ったな」

ひとしきり言い終えると、勇儀は、近くにあった団子屋の長椅子のところへすたすたと歩み寄って腰を下ろした。

結局、どこへ行くつもりでもなかったのか。と、少しばかり呆れつつも、シンもさとりも、勇儀に倣って、長椅子に腰かけた。

次いで、彼らの後をやや遅れてついてきていた小傘達も次々と長椅子に腰かけた。

それなりの大きさのある長椅子が、パンパンになってしまった。

亭主が現れて、「らっしゃい、何にしますー？」と聞いてくるなり、勇儀が「みたらしいっちゃんにあるだけの酒」

藍が「同じく、でもお酒はいらない」

橙が「こっちも」

小傘が「スマイルならぬビックリ顔一つ。ないならお団子一つ」

「ねーよw」と、どこからともなくツツコミが入る。

お空が「ゆで卵」

「それはないよう」とツツコミつつ、お燐が「死体一つ」

「それこそねーよ^^」と、またしてもツツコミ。

またしてもお空が、「ないならお団子一つ」お燐が「あたいも」とまあこんな具合に次々と注文する。

亭主が、「あいよー。お勘定が．．．」と言いかけたところで、勇儀がそっちの方を振り向いて手をひらひらさせながら、「ツケにし

といてくれ」と言う。

亭主が、「お？あんだ．．．」と驚いた表情をしつつ、すぐさま「あいよーちよいと御待ちを」と、店の奥に引っ込んでいく。

小傘の、「ビツクリ顔貰いましたー」という声を聞き流しつつ、シンとしては、いわゆる『顔が利く』らしい勇儀に驚いていた。

「有名人なんですね、あんだ」と、勇儀に聞くシンに対し、彼女は「そりゃあねえ。ここいらでは、あたしは革命家の親戚みたいな扱いになってる」と応えた。

「革命家．．．？」

勇儀のその言葉に、シンは、少し前に自分の脳裏で考えていたことを思い出していた。
続けて、勇儀が語る。

「この旧都は、その昔地獄と呼ばれていた」

「ああ、それは知ってる」

「大分昔にね、幻想郷において、死者を罰する方法が大きく変わったんだ。地獄で火あぶりにするよりも、裁判で、もっと合理的に罪を咎することになったんだ．．．んでもって、そうなれば、地獄は必要のないものになったわけだ」

「それで、この旧都はその地獄だったってことか？」

「ああ、その一部だね。で、今地霊と呼ばれている力を持ちすぎた妖怪達を地底に追放することを決定した妖怪達としては、地獄の跡地はちょうどいい『隔離所』になったわけだ」

「なんてヤツらだ」

「言うなよ。向こうも向こうで、相応の被害は被っていたらしいよ．．．しかし、あんたの言う通り、こればかりはさすがにひどすぎた。当時はそりゃ、地霊達が生きていくには少々辛いものがあつた。なんせ、地獄がそのまま残ってるような場所においてけぼりになったんだからな．．．ただでさえ、世の中から爪はじきにされて落ち込んでいた地霊達に、追い打ちがかけられたわけだ．．．これは、さすがにどうにかしなければいけないと思っただねえ」

「それで、地獄を、地霊達の住処としてちゃんとしたものに改善しようとしたんだな」

「そうさ．．．で、その当事者が、あたしら鬼だったってわけだ．．．当時のあたし達としても、いろいろあって、定住所だった妖怪の山にいられなくなっただんで、ちよいとした身寄りには欲しかった．．．となれば、いらなくなつて廢墟同然の地獄も、言い様では有難かつたんだ」

そこまで言つたところで、亭主が「はいよ、おまちどー」と、シン達が頼んだものを持ってきてくれた。

ゆで卵はともかくとして、死体は当然ないが。

「あいよ、ありがと」と礼をしつつ、早速串に刺さつた団子を一つ手に取つた勇儀は、それを頬張つた。

「うにゅ」

「うにゅ？」奇妙な声を出した勇儀に、お空が同じ声で不思議そうに言い返す。

「あんたの真似さ」串刺しを口に入れたまま、勇儀は口をもごもごして言い返した。

そしてそのまま、団子を呑みこみもせず、さらにもごもごさせてシンに続けて語つた。

「建物を建てたり、土地を整えたり。そういうことさせれば、鬼に勝てるものはそうそういかなかった。そんなあたしらが、それなりにやる気を出せば、地獄を樂園にすることだってわけないことだった。ちよいと経てば、地獄を、地霊が住むのに支障ない程度の土地にすることはできた．．．で、さらに拡張を続けた結果が、今のこれなのさ」

「なるほど．．．」

地霊達の見せる、底なしの活気理由は、互いの絆を尊重することであり、それともう一つ、鬼の存在があつたからなのだ。

彼らが地霊達に協力し、その生活環境を改善することにより、忌み嫌われたまま地上で生きるよりも、ずっと生きやすい環境を作るこ

とができたのだ。

結果として、封印された方がいい結果を生みだした、ということなのだ。

ようやく、いろいろなことに合点がいった。

しかし、それにしてもすごいのは．．．

「でも、ここも前は、仮にも地獄の一部だったんだろ？とても人が住めるような場所じゃなかったはずだ．．．そこを、こうまで豊かな場所にできるんだから、鬼ってすごいですよ」

この一点に尽きる。

地霊達にとつては、まさしく革命だったのだろう。

が、そんな考えのこもったシンの言葉に対して、勇儀は、それほどでもないという表情を浮かべていた。

というより、シンの言葉を、解せぬ、と感じているような顔を、だ。

「すごい、か？」勇儀が、静かに聞いてくる。

「あ？ああ、すごいですよ、ホントにすごい」

「まあ、そうかもしれない。でもさ、考えてみなよ。あたしらに、地獄の環境を改善するような能力がなければ、地獄に地霊達が住むことはできなかった。生きていくための場所が確保できなけりゃ、地霊達は生きていけない、当然だろう？地霊だって無類無敵じゃないさ。その数は大きく減っていただろう。あたし達は、住むところなんてどうでもいい、だけど、地底に落ちつける場所がなければ、生活は安定しなかっただろう．．．地霊達や、あるいはあんたが、革命というようなものとかが、それを起こすための能力つてのは、逆を言えば、なければ生きていけないようなものだったんだ、自分であれ他の連中であれな。そういう、なければ生きていけないようなものを、単にすごいすごいってというのは、あたしゃ、どうかと思うなあ．．．」

「なければ生きていけない能力．．．」
なるほど。

思えば、人類最初のコーディネイター、ジョージ・グレンが施した遺伝子改造も、それだ。

宇宙を開拓していくために、どうしても必要な、さらに言ってしまう、人類がこれからの未来を生きていくために、どうしても必要な能力。

そのためには、人類の、持って生まれうるべき能力を改造してでも必要なもの。

それが、戦争の引き金にもなった、コーディネイターの始祖なのだ。個人の利益や、野心などというものが一切ない、どうしても必要な力。

少なくとも、始祖はそうであった。

文明、技術そのものも、元はといえばそうであった。藍が言っていたではないか、生きていくために必要なものなら、当然のことだと。

コーディネイターにしても、宇宙に浮かぶプランとにしても、核兵器にしても、全ては、生きていくために絶対的に必要なものから発展してきたものだ。

コズミック・イラは、それらの果ての姿なのである。

そういえば、シンは、勇儀に対して、自分の何よりも重要な目的を話忘れているのに気付いた。

それを思い出したシンは、すぐさま、勇儀に言った。

「なあ、俺さつき、幻想郷を知るために、この地底に来たって言っただよな．．．？実は、それだけじゃないんだよ」

「んん？なに？」

「俺さ、平和つてものが、どうすれば手に入るのか、その方法を探している」

「平和．．．平和．．．ねえ．．．そのためにどうすればいいか？」
ようやく、串一本分の団子を飲み込んだ勇儀は、一緒に出された酒をひと口すすった後、少し考えてこう返してきた。

「まあ、まず、一人残らず、生きていくのに不自由しないってのが、最低限だろうね」

「ああ、そうだ、それは分かるよ」

生活することにおいて、不平等が生じない。それは何よりも大切なことだ。

生きていくことができないような者がいるなどということは、平和にはあつてはならないことである。

それはシンの方も、言われるまでもなく分かっていることだった。

「それと、生きていることが楽しい、と、誰でも思えることだな」

「単純だなあ・・・」

「でも大事だろう?」

「そうですね」

確かに、勇儀の言う通りだ。

ありとあらゆる者が皆、人生を楽しいと思えるなら、それこそ平和というものだろう。

勇儀の語る言葉はまさしく単純そのものではあつたが、だからこそ、真理をついていた。

シンは、勇儀を一目見たときに感じた、海容の雰囲気、改めて感じ取った。

彼女は、過程を考える前に、その末に辿り着く真理を考えている。どうすればいいのか、という過程は大事だが、その結果どうなるのか、どうなるべきなのか、ということも、それ以上に大事なことだ。過程と結果。二つの答えが導き出された時こそ、真の平和は訪れる。勇儀は、さらに言う。

「あたしやあ、平和つてのがどういふものか分からない。平和なんて言葉、何十年ぶりに聞いたねえ・・・だけど、その平和にしても何するにも大事なことはある」

「努力すること、だな?」

「そうだ、分かってんじゃない?・・・本気になつて頑張るんだ。喧嘩にしても、何にしてもそう、頑張んなきゃ、どうにもならない

さ、そうだろ？ははは」

シンは、威勢のいい笑顔と、その単純明快な物言いから、段々と、勇儀の持つ豪放さと言うものが分かってきた。

そしてその豪放さこそ鬼の気質であり、彼女の天性なのだろう。

いい人だ、とシンは思う。

「それにな．．．」と、続けて語ろうとした勇儀だったが、突然、何かを思い出したように言いづぐんで、そのまま考え込むような様子を見せた。

そして、しばらく黙りこんだ後、さとりの方に向かって、彼女の対しこう聞いた。

「なあさとりちゃんよ。シンに、あそこ見せてやったのか？灼熱地獄の跡」

「いや、まだだけど．．．危険じゃないかしら？ねえお空」今度はさとりが、お空に聞いた。

シンにも藍から話した、間欠泉の異変の根本的な原因は、地霊殿のさらに奥にある灼熱地獄跡が、全盛期のころの熱量を取り戻したことで、地下水が熱せられたことにある。

当時の灼熱地獄跡は、とてもじゃないが人が寄りつけるような温度ではなかった。

しかしまあ、そんな中に人間が飛びこんで、異変を半ば解消してしまったのだから奇妙な話ではあるが．．．

さて、突然の灼熱地獄の復旧の原因は、原子力を身に付けたお空が暴走したことだった。

それさえなければ、灼熱地獄跡は、暑いには暑いだろうが、せいぜい夏の日差しにも勝てない程度の熱しか放出しないのである。

さとりとしては、地獄の業火の原因であるお空にこそ、聞いておくべきことだと思ったのだ。

お空は、相変わらずの鳥頭で応える。

「知りません。でも、反応は起こしてないから、熱は発生してない

「はですすよ」

お空がそう言うのなら、おそらく、何も問題はないだろう。改めてさとりは勇儀に、「だ、そうよ。危険はないみたいね・・・」と、返答した。

「そうか。よし、それならシン！」

「ん？」

「地獄が地獄だったところの名残というものを見せてやろう」

腹ごしらえも大概に済ませた一同は、勇儀に導かれ、再び、地霊殿へと帰ることになった。

地獄が地獄である由縁、その名残とやらを見るためにだ。その場所は、地霊殿の奥を進んで見える中庭を、さらに奥に進めば見えてくる。

間欠泉の異変の時は、灼熱地獄の発する余熱で、すでにちよつとしたオーブンのようになっていた中庭に、博麗神社の巫女（霊夢のことだろう）が飛び込んで、大暴れしたという話だ。

お燐が、当時のことを思い出していた。

「あの時の人間も、活きがよかったねえ・・・思い出したら死体が欲しくなってきた。シン！やっぱり今殺させてよー！」

「絶対やだよっ！！」

そういえば、さとりからこつそり教えてもらったが、怨霊と死体を自在に操るネクロマンサーであるお燐は、弾幕においてもその力を使う。

妖精の死体を操り特攻させて、無理やりねじ伏せるのだ。

だが、このスペルカードには一つの矛盾がある。

妖精は、（厳密にはそうではないが）死ぬことはない。だから、死体もなければ、それを操ることもできないのだ。

だからお燐が使う妖精の死体は、ただ、その『フリ』をしているだけの生きた妖精なのだそうだ。

死んだふりの親戚のようなもの、『ゾンビフェアリー』などとは名ばかり、という話だった。

そんな話を聞けば、お隣といっても、おそるるに足らず、と思えたが、死体収集家という趣味は本物なのだ。シンの身の危険が去ることはない、多分ならない。

しかしまあ、人懐っこいお隣に限って、仲良くなった相手を殺すようなことはしない、ともさとりは言っていた。

そんな話をしている内に、周囲が蒸し暑くなってくるのを感じた。目的地。灼熱地獄跡に到着したのだ。

大きく縁取られた、ぎりぎり底が覗けるといっほどの深い穴が、シンの足元に穿たれていた。

が、灼熱地獄などという大業な名前に対して、眼の前に穿たれる穴は、ただ『それだけ』のものでしかなかった。

大きな穴が、ぽっかりと空いているだけ。眼の前に、小さな石ころが落ちていただけなのと同じように。

とてもではないが、そこが、地獄の一部であつたとは思えない。

うす暗い底から覗く、僅かな残り火も、結局は、より一層、歴史の中に取り残されたような、遺跡でしかなかった地獄の姿を、寂しいものに行っているようにしか思えなかった。

そしてシンは、初めて、本当に初めて見るこの地獄で会った場所の姿が、初めて見るものに思えなかったのである。

ほんの小さな既視感が、胸の奥で湧きあがっていたのだ。

歴史から取り残されたこの地・・・

シンの脳裏にある物の姿が、鮮明に浮かび上がった。

随分昔に見た物、そして、もう見ることもない物の姿が・・・

そしてシンは、似ている、と一瞬だけ思った後、すぐにその気持ち

を否定した。

些細な、しかし重大な違いが分かったのだ。

歴史に置き去りにされ、誰からも忘れられ始め、何の価値、意味も無くなり始めている地獄の跡地と、記念碑、ユニウスセブンのだ。

前大戦の最後の戦地であったユニウスセブンは、後の地球プラント間での和平交渉の足がかりとなった。

ユニウスセブン条約なるものが締結されるほどに。

人々は、ナチュラルとプラントの全面戦争の最後の地を、互いの友好のための石碑としたのだ。

その当時、未だ、家族を失ってから間を置かないシンとしては、ふざけるなという思いではあった。今では、そのことを、馬鹿なこと間違ったことだとは思う。だが、どこがどう間違っているのかは、自分自身、今でも分からない。

そう、忘れ去られた地獄の遺跡と、ユニウスセブンの違い。

それは、人々の意識にこそあった。

地底にて、まだ地獄が存続していた時期を知っているらしい勇儀や、そこに近い場所に屋敷を建てるさとりなどはともかくとして、地霊達の多くは、かつての地獄の存在を知ってはいても、意識することは少ないだろう。それほどに、地獄の跡というのは、意識の外へと追いやられているものなのだ。

だが、ユニウスセブンは違った。少なくとも、そう思える。

人々はその存在を、平和の象徴として、強く意識した。

多くの戦死者が、どこに還ることもできぬまま置き去りにされたその地を、二度と戦争を起こさない為の、憎しみの楔くさびとしたのだ。

そして人々は声高々に言った。言い続けた。

「第二のユニウスセブンを生み出さないために、二度と戦争を起こしてはいけない」

その声は、過度に大きすぎた。

まるで、強迫観念に駆られているように。

戦争を起こさないという決意に、逆に脅かされているように。

多くの者達がそうであるように、シンも、平和のための言葉を唱え、それを強く意識していたのは確かだ。二度と戦争を起こさないと言う意思を……

だが、同時に、心の奥底で、呟く声が聞こえた。

それも、全てに打ちひしがれ、終戦を迎えた後に分かったことではあるが……

確かに聞こえていたのだ、と今も思い出す。

これでは、まるで『また戦争が起こるぞ』と言ってるようなものじゃないか。

それは他ならぬ、シン自身の声だった。

そして、戦争は起こった。

ザフト軍の強硬派が、ユニウスセブンを地球に落下させることで、第二の大戦が勃発したのだ。

平和の象徴とされたユニウスセブン、だが、戦争で多くの友人を、そして、終戦で己の使命を失った兵士達にとっては、それは自分達の最後の誇りであり、同時に忌むべきものであったのかもしれない。得てして、ユニウスセブンを平和の礎と口ぐちに語る声が、それを新たな戦争の引き金にしただろう。言い切ることはできないが、

自分達を脅かしていた恐怖心と、人類は再び直面することになったのだ。

しかも、二度と作ってはならないと語られていた第二のユニウスセブンが、これ見よがしに作られることになったのだ。

メサイアなる、ザフト軍最大の宇宙要塞にして、最後の決戦の地。人類は、同じ過ちを繰り返すの図を、見事に見せつける結果となってしまったのだ。

キラ達は、もう二度と同じことを繰り返すわけにはいかないとは言

っている。

それに、人類も、今度こそ本当に、思い知ったのだろう。
まったく同じことを、まったく同じに繰り返すことが、どれほど愚かなのかを．．．
それを信じたい。

少なくとも言えることは、人類は、平和を強く意識し過ぎたがために、結局、それを手放すことになってしまった、ということだ。

そして、眼前に広がる忘れ去られた地獄からは、寂しさは感じて、虚しさは感じなかった。

成るように、成るべくして成る。歴史に置き去りにされることに抗うことなく、身を任せて廃れていく。

まるで、風化していく人の死のような自然の流れを、シンは感じていたのである。

そこには哀しみとか、憎しみなどはない。

ただ、なるようになった。という事実だけがある。自然の姿だけが．．

脳裏に浮かんだ、大気圏で炎の塊となりながら地球へと降り注ぐユニウスセブンの姿と、深淵の底で燦ぶる小さな炎が重なって、灼熱地獄の放つ本当の熱にも負けぬ熱さと共に、シンの心の中に刻み込まれた。

と、同時だった。

突如、シンの顔が、両横から何かに、猛烈に圧迫されたのである。

「むぐおおお．．．っ!？」

何かに顔を押しつぶされながら、うめき声をあげるシンは、少し頭上の辺りからする二つの声を聞いた。

「こらーシーン。返事をしないかー」

「おらおら」

藍と勇儀の声だ。

二人の声が、ちょうど左右上の方から聞こえてくる。

二人の顔が、シンの頭上にあるのだ。

となれば、この顔面を押しつぶしてくるものは一体？

よくよく考えてみると、顔に押しつけられるこの感触。

まあ、なんとも言えず柔らかかな。...

まさか...？

「な、なんだこれ...っ...あ、な...るほどこれは二人の胸...どうわあああああーあああああああつ
！！」

顔を圧迫していたものの正体を知るなりシンは、トチ狂ったような雄たけびを上げながら、二人の身体を引き剥がした。

「うひゃ！」

「のほっそ」

珍妙な声をあげながら、二人がシンから離れる。

その二人に、顔面を真っ赤にしながらシンが捲し立てた。

「バツカじゃないのかあんたら！！なんでこんなことしたんだよー
！」

怒っているのか恥ずかしがっているのかよく分からない大声を出すシンに対し、藍が清かに言う。

「だってね？大声で呼んでも叩いても何の反応もなかったんだ。ならばは...こうするしか、ねえ？」

首をかしげる藍に、勇儀が、「そうだな、そうだそうだ」と続く。

「な、なににい...っ？」

どうやら、先ほどまで、シンは相当集中していたらしく、周りが見えていないという表現すら生ぬるい状態だったらしい。

大声で呼んでも、しかも、藍の言う通りなら叩いても気づかないほどとは、シンとしては、それほどまでに思考の海に没入していた自分自身に驚いた。

「だ、だとしても、なんでわざわざ、む...その...あれだ...

「．．それ！それなんだよ！」

「顔をタコみたいに赤くして、どうした？もつとしてほしいか？してやろうか？もつといいこと」勇儀が調子よく言う。

その言葉で、シンの顔はさらに真っ赤になった。さすがに危険ではないかと思えるほどだ。

臍で茶を．．ではないが、これならお湯を沸かすことぐらいできそうではないかと思えるほど、シンの体温はグンと上昇した。

「．．．！！？．．．！！！？．．．！！！！！！．．．っ」

最早叫ぶことすらできなくなったシンの頭から湯気が立ち上る。

鼻血が、水圧カッターも顔負けの猛烈な勢いで噴き出す。

さすがにこれ以上からかうと、シンの命にかかわる可能性もある。

ここで勇儀は、

「あー．．．悪かった。まあ落ち着け」と謝罪した。

「紫様の言っていたことと違う．．．男の人って、こういうことされたら普通、よろこぶはずなのでは．．．」と呟く藍としては、何故当人が知っているのか分からない紫の教えを確かめてみようとしての行動だったわけだが、予想外の行動に、不思議に思えばかりであった。

「ほらシン、身体を冷やして、うらめしや〜」

小傘が、血液が沸騰しメルトダウンしそうになっているシンの間に割って入り、不気味さに身体を冷やそうとしたところようやく、彼女が望むのとは別の意味でシンの体温は下がり、幾分か落ち着くことができた。

「はあ．．．お前らロクでもないヤツらだな、ったく．．．」

「ははは、ごめんって言ってるだろう」

「でも、さっきのシンは、本気でちよつと考え込みすぎだったよ。

白玉楼の時もそうだったけど、あんまり考え込むと具合悪くなるぞ」
どんな思考だろうと、頭の中で瞬時に結論付けることのできる藍と

しては、それ以外のことに手がつかなくなるほど深く思索するシンの姿は、ひどく不思議なものに映っていたのだ。

紫は、「愚かしくも人間は、考えるためにこの世に生を成す、故に人間であり、故に生きるのよ」と言っていた。

その言葉の意味はよく分らないが、平和のためにと思索し、勉強するシンの姿も、間違いなく、藍とは違う種族、人間の見せる姿のひとつであることは間違いなかった。

正直、藍としては、人間には幾分の興味もなかった。少なくとも、これまではだ。

だが、シンを見てみると、そうでもない。

紫からの命とは関係なしに、もう少しの間、彼の様子を眺めていた。そう思えた。

「でも、それだけ平和のために、よく勉強してるってことなんだな」
ついで口をついてでた言葉も、そういう気持ちから出た素直な言葉だった。

藍だけではない。

勇儀としても、正直な話、灼熱地獄の跡にシンをつれてきたのには、特別な意味はなかった。

ただ、地獄の今の姿というものをいて、ちょっと感心して、勉強になったつもりでいてくれればいい、ぐらいの気持ちだったのだ。

しかし、どうやら、そういう考えよりもはるかに大きな収穫が、シンにはあったらしい。

それほどまでに大きな得るものがあったというなら、勇儀としても、つれてきた甲斐があったと、うれしくなる。

シンの持つ純粹さとひたむきさという、素直な感情は、無条件で人に好かれる。

戦いに打ちのめされて己を見つめなおし、幻想郷での旅を経た今のシンには、人生を知った強かさ、少年そのものの純情さが同居していたのである。

「随分といい勉強になったみたいで、よかったよ。あんまり長居すると汗かくからね、大概にしとくかい？」

「あ？・・・ああ、そうだな」

勇儀の声に曖昧に同意しつつ、シン達は、灼熱地獄跡を去り、中庭から、地霊殿の中へと戻っていった。

地霊殿へと戻ったシンは、改めて、前日いた書斎にて、勇儀から地底に関する話を聞かせてもらった。

ちょうど、この前原子力の勉強をした机に、シンとさとりと藍と勇儀の四人で腰掛けていた。

さてしかし、勇儀曰く、話すことはそれほどない、ということであったし、事実そうだった。

かつて忌み嫌われ封印された妖怪達の避難所であった地底を、勇儀達鬼が開拓し、楽園へと昇華させた。

が、それ以降は、まあ、地上ともあまり変わらない、退屈なほどの緩やかな日常が続くばかりであった。

歴史として残すような、あるいは語り継ぐようなことはない。

最近ようやく、お空の暴走による灼熱地獄の復活という、話の種にはなりそうな事件は起きたが、それ以外は、話したところで別に面白みも何もないそうだ。

話を聞くだけでも、多少の勉強にはなると考えていたシンとしては、少し残念な気分ではあるが、勇儀の言うことに、納得もできた。

幻想郷では、あまり大それた事件は発生しないのだ。

いや、むしろそれは逆で、幻想郷そのものの存続も脅かすような大事件が何度も発生しているが、それでも、幻想郷に住む者たちにとっては、そういう異変の数々も、日々過ぎ去っていく日常の一部としか感じていないのかもしれない。

それだけ、幻想郷に住まう妖怪、あるいは人間たちは、自然体のま

まに、落ち着いた、流れに身を任せる生き方をしている、ということなのだろう。それは、地霊達も例外ではないのだ。

旧都の、そこに地霊達の賑やかさの理由が、もう一つ分かった。悔恨も憎しみも、やがて忘れられるだけの、心だ。

憎しみと、軍人としての使命にとらわれ、自分の心すら活かせぬまま、戦うことしかできなかったシンには、その事實は、ひどく羨ましかった。

この幻想郷なら、もう憎しみを持つことも、使命に脅かされることもない。

シンは、やはり、この幻想郷で生きたいと願った。

それは、人として、コズミック・イラで、一人の人間として生まれたいという責任から逃げようとする事なのかもしれない。

だが、敗北と無念だけに全てを捧げたシンの心では、どうしても、穏やかな生に対する羨望を否定することができなかった。

そして、そのそれを批難することのできる者も、一人としていない。シンは、キラとは違う。

全ての者に対して寛容で、自分自身を含めたあらゆるものに対して無念無想でいられる、聖人のようなキラとは違う。

シンは、自分一人の幸せと安泰を切望する、ちっぽけな人間の内の一人でしかないのだ。

そうやって、自分の心を慰めながら、他人と分かり合おうとせず、多くの者を殺めてきたのがシンだ。

それが俺だ。

そんな自分の声が胸の奥底から響いた時、シンは、その声が鋭い刃

のような音響となつて身体を内側から引き裂くような感覚に、神経を苛まれた。

顔が引きつき、痛みに耐えようと、眼がきつく閉ざされた。

いきなり頭の中で湧いて出た感情を抑えつけようと、頭を両手できつく押さえるが、どれほど頭を抱え込んでも、シンの脳裏から、激しい感情が、湯水のように湧き出続けた。

怒りだ。

正体も分からない謎の怒り。

シンは、心の中で叫ぶ。

——— こんなんでは何が平和だっ！！

今までの勉強だつて結局、戦争で全てを失つた俺が、自分の心を慰めたいからやつてただけじゃないかっ！

綺麗な花を見て、心を癒やしたいだけなんだ！吹き飛ばされると、心が引き裂かれたみたいに痛いから、そうさせたくないだけなんだ！
本当は！

本当は誰がどこでどうなつたんで気にも留まらないんだ！

ただ、自分の心が落ち着いていれば、他はどうなつてもいいんだ！それが俺だ！

人が死んだつて、自分がよければどうでもいいんだ！

あの頃の俺だつてそうだ！MSを倒して、人を殺して、それを自慢話にしてみんなに話してた・・・

それが俺なんだ！

俺には平和を作る価値なんてないんだ！

平和なんて俺には作れない！俺には、みんなと一緒にのところにないられない！幻想郷にだつて！———

心が叫ぶ中で、打ちひしがれたシンの魂の走馬灯が、彼自身の脳裏に疾走した。

呆気なく消え去つた家族の命、頭上を飛ぶ火戦とMS。

士官学校で出会った仲間達。あの時俺は、みんなのことを、何も経験してない甘ったれと馬鹿にしてた・・・

憎しみを晴らすために、ただその一念で過ごした学校での日々。

そして、ザフト軍の最高のエース候補、赤服として卒業出来たとき、少しだけ、憎しみ以外の気持ちが心の中にあつた気がした、でも、それもすぐに消えた。

そして、ミネルバの進宙式の日。

耳を爆音がつんざき、悪鬼のようなシルエットを赤々とたち昇る炎の中で見せる三機のマシンが、網膜を焼き切った。

俺は叫んだ、また戦争がしたいのか、と。

それから・・・

それからもう・・・思い出したくもないことばかりだった。

人が、自分の誇りに思う、『思い出』と呼ばれる記憶のビジョンすら、シンにとっては、自分を叩きのめす自己嫌悪のハンマーでしかなかった。

きつかけなどは、いとも簡単だ、ちょっと前に勉強したことではないか、そのきつかけが、今だった、というだけだ。

今まで、ただの強がりで、あるいは、平和のためという決意が固めていたシンの心には、その壁を崩し、本当の彼のちっぽけな、弱い心が蘇っていた。

理由などない。

ただ、そうなってしまったただけだ。

——もう・・・どこにもいたくない・・・

俺は・・・俺自身が、憎い・・・

俺は・・・

俺は一体・・・！

俺は一体なんなんだっ——！！

「シン……大丈夫……？」

「う……っ！？」

自分の叫びに押しつぶされそうになったシンの心は、微かに聞こえたさとの声に、寸前のところで留まることができた。

自分で、自分の心を殺すことからだ。

さとりは、今のシンの叫びの全てが、聞こえていたはずだ。

その認識ですら、しばらく遅れてやってくるほどに、シンは、先のたった一瞬の、まさしく刹那の時間で、身も心も疲れ切っていた。

体中を汗が流れ、息は絶え絶えになっている。

第三者からは、今まで見たこともないような、憔悴しきったシンの顔が見えることだろう。

眩暈と吐き気すら感じながら、シンは、ゆっくりと、さとりの方に振り向いた。

その顔は、ひどく戸惑っているように見えたが、その眼の奥に煌めく光は、それ以上に、人を慈しむ心を放っていた。

「……………」

まるで放心したように、シンは、ゆっくりと首を動かして、自分の周りを見回した。

勇儀と藍だけではない、様子を察してかけつけた小傘やお隣達もみなが、シンのことを見つめていた。

突然のことに戸惑いつつも、シンに対して、大きな憐れみを含む眼を向けて。

しかも、ただの憐みではない。

人を好きだと思っ憐みである。

みな、これほどまでにちっぽけで弱々しく、だからこそ、理由もなく愛すべき者を、今まで見たことがなかった。そんな者がいるということを知らなかった。

シンの心の叫びは、さとりだけではない。全ての者に聞こえていたのだ。その理由は、分らない。

そして全ての者が、シンの心の叫びに、全ての憎しみと自尊心を曝け出した叫びに戸惑った。

同時に彼の、あまりに純情な心に、惹かれたのである。

みな視線を受けたシンが、少しだけ顔をうつむけて、吐き出すような小さな声で言った。

「俺は．．俺はどうすればいい．．」

「あなたの好きなように、やりたいことをやりたいようにやればいい」藍が言う。

その声に、シンは、再び顔をあげて、呟いた。

「．．．いいのか．．．？」

「大丈夫だって、よくない理由がないよ」次いで橙が言う。

「そうそう、気負うことなんてないって」お隣が続く。

「いろいろ考えたって、疲れるだけよ」と、もっともなことを言うのはお空だ。

「．．．．．」

「シン．．もう本気で、紫様の命令なんてどうだっていい．．私達は友達だ。私達が、あなたを絶対を守る」藍が言う。

「そうよ．．あなたは、ずっと私達のとこにいればいい。気が済むまで、あなたの気持が晴れるまで、いつまでもいいよ」さとりが言う。

「そうさ、こういう言い方はどうかと思うが、今のところはさ、もう平和とかどうでもいいんじゃないか？」勇儀の言葉は、もっとも言うべきでないものであると同時に、シンが、もっとも求めていた言葉でもあったのは確かだ。

そして最後に小傘が言う。

「わたし達ね、シンのこと大好きだよ」

「．．．．．そうか．．．．．だけど、まだ俺は、みんなを頼るわけにはいかない．．．まだ、幻想郷のシン・アス力になるわけにはいかない．．．」

「え？」

「平和をつくるってことにムキになってるからじゃない。とらわれているわけでもないぜ？．．．．．俺、分かったんだ．．．平和のために、何が必要なのか．．．人の心が、最後の最後に行き着くべきところが．．．俺、分かったんだ．．．」

「シン．．．」

「．．．ありがとう、みんな．．．．．」

「うん！」

「．．．．．ふふ．．．ふ、ははは．．．はは、あははは．．．」

みんなの優しさが、身にしみた、ただ単に、心の中の嫌なものをきれいに洗い流して、温めてくれた。

訳も分からないまま、笑いと涙が一緒に出てきて止まらなかった。ずっと昔に忘れてしまったような、純粹な笑い。

そして、今まで一度も流すことのなかった、悲しくないのに流れる涙が．．．

「はははは．．．あはは．．．」

本当の本当に、憎しみが消えた。まったく全てが、だ。

憎しみよりも、もっと大事なものがあることを、思い出したのだ。

思い出すことも嫌だといった記憶。だが、それは違った。

大事にすべき思い出はまだ、いくらでもあったのだ。

ステラの笑顔はとても柔らかくて愛しかった。

レイ、ルナマリア。ミネルバの仲間達がいてくれたから、その絆があったから、今のシンがある。

憎しみしか能のない、馬鹿な男を、それでも好きだと言ってくれる

ような絆があつたから．．．

シンは、平和のために、絶対的に必要なものがあることを、今、知った。

誰に対しても、どんな人間に対しても、そしてそれ以上に、自分の愛する者達に、何のやましい心もなく、『大好きだ』と言える、心だ．．．

結局シンは、ひとしきり泣きながら笑い続けて、そのことをみんなにからかわれながらも、そんなみんなから一心に愛されたまま、今日一日を終えた。

さとりは改めて、この地霊殿にいつまでも居てもいい、それこそ、永遠に住んでもいいと言ってくれた。

その言葉に甘えて、もう二、三日いさせてもらって、のんびりしよう、シンの方も改めて考えた。

その後は、また、平和をつくるための旅を再開しよう。

まだ、知るべきことはある。それら全てを知って初めて、やさしさの、全ての心に対する答えも導き出される。平和への道が見えてくる。それを見つけるのだ。

それに、白玉楼で見たあの男．．．

全ての発端であるはずのあの男とも、いずれ話をつける必要がある。

旅の終わりが、そろそろ見えてきた、だがまだ終わりじゃない。

とりあえずシンは、今のところは、落ち着いて、のんびりと過ごすことにした。

幻想郷で感じた想いを、今一度心に染み込ませるのだ・
・
そのために。

Conversation 『僕たちの行方』

シン・アスカが幻想郷へと訪れてから、未だひと月も経っていないが、彼より以前に幻想郷へとやってきた男。

ラウ・ル・クルーゼと名乗る男が、冥府白玉楼にて、初めて紫と会ってから、すでに幾分かの日日が経っていた。

クルーゼは、自分がやってきた場所が幻想郷であることに驚くことなく、すぐにその世界の成り立ちを理解し、順応していった。

幻想郷で最初に会ったのが、紫であったというのも、幸運だったのだろう。

彼女ならば、幻想郷におけるほぼすべてを語ることができる。もっとも、彼女の話す内容を理解できなければ意味はないが．．．が、クルーゼには、その心配は無用だったらしい。

彼は紫と対等の立場に立ち、彼女の話す内容を誠実に聞き、時には推測と質疑を織り交ぜながら、勉強していったのである。

白玉楼の住人であり、それゆえ、クルーゼとも対面する機会の多かった妖夢としては、彼の知恵には、ただただ驚かされるばかりであった。

元の世界では、仮にも人間『であった』クルーゼの精神は、すでに人在らざる領域にまで達していたのである。

なぜそこまですなっただのか理由を聞いたこともあったが、彼は多くを語ることはなかった。

ただ、いずれは話す。君たちは、私と関わりを持ったのだから、とだけは言っていた。

白玉楼での日々の中でクルーゼは、幻想郷というものに興味を持ち始めていた。

そして、いずれ、この世界をある程度見渡してみたい、とも言っていた。

だが、それは叶わないことであろう。と、クルーゼ自身は思っていた。

白玉楼の幽霊である自分には、その外の世界から出ることは叶わない。と、考えていた。

だからというわけではないが、白玉楼でのクルーゼは、行き過ぎと思えるほどに落ち着いていた。まるで、何もやることなく、活力がないように見えたのは、妖夢の錯視ではないのだろう。ひどく心配だった。

落ち着いている、というよりは、暗いのかもしれなかった。

確かに、冥界の幽霊が、迂闊に外に出ることはあつてはならない。

妖夢も、勝手に冥界の外に出た幽霊を連れ戻すということを、何度もやってきた。

が、だからといって、それがすべてでもない。

幽霊が外の世界に出てはいけないのは、そこで、良からぬことをしかす心配があるから、という理由だけにすぎない。

それに、一度外に出ると、味をしめて、二度と冥界に帰ってこないかもしれない、ということもあるからだ。

だから、絶対に厄介事を起こさないし、必ず帰ってくる、という確信がある上で外に出るといふのなら、妖夢はもちろん、誰であろうと、それを咎める者はいない。

類稀なる見識を持ち、ある種、人間としての境界線を超越したような（現にそうなっているが）雰囲気を見せるクルーゼならば、機会さえあればすぐに幻想郷に馴染むことができるだろう。

現に、白玉楼の生活にもすっかり慣れ、すでにその住人の一人として定着しつつあったのだから。

そこで妖夢は、思い切ってクルーゼにこう切り出してみた。

「あの．．．よろしければ、外の世界に行ってみませんか？．．．大丈夫です、私がお供しますから」

「．．．よいのか？」

「ええ！よいですよ」

彼のかねてからの希望を聞き入れたのだ、クルーゼが断わる理由もなかった。

そうと決まれば、行動は早い。

妖夢は、クルーゼに外の世界を見せようと動き出した。それがすでに、今から三か月以上も前のことである。

当然ではあるが、まずは、幽々子、そしてクルーゼの友人となった紫の許しを得た。

そしてまた当然ではあるが、二人とも、何も拒むこともなく許可を出した。

むしろ、妖夢のお供など必要ないとまで言っていた。

そして、それは妖夢自身思っていたことである。

妖夢がクルーゼのお供をしようと言うのは、彼が、たまに現れる馬鹿な幽霊と同じように、外の世界で厄介事を起こさないか監視するためであった。

が、クルーゼの場合は、そんなことは万に一つも有り得ないだろうが、それを承知した上で、「クルーゼ様のお供をさせて頂きます」と申し出るのが魂魄　妖夢である。

かくして二人は、すっかり開きっぱなしになってしまった冥府の入口である封印の門を抜けて、外の世界へと出ていった。

さて、幽霊というものは、定説では、足がない、とされている。

幽々子を見れば、そうでもないということが分かってくるが、しかし、間違いであるとも言い切れない。

必ず、と言えないだけであって、幽霊には、足のないものもいるに

はいる。

というか幽霊は、自由に足を消したり出したりすることができるのだ。それは何故か？

簡単である。幽霊は、宙を浮けるからだ。

地に足をつける必要がなければそれこそ、『あんなものの飾りです』、というわけだ。

そしてそれは、半分だけ幽霊である妖夢も、クルーゼにも例外ではない。

白玉楼の幽霊となったクルーゼが最初に驚いたことと言えば、ここが幻想郷であること以上に、自分が幽霊になってしまったこと以上に、ほとんど自由に宙に浮けるようになったということだった。

が、しかし、それが分かったところで、子供みたいに興奮して、年から年じゅう宙をふわふわ浮くようなみっともないことをするクルーゼではない。

白玉楼では、特別宙に浮く必要がないので、普段は、地に足をつけて生活していた。

宙に浮くのが自由ならば、逆に、地に足をつけるのも自由なわけだ。

が、しかし、冥界の門を抜けたこの時は、そうもいかなかった。

門は、天高く、雲の上にある。そこを抜ける以上、空を飛ばなければならぬのだ。

そして、すごいのはすごいし、驚嘆に値はするが、白玉楼の庭では所詮それまでだった宙を浮くということの、本当の意味を、クルーゼは知ることになったのだ。

眼下で流れていく真っ白い雲。それが途切れたと思った次の瞬間には、下を向くクルーゼの眼下には、一面の緑が広がっていた。いや、それだけではない。

視線をあげたその先には、まるで世界が吸いこまれるように、小さく消えていく大地の果てにある地平線が見えた。何十キロ、何百キ

口ではない、まるで、この世界の全ての果てがそこにあるような、一直線の境界が、クルーゼとほぼ同じ目線に走っていたのである。大きな雲が、手で触れられそうな場所に浮いていた。

眼の前でその姿を見ることが、地上から見ただけでは、ただの綿毛の塊にしか見えなかった雲も、その本質が、蒸発した水が成す水蒸気の塊であることを実感できた。すぐそばで見る雲は、綿というよりは、限りなく濃厚な霧だったのである。

もう一度、眼下に広がる大地を見る。

視界を埋め尽くす緑のカーペットの中に小さく見える、いくつかの濃い緑は、森の木々が成す色だろう。

それらの色が、風が吹き抜ける度に、大きく揺れて、光の反射の度合いを変える。

それにより、千変万化する緑のグラデーションをクルーゼの網膜に刻み込んだ。

まるで、胸の奥を風が吹き抜けたよう、などという表現も、まだ不十分だった。

風そのものになったのだ。

人足り得る者が感じる最高の開放感が、全身からアドレナリンと共に湧きあがった。

一度その命を失うことで、精神をゼロへと回帰させたクルーゼの心は、母に抱かれる赤子のような、純粋な心地よさで満たされた。

クルーゼは、天に、そして地に囲まれる中で、四肢を広げ、全身を声にして叫ぶのを抑えることができなかった。

「これが・・・これがこの世界で・・・幻想郷で生きることなのか！」

宙を浮き、空に飛べたからではない。

そうやって、全身を眼にして見た、感じた幻想郷の光景から、迸るような生命力をクルーゼは感じたのだ。

彼の叫びに、何故かクルーゼと同じくらいに嬉しそうになりながら妖夢が応えた。

「ええ、そうです！そうなんですよ！多分！」

「ふふ．．．まだ私の心に、こんな清々しさが残っているとは思わなかった．．．」

次いで出たクルーゼの言葉には、ただのよろこびだけとは違う、他の感情を感じることができたが、妖夢は、それについて余計な詮索をすることはしなかった。

今は、余計なことを考えることはない。

クルーゼに、彼の望むものを、好きなように見せてやるのだ。

「さあ、クルーゼ様。目的地などはありません。好きなように飛んで、好きなようにこの幻想郷を見学しましょう。必要なら私がご案内します」

「ああ、頼む」

かくしてクルーゼは、はつきりとした道のりもないまま、本当の意味で自由に、幻想郷を飛びまわり、そこで見える光景を眼に焼きつけていったのである。

自然のままに生きながらも、外の世界の高度な文明に匹敵する、あるいはそれ以上の『精神的な文化』を発展させた幻想郷での営みは、クルーゼにとっては、革新的と言えるものだった。

スペルカードと呼ばれる独特の戦いにも、彼は惹かれた。

闘争ではなく、競争、さらにいえば、まるで協和しているような知恵と美しさによる戦い。

戦争というものに充満していた負のエネルギーはそこには全くなかった。

戦争にもほんのわずかに残っている良心。向上心と、そして誇りが、より大きくなって感じられた。

クルーゼはすぐに、スペルカードに興味を持ち、それを実践しようとした。

幽霊となり、人間としてのしがらみを失ったクルーゼは、妖夢から『コツ』を教えてもらうとすぐにその力を発揮した。

ちょっとした練習ではあるが、妖夢をコテンパンに倒せるほどの実力を、クルーゼは、本当にまったく初心者身ながら引きだしたのである。

かつては、人間離れた空間認識力を持ち、ドラグーンと呼ばれる遠隔ビーム兵器を操作したクルーゼの脳裏では、ありとあらゆる判断が、いくつも同時に、かつ素早く行われていた。

スペルカードに関しては、クルーゼのセンスは、藍と似通ったものがあつた。

しかも、それがより実戦的なものであれば、彼のスペルカードは、全力を出した藍に、すなわち、紫にも匹敵するかもしれない。

妖夢としては、改めて、クルーゼという者の凄さを認識する気分だった。

彼なら、本当にこの幻想郷でもやっていけるだろう。

また、クルーゼとしては、もう一つ、賛辞すべき点が、幻想郷にあるのを知った。

文明としてある種完成されていた幻想郷であるが、それでもなお、尽きぬ探究心と向上心を持って、新しい何かをもたらそうとしているのである。自分に対してもそうだし、他の、あらゆるものに対してだ。

道中、幻想郷でもっとも高いという妖怪の山に訪れたクルーゼは、その天狗達が動かす工場を見て、驚いた。

精神が豊かであることを全とす妖怪の文化だが、同時に、その工場では、その精神と相反するものであるはずの、技術力の研究が

なされていたのである。

それは、生活を向上させるためでもない、戦争のためでもない。大きな理由はなく、だからといって、とりつかれたように生産に躍起になっているわけでもない。純粹に、技術の探求、科学の真髓を見出すための研究のために、だ。

しかし、結果として、用途はどうあれ、便利な道具は多数開発されているようだし、もしかしたら、一撃で大地を粉碎するような兵器だって、作られているかもしれない。研究というものは、規模はどうあれ、常にそれなりの実績は伴うものなのだ。

技術というものが当然のようにそこにあるものとされ、そんな中で、逼塞していった探求の精神が、よりひた向きに、そこにあつたのである。

クルーゼがかつていた世界でも、自然のままに、人の精神を尊び生きよ、という思想はあつたし、それを実践する者達もいた。

だが、多くの場合、それは自然と反する技術力の存在を徹底的に拒絶するものであり、それらを実践する殉教者達は、すべての技術、文化を廃絶した、世捨て人のような生き方しかしていなかった。

クルーゼには、くだらん、と一蹴することしかできなかった。

それが、思想にとらわれ、破滅する様にしか見えなかった彼には、自分の命と尊厳を投げ捨てる行動を理解はできなかった。

相反するものを拒絶する。それこそ、自然の流れに逆らっているのではないか。

だが、この幻想郷は違つようだ。

知らぬものには盛んに興味を持ち、積極的に行動し、探求する。それが己の望むことであれば、だ。

だからこそ、学び、知恵は増える、精神が豊かになる。正直に、ある種エゴイスティックに生きること、命を享受する。

そのような生き方こそ、真に創造的かつ生産的であり、かつインテ

リジェンスを感じさせるものだ、クルーゼは思った。

最後に回帰するのが、子供のような純粹さであるから、コズミック・イラでは唾棄すべきものであったエゴイズムでさえ、よい方向へと働く。

クルーゼには、幻想郷での生き方は、生活というものの模範のようにさえ思えた。

同時に、人間社会の縮図のようなものも、見て取ることができるのだから、なおのこと面白かった。

そんな幻想郷だが、妖夢曰く、「そんな大それたものじゃないですよ」という話だ。

それに、幻想郷も、全てが和やかで穏やかではない。

人間は妖怪に脅かされ、その憂さ晴らしに、妖精は人間にいじめられることもある、という話は、すでに聞かされていた。

死人も、定期的に出てくるらしい。

どんな世界であろうと、殺伐としたものは必ず存在する、ということか。

それに、自然の流れに身を任せ過ぎて、自己中心的になったロクでもないヤツがちょっと困るぐらいたくさんいるのだという。

だが、戦争で容易く数千の命が消えていくよりかは、ずっと良心的であるのは確かだった。

そして、数億の命を担う権力者が困り者な世の中よりも、はるかにマシだ。

妖精の我儘でさえ、確かなインテリジェンスを感じるのだから・・・いや、これは訂正しよう、馬鹿は馬鹿だ。

クルーゼは、妖怪の山以外にも、多くの場所を巡った。

多くの妖精が住まう魔法の森、異様に背丈の伸びた竹が広大かつ鬱蒼な迷宮を作る迷いの竹林、紅魔館、永遠亭、など、多くのところを巡った、シンがいった地底などには足を運ばなかった辺り、まだ

充分ではないだろうが、それでも、クルーゼとしては、幻想郷のな
んたるかを知るには充分だった。

そして、ほんのわずかな間の幻想旅行を経て、妖夢は、クルーゼが、
彼本来の、穏やかな雰囲気を取り戻してくれたのを感じた。

そう、彼、クルーゼが本来持つべき心を、だ。

白玉楼へと帰る道中、おもわず妖夢は、「いい顔です」とまで言
ったほどだ。

そしてさらにこうとも言っ。

「クルーゼ様なら、この幻想郷でも、どうしても生きていきます。
どうでしょう？幽々子様は、白玉楼に住まわせてもいいと言ってい
ます。あなたさえお望みなら」

かつての、狂気と諦観が嘘のように一切の険のなくなったクルーゼ
だったが、そんな妖夢の言葉に対しては、静かにこう応えた。

「いや．．．それは駄目だ」

「え．．．？」

「私には、そんな権利はない」

「権利なんて、今更．．．」

「そう、この幻想郷では、権利なんて必要ない、価値もない．．
だが、私は愚かしくも外の世界で、人間として生まれ、人間として
罪を重ねた。その裁きは、受ける必要がある」

「罪．．．裁き？．．．．．あなたは、一体．．．？」

「ふふ．．．言う必要はない」

「そんな、どうして．．．．．あなたも、紫様や幽々子様と同じ
ことを言っんですか．．．？」

「知りたいものがあるのならば、自らで考えるがいい．．．それに、
聞くまでもなく、いずれは分かることだ」

「．．．．．」

結局、妖夢には何も分からなかったし、考えられなかった。
そのまま二人は、白玉楼へと帰った。

今回の旅で、クルーゼの中で大きな変化があったのは確かなことで、彼の中で、一つの決心ができたことを察することができた。

旅の終わりから数日もしない内に、クルーゼは紫と一つの話をした。それがどういう話だったのか妖夢には分からなかったが、しばらくした後、新しい外の世界の人間であるシンが幻想郷にやってきたのを知れば、おそらく、それに関わることなのだろうということとは考えられたし、そのことが、どういう意味を持つのかも、なんとなくだが分かる気がした。

そしてシンは、紫からの（正しくはクルーゼからであろう）進言により、幻想郷をめぐる旅を始めた。

その間にも、クルーゼは、さらに何度か幻想郷を見て回るべく外に出ることがあった。
そして今に至る。

今日もまた、クルーゼと紫は何事か話をしているらしい。

妖夢は二人に、茶と適当な茶菓子を持っていった。肉体がなければ、糧を必要ともしない幽霊であっても、食する喜びは知っている。

白玉楼の一室の襖を開け、そそくさと茶と菓子の盆を机の上に置いた妖夢は、そのまま部屋を去ろうとした。

が、そこを紫の、「まあ、お待ちなさい」という声に呼びとめられた。

「．．．どうしたんです」と尋ねる妖夢に、紫が応える。

「折角なのだから、あなたも聞いていきなさい．．．あいつが聞きたいといえば、幽々子にも聞かせるつもりだから」

「そうだな、それがいい」クルーゼが続く。

「．．．．．」

クルーゼと紫は、いつも二人だけで話をする。第三者が介入することとは許してくれなかった。
それが今、こう言われる。

妖夢は、ほんの昨日のことのようにさえ思える、クルーゼとの旅の終わりに聞いた、いずれ分かる、という言葉思い出した。

それが今なのかもしれない。

少しの間戸惑ったような素振りを見せた妖夢だが、ゆっくりとクルーゼと紫両人に対面するような位置に、正座して、じっと身を固まらせた。

それを確認した二人は、すぐに、妖夢から視線を逸らす。彼女のこととは一切認識から忘れ去った。

本当に、聞いていればそれでいい、ということなのだろう。口を割って入れることは許されていない、と妖夢は察した。

「藍の報告では、シンもそろそろ、目的を達しつつあるそうよ．．．そろそろ、決めるべきことを決める時期ですね」紫が言う。

「うむ．．．」

「もう一度だけ言うけど。この幻想郷で知ったことが全てではない．．．どんなものであると、認識がずれば、破滅を呼びこむ」

「それは分かる．．．だが最早人間は、内側を見るだけでは、何一つ分からないようになってしまった。そういう時代になってしまったのだ．．．一度、外の世界から、新しい価値観を知り、今ある価値観を見直す．．．それは、どうしても必要なことだった」

「そう．．．？」

「彼なら、うまくやるだろう．．．シン・アス力は、この世の酸いも甘いも、全てを知っている、百の絶望から一つだけ希望を見出すことができるのを分かっている。後は彼が決意を固めれば、世界は、間違いなくいい方向へと動く．．．後は．．．」

「あなたとの決着ね」

「そうだ．．．私は。彼の目指す平和な時代にはいてはならない人間だ．．．大罪人、過去の遺物、未来に暗い影を落とす闇．．．彼の眼には、私は、世界を滅亡させようとした悪人と映っていることだろう。そしてそれは正しい．．．」

「そ、そんなことは．．！」割って入ってはいけなと分かっていながらも、妖夢は、思わずこう言ってしまった。

クルーゼが、元いた世界で何をしたのは、妖夢も聞いた。月日を重ねる中で、クルーゼも彼女を信頼するようになっていたのだろう。現世にて自分が重ねた罪だけではない、生まれついて、テロメアが短く、永くを生きることができなかったことも、全て話していた。その上での言葉だった。

咄嗟に妖夢の方を振り向いた二人だったが、その眼に、批難の色はなかった。

むしろクルーゼの眼は、穏やかに笑っていたのである。

しばらくの間を置いて、クルーゼが続ける。

「歴史が、そして、大衆がそれを認めている。私は狂人にして極悪人、世から排除されるべき存在だ．．シンはそれも承知だろう．

．．だが同時に彼の中の私は、彼の無二の友人の生き映しだとも思われている。そして、その友人が、全てを賭してその遺子をくみ取ろうとした人間だと．．今の彼は、ほんの些細な人とかかわりこそ、世界を救いうるということを学んでいるだろう。だが、世界には、絶対的に居てはならない者もいる。彼は、それをまだ知ってはいいない．．平和というものは、無償、そして、無血では得られないのだ」

「ねえ、一つ聞きたいんだけど．．」

「なんだ」

「あなた自身は、平和とやらのために何が必要で、どうするべきなのか、分かっているの？」

「．．．．．」

「．．．やれやれね」

「．．．ああ、自分自身、情けないと思う．．．私の頭では、どうしても、平和のために絶対に必要な、ただ一つの道というものは分からない。それ以前に、絶対的な平和が、そもそも存在

しないとすら思える。そしてそれも、一つの真理だ」

「それを知っている上で、シンに平和を見つけさせようというのだから、お笑いよねえ．．．」

「ああ、だが、平和のために大切なことが一つある．．．それは、諦めないことだ．．．失敗を恐れず、状況を改善させようとする情熱」

「向上心」

「どれほどの現実が眼の前に現れようが、なおもそれを超えていこうとする心．．．かつて私が捨てたその心が、何かを創造することもある、それを信じている」

「全くの無から、素粒子と呼ばれる全ての始まりは生まれ、それが宇宙となり、生命となった．．．理^{「ことわり」}が為せる業を、人が為せぬわけがない、と．．．」

「そうだ．．．人間ほどエゴイスティックで傲慢で、だからこそクリエティブな生物は存在しない．．．そして私はその心こそ、運命を切り開くと信じている。エゴを、自分ではなく、他人に対して向けることだな」

「．．．それを知ったあなたは、いずれシンと対面する．．．してあなたは、その時何を為すつもり？」

軽い口調で言われた紫のその言葉こそ、全ての解答に迫る問いかけであることは、妖夢にだって分かった。

「．．．．．」彼女は思わず息を呑んで、この状況を見守った。

しばらくの沈黙が続いた後、クルーゼは、まるで独白するように、静かに語り始めた。

「幻想郷というのは、つくづくいい所だな．．．こここそ、私が真に求めていた地なのだと思う．．．」

「．．．．．」

「そして、この地で、私が何をすべきなのか．．．その答えは、もう見つかっている」

クルーゼのその言葉は、結局、確信を伝えてはくれなかった。

だが妖夢は、その言葉を聞く紫の顔に差しこむ、暗い影を見落としてはしなかった。

「そう．．．久しぶりに、人間を好きになれそうだとおもったのだけど、残念ねえ」

「．．．ああ。私も、あなたのことは、好きになれそうだった．．．

」

まるで何かがふっきれたようにそう言う紫とクルーゼの言葉に、妖夢は、戦慄のようなものが奔るのを感じた。

というよりは、何か、大きなものが喪失したような感覚を、だ。

妖夢は、クルーゼが、この幻想郷で何をするつもりなのか、確信はなくとも、分かった気がした。

幽々子の死の真相を聞いたときに感じた、胸が締め付けられるような感覚を、何年か、あるいは何十年ぶりか、あるいは何百年ぶりか、感じるようになった。

吹き抜ける風が涼しさをもたらす、中秋の時分のことだ。

PHASE - 13 『大地に漫かる船、空に浮かぶ寺』

神を祀る場所には神がいる。当然の話だ。

だが、だとしたらその神とは一体何なのだろう。

人類の創造主とか、人々に進むべき道を示す象徴だとか、あるいはもつと気軽に、今日の運勢を決めてくれる存在とも、考えられるかもしれない。

そして神は、それを崇める信仰の数、その信仰が語る神話の数だけある。

その全てが、少なくとも神と呼ぶに値するものである。それだけの信仰を受けているのだから。

神とは、それを信じる人の心が創るものである。

すなわち、その心さえあれば、あるいは、ただそこにあるだけで、人生を変革させるほどの力があると信じられていれば、何者でも神と成り得るのだ。

シンが博麗神社を訪れ、紫の言により、勉強のための旅を始めて、そろそろひと月という時分、仮にも彼の旅の始まりを垣間見た霊夢としては、その成果が気になってくる気分ではあった。

成果というか、あいつはよろしくやっているのだろうか？ 程度の感覚であるが。

紫は、式神である藍が、状況を逐一連絡してくれているらしいが、

その紫は連絡の内容を霊夢には一切教えてくれない。

しかも、その紫は紫で、白玉楼に住んでいるというもう一人の来訪者と、ガラにもなくいちゃいちゃしているらしいではないか。

そつという話を聞くと、妙な疎外感を受けると同時に、気分がむかついてくるのが霊夢である。

この際彼女は、いつそシンの勉強の成果を直接見に行こうと考えた。幸い（と、霊夢は考えていないが）、紫から、シン達は続いて、元を飛行船聖輦船とする寺、命蓮寺へと向かったという話を聞いた。幻想郷的には、最近できた寺だ。霊夢としては、その名を聞いていい気分はしない場所である。

ついつい、「なんかあいつ、幻想郷の勉強のためとかいいつつ、新しいとこしか行つてないじゃない」という言葉が口について出たが、それを、紫がこう返す。

「新しいものは、今の姿を見せる。古い物語を語られ、古い歌を歌われ、古い踊りを踊られても、つまらんでしょう?」

「まあ、そりゃそうだけどさ」

さて、紫からシンの次なる目的地を聞いた霊夢は、すぐさま、その目的地である命蓮寺へと向かった。

せいぜい、シンがどこまで勉強とやらをできているのか見てみようではないか、という心境であった。

まるで秘匿主義でも持っているのではないかとすら思えるほど多くを語らない紫が、珍しくシンの目的地を語ったのは、単なる気まぐれであり、冷やかしかであった。

それに、霊夢をシンの元の差し向けることで、また何か面白いことが起こるかもしれないと考えたのだ。

霊夢が去るなり、紫は、藍へと向け、意思を飛ばした。

——今、霊夢がそつちに向かったわ。好きになさい——
藍が返事を寄越す。

——好きに、ですか?——

—— ええ . . . ——

—— . . . 分かりました、好きにします——
という、何がどういうことなのかいまいち分からないような会話だけで、藍への交信は終わった。

そして、博霊神社には、紫しかいなくなった。

たった一人で何ができ、何が楽しいものか。

紫も早々に、神社を離れることにした。

「さて . . . またクルーゼのところにも行こうかしら」

よくよく考えてみると、最近の紫は、朝起きていることが多くなっていた。

いや、人としても妖怪としてもそれが正常であるのが常識なのだが、紫に対して、常識などは通用しない。

彼女は、一日の半分を寝て過ごし、冬には冬眠するような生活を送っていたのだ。

言うなればそれが、彼女の生活習慣だったわけである。

が、その生活習慣も、クルーゼが幻想郷にやってきてからは、妙に崩れていた。

そんなことは、久方ぶりだった。

人間にしても妖怪にしても、何故朝起きるのか、という問いに対しての答えは簡単である。

朝からやること、あるいはやりたいことがあるからだ。

逆に言えば、何もやることがなければ、朝だろうが昼だろうが、寝続ける、まさしく三年寝太郎な生活を送るのが人であり妖なのだ。

多分、紫は、何事にも興味が無いから、起きている意味を感じなかったのだらう。

では、何故今起きているのか . . .

その答えもまた、簡単だらう。

本当に、こんなことは久方ぶりだった。

まったくもって、どんなことでも、きつかけさえあればあっさりと変革するものである。

しかし、クルーゼの元へ向かおうと、境界の隙間へ入り込んだ紫は、直後、あることを思いつく。

シンの勉強の成果を確かめる、ある意味で究極の方法をだ。

それを行うことで、シンの平和のための勉強に、飛躍的な進歩をもたらし、一つの結果を導き出せる。

紫はそう考えた。

だが同時にその方法は、一歩間違えれば、全てを無に帰す危険なものでもあった。

クルーゼの同意は得なければならない。

どっちにしろ、彼の元へ向かう必要があった。

一方、地霊殿にて、数日間のんびりと過ごしていたシン達も、次なる行程を歩み始めていた。

出発する前に、さとり達から興味深い話を聞いた。

実は地底には、最近まで、巨大な船が埋まっていたそうなのだ。

しかしそれが、お空の暴走による間欠泉により、地上へと放出されたという。

聞くところでは、その船が寺として新しく機能しているというらしい。

場所も地底の入口からそう遠くないそうなので、行ってみるといい、という話だった。

シン達は、その言葉に甘えて、命蓮寺と呼ばれるその寺へと向かう

ことにした。

そこは、割と『人間的』な教えを説く寺だそうで、平和のための勉強も、そこら辺をほつつき歩くよりかは捗るだろう、という。

シン達は、さとり達も一緒に行かないかと誘ったが、頑なに断られた。

何でも地霊は、基本的に地上に出てはいけならしい。

地上の妖怪との間でそういう契約がなされているそうだ。

かつての間欠泉の異変も、それだけならただ、温泉が湧くだけの愉快な現象なのに、異変と呼ばれ足り得たのは、本来地上に出るべきでない地霊や怨霊が、間欠泉と一緒に地上へ放出されていたからなのである。

そういうことなら、やむを得ないだろう。さとり達を連れてはいけない。

いずれ必ず戻ってくると固く約束しつつ、シンは、地底を後にし、再び、勉強の旅へと出発した。

どうやら、目的地である命蓮寺は、本当に地底の入口からそれなりに近い場所にあるらしく、しばらく歩けば、大きな船のような影が地平線の向こうに見えてきた。

中々、いや、相当に大きい。

とてもじゃないが、寺とは呼べそうにない。

本当に、船をそのまま寺にしているようだ。また、なんでそんなことをしたのかよく分からなかったが、何事にも理由はある。

大海を渡る船の船長が、訳あって、有難い教えを説きたくなくて、船を無理やり寺にしたのだろう。そういうことも大いに在り得る。

いや、待てよ？

ここで、一つの疑問がシンの脳裏に浮かんだ。

彼は、思わずそれを声にして誰ともなしに問うていた。

「なあ．．．馬鹿みたいな質問するけど．．．船ってさ、海を渡るためのものだよな」

その質問には、藍が応えた。だが、

「え？そうなの？」

藍には珍しく、知らなかった、というような声音があった。いや、実際は知っているのだが．．．

しかし、素っ頓狂な藍のその応えにも、ある種納得できる裏付けを感じた。

紫に聞いた幻想郷の話では、この地には、海はないのである。

少し信じられない話であるが、確かなことのようにだ。シンが走りまわって幻想郷中を探し回っても、湖はともかくとして、海は見つからないだろう。

だとすれば、海のない幻想郷に、なんで船があるのだろうか．．．そんな疑問がシンの脳裏に浮かんだが、すぐに、思い出す。

この幻想郷では、どんなことでもあり得るのだ。

もしかしたら、視界の端に映るあの船は、海ではなく、空を渡るためのものなのかもしれない。

そう考えられるだけの余裕が、今のシンにはあった。そろそろ、本格的にこの幻想郷になれてきたらしい。

とにかく、今は、目的地であるあの船の形をした寺、命蓮寺へと向かうだけだ。

シン達は歩を進める。

と、そんな矢先のことであつた。

紫と、テレパシーでも飛ばすように何事か交信していた藍が、ふとシンに対してこう言ってきたのである。

「シン、霊夢が、こっちに向かってきてるらしい」

「霊夢って．．．博霊神社にいたあいつか．．．」

「紫様が、好きにしろってさ」

「好きにしろ．．．って、どういうことだろう」

「それを好きに考えろ、ってことだよ」

「．．．ややこしいなあ」

要は、こちらにやってくるらしい霊夢に、適当に対応しておけ、ということか．．．

しかし、紫に限って、こんなことをわざわざ藍を介してこちらに言ってくるだろうか？

もしかして紫は、こちらが霊夢とひと悶着でも起こすのを期待しているのだろうか。

そんな期待をされても困るが．．．

が、シンのそんな考えを余所に、紫の期待は、概ね応えられそうだった。

「好きに．．．ねえ．．．」

突如、小傘が、いかにも何か良からぬことを考えていそうな声を出した。

「どうした？」と聞くシンに対して、小傘は、珍しくちょっとおどろおどろしい雰囲気を出しながら、言った。

「あの巫女にや、一度痛い目に合わされててねえ、ちょっと本気で恨めしい気分だったんだよねえ．．．」

「嘘つけ」

「まあ、それもそうだし、それ抜きにさ、あたしそろそろ、人の驚かせ方ってのが分かってきた気がするんだよねえ」

「嘘つけ」

「嘘じゃない。ってなわけで、ここいらで一度、今まで培ってきたものを実践したみたいのよね」

「．．．つまりお前が言いたいのは．．．．．は、はは．．．」

シンとしては、小傘の言葉が示す意味が分かった時、苦笑いを漏らすにはいらなかった。

しかも面白い（？）のが、小傘のこの野心に対して、藍も橙も、ノリ気になっていることだった。

「そうだなあ．．．何事も実践あるのみ」

「面白そうだね」

「はは．．．は．．．」

好きにしろと言われて、本当にこういう意気地の悪いことを考えるのが幻想郷の妖怪だ。

だが、シンとしては、幻想郷のこういう部分も、気に入ってはいるのだ。

橙が言う通り、確かに、面白そうだ。

なにも知らずにこっちに向かってくる霊夢を、散々驚かせてやろうというのだ。

まるで子供のやるいたずらみたいで、純粹だ。

シンとしても、こういうことを考えるのは久しぶりだった。子供心なんてものは、当然だが、大人になるにつれてなくなっていく。

幻想郷では、記憶にしても気持ちにしても、昔捨てたはずのものが戻ってくる。それがまた、気持ちを穏やかにしてくれるのかもしれない。

シンは、ぼんやりとそう考え、同じくぼんやりと、やっぱり、この世界で暮らしてみたいな、と思った。

さて、とりあえず今は、命蓮寺へと向かうのが先だ。

折角だから、その人、あるいは妖怪達も巻き込んでやろう。どうせやるなら、大きなことを、だ。

さて、さらに近くへ寄ってみると、元が船である命蓮寺の圧巻の姿に、眼を見張る気分であった。

この船、かなり大きい。

ミネルバやアークエンジェルとまではいかないが、コズミックイラの巡洋艦一隻分ほどの大きさを優に持っていたのである。

作り自体は、大昔の船、といった感じだが、こう大きくて、耐久力などに問題はないのだろうか．．．

大昔の豪華客船タイタニックは、造船中の怠慢もあるが、ちょっと

氷山に当たっただけで沈没してしまった。

この船の見た目は、そういう時代よりもっと前のものに見えるが、こういう余計な心配は、まさしく杞憂だろう。

幻想郷の船が、そうそうヤワな造りをしているはずがないのだ。

遠くから見ると、寺院らしからぬ風貌をしていたこの命蓮寺であるが、近くになると、そうでもなかった。

巨大な船体が放つある種の威厳は、神格的な雰囲気醸し出していたし、船体の周りの敷地も、寺院らしく整備されていた。

これは、確かにお寺と呼べるだろう。

平時は、船が寺になったという物珍しさと、寺そのものの吸引力から、人間妖怪問わず、多くの者が訪れ、賑やかだそうだが、この時は、偶然そういうタイミングだったのだろう。

神社の敷地内にいる参拝客は、シン達以外にはいないようだった。

霊夢もまだいないようだ。これ幸いだ。

命蓮寺に到着したのはいいが、このまま、お参りして帰る、というわけにはいかない。

シンはここに、勉強にやってきたのだ。

勉強するにしても、そこら辺の寺院の装いを眺めているだけでは意味がない。

話をしてくれる人が必要だった。

眼前にそびえる巨大な船体からは、さとり達の住む地霊殿とは別の物寂しさを感じたが、だからといって、人がいないわけがないだろう、ここは寺なのだ。

試しにシンは、大声で、呼びかけてみた。

「あのー？ 誰かいませんかー？」

が、返事は帰ってこない。

これでは、地霊殿の時と同じだ。

「どうする？・・・また、中を探してみるか？」

一度シンがこんなことを聞いてしまえば、もれなく賛同するのが小傘達である。

地霊殿の時はともかくとして、今回は寺に無断侵入しようと言っているのだが、そんなことは考えてもいないようだ。

寺の中を勝手に探し回って、一体どんなバチが当たるのか知れたものではないが、このままでは埒が明かないのもまた確かだ。

幸い、寺院となっている船の船腹、横っ腹の部分には、中に入れる入口があった。

本来、そんなところに穴をあけては、浸水して一巻の終わりだという位置にそれがあるのを見ると、寺院に改造する中で設けられた入口なのだろうと考えられる。

ということは、その入り口の中が、この寺の本堂になっているのだろう。

入ってはいけない場所に入口を設けるわけがない。どうやら、少なくとも中に入って見回すぐらいのことはしてもいいようだった。

ということで、ひと思いに中に入ってしまったおと、その入り口に向かって歩きはじめるシン達だが、その間近に差しかったとき、入口の淵の陰から、小さな声が聞こえた。

隠れて何かを話しているような声だ。

少し注意深く聞かなければ聞こえないような小さな声ではあるが、逆に、隠れて話をするには少し不用心に大きな声でもあった。

「どうしようかなあ．．．なんでこんな時に．．．」

「．．．？」

「どうする雲山．．．え？出るの？．．．いいのかな、あいつ人間みただけど？」

「．．．．．」

「まあ、確かに、居留守使うよりかは、門前払いした方が確実ではあるわね．．．よし」

「あの一？」

「うっ！？」

「すみません。聞こえてるんですけど．．．」

「あらやつちやつたっ！」

壁の向こう側からでも身震いする様子が伝わる声が聞こえ、次いで、入口の陰から、一人の少女と、雲のような大男が現れた。幻想郷に来て初めての（厳密には二度目の）男だ。

少女の方は、僧侶のような格好をしていて、いかにも寺の者っぽい。男の方は、なんともいかつい風貌で、まるで仁王像のようだ。

こそこそと何事かやりとりしていたらしい二人は、それがシンにばれたため、すっかり諦めた様子になっていた。

そして、少女が言う。

「どうもーこんにちばー」

「あ？ああ、こんにちは．．．あんたが、この寺に人、ですか？」

「うん、そうよ。あたしは雲居一輪。で、こっちが雲山。よろしく一輪というらしい少女が自己紹介すると同時に、雲山という名の入道のような男が、シンを睨みつけてくる。

実際は、雲山流にあいさつをしているだけなのだが、彼が中々のシヤイボーイであることを知らないシンとしては、威圧されているように感じて、無性に怖かった。

そんな中、一輪が、「で、一体何の用？」と聞いてくる。

シンは、何故か彼女がこちらを警戒しているのを感じ取り、少し戸惑いつつも、応えた。

「何って．．．ただ参拝しに來ただけなんだけど、それ以外にも、ちよつと、話をしたいんだ」

「話って、一体誰と？」

「お坊さん」

「お坊さんて．．．」

「というよりは．．．このお寺で一番偉くて賢い人、とかな。それがお坊さんなんだろうけど．．．あんたかな？」

「それって．．．まさか．．．？」

シンの言葉に、思い当たるふしがあるらしい一輪と雲山は、しばらく

く互いの顔を見合った後、少し申し訳なさそうな表情を浮かべた。
というのも一輪だけの話で、雲山の方は相変わらず鉄面皮を張り付けていたが。

そして、ほとほと申し訳なさそうに、一輪は言った。

「いやゝその、悪いけど、今日はちょっとお引き取り願おうかしら
「え？何でだ？」

「平時なら、姐さんにも快く会わせてあげるところなんだけど、なんせ今はタイミングが悪くてねえ」

「何だよ。今からこの船が浮き上がって空でも飛ぶってのか」

「あ、うん。まあその通りだね」

「それぐらいいいじゃないか、俺達も乗せてくれ」

「乗せたいのは山々だけど、今回はちょっと事情があるの．．．参拝ぐらいなら好きにどうぞだけど、それで帰ってほしい。帰らないのなら、ちよつと荒つぽいことさせてもらうけど．．．」

「弾幕勝負．．．か．．．」

どんな事情があるのかは知らないが、シン達は、ちよつと都合が悪い時期にこの寺に来てしまったらしい。

向こうも真剣らしく、そう簡単には通してくれそうにない。

下手に突つかかれば、毎度おなじみの弾幕勝負に発展しそうだ。

一度シンは、後ろにいる藍達の方を振り返る。

みな一様に『やるならやるぜ』という態度だったが、今回ばかりは、荒つぽいことにしたくない。

一輪は、それなりに真面目にこちらに対応しているらしく、その後ろにある事情はかなり重要なものらしい。

そういうことなら、こちらとしても、無理強いをするつもりはないが、同時に、後ひと押ししようという考えも、シンにはあった。

何をするにしても、一歩引くことは大事だが、逆に一歩押し込むこともまた大事なのである。

幻想郷で大事なのは、引くことではなく、押すことだ。

シンはまず、「俺達も、荒っぽいことはしたくない．．．どうしてもっていうなら、帰るよ」と、一言言い、その上で、切り出した。「でも、その事情って、どういうものなんだ？儀式でもやるのか？それとも、俺達を行かせられないようなところに行くのか？それなら、それをする直前までなら、俺達の希望を叶えてくれてもいいはずだ．．．あんたらがどうしても帰れっていうなら、帰る。でも、その前に、一目ぐらいあんたらの考えるこの寺の責任者と会って、ちよつとだけ話をしたいんだ．．．それでも駄目なのか？」

「こ、腰の引けてるお人．．．うーん．．．」

あくまで引け腰に、しかし強く畳みかけられたシンの言葉に、一輪は深く悩んでいた。

一度雲山に対し、「どうする雲山？」と聞く。

雲山は、その大きな口には似合わない小言で、一輪の耳元で何事か喋った。

その言葉を、一輪が代弁する。

「さつきも言っただけど、普段なら、よろこんで会わせるんだよねえ．．．来るもの拒まず、誰でもおいでの大歓迎が命蓮寺の魅力だもんで．．．雲山も、どうしてもっていうなら会わせてもいいって言ってる。けど、実は割と今時間ないんだよね」

「そうか．．．それなら、別にいいんだけど．．．」

「いや」。あんたが口くでもないやつなら、雲山が一発ぶん殴ってそれで終わりなんだけど。あんた中々人がよさそうだからねえ．．．
．さて、どうしたものか．．．」

かなり真剣に、一輪達は考えあぐねている様子だった。

が、こういう、何かに悩むときに、有効な対策があるのをシンは知っている。

自分で考えるよりも、まず上司に指示を仰ぐのだ。

シンがそう考え、一輪に対してもそう伝えようとした（とはいえ、一輪の上司にあたる者がいるのかは知らないが）、その時だった。一輪達が出てきた入口の奥から、また別の声がしたのである。

「どうしたの一輪・・・？おや？」

声の主が、シン達の存在に気づいたらしく、奥から彼らの方へと歩み寄ってきた。

虎のような模様のある髪のに、なんともいかつい恰好をした、男のような（格好だけの話であるが）少女だ。

武門の神とかそういう何かを感じさせる格好をしているだけに、どこことなく格式高いものを感じさせた。

もしかしたら、彼女こそこの寺院で一番偉い者なのかもしれない。確証はまだ持てないが。

少女に対して、一輪が、いいところに来たといった具合で事情を話す。

「いいとこに来ましたね。ちょっと聞いてくださいよ」と、シンのことをひとしきり説明する。

ついでにシンに対しても、「こちらは寅丸 星様、毘沙門天の代理で、割かし偉い」と、寅丸というらしい少女の説明してくれた。

「まあ、確かに割かしだね」

本人がかく言うということは、どうやら寅丸も、この寺院の最高責任者ではないらしい。

一輪から事情を聞かされた寅丸は、すぐさまこう判断した。

「よし、会わせよう」

「え？いいんですか？」

「聖は、どんな時でも、人妖分け隔てなく平等に接する。こういうときでも、それは例外じゃないものね」

「そりやそうですけど」

「それに、この少年の言うところじゃ、時が来れば帰るというそうじゃない、なら、その時まで、言うこと聞いてもいいはず」

「ああー、そうですね」

「シンとか言うヤツと愉快的仲間達、ついてきてよ。あなたの言う、一番偉くて徳の高い方、我らが聖に会わせてあげよう」

「いや愉快的仲間達で・・・」

どうやら、結論はついたらしい。

シンの希望は、くみ取られたようだ。

彼女らが聖と語る者こそ、シンが会おうとする、この寺院の僧なのだろう。その者にこれから会わせてくれるというのだ。

ついてこいという寅丸の言う通りにシン達は、彼女についていき、寺の中へと入っていった。

ついでにシンは寅丸に、「あと、言い忘れてたけど、もう一人遅れて、この寺に来るヤツがいる」と、伝えておいた。

さすがに怪訝そうに、「えー？」と、返してきた寅丸に、さらにこう言う。

「でもそいつへの対処は、好きにすればいい」

「好きに？」

「ああ、好きにだ」

どういうことなのだろうという顔をしつつ、寅丸は、とりあえずシンの言葉を聞き入れておいた。

小傘達の愉快そうな含み笑いが聞こえたのは、シンだけである。

さて、いざ、寺院の中に入ってみると、その構造は寺院というよりも、そして船というよりも、一つの屋敷のようだった。

当然ながら、かつてここは、寺院ではなかった。

シンが考えていたように、空を飛ぶ船として機能していたのだ。

寺院としての役割を持ったのは、本当にここ最近のことらしいのだ。それまでは、人は愚か妖怪も寄り付かず、というか、寄りつくこともできない、聖と、彼女に関わる妖怪達の住居だったそうなのだ。

寺院となった今も、定期的に空を飛んでいるとかいないとか。

しかしながら、この命蓮寺、またの名を聖輦船は、ただ空を飛ぶだけの妖怪の住処ではないのだ。

この船の航路には、幻想郷の外の世界、しかも、シンのいたコズミック・イラの世界とも違うもう一つの世界、魔界が入っているらしいのだ。

今回一輪達がシンを門前払いしようとしたのには、そのことが関わっているという。

とはいえ、魔界にだって、希望があれば連れて行ってもいいのだ。ただ今回は、聖輦船に住まう者達だけで、内々で済ませたい用事があるのだという。

それがどんな用事かは教えられないという。メタフィクション的な話をさせてもらえば、著者が考えていないのだ。だからこんな長々しく、事情だ事情だと書く必要はなかったのではとさえ思っているのだ。つくづくメタな発言だが・・・

だから、今回ばかりはシン達に長居はさせられない。という。

なるほど、そういうことなら、納得できる。

時が来たなら、大人しく帰っておこう、と、シンは考えた。

また、この船に住まう妖怪の多くは、聖と関わりを持った故に、ここに住んでいるという。

聖は、あらゆるものを分け隔てなく扱うその心の広さで、多くの妖怪を助けてきた。

そして、そんな聖を慕う妖怪が、ここに住むようになったのだという。

雲山も、入道である自分にすら慈悲を見せる聖に対し帰依しているし、そんな雲山と共にいる一輪も、聖のことを慕っている。

寅丸も、昔から聖とは関わりを持っており、彼女のために、毘沙門天の代理としての役割を果たしているのだという。

他にもそういう妖怪が、いくつかこの船に住んでいるのだそうだ。そんな聖だが、訳あって一時期魔界の一角に封印されてしまった。

だが、聖輦船に住まう妖怪達は、聖を信じ続け、果ては、彼女を無事復活させることに成功したのだという。

妖怪から、それほどまで信頼され、ある種の信仰すら受ける聖。

人も妖怪も等しく訪れる寺院を設けるその者。

寅丸から彼女の話聞くシンとしては、ますます、彼女に会いたくなかった。

人も妖怪も信じさせる聖。

彼女ならば、平和のために必要な何かを、きっと知っていることだろう。

しばらく寅丸についていくうちに、シン達は、一つの大きな部屋の中に入っていた。

部屋というよりは、もう一つの空間だ。相当な広さがある。

中には、多くの仏像やら鐘楼やら、神格的なものが置いてある。

ほとんどが、寺院として機能する内に奉納されたものらしい。結構な数があり、聖の信仰の高さを感じられた。

そして、そんな多くの仏具に囲まれ、そこに宿る信仰が、ある種肌で感じられるほどの実体的な力のようにさえ感じるその中に、いた。

彼女こそが聖。

シンが会おうとした。人妖の多大な信仰を一身に受ける、聖輦船の主だ。

PHASE - 14 『幕間劇こそ凄惨に』

何事にも息抜きは必要だろう。

物語、お話にしても、たまにはどうでもいいことをしてみるのもいいことである。

だが、さすがにこれは如何なものか？

広大な空間の中に、言い様のない力が満ちている、と、シンには感じられた。

法の力、魔を放ち、万物を穿つ力だ。

まるで、それすらも己の身体の一部のように、多くの仏具の中に囲まれる少女。

彼女こそが聖　白蓮である。

未だシンの方に背を向け、彼のことは気づいていないようだ。

彼女の姿を垣間見たシンは、まるで地に足がつかないような、奇妙な感覚を味わっていた。

初めて幻想郷にやってきたところに何度か感じた感覚だ。

まるで自分が、この場にいないくて、もっと別のところから魂だけを飛ばしているような、あるいはそれ以上に曖昧な状態にいるような感覚、である。

それは、未知なるものと遭遇したときに人が感じる、夢想の力だった。

た。

そう、シンは、小傘や藍、さらには、あの紫にさえ感じたことのない未知の感覚を、聖から感じていたのである。

不気味というわけではない。むしろそういう感覚とは逆だ、それだけは言える。

自分がその言葉を発したのかも分からないような気分で、シンは静かに言った。

「あんたが、聖．．．ですか？」

「ん？．．．そうですが、あなたは．．．？」

聖の返事が返ってきたところで、シンはようやく、地に足が付き、自分が確かにここにいることを確と認識した。

ゆっくりとこちらに振り返りつつ聞き返す聖に、シンは応えた。

「俺は、シンっていいます．．．その．．．あなたに一度会いたくて、ここに来ました。寅丸さんの案内です．．．そちの事情は知ってるんですけど、せめて一目だけでもと思って」

「そう、シンと言うのね．．．そんな堅苦しい態度は足らなくていいのよ？」

「え？．．．ああ、そ、それなら．．．．．分かったよ」

「事情は知ってると言ったわね？」

「ああ．．．だから、あんたが帰れって言ったら、今すぐにでも帰ろうと思う」

「いえ、いいのよ．．．そんなことはいいの。私に会いたくてわざわざ御足労頂いた方を、追い払うことなどできません」

「．．．じゃあ？」

「私に用があるというなら、それに応えましょう。私にできる限りのことをね」

「いいんですか？」聖の言葉に、寅丸が割って入る。

聖は、すぐに応えた。

「構いません。こちらの用事など、いくらでも引き延ばすことはで

きます。ならば、この人の願いを聞き入れねばならないでしょう。誠実さはなによりも大事なものです」

「聖がそういうのなら、そうです」聖の言葉に、寅丸も、納得した様子になった。

シンとしては、聖が多くの人妖から敬われる理由が分かる気分だった。

その柔らかな物腰は、無条件で人に好かれ、人を惹きつけるだろう。彼女の語る誠実さを、シンも同じく持とうと考えた。

等しく誠実な心を以って接すれば、彼女が何かを教えてくれるかもしれない。

「ありがとう、聖」素直に感謝の言葉を述べたシンに、聖が応える。「いいですよ．．．それで、用は何かしら？」

「．．．話がしたいんだ」
「話？」

聖が不思議そうに首をかしげた。

お寺のお坊さんにしてはなんともお茶目な仕草ではあるが、聖が、命蓮寺建立のチラシにハートマークをつけるような人物だと知っている者達には、特別なものではない。

しかし、聖が千を下らない年月を生きていると考えたと、やはり変なものではあるかもしれない。

しかし、そんなことは知らないシンは、続けて言った。

「平和のための話」

「平和の．．．」

シンの言葉を聞いた聖の眼の色が少しか変わった気がした。空間を漂っていた法の力もまた、流れを変えたように思えた。

と、そんな時である。

聖のいる大部屋の向こう側、ちょうどシン達が入ってきた入口の方から、声が聞こえた。

「姐さーん！姐御ー！姐さん御ー！」

「姐さん御ってなんだ．．．それよりも、まずいことをしてしまいましたよ」

一方は、命蓮寺の入口に留まっていた一輪の声、もう一方の声は初めて聞くものだ。

シン達が声のする方向に振り向くと、慌てた様子で、一輪と雲山、そしてもう一人、鼠のような耳としっぽをした少女が入ってきた。

「あいつはダウザーの大將ナズーリン。私の部下よ」

寅丸が、今必要か？と思える説明をする。まあ、有難いには有難い説明だった。

「どうしたの？」

と問う聖に、ナズーリンが応える。

「この前の紅白野郎がまた来ている．．．追い返そうと思ったんだが、モノの見事に返り討ちにあってしまいました．．．しかも、中途半端に焚きつけたせいで、向こうもすっかりやる気です。まずいことをしました、申し訳ありません」

次いで一輪が言う。

「今回ばかりは、この前みたいに友好的な来訪者にはなってくれそうにないですよ。今ここで暴れられたら、困りますよね」

「．．．それはさすがに困るわね．．．」と、聖。

紅白野郎．．．まあ、靈夢のことだろう。

どうやら彼女の方も、近くまで来ているらしい。

向こうにも非はあるようだが、聖輦船の住人がこっぴどく痛めつけられたようだ。

「あ！そいつってまさか．．．？」

寅丸が、思い出したような声を出す。

「何か知ってるの？」と聞く聖に、寅丸は、シンを指差しながら、応える。

「確かさっきこいつがですね。もう一人ここに来るって言ってんで

すよ。それって、あの紅白のことだったんだ」

「ということは・・・」

あの紅白、すなわち霊夢は、シンの仲間、そのシンの仲間が、ナズーリンを返り討ちにして、聖輦船に向かっている。

口外に付け足した聖達が、シンに怪訝そうな眼差しを送ってきた。

初対面のはずのナズーリンが一番きつく睨みつけてきていたのが怖かった。まあ、初対面だからこそなんだろうが・・・

これはまずいことになった。

向こうには事情もあってあまりいい状態ではないというのに、疑われるような事態になってしまった。

これでは、何をされるか知れたものではない。

だが、今しがた考えていたばかりではないか。誠実さを以って接すれば、問題はないはず。

霊夢とは知人ではあるが、別に結託してここで暴れ回ろうというつもりはない。

そのことを正直に伝えようとしたシンだが、その行動は、小傘の声に抑えられた。

「いやいや！あんな縁起のよさそうなヤツとは仲間でもなんでもな
いって、赤の他人よ、一般ピーポーよ」

「うん、まあそうだな」

「そうだねー」藍と橙も続く。

「シン、あなたはどうかなの？」

小傘達の言うことも聞きつつ、シンに結論を聞こうと、聖が問うてくる。

こちらを見据える眼には、中途半端な嘘は通じないような雰囲気
を漂わせていた。

だが同時にそれは、正直に伝えれば分かってくれる眼だった。

やましいことなどないのだ。

シンは正直に伝える。

「霊夢とは知人だ・・・だけど、一緒に行動はしてない・・・俺と

いつも一緒にいるのは、この小傘達だけだ。霊夢とは、こいつらぐらいに仲が良かったわけじゃない．．．あいつがここに向かっているのだから、ちょっと前に知ったばかりなんだ．．．俺があんたらを困らせたくて、あんたの仲間を傷つけるようなヤツに思えるなら、それでもいい．．．あんた達の好きなようにしてくれ」

「いえ、そんなことはしません」聖が静かに言う。

「聖？」と聞き返す寅丸に、ぴしゃりと応える。

「久しぶりによい人間に会ったわ」

続けて聖は、シンに言った。

「向こうに止まる気はないようです、やむをえません。最小限に対処して、追いかちます。あなた達にも協力してもらいます」

「．．．．．」

こちらの潔白は、向こうに伝わったらしい。

そして聖達は、霊夢を迎え撃って、追い払うつもりらしい。

すでに仲間であるナズーリンがやられたのだ。確かに、やむをえない。

しかも、この聖。シンが感じる雰囲気を感じれば、相当な力を有しているようだ。

出し惜しみしても、小傘ほどなら倒して余りあるような力が、である。

しかも、彼女に従う寅丸や一輪達も、それなりにスペルカードの力はあるだろう。

そんな彼女らが一同に霊夢の相手をすれば、彼女などひとたりもないのではないか？（とはいえ、かつて霊夢は、一度聖達と、一斉にはないが勝負し、一応に勝利を収めている）

しかも、聖はこちらに協力を仰いでいる。

潔白を証明するために、霊夢を自らで追い払え、というのだろう。

つまり、小傘達、そして藍の力もそこに加えるわけだ。

これでは、手加減しても、霊夢は相当な打撃を被るだろう。

向こうも悪いとはいえ、さすがに霊夢がかわいそうではある。

どうせ追い払うなら．．．だ。

臨戦態勢に入りつつある聖達に、シンが言った。

「ちよつと待ってくれ」

「なんだ？きみの意見なんぞ聞かんぞ」すぐさまナズーリンがきつい台詞を放つが、

「いいえ、聞きます。何かしら？」と聖がなだめる。

「ありがとう」と断りつつ、シンは言う。

「どうせ追い払うんだ．．俺にいい案がある．．正しくは、俺と小傘の案だけど」

「それは．．．？」

「驚かすんだ」

「驚かす．．．」

「驚かすですって！？あんた、ちよいと待てえーいつ！」

「ん！？何だ！？」

またしても別の声、しかも、今度の声はあまりに奇妙だ。

男のような女のような、老人のような子供のような。そもそも人の声で知らない、獣の鳴き声のような、正体不明の声だ。

そんな声が聞こえてきたんでは、さすがのシンも驚いて、周りを見回さずにはいられなかった。

が、しかし、聖達に驚いている様子はないようだし、小傘達も、驚いているには驚いているが、この声が『どういう声』なのかは知っている様子だった。

小傘に至っては、「まさかあんたは！」と、完全に声の正体を知っている様子だった。

しばらく周りを眺めていると、そんなシンの目の前に、光の塊のような、同時に蛇だか何だかよく分からないような、まさしく未知の生物（生物なのかどうかさえよく分からない）が出現した。どうやら、声の主はこいつらしい。

だが、この生物は一体何なのか？

まったくもって正体が分からないというのは、人に奇妙な不安を与えるものだ。

しかもそれが、漠然とではなく、はっきりと眼の前に現れるとなると、なおさらだ。

しかしシンは、妖怪の住まうこの幻想郷に慣れてくるにつれ、コズミック・イラの世界にいたところに、無駄にかじっていた妖怪の知識を思い出していた。

確か、マヨヒガや土蜘蛛のように、このような妖怪の話を聞いたことがあるような気が、しなくもなくもなくもない。

頭が蛇だか、あるいは猿だと言われ、身体や腕もまた、まったく別の生物、蜘蛛の身体に鬼の頭とか言われる土蜘蛛以上に、あまりにあべこべに伝えられ、だからこそ畏怖されてきた妖怪。

その名は確か・・・？

「こいつ・・・鵺とかいう妖怪か？」

呟くようにいったシンの声に、眼の前にいる奇妙な生物が応えた。

今度は、明確に少女の声だと判断できるものだった。

「そう、よく分かったね」

その声と同時に、少なくとも光の塊のようには見えていた生物が、さらに眩く発光し、シンの視界を光が覆い尽くした。

思わず眼を閉じたシンは、光が弱まるのを待ち、それが叶うと同時に、ゆっくりと眼を開けて、眼の前の様子を伺った。

開いた視界の中には、一人の少女が立っていた。

おそらく、先ほどの奇妙な生物と同じ者だ。

これが本来の姿なのか？

いや、そうではないだろう。

おそらくお燐と同じく、人間の姿に見えるように変化した、というだけのことにすぎないのだろう。

呆氣に取られてぼかんとしているシンに、少女（鵺と呼ばれる）

のだろうか？」が言う。

「あなた、今驚かすとか何とか言ってたわね、今確かに」

「あ、ああ．．．あんたは？」

「封獣　ぬえ。今や封はなくなってたただの獣だけど」

「ぬえ．．．やっぱり鵜か．．．確かに、今驚かすって言ったけど、どうしたんだ？もしかして、あんた、ノリ気なのか？」

「その通りよ。今こつちに來ているとかいう紅白には、あたしも痛い目に会わされた。その時の恨みは晴らしたいし、しかもその方法が驚かすって言うなら、なおのことやる気になるわ」

「は、はあ．．．またなんで．．．」と、言いかけたところで、小傘のことを思い出す。もしか、そういうことなのか？

「もしかしてあんた、人を驚かすのが好きなのか」

「そう！その通りよ」

「あは．．．あはは、そーなのか」

千差万別、それぞれに違いがあると思われていた幻想郷の妖怪だが、思わぬところで共通点はあるものだ。

まあ、妖怪とは人を驚かすものだ。だったら、それに生きがいを持つヤツが2つや3ついるのも、おかしいことではないかもしれない。まあ、それはともかくとして、こういうヤツが現れてくれたのは、今のところでは有難かった。

一人でもこういうノリ気でいてくれるものが現れば、聖達がシンの考えをくみ取ってくれる可能性も高まるというものだ。

が、そんなこと以前に、聖達も、シンの考えに賛同してくれているらしい。

何故か知らないが、「ぬえのヤツも来たことだし、役者は揃ったよ。うね。ってなわけで、やつちゃう？」と、勝手に仕切るような声をあげる小傘。いや、別に構わないのだが。

その声に、人の良さそうな笑みを浮かべながら聖が、「驚かす、のね？確かに、そっちの方が人道的だし、楽しそものだね。それに、

こちらが全面的な被害者でもないもの」と応えた。

それに、聖達は、以前は霊夢に助けてもらった恩もあるのだ。当の霊夢にそのつもりはなかったようだが・・・

「なら、少しの間、この命蓮寺をお化け屋敷に改装でもしますか・

・ナズーリン、ムラサ船長も呼んできて頂戴」

「あい、分かりましたー」

かくして、シン達と聖輦船の者達は、驚かすという、一風変わった方法で霊夢を迎撃することにした。

しかも、聖達は一つのルールを取り決めた。

それは、こちらは霊夢に対して一切攻撃せず、ただ驚かすだけでヤツを懲らしめる、というものだ。

もしそれが叶わないのなら、どうぞ好きに暴れ回るなり好きにしてもらおうということだ。

さすがに、わざわざそこまでする必要はなさそうに思える。

だが、何事も、多少のリスクを背負ってこそ楽しくなるし、真剣の取り組みというわけだ。

これは遊びではなく、聖輦船を守るための勝負なのだ。

本気で、それこそ、霊夢が心臓止まらせてあの世いき（どの世いきだ？）するほどの本気で、驚かさなくてはいけない。

そしてそのためには、ただ眼の前にはつと現れて大声を出す程度では駄目だ。

綿密に、相手をどうやって驚かせるのか、どうやって恐怖心を煽るのか、計算しなければならない。

そこらの遊園地にある、ギヤアギヤアわめくだけのお化け屋敷とも違う。

入るもの全てがトチ狂いながら出てくるような、究極のお化け屋敷を目指さねばならないのだ。

なるほど、確かにこれは、小傘が学んできた人を驚かせる方法を実

実践するいい機会だ。

もっとも、彼女がそれほどの知識を得てきたのか、という問題ではある。

さて、霊夢が確実迫る中、聖輦船の者達も総結集して、短い時間の間、いかにヤツを驚かせるか話し合いが行われていた。

ちなみに、ナズーリンと、折角彼女が連れてきた村沙 水蜜、通称ムラサ船長（船長という肩書は実は名ばかりの半分NEETである、そういう表現もさすがに失礼かもしれないが）は、まったくやる気を出してくれていなかった。

藍と橙も、話し合いには参加しているが、聞いているだけで、せいぜい、何か思いついたら言う、程度ではあった。

結局、真剣になっているのはシンと小傘、聖、寅丸に、一輪雲山ペアに、後はぬえ、だった。

が、そういう面々であっても、むしろ、そういう面々だからこそ、か？話し合いは思いの外捗っていた。

「恐怖の基本とは、相手が得体の知れないものであるときね」と、ぬえ。

「だけど向こうには、もう私達のことはすっかり知られてしまっている。頼み、なのかは知らないけど、ぬえもね」と、寅丸。そこでシンはこう考えた。

「だったら、あえてこっちのことを知られているのを利用すればいいんだ。たとえば、こっちが普段絶対見せないような恐ろしい面を、ぱつと出す。やさしい人が突然怒ると怖いだろ？」

「聖様が本気で怒って大声だしたら、心臓止まるよね」と、一輪。

「え？本当？きゃー！！わぁー！！！」

「いや、それはどうかと思いますよ、怒ってないし」

「こらー！！！」

「．．．かわいいなこのババ．．．お姉さん」

「しかし、一輪の言うことは、いいね」と藍。

「主軸となるのは聖だな。あとは、そこにさらに恐怖をあおるような要素を肉付けさせていけばいい」と続ける。

「さすが藍しゃま、冴えてるー」

「ふふ」

「だったら、いろいろと閉まり切ってて、逃げ場がない、っていう状況を作ろうよ、それって怖いよね」と、小傘。

「逃げ場なしか．．．確かにそれは怖い、ホラー映画のキャッチコピーの三割がそれだもんな、知らないけど．．．当然、逃げられないっていうのを相手に思い知らせるんだよね」と寅丸。

「後は、これ以上ない絶望感！ちよつとだけ希望を見せて、それを一気に叩きつぶす。怖いとは違うかもしれないけど、こういうのって、精神的にクるよね」と橙。

「確かになあ、それはいいねえ．．．止めの一撃にはその手法を使。あの紅白、たまらず泣き出すんじゃない？」と、一輪。

「なあ．．．そろそろ紅白紅白って言うのやめないか？一応あいつにも霊夢って名前が．．．」とシン。

「いいじゃん紅白。めでたそうだし」と、小傘。

いや、そういう問題ではないのだが．．．こう言われてしまうと、何故かシンは反論できなくなる。

反論するだけ無駄だからだろう。

さて、シン達の話し合いが進む中、その輪から離れているナズーリン達も、何かよく分からない会話をしていた。

「かまんベーるって言う、おいしいチーズがあるんだって」とムラサ船長が言う。

「いや、チーズは喰わん」とナズーリン。

「でもおいしいんだって．．．それにあと．．．も．．．もつつあ．．．もつつあ．．．」

「もつつあつあ？」

「もつつあ．．．れら、れら。レラレラレラ．．．そうそう。もつつあれらチーズっていう、脂肪のないチーズもあるんだって、おいしいらしいよ」

「だから、チーズは喰わん」

「それとね、あんたの鼠って、人肉食べるらしいよね、エゲツな」
「ああ、食べるな、かくいう私もちよつとだけ．．．」

「エゲツな．．．でもさ、ナズーリンナズーリン！」

「なんだうるさい」

「いいから聞けつてばさ！アタシきのうの夜考えたの。人間の肉つてさアーアー、もし食べたなら「おいしい」？それとも「まずいの」？」

「なんだそんな話か．．．」

「いいから聞きなつて、食べることを深く考えるつてことはねエー、『幸せに生活してるか？』どーかにつばがるからさーとつても大切なことだと思うわけよ．．．．．でね！！肉を食べて生きてる動物いるよね？ライオンとかネコとかハゲタカとかさア~~~~は出ない——なぜか？臭くつて　とても喰えたもんじゃないからなの！！まずいのよ！！いい？ナズーリン？橙はまずくて食べれないー（性的な意味ではそうでもないかもしれないけど）ここまでのいい？」

「たとえ藍がうまいから食べるつて言つたつて　私は橙なんて食べないよ！（性的な意味ではそうでもないかもしれないけど）つていうかこの会話何かの漫画で見たことあるんだけど．．．」

「一方でさ『鮎』って魚知ってる？鮎は虫は食べない．．．．．
．．．．．藻しか食べない草食魚なの。魚はフツー腹ワタはにがくてまずいもんだけど、鮎は腹ワタまでおいしく食べれる．．．
．．．．．肉食じゃあないからね。こー考えるとだねーア
タシ達がおいしいつて言つてる肉は　全て草食動物の肉なのよ。牛・

豚・みすちイーツ。いい草の餌ほど　おいしい肉になる。つまり結論ッ！『人間』は肉食べてるからまずいのよ。どーよ！？アタシが考えたこの意見！だからナズーリンも鼠達にもっとおいしいもの食べさせないとね」

「なるほど、けっこう説得力あるな。でもうちの鼠は好き好んで食べてるからしょうがないだろう。っていうかこの会話絶対何かの漫画でみたことある」

「向こうは向こうで楽しそうだなー．．．」とシンが呟く中、話し合いはさらに進む。

「あと、やっぱりグロテクスだね！」と小傘。

「それ言うならグロテスクじゃ」

「そうそう、グロテスク。安易だけど、これが一番効果的だよね」
「確かに鉄板だな」と藍。

「死霊のみまさまとか、悪魔の毒々猫車とか、キラークューカンバーとか、ゾンビvs．魔法使いとか．．．」
「なにそれ．．．．．」

「しかしまあ、実際にハラワタとか脳汁とかまき散らすんじゃないで、そういう風に見えればそれでいいってんなら、簡単だよ」と寅丸。

「それと、何も目的が見えないという猟奇性もいいかもしれない。目的が分からないのに、やってることには一貫性がある」とシン。
「いいねそれ．．．そろそろ、何をやるべきか見えてきたかも」と小傘。

「それに、ここが寺院であることも活かせそうね。悪魔的なものを信仰、とか」とぬえ。

「それと、既に先に被害者がいるってのも効果的かな」と橙。

「突然血まみれの変死体を見つけ、それが恐怖の始まりだった．．．あるいは、『現行』を見る、とか．．．」

「自分が怖い目に会うよりも、他人が会っているのを見聞きするほ

うが、恐怖というなら効果的ね．．．多分．．．？」と聖。

そろそろ、意見がまとまってきたようだ。

「よく知っている者たちが、普段見せない恐怖の姿、悪魔的な信仰、そして、猟奇的でグロテスクな凶行、逃げ場はなし、待っているのは絶対的な絶望．．．か．．．さて、ここいらで一つ、私が考えを纏めて、みんなの『役割』を考えよう．．．待っていてくれ．．．」
と、藍が、ここまでで出た意見を纏め、必要な役割、状況とそれを作るのに必要なものを考え、導き出す。

藍にかかれば、そんなことも数秒で終わった。

「．．．よし．．．みんな、これはいけるぞ」

考えを纏めた藍は、各々に、何をすべきか、何を用意すべきかを手短かに説明した。

そしてすぐさま、皆行動に移る。

霊夢はすぐそこ、ぶつつけ本番だ。

PHASE - 15 『戦慄！聖輦船恐怖の宴　くそして、流転の刻』

もう一度述べておく。

こういう息抜きは必要だ。

しかし、さすがにこれは如何なものだろうか・・・

霊夢もまた、命蓮寺へと到着した。

ここへ向かったというシンを冷やかに来たというのに、今しがた、鼠に喧嘩を売られた時は。さすがに『キレた』ものだ。

向こうがその気ならばと、霊夢の方も、徹底的に命蓮寺の連中をけちよんけちよんにするつもりでいた。

最早シンのことなど関係ない。

が、それはそれとして、降り立った命蓮寺の敷地内は、不気味なほどに静まり返っていた。

まるで人の気配を感じないのである。

そんなはずはない。

「探し出して叩きのめしてやるんだから・・・」

出てくるつもりがないなら。こちらからあぶり出すまでだ。

霊夢は、いきり立って、聖輦船の中へと入っていった。

しかし、中に入ってもまだ、人の気配は感じられない。心なしか、

中も、いつぞやに訪れたとき以上に静まり返っているように見えた。まさか、本当に誰もいないのだろうか？

いや、そんなはずはなからう。

ここの暇人共に限って、どこかに出ていくことなどありえないのだ。必ず探し出して、叩きのめす。

怒り心頭でもうそれしか考えられなかった霊夢だが、心の奥底に芽生えたわずかな違和感も、また確かに感じていた。

ともかく、誰でもいいから探そうと、歩き始めた、ちょうどその瞬間だった。

ごつん、という鈍い音が、微かに霊夢の鼓膜を揺さぶった。

ちょうど、彼女が歩こうとしたその方向からだ。

「なーんだ。ほらやっぱいるんじゃない、へっへへっ」

やはり、人は居る。

誰もいないところから音が発つわけではないのだ。

鈍い音は、さらに何度か繰り返して聞こえてくる。

聞こえてくるのはいいが、一体何の音なのだろうか？

何かを叩いている音のように聞こえるが・・・

とにかく、音のする方向に歩いていく。

音は、こんなところ命蓮寺にあったのかと思えるような細い通路の向こうから聞こえていた。

ただでさえうす暗い中、この通路は一層暗くなり、三間先すらよく見えるほどの明かりすらなかった。

それでもかすかに見える通路の両脇には、いくつもの襖がある。それぞれ一つの部屋に繋がっているのである。

船の中というよりは、つくづく一つの屋敷のようだ。

永遠亭で似たような光景を見たはずだ。

そして、一步一步を歩を進めるうちに、音は段々と大きくなっていった。

やはり、何かを殴っている音のようだ。固いものではない。ずた袋でも殴るような音に聞こえる。

「．．．？」

つくづく、何の音なのだろうと思いつつも、さらに音のする方へ歩み寄る霊夢の耳に、また別の音、というよりかは、声が聞こえた。ごっんという音と、まったく同時に聞こえてきた。

「あう．．．」

「．．．．．っ？」

微かな声で、ごっんという音にかき消されそうではあったが、音の源に近づくにつれ、聞こえるようになったようだ。

何かが叩かれるようなごっんという音と共に、間違いなく、か細い声が聞こえてくる。

「う．．．っ」

「な．．．何なの．．．？」

何が起こっているのかまったく分からない。

思わず立ち止りそうになった霊夢だが、その時、うす暗い廊下の向こう、一つの襖の間から、微かな光が漏れているのが見えた。音も、ちょうどそこから聞こえてくるらしい。

また、鈍い音が発つ、「ひっぐ．．．っ」

段々、何が起こっているのか分かってきた気がする。

「．．．．．っ」

もしかしたら、今自分は、見てはいけないものを見ようとしているのではないか？

そんな恐怖心が芽生えるが、同時に、本当の本当には何が起こっているのか見てみたい、という興味もあった。

大丈夫だ、見るだけならなんの問題もない、はず。それに、別に大したことは起こってないはずだ。

ただ、ちよつと暗いなかでこつという音を聞いてしまつて、不安になつていただけなのだ。

自分にそう言い聞かせ、霊夢は、好奇心に任せて、音の源である襖の傍まで歩み寄り、その向こう側を覗き見てみた。

「あぐ．．．」

何も大丈夫ではなかつた。

襖の向こうの部屋は、一つの蠟燭が照らされているだけで、やはりまだ薄暗かつた。

だが、この程度の灯りでも、中の様子を見るのには充分だつた。微かな光が、深い陰影を作る部屋の中に、一つの影があつた。

だが、中にいる者は、二人だ。

もう一人は、部屋の中にある柱の陰に隠れて、見えなくなつていただけだ。

蠟燭に照らされ、部屋の壁面に大きな影を映す人影は、腕に何か棒状のものを持つているように見えた。

いや、確かに持つている。

霊夢が中の様子を覗き見て、この奇妙な光景を網膜に焼き付けた次の瞬間には、人影は、その何かを持つ腕を振り上げて、柱の向こう側へと叩きつけた。

ごつん、ではない、もつと重く鈍い音が霊夢の鼓膜を揺らし、同時に、ようやく悲鳴だつたのだと分かる声と、何かが床に飛び散るような、びちゃびちゃという音が聞こえた。

「．．．．．つ！？」

見なければよかつたという後悔も、意味はなかつた。

霊夢は襖の前に釘付けになつて、動けなくなつた。

部屋の中で、蠟燭に照らされる者の顔に、間違ひなく見覚えがあつ

た。

聖 白蓮だ。

「あ、あいつ．．．何？何やってんの？」

息が吐き捨てられていく程度の声で呟く霊夢は、同時に、聖のものらしい声を確かに聞いた。

「今回ばかりはもう許してはおけないわ．．．分かってるんでしょ
うね？」

その声に、柱の向こう側からの声が応える。

「．．．す、すみません．．．ごめんなさい．．．．．ごほ．．．
ぐっ」

「．．．．．ふっ．．．」

霊夢は、その声にもまた聞き覚えがあった。

聖にしてもこの声にしても、まるで別人のような声音だったが、確かに、その者の声だとは分かった。

寅丸の声だ。

寅丸が、聖に殴られている。幾度となく．．．しかも、叩くとかいう、生易しいものではない。

仮にも善人の聖に限って、そんなことをするわけがない。

そう心に言い聞かせることで、眼の前の光景を信じようとしなかった霊夢だが、そんな彼女を余所に、聖の人影がゆっくりと動き出した。

手に持っていた棒状の何かを手から放し、床に置いていた別の何かを手にとった。

蠟燭の明かりを怪しく反射する、少し反りたった、鋭い先端を持つ何か．．．

刀．．．か？

刀らしきものを手に取った聖の眼が、舐めまわすようにその刀身を眺めていた。

「．．．．．っ!？」

霊夢は息を呑んだ。

まさか．．．？

正気なのか．．．？

霊夢の脳裏をよぎった考えを裏付けるように、怯えきった様子の寅丸の声が聞こえる。

「や．．．やめてください．．．し、信じますから．．．私達が、聖のことを信じているのを、よく知ってるでしょう．．．ね？ねえ．．．!？」

「嘘をつきなさい．．．結局、あなたの信仰などそんなもの．．．お先に、魔界のその先にある混沌の国への道しるべを見せてあげましょう。よろこびなさい」

「い、いやだ．．．まってください!いやだ!いやめてくださいお願いします!!．．．げほっ、うぶ．．．っ!？」

「黙れっ!！」

聖の拳が、柱の向こう側に叩きこまれる。

何かが溢れだすような奇妙な音と共に、またしても、びちゃびちゃという飛び散る音が、うす暗い空間に響く。

今分かった．．．血だ、血が飛び散っている。

本当に、本人とは思えないような狂暴な叫び声をあげ、寅丸を殴りつけて聖は、今度はまるで死人のように黙り込んだ。

寅丸もそうだ。

そして霊夢もまた、何一つ物言わず、この状況を見ているしかなかった。

もしここで何か言えば、物音ひとつ立てれば、『巻き込まれる』。そう思えた。

すると、突然、笑い声が聞こえてきた。

「ふふ．．．く、ふふふ．．．」

「へへ、えへへ、へっへへへへ」

した。

ひゅんと空を切る音と、満遍なく湿らせた脱脂綿を、一瞬で引きちぎったような奇妙な音が同時に響いた。

振りぬかれた刀は、そのまま振り切られることなく、寅丸の身体に喰い込んだところで動きを止めた。

切れ味が悪かったのか、聖の力が足らなかったのか、あるいは、意識してそうなったのか...

ぶしっ、ぶしっという、何かが噴き出す音と、相変わらずの血が飛び散る音が、激しく何度も聞こえてくる。

今気がついた。寅丸の隠れている柱の端の方から、赤黒い液体が畳に染み込んでいるのが見える。

「...がつ！ぐっ...く...ひっ...ひぎい！？...いいいいー！！い...!!」

最早笑うこともできなくなった寅丸の、この世の生き物が出すとは思えないような声が部屋の中で反響した。

霊夢は、震えが止まらなくなる。声を出すのを堪えるので必死だった。

「ふっふふふ...」

不気味な含み笑いをしながら、聖は、寅丸に食い込んだ刀を、さらに奥まで突き刺し、乱暴にかき回した。

たとえば、だ。ハンバーグを作るために、ひき肉を混ぜたりするだろう。あるいは、鶏肉に卵を絡めたりするときに、かき混ぜたりする。そういう音がすぐ耳元で聞こえる。生々しく、だ。

霊夢の鼓膜をいやらしく震わせた。

そんな音が響くたびに、寅丸の身体から血が噴き出す。

「う...うう...っ」

絶対に声を出してはいけない。逃げなければ、早く！

だが、それがどうしても叶わず、霊夢の眼から、何かがこぼれ落ち

そうになっていた。

しかも、だ。

「ひ．．．ぎ、っへっへへ．．．えへへ！ぐへへ．．．べっ．．
．へ！」

鋭い刃に身体を挟られながらも、寅丸は、なおも笑っていたのである。

口から血反吐を吐きながら、それ以上の大量の血を体中から噴き出しながら。

狂っている。おかしい。絶対におかしい。狂い過ぎてる。

「ぐえゝえ．．．ぶえっ？」

そんな素っ頓狂な声が、寅丸の断末魔となった。

寅丸が事切れたのを確認した聖は、彼女の身体に刺さっていた刀を一気に引き抜く。

同時に、猛烈な勢いで血が噴き出し、聖の顔を、そして彼女の影が映る壁面を真っ赤に染めた。

そんな光景が網膜に焼きつくころには、霊夢は、最早この状況を狂っていると形容することしかできなくなっていた。

寅丸、『であったもの』が動かなくなり、何の音も発さなくなり、部屋の中は一気に静かになった。

蠟燭に照らされ、微動だにしなくなった聖の姿は、この世のものに思えない何かに包まれているように見えた。そんな雰囲気だ。

聖がこっちに振り向いた。

「ひ．．．っ！？」

突如こちらの身体を突き刺した鬼のような目線に、霊夢はとうとう、悲鳴を上げずにいられなかった。

見つかった、もう駄目だ。絶対に見つかった。

震えることしかできなかった身体が、俄然、猛烈な勢いで脈動し、
霊夢は、一心でその場から逃げ出した。

もう駄目だ、こんなところにはいられない。

早く出なければ・・・

ただそうとだけ考えて、霊夢は、先ほど通った道を夢中になって駆けた。

こんなトチ狂った状況からは、早く逃げるのだ。

一気に、最初に入った入口のところまで駆け戻る。

だが、本来ならば外の陽の光が霊夢の眼を差すはずだが、そんなことは一切なかった。

陽の光など何もない。相も変わらぬうす暗さが続いていた。

それもそのはずだ。

さっきまで開いていたはずの聖輦船への入口が、閉ざされていたのである。

どうやって閉じているのかも分からないほどに、固く、だ。

「・・・・・・・・嘘？」

霊夢の心臓が、一瞬だけ止まった。

それは誇張ではない。

今自分が、最悪かつ絶望的な状況に陥ったことを、心が、そして身体が認めようとせず、思考と共に、心の臓も、機能することを忘れたのである。

それは、ほんの一瞬での出来事であったが、その一瞬でも、霊夢に強烈な動悸を呼びこむには充分だった。

「・・・・え、ちよっ!？」

滝のように流れていた汗も一瞬で固まるほどに、霊夢の体温が一瞬

にして下がった。

すぐさま霊夢は、閉ざされた入口、いや、出口のあるべきだった場所に飛び付いた。

「じよ、冗談じゃ．．．冗談じゃ．．．!？」

確かに、ここから外に出られるはず、思いっきり押し込めば、壁のように閉ざされているこの出口だって、もう一度開いてくれるはずなのだ。

だが、どれだけ押しても、出口が開くことはなく、その気配すら霊夢には感じられなかった。

法の力の船である聖輦船の根幹には、言い様のない魔力のようなものがこめられている。

その力があれば、たとえ無人であろうとも、聖輦船は動く。

風力も波力も、一切の力も関係なく、自在に空を飛び、数少ない外と接触できる場所である窓や入口も、まるで潜水艦のハッチが閉じるように閉鎖できる。

そして、それらを制御できるのは、聖か、聖輦船『そのもの』だけである。聖だって、完璧には制御できないかもしれないし、できるかもしれない。それほどのものなのだ。

「ちょっと！開けてよ！開きなさいよっ！」

霊夢がどれほど叩こうが喚こうが、一度閉ざされた聖輦船のハッチを、彼女の力で開けることはできない。

「開けてよもうっ！！」

弾幕を放とうが、何百回蹴りを放とうが、突き破ることはできない。聖輦船が、伊達な船であるわけがないのだ。妖怪や妖精を懲らしめるのとは訳が違う。

その耐久力は、半端なものではない。

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．ああ？」

そして、霊夢が、自分の一つの特技である空間転移を使い、外に逃

げ出そうとしても、それもまた叶わぬことであつた。
聖輦船を包む法の力が、それを許さなかったのである。

そこまでやってようやく霊夢は、何をしても、この状況から逃げることはできないということを思い知つた。

「は、はあ．．．．．っ！!?」

激しい息苦しさが霊夢を襲い、彼女の瞳孔が、薄暗闇の中で、猫のように、あるいは、死人のように散大した。

「ど、どうしよう、どうしよう!．．．ど、どうしよう?」

最早何も考えられない。このままでは、あのイカれた聖　白蓮に何をされるか知れたものではない。

どうすればいい。それしか考えられない。いや、それすら、頭の中を反復するばかりで、考えられてはいない。

頭の中が真っ白に、いや、真黒になりそうだった。

だが、何も考えられなくても、状況は待つてはくれない。

「誰かしら．．．」

先ほど逃げてきた方向、今しがた、聖の凶行を垣間見、逃げてきたその方向から、声が聞こえた。

信じられないほど、不気味な声。

形容のしようもないほどの、今まで聞いたことのないような声だった。

その声が、遠くから、しかし同時に、耳元でささやかれたような緊迫感をもつて聞こえたとき、霊夢は再び、猛烈な勢いでその場から逃げ出した。

「ひゃ．．．はわああああ．．．!」

口から漏れ出る悲鳴を抑えることなどできなかった。涙もだ。

考える前に身体が動いた。死にたくないからだ。逃げ道など考えていない、とにかく、行けるところに逃げるのだ、どこでもいいから、逃げられるところに……

無心になりひたすら駆けた霊夢は、先ほどとは別の、細い通路に入り込んでいた。

先と同じように、多くの襖があり、部屋があるらしい。

ほとんど無意識だった霊夢だが、本能的に、その内の襖の一つを開け、中の部屋へと飛び込み、素早く襖を閉めた。

今のところはここに隠れて、やり過ごすのだ。

幸い、部屋は広い割に入り組んでいて、押入れのようなものもあった。

それ以外にも、身を隠せそうな柱やらは多くあった。

身を隠すには最適そうな場所である。うまくいけば、充分やりすごせそうだった。

ここで、ようやく霊夢は、ほんの少しだけ落ち着いて、せめて物事を考えられるだけの冷静さは取り戻した。

「はあ……はあ……どうなってるのよ、まったく……っ」

愚痴るような吐き出された声も、ひとまず、今のところは何とか耐えようという安堵が呼びこんだものである。

とにかく、こういう部屋に来れたのは幸運だ。

いつ、聖が近くにくるかも分からない。早くどこかに隠れよう。隠れ場所はいくらでもあるのだ。

すぐさま霊夢は、視界に入った押入れに近寄り、その戸を開こうとした。

と、その時である。

「あんた？」

突然聞こえたその声に、霊夢は、心臓が飛び出しそうになった。

「ひゃあああ！あ！？あわ！」

「大声ださないでよ．．．っ」

盛大な悲鳴を上げながら声の方向を振り向いた霊夢の眼に映ったのは、小傘だった。

その緊張しきつた眼を見ると、どうやら彼女も、自分と同じ境遇にあるようだと思えた。

そして、下手すれば、先ほどみた寅丸と同じ境遇になるかもしれない．．．

彼女の断末魔の奇妙な嗚咽が思い出され、霊夢は、吐き気すら催しそうになったが、そこを何とか堪えた。

「とにかく、そこ、入ろう」

と、小傘がいい、霊夢が今しがた開けようとした押入れの戸を開ける。

そのまま二人は中に入り、戸を閉めた。

ただでさえ暗い中で、閉め切った環境を作るのだ。中は、眼の前も見えないほどの暗闇になったが、それでも、心が落ち着いたのは確かだった。

小傘が、この状況でなければ聞こえていないだろうというほどの小さな声で言ってくる。

「どうやらあんたも、見ちゃったみたいね．．．」

その声に、霊夢が、同じような静かな声で応える。

「．．．え、ええ．．．見た．．．聖でしょ？」

「．．．あいつ、絶対おかしいよ．．．あいつだけじゃない、この船の連中みんな．．．頭どうかしてる．．．ナズーリンって、いたでしょ？そいつが、ぐちゃぐちゃにされて転がってた．．．．．吐きそになったよ．．．．．」

小傘も、『中々』なものを見てしまったのだろう。

相当に怯えている様子だった。

そんな彼女の様子を見る霊夢は、小傘が、シン達と同行しているのを思い出した。

恐る恐る、「シン達は．．．？藍とか橙も一緒だったでしょ．．．？どしたの．．．？」と聞く。

だがすぐに、そんな質問するべきではなかったと思いなおした。だが、もう遅い。

「分かんないよ．．．聞かないでよそんなの．．．」

そう応える小傘の表情からは、耐えがたい絶望感がにじみ出ている。「．．．．．っ」

霊夢は思い知った。

もう駄目だ．．．状況は手遅れなところまで来てしまっている。

少なくとも、もうシン達は．．．．．考えたくはない。考えたくはないが．．．

またしても、脳裏を深遠なる暗黒が覆い尽くそうとしたその中で、再び、小傘の声が霊夢の耳朶をうった。

その声には、少しばかりの勇気を感じられた。

霊夢に、まともな者に会えたことで、呼び起こされた一つの決意だろっ。

「．．．霊夢、怖いよね？」

「．．．え？．．．う、うん」

「でも、ようやくあたしに会えて、ほっとしたでしょ？」

「そ、そりゃあね．．．一人でいたままじゃ、耐えられなかったかも．．．安心したわよ．．．めっちゃくちゃ」

「．．．うん．．．でも、悪いんだけど、あたし、行かなきゃいけない」

「え．．．え？ど、どこに．．．っ？」

「ここに隠れてれば、見つからずに済むかもしれない．．．でも、だからってずっとここにいるわけにもいかないでしょ？そんなんじゃない、どっちみち死んじゃうよ．．．あたしが、何とかこの船から逃げ出す方法を探す．．．入口は閉まつてるけど、まだこの船には、外に出れる方法はたくさんあるよ。それを探してくる．．．あんた

「はここにいて」

「そ．．．そんな．．．」

「大丈夫だよ。あの連中、そんなに力はないみたい。あたし、さつきムラサ船長に襲われたんだけど、返り討ちにしてやったよ．．．あいつら、倒せないほどの強さじゃない。もしもの時は、死ぬ気で戦えばいい、きっと勝てる．．．シンや藍達が心配だけど、あつちも強いからきっと無事よ．．．逃げ出す方法が見つかれば、みんなで戻ってくる．．．それで、みんなが無事に帰るの。きっと帰れるよ」

「そ．．．そうね．．．」

「それまでの間、あんたはここを守ってて、分かった？」

「．．．やってみる」

「．．．今は誰もいないみたいだし．．．それじゃあ行ってくる．．．

・ 霊夢、安心してね」

「大丈夫よ．．．」

小傘が、押入れの外に出て、脱出の方法を探しに部屋を出ていった。

霊夢は、狭い押入れの中で一人で取り残されることになった。

ほとんど何も見えない無明の中、物音すら何も聞こえないという、神経が圧迫される状況が、霊夢を恐怖で包み込んだが、それでも、先ほどの小傘の言葉が、彼女に勇気を与えていた。

大丈夫だ。きっと。彼女の言う通りだ。

小傘はともかくとして、藍の實力は、霊夢も一目置いている。

この船の柔な連中では、倒せはしないだろう。

きつと藍も、小傘と同じく、脱出の方法を探している最中なのだ。橙とシンは心配だが、多分、藍と共に行動しているのだろう、なら心配はいらない。

皆が合流して、脱出の方法を見つけられれば、またここに戻ってくる。そうすれば、全て解決するのだ。

今は、ただ待てばいい。

それに、聖輦船の住民の数はそれほど多くない。

仮に、この住人以外に共犯者がいないのなら、すでに3人は倒れているので、残りは聖、一輪雲山、ぬえだけになる。人数ならこちらと互角だ。

倒れた3人のうち2人は、身内に殺されたらしいが・・・

思い出したくないのに、嫌でも、先ほどみた聖の凶行と、寅丸の断末魔が思い出される。

あいつ・・・殺されている最中でも笑っていた。

ナズーリンも、同じだったのだろうか・・・

そう考えると、またしても、吐き気と共に耐えがたい恐怖が襲ってきたが、霊夢は、それを無理やり抑え込んだ。

向こうがイカれていて身内で殺しあつていようが、こちらには関係ない。巻き込まれる理由などありはしないのだ。

さっさとこんなところ出て行ってやる。向こうは勝手に殺し合って聖輦船を血祭りにでもしておいてくれ。

大丈夫だ。きつと出られる。

もしかしたら、残りの連中も、もう小傘達が始末しているかもしれない。もしかしたら、もうこの押入れから、というか、部屋から出てもいいのではないか？

いや、それはやめておこう。小傘にここを守るよう任されたのだ。押入れからはともかくとして、部屋からでるわけにはいかない。

霊夢は、小傘達が戻ってくるのを、ひたすら待ち続けた。

たったの5分でも、三倍にも、あるいは十倍にも感じられた。

普通なら当に発狂してもおかしくないような恐怖心の中でも、霊夢は、小傘達の事を考えることで耐えることができた。そのことだけを、拠り所としていた。

もう1時間か、5時間か。あるいはその実10分か経ったところである。

そろそろ、戻ってこないのかと、恐怖とは違う方向で心配になってきたころである。

遠くの方から、音が聞こえてきた。

最初はほんのかすかに聞こえるだけだったが、その音は、少しずつ大きくなって、霊夢の鼓膜を震わせた。近づいてくる。

どうやら足音のようだ、複数聞こえてくる。

同時に、小さく、うめき声のようなものも聞こえてきた。

一体何の音だ……

霊夢の額から、再び汗が流れおちるのと同時に、襖が開けられる音が鳴り響いた。隣の襖だ。

同時に、足音が隣の部屋へと入ってきた。

ただでさえ静かな中で、しかも隣の部屋での音なのだ、霊夢にははつきりと聞こえていた。足音が2つであることまで判断できた。

だが、その実部屋に入った人数が4つであることが分かるのは、もう少し後のことである。

足音が止んだと思うと、次いで、何かが地面に落ちるような音と共に、「ぷはっ！」という水の中から息継ぎするような声が聞こえた。そしてその次の瞬間、霊夢の鼓膜を、泣き叫ぶような声が震わせた。「藍しゃま、どうして！？やめてよ！」

止んでいたはずの身体の震えが、もう一度、より一層激しくなっても蘇った。

今まで信じてきたものが、一気に崩れていくのを感じた。

橙のものと思える声が続ける。

その声だけでも、眼からこぼれる大粒の涙を察することができた。
「やだようゝ、どうして？一緒にここを出ていこうよ、シン達もいるんだよ．．．？こんなのやだよ．．．」

橙の声に、彼女の主人であるはずの藍の声が返す。

その声は、本人であると信じられないほど、暗いものだった。

「．．．いいじゃないか．．．このままいけば、みんなで、全ての命が往くべき理想郷へと旅立てる．．．やましいことも、苦しいことも何も無い、幸せだけを感じられる世界へといける．．．橙、お前もそこへいけるんだぞ」

「変だよ．．．おかしいよ．．．どうちゃったの．．．」

「．．．橙．．．いずれはみんなで旅立つ。でも私は、お前を殺したくない．．．分かってくれ、信じてほしんだ。私達の言ってること．．．」

「そう！信じればそれでいいの」

何かを言い聞かせるにしては、あまりに不気味な藍の声に、一輪がおっかぶさる。

「う．．．う．．．ううー．．．．．藍しゃまが．．．おかしくなっちゃたよお．．．」

最早、橙は泣くことしかなかった。

霊夢もまたそうだ。

何もかもがおかしな方向へと進んでいったことに、絶望することしかできなかった。

もう駄目だ、何もかも手遅れになってしまった。

お終いだ。

おしまいだ。

「そうか．．．」

藍が、一転して、悲しそうな声を出す。

だが、そんなものは一瞬のまやかしかかった、そよ風のように

な些細なものでしかなかった。

「じゃ死ね」

その刹那の後には、あっさりと吐き捨てられた言葉と共に、何かが、柔らかな麻袋に突き刺さる、あるいはめり込むような生々しい音が、鈍く響いた。

同時に、橙の痛々しい悲鳴が霊夢の耳を突き破る。

「はっ、あ．．．っ！！？あ、ヤダ！ヤダ、やあああああああ
ああ！！！！．．．あ、いぎいっ！！！」

そして、またしても聞こえてきた、肉がかき混ぜられる音。

粘着質なその音が響き渡るたびに、霊夢の中にあつた、精神を支えていたものが、少しずつ崩れていった。

駄目だ。もう駄目だ。

だめだもうおしまいだ。

血しぶきの音が小刻みに響く中、藍が、少しばかりうつとりした口調で言う。

同時に、肉のかき混ぜられる音も、少しだけ弱くなる。

「はあ．．．かわいいなあ、橙．．．泣きわめくお前も大好きだよ」

「はひっ！！？ひぎ！！．．．ひゅ．．．ひゅっ．．．ふう．．．

．．．はあ．．．．．．はがっ！！．．．．．．はあ．．．．．．あっ、
あっ．．．あっ．．．．．．」

大きな金切り声も、すこしすれば、かすかな囁きのようなうめき声にしかなくなっていた。

「大好きだよ、橙」

「．．．．．．大好き．．．？」

「うん」

どろどろの液体の中から物を引き抜くような、ぬるっという音が鳴る。

同時に聞こえた橙の、「ひゃん．．．」という声は、最早今際の弱

々しさがあつた。

放つておいても、30秒で事切れるだろう。

「雲山、殺つてしまえ」藍が短く言う。

その次の瞬間には、ズドンという重低音と、腹の底が揺さぶられるような振動が起こった。

そんな中で聞こえた、何かが砕け散るような鈍い音などは、微かに聞こえるだけだった。

後は静寂しかなかった。

無、と形容できた。

何ひとつ音の聞こえない静寂にしてもそうだし、そんな状況に置かれる霊夢の心にしてもそうだった。
完全な無、だった。

「いつひひ・・・」妙に下卑た藍の笑い声も、次いで、部屋の外へと出て、遠ざかっていく足音も、聞こえているのかいないのか、定かではない。

「もうやだ・・・」

こう呟いたのを最後に、霊夢の精神は半ば崩壊した。

何も考えられなくなつた。

死にたくない・・・殺されたくない。

逃げたい、でももう絶対に逃げられない。

もう・・・ここでずっと固まっていることしかできない。

絶望とすら形容できない感情が心を深く満たした。

しばらく後に、先ほどと同じズドンという音が、少し遠くの方で聞

こえた。

小傘か、あるいはシンが殺された音だろう。
それが、止めの一撃になった。

おわりだ。

殺される。死にたくない。

また、何か音が聞こえてきた。足音だ。今度は少し近い。
足音は一つ。

先ほどの、藍達とは別の足音だ。

「来ないで・・・」

誰に請うかも分からない霊夢の声も虚しく、襖の開けられる音が響いた。

霊夢の隠れているその部屋の襖だ。

殺される。

足音が、部屋のあちこちで響き渡る。

それは、明らかに何かを、霊夢を探している、としか考えられない音だった。

駄目だ、殺される。

頼むからこのまま出て行ってくれ。

霊夢のそんな願いも、一切聞き入れられることがなかった。

彼女のほとんど耳横で、乾いた音が鳴る。

霊夢が隠れているのとは別の押入れが開けられる音だ。

間違いなく、一つ一つ風潰しにするつもりだろう。

開けられたのは、霊夢が隠れている隣の押入れだ。

次は、こちらの番だ。

死にたくない。

殺されるぐらいなら・・・

霊夢の心に、決意とは違う、追い詰められた発狂するのと同じような覚悟が芽生えた。

死にたくない。

だったら、殺してやる。

「へへ！みつけたー」

戸が開けられる乾いた音と共に、ぬえの不気味な声が響き渡る。

この世のものとは思えない不気味さをもった顔が眼の前に見えたとき、霊夢は吼えた。

「わああああー！ーっ！！？」

何も考えず、一心不乱に弾幕を放つ。

計算など何もない、とにかく、撃って撃って撃ちまくるのだ。

死にたくなかったら、そうするしかなかった。

抵抗することこそ、霊夢に残された最後の方法だった。

「うわっ！く？ぐえっ！」

手加減もない、相手を殺す気で放つ弾幕は、いつも以上の凶悪性を発揮し、ぬえを襲った。

威力が上がった弾幕が数発ぬえに直撃する。一発一発が、肉を抉り、

細胞を滅する破壊の力だ。

ぬえはたまらず、その場から逃げ出し、通路の奥へと駆け戻っていた。

見計らったように、霊夢も押入れから飛び出る。

と、同時だった。

もう聞こえることはないと思っていた声が、霊夢の耳朵をうった。

「霊夢ーっ！！逃げ道が見つかったよ！正面の入口が開いた！！」

小傘の声だ。

その声は、暗闇の中の一条の光となって、霊夢の精神を覚醒させた。最後の最後に、希望が見えた。

「っ！！」

助かる！

霊夢は、一気に部屋を抜け通路へと飛びだし、死に物狂いで駆け出した。

早く！ここから出るのだ！

邪魔する者には・・・

最初に入った、大きな入口が、確かに開いていた。なら、あとはそこから出ていくだけだ、小傘もすぐそこで待っていた。

出口の向こう側、外へと駆けた霊夢だったが、その動きは、目の前に躍り出た聖に阻まれた。

「どきなさいよっ！！」

霊夢が、渾身のスペルカードを聖に放つ。

「うつ・・・ああっ！！？」

数百発の弾幕のほぼ全てが直撃し、聖は、盛大に吹き飛ばされた。これで倒せたわけではないが、一瞬の隙でも作れば、それでよかった。

同時に、霊夢が一気に出口のすぐそこへと駆け寄る。

小傘が待ち構えている。後は、二人でここから出ていけばいいのだ。外に出てしまえば、後はどうとでも逃げられる。他の妖怪達と協力して、聖を仕留めてしまうことだってできる。

が、そんなことは今はどうでもいい。外はすぐそこだ！

「助かった．．っ！！」

小傘が、待っていましたとばかりに手を差し出す。

だがその手は．．

霊夢は、全力で走っていた身体が、急に前から押し返され、大きく仰け反りながら、尻餅をついて転倒した。

小傘の手に押し戻されたのだ。

「え．．．？」

霊夢は、今度こそ頭が真っ白になった。
眼から一瞬にして光が消え失せた。

「残念、あたしや最初からこのつもりだったんです、へっへへ！
愉快そうな小傘の声が、霊夢の飽和した頭に答えを叩きこんだ。
開いていた出口への門が再び閉まり、世界が、再び暗黒の最中へと
転じる。

「．．．．．」

床へと倒れ込んだ聖が、むくりと起き上がる。

ぬえと一輪雲山が、ゆっくりとこちらに歩み寄ってきていた。

そして、小傘。

今度こそ、本当の本当に全てが終わった。
最早どうにもならない。

かんぜんにすべてがおわってしまったわけだ。

「．．．．．あ．．．ああ．．．?」

「さて、霊夢」と、小傘が言い、ぬえが続く。

「あんただけ逃げられるわけがないよねえ」

一輪が言う。

「あんたも、みんなのところに連れて行ってあげるよ．．．」

そして最後に、聖が呟く。

「さあ．．．喜ばなさい」

「嫌だ――――っ!!!!」

完全で比類なき絶望と恐怖の中で、霊夢は、死神を呼び寄せるラッパを吹いた。

と、その時だった。

「てつてえくん」

小傘が、間拔けな声と共に、何か書いてあるフリップを持ちあげた。そこには、『大成功（はあと）』と書いてある。

「．．．．．?」

霊夢は、恐怖とは別の意味で、全てのものが崩れさる音を聞いた。

「作戦、大成功――」今度は、聖のお茶目な声が響く。

「今までののは全部．．．ただの演出でえ――した――、つと!」
ぬえのその声が、霊夢に事態への理解を促した。

続いてナズーリンが言う。

「にしても、私とムラサ船長が、ちょっと名前が出るだけであつさりやられてる役っていうのはどうなんだ」

「そういやそうだね」とムラサ船長が続く。

それに対してシンが、「俺なんて、いつの間にか死んでる役だつたぞ。俺がいつ死んだのか分かったか？」と返す。

「．．．いつだっけ？」と藍。

「あつははははは！」

この上なく和やかなムードだが、それが、より一層霊夢の怒りを増長した。

「くあああああつ！！もおおう許さないんだからあんたらっ！！」

さすがに事情を話すべきかと、寅丸がぴしゃりと言う。

「済まん！こつちも大人げないことをしたかもしれない。だが、これ以上恥ずかしい格好を見せたくないや、今は大人しく帰って頂こうか」

「はあ！？何でよ！」

「ま、いろいろと理由があるんだ．．．どうしてもっていうなら、ここで相手をしてやってもいいよ、私達全員でね．．．そんな時は、妖怪の山の新聞記者でも呼んで、今回の事で記事でも書いてもらおうかな．．．このまま帰るってんなら、呼ばないんだけどね」

「う、うぐっ．．．くそ．．．あんたら！覚えときなさいよ！」

散々な眼に会わされ、怒り心頭だった霊夢だが、これ以上赤っ恥をかきたくはないらしく、今のところは、大人しく命蓮寺から去っていつてくれた。

さて、霊夢が去ったところで、本当に今回の目論見は大成功に終わったということだ。

さすがに霊夢がかわいそうに思えるほどの大成功だったが、殊更嬉

現れた。

当然ながら、何の目的があつて霊夢の前に現れたかなど、見当もつかない。

怒り冷め止まぬ霊夢としては、不機嫌そうに、「何よ。今のあたしは機嫌悪いんだからね」と、つつばねる。

そんな霊夢をほとんど無視するように、命蓮寺を注視していた紫だったが、とりあえず、「そう、よかったわね」と適当に返しつつ、続けてこう呟いた。

「じゃあ、今度は向こうが慌てふためく番ね」

「は？」

「見てみなさい」

相変わらず、理解し難い紫の言動だが、とりあえず、彼女の言う通り、命蓮寺の方へと霊夢は眼を向ける。

そして、驚愕した。

「いつ！？」

大地に沈むように佇む巨大な船。

その頭上に、その船体をきれいに飲み込んでしまうような、巨大なスキマが出現していたのである。

そして、元来空を飛べるその船が、ゆつくりと宙に浮き、そのスキマの中へ吸い込まれようとしていたのだ。

すっかり大団円な雰囲気になっていたシン達だったが、突如船内を

襲った激震に、そんな明るいムードは一瞬で消え去った。

「どうした！？どうしたんです、聖？」と聞く寅丸に、聖が応える。
「分からないわ。船が、何かに吸い寄せられている」

地震とは違うとは分かる。

だが、どういう揺れなのかまったく判断できない振動が、持続的に船内を襲い続けた。

「普通じゃないってことでしょう？まずいんじゃないですか！？」
慌てた様子で言うムラサ船長だが、何が起きているのかすら理解できないこの状況では、ナズーリンの「分からない。分からないと言えん」という言葉も、ある種当然のものだった。

揺れは刻一刻と激しさを増し、立っているのも厳しい状態になっていた。

これでは、状況を確認することもできない。このまま、事態に流されるしかない。

「や、やばいことになってるんじゃないのーっ！？」と、ムラサ船長が一層うろたえる。

「船長うるさい！」と、ナズーリンが鬱陶しそうな声をあげる。

同時に、最大級の揺れが船内を襲い、シン達の身体が、宙に浮いた。とんでもない振動だ。

そのまま皆まとめて、床に叩きつけられるが、そこでようやく、揺れは収まった。

混乱した様子で、各々が身体を起き上がらせる。

「ど、どしたの一体？」と橙が言い。

「だから分からない」と、ナズーリンが返す。

「とにかく、甲板に出てみよう、それで何か分かるだろう」と、寅丸が言い。皆、聖輦船の甲板へと移動していった。

聖輦船に甲板などあったのかと思う間もなく、シンも、共に聖輦船への甲板へと向かった。

先ほどの振動は一体何だったのか、一体何が起こったのか。その答えは、甲板にでて外の様子を見ることで分かるはずだ、と考えていた。

だが、実際に甲板へと出て、外の様子を眺めてもなお。いや、眺めたからこそ一層、誰もが、今自分達の置かれている状況が理解できなくなった。

全天に広がる、漆黒と、そこに散らばる無数の光点。

それは、夜に見える空の景色に似ていたが、ただ一つ、そして圧倒的に違うのは、その光景が、見上げただけで見えるものではない、ということだった。

視界の真横も、聖輦船の下も、全てが、同じ光景を映し出していることだった。

そして奇妙なのは、それだけではない。

聖輦船の周りに、無数の岩石が浮かんでいる。そう、まさしく宙に浮いて、ふわふわと漂っている。

まるで一つの箱庭の中にでもいるかのような、全天の星空の中で、無数の岩石に囲まれる。

聖輦船が空を飛び、さまざまなところを旅する船であっても、誰一人として、この光景を見たことがある者はいなかった。

ただ一人を覗いて・・・

シンには、この光景に見覚えがあった。

全天周囲にて暗黒と、無数の星に囲まれ、同じく無数のスペースデブリが滞留する。

そして、それらのデブリの間を縫って差し込む強い光は、陽光だ。

間違いない。

シンは、思わず呟いていた。

「．．．アステロイドベルト．．．．．」

「え？」

突然のシンの言葉に、さすがに混乱している様子の藍が聞き返した（しかし同時に、彼女の中でも、一つの可能性は導き出されているようである）。

シンは、あまりにも信じられない現実を受け止めきれず、しかし受け止めなければならぬからこそ、何とかしてそれを叶えるために、自分の中で導きだされた答えを、声に出した。

「ここは、俺たちの世界．．．コズミック・イラの宇宙だ．．．っ
！」

PHASE - 16 『光年の彼方より』

無限に近い思案の中で、人はいずれ答えを見つける。

自分が何を見て、何を聞き、何を求め、何を為し、そして何を得たのか。

そしてこれから、何を為すべきなのか・・・

急ぐ必要はない。

いずれ必ず、それを知る時は来る。

そしてその時こそ人は、自分が生きてきた人生の全てに、感謝するのだ。

「シン？今、なんて言ったの？」

この状況の不可解さを理解しかねる様子で、寅丸が聞いてきた。

その問いに対してシンは、正確に返答することができなかったが、その代わりに、こう応えた。

「ごめん、みんな。俺、あんた達に話さないといけないことがある」

今思えば、シンは、聖達に、自分の境遇を何も話していなかった。

話す機会がなかった、ということもあるし、シンとしても、いずれは話すつもりであったが、そのいずれは、もう少し後になるだろうと思っていた。

だが、今はもうそんなことは言っていられない。

何故こんなことになったのかは分からない。

だが、今自分達がいるこの空間は、間違いなく宇宙空間である。

聖輦船は、法力が成す特殊な力場のようなものに覆われているらしく、真空の中に野ざらしになっているはずの甲板の上でも、呼吸はできたし、息苦しさすら感じなかった。それはそれでいい。

問題は、ここが、シンが元いた世界、コズミック・イラの宇宙であることだ。

確信がある、というわけではない。

だが、シンの視界に映る光景は、火星と木星の間にあるデブリ帯、アステロイドベルトのもので間違いはない。

仮にここがコズミック・イラでないとしても、ここは、シン達の世界に間違いなくある、アステロイドベルトに極限まで似通った場所であった。

何故、自分達がこんなところにいるのかは、まったく分からない。だが、少なくとも、何の理由も原因もなく、飛ばされるわけがないのだ。

その理由、そして原因は、シンが幻想郷にやってきたことに関わっているだろう。

シン自身には、そうとしか思えなかった。

つまり、この不可解な状況は、シンが呼び寄せたもの。それに、聖達を巻き込んだのだ。

そうなってしまった以上、聖達には、自分の身の上を話すしかなかった。

シンの言葉に、さすがに彼に対し不信感を隠せなくなった聖が、「お話していただきます」と返してくる。

シンは、一つずつ順を追って話し始めた。

シンが、何者かの作為により幻想郷に飛ばされたこと、そして、そんなシンが元いた世界こそ、このコズミック・イラであること（ま

だ、ここがコズミック・イラである確信はないが．．．）、そのコズミック・イラの成り立ちを話した。

その上で、自分が、この世界を平和にするために、勉強の旅をしていること、その過程で命蓮寺を知り、話をしたくて訪れたことを述べた。

聖達には、当然ながら、シンの話を全て分かるだけの理解力はあるが、さすがに、そんなシンがこの不可解な状況を呼び寄せたのには、ナズーリンとかが、「要は君は、疫病神としてうちにやってきた、ってことだな」と批難の声をかけるのも、仕方がないことだった。

しかし、それでもなお聖は、「そんなことを言うのは許しません。シンには何の非もないのです」と、なだめてくれていた。

そのことは、素直に有難いし、うれしい。

「ありがとう、聖」

だが、シンに非がなかつた、こういうことになってしまったのは確かだ。

ただの夜空よりも少し眩しく見える宇宙の星と、まるで、それぞれに魔法の力でもかかっているように、宙を浮遊するデブリ群は、基本的に宇宙というものを知らない幻想郷の妖怪達にとっては、この世の光景に見えなかつただろう。

シンのこと以前に、誰もが（藍ですら）眼の前の光景をばかんと眺めているばかりだった。

そういう状況に、シン達は陥ってしまったのだ。

そしてそれは、何とかしなければいけない。

いつまでもこんな場所にいるわけにはいかないし、それこそ、この聖輦船を元の場所に返さなくてはならないのだ。

シンとしては、故郷である世界に戻ってきたのだが、こんな形での

帰還などは望んでいない。

とりあえず、まずはこのデブリ帯を抜けねばならないのだ。

「まあ、とにかく、ここでじっとしてるわけにはいかないわね」というムラサ船長の言う通りだった。

「だが、どこにいけばいい」とナズーリンが言う。

確かに、どこにいけばいいのやら、見当もつかなかった。

どうやれば幻想郷に戻るのかという方法など、考えても分からないし、探しても見つからないだろう。

「・・・とりあえず、行けるところにはいかないと」と橙。

そうだ、まずは、この場所を離れて、どこでもいいからどこかにいけばいい。

このままじっとしているのだけは駄目だということは、誰もが分かっていることだった。

まず、どこかに行かなければならないというなら、シンには、一つの考えがあった。

ここが、シンのいたコズミック・イラであるとしたら、シンほど、この世界に詳しい者はいないのだ。

シンは、そろそろ途方にくれそうになっていた皆に、こう言った。

「あの光を見てくれ・・・あれ、太陽なんだ」

その声に、一同が、デブリの群れの間から差し込む鋭い光の方へ眼を向ける。聖輦船の船首から、右方向やや下に、その光はあった。それこそ、太陽系の中心に位置する恒星が放つ鮮烈なる光だった。大気のない今ならば、たとえ地球以上に離れた位置であり、多くのデブリが遮蔽物となっていようと、その光は、地球の上から見る以上の眩さを発していた。

「あれが、太陽か・・・」藍が、静かに呟く。

幻想郷にも太陽はあるし、藍は、それが自ら熱と光を発する気体の

塊、恒星であることも知っている。宇宙空間というものにしてもそうだ。

だが、いつもは見上げるだけの太陽が、正面よりも少しだけ下の方角に見えるというのは、さすがに不思議でたまらなかった。

シンが続けて言う。

「あの光に向かって進んでいけば、いずれ、火星っていう星に فکرと思う．．．さらにその星も超えて、真っ直ぐに太陽の方向に進めば、今度は、青色の小さな星が見える。それが地球、本当の意味での俺の、いや、人類全体のふるさとだ．．．そしてその周りに、俺達と同じ、コーデイナーの世界が広がっている．．．」

「これから、そこに行くというの？」聖が返す。

「そうだ．．．この状況に埒を開けるなら、多分それ以外に方法はない．．．こんな言い方はいけないと思うけど、この船は、俺達の世界では異端とされてるものだ．．．だけど、異端とされているからこそ、この世界に入り込んで行動することで、何かが分かるはずなんだ．．．俺がこの幻想郷で旅をしてきたように、みんなも、この世界で行動を起こすんだ。そうすることで、きっと、幻想郷に戻ることもできるはず．．．俺がこんなことにしといて、無責任なことを言ってるってのは分かるけど．．．．それに、ここが本当にコズミック・イラなのかと聞かれれば、俺は答えられない．．．」

「いえ。あなたの言う通りかもしれないわ．．．こんな状況になっちゃった以上、まずは行動しなければならぬ．．．ここがあなたの言うコズミック・イラなのかを確かめるためにも、あなたの言うことを信じ、太陽が放つあの光の下へと向かいます」

「いいんですか？」と、一輪が聞く。

聖ははつきりと応えた。

「これで何事も解決するとは、正直確信できません．．．ですが、これ以外に考えがないのも事実です。それに、シンが理不尽な疑いをかけられるような不遜な人物にも見えないわ。彼は、きっと誠実

な方よ．．．だから私は、彼を信じます。信じることで、物事は切り拓かれるのです」

「ええ、その通りです」と、寅丸。

聖が結論を出せば、誰もがそれに従う。

それこそ、彼女の人望の為せる業だった。

そして、聖がシンのことを信じれば、すなわち、誰もがシンを信じるということなのである。

シンは、ただ、彼女の心に感謝するしかなかった。

かくして、シン達は行動を開始した。

殺風景なアステロイドベルトを抜け、太陽の方向へと進むべく、聖の力によって、聖輦船は動き始める。

船体が傾きながら、回転し、いかにも中世の船といった感じの船首が、太陽の光を突き刺すようにぴたりと向きを改め、巡洋艦数隻分の巨大な船が前進を開始した。

その動きは、それなりに速く、並みの高速巡洋艦の数倍の速度を発揮していたが、それでも、ここから地球までの距離は、並大抵のものではない。

アステロイドベルトを抜けるだけなら数日だが、さらに火星を越し、地球に向かうとなれば、数力月ばかりそうだった。もう少しだけは早くなりそうだったが。それでも数時間で到着、なんてことは奇跡が起きても有り得ない。

シンとしては、食料の心配をしたい気分ではあったが、それについては問題ないらしい。

聖輦船が命蓮寺として機能する頃には、人間の参拝客も多い。

そしてその人達はみな、聖輦船の者達が、人間であると思っているらしい。

仏具を奉納する以外にも、珍しいからとか、美味しいから、といういろいろな食べ物を供えに（？）来る者も結構いた。

どうも、寺院を信仰するというよりかは、近所の人のおいしい世帯にお

歳暮を送るような感じで変だが、それだけ、命蓮寺が親しみやすいところだったのだろう。

それに、妖怪は基本的に人が食べるようなものを食べる必要はないが、それでも、食べることは好きだった。

そのため聖達の方でも、多くの食料を集めてきて、それを、法力で永久保存可能な蔵へと入れていた。

その量は、シン達全員でも、数カ月はおろか数年は食べていけるだけのものがあつた。

それほどものを保存できる広さが聖輦船にはあつたのである。伊達に大きくはないということだ。

そういうことなら、少なくとも、生きていくことに問題はないということだ。

聖達には用事があり、今回のことでその用事も大分先送りになることを申し訳なく感じつつも、シンは、ひとまず安心した。

地球圏に到達してしまえば、ザフトの軍人であるシンなら、だましだましやっていけば、聖輦船の居場所も、とりあえずは確保できるはずである。大昔の船にしか見えないものが宇宙空間を遊泳しているということなど、多少、ややこしいことにはなりそうだが・・・

聖輦船の者達も、今のところは、この状況をどうにかするために、地球圏に向かうことだけを考える。

そんな中、聖が、シンと話をする機会を作ってくれた。

彼自身望んでいたことであるし、状況が状況なので、聖がその希望をくみ取ったのだ。

嫌でも、聖達に暇ができたということもあるが、シンにとっては、うれしかったし。

それに、暇があつたとしても、自分達に迷惑をかけた（と言い切つても仕方がない）相手の望みを叶える聖の心も、幻想郷においては彼女しか持ち得ないものだろう。

シンを呼びだした聖は、聖輦船の広い甲板の真ん中で座り込んで、上を眺めたり横を向いたりしていた。

シンは知らないが、千の時を生きてきたのが聖だが、そんな彼女でも、宇宙というものを見るのは初めてだった。

その不思議な光景に、興味があつたのだろう。

他の者たちは、用があるのかないのか知らないが、聖輦船の中にいるので、甲板にいるのは、聖と、今しがたここにやってきたシンだった。

宇宙空間に裸で出るような形になる甲板の上だが、決して窒息したり、血液が沸騰しないということが分かると、それほど恐ろしいものでもなかった。

頭をくりくり動かしながら、宇宙空間を見回すことになっている聖の前に出るのは、気が引けるが、呼んだのは向こうなのだ。

「私も、もつとあなたから話を聞きたい」と。

その言葉に従い、聖に、話すべきことを、いや、それはもう話したその上で、さらに話そうと思ったことを、全て打ち明けるつもりで、シンは、聖の方へと歩み寄った。

それに気づき、シンの方を振り向いたシンが、座ったまま、「よく来ましたね」と言ってくる。

その声を聞きながら、彼女と向かい合うような位置に座ろうとしたシンだが、聖が呼びとめる。

「隣に座ってくれればいいですよ、ここ、すぐそばに」

「え？そう、ですか？」

「ええ」

その言葉に従い、シンは、改めて聖のすぐ隣に寄って、腰を下ろした。

そんな中でも、聖は、全天に広がる宇宙の深淵を眺めていた。

シンもそんな彼女と一緒に、一度、視界いっぱい広がる星の海を見ていることにした。

話をする前に、そうしておいた方が心が落ち着くと思ったのだ。

聖が呟く。

「夜空などはもう何度も見上げています．．．でも、これはただの夜空とは違う．．．迫ってくるものがありますね．．．これが宇宙なのね」

「．．．」

「不思議なところ．．．」

「でも、俺達の世界では、こんな光景も、ほとんど当たり前のもです．．．大昔は、人が宇宙に出るなんてのは、夢でしかなかったけど、今じゃ、人が宇宙に住んでるのが、当たり前だ」

「夢が叶った、ってことね」

「そうだと思うけど．．．人類が宇宙に出たことで得たものは、いいものばかりじゃない．．．」

聖の言葉に返事をしつつ、シンは、改めて、コズミック・イラの世界では、すでに母なる大地と同じ、当たり前にあるもの（その認識も決しているものではない）となっていた宇宙の姿を網膜にしっかりと焼き付けた。

宇宙。

そこは、人類の母なる地球の、さらなる母である。全ての始祖だ。地球は宇宙の一部であり、ならば、人類もまた宇宙の一部である。

だが、同時に宇宙は、その圧倒的に偉大な存在を誇示し続け、人に憧れと畏怖をもたらしてきた存在である。

その一部であるはずの人類は、生まれてからいくらかの年月を経て、ようやくその存在を感じることができた。

あまりに広大な宇宙は、ちっぽけな存在である人に、その存在を感じさせることさえなかったのである。

だが、そんな中でも、人類は進歩してきた。

宇宙の存在を知り、そこに足を踏み入れるという野心を得、それを叶えた。

それは、宇宙の一部であり、そこに還ろうとする人類の正しい進化なのかもしれない。

だが宇宙は、人が住むには過酷な環境でありすぎた。

人類の、究極的な故郷に対する夢想は、やむことはなく、最終的には、宇宙に、自分達の生活環境を移すという大言壮語を語るようにさえた。さえた。

それが、いかに困難なこともかもしれない．．．

しかし、かつての自分達の先祖達が、夢でさえ見ることでできなかったことを、人類は実現してしまったのである。

それは、飽くなき進化の過程における、大きな一歩であり、素晴らしい金字塔となるだろう。

だが同時に、その過程で生まれた者こそ、コーディネイターという存在なのである。

人類が宇宙で生きていくために、そうならなければならなかった存在を、同じ人類が否定するという矛盾が生まれてしまったのである。

そして、世界は．．．

シンは、宇宙を見つめ、話すべきことを再認識するための『準備』が終わったのを感じた。

彼は、聖に語りかける。

「なあ、妖怪と人間っていうのは、まったく違う生き物だ。生き方も、力も全然違う。だけど、人類が動物と同じ立場で生きていけない様に、住む立場がまったく違うってわけでもない。まったく違う生き物のようで、人と妖怪が、ほとんど同じ立場で生きている．．．俺は幻想郷で、そう感じた」

「そうですか．．．」

「でも、まったく平等ってわけでもないっていうのを、俺は聞いているし、実際この眼で見て、それは感じた。同じ立場、同じ目線に立っていても、人と妖怪は、本当の意味では平等じゃないんだ．．．

違いますか？」

「．．．いえ、その通りです」

「変なこと聞くけど。そのこと．．．あんたはどう思ってる？」

シンのその問いに、聖はすぐに応えることはなかった。

だが、それは、決して答えがないからではなかった。

ほんの少しだけ黙り込んだ後、ひじりは、何かを語りかけるような口調で、こう返してきた。

「思えば、私の方も、あなたに話すべきことがありました．．．ごめんなさい」

「いや、いいんだ．．．話すべきことって．．．？」

「あなたが最初に、平和のために、私達の下に来たと言いましたね？それを聞いた時、私は少し驚きました．．．．．私もまた同じく、平和を望んでいます」

「平和を．．．？それって．．．」

「妖怪と人間が平等に生きる世界です」

「．．．．．」

「あなたの質問に応えます」

「．．．ああ」

「あなたの言う通り、妖怪と人は、古くより平等ではありませんでした。幻想郷が幻想郷となったその時より、あるいは、それ以前から．．．私は、どうしてもそれを認められません。妖怪は、恐怖の対象として人々から避けられ続けています．．．それでは、この幻想郷をよりよくしていくことはできません．．．妖怪も人も、本当は同じ、等しい存在であるはずなのです．．．」

「．．．そうか．．．」

聖の応えを聞くことで、シンは、この聖輦船が命蓮寺として新しく機能した理由を知った気がした。

聖は、別の種族である人と妖怪を、真に平等な立場にしようと考えている。

その考えを普及するために、命蓮寺をつくったのだ。

元来より、平等ではないとされている人と妖怪を、平等にしようとする聖。

その考えを聞いたシンもまた、自分の考えを語った。

「俺の世界ではさ．．．同じ人間同士で、差別をしている．．．聖、例えば、同じ妖怪同士でいがみ合って、殺し合うようなことを、平気でしてるんだ。このコズミック・イラでは」

シンが出した例は、地底の中って実際にある具体的な事象である。殺し合うことはなくとも、劣悪であった環境に追いやるというのはシン達の世界でも、それが結果となったのを経て、『あつてはならないこと』として語られていることである。

その上でシンは語り、聖もまたそのことは承知だった。

聖は応える。

「地底に住まう妖怪達のことでしょう？それこそ、あつてはならないことです。私も、ゆくゆくは、彼らを地の底から解放したいと考えています」

さとり達と信頼を深めたシンとしては、聖がこうとまで言ってくれるのには、素直に感謝した。

その上で、さらに続ける。

「．．．俺達もその、あつてはならないことと戦っている．．．戦って、その先に平和を手に入れたいと願っている．．．けどな、聖」

「なに？」

シンは、聖が平和を願っていると知り、どうしても知りたいこと、聞きたいことができた。

そのことを聞くために、自分は命蓮寺にやってきたのだ。そう言っても過言ではないほどの気持ちがあつた。

「あんたは、妖怪と人間が平和に暮らせる世界を望んでいる」

「そうです」

「けどあんた。そのための方法を知っているのか」

「．．．．．っ」

シンの質問に、聖が息を呑んだ。
痛いところを突かれたのだろう。

それを、しばらく黙りこんだ後の彼女の応えが、証明していた。

「・・・情けないことですが・・・私には、分かりません。無責任な話ですね・・・」

「・・・いや、それでいいんだ。それでいいんだよ・・・」
「え？」

「自分には分かる、必ず平和にできるって言いながら、全然できないヤツよりも。分からないって言うてくれた方が、いいよ」

「そういうもの、ですか」

「そうだよ」

平和を創造するというのが、どれほど困難なことか。

平和のための方法が、どれほど不可視なものなのかは、シンだっ
てよく分かっている。

キラや、ラクス・クラインでさえ、多くの戦いと葛藤を経ても、そ
れを知ることではできなかったのだから・・・

だからこそ、デュランダルのような考えを持つ者も現れるのだ。

それが、平和を作るための手段だと信じられて。

それほどのものなのだ。

平和をつくるというのがどういうものなのか、は。

「どれだけ平和を語っても、結局、実現させるのはほとんど無理な
ものなのかもしれない」

「・・・」

「でも、大切なのは、そういうことじゃない・・・あんたは、分か
つてるか？」

「それでも、諦めないことですね」

「・・・やっぱり、あんたと会って良かったかもしれない」

「・・・」

「俺も、諦めたくない．．だから俺は、何とかして、平和を作るための方法を見つけようとした．．どうしても無理だと分かって、いや、分かっているつもりでいたけど．．でも、この幻想郷に来て、少し変わった．．ここでなら、もしかしたら、俺の知りたいたことが、分かるかもしれない．．だから俺は、今まで旅をしてきたんだ、みんなと一緒に」

「それで、分かったんですか？」

「．．．ちよつとだけ」

「．．．それを、少しだけ私にも教えてくれませんか？」

「いいよ、あんたになら、話す」

平和を作るのが困難であるならば、それでもなお、あぐく。それで、きつと何かに辿り着けるというのを信じて。

それが、キラ達を選んだ道であり、シンもまた信じた道であった。

そして、信じた上で、その何かを見つけようとしたのが、この幻想郷に来てからのシンだった。

小傘や橙達との出会い、紫から、その向こうにいる何者から命じられ、幻想郷での旅を始め、白玉楼で、命の行方を感じた。地底でさとりに達に出会い、人の立場、技術力の在り方、そして、平和のために大切な心を知った。

まだ、充分とは言えない。

だが、これまでの旅でいろいろなものを得て、シンの心は、以前よりもずっと豊かになった。

その心を、皆に伝えることで、きつと、少しだけ世界が平和に向かってくれる。そのはずだ。

だからシンは、同じく平和を望む聖に、自分の得たものを伝えた。

そのことで、自分の中で得た何かを、確かなものにしたかったのだ。

思えば、デステイニープランだって、一つの平和の形であったのかもしれない。

人の生活を完全に統括することで、確かに、戦争はなくなる。それが正しいことだと、人々が認めることができれば、だが……

それこそが、デステイニープランの最大の問題なのだ。しかし、遺伝子に刻まれた情報を信じて人々が生きること、世界は安定する。

いわば、人々から個性と知性をなくし、遙か古、楽園で蛇に唆されるより以前の、知恵を得る以前の命に戻すのだ。

だが、一度知恵と理性を手に入れ、その素晴らしさを知った人間は、それを認めることができなかったのだろう。

だからこそデステイニープランは世の中から排除され、結果としてデュランドルは悪となった。

だが世界には、絶対的な悪など存在しない。

デュランドルもまた、平和を望んだ一人であるはずなのだ。

人々から、生きる喜びを排除するデステイニープランは、滅びて然りのものであるだろうが、同時に、管理体制の究極の形であり、安定という意味では、一つの平和であるのは確かだった。

広い視野を得たシンには、そのことがよく分かった。

デステイニープランを認めないということはすなわち、この計画に代わる新しい平和の姿を、必ず確立しなければならないということなのである。

デュランドルの遺志を、そして、彼が作ろうとした、限りなく平和に近い世界を犠牲にしたのだ。

自分達は、それに応えなければいけないのだ。

何千と続いてきた、人類の営みの全てを背負う覚悟を決めて……

平和のために必要なものは、たった一つの結論ではない。

確実に、そこへ向かうための『一歩』だ。

平和のための絶対的な方法がないのは、逆に言えば、そこへ向かう

ための方法、可能性は、無限にあるということなのである。

シン達がやるべきことは、確実な平和を、すぐにでもつくる、ということではない。

平和に少しずつ近づいていくために、無限にある可能性の中から、よりよいものを選んでいくことだ。

そして次なる代が、同じように、正しい選択をしていけるように、道しるべを遺すことなのだ。

その考えは、千を超える命を享受し、次の代など必要としない幻想郷の世界においては、価値観の違う考え方かもしれないが、一つの答えであるのは確かだった。

「思えば人類は、急ぎ過ぎていたんだと思う．．．平和を眼の前に近づけたくて、周りを見ることができなかった。だから、お互いの考えを知ることをやめて、結局は自分勝手なことばかりしてしまう、そして、結局は全てを台無しにしてしまう．．．いや、違うかな．．．今まで人は、何度も戦争を繰り返してきたけど、その度に、何かを知って、少しでも世界をいい方向に進ませることができたと思う．．．今のこの世界は、そういうことを何度も積み重ねてきた、一つの結果なんだ」

「永く続いてきた人類の歴史の、一端であり終端、なのですね」

「．．．．．そうなんだな．．．だから俺達も、そうやって、未来に続く何かを積み上げればいい。ただ俺は、それをもっと多く、固く積み上げていきたいんだ．．．．．そして俺は知った。人は、平等じゃない」

「．．．．．」

「でもそれは、命が平等だ、ってことじゃない。ナチュラルとコーディネイターの違いは、絶対に消えはしない．．．文化の違い、人種の違いは、どうやっても消すことのできない、絶対的な不平等だ」
「妖怪と人間も、そうなんですな」

「そうだ。妖怪と人間だって、いろいろと違い過ぎてる．．．そして平和のために、それらの違いをなくそうとしたり、意識できないようにするなんてのは、絶対に不可能だ．．．だから大事なものは．．．」

「逆に意識する、ということね」

「お互いに消すことのできない不平等。人種、思想、文化、それらをまず知るんだ。相手が何を考え、何を信じているのか．．．その上で、自分達との違いをよく考え、認め、吟味して、お互いが納得できる立場を考える．．．．．でもそんなの、難しいことだよな．．．一度嫌いだと思った相手を、好きになるなんて、無理かもしれない．．．でも、そうすることができれば、本当に世界は平和になるはずなんだ．．．．．それにさ。俺には、できたよ」

殺意すら抱いていたキラ・ヤマトに対し、尊敬の念を抱く。

それは、シンにだって出来たことなのだ。

彼に出来たことが、人類全てできないはずはないのだ。

「そうね．．．だからあなたは」

「そう．．．俺は．．．．．」

もう一度、宇宙を、遙か彼方まで広がる深淵の海を見つめる。

人類も、この広大な世界のほんの一角で、ちっぽけに、しかし力強く生きる、この世界の一部分なのだ。

宇宙そのものという、人でもなければ物でもない、もっと曖昧で不可思議で、だからこそ神秘的な『何か』の子供達なのだ。

そして、どれほど互いが違っていようと、互いにどれほど憎しみあっているように、人は、『命』という存在としては、平等であるはずなのだ。

なんてことはない。

世界を変えろというわけでも、神に喧嘩を売ろというわけでもない。そんな大それたことではない。

ただ単に、当たり前前に、そこにある『命』というものの価値をみんなに教えるだけなのだ。
難しいことではない。

だから、出来る、きつと。

だから、やってみせるのだ、これから。

視界に広がる無限の空間は、『無』から『有』が生まれるという、その推し量ることもできない広大さを湛えて、シン達を包み込んでいた。

シンも聖も、不思議と心が落ち着く気がした。

シン達の新たななる道程、地球帰還への道は、まだ遠い。

PHASE - 17 『ムーヴメント』

世界は、自分を中心に動いてはいない。

世界にいるのは、自分だけではないのだ。

自分自身が何かをしているその中でも、世界のどこかにいる誰かはまったく別の事をしている。

お互い、そのどこかの誰かが何かをしているのに気付かず、意識せず、そもそもそうしようともせず。

そうやって進んでいくのが時であり、世界の正しい在り方である。

「あれ？あなたは、確か？」

「ディアツカ・エルスマン。知ってんでしょ？」

コズミック・イラ75年、11月。

ルナマリア・ホークは、突然、自宅に押し掛けてきた元赤服のディアツカ・エルスマンの来訪に、ただ驚いた。

はつきり言つて、彼とのかかわりなど、同じ赤服同士だった、くらいにしかなかったのだから、任務とか以外で、会うことはないと思つていたのである。

そんな間柄なのだから、当然、わざわざルナマリアの自宅までディアツカが訪れたのは、個人的な用事でも、ましてや口説きに來たわけではない。相応の役目があるわけだ。

「どうしたんですか？ザフトのベテランなんかが私のところに」

その用事を聞こうと、ディアツカに対して問うたルナマリアに、彼が返す。

「ちよつとぶしつけなこと聞くけど、お前、シン・アスカと結構な仲なんだろう?」

「え? ああ... それなんですけどね...」

「んあ?」

「フっちゃった」

「ああ... そう...」

一度まったく同じ軽さで恋人と(一方的に)別れた扱いになってしまったディアツカとしては、ルナマリアのこの軽い口調は中々『くる』ものがあつたし、ちよつとした好奇心で、「また何だよ」と、聞きたくなつた。

ルナマリアは、先ほどの軽い口調を改めて、少しだけ真面目な顔つきになつて応える。

「いや、別に嫌いになつたとか、興味がなくなつたとかじゃないんですよ。ただ、戦争が終わつてからのあいつ、いろんなことに追い詰められてるみたいだつたんです。だからこそ、あたしが助けてやるうつて思つたんですけど、ちよつと付き合つてる内に、そんなこと無駄だつて分かつたんです。あいつの心の中には何かがあつて、それを消すには、あたしが傍にいたぐらいじゃ逆に迷惑だつて気づいたんです、だから、別れることにしたんです。今のあいつは、ちよつとの間、一人つきりで考える時間が必要だと思つたんです」

「ふゝん。そうかい。実あさ、今回の用事つてのは、そのシンのことなんだよ」

「え? そうなんですか? 一体どうしたんです」

「行方不明になつた」

「へえ... へ、ええーっ! ?」

ディアツカがあまりにもそつけなく言つたものだから一瞬間き流したが、ルナマリアは、今しがた彼が言つた言葉に驚愕した。

「行方不明つて... どこにもいないつてことですか?」

「そうさ．．．まあなんだ？まずあ事情を話すよ」

ディアツカの話では、時は数週間前に遡る。

彼は、彼の古くからの友人であり戦友であるイザーク・ジュールに呼ばれていた。

ヤキンドウー工戦役とメサイア戦役で、多くの功績をあげただけでなく、それを抜きにしても、軍務に対するストイックな姿勢を評価されていたイザークは、そのこともあって、ザフト軍の左官、いわゆる白服になっていた。しかも、その中でも最高の立場に、である。実質的には、将官にだってタメ口を聞いても許されるような身分だ。というより、その将官にまで昇進したっておかしくない、というか、それが普通だった。

しかも、戦後は、ラクス・クラインの側近となり、クライン派が設立した新政府の幹部となっている。

下手すれば、将官を顎で使っても文句は言われない立場だ。

だが、イザークはそれをしないし、将官になるつもりもなかった。

將軍になつては、実際の兵士の姿を見ることができなくなる。

兵士の動きを常に見て、意識し、その生の声を常に聞きながら、必要な指示を、あるいは施策を練る。

それをするには、左官ぐらいが丁度いいというのが、彼の言葉だった。

デスクワークと各地への視察に明け暮れる日々を送っている今でも、必要とあればすぐ実戦に馳せ参ずるという心構えだろう。

まったく、生意気な口を叩いていたエリート坊やが、随分と立派になったもんだ、とディアツカは思うわけだが。当のディアツカも、似たような境遇だったし、しかも、まったくもって立派になつていないのだから、そんなことを言えた立場ではない。

さて、そんなイザークにディアツカは呼ばれたわけだ。

その呼びだされた場所が、旧ザフト軍の指令基地の一室、いかにも

お偉いさんのいそうな部屋の中だった。

自動ドアが開いた先には、巨大な執務机があり、その横に一人の秘書官が立っている。で、執務机には、当然ながらイザークが座っているわけだ。

ほとほと、いい御身分になったものだ、と思いつつ、ディアツカが、机に歩み寄りつつ言う。

「ようイザーク？ 一体何の用だよ」

現在のところのディアツカとイザークの階級の差は雲泥、月とすっぽん、いや、それを通り越してマゼラン星雲とマントルぐらいにかけ離れているかもしれない。

そういうディアツカの飄々とした口調が、当人だけでもディアツカより偉い立場に立っている秘書官の男の癪に障ったのだろう。

秘書官が、ぎらりとディアツカの方を睨みつけるが、それを、イザークが制止した。

「やめろ．．．旧友なんだ、気にせんでくれ」

その声に秘書官が、「ハッ」と敬礼を返す。

今しがた言った矢先ではあるが、次いでイザークはディアツカに対してこうも言う。

「しかし、お前もお前だな。いつまでもザフトレッドのつもりで上官への口の利き方も身につけないから、出世できないんだぞ。シホだってもう、艦隊を統べるような立場になりつつある」

「うっそ？ あいつが？」

「あいつは俺達よりもずっと真面目だ、むしろようやくかつて感じだぜ．．．お前もそろそろ、うまい汁すすめるようにならんな」

「あはは．．．面目ね．．．とまあ、それはそれでさ。今日呼んだのは、ンなどうでもいいこと言うためじゃないだろ」

「そうだ．．．今回は、一つお前に頼みたいことがある．．．命令だが、同時に、俺の個人的な頼みだ」

「何だよ？」

「シン・アス力を知ってるだろう」

終戦後のシンは、クライン派として、その主軸となるジュール隊に転属となった。

そのため、同じくジュール隊であるディアツカが、彼のことを知らないわけがなかった。

確か最近は、旧ザフトの宇宙要塞メサイアを、新しい平和の祈念碑にするという話があり、ジュール隊が、そのための事前調査を行うらしく、そのための打ち合わせが行われた。その打ち合わせにシンも呼ばれていたが、彼は何の連絡もなく、いけしゃあしゃあと欠席しやがった。

そういうことも含めてディアツカは、「知ってる」と応え、こう続けた。

「で、そいつがどうした？」

「そいつなんだがな．．．今消息を断っている」

「はあ？」

「行方不明というヤツだ．．．いろいろとあつたし、あいつには長期の休暇を与えていたが、その間にどこかへと姿を消して、以後何の報せも超越さんのだ」

「おいおい？どこへランデヴーしやがった？」

「そういう軽いものじゃないぞ。自宅を調査し、軍のネットワークで動向を調べても、何の情報も得られんのだ」

「．．．マジで？」

「嘘は言わん．．．これは少し妙だ」

「．．．で、お前の言う命令兼頼みつてのは．．．」

「もつと細かいところまで、シンの動向を調査してほしい。あいつの友人や関係者に話を聞いてきてくれ。ミネルバ隊時代のクルーやアスランに．．．キラ・ヤマトにもな。聞ける範囲でなら、一人残らず聞いておけ。もしシンのヤツが、単なる逃避行のつもりで行方をくらましているなら、そのうち情報を得られるだろう」

「．．．まためんどくさいことを頼んでくれちゃったなあー」

「すまん。こういう些事でも遠慮なく頼める相手と言えば、お前

しか知らんのだ」

「わーってるよ。とりあえず、会える相手には会つとくさ、任されたぜ」

「ああ。聞き込みのためには、いろいろな場所を回るだろう？そういう費用はこちらで出しておく。臨時収入も、必要なら出す。頼むぞ」

かくしてディアツカは、シンの行方を探って、各地を飛び回る事になった、ということだ。

事情を聞いたルナが、「そういうことですか・・・」と呟き、それにディアツカが応える。

「ミネルバ時代のクルーには大体当たったけど、誰も知らんとさ。で、あんたにも当たってみただけど、その様子じゃ、生憎みたいだな」

「はい・・・シンが行方不明になってるってこと自体、初めて聞きましたよ」

「さつきみたいな話をした手前だしー？心配なんじゃねえの？」

「そりゃあ、心配ですよ・・・もしかして、変なことに巻き込まれてたりしないですか？」

口以上に顔で心配な気分を語るルナの言葉に、ディアツカはへらへら笑いながら応えた。

「変なことつて、なんだよ。まさか、クライン派を転覆させる陰謀のために、誘拐されたとか？にしたって、それなら直接ラクス・クラインを暗殺したりするだろ。あいつが、そういうヤバいことに巻き込まれるわけがないぜ」

「でも、もしかしたら事故にあつたとか、あるかもしれないですよ？」

「それはあるかもね・・・でも、それでも何日も音沙汰なしってのは妙だぜ。まあ、事故に会ったんなら、それを確かめるために俺が

苦労してんだ．．．．．とりあえず、何も知らないんなら、これで失礼させてもらうぜ。今度は、オーブにでも行くからさ。イザークに渡された資料じゃ、あいつは最後に、オーブに行っただって話だからな。最初っからあそこにいけばよかったのかもね」

「そうですか」

「んじゃ、今度俺と一緒にチャーハンでも食べようぜー」

「いやです」

結局ディアツカは、聞くことだけ聞くと、そそくさと去っていった。ルナとしては、シンがいなくなったということには、驚きと不安を隠しきることはできなかった。

まさか、自分が感じた、シンの中にある何かが、予想以上に深く、暗いものだったのかもしれない。

そのことでシンは気に病んで、どこかへ消えてしまったのだろうか、とも思えた。

やはり、自分が傍にいて、支えになってやるべきだったのだろうか

だが、ルナ一人の力ぐらいでは、シンの中にある絶望と、それ以上の何かを消し去ることはできなかっただろうし、もし今回の件が、シンが自分の意思で引き起こしたことなら、止めることはできなかっただろう。

それは、ルナ自身がよく分かっていた。

だからこそ彼女は、あえてシンを一人にして、その心が落ち着くのを待ったのだ。

不安でないわけがない。

だが、多分大丈夫だろう。

シンは、いずれまたみんなの元へ帰ってくるはずだ。もしかしたら、とても大きな何かを持って．．．

ルナは、今はそのことを信じることにした。

聖輦船の消滅から数日後。

命蓮寺が、空を飛びどこかへ向かう船であることは多くの者が知っており、そのため、ほんの一日二日見ることがなくなるというのはよくある。

だが、もう何週間も、聖輦船は人目につくことがなかった。さすがにこれはおかしい。

当然ながら、このことはすぐに、近隣の者達に知れ渡り、まことしやかに、噂が立ち上りはじめた。

その噂は、妖夢の耳にも届く。

たかだか噂ごときに耳を貸すつもりはなかった妖夢だが、その詳しい内容を聞くと、そうとも言えなくなった。

火のない所に煙はたため。どんな噂でも、ほんのわずかな真実味はある。

そして、その真実味を信じて、噂の内容を鵜呑みにしてみると、妖夢の脳裏に、一つの説が浮かんだのだ。

聖輦船が消滅していく様を実際に見たという者の話では、あの船は、突然空に、巨大な裂け目のようなものが浮かび上がり、その中にすっぽりと吸い込まれた、というのだ。

さすがに信憑性に乏しく、一部の者はすでに呆れて信じなくなっている噂だが、妖夢に関しては、その噂は、大いに真実で在り得ると思えたのだ。

そういうことが起こり得ることを、いや、起こしうる者を、妖夢は一人知っている。

もっとも、そのことは、主人である幽々子から聞いただけであつた

が。

さて、実際に事件現場である命蓮寺に向かってみると、寺院としての敷地を残して、船体の部分が綺麗になくなっていた。

そして本来それがあるべきところには、一つの立て看板が立てられており、『当分空けます。ごめんね（はあと）』と書かれていた。いかにも胡散臭くて何かありそうな看板である。

これを見たとき、妖夢の中にあつた説は、曖昧なものから、よりはつきりとしたものへと変化していた。

そして、善は急げだ。

早速妖夢は、この事態に少なからず関わっているであろう、八雲紫の下へと向かった。

幸い紫は、白玉楼で相変わらずクルーゼに会っているようだ。（妖夢自身、そういうタイミングを狙っていた）

二人のいる部屋に失礼承知で挨拶もなしに入るなり、妖夢はこう切り出した。

「紫様、お聞きしたいことがあります」

突然のその声に、座敷に座っていた紫が、何事だ？と、ぼけつと妖夢の方に振り向き、クルーゼもまた、ぼけつとではないが、同じように振り向いた。

が、すぐに紫は、落ち着いた口調でこう返す。

「まあまあ落ち着いて、ぶぶづけでも食べていきなさい」

「．．．は、はい、失礼いたします」

紫の言葉の意味は、京都とかに永らく住む者なら分かんと思う。その言葉に従い、大人しくその場を去ろうとした妖夢に、クルーゼが言う。

「冗談だ、まあ好きなところに座りたまえ。一体どうした」

ということ、妖夢は単刀直入に言う。

と、思いきや、彼女の言葉を待たずして、紫が妖夢の疑問に対して応えた。

「聖輦船がどこかへいった件なら、あなたの考えている通りよ」
すなわち、やはり、紫は今回の件に関係している。

「というか、妖夢の考えている通りというなら、紫こそがその当事者、ということなのだ。」

自分の考えが間違っていたことを感じつつ、今度は脳内に疑問がわき起こった妖夢は、満足な回答が得られないことを承知で、聞いた。

「ど、どうしてあんなことを．．．確か、あそこにはシンも向かっているという話でしたよね」

紫が応える。

「そう．．．彼はいずれ、元の世界に帰るつもりだった。なら、それが多少早くなっても問題はないでしょう？まあ、またすぐに戻ってくるけどね」

「それは、そうかもしれないですけど．．．なんで聖輦船を．．．っていうか．．．もしかして紫様．．．」

「なに」

「聖輦船をスキマに送ってどこかに転移させたとしたら．．．そこって．．．」

「検討づくでしょう？その通りよ」

「．．．シンが元いた世界．．．確か、コスミック・イラ、というところ、なんですね？．．．どうしてそんなところに聖輦船を．．．」

「さすがの妖夢も、こればかりは御しかねる、というか、呆れている様子だった。」

そんな妖夢の態度は気にせず、紫は言う。

「ま、いろいろあってねえ。目立つとか、交通に便利だとか．．．」

「な、何なんですかそれ．．．この幻想郷の住人が、しかも、妖怪の一匹とかじゃなく、船の一隻が外の世界に出るなんて、そうそうあっていいものじゃないんですよ？クルーゼ様は、このことを承知

だっ たんですか？」

クルーゼはすぐに応える。

「ああ。紫からの提案に私が応じた上での結果が、これだ」

「そんな．．．一体どうして．．．？」

「君は毎度同じことを言うな．．．己で考えることが大事だと、私も言っているだろう」

「．．．今回はかりはどうしても分かりません．．．クルーゼ様．．．

．あなたがこの幻想郷で何をしようとしているのか。それは、少しずつ分かってきたんです。でも、今回のことが、そのために大事なことだとは思えないんです。一体何をするつもりなんですか？」

「それを、考えるというのだ」

「．．．紫様もクルーゼ様も．．．もし向こうの世界で何か起こったら、知りませんよ」

さすがに批難の色をこめて発せられた妖夢の言葉だが、二人は、清かな様子で応じる。

「問題はない、由々しき事態にならぬよう、紫にも頼んである」

「セーフティーは完璧よ。何かあれば、私が直接赴いて解決するわ」「本当なんですね？」

「くどいわねえ。鍋のダシにして幽々子に啜らせるわよ？」

「．．．もう一度だけ聞きます、大丈夫ですね」

「大丈夫よ。それに、いずれは、あなたにも全てが分かる時はきます．．．って、これもなんか毎度言ってる気がする」

そうまで言われたところで、妖夢は、この不可解な紫の行動を、黙認することにした。

幻想郷の外の世界に幻想郷の物が、あるいは妖怪が出現するというのは、神隠し同様、まったくいいことではない。

そうなれば、普通に妖怪があらわれたという都市伝説が一つできるだけである。

だが今回は規模が違う。

聖輦船ほどのものが外の世界に出てきて人目につけば、並みの事態にはなりそうにない。

しかも、シンの言うコスミック・イラは、技術力が中々に進歩しているらしい。

船一隻なら、容易に拿捕されてしまうだろう。

そうなれば、聖輦船と、その乗組員達の存在が、すなわち妖怪の存在がおおぴらに知られ、下手すれば、幻想郷の存在もまた知られてしまうかもしれない。

そうなれば、どんなことが起きるか、見当もつかない。

妖夢は、そのことを恐れていたのだ。

だが、紫の行動は全て、ありとあらゆる計算がなされた上でのことである。

妖夢にとやかく言えたものではないのだ。反抗などできるはずもない。

今はただ、全てを紫に任せて、来るべき結果を待つしかない。

結果・・・そう、結果だ。

妖夢は、紫に全てを任せる代わりに、結果を知る機会があれば、必ずそれを果たさせてもらう、と考えた。

今回の件のこともあるし、それ以上に、クルーゼが幻想郷にやってきてから今日までの、ありとあらゆる目論見に対して、だ。

今回の妖夢の決意は、彼女が信じる土道以上に固いものがあった。

聖輦船が地球圏を目指して出発してから、数日が経過した。

一目見たときは不思議でも、何日も見ていれば、アステロイドベルトのデブリ群も殺風景なものに見えてくる。

だが、それももう終わりだ。

順調に航行を続けた聖輦船は、無事にアステロイドベルトを抜け、火星圏へと到達していた。

そこで見えた光景は、幻想郷の妖怪達に、また新しい興奮を呼び醒ました。

皆で甲板に集まり、全天の夜空に浮かぶ、ひと際大きな赤色の球体に眼を奪われていた。

火星である。

無骨な石ころでしかなかったデブリと違い、鮮やかで、宝石のようにさえ見えるその星は、妖怪達の興味を惹きつけたのだ。

しかも、試しに聖輦船を近くまで接近させてみると、ただきれいなだけではなく、デブリなど豆粒にもならないほどの大きさがあったのだ。大きな玉、なんてものではない。

幻想郷の大地にだって入りきらないような大きさをたたえ、静かに宇宙空間に浮かんでいるのである。

が、それも当然なのだ。

シンの話では、この巨大な玉のさらに奥に、幻想郷と同じような、広大な大地が広がっているのだから。

そう、それが惑星、ホシなのだ。

視界いっぱい広がる、火星の大気がなす奇妙な色彩を眺めながら、思わず小傘は呟いていた。

「すつごい．．．これがお星さまか．．．おつきいな．．．．．これがお星さまかあ．．．」

その声に藍が続く。

「しかもこれでも、星としては小さい方なんだ．．．まだ恒星っていう、これの数百か、数千倍の大きさのお星さまが、この宇宙の至る所に、それこそ夜空に浮かぶ光の数だけあるんだ．．．って、こ
とらしい」

かくいう藍はともかくとして、妖怪の多くは、空を突き抜け遙か高くまで上った先に宇宙があるなんてことは知らないし、その広大な空間の中に惑星や恒星が浮かんでいることも知らないし、夜空に浮かぶ星の正体が、自然発光する恒星だということも知らない。

外の世界の人間にとつては未知の宝庫である幻想郷の住人だが、そんな彼らにとつても、外の世界もまた未知なる、魅力的な世界だったのかも知れない。

無限に広がる空間の中で、物言わず浮かぶ大きな玉。

大地の収まる不思議な器。

小傘達妖怪は、その光景にしばらくの間見とれていた。

シンとしても、実際に火星を目の前で見るのは初めてだったし、いざこつやって直視してみると、中々圧巻なものがある。

人類の宇宙開拓は順調に進んでいるが、それでもまだ、火星圏への進出だって果たしていない。

だが、技術力の進歩がさらに進み、それを正しい方向へと向かわせることができれば、いずれは必ず、火星圏への進出を果たすことはできるし、さらに遠くの木星、さらにその先へと手を伸ばし、やがては地球圏の全てに足を踏み入れることになるだろう。

そうなれば、次に待つのは、さらにその先、外宇宙、銀河の向こう側だ。

人類の到達点に限界はない。

そうだ。目の前に見えるこの赤の星だって、ただの到達点でしかない。

その先には、まだ無限の領域が待っているのだ。

そう、無限だ。

子供が使うような世界が、本当に広がっているのである。

シンは、改めて、というよりは初めて、宇宙というものの果てしなさを感じた。

いずれ人類がその果てを探索しようと歩き始めるなら、まず人々の心を一つにするべきだ。

平和を作れないで、何が進歩で、何が宇宙開拓か。

逆にいえば、宇宙の広大さに比べれば、人類同士のわだかまりは、些細なことではかないだろう。

だというなら、それを消し去ることだって、簡単なことのはずなのだ。

できないはずが、ない。

シンは、そのことを強く実感した。

さて、火星の偉容に、半ば思考停止して惚けていた妖怪達だが、この中で（シン込みで）一番賢い藍としては、すぐに、惑星の姿に見とれる以上に、やるべきことがあるのを思い出した。

火星を見ているのも大概なところでやめて、藍はシンに対してこう切り出した。

「そうだシン。デブリ帯を抜けている間、少し考えていたんだ」

「ん、何だ？」

「あなたの話では、デブリ帯を抜けてこの火星圏に入ってから、さらに何力月かかかってようやく、地球圏につくんだよね？」

「ああ、そうだ。こっからが長いんだよ」

「さすがにここからさらに数力月だと、退屈しそうだと思ってね。何とか、もうちょっと移動速度を上げる方法を考えたんだ」

「へえ〜。それで、考えられたのか？」

「うん。太陽の風を利用してみようと思うんだ」

「太陽風・・・ソーラーセイルだな？」

「太陽から放たれる光やイオンを反射することで、その反発力を推進力とする」

確か、コズミック・イラの中立組織、D・S・S・Dが、太陽風によって推力を得る宇宙探査用のMSを開発していた気がする。

太陽風の技術への転用は、シン達の世界でも立証されたものだ。

幻想郷にソーラーセイルの技術が知られているのかは知らないが、藍が一から考えてこの説を提唱したのだとすれば、まあ、さすがだが、しかし、この考えには問題もある。割かし大問題だ。

ソーラーセイルは、人類が太陽に背を向けて、太陽から遠くへと向かっていくからこそ成立している技術なのである。

だが、今回はどうだ。

「だけど藍。風を送って来る太陽は、俺たちの進行方向にあるんだぞ？これじゃ向かい風だ。風を反発すると、逆にブレーキがかかってしまふ」

そういうことなのだ。

が、藍はそんなことは百も承知といった具合にこう返してきた。

「だからさ．．．帆じゃなくて、翼を生やすんだよ」

「翼を？．．．．．そうか、なるほどな」

太陽から放たれる光線を風とするなら、向かい風を推力とする方法はある。

飛行機の主翼は、向かってくる風から、揚力と効力を得ることで、エンジン以外に大きな推進力と浮力を得ることができる。

レーシングカーとかも、向かい風を逆に利用することを想定して設計されているものもある。

なにも風がこちらに向かってくるなら、利用する価値がないというのではないのである。

帆船だって、向かい風を受ける前提で設計したものもあるというが、それにしただけだ。

向かい風から推力を得るならば、空気抵抗を考慮して、計算された形を設計しなければならない。

「だけどさ、もうすでに形のできあがってる聖輦船じゃ、どのみち無理じゃないか？」

「そこでだ．．．バリアーを張るんだよ、空気抵抗を逆に利用できるような形のバリアーを、この船の船首に展開する．．．法力のバリアーだ」

「法力の？」

「うん。だから、私の言ってることを実現させるためには、聖の協力が必要なわけだ・・・そういうことなんですよみんなー！聞いているー？」

藍の言うことには、一理ある。

彼女の理論に追いつけるだけの準備さえできれば、間違いなく聖輦船は、さらにその移動速度を上げることができるだろう。

さて、そのために、妖怪達に声高らかに呼びかけた藍だが、火星の不思議な光景に見とれている妖怪達が、さっきの話を聞いている道理はなかった。

仮に聞いていたとしても、ソーラーセイルと揚力の理論を知っていないと、何も理解はできなかっただろう。

「ええ？何ですかー？」

ムラサ船長が間抜けな返事を寄越してくる。

どうやら、一から説明する必要があった。

だが、いいだろう。

シンの方も、改めて皆に呼び掛けた。

「火星を眺めてるのもいいが、これからもつと楽しいことをするぞ。この聖輦船を、燕のように速く進ませるんだ」

PHASE - 18 『平和という夢の中で』

過ちは起こる。

そして、過ちを犯すことで後悔する。

それはいかなる人間であろうと経験する、人生の通過儀礼だ。後悔しない人生などあり得ない。

人は失敗し、後悔することで、自分を改める。

そうやって、自分をより高めることもまた、人生の価値だ。

そしてそれは、一個人だけに当てはまることではない。

個人が過ちを悔いて改善する。

それが何千、何万、何億と繰り返されれば、それはやがて世界を動かす大きな力になる。

それが革新、と呼ばれるものなのだ。

オーブが中立の、平和の国として世界に認知されているのには、一つの理由がある。

それは、ナチュラルとコーディネイター双方が、国土の中で共生していることである。

両者が互いに理解し合わない理由として、生活環境がまったく違う、ということがある。

ナチュラルは地球に、コーディネイターは宇宙に、である。

多少の例外はあっても、基本的に、ナチュラルは連合政府統治下でナチュラルのみ生活し、コーディネイターはプラントにてコーディネイターのみで生きる。

お互いまったく違う場所で生活し、対面する機会すらなければ、相互理解などできるはずもない。

オーブの故ウズミ首長は、それこそ平和というものを逼塞させていると考え、逆に、この事実こそ、平和のための一步を踏み出すきっかけになるとも考えた。

国土に、ナチュラルもコーディネイターも分け隔てなく住まわせて、互いに生活させる機会をもたらす。

そのことで、互いが人間として何も変わらないということを、理解させようとしていたのである。

シン達がオーブの中で住んでいたように、だ。

そして、そのことはすぐに効果を出していた。

コーディネイターの遺伝子的優越を怪訝に思いながらも、生きる上で何の害ももたらさないことを、互いに共生していくなかで、オーブに住まうナチュラル達は理解していった。

少なくとも、敵対してわざわざいがみ合うことなどない。そのことを理解していったのである。

根本的に人種が違うということを理解しつつ、その決定的な確執を消すことはできずとも、オーブの中においては、ナチュラルもコーディネイターも等しい存在でいられた。

シンにしても、オーブ出身である彼としては、他のコーディネイターほどは、ナチュラルを憎んではない。

ナチュラル個人個人には、何の非もないことを理解しているからだ。あくまでも、戦争において敵になったからこそ、倒す、というだけだったのだ。

シンは、ナチュラルではなく、戦争を憎み、それを引き起こすものを憎んでいたに過ぎない。

彼は、ナチュラルではなく、戦争と戦っていたのだ。

さて、そんなシンのこともある。

ナチュラルとコーディネイターが共生するオーブが、平和社会実現のための礎であることは、明らかなことだった。

そして、そんなオーブを象徴する事柄がある。

故ウズミ首長の娘でありナチュラルである力ガリ・ユラ・アス八首長と、プラント評議会のパトリック議長の息子でありコーディネイターのアスラン・ザラが、婚約を結んでいることだ。

この事実こそ、オーブにおけるナチュラルとコーディネイターの関係を象徴していると言えた。

そして、そのアスラン・ザラこそ、かつてはザフト軍のエースであり、平和のためにキラ・ヤマトと共に戦った、シンの上官だったのである。

そんな彼の下にも、シンの行方を探るディアッカが訪れていた。

赤服時代は同期であり、最近ではシンの上官であったアスランには、ディアッカとしてもかならず話をつけておこうと思ったのだろう。

自宅にて、ディアッカからシンが行方不明であることを知らされたアスランとしては、当然、驚愕を隠すことができず、他の者達同様、「そ、そうなのか？」という反応をするしかなかった。

その反応だけでも、彼が何も知らないことをディアッカには察知できた。

「どうやらお前も、詳しいことは知らないみたいだな」

「ああ、そんなこと初めて聞いた・・・まさか・・・あいつが・・・」

戸惑った様子を見せるといのは、ディアッカがシンの行方を探つて訪ねた者たち全員に言えることであつたし、もう一つ言えるのが、

誰もが、突然のシンの行方不明に心配を隠しきれない様子である、ということだった。

ミネルバ隊時代は紛れもないエースパイロットであり、人間的にも一長一短ありそれなりに好かれていたらしいシンは、隊でも存在感が強かったのだろう。

そんな彼の失踪に、誰もが、ただ驚愕しただけでは終わらなかったのである。

そしてこのアスランの場合、特にそれが如実であった。

心配という以上に、何か思いつめているとさえいえるほどだった。

「どうしたよ」

と聞くディアツカに、アスランは多くを応えようとせず、「いや、別になんでもない．．．悪いな、役に立つようなことを言ってやれない．．．．．わざわざこのオーブにまで来てもらったんだが．．

．」とだけ言った。

「いや、いいさ。ちよつとした休暇だと思うことにするよ．．．シンのことで話すことがないなら、別に聞きたいことがあんだ」

「何だ？」

「ミリイさ、どこにいるか知んない？」

「ミリアリア？．．．ヨリを戻したいのか？」

「さすがに、軍人として出世できないうえにずっと一人じゃあさ、寂しんだよ。お前はいいよなあ、国のお偉いさんで、しかも美人の旦那になれてさ。玉の輿つてやつじゃね？」

「そういう言葉知ってるんだな、使い方合ってたかな．．．というか、別にそういうんじゃないさ．．．ミリアリアなら、住まいも変わってないはず。会いに行けばいいと思うぞ？」

「そうするぜ．．．ま、今日は、久々にお前の元気そうな顔が見れてよかったよ」

「元気そう．．．．．か」

「あ？なんだよ、元気じゃありませんってか？」

「いや、そんなことないさ、元気にしてるよ。最近は、オーブも政

治的に忙しくなってくる。カガリの手伝いもしなきゃいけない。ここからががんばりどころさ」

「そうかい、ま、頑張れよ」

用事が済んだなら、多くは話さず、ディアツカはそそくさと去っていった。

一人残ったアスランとしては、自分の顔が、まだ元氣そうに見えているのに、安堵するような、少し心憎いような、微妙な気分だった。

終戦後のアスランは、平和な世界を得る機会を手に入れたという歓喜と、その機会を活かさねばならないという責任感、そして、カガリとキラ達の助けになるうという使命感に満たされていたが、同時に、それ以上に大きな感情が心の中で渦巻いていた。それが、今回のことでより強くなったように思える。

シンに対する申し訳ない気持ちである。

平和を勝ち取るための戦いの中、アスランは、シンの心と誇りを完膚なきまでに打ちのめしてしまった。

アスラン自身もまた、自分の心に誇りを持っていたからこそだろうが、シンの心を理解しようともせず、ただ目の前に立ちふさがる敵として倒すことしかできなかった。

結果としてはそれは間違ったことではないのだろうが、シンに、己の過ちを気付かせようとしても、それを叶えることができなかったのである。

それだけでなく、結局アスランは、上官として、軍人として、そして一人の人として、シンに対して何も教えてやることができなかった。

終戦後シンは、キラと同じように、アスランとも対面し、そして語り合った。

シンが幻想郷に飛ばされる前のことである。
その時の会話が、今でも思い出される。

「．．．アスランさん．．．全てが終わって、ようやく俺は理解できましたよ．．．俺のやったことは、ただのくだらない独りよがりだった．俺は結局、何もかも空回りしているだけだったんだ、って」

「．．．．．済まないシン．．．俺が、俺が何とかしてそのことを教えてやるべきだったんだ．．．」

「．．．いいんですよ。あんたが真剣になって俺に何かを教えてくださいても、俺には聞く耳がなかった．．．あんたの言うことに対して、いつもつっぱねるばかりだった．．．済まないっていうなら、俺の方ですよ．．．アスランさん」

シンの眼には、比類なき絶望と諦観がたたえられていた。
その薄暗い紅の色を垣間見たアスランは、確信した。

——俺はなんてひどいことをしてしまったんだ．．．世界がどれだけ平和になっても、もう、シンの心に平穏を取り戻すことはできない．．．俺は．．．なんてことを．．．．．これでは、命を奪うのと大差ない．．．俺はシンの心を殺したんだ．．．．．——

アスランにはもう、「済まないシン．．．本当に」と、繰り返すことしかできなかった。

今この時のシンもまた、いや、この時こそまさに、救いを求めているとも知らずに。

結局アスランは、この時もまた、そんなシンに対して何もしてやれなかったのである。

会話はそのまま、風が吹き抜けるように、空しく終わってしまった。

この時のことを思い出すたびに、アスランは、情けない自分を呪いたくなった。

そして今、シンは、何かを隠してどこかへ消えた。誰にも助けられないまま、一人きりで、どこかへ．．．

できることなら．．．

せめて今度こそ、もう一度だけでも、シンの心に何かを伝える機会が欲しかった。

「シン．．．もしお前が打ちひしがれて一人旅に出たとしてもいうのなら、必ず戻ってきてくれ．．．その時こそ俺は、お前の上官として、俺の全ての心を伝える．．．」

本当の意味で固く根付いたその決意だが、結局は、心からの言葉も、ここでないどこかにいるシンに聞こえるはずもなく、意味もなく宙を漂い消えていくだけだった。

全てが終わってからでは遅いのに、結局、今は何もできない、してやれない。

アスランは、自分がシンに対して、一人の人間に対してあまりに無力であることを噛み締めていた。

聖達を集めてシン達は、藍の提案した計画を説明した。

「法力でバリアを張って、太陽の風を受け流す？」虎丸が意外そんな声を出す。

「流体力学ってヤツね」とムラサ船長。

「しかし大それたことだな。簡単に言っていないものなのか？・・・
どうなんですか？聖」とナズーリン。

「聖輦船の推力もまた法力だわ。法力を高圧で噴出する反動で進んでいる。だから場合によっては、法力に結界を張り巡らすことだって不可能ではないわ。というか、普通に可能よ」と聖が応える。

「そういうことなら、話は早い。聖、頼まれてくれるか？」とシン。
その言葉に聖が、「ええ、やってみます」と応える。

かくしてシン達は、船体にバリアーを張るべく、再度聖輦船の甲板へと移動した。

すでにバリアーの形については藍が設計を済ませている。

後はその設計にならってバリアーを展開すれば、聖輦船の移動速度は飛躍的に上昇する。という計算だ。

甲板の先、ちょうど船の最先端部であり、せり上がる形になっている艦首の頂点に、聖が立った。

やや後ろに控えつつ、シン達がその様子を見守る。

「さあ、法の力をここに！」

その声とともに、両掌を、眼前、光輝く太陽の方へ向け掲げた聖。

その動きに呼応するように、聖輦船の艦首のさらにその先から、船全体を覆い包むような薄い光の膜が形成されていく。

ビーム光よりもさらに色合いの弱い、ビニールのような法力の結界だ。

水が薄い布に滴り広がっていくかのように、光の膜は少しずつ大きくなっていき、やがて、船体の前半分をすっぽり包むような、円筒形の細長い傘のようなバリアーが形成された。

シンとしては、藍の理論には納得できるし、そのバリアーを法力で作り、その法力は聖が放出するということを聞けば、少なくとも、できるということに疑いは持たなかった。

だが、実際に聖が巨大な法力のバリアーを展開する様は、圧巻であると言えた。

見ようではオーロラのようにも見える薄い光の膜を、聖一人で成形したというのだから、幻想郷にきて間もないころのシンならば、叫び声の一つでもあげていたかもしれない。

場合によっては、バリアーを展開するために用いた法力だって、物理的なダメージとして撃ち放つこともできるはずだ。

そういうものが、スペルカードとも呼ばれる光の弾幕になるのだ。

つくづく、この世界の妖怪達と自分では、いろいろと違いすぎるとシンは思った。

まあ、しかし、人種が違うことと、共に生きていくことは関係ない。そのことは、シン自身がよく分かっている。

聖が展開したバリアーは、少し待っていれば、すぐに目に見えるほどの効果を発揮しだした。

「お？ いいんじゃない？」

甲板の上で、景色がゆっくりと流れていく。

浮遊する火星の姿が、ほんの少しずつ、後ろへと流れていく。

そして段々と、その速度が速くなっていったのだ。

最初は、少し早歩きになったぐらいの速度だったが、バリアーが太陽からのエネルギーを受け、それを受け流すことによって、加速度を得ていく。

それにより、確実に速度は上昇していった。

最終的には、バリアーを展開する以前の2倍以上の速度に到達していた。

音速などは優に超えている。

本来ならば、Gで気絶してもおかしくはないほどにだ。

後で気づいたことだが、バリアーとは関係なしに、聖輦船の全体を覆っていた薄い結界は、空気を内側に封じ込める意外にも、内部に

軽い重力を発生させ、しかも、衝撃を吸収することまでできた。だから、聖輦船においては、息ができるだけでなく、無重力になって体が浮き上がるようなこともなければ、どれほどの加速度が発生しても、Gを感じることもなかった。なんともまあ、いろいろと便利なものだ。惑星間航行のためには、船体そのものを改良するのではなく、その周囲に特殊な力場を発生させるほうが効率的なのだろうか？と、シンは柄にもないことを考えてしまった。

爆発的な加速を得た聖輦船だが、広大で、かつほとんど物のない宇宙空間で、しかもGを感じないとあれば、いまいち速度を実感することはできなかった。

時折デブリの一つがすさまじい勢いで船体をかすめ、「うひょー！？」という歓声が上がったりするが、基本的には、それほど興奮するようなものではなかった。

まあ、ただの宙間航行で何を興奮するんだという話だし、これで当然なのだろうが・・・

しかし、バリアーを展開して速度を上げたおかげで、地球圏までの道程は飛躍的に短くなったはずだ。

これなら、一月前後あれば、ラグランジュ・ポイントのどこかには到達できそうだ。

藍と聖さまさま、だろう。

さて、そんな聖だが、彼女としても、この加速方法には、感心した様子だった。

そして同時に、どこか不思議そうな様子も見せていた。

最高速度到達から数時間後、そのまま甲板にいら続けた聖は、暇になって彼女のところに寄ってきたシンに、こう言った。

太陽の光は、自分たちが確実にそこに近付いているという実感を与えてはくれない。

「聖輦船をここまで加速させたのは初めてです．．．中々面白いものね」

「そうか」

「でも、これほどの速度を出しておきながら、こうまで変わり映えのしない景色も、初めて見た」

もし地上で今の速度を発揮すれば、オーブなど数分あれば横断できる。

流れていく景色を正確に視界に入れることなどできないだろう。

もし加速中に何かとぶつかれば、お互い粉々に砕け散って一巻の終わりだ。

が、それはすべて地球の上での話であり、宇宙空間においては、ほとんど実感のない話であった。

それほど広大で無辺なのが、宇宙なのだ。

その事實は、あくまで幻想郷、そして魔界での航行しか経験していない聖としては、不思議でたまらないし、戸惑いもしたのだろう。

シンは、呟くような彼女の声に、静かに応えた。

「宇宙の広さつてのは、半端じゃないんだ。終着点がどこにいるかなんて、人類が滅亡したって分かりはしない。そもそも、今もまだとんでもない広さで広がってるんだから、終わりなんてありはしないんだ。不思議な話だろ？どれだけ進んでも、終わりのない世界、星と星の間を行き来するだけでも、世代が変わるほどの時がいる。しかも、星の向こう側には、銀河が、無数の星の連なりが待っている．．．それが宇宙なんだ」

「そついの、分かるけど．．．」

「すごいだろ？俺達人類だって、結局のところ、宇宙のことなんて何も知らないんだ。分かる範囲のことだけ知って、後のことを知るのを諦めてる。宇宙を探求し続けたって、終わりが無いのを、人類

は知ってるんだ。自分たちが、この広大な宇宙において、どれだけちっぽけなのかもね．．．」

そこまで語ったところで、シンは、何かを思いついたように、口をつぐんだ。

聖が、「どうしたの？」と聞いてくる。

しばらく思いつめたように固まっていたシンは、少し経ってからその声に応えた。

「自分たちが、この宇宙に対してあまりにちっぽけなことを知っていて、その上で、それ以上にちっぽけなもののためにお互い争っている．．．それって、どうしてなんだろう、ってね」

「．．．不思議なことではあるわね」

「でもさ、もしかしたら、ちっぽけだからこそ、人類は争うのかもしれない。自分たちの力では、この宇宙の果てを知ることとはできないし、そこに到達することもできないってのが分かったら、後はもう、内側に眼を向けるしかない。今ある生活環境の保守と、文化の形成．．．そのことだけで、自分たちの種を栄えさせるしかないんだ．．．でも、それにだって限界はある。地球だって惑星なら、寿命もある。技術力だって、無限に高まるものじゃない．．．今人類は、そのことを痛感してるのかもしれない」

「宇宙だけじゃなく．．．自分達自身にすら、何も通用しない？」

「ただ、無益に生きている．．．だけ。それが分かってきたから、人類はヒステリックになって、お互いを滅ぼすようなことだってするのかもしれない．．．そういうことを平気するのが、人類なのかも．．．」

そう語るシンに、聖が、少し強い口調で言い返してきた。

「シン。かくいうあなたは何者なの」

「．．．人類だ。人間だよ」

「そうでしょう？あなたのやっていることは、己の種を、そして自分自身を卑下にすることだわ。そういうことは、言っちゃいけない」「ごめん．．．．．でも、大丈夫さ。分かってるよ．．．俺は、

諦めてるからこういつてるんじゃない．．．人類には、改める力がある．．．そのことを知ってる。それに、向上心が強いっていうこともな」

「向上心？」

「なんだかんだ言って人類は、少しずつだけ状況を改善させてきたんだ。戦争をなくすための努力、核兵器の削減、環境汚染を食い止めるための保全活動。宇宙開拓だってそうだ．．．人類は、その場その場で起こった問題に対して、常にうまい具合にやり過ごして行きながら、今まで永らえてきた．．．だったらさ、自分達自身に対する絶望にだって、打ち勝つことだってできるはずだ。俺は、そのことを信じてる」

「自分達をよりよく高めることが、人類の長所なのね。素晴らしいわ」

「そうさ。だから、その素晴らしいものを、より高めていけば、人類はきつと、もっと永く繁栄していける．．．それに、きつと、宇宙の広大さにだって、負けはしないはずだ．．．太陽系の果てぐらいいにはいけるはずだし、銀河の向こう側にだっていける．．．人類には、まだまだ未来は広がっているんだ。その未来を、俺達の手で掴むんだ」

「そうね。私も応援するわ」

「そういつてくれると、ホントに嬉しいよ」

幻想郷という、まったく別の世界での生活は、本来自分達がいる世界のことも、強く意識させることとなったようだ。

人類の営みについてだけでなく、その外側、宇宙そのものを、別の世界で得た価値観が、今ある価値観を新たに作り直す。

そのことは、大いに在り得ることだ。今がそうなのだから。

幻想郷で感じたこと、得たもの。それは、これからの人類の問題に対して、間違いなく通用する。

後は、それを実践するだけなのだ。今、そのことを強く実感した。勉強は、もう終わったのではないだろうか。

今は、聖輦船の者達と共に、幻想郷に帰るべきだが、それを果たすことができたならば、その時こそ改めて、この世界に戻ってこよう。人の優しさ、人類の良識、そして、果てしない宇宙への意識を、皆に伝えるために。

この事態が収拾すれば、今度は、博麗神社へと帰る。シンは、そう心に決めた。

世界を圧力によって管理しようとしたギルバート・デュランダルは倒れた。

だが同時にそれは、人類が、平和のための方法を、また一から模索していかなければならないということも意味していた。

本当の試練は、今からこそ始まる。

デュランダルを倒し、戦争を終結させたクライン派は、プラントとも、連合政府とも違う新政府を設立し、それは、新たなる社会の中心となるべく機能していた。

すなわち、自分達の力で、世界をよりよく導いていかなければならない、ということだ。

ラクス・クラインを、旧日本における天皇と同じ立場に据えて、実際に政治的な問題を解決するのが、議会の役目だった。

だがそれは、簡単に言えることではなかった。

戦争終結の本当の当事者といっても過言ではないキラ・ヤマトもまた、クライン派議会の幹部となり、平和のための施策を考えることだけに終始する生活を送っていた。

議会は基本的に、クライン派の者達でのみ構成されており、それゆえ、当然ながら、その人数は限られてくる。

キラに、旧ザフト軍にて砂漠の虎と恐れられたアンドリュー・バルトフェルト、アーケエンジェル艦長のマリュー・ラミアスに、ムウ・フラガ、それと後数人である。

ほとんど顔見知り同士のその議会は、議会というよりかはただの顔合わせのような、少し粗末なものであったが、それも仕方がないだろう。

正式な方針が決まるまでの間、臨時政府として機能し、今は独自に終戦後の処理をするプラント地球両政府へ提言するだけの役割しかないのだから。

だが、それでも、会議の議題は多い。

「・・・次は、ザフト、地球連合両軍の軍備縮小についてですね」
プラント派ではラクスに次いで最高の立場にあるキラだが、年齢的には、議会においては一番の下っ端であり、議題の報告とかの下っ端な役割を任されていた。

だが、こういう役目こそ、得てして一番偉い人間がするときもある。

議会としては、プラント、地球間を、いずれは統一しないといけないと考えていたし、それは同時に、軍の統合も意味していた。

そのためには、両軍の縮小は避けられないことであるし、それ以上に、平和な世界に軍事力は不要だというのが、クライン派の考えなのである。

「軍縮はまず間違いなく行うんだろ？」

と、ムウが言うように、軍縮自体はすでに議会内で決定している事項であり、いずれ必ず実行に移されるものであった。

すでにこのことは、ザフトにも連合軍にも同意は得ているが、そこには問題がある。

「しかし。そうになると、多数の失業者を生むことになるわ。そういう者達へのケアも考えないと．．．」

マリューの言うことである。

軍縮を行えば、それに伴って兵士の数は減る。そうなれば、軍人という仕事を失い、尋常ではない数の失業者が出てくる。

千か、あるいは万単位の間人が路頭に迷うことになるのだ。

そういう者達に対する対処が、絶対に必要だった。

バルトフェルトが言う。

「ダコスタ君の案だが、D・S・S・Dを拡張し、そこに就職させればいいのではないか、という話だ。しかしそれじゃ、研究開発部門の連中しか受け入れられんだろっし、下手すれば、研究活動に支障が生じる恐れもある。研究部門を増やすとか、あるいはまったく別の組織を設立することもできるが、結局は、他の組織との関係を維持していく必要がある．．．天下りを前提に考えねばならんというのが嫌な話だが、妥協案ではあるかもしれん。しかし、決定的な解決策にはならんな」

「叩き上げの軍人が、学者連中と一緒に働けるわけがないよな．．．」とムウ。

「新政府の議員に任命するという考えもあるけど．．．」

しかしマリューのその案は、本当に最終的な解決策であった。

クライン派がゆくゆくは設立しようという、プラント、地球を併合した正式な中央政府は、少数の議員による、厳密な審議が行われる場所である必要があった。

枝分かれして、さらにいくつかの議会を設けるとするのは考えている。

だが、それにしたって、

「だけど、そんなことすると、数千人の議員が話し合いをする馬鹿デカイ議会ができちまう」という、ムウの言葉通りだった」という話だ。

軍人に天下り議員をさせるのは避けたいし、たとえ百歩譲ってそれをさせたところで、全ての軍人が職にありつけるということではない。

全ての兵士に対して、退職後の保障をできなければ、軍縮など無理だし、下手すればクーデターが起こるだろう。

世界を改革するというのは、戦争で勝つことよりも難しい。

というか、逆説的に言えば、戦争で勝つということは、改革よりもはるかに簡単なのである。

キラはともかくとして、バルトフェルトなどの完全な軍人であった者達としては、なるほど、世界が問題の解決のために戦争ばかりしていたのも納得できる、と思えた。

戦争は、悩む必要がない。

キラが言う。

「ならやつぱり。復興支援と自然保護のための組織をつくるべきじゃないでしょうか」

バルトフェルトが応える。

「で、そこに回すか．．．だが、そういうことはな、すでにNGOやら、連合の政府直轄機構やらがやっていることだ．．．今さら新しく組織をつくっても、結局のところ、そういう連中の仕事がなくなくなるだけだ．．．活動をひとくりにまとめて、一斉に直轄するための組織としてはアリなんだろうが、失業軍人のよりどころとしてはあまりいい案ではないな．．．多少はマシではあるが．．．」

「一番いいのは、軍縮しないことなんだが、それは論外だよな．．．とムウ。

「海岸掃除をさせるわけにもいかんだよなあ」とバルトフェルト。

「．．．．．」

会議は踊る、されど進まず、ではないが、結局、今回の会議でも大

きな進展はなかった。

ある程度の法案は可決されるが、その多くは、その場しのぎの妥協案とは思えなかった。

それでも、少しずつ考えはまとまっているから文句は言えないが、明らかに、平和を作るという使命に対して、間延びし過ぎていると思わずにはいられなかった。

このまま遅々とした会議を続けるわけにもいかない。

せめて、とりあえず中央議会の設立だけでも果たしておこうか？という考えも出てきたところで、会議は終了した。

だが今は、地球もプラントも、終戦後の復興作業に躍起になっており、政治的な話し合いなどはできそうになかった。

だからこそそのクライン派の臨時政府なのである。

正式に中央政府を設え、両軍の統一化を進めるのは、戦争の傷が癒え、ある程度世界が落ち着いてからでないといけないだろう。

それまでの間は、考えるだけの厳しい時間が続く。

しかも、そんな中で、だ。

議会が解散し、各々、戻るべき場所に戻る中で、キラは、ムウにこう切り出された。

「ようキラ。まだあいつのことが気になってるのか？」

シンのことである。

オーブでも結局何の情報も得られなかったディアツカは、最終的に再びプラントへと帰還し、クライン派の者達にまで話を聞いて回った。

直接のかかわりはあまりないが、何か知っているかもしれないというのがディアツカの考えだったが、生憎だった。

キラとしても、シンの突然の失踪には驚きを隠すことができなかった。

彼が、キラ達の平和のための活動に協力してくれる意思を示してくれた、その矢先のことだったのだから。

心配にならないわけではない。

そして、心配なのはキラだけではない。

そういう気持ちなら、むしろムウの方が強いと言えた。

シンの恋人であるステラを再び戦場に連れ出し、死なせてしまったのは、ほとんどが彼の責任である。

シンに対しての罪悪感をもっとも感じているのが、キラでもアスランでもなく、ムウなのかもしれないのだ。

今回のシンの失踪についても、もしかしたら、自分に非があるのかもしれないとさえ感じていた。

だが、罪滅ぼしを望んでもそれはできないし、シンを探しに行こうとしても、どこにいるのか見当もつかないのだから意味はない。

それに、探しに行くような暇もない。

「心配だが．．．今のところは、待つことしかできないんだよなあ」と呟くムウに、キラが、「そうですね」と返す。

シンのことも大事だが、それ以上に、今は平和のためにできることをしなければならぬ。

それが、今どこかにいるシンの望みでもあるのだから。

今のキラ達には、せめて、シンが無事でいることを心で願うしかなかった。

だからこそキラは、心の中だけで、こう呟いた。

—— シン、今僕たちは、平和のために越えなければいけない大きな壁の前に立っているみたいだ．．．君の力もいつか必ず必要になってくる．．．君が、何か大きなことを僕達に気づかせてくれることを、待っているんだ．．．もしかして、君は今、その何かを探しているのか．．．もしそうなら、いずれ必ず戻ってきてくれ．．．僕たちは、それを待っている——

結局、ディアツカがシンの情報を得るために各地を回るのに、ほとんど一月近い時間がかかった。

しかも、本当に何一つ情報を得ることができなかったわけだが、そのことを恥じるようなディアツカではない。

やることをやってイザークの下へと帰還したディアツカは、「すまねえ、何にも分からなかった」と、一言言うだけだった。

イザークとしても、正直、大きく期待はしていなかったが、同時に、ここまでやって、まったく情報を得られないというのを考えると、シンの失踪は、本当にただ事ではない事態であると思えた。

実際に何か影響が出るようなものではないし、最早シンのことはどうにもならない。

無視するより他に手はなさそうだった。

だが、さすがに、何か思いもよらない事態に発展していきそうだという、一抹の不安というものを感じたが、そのために、今日の前にある用事が捗らないのでは話にならない。

今は戦後の復興作業でも忙しいし、それが終われば、待っているのは軍縮だ。

休む暇はありそうにない。

それに、メサイアへの調査も、すぐそこにまで迫っているのだ。

「苦勞をかけたな．．．何も分からんのでは、もう手をうつこともあるまい。帰ってきてすぐで悪いが、メサイアへの調査のために艦を出す、お前も準備してくれ．．．整い次第、明日にでも出発する」

「やれやれ、ホント、休む暇もないのね．．．しかもさ、ユニウスセブンの二の舞のための調査って感じで、気も進まないんだよなあ」

その言葉には、ディアツカの飄々とした態度を渋々黙認していた秘書官も、さすがに眉に皺を寄せた。

だが、同時に、ディアツカの言うとおりでもあった。

ザフトにとってユニウスセブンは簡単に語れる場所ではないが、そのザフト軍であるイザークが、少し声をひそめて応える。

「平和のためには、何らかの象徴を立てて、人心を惹きつける必要があるだろう．．．アイコンさえあれば、それでいいんだ。それがラクス・クラインであれ、戦争の象徴である要塞の跡地であれな」

「まいっちまうよなあ」

「まいってもやらなければならん仕事なんだ、イザーク隊に入っている以上、俺の前で文句は言うな、いくらお前でも叱咤の一つでも与えるぞ」

「分かってるよ」

やらなければならぬ仕事は果たす。それが軍人の務めだ。

翌日、イザーク隊は、艦隊ではなく、イザーク隊そのものが乗艦する旗艦、ナスカ級『ボルテール』のみで出航し、調査のため、メサイア跡へと航行を開始した。

その様子は、幻想郷に住まう彼の妖怪にも知られていた。

妖夢が、聖輦船の消滅という不可解な事態に対し紫に申し立ててから、さらにいくらかの日数が経過した。

以後、大きな異変は発生していないようだったが、聖輦船の消滅に対しては、解決の気配もない以上、噂を通り越して、明確な事件にさえなり始めていた。

さすがに妖夢も、これ以上待っているほどの忍耐力はなかった。もう一度、紫とクルーゼに申し立ててみようかと考え、この前と全く同じように、タイミングを見計らって待っていた。

今回は、何故か主人の幽々子が一緒についてきた。

偶然居合わせて、「面白そうね」ということで、ついてきたのだ。いつもはこんなことはないのだが・・・こういう時の幽々子の行動力には裏付けがあるものだ。

もしかしたら、今回は何かあるのかもしれない。

そう思いつつ、二人のいる部屋の襖の前で絶好の機会を待った妖夢のその予感は的中した。

「さあ、そろそろ時間ね」

という紫の声に、妖夢は、今こそと考え、部屋の中に突入した。

妖夢の視界に、相変わらずの様子で座敷に座っている二人の姿が見えた。

しかも何故か、普段は白玉楼に来ることなどないはずの霊夢の姿が見受けられた。

そのことにはさすがに戸惑うが、同時に、やはり今こそが、知るべきことを知るための絶好のタイミングなのだと妖夢に思わせた。

「うわっ！？何あんだ？」と驚く霊夢には眼もくれず、妖夢が紫に對して言う。

「無礼をお許し願います紫様。時間とは一体何でしょう」

「あら、ずっと待ってたの？こすずるいわね。しかも幽々子も一緒」

「どうも」

「なんでもないさ」

という相変わらずなクルーゼの声に對して、今回ばかりは妖夢は食い下がらなかった。

「もうそういう言葉は聞きません。今回ばかりは、あなた方がどう考えているのか、教えていただきます。そういう決意をしていたのです。もう引き下がりませんよ」

いつもと違う固さをもった妖夢の口調だが、そのことには、紫もクルーゼも別段驚くことはなかった。

それもそのはずだ、双方とも、妖夢がこう言ってくるであろうことは予想がついていたのだから。

紫が静かに応える。

「そうねえ、それなら、見せてあげましょう。私達が、何をしようとしているのか」

その声にクルーゼが続く。

「そして、これから何が起こるのかをな」

「ついてらっしゃい」

そう言いながら紫は、座敷から立ち上がり、そのすぐそばに、一人が容易にくぐれそうな大きさのスキマを出現させた。

別の空間との境界であるそこに入れば、その先にある空間にて、全ての解答が分かるのだ。

なるほど、主人幽々子もこうなることは承知だったから、今回は一緒についてきたのか、彼女としても興味があるのだ。

紫達は何を考えているのか・・・というよりは、紫達の考えによって、何が起こるのかを。

示し合わせたように、そそくさとスキマに入っていく紫達。

幽々子もまた、まるでこの先に何があるのかを知っているかのように、何の気負いもなくスキマに入っていく。

「うう」。気持ち悪、やだな」と渋りながらも、霊夢もスキマへと入る。

そしてその後を追い、妖夢も、自分の求める答えを知るべく、スキマへと入った。

クルーゼが何を考え、そして、この幻想郷で成すべきことを成すために、何をしているのか・・・

妖夢は、どうしてもそのことを知りたかった。

クルーゼという人間だった存在を、尊敬するからこそである。

混沌そのものを表現したような『何か』に足を踏み入れたと思ったその瞬間には、妖夢の身体は、まったく別のところに転移していた。

そう．．．そこは．．．．．

聖輦船が加速を開始してから一月経つか経たないか。

そういう時期になってくると、火星圏では豆電球ほどだった太陽の光も、さすがに強さを増し、その広大なエネルギーの奔流を眼と肌で感じさせた。

それだけではない。

ようやく、宇宙に浮かぶちっばけな青い星、そして、一見すればただの丸いデブリのようだが、飛躍的に巨大な月の姿を直視できるほどになっていた。

そう、ついに地球圏への到達を果たしたのである。

いまだ、地球も月も、遙か遠くであり、小さな点ほどの大きさにしか見えなかったが、それでも、そのちっばけに見える星が、シン達に、長旅の終わりを感じさせた。

そして、ようやく本格的に行動に移れるという歓喜を呼び起こした点のようでも、確実に見えている地球の姿だけではない。

シンの視界に移ったあるものが、ここが、やはり確実のコズミック・イラであることを確証づけた。

忘れもしない、戦役の名を冠する最終決戦の地、メサイアだ。

それが、聖輦船からやや離れたところに、地球よりかは圧倒的にはつきりと見える大きさを浮かんでいたのである。

運よく、この要塞が浮かんでいる宙域に居あわせたようだ。

妖怪達としては、「変わったデブリねー」ぐらいの感覚しかないメ

サイア要塞の姿だが、シンにとっては、ありとあらゆる意味で重要な意味を持つ存在だった。

一番重きを言うならば、この世界がコスミック・イラであることの証明となることである。

それ以外にも、航路図のない聖輦船の航行において、ラグランジュポイントの位置を判断させる目印にもなった。

うまい具合にメサイアの近くにまでこれたのは、幸運だろう。

そういう意識だけではない。

何か奇妙な衝動に駆られたシンは、共に地球圏への到達を喜んでいた妖怪達の中、聖に対し、こう言った。

「ちよつと、あの石ころに寄ってみてくれ」

その言葉は、ほとんど気まぐれで言った言葉である。

だとすれば、シンがこう言い、それに応じた聖が、聖輦船をメサイアへと寄せるように操作することも、全ては彼女の計算の内である、ということになるのである。

八雲 紫と、ラウル・クルーゼの画策は、今ここに始動の時を見た。

今シンは、紫の掌におかれた舞台の上へとおびき寄せられたのである。

「役者は揃った。さあ、シヨウタイムよ」

シン達は気付かない。

今ちよつと、聖輦船へと同じく、メサイアへと近づいている3つの艦影の姿を……

PHASE - 19 『争いを拒む者』

今が回答の時、そして、解答の時だ。
彼が何を知り、何を為したのか。
世界が、何を応えたのか。

「こ、これは・・・？」

妖夢は、眼の前に見えた光景を理解しることができず、息を呑んでいるしかなかった。

自分の足元には、いや、両側面と頭上には、まるで要塞のような無骨な鉄の壁が張り巡らされており、その合間からは、奇妙な形の石が、夜空の中で浮かんでいた。

紛れもなく、浮いていたのである。

船だつて浮き上がる幻想郷の世の中なのだから、石ころが夜空に浮かんでいたって不思議なことではない。

が、それはともかくとして不思議なのが、夜空を視界の正面に映す妖夢の身体に、上下の間隔がほとんどないことである。

自分が今立っているのか寝ているのかも分からない。

鉄の壁（床？）の上に足を付いているのだから、立ってはいるのだろつが、そうなると、上を向いているのか、下を向いているのか分からなくなる。

幻想郷にいれば、いろいろなことを感じることはあるが、こんな気分は初めてだった。

宙に浮く、という感覚でもない。

宙を浮いていたって、重力というものを感じることはある。

だが、今はそれすらもまったく感じないのだ。

紫についていき、真実を見極めるべくこの奇妙な空間に足を踏み入れた妖夢だったが、待っていたのは結局、より一層大きくなった混乱だけであった。

ただ一つ言えるのは、ここが間違いなく、自身が求めた解答のある地だということだけだ。

「ここは一体、どこなんです．．．？」

「そうそう。どこよここ」

最早考えることを放棄し、もれなく紫に説明してもらおうと、彼女に対して問うた妖夢（とついでに霊夢）の声に、紫は応える。

彼女としても、ここは、詳しく説明しておこうと思ったのだろう。

「ここは、ザフト軍宇宙艦ナス力級の甲板上、ちょうど、リニアカタパルトのすぐ近くよ」

「．．．？」

「ここが、シンの言っていたコスミック・イラの宇宙」

「ここが．．．？じゃあこの鉄の床は、宇宙艦艇の装甲だと．．．そんなところに私達が立っていていいんですか？それこそ、本当にこの艦の乗組員に見つかりますよ」

「問題はない。存在の境界を操ることによって、今私達はこの世界においては、ほとんどいない扱いになっている．．．今この場で私達が何をしようと、どうにもならないわ。なんせここにいないものね」

「．．．だとして、なんであなたはこんなところに．．．ここで、全ての応えが分かるというのですか？」

「そうよ．．．あれ、見なさい」

「・・・」

妖夢の問いに曖昧に応える紫が指差した方向に、妖夢が眼を向ける。丁度、石ころの遙か向こう。ここから、ほとんど対角線上に位置する場所だ。

が、何も見えない。

「ふっ・・・」

うんざりした様子になりながら、紫が、指差したその方向に向かって、両手の親指と人差し指を繋げて四角い形を作る。

そしてその四角い面の部分だけが、先ほど指差した遙か先の空間の映像を映し出した。

境界を操る程度の能力のちょっとした応用、スキマの望遠鏡だ。

改めて、紫の指の間に映った映像を見る妖夢、と霊夢。

その映像に、妖夢は、心中にあつた疑問が、すべてそのまま驚愕に変貌するのを感じた。

紫の映す映像の中にいたのは、紛れもない、聖輦船であつた。

距離は判断できないが、確実に、件の奇妙な石ころの方へ、すなわちこちらの方へと向かってきていた。

今自分達が立っているのが、コズミック・イラの艦艇の上であるとして、この艦の中には、間違いなく人がいる。

すなわち・・・

「とんでもない事態になつてるじゃないですか紫様！このままじゃ、聖輦船がこの艦とかち合いますよ！」

妖夢としては、一番避けるべきだった事態が、すぐ眼の前に迫っていたのだから、焦るのも仕方がない。

だがそれを、幽々子が、「まあーまあ、喚くのはやめなさい」となだめ、それにクルーゼが、

「そうだ、これでいい」と続く。

「こ、これでいいって・・・」

納得しきれない様子の妖夢に、紫が言う。

「この艦と聖輦船を接触させることこそ目的なの。しかも事態は、まだこれで終わりじゃない」

「え？」

「あらかじめ『用意』しておいた別の艦を、あと二つ、この宙域に『連れてくる』．．．そこでようやく、我々の目論見は始まるのよ」

「なっ．．．まだ何かするつもりなんですか!？」

「そうよ。ま、見てなさい」

新しい平和の祈念碑を作るため、メサイア宙域へと航行していたジュール隊の行程は、問題なく進んだ。

予定通りの時間で、無事、メサイアの直前へと接近したのである。

後は、作業用機械と、MSを併せて、要塞内部の調査を行うだけである。

作業としては、そこらの下っ端の部隊がやるようなものだが、このご時世だ。

あらゆる部隊があらゆる任務についている中においては、こういう小回りの仕事こそ、ジュール隊のようなエリート集団がこなすべき、ということでもある。

さて、さっそく作業に取り掛かろうと考えた、その矢先のことであった。

ブリッジにて、司令席に座るイザークは、レーダー監視員からの奇妙な報告を受けた。

「妙な熱源があります」

その声に、イザークではなくディアッカが応える。

「妙な．．？デブリじゃないのかー？」

ブリッジ要因でないはずなのに、何故かイザークの隣に立っているディアツカのこの返事は、かつては戦場であり、その名残で、破壊された艦艇やMSの残骸が数多く漂うこのメサイア宙域では当然のことでもあった。

形も機能もほとんど残っており、未だ通常の艦艇と同様の熱源を放つ、亡霊のようなデブリがあっても不思議ではない。

が、しかし。

「その可能性もありますが．．いえ、やはり妙です。デブリにしては速度があります。メサイアに接近中です」

その報告を聞いたイザークが呟く。

「メサイアに．．？．．．．我が艦以外に、メサイア宙域での任務に就いている部隊はない．．そうだな？」

「はい、確かに」

「熱源の位置は？」

「ほぼ正面、１１時の方角です。最大望遠で映します」

「頼む」

ブリッジ内主モニターの一部、その奇妙な熱源が存在するとされる位置にカーソルが出現し、その内部の映像が、拡大表示された。

最大望遠とはいえ、第二世代艦隊のために改良された旗艦ボルテールの場合なら、解像度は高い。

拡大された映像の中に映る熱源の正体は、その陰影に至るまではつきりと確かめることができた。

が、そのはずなのに、イザークを始めとするブリッジ要因のほぼ全員が、それが一体何なのか、判然とすることができなかった。

「何だこれは．．？」とイザークが呟く。

「大航海時代の船のように見えますね。コロンブスとかが出てくる時代の」

「確かに見えるが．．」とディアツカ。

「なんでそんな遺跡みたいなものが望遠映像に映っている．．」

イザークの言うことももつともだった。

「どっかの博物館が、この辺に捨てたのか？不法投棄だぜ、おい」
ディアツカのこの言葉も、まあ、もつともな話だった。

望遠映像に映る船は、今ではもう、かなり大きな博物館でしかお眼にかかれないような、それこそ、ナスカ級の名の元である文明と、ほとんど大差ない過去の遺産であった。

そんなものが宇宙空間に漂っているのだから、どこかの博物館が捨てたとして考えられない。

が、そうだとして、何よりも妙なことがある。

レーダー監視員の言葉の通りだ。

「その割には、推進力を持って動いているように見えます。それに、船体をうつすら覆っている膜のようなものは一体・・・？」

それこそ、あの船を、ただの宇宙のゴミと思わせない理由だった。

「あれは一体・・・メサイアの調査の前に、あれが何なのかをはっきりさせておくべきか・・・」

と、イザークは考えた。

が、事態は、そんな考えに屈託させる間もなく、紫とクルーゼの設えた舞台の上で目まぐるしく推移していく。

「待つてください。新しい熱源反応・・・うつ？何だこれはーっ！
？大きすぎます！」

レーダー監視員が、叫び声をあげる。

確かな訓練と実績を積み重ね、確実かつ冷静に役目を果たすのが軍人であり、その最たる存在がジュール隊である。

その一員が、ガラにもなくうるたえるような叫びをあげるその理由は、イザーク達としても聞く必要はなかった。

眼前にて、その理由は如実に現れていたのだから。

メサイアの眼の前に出現する、戦艦数隻分の巨大な裂け目である。空間が直接切り裂かれたような裂け目が、イザーク達の眼前に現れ

ただ。

しかも二つが、お互いに面と向かうような形で出現している。

そしてその向こう側から、ビーム砲（MSのビームライフルではなく、収束照射される艦砲だ）が発射されるような音、重金屬粒子が収束し唸りをあげる独特の音、液体がゆっくりと混ざり合うようなゴボゴボという音が不気味に響いている。

「なっ！」

「うわっ！」

ブリッジ内で、いくつかの声が上がる。

殊更ディアツカの叫びは、「な、なんだありやあゝっ!?」と、滑稽なものだった。

「・・・何が・・・どういう事態が起ころうとしている・・・っ」
さすがのイザークも、冷静な判断力を失い、うろたえることしかできなかった。

そんな中、対空監視員の、「何か出てきます！」という報告がある。その言葉通り、突如出現した裂け目の中から、何かがこの宙域に出てこうとしていた。

段々と、穴の中から抜け出てくるように、その全体像が見えてくる。間違いない。

イザークの眼には、というか、ブリッジ内のほぼ全員の眼には、一隻のナス力級と、もう一隻、連合軍の護衛艦ドレイク級の姿が見えた。

ますます訳が分からなくなる状況に、誰もが、呆然と眼の前で発生した光景を眺めていることしかできなかったが、そんな中で唯一イザークは、この異様な事態には、何か意味があるのだと考えていた。

メサイアへと向かう聖輦船においても、この事態に気付くものがないた。

シンである。

メサイアの周辺で何かが起こっていることを察したシンは、すぐに、今は聖輦船をメサイアに接近させてはいけな思考えた。

そして、聖に対してこう言う。

「すまない聖。すぐに引き返してくれ、今は、あそこにいつちやいけないような気がする」

「え？あなたが近づけて言ったのにー」

「いいから、船を止めてくれ」

「分かったわ、ちよつと待つてね」

と、聖が応えるが、それから1分もしない後だった。

今しがた分かったと応えたはずの聖が、戸惑った様子で言う。

「おかしいわ、止まらない」

「止まらないって．．ど、どういうことだ」

「法力を推進剤に使うのもやめたし、バリアーも消した。ここが無重力空間で、慣性が働くつていのも分かつてゐるから、逆噴射もかけてる．．なのに、全然船が減速しないのよ」

「そんなことつてあるかよ！もう少し逆噴射を強くできないか．．つ？」

「してるけど．．どうしても減速しないわ．．もしかしたら、根本的な問題として、速度を落とすことができなくなつてゐるのかも．．」

「ふ、ふざけてゐるのか！？」

「いえ、そんなことは．．」

シンとしては、聖のこの言葉は、とても信じられるものではなかったが、しかし、聖が嘘や冗談でこんなことを言うとも限らない。

彼女の言うこと信じるなら、今聖輦船は、いかなる力も受け付けず、速度が変化しなくなつてゐるのだ。

「．．．藍！」

何故こんなことになっているのか、どうすればいいのか。

あまりに突然の事態では、そんなことは一切考えられない。

こんな不可解な状況に対して、頭脳になり得る者は、一人しかない。

シンとしては、その藍を大声で呼びだすことしかできなかった。

「聞いてた」

と返事を寄越しつつ、藍がシンに歩み寄る。

ついでに他の連中もついてきたが、そういうのはどうでもいい。

シンは、有無を言わず藍に聞いた。

「藍。どういふことだと思う」

藍の方でも、いまいち状況が掴みきれない様子だが、それでも、冷静にこう応えた。

「これは聖輦船や聖の問題じゃないな．．．もつと別のところから、誰かがこちらに影響を及ぼしているのかもしれない」

「どこかの誰かが、いたずらで、俺たちをメサイアに近づけているのか．．．一体誰が．．．．．まさか？」

シンの脳裏で、ある人物の姿が映る。

思えば、彼女こそが自分を幻想郷へと連れてきた張本人であるはずなのだ。

ならば、こういう事態を呼びこむ可能性だって、大いにあり得た。

藍の方も、「かもしれない」と応える。

「冗談じゃないぞ．．．！あんたの主人じゃないか．．．ホントにそうなのかつ？」

「そうだとは言い切れないけど、多分そうだと推測できる」

「分からないのかよ、あんたでも！」

「そりゃ、私だって完璧じゃない．．．いろいろと分からないことはある。特に、あの方の考えてることは、二割も理解できない」

「一体何だって言うんだ．．．聖！やつぱり止められないのか!？」
もう一度聖に聞くが、応えは生憎なものだった。

「やっぱりよ、どうしても止まらないわ」

「く．．．っ!？」

このままでは、メサイアで起こっている『何か』に直面してしまう。聖輦船が居てはいけない世界での出来事に、進んで巻き込まれにく体になってしまう。

いや、もう遅い、このまま、ではない。既にそうなってしまった。

メサイアの無骨な姿は、すでに眼前にまで迫り、しかもその巨体の周囲に、小さく豆粒のように、いくつかの宇宙艇が浮かんでいるのが見えた。

目視のシンにそれが見えるということは、向こうにもまた、聖輦船が見えるということになる。

シンは、自分達がすでに、状況の一部になってしまったのを感じた。

メサイアへと接近してくる聖輦船の姿は、イザーク達の眼にも見えているはずだった。

そして、新たにこの宙域に出現した二隻の宇宙艦のクルー達にも、である。

だが、多くの者は、突如眼の前に発生した事態に眼を向けることを余儀なくされ、未だ豆粒のようにしか見えない聖輦船の存在になど、気を配る余裕はなかった。

ドレイク級ブリッジでの混乱は一入ひっつあであった。

数分前まで当艦は、とある哨戒任務のため、メサイア宙域などは遙か向こうにおく別のラグランジュポイントを航行していた。

が、そんな中、突如艦の前方に、ブラックホールと形容できそうな巨大な空間の歪みが発生したのである。

ブラックホールというか、裂け目とか割れ目のようなものだ。

当然な話だが、艦の航路にブラックホールなど観測されていないし、そもそも、ラグランジュポイントのどこであっても、そんなものは観測されていない。

見えたときには、もう遅かった。

退避する間もなく、ドレイク級の船体は、眼の前で発生した歪みに吸い込まれていったのである。

そして気がついたら、このメサイア宙域にいた。

艦前方に浮くナスカ級もまた、同じような経緯でこの宙域に現れたのだが、そんなことを、ドレイク級のクルー達が知る由もない。

ブリッジ内は、混乱に包まれていたが、そんな中においても、この状況の真意を探ろうとすることに関しては皆一様に冷静ではあった。「ここは．．．宇宙要塞メサイアか．．．間違いないな！」

という艦長の声に、航海士が、「間違いありません。座標もメサイア宙域のものです」と返事する。

レーダー監視員の、「前方にナスカ級一隻、後方にも同じくナスカ級一隻」という声が続く。

「確か．．．メサイアにてザフトのジュール隊が調査任務に当たっているという話は聞いたが．．．では、もう一隻はいつたい．．．？」

「後方のナスカ級の識別が、そのジュール隊の旗艦のようです」

すでに、軍備統一化は一部分では推進されており、両軍の軍備情報の一元化なども進んでいた。

だからこそ、ジュール隊の存在も、すぐに判明することができる。

だが、そのことが、この事態の解決策になる訳がなかった。

とにかく、眼の前に謎のナスカ級、後方にジュール隊がいるというのは確かなのだ。

だとすれば、取るべき対処は一つだった。

「両艦にコンタクトを取れ。広域周波数帯で呼びかける！」

「了解．．．．．いえ、向こうから呼びだし^{セント}しています」

「サブモニターに回せ、スピーカーもだ」

「了解、回します」

主モニターの下に取り付けられたいくつかの小型サブモニター。その内の一つに、ジュール隊隊長であるイザークの顔が、もう一方に、前方のナスカ級の艦長と思しき顔が映る。

次いで、イザークが、始めの一言を口にした。

（これは、広域周波数を用いた、不特定多数用の通信である。両艦とも、聞こえているな？）

「聞こえている」

（同じくです）

ドレイク級、ナスカ級の両艦長が応じる。

イザークが次いで言う。

（これはどういう状況か、答えてくれたし）

「それはこちらが聞きたい。どうなっている」連合艦長が応える。

（同じく、こちらでは何も判断できません）ザフト艦長もまたこう応える。

（こちらには、両艦とも、何か空間の裂け目のようなものから出現したように見えたが、そちらではどうなのだ）というイザークの問いには、

「こちらは、任務中に、そちらのいう裂け目のようなものと同じものであるう裂け目に吸い込まれ、気がつけばこの宙域にいた。先に断っておくが、こちらはこの事態に関して何も知らない」

（こちらとしても、まったく同じです。ジュール隊では何か分かっていますか）と、両艦長が応える。

（いや。こちらでも、何も分からん．．．）

イザークのその言葉は、結局、状況はより一層混迷を深めるだけ、

というのを暗に示唆しているようだった。

しかも、そんな中においても事態は、その推移を止めてはくれないのである。

いよいよ混乱の極地に到ろうとしていたドレイク艦のブリッジは、突如発生した激震に襲われた。

艦尾部分から、爆発音のような重低音が発生し、臓腑と脳髓を揺さぶるような震動が発生した。

それは、まさしく爆発による轟音であり震動だったのだが、この混乱の最中においては、それを判断するのには、多少の遅れが発生した。

一瞬の激震が過ぎ去ると、今度は、いくつかの小さな爆音と震動が、艦内を小刻みにかき回していた。

艦長が、「何事だ！」という怒鳴り声をあげ、その声に、どこからか、「左舷推進剤タンクにて爆発！規模は小さいですが、連鎖的です！このままでは推進剤に引火して・・・」という声が返事する。

「何だとっ！！？」

ドレイク級の弱点である、エンジン部推進剤タンクにて、爆発が発生したのだ。

その原因を考える間もなく艦長は、「切り離せ！！」と声を張り上げる。

その声に応じて、エンジン部に取り付けられていた推進剤タンクが、船体よりパージされる。

その数秒後、いくつかの小さな爆発が発生していたタンクが、俄然、船体一つを埋め尽くすような巨大な火球へと転じる。

ギリギリのところまで切り離しが間にあつたらしく、ドレイク級がその火球に巻き込まれることはなかった。

だが、爆発により生じた最大限の衝撃と爆音は、ドレイク級のクル

「達に、死を想起させるのには充分だった。」

その爆発の影響さえ過ぎ去ってしまえば、連鎖的な爆発も収まり、ブリッジ内に静けさが戻るはずなのだが、そういう問題ではなかった。

今の一瞬の修羅場によって、ドレイク級艦内の混乱は、ピークに達していた。

「何が起きた！何故爆発した、事故か！」

「いえ！敵の攻撃らしきものが、タンクに被弾したのです！」

「どういうことだっ！！」

「ザフトの攻撃ですっ！」

今度ばかりの紫の行動には、妖夢も、驚愕を通り越して怒りを露わにした。

本当に何を考えているのか知らないが紫は、前方で漂っていた二隻の艦艇の一方に、強力な弾幕を叩きこんだのである。

しかも、本来のスペルカードではなく、明確な破壊力を付加した、物理的な攻撃をだ。

紫の弾幕を、艦尾の部分に受けた艦艇から、いくつかの爆発が発生するのが、妖夢の眼にははっきりと見えた。

「な、なんてことをするんです紫様！お気は確かなんですか！！」
噛みつくように紫の身体を掴みかかってまくしたてる妖夢に、紫は平素な感じで応える。

「だから落ち着けと言っているでしょう。これこそ私達の計算なのです」

さらには、その声の向こう側で、幽々子のあくびするような声も聞

こえてきた。

この危機感の無さは一体何なのだ。

「冗談じゃありませんよ！あなたは、この世界で戦争でも始める気ですか！？」

「．．．だとしたら、どうする？」

「．．．．．嘘でしょう？．．．クルーゼ様．．．クルーゼ様は！これを承知だったのですか！？」

妖夢の問いに、クルーゼは、「ああ、知っていた」と静かに応える。そうした上で、ほとんど錯乱している妖夢に対して、こう語りかけた。

「いいか、妖夢よ、よく聞け。この紫の一撃により、この宙域は一触即発の緊張した状態に陥る、後はほんのわずかな火種さえあれば、世界は再び戦争の業火につつまれる．．．．．今、紫が君に問うたことをもう一度言う．．．我々がこの世界に戦争の火種を投じようとしているとして、君なら、どうする？」

「う．．．っ？」

「どうすると聞いているのだ」

「．．．何を．．．言っているんです？」

質問の意味が分からない妖夢には、こう答える以外になかった。

「ふ．．．相変わらずだな君は．．．シンならば、こうすると言うだろう。『戦争が始まるというなら、その戦争を未然に防ぐ』、と分からんか？妖夢よ」

妖夢の脳裏で、何かが合致する音がした。

「まさか．．．あなた方は．．．」

「そうだ．．．平和というのは、築き上げた社会を固く維持していくことだ。戦争というものを徹底的に拒むことだ。それが叶わぬ世界は、平和と呼ぶには価^{あたい}しない．．．私達は、シンに一つの試練を課したのだ．．．三度目の、全面戦争の危機を。それを防げという試練をな」

紫が続く。

「彼の言う、平和実現とやらのために．．．もし彼が世界が全面戦争に入るのを止められないようなら、彼が幻想郷で勉強をした意味はない．．．言うなればこれは、シンのこれまでの勉強の成果を確かめるアチーブメントテストなのよ」

「しかし．．．それって要するに．．．下手すれば、全面戦争が起こる、ってことじゃないですか、あ、あなた方の手で．．．もしそうになったら、責任はあなた方にあるんですよ!？」

妖夢のその言葉もごもつともである。

要は、世界を、戦争か否かの瀬戸際に立たせている、と、クルーゼ達は言っているのだ。

いまいちその実感がないように聞こえる紫の発言を批難した妖夢の声だが、相変わらず紫の態度は清かだった。

「問題はないと言ったでしょう。最悪の事態が発生したら、私達が止めに入る。ここにいる全ての者達の記憶と忘却の境界を操作して、全てを忘れさせる。今ここに出現させた艦艇もまた、まったく同じ場所に戻しておく。全てはなかったことになる．．．ここまで言うてまだガミガミ言うようだったら、白玉楼に帰すわよ」

「．．．．．本当に問題はないんですね？」

「ウン度目の正直よ。絶対に問題ないわ」

「．．．理解はできました。ですが、納得できないことがあと一つだけあります」

「もう、何？」

「たとえ確実な安全策があったとしても、あなた方のやったことは、世界を巻き込んで、最悪の場合崩壊させるほどの危険なものです．．．それを分かっているというのも、信じます．．．ですが、こうまでして、シンの平和のための勉強を完遂させる意味はあるのですか？」

妖夢のその問いに、クルーゼがはっきりと応えた。

「平和をつくらうとしている時点で、すでに世界を巻き込んでいるのだ。シンも、そして、この世界で平和を語る者達も。もし彼が一

歩道を踏み外した時、結局世界は同じ過ちを繰り返すことになる．

・妖夢よ。平和というものが、卓上の議論や勉強だけで手に入るものだとは思ってくれるな。平和をつくるというのは、同時に、自分の手で戦争を引き起こす危険を伴うという、重い責任を背負うことなのだ．．．この試練をもって、シンに、その重荷を背負う資格があるのかを見極める」

「．．．．．」

「納得できずとも、君にはもう事の成り行きを見守ることしかできないはずだ」

「．．．はい．．．それも、分かります．．．」

妖夢はようやく、クルーゼ達が考えていることを理解した。

これは、大掛かりなシミュレーションなのだ。

平和を創造しようとする上でいずれ直面するであろう、破綻の危機を、この場に再現しようというのだ。

そして、その危機に直面した時、シンがどのような行動を取るかを、見極めようとしている。

安全策もあるという話も、もう信じるしかない。

妖夢は、最早何も言うことはなかった。

だが、心の中で、静かに思っていた。

こういうことを平気で思いついてしまうような者達の心は、自分のような未熟者には、永遠に理解できないのだろう、と。

ドレイク級のエンジン部で発生した爆発は、当のドレイク級の乗員よりも、第三者からの視点の方が分かりやすく見えた。

混乱の最中に駄目押しを叩き込むかのように、突如発生した爆発に、

ジュール隊の面々もまた、驚愕の声をあげていた。

サブモニター備え付けのスピーカーからは、ドレイク級ブリッジでの轟音の奔流が、ノイズ混じりで伝わってくる。

「どうした！？何が起こった！」

イザークの叫びが飛ぶ。

その声に対する返事はなかった。

かわりに、ドレイク級ブリッジでの喧騒と、それに続く艦長の、（各員第一種戦闘配置！各砲門も発射用意だ！）という叫び声が、スピーカーを通じて、イザークの鼓膜を突き抜ける。

「待て！一体どうした！何が起こった！」

（とばけるんじゃない！貴様等がそのつもりなら、こちらとしても報復行動を取らせてもらおう！）

「どういうことだ！」

（あくまでシラをきるつもりか！先ほどの爆発は貴様等の攻撃だろう！）

「何を言っている！こちらは一切そちらを攻撃していない、もう一方の艦も、位置的に考えて、そちらの推進剤タンクに攻撃することはできないはずだ！」

（ならどう説明する！今の爆発は、明らかにこちらの事故などではなく、砲弾のようなものが衝突して発生した爆発だ！デブリにしても、タンクに損傷を加えるような速度のデブリなら、未然に感知できる。どう考えても、これはそちらからの攻撃だろう！）

「待て！先ほどそちらの艦は、空間の裂け目のようなものに吸い込まれてこの宙域に飛ばされた。そのときの影響ではないのか」

（そう、問題はそれなのだ。あの空間の裂け目こそ、ザフトが極秘裏に開発した新兵器ではないのかね！）

「何を言っている！仮にそんな兵器を作れる技術があったとして、何を理由にそんなものを開発するというんだ！」

（我々を．．ナチュラルを滅ぼすためではないのか！）

「ふざけたことは言わないでいただくっ！！！」

連合艦長とイザークの口論の間に、ナスカ級艦長が割って入る。

（むしろ、これはそちらの陰謀ではないのか？新兵器というなら、あの空間の裂け目は、我らザフトではなく、そちら側が開発したのではないだろうか。そして今、自作自演の爆破を起こし、我々を陥れようとしている）

（何にだ！）

（三度目の全面戦争）

「何っ！？」

（そちらが攻撃を仕掛けておいて何という言い草だ！！）

（その発言もまた、そちら側の陰謀ではないのかね）

（戦争を起こそうとしているのはそちらではないのか！）

（．．．．．どうやら、クライン派の仲立ちで取りおこなわれた終戦協定も、ただの飾りではなかったようだ．．．そちらには、最初から我々プラントと和平を結ぶつもりはなかったらしい）

（その言葉。そのままそちらにお返しする）

「！？．．．待て！待て、お前達！」

イザークは、この状況を冗談だと思ったかった。

たった数分の事態。たった数分の口論である。

だが、それだけのことで、最悪の事態が呼び寄せられようとしているのだ。

今まで着実に築いてきたものが、見事に瓦解しようとしていた。

こんな、刹那のような時間だけで．．．

「自分達が何を言っているのか、分かっているのかっ！！？」

イザークのその叫びは、最早誰の耳に入っているのかも分からなかった。

時は、わずかに遡る。

ドレイク級艦尾で巻き起こった爆発の光は、聖輦船のシン達の眼にはつきりと見えていた。

真空状態の宇宙では、爆発の光は見えても、音は聞こえてこない。

その時にはすでに、メサイアはその細部のディテールに至るまで視認できるほどに接近し、その周囲に浮かぶ三隻の艦艇も、シルエツトをはつきりと判別することができていたのだ。

そして、ナス力級が二隻に対し、ドレイク級一隻という状況の中で発生した謎の爆発は、シンの脳裏に、絶対に起こってはならない事態が起こっているということを考えさせたし、同時に、その認識が、彼の中で、雷撃のようなある感情を呼び起こした。

使命感、とでも言おうか。

状況の一部となつてしまつた以上、全力で、この最悪の事態を止めねばならないという気持ち。

「あ？速度が落ち始めている」

同時に、寅丸がそう言う通りに、今まで最大級の逆噴射をかけてもビクともしなかった聖輦船が、一気に速度を落とし始めた。

しかし、そんな中でシンは、ほとんど無意識、思考と感情だけが理性から別離して一人歩きしているような状態になつて、聖に対し叫ぶようにこう言っていた。

「止めちゃ駄目だ！最大速度で前進させろ！向こうの船が浮いているところまでだ！」

「え？どうして・・・」という聖に続き、

「止めるって言ったのは君だろ。意見をコロコロ変えんでくれ」というナズーリンの声が続く。

「いいから！頼む！それと聖、今この船を包んでいるような法力の結果を、あの三隻の船の周りにも張れないか！？」

「・・・どういふこと・・・？」

「今は聞かないでくれ！法の力で結界を張って、その結界をこの船の結界と繋げる！出来るか！？・・・いや！やってくれ！このまま

だと、本当に世界が滅んでもおかしくない事態になる！」

シンのその必死の口調は、聖の心にも、危機感を喚起した。

「．．．やったことはない。でも、やってみる」

「頼む！」

「魔を放ち万物を穿つ力．．．法の力よ！」

聖が、法力を圧縮した光の弾を、前方、三隻の艦艇がいる空間へと撃ち放った。

三隻の丁度中間に位置する場所に飛来した光弾は、瞬間、バツと広がり、一つの広大な膜へと変貌した。

三隻の艦艇すべてを包み込む、球形の結界が形成された。

同時に、その結界の一部から。法力の針が伸び、聖輦船の周囲に展開する結界に、突き刺さるように接触した。

シンは、法力の結界の内部では、原理はどうあれ空気のようなもの、あるいは、限りなく空気に近いものが発生するということをすでに知っている。

少なくとも、呼吸ができ、振動により音が聞こえる程度にはなるのだ。

そこでシンは、向こうの艦艇の周囲に結界を張り、それをこちらの結果と繋げることで、向こうで発生する音を感じしようとしたのだ。いや、正しくは音ではない。

シンは続けて言う。

「聖、向こうの結界の中で、何か電波のようなものが飛んでるのを感じないか？」

「ええ．．．分かる．．．法の力の中を、作為的な波が漂っている．．．それを拾えというのね？」

「そうだ！傍受するんだ、そしてそれを、みんなに聞こえるように、こっち側の空間で音に還元して響かせてくれ！」

続けざまにいろいろなことを言うシンに、ムラサ船長が、「だあー、いろいろ頼みすぎでしょ．．．さすがの聖でもそんなの無理でしょ」

と呆れたような声を出す。

その声に、シンではなく藍が返事をした。

「いや、できる。要は、周波数を合わせてラジオの電波を受け取るのと同じだ。人間にだってできることが、聖　白蓮にはできないってことは、ないと思うよ」

「やってみます。任せておきなさい」

やってみようと思えば、後は簡単だった。

向こうの結界の中を漂う電波の波を感知し、それをこちら側の結界の中に再現する、そして、音声を記号化したらしいその波を、改めて元の音声としての波に還元して、後は、結界全体でその音を再生する。

聖の力は、聖輦船の周囲に、シンの望む音声を傍受してくれた。

三隻の艦艇の間でされているであろう、無線通信の内容をだ。

聖輦船が再加速に入る中、シン達は、空間そのものから響く無線の内容に耳を傾けた。

三つの声が、無線内を錯綜している。

そのうちの一つの声に、シンは聞き覚えがあった。

（今世界は極度に不安定な状態にある！そんな中で、戦闘行為など起こしてみる、絶対にそれだけで終わらない！本当に全面戦争になるんだぞ！今まで築き上げてきた平和のための犠牲が全て無駄になるのだ！分かっているのか！）

（それを承知で貴様等はこちらに攻撃を仕掛けてきたのだろう！）

（ジュール隊長。最早議論の余地はありません。本艦は、戦闘態勢に移行します）

「ど、どういう話をしてんの？」と小傘が呟く。

「戦争だと．．．戦争だと言ってるようにしか聞こえない．．．シン、これはまずいぞ」と藍が、呟くように言う。

「戦争ってなにさ．．．知らないモノって、怖いよ．．．」とぬ

えが眩く。

無線の中での口論はまだ続く。

（やめろ！戦争なんだぞ！本当にいいというのか！？）

（所詮遺伝子を改造したコーディネイターなどは、人類の異種なのだ。理解しあえる道理も、共生できる道理もなかった！）

（遺伝子的弱者共の言うようなこと！）

（待つんだ！待ってくれ！！）

（主砲！発射用意！）

（主砲撃ち方よーいっ！）

「シン！戦争なんて止めないと．．．！」聖が叫ぶ。

その影で、「わっ！船が近づいてくるーっ？」という橙の声がする。

「分かっている！聖、今度は逆だ！俺の声を、向こうに届けてくれ！」

「分かったわ！」

「お前等．．．．．っ！！」

（やめろおおおおおーっ！！）

今まさに、三度目の全面戦争の口火が切られようとしていた瞬間であつた。

何処からともなく響いたその叫び声は、狂乱的な事態に対する楔となつて、全ての者の意識を貫いた。

「クルーゼ様！この声は！？」

「ああ．．．よくぞ間に合った、シン・アスカ！」

「さあ、後はあなた次第．．．」

「どうした！？誰の声．．．いや、どこの通信だ！」

そう叫ぶイザークの視覚に、畳みかけるように、完全に意識の外へ追いやっていた謎の船が、いきなり艦の前方へ躍り出るといった光景が襲い来る。

またしても降りかかった混乱の火の粉に、イザークは、今、事態が最悪の方向に動いているということを忘れてしまった。

それは、他の二隻においても同じようである。

スピーカーからは、先ほどイザークが言ったのとほとんど同じような台詞が聞こえてくる。

だが、イザークの声にしてもスピーカーの向こう側の声にしても、返事を超越すものはいなかった。

誰もが、この状況に啞然とするしかなかったのである。

博物館で飾られるような、年代物の船の、甲板らしきものの上に、いくつかの人間らしいものの影があったのである。

さきほどまでの喧騒が嘘のように静まりかえる中で、突然聞こえてきた声が、続ける。

（みんな．．．聞いてくれ）

その言葉は、誰にも聞き入れられなかった。

その声がスイッチとなったように、ブリッジ内は、この混乱の元を

探ることに躍起になったのである。

「これは先ほどの船に間違いありません！最大望遠．．．人！人が立っています！」

「送られてくる電波信号は、ドレイク級のもので、ナスカ級のものでもありません！まったく別の信号です！まさかこれは．．．！」

（艦長、主砲発射用意よし。どうしますか？．．．どうしますか！？）

（待て！まだ撃つな！！一体どうなっている！）

「応答しますか！？どうするんですか！」

誰もが、自分の役割を果たすことに専念していた。

そうすることで、この状況を打開することになると信じていたのだ。これこそ、混乱の完成系である。

行き過ぎた混乱は、人の行動に、絶対的な一貫性を持たせることがある。

誰ひとりとして、シンの願いなど聞こうとしなかった。

イザークとディアッカのみを除いて．．．

だが、

（頼む！聞いてくれっ！！）

次いで響いた声が、二度目の静寂を呼びこんだ。

魂を揺さぶり起こすような叫びが．．．である。

イザークの脳裏で、『流れが変わった』という言葉が奔った。

同時に彼は、己の眼に映った、例の船の甲板上の拡大映像の中の一人の少年の姿を見て、驚愕した。

呟くのを止めることはできなかった。

「シン・アスカ．．．！？何故こんなことになっている．．．っ」

静けさが支配した世界の中で、シンは、静かに口を開いた。

彼の姿は、すでに三隻全てが、拡大映像のよってはっきりと見てい

た。

彼の実直な眼差しも、である。

（両軍とも、今すぐ戦闘態勢を解除してくれ）

その言葉に、連合軍艦長が思い出したように、（何を言っている！ザフトの兵士の戯言は聞かん！）と反論する。

だがそんな空虚な返し文句に対しても、シンの態度は一切崩れなかった。

（あんだ達には分かっているはずだ。この世界で、誰一人として、戦争なんて望んでいる人間はいないということを．．．あんだ達自身もそうだ）

（何．．．っ？）

（思い出してくれ．．．この戦場で、この戦争で死んでいった者達のことを．．．彼らはみんな、自分達が死ぬことで、世界が少しでもいい方向に進んでくれると信じていたんだ．．．生き残った者達が、あるいは、次の世代の者達が、少しでも、世界を改善してくれると信じて死んでいったんだ。あんだ達だって、自分がそういう立場に立つことを厭わないという覚悟を持っていたはずだ．．．つまり、死ぬことを．．．．．それなのに、もう一度戦争を引き起こし、悲劇を繰り返そうなんていうのは、自分達を信じて死んでいった仲間達の命を侮辱することなんだ。そして、あんだ達自身の心も．．．．．あんだ達は、確かにそれを知っていたはずだ）

その言葉に、次はザフト軍艦長が噛みつく。

（戯言を抜かせ．．．何があるうと、このような状況になった以上、ナチュラルに報復するのはやむを得ないことだろう。下らぬことを言うなら、まずは貴様の乗っているその骨董品を一端のデブリに変えてやるぞ）

（いいよ。やってくれ．．．それであんだ達の気持が済むなら、デブリにでも消し炭にでもしてくれ）

（ぬ．．．っ）

（だけどなっ！全てはあんだ達が撃てるなら、だ！この俺を撃てる

なら、撃ってみろ！撃てるか、この俺が！．．．撃てるのか！）

（何いつ！？）

拡大映像の中のシンが、大きく両腕を広げた。
完全なる無抵抗である。

何の武力もなく、対抗心も敵対心もなく、憎悪も殺意もなく、撃つなら撃てという者。

そんな者を撃てる勇氣などは、誰にもなかった。

少なくとも、二度の戦争を経て、血の匂いに嫌気がさした人間には、である。

シンの叫びが、宇宙にこだまする。

（撃てないだろう．．．同じ人間なんだからな！．．．以前はともかく、二度戦争を繰り返して、その虚しさを思い知ったあんた達なら、分かっているはずなんだ。ナチュラルだろうとコーディネイターだろうと、結局は何も変わらない人間だって。遺伝子がどうかとか、関係ない！俺たちは！この眼も鼻も口も、何ひとつ変わりはないはずだ！俺達は同じ人間であり、仲間だ！その命を、理屈もない思想や権力のために奪っていいはずがない！それを分かっているんだろう！）

イザークが呟く。

「思えば、MSの出現が、戦争を泥沼化させた要因なのかもしれない。相手の姿が見えず、血も見えぬ戦いなら、歯止めは聞かなくなり、生命へのモラルは失われ戦争は激化の一途をたどる、それは、戦争が正当だという意識を呼び、市民を扇動する。やがて、たとえ相手の姿が見えていようと、間違った観念と、モラルの喪失によって狂気の殺戮を呼ぶ．．．逆説的には言えばそういうことだ．．．あいつがそのことを言っているというのなら、間違っていないと思わんか？なあ、ディアツカ」

「さあねえ、知らねえよ．．．でも、悪いこと言っていないってのは、確かだろうぜ」

（それに、同じなのは、姿だけじゃない、心もだ！俺達は、この身体も同じなら、感じることに、思うことも同じなんだ！喜び、哀しみ、人を愛すること、人と一緒にいて幸せだと思ふこと、愛する人を失ふことの哀しさ、傍にいる人のことをよく理解しようと思ふ気持ち、仲良くなりたいうて思ふ気持ち．．．みんな同じように感じているんだ！誓つて言う！何ひとつ、俺たちは変わっちゃいない！！）

（だが、今ここに起きた確執はどう片づける！ナチュラルとコーデイネイターの関係が、そう簡単に改善できるものか！いかなるものを築いていようと、結局は、いとも容易く崩れさるものなのだ！）
（そんなこと、誰が決めたんだ．．．ただ自分達だけでそう思つてるだけだろう！あんた達は、逃げているんだ）

（一体何から逃げているというのだ！）

（相手を信じることに．．．そして、相手を許すことだ）

（何．．．っ）

（それに、軍人として、今ある物を後の世代まで遺していくことだ。自分達の前の世代が築き上げ、伝えてくれた叡智を、いずれ大人になる子供達や、新しく生まれてくる命のために．．．今ここに生きる俺達の世代には、先代から託された、そして、後世に託すべき責任があるはずだ。それを、よく考えてくれ．．．自分の父が築くことができたものを、自分達を守ることができないなんてこと、ないはずだ）

（．．．．．）

シンの言葉には、はつきり言えば、この状況そのものを打開するよ
うな明快さは不足していた。

だが同時に、人の心に、感情に語りかけるその声には、耳を傾けなければならぬのも確かだった。

それは、アジテーション、いわゆる扇動的な言動ではあったが、同時に、世の真理を突く正論であった。

だからこそ、批判する者はいるとしても、誰一人として、シンの言葉
を聞かない者はいなかった。

押しつけがましくも聞こえるその口調も、だからこそ、鬼気迫るものを感じさせていた。

（信じてくれないかもしれないけど、この状況で、悪い者は一人としていない．．．俺がそれを誓って言う）

その言葉には、これまでのシンの言葉を最もよく理解しているイザークが、あえて反論した。

「待て．．．なぜそう言い切れる。もし仮にだ。本当にザフトが極秘裏に兵器を開発しており、この事態を布石に宣戦布告をしたら、お前はどう責任を取る」

（俺が、平和を信じる者として、事態を収束させる．．．そして、俺自身の非もまた、裁く．．．死によつてだ．．．．だがそれは、本当にどちらかが、戦争を起こそうとしているときの話だ．．．．だけど、今この時においては、誰もそんなことは考えていない．．．．そうだろう）

「．．．そうだ」

（お互いに誤解したまま、自分の頭だけで考えるからいけないんだ．．．相手の言い分も理解して、その上で、互いの考えを妥協させる．．．それが、人が人と付き合うということであり、平等で、平和であるということなんだ．．．お互い、何の非もない。それはもう、分かっていることなんだろ）

（本艦のクルーは誰ひとりとして、この事態の真相を知るものはいない）

（それはこちらとて同じだ．．．．それを、信じるというのか．．．？）

「互いの確執を乗り越えて、理解し合う．．．そんなことが、可能なのか．．．？」

（そういう世界を、これから創っていくんだろう．．．誰の言葉でもない。俺達自身の意思で、そして、俺たちの手で．．．．人類は、今まで少しずつ、進歩してきたんだ．．．そんな人類の進化

が高貴なものだと思う心があるなら、それをより高めようとするのが、俺達の役目だ）

結局、この状況の真相は、不明瞭なままであり、事態の解決にはなっていない。

だがそれは同時に、誰一人として、この事態の『当事者』と呼べるものがいないということなのである。

すなわち、誰に一人として、非はないということなのである。

シンの言葉が、その認識を呼び醒まし、もう一度、この昏迷した状況を冷静に対処しようという意識を喚起した。

互いの混乱と猜疑心、そして敵対心も、いつの間になくなっていった。

シンの出現が、戦争の勃発へと邁進しようとしていた状況を、寸前のところで喰いとめたのである。

この機を逃してはならないと、イザークが、他二隻の艦艇に向け呼びかける。

「こちらとしては、ヤツの言うことも一理あると考えている。両艦とも、戦闘態勢を解除されたし」

その声に、しばらく黙っていた後、ドレイク級艦長が、

（解除はしない。警戒は続けさせてもらう。だが、戦闘する意思そのものは、今のところはなくさせてもらう）

ナスカ級艦長が続く。

（こちらとしても、警戒態勢は続けます、互いが敵でないということとは判断できましたが、しかし、どこかに『敵』がいるのは確かなのです）

ドレイク級に攻撃を仕掛けた当事者が、である。

「そうだな．．．そこは仕方がないか．．．」

（．．．．．ありがとう）

イザークとしては、戦闘が始まるのが未然に防がれたというだけで

も奇跡的なことだったのだ。

シンの存在こそが、この事態をここまで収束させたのだらうと思えた。

そして、噛みしめるようなシンの声こそ、この結果を誰もが望んでいたことの顕われのようだと、イザークには思えた。

だが、そのシンのこともあるし、結局のところ、ジュール隊しかないはずのこのメサイア宙域に、突然裂け目のようなものが出現し、二隻の艦艇を放出したという事態の解決には、何の目途もたっていないのである。

それに、改めて、シンが乗っている、この骨董品のような船の存在の不可解さが際立った。

甲板のようなものに立っているシンと、数人の人間らしい者達は、明らかに真空の中に身を晒しているはずなのに、何の異常も見られない。

何より、行方不明だったシンが、この奇妙な船に乗って眼の前にいる。

全面戦争の危機が去つてみると、それ以上に重要なのが、今艦の前方にある件の船なのだということが、理解できた。

「それよりも、シン・アスカ。お前自身はどうなのだ。何故そんな船に乗っている。しかも、真空状態に身を晒しておきながら生きている．．．そのことを説明してもらおうか」

イザークのその言葉に、シンは、（それは．．．）と渋るような態度を取った。

今しがた人を信じると言った者が、正直に話すことをためらうというのか？

これでは、意味がないではないか。

イザークは、一度收拾のついた事態に、またしても陰りが見えてくるのを感じた。

が、そんな瞬間だった。

(う．．．っ!?)

(ぬ．．．)

突然、ドレイク級、ナスカ級両方の通信回線から、ほぼ同時に、うめき声のようなものが聞こえてきた。

同時に、サブモニターの中に映る二人の艦長が、ほとんど同じように、理由も分らないまま、いきなりうなだれて、緩やかに昏倒していったのである。

まるで死人になったように、力なくうなだれている二人の艦長の姿に、イザークは、またしても事態が新たな段階に推移したのを感じた。

「どうした!? 応答されたし! 応答されたし! ネガティブ 応答無 .

．両艦とも完全に沈黙しました．．．」

通信士の報告が飛ぶ。

イザークの脳裏に、まさかシンこそが、今しがた鮮烈な雷光のような言葉をこちらに投げかけたシンこそが、この事態の当事者ではないのか、という考えが過るが、それこそ、信じたくはなかった。

先ほどのシンの言葉は、彼の心からのものであるはずである。

彼の瞳に宿っていた紅い炎がそれを物語っていた。

それに、当のシンの方でも、(どうしたんだ!? 何かあったんですか!)と、この状況を理解できていないようであった。

この態度にも、演技的なものは感じなかった。

船のことに關しては、シンの方に事情はありそうだが、だからといって、この事態への関係はない、ということか。

だとしたら、だ。

一体誰が、何のためにこんな不可解な事態を発生させたのか。

最早考えを纏めることができなくなり、とうとう、人在らざるものが、自分達に試練を与えているのかという、飛躍した考えがイザーク

クの頭の中で沸き起こった。

「シン・アスカ。一体どういう事態が起こっているのだ」
こうとしか言えないイザークに返された返事は、シンのものではなかった。

今しがたの突拍子もない考えこそ、まさしく真理であるということを示す声が、背後より、ブリッジから艦内通路へと続くハッチの開く音と共に、聞こえたのである。

「あなた達に、分かる道理はないわ」

「誰だっ!？」

聞き覚えのない女性の声に、イザークは、咄嗟に司令席から立ち上がり、声のする方向へと身体ごと振り向けた。

イザークだけではない、全てのクルーが、声のする方へと振り返り、その主の姿を見たのである。

八雲 紫、そして、彼女と行動を共にしていたクルーゼ達である。

ザフト軍の制服を身につけず、奇抜な格好をした複数の男女の姿に（クルーゼに関しても、幻想郷に訪れてからは、身なりはそちらの風習に合わせていた）、ブリッジに、大きなどよめきが起こった。

シンの言葉を確と聞き入れたクルーゼ達は、この状況を収束させるべく行動を開始したのである。

しかしイザークには、一目見ただけでは、単なる不気味な来訪者の一員でしかないクルーゼに、ただならぬ既視感を覚えた。

それもそのはずだ。

なんせ、一時は同じ部隊として、指示を受ける側にいたのだから。たとえ、時代錯誤的な格好をして、仮面の下の素顔を出していいようと、雰囲気だけで、もしかや、と思うことはできた。

「あなたは．．っ?」

「．．さあなあ、誰だろうか．．」

イザークの驚嘆に、言葉だけ否定して、曖昧な口調で応えたクルー

ぜの声は、だからこそ必要以上に、イザークの中の考えが真実であることを示した。

シンのことといい、あまりに奇妙な事態の発生に、イザークが戸惑う間もなく、紫は口を開いた。

「今しがた気絶した二隻のクルー達は、私がやったことよ」

そう静かに語る紫に対し、イザークが、多大な混乱に万全な思考能力を削がれつつも、極力冷静に言い返す。

「どうということだ、何をした！まさか、ドレイク級の爆発も貴様の仕業なのか！？」

「手荒な真似はしていないわ。ただ、意識と無意識の境界をいじつて、穏やかに眠ってもらっただけのこと・・・そして、先の爆発に関してもまた、あなたの言う通り」

そして、気絶したクルーの精神を一挙に支配し、その記憶の一部を抜き取った。

ちようど、スキマに吸い込まれ、このメサイア宙域で発生した事態のこの記憶を、全てである。

さらに、両艦のあらゆる航行記録に細工を施し、記録的にも、この宙域での出来事を全てなかったことにした。

その様子を垣間見る中で妖夢は、本当に、紫達には抜かりがなかったということを再認識した。

それはともかくとして、この紫の説明だけでは、イザークが、全てのことを理解できるわけがなかった。

「どうということだ・・・貴様は何者だ、人間なのか？」

その問いへの答えは、イザーク自身の中で、半ば分かっていることだった。

「いえ・・・人在らざる者よ」

ただ、紫の応えを聞くことで、それが確定したというだけのことである。

だが、いまいち実感がわかなかった。

見た目が奇抜というだけで、眼の前に立つ妖怪らしい女性の姿は、人間そのものなのだから。

「シンの、誰にも非はないという言葉もそのものズバリ．．．この事態は、人間が招いたものではないの」

紫のその言葉を待っていたかのように、イザークの耳に、いつぞや聞いた、重粒子が唸る音が響いた。

一瞬だけ、ちらりとその音の方向を見る。その一瞬で充分だった。

後は、再び出現した空間の裂け目に、気絶したクルーを乗せた二隻の艦艇が吸い込まれる光景に、クルー一同が釘付けになるだけだ。そんな中で、紫が続ける。

「そして、事実を知ってしまった以上、あなた達の記憶も奪わせていただくわ。この宙域で発生した事態を、そして、私達の存在を、知られるわけにはいかない」

「．．．我々は、貴様の陰謀の上で踊らされていた、ということなのか？」

スキマの中に、艦艇が吸い込まれる光景を凝視しつつこう返したイザークの声に、紫もまた、「その通り」と返事する。

「．．．だが何故だ．．．何故人在らざる者が、今になってこれほどの事態を引き起こす．．．全てを忘れさせられることを承知で聞かせてもらう」

「試してみたのよ．．．人類が、ほんのわずかな火種で、全てを焼き尽くすかどうか．．．」

「．．．そしてその答えは．．．」

「ええ、今見えた」

「．．．．．」

人在らざる者の存在など、容易に信じられるものではない。

そしてそれが事実だとして、妖怪か何かの語る不可思議な言葉など、理解できるとは思えない。

ただ、自分達が試されたという事実だけを認識しつつ、イザークに

は、たとえ理解できずとも、そして理解したハナから忘却することを承知で、どうしてもひとつだけ聞きたいことがあった。

「．．．あのシン・アスカと、その周囲にいる者達も．．．貴様と関わりがあるのか．．．？」

「ええ、そうよ．．．関わりがあるはおろか、彼の失踪もまた、私が為したこと」

「何だとっ！？なぜそんなことを．．．っ」

空間の裂け目を見るのをやめ、咄嗟に紫の方を振り返るイザーク。

「最早あなた方に話すことは話した．．．今は、あなた方と話をするより、シン達の方が大事なので、ここで失礼させて頂くわ」

「待てっ！」

イザークの制止する声も意味はなく、彼の眼前に、先ほどドレイク級とナスカ級が吸い込まれていったのとは、大分小さな、人が数人分の大きさの空間の裂け目が出現した。

ほとんど眼の前で発生してこともあり、スケールが巨大だった先ほどの場合よりも、より大きな異質さを、大きく穿たれた『何か』の向こう側から放っていた。

ちなみに、そのスケールが大きいほうの裂け目は、二隻の艦艇が完全に吸い込まれると同時に、消滅していた。

そして、最早イザーク達から意識を離れた紫達が、その裂け目、スキマの中へと入っていく。

他の少女達（彼女らが人間なのか否かも、イザーク達には分からない）が、紫を追ってスキマの中へと入っていく中、イザークは、自分の身体に耐えがたい疲労感が襲ってくるのを感じた。肉体的な疲れではない。

もっと精神的な、脳に作用する、もっと言えば、魂に作用するような疲れだ。

一瞬にして、意識が虚脱しそうになる。

「ぐ．．．っ？」

「うへっ」

「ぬあ．．．っ」

突然の疲労感の中でイザークは、ディアツカや、他のクルー達が気絶して倒れる様子を見て取った。

何をしたのは分らないが、先ほどの、人在らざる者達が、何かをしたのである。

こうやってこの事態に居合わせたものを気絶させ、記憶を奪おうというのか．．．

そういう考えも曖昧になるほどに、イザークの意識もまた朦朧とし、今にも昏倒しそうになっていた。

だが、ここでイザークは、二度の大戦を生き抜いてきた意地、そして、赤服史上最高の、持前の気合いで、襲い来る疲労感に抵抗した。

「ま．．．まだまだ．．．っ！」

まだ気を失ってはいけない。

たとえすぐに忘れるとしても、この状況を、最後まで見届けねばならない。

イザークはそう考えていた。

人在らざる者の存在、そして、そんな者達が、人の世にて為そうとしている目的。それを知らねばならないと考えた。

それに、シンだ。

先ほどの発言を信じるならば、シンは、彼女達の世界へと足を踏み入れたことになるのだ。

まだ気絶してはならない。

ここで堪えることで、たとえ忘れようとも、重要な何かを知ることができるはずなのだ。

メインモニターの一角、未だ宙域の中に顕在の聖輦船の甲板を映す拡大映像には、まだシンの姿が映っていたし、彼らとの間の、法力の無線通信もまだ健在であった。

ジュール隊で発生した混乱の始終は、映像を見ることができない聖輦船においては、聞こえてくる声だけで判断するしかなかった。

だが、声だけであろうと、一度聞いた覚えのある紫の声を耳にすれば、それだけで、どのような事態が発生したのかは判断できる。

そしてあいも変わらず胡散臭そうな紫の声は、シンに、全ての答えを理解させた。

聖輦船がコズミック・イラに転移したことも、そしてその先でこんなことが起こったのも、すべては紫の考えの中でのことだったのだ。そして、紫の種明かしを傍から聞いたシンは、彼女が自分に何をさせようとしていたのかもまた、理解した。

試されたのだ。この世界も、そして、シン自身も。

しばらくすると、法力通信の向こう側から、いくつかのうめき声が聞こえてきた。

さらにその少し後に、聖輦船の甲板上に、巨大な空間の裂け目が発生した。

忘れようはずもない。八雲　紫が出現させるスキマだ。

その中から、紫と、数人の見覚えのある少女達に姿が顕われた。

皆一様に、紫の関係者であるということは、シン自身もよく分かっていた。

あまり紫達と面識のない聖達としては、突然の来訪者に驚きを隠せなかったようだが・・・

それに、シンにとっても、初めて見る人物が、一人だけいた。

正しくは、初めてではないのだが、はつきりとその姿を見る機会は、確かになかった。

女性ばかりの面々の中では、少し浮いているようにさえ見える、一

人の男性である（一応、シンと雲山もいるわけだが）。

ほぼ初対面にも近いはずのその男だが、シンには、異様なまでの既視感があつた。

そう、彼の親友、レイと、何処となく顔つきが似ているのである。

そこでシンは思い出した。

この男こそ、白玉楼で垣間見、シンを幻想郷へと送り込んだ、謎の声の主だ。

そしてシンには、それが誰なのか、曖昧ながらも見当がついていた。そんな男が、ようやくシンの前に、はつきりと姿を現したのである。

シンの姿を見据える男と視線を合わせたシンが、静かに聞いた。

「あんた．．．ラウ・ル・クルーゼなんだろう？」

男は応える。

「ああ、そうだ」

「キラさんから聞かせてもらった．．．レイもデュランダル議長も、全てはあんたのために、デステニープランを始動させたつてことを．．．そして当のあんたは、過去の大戦で、世界を滅ぼそうとしたつてことを．．．あんたは、そういう大罪人だつてことを．．．」正直に事実を話すシンの言葉だが、その声に、クルーゼの近くに立つ妖夢が、憤りのようなものを見せるのが、シンには見えなかった。クルーゼは、その落ち着きはらった態度を崩すことなく、「そうだ．．．」と応えた。

紫達と面識がないこともあって、さすがに状況がいまいちよく分からない聖達としては、「一体どういうことなのですか？」と聞くしかなかった。

その声には、紫が応える。

「あなた方の疑問に関しては、私がお話ししましょう」

そうして紫は、全ての事実を説明した。

彼女らしく、決定的な事実を語らない曖昧な説明だったが、聖輦船

をコスミック・イラに転移させたのが紫であること、そして、その目的が、シンのアチーブメントテストのためであること、そして、そのために聖輦船が半ばダシにされたことを分けるには充分だった。そういうことに対しては、さすがにナズーリンやムラサ船長が、

「こちとらの事情も考えずよくもやってくれたな」

「責任取りなさい、責任を！」

こういう具合に突っかかるのも当然なことだった。

「驚きなさい！責任とってさ」

「あ、いいねそれ。驚け！」

ぬえと小傘の台詞は相変わらず何かが違う気がする。

まあ、そこは寅丸が、「起こってしまったことは仕方がない、今は、とやかく批難するような時じゃないだろう」となだめる。

だが、まだ一つだけ、紫から説明を受けていないことがあった。

それは、何の目的があつて、シンのテストのためにこのような事態を引き起こしたのか、だ。

そのことを聞こうとした聖達の問いを、まるでさとりのように先読みしたシンが、静かに応える。

「あんたらが聞きたいことならさ、俺、分かるよ．．．平和って、ただ勉強するだけで創れるようなものじゃないんだ．．．．．どんなに世界が安定していても、いずれ必ず、綻びが生まれ、問題が発生する．．．そういうことに対して、どうやって対処するべきなのか。それが分からないと、平和を維持していくことはできない」クルーゼが返す。

「そうだ。だからこそ我々は、君に一つの機会を与えたのだ．．．

そして君は、こちらが望んでいた解答を出してくれた」

「．．．いや、そうでもない．．．そうでもないさ」

「何．．．？」

「正直．．．今回戦争になるような事態を抑えられたのは、ほとんど運だった．．．俺自身、言いたいことを上手く言えたって自信はなかった」

シンのその言葉には、シンより少し先に全ての事実を知った藍が応える。

「上手くなくても、言えただけで充分だと思うよ。たった一言言うだけでも、周囲の人々に、思考することを喚起するには充分だ。一言だけでも、さっきみたいなのが言えるんなら、それは価値のあるものだと思っ」

クルーゼが続く。

「藍の言う通りだ．．．何よりもまず、状況を止めることを考える。状況の一部として、まずは己の意思を貫く．．．それは、あのキラ・ヤマトにさえできなかったことだ．．．それを、紛いなりにも君は成し遂げた」

「．．．．．」

「なのに何故君がそうまで浮かない顔をするのか、その理由は私にも分かる．．．君は、知ったのだろう」

「．．．．．今回の事は、本当に運だった。もし、俺があの場合に出ていっても、まだ戦争の意思を消すことができなかったなら、俺には、正直どうすることもできなかったと思う」

「だがそれは、正しい物の在り方だ。世の中には、絶対的な物など、在りはしない。絶対的な人間、絶対的な力、絶対的な使命、目的、そして、絶対的な平和もな．．．君は、そんな当たり前の真理に辿り着いただけなのさ．．．どうしようもない場面に直面した時、人には、諦めるしか道はなくなる」

「．．．．．それで俺、思ったんだ．．．俺が今まで、この幻想郷で勉強してきたことに、意味はあるのかな．．．って．．．」

「その答えも、君には分かっているはずだ．．．」

クルーゼのその声が、シンの中で、この幻想郷を旅してきた記憶を呼び覚ました。

多くの者達と出会い、多くの事を知った。
そして、知るということが新たに導いた、考えるということ、想うということ。

シンは、その心の素晴らしさも思い出していた。

「．．．たとえ絶対的な道は見えなくても、その場その場で、なるべくいい方向へと進んでいくことはできる。俺はそのために、今まで勉強してきた。人間の何が正しいのか、人間の何を認めていくべきなのか．．．．それに、たとえ世の中に絶対がなくても、俺は、信じたくなくなったんだ．．．それでも人は、いつか本当の平和を創りだすことができるって．．．」

その声にクルーゼは、「ふっ．．．」と小さな笑みを浮かべて、続けて、言った。

「全ての目的は達した。最早ここで為すことは何もない．．．後は、この船もまた幻想郷へと帰るだけだ．．．そして、この状況は完全になかったことになる、残された者は、紫がでっち上げた記録を信じて、ただ何も知らずに、任務をこなすだけだろう．．．．．そしてシン。君の役目もまた、ここで終わりとすべきではないか？」

「それって．．．」
「博麗神社へと戻ってくるがいい．．．私も紫も、そこで待っている」

そこまで言ったところで紫が、「さあ、みんな戻るわよ」と、再びスキマを出現させる。

「あ、こら！責任を取れって言うてんでしょ！」というムラサ船長の声は聞かず、紫達は、そそくさとスキマの中へと入っていき、どこへなりと消えていってしまった。

そこから、しばらくしない内に、戸惑う聖達をそのままに、聖輦船のすぐ目の前に巨大なスキマが出現し、船体が、その中へと吸い込まれ始めた。

「うおっ！？」

「この揺れは．．．あの時と同じーっ！？」

うろたえる妖怪達の叫び声が喧騒を巻き起こす中で、シンは、確かにその声を聞いた。

「．．．そろそろお別れみたいだね」

「シン。後もうちょっとの間、楽しい時間を過ごそう．．．」

橙と藍の声だったように聞こえる。

シンは、咄嗟に彼女達の方を振り向くが、二人とも、眼前に発生したスキマに眼を向け、シンと顔を合わせようとはしてくれなかった。

シンは、平和のための勉強以上に、重大なことが、すぐ眼の前まで迫っていることを、その身に感じられたように思えた。

朦朧とする意識の中、イザークは、全ての事実を聞いた。

司令席にもたれかかる身体は、鉛のように重い。

そして、何度目かの空間の裂け目の出現に、気合いだけで意識を保つのも、もう限界だということを悟った。

それに、今聞いた全てのことは、いずれ忘れるのだ。

最早、無理をする必要もあるまい。

だがイザークは、いよいよ薄れていく意識の中で、一つだけ固く思うことがあった。

他の全ては忘れてもいい。

ただ、『シンに任せろ』。その言葉だけは、忘れない。
記憶を超越した心のアイデアとして、残し続けて見せる。

その決意だけを心に留めて、裂け目の中に例の船が完全に吸い込まれ、同時に裂け目が閉じるように消滅していく中で、ついにイザークも昏睡した。

数分後、眼を覚ましたイザーク達は、自分達が何故気絶していたのかを疑問に思いつつも、何の問題も発生していないことを確認し、メサイアの調査任務を開始した。

気がついた時には、聖輦船は、コズミック・イラに飛ばされる以前と、まったく同じところに戻っていた。

シン達がコズミック・イラでいろいろやっている間に、幻想郷も、数か月、とはいかないが、少しだけ月日が経っていた。

秋の心地よい風は、いよいよ冬の寒風へと変わりつつあった。

それほど大きな差ではないようだが、幻想郷と外の世界では、時間の密度が違うらしい。

幻想郷の方が、一日が長いようだ。

まあ、それはそれでいい。

無事、ここまで戻ってこれたことを、素直に喜ぶべきだろう。

が、それはともかくとして、どうやらこの一連の事態の首謀者が、紫であること、そしてその紫と、シンは何らかの関係を持っていることは、再び、聖輦船の妖怪達からの批難を買った。

「さっきのは一体どういうことか、説明してもらおうか」とナズーリン。

「結局悪いのはあんたなの？そうじゃないの、どっちなのよ」とムラサ船長。

「返答次第ではただじゃおかない、って雲山が言ってるわよ」と一輪。

「魔界の果てにでも島流しにしちやるか」とぬえ。
で、そこに聖が割って入って、「いい加減になさい、怒るわよ」となだめるのは、もうお決まりのパターンにさえ思えた。

何だかんだ言って聖輦船の妖怪達にも、事情は分かったのだ。

シンが、平和のための勉強をしていることもすでに当人から聞いていたし、それが紫の手引きだというなら、別にそれでもいいだろう。そして、悪いのは多分シンではなく、その紫だということが理解できないような者達ではなかった。

いろいろと事情もあって忙しかった中で、厄介な事態になってしまったことについては、勘弁してくれという気分ではあるが、そのことでシンに対してとやかく言う権利はないということぐらい、分かっているのである。

それに、その勉強も、終わりの時が来たらしいというのも、聖には分かった。

「あの時あなたが語った言葉の数々は、私の心に響く平和の真理でした．．．そしてあなたは、今こそ自分のいるべき世界に戻るのですね」

「ああ．．．そうだ」

クルーゼに言われたからではない。

シンは、自らの意思で、コズミック・イラに戻るつもりだった。

まだまだ、勉強不足だという感否めない。

だが、そんなことを言ってしまうえば、それこそ死ぬまで勉強し続けても、本当の意味で満足することはできないのだ。
妥協することもまた、人間の力なのである。

理想に対して、現実的な結果を出さないといけない。

確実な方法を．．．

それが、シンが幻想郷に来る以前に考えていたことだ。

思えばその時の自分も、まだ子供だったのだと、シン自身が思う。
なら今は大人になったのかと言われれば自信がないが、少しだけなら、子供から成長することができたと言っても、いいんじゃないか？
『しなる』ことを覚えたような気がする。

聖が、感慨深く言う。

「あのひと時だけでも、あなたに会えてよかったと思う。故あれば、また会ってお話しましょう」

「・・・ああ、故あれば、じゃない。いつか必ず、また会いに行く・
・もう、何人にも約束したんだ・・・ここに帰ってくるって」
そう。

いつか必ず、戻るのだ、この幻想郷に。

そのためには、世界を平和にしなきゃいけない。

そういう道に、導いていかねばならない。

目的があるということが、人間の力である。

だがそれ以上に、目的のさらに向こう側に何かが待っている。

その時人は、無限の力を手に入れるのだ。

幻想郷で得た繋がり、シンが思う以上に、心の連なりが作る不可視の力を、シンの身に宿していた。

運命を変えていく力である。

シン達は、聖達に分かれを告げ、ようやく命蓮寺に戻った聖輦船を後にして、博霊神社への道程へとついた。

聖達には、散々間延びした事情があるので、これ以上邪魔をする必要はない。早い内にお暇しようと思ったのだ。

その時になれば、シンのことを疑り深い眼で見てきたナズーリン達も、快く見送り、別れを惜しむような態度さえ見せてくれたのが、シンには嬉しかった。

この聖輦船に住まう妖怪達は、何だかんだ行って人がいい。そのこ

とは、ずっと分かっていたことなのだ。

聖輦船を後にし、博霊神社へと向かうシン達の足取りは軽かったが、そんな彼らの心も、また軽やかであるとは限らない。

いずれ必ず戻ってくる、という気持ちは固い。

だが、それでもだ。

今進んでいる道のりが、今は、この幻想郷を旅する最後の道であるという認識が、シン達の心に、ただそれだけでは済まない、言い様のない感情を満たした。

冬の始まりを告げる肌寒い風は、思いの外過酷さを感じさせなかった。

むしろその逆で、幾分かの心地よさを感じさせてくれた。

冬は、あまり嫌いじゃない。

結構、好きになれるかもしれない。

いつぞや会ったレティとまた会った時は、彼女が別れ際に聞いてきた問いに、ちゃんと応えよう。

そう思った。

だがそんな気持ちも、心から湧き出る寂寞の思いの中へと、溶けて消えていった。

Conversation『深海の孤独』

紫達も、事態の推移を見計らい、コズミック・イラから白玉楼へと帰還した。

「結局何をしたかったのか分からない．．．」という霊夢にはとつとと帰ってもらい、結局、何事もなかったように、いつもと同じ日々が営まれるようになった。

だが、そんな中で、時間は刻一刻と迫ってきているのだ。
シンの帰還と、そして、クルーゼの．．．

彼がコズミック・イラの世界で何をしたのかを理解した妖夢だが、それは、ついさっきのことである。

彼女には、まだあと一つだけ、疑問があった。

クルーゼが幻想郷へと訪れる以前、すなわち生前、彼は何を感じ、何を為したか、である。

クルーゼは、そのことを、自主的に話してはくれないし、それは、妖夢から聞いても同じことであつた。

だが、彼といくらか付き合い、この前のシンの言葉を聞いて、実感がわいた。

彼は、平和を願う身でありながら、世界を一度滅ぼそうとしたのだ。何故そんなことをしたのか、何を思ったのか、妖夢は聞きたかった。だが、聞いたところでクルーゼは応えてはくれないし、妖夢として

も、聞くつもりはなかった。

だから、自らで考えることにしたのだ。

クルーゼにしても紫や幽々子にしても、いつも言っていることだ。

自ら考え、答えを導き出す。

それが、知識というもののなのだ。

とはいえ、自らで考えようにも、実は答えは、すでに半ば教えられていることなのである。

クルーゼは言っていた。

世界に、絶対などはない、と。絶対的な平和はないと。

クルーゼは生前、そのことを思い知ったのではないか？

だからこそ、全てに絶望し、世界を滅ぼそうとした。

それが、彼の言う罪なのである。

世界を滅ぼす、それはすなわち、億に達する人間を全て抹殺するということである。

直接的に、あるいは間接的に。

それが大罪でないと考える者などは、一人もいないだろう。

だが妖夢は、認めたくなかった。

己の罪を悔やむ気持ちではない。

その償いのために、死を選ぶ。肉体ではなく、存在全ての死を望む気持ちを、である。

妖夢には分からないことだが、主人幽々子は、周囲の者への慈しみと優しさのために命を落とした。

そのことを知ったとして、妖夢は、幽々子のことは許すことができるだろう。

他者の不幸を止めるために命を差し出すことを、批難はできない。

だが、クルーゼの死を許せないのは、だ。

それは、結局クルーゼは、自分のことを理由に死のうとしているからなのだ。

自分が罪深い存在だから、という理由でだ。

自分のためだけに命を落とすことは、妖夢には許せなかった。

もう、今のクルーゼには、何を言っても無駄かもしれない。彼はもう、覚悟を決めている。

だが、それでも妖夢は、クルーゼに対し、一言でいいから言いたかった。

だからこそ妖夢は、今度はタイミングを見計らうようなことはせず、あえて、自らクルーゼの方を呼び出したのである。

その呼びだし場所が、妖夢自身知らない、主人幽々子の墓標なき墓である西行妖の前だったのには、大きな理由はない。

妖夢に呼ばれたクルーゼがそこにやってくるなり、じっと待っていた妖夢は、静かに口を開く。

「シンが博麗神社に来た時、あなたが何をするおつもりなのか．．．私には分かっています」

疑問ばかりが頭に充満した、情けない顔ではなく、心のうちに決意を秘めた固い表情で言う妖夢に、クルーゼは、その言葉が嘘ではないことを感じた。

ただ、その顔には、固い決意とも違う何かがあるのもまた、クルーゼは感じた。

それが何なのか。

クルーゼの持つ能力は、こういう時に限って、その正体を教えてはくれない。

「．．．そうか．．．」

「あなたにはあなたの考えがあり、それを、わたしなんかが捻じ曲げていい道理はありません．．．それでも、言わせて頂きます」

「．．．．．」

「クルーゼ様。命を無駄にしてはいけません」

「．．．私は、私以外の多くの命を無駄にしようとした．．．最早

私自身の命になど意味はない．．．意味のないものなら、無駄にすらならん」

「その考えが、そもそも間違ひなのです。意味のない命など、この世にはないのです．．．この白玉楼の霊達にも、いずれ往くべき処がある、還るべき場所があります．．．この世に、意味のない命など、ないのです．．．あなただって、そうです」

「なら、私はすでに、命ですらないのだろう．．．ただの存在．．．世界を滅ぼそうとした、災厄そのもの．．．」

クルーゼは、すでに何もかも諦めているという具合に、自嘲気味な笑みを浮かべながら、俯いた。

「いい加減にしてください！」

だが、突如聞こえた妖夢の叫びに、その顔をあげることを余儀なくされる。

そして、その眼に見えた妖夢の顔が泣いているのが、はつきりと分かった。

「あなたほどの．．．あ、あなたほどのお方が．．．なんて、情けない．．．！」

その声は、途切れ途切れだった。

「妖夢．．．？」

「これでは、あなたは．．．逃げている、だけじゃないですか．．．自分自身から．．．」

「．．．．．」

「わたしは、あなたのことを．．．尊敬、していました．．．．．紫様だって、いつもいつも、あなたと仲良くしていたじゃないですか．．．」

「．．．．．」

「わたし達を置いてけぼりにして、一人で逝って、しまっなんて．．．そ、そんなの、嫌．．．嫌、です、よ．．．！死ぬことなんて、ない、じゃないですか．．．ここで一緒に暮らしましょうよ．．．！」

溢れてくる涙は止まらなかった。

妖夢の感極まった声は、最早ただの嗚咽と大差ないものだった。

「……………」

「それでも、あなたが、死ぬって、いうなら……ひぐつ……も、もお……あなたの、ことなんて……う……知りません……知りませんっ！」

「ま、待て……！」

クルーゼの制止を聞かず、そのまま妖夢は、どこへともなく走り去っていつてしまった。

一人残されたクルーゼの身には、世界を取り巻く絶望を思い知った時にさえ感じなかった、耐えがたい虚脱感が満たされていた。

今この時自分は、世界を滅ぼそうとすること以上に、大きく、許されない罪を犯したことを、クルーゼは理解した。

シンに平和のための勉強をさせていたのが、お笑いだ。

自分自身は、何も変わっちゃいなかった。

世界に絶望した自分を、そのまま幻想郷へと持ってきてしまったのだ。

呆然と立ち尽くすことしかできなかったクルーゼに、今度は、どこからともなく現れた紫が言う。

「あいつ、単純な頭してるでしょ……馬鹿よねえ……」

「……………」

「でも、言ってること。間違いじゃないわよ」

そう言いながら、クルーゼの眼を見据える紫の眼には、多大なる侮蔑と、怒りと、同情と、そして慈しみと哀しみが、うす暗い光の中に湛えられていた。

紫のこんな眼を見るのは、初めてだった。

「……………私でもさすがに、今のあんたの考えてることは、理解できんよ……ヤダねえ……」

いつもの胡散臭い口調をうち消したこの言葉こそ、紫の真意なのだろう。

「．．．く．．．だったら．．．っ！」

言い返そうとしたクルーゼだが、気がついた時には、紫は姿を消していた。

まるで、最初からいなかったようにだ。

言いたいことだけ言って、クルーゼを置いてけぼりにしてしまった。置いてけぼりか．．．今しがた丁度、妖夢が言った台詞だ．．．冬の寒さでは、白玉楼自慢の桜も、その鮮やかさを見せてはくれない。

クルーゼは、幽鬼のような足取りで、西行妖の幹のすぐそばまで歩み寄ると、両拳を叩きつけて、吐き出すように言った。

「だったらどうしろとっ？ 全人類を滅ぼそうとした狂気の罪に苛まれながら、のうのうと生きていけと言うのかっ。今まで殺めてきた命が呪う声を囁く中で、生きていることの喜びを感じることもできず、それでも生きていけと言うのかっ？ 平和のための己の願いを叶える機会を得られず、行動を起こすことを許されず．．．自分が敗者であることを噛みしめながら、自分が狂人であり、悪人であり、大罪人であると認めながら．．．生きていけとも言っのかっ！？」

．私には、無理だ！」

その叫びは、誰の心にも響くことなく、冬の乾いた空の向こう側へと、溶けて消えていくだけだった。

自らの心で考える。

それは、クルーゼ自身が語った言葉である。

数分後、クルーゼの前に戻ってきた紫は、下準備がいると言って、クルーゼに動向を求めた。

そして二人は、白玉楼を出て、行動を開始した。

無数の竹が生い茂る、迷いの竹林。

その一角にある永遠亭に住まう、鈴仙・優曇華院・イナバは、真っ直ぐに永遠亭へと接近する怪しい人影を捉えた。

しかもそれが、八雲 紫であれば、鈴仙は、至急その動きを制止すべく、彼女の前へと立ちふさがる。

「あら御挨拶」

冷やかな様子でこう言う紫だが、彼女は、鈴仙達永遠亭に住民にとつては、いい目で見れた相手ではない。

少し以前に起こった、鈴仙達の故郷である月の世界を巻き込んだ陰謀の首謀者こそ、他でもない紫だったのだから。

鈴仙としては、それなりに警戒しておくべき相手である。

何をされるか知れたものではないのだ。

「一体何の用です」

威圧感をこめた口調でこう問う鈴仙に、紫は応える。

「都合がいいわ．．．今回は、ちよつと頼みがあつてね。あなたの主人ではなく、あなた個人に」

「わ、わたし、だけに．．．？」

「月の賢者も呼べるなら呼んでもいいけど、別に彼女の協力までが必要としない。あなた一人さえいれば事は足りる」

「協力．．．？師匠達を散々振り回したような方に、一体何を協力すると．．．」

「いやね、実は、正しく言えば、これは私の頼みではないのよ」

「？．．．じゃあ一体．．．」

「彼の頼みよ」

紫がそういうなり、クルーゼもまた、鈴仙の前に姿を現した。

鈴仙としては、初めて会うクルーゼに対しても、警戒せざるを得ないが、紫ほどの胡散臭さは感じなかった。

そんな中で、クルーゼが静かに口を開く。

「君は、人を惑わし、幻覚の中に誘うことができる能力を持っていると聞くが、そうなのか？」

「．．．ええ。一応、そういう能力は持っています．．．お見せしましょうか？」

「．．．頼む」

クルーゼのその応えに、鈴仙は、しめた、と思った。

怪しい相手に出会った場合、まずは威嚇して、主導権を握れというのは、彼女が月にいたころから教えられていることなのである。

クルーゼと視線を合わせた鈴仙の紅い眼に、怪しい光が宿る。

それこそまさに、鈴仙が放つ狂気の幻覚のスイッチであった。

鈴仙の眼を見たクルーゼは、すでに彼女の幻覚の世界へと引きずり込まれている。

今クルーゼの眼には、自身を八方から取り囲み、銃のように形どった指をこちらに突き付ける、何人も鈴仙の姿が見えた。

一人はクルーゼのすぐそばで脇腹に指の銃を突きつけ、もう一人は背後に立っている。

さらにもう一人は宙に浮き、指の銃口をこちらに向けて、威嚇している。

そんな具合に、クルーゼの視界に映るありとあらゆる方向に、鈴仙の姿が見え、皆一様に、指の銃を突きつけていた。

この銃は、ただの脅しではなく、子供のするごっこ遊びでもない。その人差し指の銃口からこそ、鈴仙のスペルカードが放たれるというの、言わずもがなのことだった。

クルーゼのすぐ真横に立つ鈴仙が言う。

『これが、わたしの能力です。突然の無礼は、お詫びします』

今度は、真後ろから声が聞こえる。

『しかし、今あなたが余計な行動を起こせば、あなたが幻視している無数のわたしが、一斉に弾幕を放ち、あなたの精神を崩壊させるということも、理解してください』

今度は．．．最早どこからの声でもいい。無数にいる鈴仙の内の一人が言う。

『あなたは、わたしの質問に応えて頂ければいいのです。そうすれば、何もしません』

「．．．その質問とは、なんだ．．．？」

『あなたは八雲 紫と行動を共にし、一体何をするつもりです。あなたの魂胆は、一体なんですか』

「．．．戦争を、無くす」

『え？』

クルーゼの声に、全ての鈴仙が、呆気にとられたような声をあげる。

同時に、無数の鈴仙に威嚇される中で、クルーゼは続けた。

そして、彼の身体から、淡い光が放出され始める。

「この世に、平和をつくる．．．」

『な、何をっ！？怪しい動きは．．．』

「『スペルカード【ドラグーンシステム】』」

鈴仙が、攻撃を開始しようとした時には、もう遅かった。

クルーゼの身体から放たれた光が、俄然その激しさを増し、無数の光の連なりとなって鈴仙達の周囲を、目視しきれないほどの速さで疾走した。

同時に、その光の弾の一つ一つが、いくつかの鋭いレーザーを放ち、無数にいる鈴仙達を、個別に攻撃していった。

その動きは、紛れもなく、生前のクルーゼの愛機、プロヴィデンスに搭載されたオールレンジ攻撃システムそのものであった。

『うわっ！？』

『くっ！』

十一個の光の弾から放たれる合計四十三のレーザーが、ほぼ同時に、

幻覚が生みだした鈴仙の分身を貫き、消滅させていく。最終的に一人残された鈴仙が、幻覚ではない鈴仙本人の姿なのだろう。

その鈴仙を、十一個の光が一齐に取り囲んだ。

先ほどとは、まったく逆の状況になってしまったのだ。

以前の『試し撃ち』では、紫にすら勝利を収めたクルーゼのスペルカードに対して、鈴仙には微塵の勝ち目もなかった。

形勢逆転した状況下で、クルーゼが言う。

「そちらの無礼には、行動を以って返させてもらう。そちらの負けだ。大人しく、幻覚を解除していただければよいが」

『．．．．．分かりました』

鈴仙には、まだ新たな幻覚を作る余力が十分にあつたが、たとえそれを発揮し、幻覚を作ったとしても、それらもことごとく殲滅されるだけだろう。

それ以前に、もしそういう行動を起こそうとすれば、鈴仙の動きよりも遥かに速いクルーゼの弾幕の猛威が待っているだけである。

鈴仙には、最早抵抗する権利はなかった。

敗者は黙して耐えるのみ、である。

鈴仙の眼から狂気の輝きが失せる。

それだけでも、幻覚の消滅を判断するには充分だった。

そこで、クルーゼが続けて言う。

「こちらとしても、無礼なことをした。だが、主導権を握るような行動に対しては、断固として抗わせてもらう．．．何としても聞き入れてもらわねばならぬこと故な」

「分かっています．．．好きにしてください。しかし、わたしの主人と師匠には、話をつけてもらいます」

「助かる．．．何、そちらには少し暇を貰うだけだ。損害は出さないから、安心してくれ」

「．．．一つだけ聞かせてもらいます．．．あなたは今、戦争と言

いましたね．．．確かに、戦争と．．．戦争を止めると」

戦争というものは、幻想郷においては無縁のものであり、多くの者は、その言葉の意味さえよく分からないだろう。

だが、鈴仙にとっては、そうではなかった。

彼女の故郷である月の世界は、過去、戦争の脅威に晒されてきた。

この鈴仙は、そんな戦争が怖くて、逃げ出したような者なのである。彼女にとっては、戦争とは、単なる言葉でもなく、意味だけのものでもなく、明確に実感としてある、恐怖の対象なのである。

そんな鈴仙の言葉に、クルーゼは、「ああ、そうだ。正しくは止めるのではなく、起こらないようにするのだがな」と応える。

「どういうことです」

「簡単に言うと、だ。私は、別の世界からやってきた。その世界は、幾度となく戦争の惨劇に見舞われ、多くの血が流れてきた。私はそれに、歯止めを利かせようと考えている」

「そのために、わたしの力が必要だと．．．？」

「そうだ．．．無理強いはせん。だが、軽い気持ちで断るようなこともせん」

「．．．分かりました．．．．．師匠達の元へ、案内します．．．ついてきてください」

鈴仙は、クルーゼの言うことを信じて、彼に協力してみようと考えた。

もし仮にクルーゼが嘘をついているとしても、彼女の師匠ならば、その嘘は容易に見破れる。

その師匠、八意 永淋が、クルーゼの話を聞くなり、鈴仙がクルーゼに協力することを快諾したのだから、鈴仙には、最早微塵の疑いもなくなった。

地の底の館、地霊殿にて、奇妙な来客が現れた。

永遠亭から次いでこちらにやってきた、紫とクルーゼである。

紫に対しては、礼儀正しいさとりで、「あなたはこの前、巫女の影にこそそ隠れて、いろいろやってた胡散臭い妖怪ですね」と、疑り深い眼で見ざるを得なかった。

しかも、彼女の能力を以ってしても、紫の心中を察することができないという不気味さもあつた。

だが、それに対して、クルーゼには、さとりは、異様なまでの近親感を覚えた。

彼の考えていることは、逆に、驚くほどずっと読み取ることができたのである。

そして、クルーゼの心が伝えた、『シンのことで頼みがある』という言葉に、さとりの眼の色は変わった。

後はもう、他者の介入する余地はない。

以前、シンとも一緒にいた書斎へとクルーゼ達を招き入れた後には、クルーゼとさとりの、精神のみの会話が展開された。

言葉も、表現も必要ない、思念だけの会話である。

——シンのこととは、一体？——

——シンが、この幻想郷で、勉強の旅をしていることは知っているだろう．．．今回、そのことに一つの『結果』を出そうと考えているのだ．．．あと一つ、シンに重要なことを伝えることだな——

——結果．．．それはつまり．．．——

——ああ．．．シンも、故郷に帰るときが来たのだ．．．——

——嘆くことはない。それも単に、シンが君達の下へ帰ってくるための過程でしかないというのは、君にも分かっていることだろう．

．彼はもう、半ばこの世界の住人になっているのだから――

――．．．そのために、私の力を必要としているのですね．．．それは、何故です？――

――君には、人の心を読み取る能力がある．．．隠すことはない私も同じなのだから、君の考えていることは、手に取るように分かる。今君が、私と言葉を発することなく会話できているようにな――

――．．．そういうことだったのですね――

――それに、君の場合は、ただ思考を読み取るだけではないのだろう．．．？いふなれば、人に想起させた記憶を、スperlカードとして展開する能力だ――

――．．．よくご存じですね――

――私にしても君にしても、人の思考は読めても、その深層にある意識までは読むことはできない。だが、呼び起こすことによつて人の記憶、感情、そして、トラウマでさえ読み取ることが可能になる。君は、そうやって読み取った人の記憶とトラウマの中にあるスperlカードを、己のものとして蘇らせることができる．．．君には、そういう能力がある――

――．．．．．心に思つたことを隠すことができないのだから、正直なことを言わせてもらいます．．．．．あなたは、私と同じ能力を持つ、いふなれば同種であり、友人です．．．．．なのに私は、あなたから情というものを感じることができないわ．．．．．あなたの語る言葉には、優しさが無い、温かみもない．．．．．まるで、人を道具として見ているよう．．．．．シンと一緒にいるときに感じた気持ち、あなたからは感じない．．．．．これは、どうということなのですか？――

――．．．簡単な話だ．．．私は、すべての情と優しさを捨てて、思考のみに生きる存在となつた．．．最早、人ですらない．．．私の言葉は機械が喋ることさ．．．．．だが、あなたがそれを感じ取っていることを承知で、頼む．．．私に協力してはくれないか――

．．．．．シンをこの幻想郷の送り込んだのも、あなたです
ね

ああ――

ならあなたに、一つ感謝したいことがあります．．．――

なんだ．．．――

私を、シンと出会わせてくれたことです．．．ありがとう――

．．．君のような者にそうとまでいってもらえるのだから、

シンも幸福だよ．．．――

あなたの語ることが真実であるのは、私の能力が教えてく
れています．．．必要だというのなら、私のこの力、お貸しします――

ああ．．．感謝する――

それと、もう一つだけ――

．．．．．？――

死が人に何かを伝えるのは、本当に例外的な時だけよ．．．

死を以って人に教えるを説くなんて、高慢だわ．．．――

済まないが．．．そういう台詞は、もう聞かないと心に決
めているのだ．．．――

．．．．．そうですか．．．――

そこで、二人の精神のみの会話は終わり、さとりは、クルーゼの目
的に協力することに同意した。

今のところは、まだすぐに行動を起こす必要はなく、この場合は、ク
ルーゼの方も、約束を交わすだけで去っていった。

クルーゼ達が去った後の地霊殿では、お隣達が、

「どうしたんですー？さっきの話」

「どうい話してたんですか？」

と聞いてきたので、さとりは、シンの勉強に結果を残すために協力

しろと言ってきた旨を伝えた。

お燐が、感慨深げに、「へえ．．．シンのお勉強も、ようやく終わってことですねえ」と呟く。

お空が、「でもシンって、勉強して結局何がしたかったんです？」と、今更過ぎる質問をしてくる。

さとりは、「平和のために、と言っていたはずよ．．．でも平和って何なのか、よく分からないわね．．．」と応えた。

「今度、お燐に、香霖堂に行って、平和のための本でも探してきてもらおうかしら」というさとの声に、お燐は、「その必要あ、ないんじゃないですか？」と返した。

「シンがここに帰ってきたときに、平和って何なのか、気が済むまで教えてもらえばいいんですよ」

「ああ．．．そう、なるほどね．．．ふふ．．．．．あなたもたまには、賢いこと言うのね．．．」

シン達の博麗神社へと向かう道程は、実に軽やかに進んでいた。

道のりの中で、今までの旅で見かけた多くのものを、もう一度眼に映す機会も多かった。

改めて考えれば、あまり長くない旅で、この広大な幻想郷のほんの一角も見回することはできなかったが、それでも、今までの旅で得たものには、計り知れない価値があるし、この短い旅が、一生に残る記憶になるのだ。

それに、これで終わりではない。

またいずれ、再び幻想郷を旅する機会がやってくるのだ。

その時改めて、他のいろいろな場所も見回るとしよう。

そう、これで終わりではない。

その言葉は、それでも尚、胸中に湧きあがる寂寞の念をうち消さんとし、何度も心の中で響き渡った。

こういう時に限って、日が経つのは早く、シン達の足も進む。

一晩だけ、手頃なところで軽く野宿すると、その次の日にはもう、ちよつと歩けば博麗神社だった。

さすがに、冬の季節の早朝というのは、寒さも身に堪えるが、歩いていけば、気にならなくなるだろう。

そういえばこの辺りは、レティと出会った場所に近かった。距離はまだ少し遠いが。

だが、彼女と会った時の、身に染みるような寒波を感じなければ、彼女と会うことがないのだということを理解できた。

まあ、歩いていてはったり会うようなことを期待はしない。その内また、である。

シン達は、朝早くから再び歩き始めた。

が、ほんの1？も歩いていないころになって突然小傘が、「少し疲れた、休もうよ」と言ってきた。

藍が続く。

「そうだな。私も疲れた．．．ほら、あそこにちようど、みんなで座れるような岩もある。あそこに座ろう」

「どうした？まだちよつとしか歩いてないのに．．．」シンとしては、小傘が我儘でこういうのは分かるが、藍まで同じことを言うのは解せなかった。

シンは、まだ微塵も疲れてはいないし、藍達なら尚更だろう。しかし藍は、不思議そうなシンの言葉に対し、こつこつと。

「この前まで、聖輦船に乗って、宇宙空間にいたんだ。無重力のせいで、筋肉が弱まってるんだと思う」

「そうかもしれないけど、聖輦船の結界の中では、1Gぐらいの重

力があつたはずだ。筋肉が弱まるなんてことは、ないと思ってただけど．．．」

「じゃあ、長い間船の上でのんびりしてたから、足がなまってんだ」

「でも昨日は、ずっと歩き通してもなんともなかったろ？」

藍とシンの会話に、橙が割って入り、こう言う。

「ああもう！いいから休もうよ、ほら」

「．．．ああ、みんながそう言うなら、分かったよ．．．」

シンは、少し戸惑いながらも、唆されるままに、一時休むことにした。

まあ、急ぐ必要はないのだから、のんびり行くのもいいだろう。

中々大きい上に、形も平らで滑らかで、高さが腰ぐらいの、示し合わせたようにおあつらえ向けの岩の上に、皆で腰掛けた。

博麗神社へと続く林道には、風の吹く音も、葉のかすれる音も微かで、どこまでも静かだった。

冬の寒波もそれほど強くなく、快適だと思える環境だった。

こういう雰囲気は、落ち着いて何かをするのに快適だった。話をしたり、考えたり。

小傘が、思い出したような声で言う。

「そういえばさ、シン。あなたの詳しい話って、聞いてなかった気がする」

「俺の？」

「うん。あなた自身の話。兵隊さんやってて、結構強かったとか、いろいろ嫌なこともあったってことは聞かせてもらったんだけど．．．もつとさ、細かい話が聞きたいな。どういう風に生まれたとか、どういう友達がいたとか」

藍が続く。

「ああ、私も聞かせてほしいな」

「うん。あたしも」橙も続く。

「俺の．．．話しか．．．」

シンは、ここにきてようやく、どうして小傘達が、ロクに疲れてもないシンを足止めして休ませたのかを知ったような気がしつつ、呟くように語り始めた。

「．．．正直、楽しんで聞けるような話じゃないし、俺としても、気楽に人に話したくなかった．．．それは、今でもそうだ」

シンの中にある心の弱さと不安定さを知っている藍としては、自分達の迂闊な発言を省み、申し訳なさそうに、「ああ、ごめん。話すのが嫌なら、いいんだ。いいんだよ」と言うが、それに対し、シンは、彼女らに親しみを込めた眼をやり、応えた。

「．．．みんなはもう、俺の友達だ。何が嫌なもんか．．．話すよ、俺のこと、全部．．．」

俺は、コズミック・イラの、オーブっていう島国で生まれた。両親は、俺と同じコーディネイターだったけど、別に何かすごい才能があるっていうわけでもない普通の人だった。妹もいた、仲良かったぜ？それに、ナチュラルにも、そんなに親しいとは言えなかったけど、友達もいた．．．割と、子供のころの人生は、楽しかった．．．割とじゃないな、すごく、楽しかった．．．でも、戦争で、俺の家族はみんな死んだ．．．ナチュラルの友達も、他の、今まで出会った人達もみんな、無事だったのかは、今でも分からない．．．俺には、生きていく道がなくなっただけ．．．あつたのは、世の中に対する憎しみだけだった．．．あと、それと、泣くことしかできなかった俺の心を、誰かが慰めてくれることを．．．．．そして俺はそのまま、軍人として生きていく道を選んだ。自分を不幸に陥れた戦争を、起こす側に回ろうとしているっていう意識はあつた。でも俺は、戦争を止めるために戦って、俺のような不幸な者を増やさない、っていう決意をもって、兵士になろうって思ってたんだ。少なくともその頃はな．．．まずは士官学校でいろいろ勉強したんだだけ

ど、その頃は、あんまり楽しいことはなかった．．．でも、新しい友達ができたよ。ルナマリアってのと、ヨウラン、ヴィーノ、そしてレイ．．．ヨウランとヴィーノは、中々気さくな連中で、正直頭はよくなかったけど、人の良さなら、誰にも負けてなかったと思う。ルナマリアは、俺より結構大人な考え方の持ち主のように見えてたんだけど、結構茶目っ気があって子供っぽいところもあった。実はそいつと俺、一時付き合ってたんだぜ？でもまあ、すぐに別れたけどな．．．それで、レイはな．．．簡単に言えば、さとりみたいなヤツだった．．．当時の俺の中で、誰よりも大きな存在だったでも今は、もういない．．．士官学校で会ったあいつらとは、今でも続いている、俺の大切な関係なんだ．．．

そうだなあ．．．なあ、藍」

「ん．．．？」

「俺はまた、ここに帰ってきて、この世界に住むよ．．．でもまた、すぐにでも、コスミック・イラに戻るようにしてほしい。簡単に、二つの世界を行き来できるように、紫に頼んで欲しんだ．．．我儘かもしれないけど、やっぱり向こうの世界は、俺の故郷で、その人達とも、たまにでいいんだけど、顔を合わせたいんだ．．．コスミック・イラ自体には、正直未練はないから、無理ならそれでいいんだけど．．．」

「いや、ちゃんと頼んでおくよ。あなたの頼みだ。紫様が駄目って言っただんなら、三日三晩土下座しながらでも頼みこむ」

「はは、そこまではしなくていいよ。あんた達が困るんなら、俺も頼まないさ．．．まあ、それでな．．．

ルナマリア達と一緒に士官学校を卒業して、ザフトの新鋭艦のミネルバの配属になった時は、素直にうれしかった．．．俺が、いろんな人から期待されてるってことなんだからな．．．でも、いざミネルバに配属されてからは、大変だった．．．今だから大変だったな

んて言えるけど、当時はもう、地獄の一丁目にいる気分がしてた．．．
．．．また戦争が始まったんだ．．．しかも今度の戦争は、とことん泥沼化した。俺の故郷、オーブも巻き込みながら．．．しかもそんな中で、だ。俺の家族を殺した当事者である、キラ・ヤマトが、テロリストとして、戦争に介入してきたんだ。今じゃあもう、あの人の行動が、テロなんかじゃないってのは分かってるけど、あえて、当時のザフト軍の見方として、テロリストってことにしておく．．．まあ、そういうこともあって、戦いは泥沼なんてもんじゃなくなつた。混乱を極めたつてやつさ。正直、運が悪ければ、俺は今ここにいなかった．．．そんな戦いの中だったんだけど、俺は、また大切な出会いをすることができたんだ。ハインツという先輩と会ったんだ。強い人だった。すぐに別れることになったけど、結構、懂れた。こついう、かつこいい軍人になれるんだって．．．．それと、ステラって娘がいてね．．．戦争のために、身体とか頭にいろいろされてた娘だ．．．とてもか弱い女の子だった．．．初めて会った時、彼女はうつかりして海に落つこちで、溺れながら泣いていた．．．その時、俺はさ、初めて、自分を慰めて欲しいと思わず。他の誰かの心を慰めて、助けになつて、守っていきたいって思うことができた。初めて、だ．．．あの時のことを、俺は今でも覚えてる．．．ステラは、もういないけど。あの娘と一緒にいて俺は、生きることの価値を思い出した．．．本当に、大切な人だったんだ．．．でもステラは、戦争のために半ば作られた存在で、戦うことを強いられてきた．．．そして俺は、そんな彼女を、結局助けることはできなかった．．．彼女が死んだ時のことは、さすがにもう、思い出したくない．．．辛い．．．．そして俺は、その時、俺の中で、もう一度固まろうとしていたものが、一気に崩れていくのを感じた．．．．正直な気持ちは、許して欲しいと思つてる．．．俺は、目の前にいる敵を、そういう役割を持たされてしまった存在を、徹底的に滅ぼして、怒りの捌け口を求めてばかりいた．．．その頃のこととは、正直、あまり思い出せない。まるで俺が俺じゃなくなつたみ

たいだったんだ．．．ひたすら戦い続けていた．．．戦いが終わった後でも、心が不安定で、地に足がつかないような気分だった．．．自分で自分が怖かった．．．．．でも、そんな中で、だ。何だかんだ言って、俺は戦いの中で大きな戦果をあげているらしかった。だからってことでもないけど、ザフトで一番偉い人の、デュランダル議長に、軍で最高の兵士の称号を与えられた。その時には、レイも一緒だった．．．ちょっとだけ、冷静になれた．．．憎しみを相手にぶつけるんじゃない．．．自分に課せられた、役割。自分の信じる使命のために、全力を尽くそうと思えた．．．でもそんな中だ。ミネルバでの上官だった、アスランって人が、脱走したんだ。デュランダル議長に暗殺されそうになって、仕方がない行動だったんだけど、当時の俺は、そんなことは知らなかった．．．そして俺は、ルナマリアの妹のメイリンと一緒にいることを承知で、アスランの乗る機体を撃墜したんだ．．．．．ルナマリアの落ち込んだ顔を見たとき、俺は、何が何だか分からなくなって、何も考えられなくなった．．．そして、戦って戦って、戦い続けた。でも戦争は、キラさん達の手で、ザフトの勝利でも、連合の勝利でもない、もっと大きな方向へと動き始めた．．．．．俺は、悔しかった。どれだけザフトのために頑張っても、一向に勝利が見えてこない。俺の信じていたものがことごとくうち破られてるみたいで、耐えられなかった。俺は錯乱して、喚き散らして、暴れるだけ暴れて、結局何もできなかった．．．哀しかった．．．俺のために、いろんな人が頑張ってくれたのに、命を散らせていったのに．．．．．俺は、その人達のために、何もしてやれなかった．．．．．そして、戦争は終わった．．．キラさんは、敵であるはずの俺に、平和のために協力してくれと頼んでくれた．．．戦争が終わって初めて、俺はキラさんの心を知ることができて、彼を尊敬できた．．．でも正直な話では、俺の中に、アイデンティティが完全になくなっていったんだ。もう、いろいろどうでもよくなってたんだ．．．もちろん、平和を創るうっていう気持ちは確かだった．．．そのためには、どん

なことでもやってみせると思った．．．でも逆に言えばそれは、平和のため以外に、生きる理由がないってことだと、あの時の俺は思っていたんだ．．．世の中が平和になったら、正直俺は、死んでいたかもしれない．．．．．そして、そんな中でだ．．．この幻想郷にやってきた．．．

後のことは、みんな、分かるだろ？」

「うん」小傘が頷く。

「みんなのおかげで、俺はまた変わった．．．生きていることが素晴らしいことだって。心と心のつながりが、とても温かいものだって、もう一度分かったんだ．．．今の俺が在るのは、コズミック・イラで出会った人達と、そして、みんなのおかげなんだ．．．．．みんなは俺の、大切な関わりなんだ．．．．．何か、長くなっちゃったな．．．へへ．．．こういう、自分語りすることって、あんまりなかったから．．．」

「うん」もう一度頷いてから、小傘は、笑みを浮かべて、こう言った。

「シン、あたしうれしいよ」

「え？」

「ああ、私もうれしい」藍が続く。

「．．．．．？」

「だって、私達のことを、大切だって、言ってくれたもの．．．」

「ああ．．．．．ああ．．．」

「私は、式神で、コンピュータだ．．．だけど、友達の大切さによく知ってる．．．フアジイな思考とかいうのじゃない．．．絆って、とても温かいんだ．．．シンが、私達と絆を持つてくれている．．．そう考えると．．．とっても幸せなんだよ．．．あなたと会えて、本当によかったって思う．．．．．シン、あなたのこと、好きだよ。大好きだ」

「．．．あたしも」小傘が続く。

「あたしだつて！」橙も続く。

その言葉を最後に、シン達は、何も言わなくなった。
言葉はもう、いらなかった。

このひと時が、そして、これから永遠に残る思い出と、皆との関わり．．．絆があれば、それで充分だった。

しばらく、心を満たす暖かい感覚と幸福に身をゆだねていた後、シン達は、今度こそ、一息に博麗神社に向かうべく、再び歩を進め始めた。

シンはこの時ようやく、過去より複雑にうねる己の運命の道が、真っ直ぐ続く一本の道になったのを感じた。

己の運命が、切り拓かれたことを．．．

そして帰還の時は、すぐそばまで近づいてきていた。

PHASE - 20 『最後の力』 Aパート

命の進むままに、生きる。

それこそが人の生き様であり、尊さである。

戦いであるなら、一命を賭して、戦い続ける。

求めるものがあるなら生涯を捧げて手に入れる。

そして、成し遂げるべきものがあるならば、己の全てを以って成し遂げる。

それが、人の力だ。

その力の全てを懸けて戦うのが戦士であり、男だ。

男なら戦えと、無責任な者は言う。

だが、その通りだ。

つい最近見た景色のように感じる。

現に、ほんの数カ月ぶりに訪れた博麗神社の境内は、舞い落ちる木の葉も大分少なくなっているということ以外には、大きく見違えるようなところがなかった。

見た目だけでは、まさしく、何の変わり映えもなく、時間が、微塵も動いていないようにさえ感じた。

だが、もう一度ここに訪れたシンの心は、そうではない。

たとえ、戦争で言うところの戦略が推移したりすることもないような短い期間だけのこととはいえ、彼の価値観は大きく変わった。訳も分からずこの幻想郷に飛ばされ、半ば不本意に旅をすることになったが、そのことで得たものは、計り知れないほど多く、大きかった。

後は、それを持って、コズミック・イラへと戻り、心赴くままに、平和と言うものを探求していけばいい。

最早、未練はなかった。

いずれはまた戻ってくるのだから、当然である。

そして、シンの到着を、クルーゼ達もまた、待っていたのである。シンが鳥居をくぐったその先には、もうクルーゼと紫が待っていたのである。

シンは、そのまま、ひと思いにクルーゼのすぐ目の前にまで歩み寄り、そして、クルーゼと紫の二人に対して、言った。

「準備は、できてるんだろ。だったら、今度こそ早く俺を元の世界に帰してくれ」

クルーゼは一瞬だけ沈黙して、応えた。

「その前に、だ．．．聞かせてもらいたいな」

「．．．何を」

「コズミック・イラに戻った後の、君の明確な行動．．．あるいは、君達が行う政策だ．．．ただの思想だけでなく、はっきりとした行為を、私に示して欲しい．．．」

クルーゼの問いは、即ち、シンが得たものを活かして、シン達が、世界をどういう風に変えていくかという、具体例を聞いていた。高等な考えでも、それを実践する機会がなければ、意味はない。

シン達が、この幻想郷で得たことを元に行動するというのは、絶対に必要なことだった。

「元の世界に戻って、何をするかってことか．．．．．細かいことは、キラさん達に任せるし、そっちの方が確かだと思うけど．．．

俺としても、世界をこうしたいって考えはある．．．例えばまずは、オーブを拡大する」

「ほう？」

「正しくは、オーブと似たような、中立的な国家か、あるいは特別区を、いくつか設ける。そしてそこで、ナチュラルとコーディネイターを、形だけでも共生させる．．．．形からでも、一緒に生活して互いの考えを伝えあう機会が得られれば、両方とも、少しだけでも理解し合うことはできる。それは、オーブが証明してくれた。無理やりにでも、お互い共生させれば、いずれ必ず相互理解は叶う．．．ただ、いきなり全人類を、いがみ合ってきた相手と共生させるってことはできっこない．．．ラクス・クラインは、それを実践しようとしているし、俺だっていずれは、全人類が共生することを目標にしているけど、さすがにそれはすぐに叶うことじゃない。全てのコーディネイターとナチュラルを同じ場所に住まわせてしまえば、結局は、コスミック・イラ初期の、殺伐とした情勢に戻ってしまう。だからまずは、小さなところから始めるんだ．．．．しかも、徹底した管理と、言い方は悪いけど、圧力の下で．．．」

「圧力．．．とは？」

「まずは、望む者、そして第三者が適正を選び取った者だけで、特別区を作る．．．そしてその中で、半ば強制するんだ．．．お互いを理解することを．．．強制とは言っても、要は、犯罪や差別的行為を徹底的に取り締まるっただけだ。相手を蔑むような行為に対して、断固たる姿勢を取る、というだけだ．．．そして俺は、そのための組織を作るべきだとも思う。特別区においてのみ機能する、犯罪と差別を徹底的に取り締まる、警察的な組織が。組織としての利益ではなく、公共のものを絶対的に守るための．．．それは、キラさん達クライン派や、オーブの士官の人達を中心に結成すれば、間違いない組織になると思う．．．．つまり、差別と弾圧を絶対に許さないという管理体制を作る。お互い友好を深めようとする者に関しては、快適で、穏やかに暮らせるような環境をな」

「そのためには、人々に圧力を加えることも構わない、か．．．
これでは、やっていることが、ギルバート・デュランダルの手
イニープランと大差ないのではないかね？」

「そこなんだよ．．．議長のやろうとしていたことは、結果として
は間違いだったけど、それでも、正しいと思える部分はあった．．
仮に、遺伝子で決められた生活を強制的に送らせて、それが定着し
たのだとしたら、結局、それも平和の一つの形だ．．人がそれを、
当たり前だと思うようになって、疑いを持たなくなれば、不満はな
くなり、戦争はなくなる．．もちろん、何もかも決められた人生
なんて、誰も認めないから、 دستیニープランは排除された．．
でも、安定した社会のために、管理することも、絶対に必要だと思
う．．自由は、人のために必要なものだ．．だけど、そういう
綺麗事だけじゃ、平和は叶わない。行き過ぎた自由の結果が、差別
と戦争が横行し、平和に近い環境で過ごす者が、戦争に無関心にな
るような社会だったんだ．．だから俺は、平和というものを強く
意識させることが必要なんだと思ったんだ。無関心でいてはいけな
い。逃げてはいけない。ちゃんと、人類全体の問題に、人々が眼を
向けるように、行動させることが．．そのために俺は、議長のデ
スティニープランを極限まで和らげて、少しでも封建的に、そして
独裁的に、人の心を尊重する社会を作る．．もちろん、人類全体
にこのことを押しつけても、全ての人が、すぐにそれを認められる
とは思えない。そこはもう、仕方がないことだ．．だからまずは、
望む者だけで、あるいは、見込みのあるものだけで、小さいところ
から始めていく．．そしてそれを、少しずつ拡大して、結果的に
全世界を包み込むムーヴメントに発展させる。思えばキラさん達は、
急ぎ過ぎていたし、それに、あまりにも優しいことを考え過ぎてた．
．自分から相手を信じることは大事だけど、時には、無理矢理で
も信じさせることも、必要だと思う、少しずつ、ゆっくりとな」
「．．しかしそれでは、限らない時間を必要とするぞ。君達の世
代では、間違いなく平和をつくることはできない」

「そりやそうだ。人類が万に達する時を経て実現できなかったことを、俺達だけで実現できるとは思えない．．．だからさ、俺たちの次の世代にまで、続けていくんだ」

「だが、その次の世代が、道を誤らないとはかぎらんぞ?」

「そうかな．．．それでも人類は、大昔の、人を家畜同然に扱うような時代からは、確実によくなつてきている．．．完全に、とはいえないけど．．．それに、ナチュラルとコーディネイターの確執だつて、ほんの少しずつでも、よくなつてきてるはずなんだ．．．人類は、過去の間違いをしつかりと認識して、改善はできなくても、意識することはできると思う．．．決して、前よりも悪い方向に行くことは、ない、と信じられる」

「……そこまで言い切れるか……？」

「ああ．．．言い切れる．．．結局はただの綺麗事だけど、俺は人類を信じてる」

「．．．だが、人には飽くなき闘争心がある．．．戦争と称して、己の力を振りかざすような性質がな．．．それがあゝ限りは、平和は難しいぞ」

「闘争心って言うのは、他の言い方をすれば競争心であり、向上心だ．．．そういう気分に変わることができる．．．だから俺は、そういう人の性質も、いい方向に活かしていきたい」

「例えば、どんな風にだ」

「宇宙開拓に、競争を持ち込むんだ．．．そうだな．．．俺は、火星のテラフォーミング計画を設立してみたいと思う、ゆくゆくは、木星移民もな．．．そしてそこに、二つの組織を投入するんだ。統括自体は一つの大元のところにとめて、それ以外はまったく別の資金源と、形態を持つ、別の組織をだ。そこに、先に言った特別区の時の話のように、見込みのあるナチュラルとコーディネイターを、分け隔てなく参加させる。そして、先に火星を人の住める場所にできた方は、英雄の集まりってわけだ。ほら、『地球は青かった』って言う言葉を言った人がいただろ？そんな感じのさ．．．そして、

二つの組織の持つ二つの計画は、競争する。そこには、イデオロギーとか、互いへの反感なんてものはないはずだ。あるのは、同じ目的へと向かう、向上心と野心、そして希望だ．．．スポーツと同じようなものだ。お互い敵だけど、それは同時に、同じ環境で同じ目的のために行動する仲間でもある．．．．．それにさ、競争すること、高い水準へと向かうのって、経済が成長していくのに似てると思わないか？．．．．．ということとはつまり．．．」

「なるほどな．．．テラフォーミング計画と共に、それを土台にして企業競争が始まり、経済は活性化し、豊かになる」

「しかも、それだけじゃない。宇宙開拓という新しいフィールドに立てば、今ある技術力のさらなる向上が必要になる．．．そしてそのために、技術の開拓は促進され、人類の持つ文明はさらに発展する．．．その過程で、地球環境を保全する資源の使用法が見つければ、最高だけど、それは望みすぎだ．．．でも、そういうのって、現に今この時でも、結構見つけれてるものだろ？」

「つまり．．．内側にある問題に眼を向けつつ、新たな視点を持つて、外側にある可能性に眼を向けることで、人類はさらに、もう一步進化する、というのだな．．．そしてその過程で、内側の問題をも解決する革新を迎えることもできるかもしれない．．．．．樂觀的でも、中々考えているじゃないか」

「それに、国と言うものの枠組みを取りはらって、人類全てを一つに統合するというのなら、その過程で、教育することに力を入れるべきだと思う．．．自分達の次の世代を担う子供達のために、何が正しいのか。人類が、今までどういうことをして来たのかをちゃんと教えて、考えさせる必要があると思う．．．技術力の革新と、それに続く破壊の歴史も、全て教えて、その上で考えさせて、自分の答えを見つけさせる必要があると思う．．．何も知らないまま、大人になってから平和が何なのかって考えても、間に合わないんだ．．．小さい頃からでも、多くの事を学んでおく必要はある。そのためには、まずあらゆる国家を一つに統合する必要があるし。そのた

めには、武力の行使以外なら、多少強引な手段に訴えるのも仕方がないと思う．．．もちろん、急ぎ過ぎたりはしない。要は、何十年かけて、連合政府とプラントを一つにすればいいんだ」

「．．．だが、その数十年の間に、新たな戦争の火種が生じたら、どうする．．．」

「そうならないために、まずは軍縮だ．．．いや．．．それも必要ないかな．．．むしろ、クライン派の軍事力を拡大する。オーブ軍と連盟を組みつつ、連合、ザフトの両軍から、キラさん達の考えに賛同する者達を吸収する。特にザフトでは、ラクス・クラインを尊敬する人は今でも多いから、味方はたくさんできる。なら後は、連合軍に対して、強い圧力をかけつつ、ザフトの動きも牽制していけば、お互いに戦争する気は起きなくなる。たった二つの戦艦で全面戦争を終わらせたような連中が、勢力を拡大したんじゃ、絶対に勝ち目はない。それなら、そもそも戦おうとも思わない．．．言うなれば、キラさん達には、抑止力、『脅し』になってもらおう。もちろん、人に圧力をかけるんじゃない。俺たちは、あくまでも戦争に圧力をかける。ただ、『力』を抑え込むだけで、人の『心』に対しては、あくまでも友好と自由を以って接する。そうすれば、反感を覚えるものもいなくなる。戦争が起きなくて気にくわないなんてのは、ロ・gosみみたいな連中だけだ」

「．．．ほう？」

「これ以外のことは、正直上手く考えられない。これから人類にどういう問題が生じるのか分からないからな．．．でも、その問題に対して、上手く対処していく自信はある．．．でも、俺なりにいろいろ考えてみたけど、改めてみると、結局俺の言ってることは、多くの人が思っている、ほとんど当たり前のことなんだと思う．．．それに、完璧に正しいとも思えない．．．不安は、ある。恐怖もある。もしかしたら俺達が今度は、世界を滅ぼす張本人になるかもしれないんだ」

「それはそうだ。自分が絶対的に正しいと信じ切れるものなど、い

はしない．．．そして、当たり前のことを当たり前を考えることができるなくなりつつあるのが、今の世界だ．．．そんな中で、今のよ
うなことを憶目なく言えるような存在は、救いになる．．．もし君
が、この幻想郷に来たことでそこまで考えられるようになったとい
うのなら、この世界に送り込んだのは、やはり正解だったのだと思
う．．．」

その言葉はつまり、クルーゼが、シンの考えを認めたことを示して
いた。

すなわち、少なくともクルーゼには、シンのこの考えは、コズミツ
ク・イラの世界に通用すると思えたのだ。

何の気兼ねもなく、彼を送り返してやることができる。

だが、そんなことは、こうやって実際に言葉にして聞くまでもなく、
大体は分かっていることだった。

別にクルーゼには、一々、帰還しようとするシンに対して、こんな
ことを聞く必要はなかったのである。

だとすればなぜ、半ば立ちふさがるようにシンの前に現れ、彼を足
止めて問いただしたのか。

その理由こそ、クルーゼの最後の目論見だったのである。

「だが、まだ君には、分かっていないことがある」

「．．．なに？」

「絶対に取り払うことのできない、人の心の中の闇だ．．．私のよ
うな狂人のな．．．」

「．．．．．？」

突然のクルーゼの言葉に、シンは呆氣にとられたような表情を浮か
べた。

だが、俄然低い唸り声のような口調でこう言ったクルーゼの眼に、
異様なまでの妖氣がこもっているのを感じたシンは、何かが起きよ
うとしているのを察した。

まだ何か、大きな事態を、クルーゼは起こそうとしているのか．．．

？

その答えは、すぐに判然とした。

「連携スぺル。想起【賢者と狂人の境界における空想現実】」
バーチャルリアリティ

クルーゼの不可解な言葉と共に、博麗神社の本堂の方から、二つの人影が現れるのが、シンには見えた。

一人はさとりだ。外に出られないはずの地霊であるさとりが、何故ここにいるのか・・・？

そしてもう一人は、初めて見る者だった。兎の耳のようなものが生えており、学生服のようなものに身を包んでいた。

一体何者だ？

そんな考えに屈託し、予兆なく現れた謎の少女の姿に眼を惹かれた瞬間が、クルーゼの術の発動の時だった。

4つの能力を融合させた一つのスぺル。その名こそが、鈴仙とさとりが行動を開始する合図であった。

事前に打ち合わせはし、各々が何をすべきかということは分かっていた。

だが、実際にそれを実行して、何が発生するのかというのを、確実に分かっている者は一人もいなかった。

理論だけが独り歩きし、体感したものがいなかったのである。

発動してからの、言うなれば出たとこ勝負、それが、クルーゼ、紫、

さとり、鈴仙4人分のスぺルカード。想起【賢者と狂人の境界における空想現実】なのである。
バーチャルリアリティ

まず、さとりがクルーゼの脳裏にある記憶を読み取り、それを明確なヴィジョンとして展開した。

さらにそれを、鈴仙の狂気を操る程度の能力で、相手に限りなく現実的な幻覚として投影する。

シンと、謎の少女鈴仙の視線が交錯する。

その瞬間、彼女の眼に、狂気の色が宿り、シンは、彼女の眼の中に身体が吸い込まれるような感覚に襲われた。

それが収まったかと思うと、次いで襲ったのが、視界が真っ白に染まる強烈な光であった。

それは、網膜から送られる信号ではなく、脳に直接作用する狂気の波だ。

鈴仙の作り出した、正しくは、クルーゼの記憶を投影した幻覚が、シンの感覚神経に侵入した瞬間である。

光が一瞬で消え、正視できるようになった視界に映る光景を、シンは信じたくなかった。

いるはずのないもの。あるはずのないものが、すぐ眼の前にいたからである。

「フ．．．フリーダム．．．っ!? 何で．．．」

フリーダム。キラのかつての乗機であり、シンの家族を殺した時の機体が、すぐ眼の前に、雄々しい姿を見せていたのである。

自分の肉体が、明らかに宙を浮いていること、そして、周りの景色が、明らかに博麗神社の境内でなく、宇宙空間のようなものになっていたこと、そして、クルーゼも紫もさとり達も姿を消したことは、最早どうでもよかった。

シンには、眼と鼻の先で、その神々しくさえある双眸を輝かせる自由という名のMSしか見えず、他のものは、一切眼に入ることがなかった。

眼が見開かれ、瞳孔が散大し、脳内が真っ白になったシンに、クルーゼの声が聞こえた。

あの時と同じ、心に直接語りかけてくる声である。

——君は、人の心を信じることを知り、同時に、その心を管理することの必要を知った．．．それは、君がどこまでも人を愛し、信じることでできているからこそだ。だが同時に、この世には、絶対に居てはならない者も在る．．．ロゴスのような、人の心ではなく、枠組みと権力と、保守のみに生き、人を家畜にする者達．．．そして、確固たる意思の下に、世界を滅ぼそうとする者達だ——

「ク．．．クルーゼか．．．！一体どこから．．．何でこんなことをっ！？」

——聞け！シンよ！——

突如、眼の前に迫ったフリーダムの双眸がぐつと後ろに下がると、次いでシンの眼前に突き付けられたのは、その右腕に持つビームライフルの銃口だった。

空気を焼き鉄を穿つ光を放つ筒の先が、その奥底にある奔流の根幹まで見せながら、シンの前に現れたのである。

「．．．っ！？」

シンは息を呑んだ。

家族が灼熱の炎の中で息絶えたその瞬間のことが、思い出されるようだった。

——人の心を知ろうとも思わず。ただ己の狂気の向かうままに災いを振り撒く者達．．．そんな者達には、平和のための言葉を聞く耳などはない。尊い言葉も、切なる願いも、無限の狂気の前には無駄なものになる。その時、君達に残された道は．．．戦うことしかない．．．分かるか！君達がどれほど平和を愛し、武器を捨てようと、いずれ必ず、戦わねばならない時がある！世界を覆い尽くそうとする狂気の呪いに対して、平和のためにな！——

「あんたは．．．まだ何かを．．．っ！？」

——世界に現れる絶対的な悪．．．私もその内の一人だ——

「なっ．．．それは、もう過去の話じゃないか！もうあんたには、

世界を滅ぼすような意思是．．．」

———「それがあるのだよ！———」

「だが、もうあんたは死んだ人間だ！今のあんたはただの幽霊か何かだ！そんなあんたに、世界を滅ぼすことが．．．」

———「できるのだよ！現に私は、例え魂だけの存在であっても、君と今しがた語りあったところだ．．．意思さえ残っていれば、人心を動かすことは、扇動することはできる。怨念という力を以ってな！———」

「あ、あんたは．．．っ！？」

———「君に対してやったことなど、ただの道化としての振る舞いであったとしたら？本心では、今なお、世界が滅ぶことを望んでいるとしたら！？しかもそれが、揺ぎ無い意思だとしたら！———」

「く．．．っ」

———「そう．．．戦うしかなかるう！———」

フリーダム那双眸が強く輝く。

同時に、そのシルエットが黒い影のようなものに覆われたかと思うと、少しずつ、歪むように形が変わっていく。

巨大な羽を持つ機体がやがて、まったく別のシルエットを持つMSへと変化していく。

全体を覆っていた影も取り払われ、新たに見えたその姿に、シンは、フリーダムとは別の既視感を覚えた。

「レジェンド．．．？いや、違う．．．！」

親友レイの乗機であるMSに酷似しているが、細部が違う。だとすれば．．．だ。

キラに一度聞いたことがある。

ヤキンドゥーエ戦役にて、彼が最後に戦った機体。

レジェンドと同じドラグーンシステムを搭載する、クルーゼの最期の搭乗機。

「これは．．．プロヴィデンスッ！？」

——シンよ、思い出すがいい！．．．己が身を焦がしながら生き抜いてきた戦場の姿を！そこで繰り広げられる、恐怖と哀しみの連鎖、呆気なく消えていく命の虚しさをなっ——

今一度、先ほどと同じように突き付けられたビームライフルの銃口と共に発せられたクルーゼの声が、シンに想起させた。

ハイン、ステラ。そして、名前すら知らない多くの者達の、死。そして、愛する家族達の死。

——私は、再びそれを成す！地獄の争いをな！そしてシンよ！ちっぽけな君が、その中で生き抜いていくために得た力．．．それは一体、何だったのだ！——

耐えがたい哀しみと、抑えがたい痛み、そして恐怖。

それらを『敵』にぶつけるために、あるいは、己の命を繋ぐ力に変えるために、シンに授けられた、究極の力。

運命の名を冠するMS。

その姿がシンの脳裏に再生された時、クルーゼの冷ややかな声が、脳内で響いた。

——だが君には、死んでもらう．．．——

同時に、シンの眼の前の光景全てが、スローモーションに転じた。深い深淵の中に充満される光の奔流もまた、ほとんど止まっているような速さで、シンの眼前で展開された。

今、プロヴィデンスの構えたビームライフルが、放たれようとしていたのだ。

MSの装甲すら容易に貫通するビーム光は、人が浴びれば、まず間違いない蒸発である。

シンは理解した。

信じたくないという気持ちがあろうとも、最早納得するしかなかった。

クルーゼは、再び世界を滅ぼそうとしている。

そしてそのために、今、シンを殺そうとしているのだ。

今までの勉強など、ただ単に、クルーゼがシンを、そして世界を絶望の中に叩きこむための戯れでしかなかったのだ。

シンは、今何としても、クルーゼを倒さねばならないと考えた。

だがその時には、すでにビームライフルの銃口内のビームの滞留は臨界点に達し、今まさに、撃ち放たれんとしていた。

もう遅いのか？

結局、何もできないまま、殺されてしまうのか？

倒すべき者を倒せず。世界を平和にもできず。

ようやく見つけた、己の生きる目的を、果たすこともできず・・・

脳裏にへばりつく、運命のMSの双眸。

平和のためには、戦うしかないという答えに辿り着いた時、最高の力をシンに授けたマシンの双眸が、シンの脳裏で、眩い光を放った。

そして・・・

シンの乗機、デステイニーが、プロヴィデンスより放たれたビームの光を、左腕部のビームシールドで受け止める。

二つの収束粒子が干渉し、撃ち消し合うスパークを発生し、プロヴィデンスのライフル光は、宇宙空間へと霧散して消えた。

同時に、ビーム同士が衝突することで生じるエネルギーの反発が、デステイニーの機体を僅かに後方へと逸らして、プロヴィデンスから距離を取らせた。

姿は違えど、ほとんどそっくりな顔を持つ二機の人型の機械、モビルスーツと呼ばれる兵器が、宇宙空間の中で、睨み合った。

シンは、いつの間にか自分がデスティニーのコックピットにいることに驚愕しつつも、ようやく、今見ている光景が、現実ではないのだということを悟った。

しかし同時に、眼の前で身構えるMSの姿は、そして、今自分が収まるコックピットの雰囲気は、とても夢幻とは思えない現実味があった。

クルーゼ達のスペルカードは、今まではまだ、ただの準備期間でしかなかった。

今こそが、真骨頂なのである。

クルーゼの記憶を元に鈴仙が展開したフリーダムとプロヴィデンスの幻覚が、シンの記憶と、闘争心を蘇らせる。同時に彼に、己の乗機であるデスティニーの姿を想起させた。

それをさとりが読み取り、鈴仙の幻覚に、新たに組み込む。シンに、己がデスティニーに搭乗するという幻覚を見せたのだ。

そしてそこで、紫が、現実と空想の境界を操ることで、まやかしの映像を、限りなく現実的な空間へと昇華させる。

かくして、戦場である宇宙空間も、そして二機のMSも、限りなく現実に近い、シンとクルーゼだけの戦場、バーチャルリアティ―を形成したのである。

そして、幻覚が現実に昇華した時、鈴仙でさえ操作することのできない、シンとクルーゼの二人でしかその行く末を決めることのできない世界が作り上げられたのだ。

シンには、そこまでの事は理解できなかったが、自分が今、幻覚を見せられているらしいということは判断できた。

「クルーゼ！どうやらあんたは、俺にまやかしを見せているらしいな！」

シンのその声に対して、クルーゼの返事は、脳に直接呼びかける声

ではなく、コックピットの内部のスピーカーから発せられた。
（そうだ。だがこの幻覚は、君の精神を完全に組み込み、仮初の肉かりそめ体さえ与えている、半ば現実の世界だ。ここでの傷は確かな痛みを伴い．．．そして、死もまた！）

明確な殺気をこめたその声と共に、プロヴィデンスが、機体背部に搭載された十一基のドラグーンを一齐に射出する。

幻覚とはいえ、死ねば死ぬ。

そのことを、ほとんど現実としか思えないリフトグリップの感触で確かめたシンは、有無を言わず繰り出されたクルーゼの攻撃に、突如発生したこの戦闘に集中することを余儀なくされた。

デステイニーの八方を取り囲みつつ、ドラグーンが、一齐にビーム砲を発射する。

数十のビームが、機体の周囲を網目状の火線を敷き詰める。

並みのMSなら、微動だにすることもできずに撃墜だ。

だが、シンの反応と、デステイニーの速度は、そこらの機体とは格が違った。

フルスロットルでスラスターを噴射したデステイニーが、その場から消え去る。

光速を超えてしまったのではないかと思えるほどの速度を発揮したデステイニーが、ビーム光が火線の網を形成するその前に、包囲網から離脱する。

同時に、ドラグーンが、その動きを追尾しつつ、背後からさらにビームを発射するが、そのことごとくを、デステイニーは回避した。同時に、秒間百発に達する火力を浴びせるドラグーンの猛威の根幹を突くべく、デステイニーは、大回りの軌跡を描いて、プロヴィデンスに接近した。

プロヴィデンスも、その動きに対応しようとするが、クルーゼは、ドラグーンの操作に集中力を取られ、プロヴィデンス本体に複雑な動きをさせられなかった。

そして、ビームの大刀、アロンドイトを抜き放ったデスティニーが、プロヴィデンスに肉薄し、その鋭い切先を突きつけた。

狙いは急所、コックピット。情けはなかった。

しかしプロヴィデンスは、わずかに機体を逸らすことで、脇腹をすり抜けさせるように、刃をかわす。

さらに、まさに返す刀で、左腕と一体化させたビームサーベルを発振させ、デスティニーの頭部目掛けて突き出す。

だが、向こうも、僅かに頭部を逸らすことで、その高熱の刃を回避する。

同時に、両機体が、急激にバックを駆け、距離を取った。

一瞬で数百m離れた二機のMSが、再び、その双眸を煌めかせ、睨みを利かせた。

クルーゼ達のスペルカードによる仮想現実とは、シン達以外にさえ作用した。

とはいえ、その効果はシン達とは違ったもので、例えるならば、今の目の前の現実を見ている両の眼に加え、シン達が戦っている世界を第三者の視点で眺めるような、第三の眼ができたような感覚だった。さとの場合は、第四の眼だ。

意識を偏らせることで、現実の世界を、あるいはシン達のいる仮想現実のどちらかを、色濃く見ることができた。

が、しかし、突然眼の前に現れた謎の光景に対して、すぐにそんなことを理解できるほどの要領の良さは、小傘にはなかった。

「な．．．何あれ？人みたいなのが動いてる．．．戦ってるように、見えるけど．．．」

呆然とした様子で、眼の前に見える光景を見つめる小傘に、すぐさ

ま事態の真相を理解した藍が言う。

「あれは、確かシンが言っていたMSという機械だ．．．多分私たちは今、何らかの幻覚を見せられているんだと思う。実際はシンに對して見せているはずの幻覚なんだけど、あまりに現実味を帯び過ぎていてから、私達の眼にさえ見えているんだ．．．だけど．．．」小傘に對する説明を簡単に済ませた藍にとっては、それどころじゃないという気分だった。

第三の眼に見える幻覚の空間で目まぐるしく動き回る二つの影から意識を逸らし、現実の世界へと傾けた藍は、忽然と姿を消した（どうやら、半ば現実化した幻覚の中に身体を取りこまれたか、あるいは、幻覚の中での存在が強くなった故に、現実の世界での存在感が薄まり、消えているように見えるのか．．．）クルーゼがいた場所の近くに立つ紫の下に歩み寄り、この事態を引き起こした理由を聞くとした。

もうやるべきことは終わったはず。なら、早くシンを還してやるべきだ。

なのになぜ、こんなことを．．．

それを聞くとした藍の動きだが、彼女よりも素早く、慌てた様子で紫の下に駆け寄った妖夢の存在に制止された。

確か、今さっきまでは境内にいないはずだったが．．．幻覚の世界が形成されている間に、やってきたのだろうか．．．

「紫様！一体どういうことを．．．！」と焦燥した様子で聞く妖夢に、紫が静かに応える。

「私とクルーゼの力で、この場に、限りなく現実に近い幻を創り上げた。この幻の中では、痛みも、そして死も、現実と同じように訪れる．．．」

「．．．なら、あの中で戦っている二つの巨人は．．．！」

「．．．．．」

紫の無言は、だからこそ、妖夢が口外に付け足した考えが正しいことを証明していた。

幻覚の世界の中で戦っている二機のマシンには、シンと、クルーゼが搭乗している。

ある種戦慄したような表情を浮かべた妖夢に対し、紫は続ける。

「そしてクルーゼは、この世界でシンと戦うことで、彼に何より重要なものを伝えようとしている．．．己の命と引き換えに」

その言葉は、妖夢が確信していたクルーゼの死を、紫もまた知っていたということを示している。

そして、紫がそう考えているということは、すなわち、間違いがないということである。

間違いなく、クルーゼは、この、幻覚の中の戦いで、命を捨てようとしているのだ。

横なぎに振りぬかれるデスティニーの斬撃を、プロヴィデンスが、紙一重のところで回避していく。

同時に、デスティニーの左足から救いあげるような角度に移動した一基のドラグーンがビームを発射するが、デスティニーは、脅威的な反応で後退しそれを回避、さらに右上方から、続けて左真横、さらに続けざまに、プロヴィデンスの機体前方に回り込みつつ正面と同時に直上、そして並行の左90°の位置から照射されたビームを、ことごとく回避した。

同時に、火線に隙ができたその隙を狙って、猛烈な前進をかけて再接近し、さらにもう一撃アロндаイトを振りぬく。

ドラグーンの内部電力が心となくなってきた故に、背部バックパツクに帰投させるクルーゼとしては、ようやく、プロヴィデンス本体の動きに集中することができた。

シンには、俄然、敵の動きのキレが上がったのが分かった。

縦に振りぬかれたアロндаイトを回避しつつ、デスティニーの右方向に回り込んだプロヴィデンスが、カウンターのビームサーベルを

横なぎに振りぬく。

だが、それに対するデステイニーの反応もまた、異様なほどの俊敏さを持っていた。

下半身の姿勢制御バーニアを最大噴射させ、まるで宙返りするように回転しつつ機体を大きく捻ったデステイニーが、ビームサーベルに交差させるようにアロンドイトを再度、縦に振りぬく。

二つの光の刃の激突から生じるスパークが、宇宙空間に輝いた。

その光は、第三者としての視点からこの戦闘を見据える妖夢の網膜にも、鮮明に焼きついた。

「二人の殺気が．．．伝わってくる．．．!」

思わず、そう呟いた。

クルーゼや、あるいはレイの持つ高い空間認識能力。

その能力同士が激突した場合、強大な共鳴が発生する。

相手の精神をが伝わり、逆に、自身の精神も伝わっているのを感じることができるのだ。

だが、能力を持たないシンには、自身の操るデステイニーの動きが大まかに読まれていることも分からなかったし、クルーゼの思考を読み取ることでもできなかった。

だが、彼の飛ばす殺気のみは、感受する手段があった。

四方八方から迫りくる、ドラグーンシステムのビームである。

不可解な方向から放たれる暴力的な光の奔流こそが、そのままクルーゼの、殺意の流れであるのだ。

シンには、クルーゼが、本気でこちらを殺そうとしているのが分かった。

「ど、どうして俺を殺そうとする！やめてくれ！俺はあんたと戦いたくない！」と叫んでも、（言っただけだ！私は今度こそ世界を滅ぼす！そのためには、君のような者は邪魔なのだよ！どこまでもな！）という苛烈なる応えが返ってくる以上、シンには最早、理性的に考えることはできなかった。

もう、戦うことしかできない。

でなければ、殺されるだけだ。

シンは、覚悟を決めた。

ニュートロンジャマーキャンセラーによる多大なエネルギーを得た、高性能機であるプロヴィデンスだが、第二世代の核融合炉搭載機であるデステイニーは、その性能を一段階上回っている。

それでも、クルーゼの持つ高い空間認識能力が、機体の性能を底上げしていたが、それでもまだ、勝機はある。

殊更、最大の脅威であるドラグーンシステムがエネルギー切れを起こした今こそが、最大のチャンスだった。

「クルーゼ！俺はもう人を殺したくはなかった！だが、あんたがどうしても俺と戦うというのなら、世界を滅ぼすというのなら・・・俺も、あんたの敵として・・・」

デステイニーが、アロングライトを腰にマウントし、両腕で、肩部に差し込まれたビームブーメラン、スラッシュエッジの柄を掴んだ。

「全力で戦うっ！」

そして、左腕に掴んだブーメランを、プロヴィデンスに向けて投げつけた。

ブーメランという原始的な見た目の兵器であるが、ある程度の追尾性能をもったそれは、その見た目以上の威力を有していた。

切り裂く弾丸と言ってもいいかもしれない。

目視しきれないほどの速度で迫りくる光の刃だが、クルーゼには当然、その軌跡は読めていた。

それだけではない、その後の敵の動きも、全て読めていた。

肉迫するブーメランの刃を回避すると同時に、下方に回り込んだデステイニーが放つ残りのブーメランも、プロヴィデンスは回避する。並みの機体とパイロットならば、突然の下からの攻撃に対応できず、やられていただろう。

二発目のブーメランを回避したその瞬間の、背後からのデステイニーの接近にはなおさらだ。

一発目のブーメランを投げ、そのまま下から二発目を放ちつつ後ろに回り込むまでの動きに所要した時間は、一秒あるかないかである。それほどの動きだったのだ。

しかもそれが、限界の速度ではなかった。

背後から放たれる、デステイニーの掌のビーム砲、パルマフィオキーナの拡散照射。全てを焼き尽くす火焰の掌をも、プロヴィデンスは回避する。

だが、それをクルーゼが認識した次の瞬間には、今しがたプロヴィデンスの傍を通り過ぎたはずのデステイニーの機体が、斜め頭上から、再度攻撃を仕掛けるべく接近していた。

背部に搭載された光圧推進システムが、さながら翼のような眩い光を放出していた。

未だ、通過していくデステイニーの機影が、残像として残っている。だが、遙か彼方へと過ぎ去ろうとしているデステイニーの姿がある傍らで、もう一方からは、残像ではない本当の姿のデステイニーが肉迫していたのである。

当然、クルーゼはこの動きも読み取っている。

だが、読めていても、反応できるのか怪しかった。

コンマ単位で繰り出されるデステイニーの連続攻撃、再び眼前に迫る焔の掌を、プロヴィデンスはフルスロットルで回避する。

だが、その次の瞬間には、また別方向から再接近を図るデステイニーの機体が迫る。

「ぐ．．．っ!？」

さすがのクルーゼも、うめき声を発せずにはいらなかった。幾度となく繰り出されるデステイニーの攻撃を、次々と回避していく。

だがその度に、また新たな攻撃が、別方向から繰り出された。しかも、先ほど投げられたスラッシュエッジが迂回して再びプロヴィデンスの機体目掛けて再接近し、それを紙一重で回避されたところで、その傍を通り過ぎたデステイニーが回収し、再び投げってくるという動作も一連のものとして続いていた。秒間2回の斬撃と、その合間に繰り出されるスラッシュエッジの飛来。

シンは、クルーゼが、こちらの動きを読み取っているのなら、それを承知で、読み取っても反応できないほどの速度で攻撃を加えようとしていた。

その考えは、実際に理にかなったもので、クルーゼは、デステイニーが次いでどこから攻撃するのか知っておきながらも、その攻撃を回避できるのかは怪しいものだった。

あらかじめ分かってある攻撃に対して、あらかじめ考えてある操縦を行うだけだが、それに、身体と機体が間に合ってくれるかは分かっていなかった。

少しでも反応が遅れば、直撃を受けるという恐怖心も、ないとは言い切れなかった。

超音速で、残像の尾を引きながらデステイニーの機体が掠めていく度に、クルーゼの神経が削ぎ落されていく。

だがそれは、シンにとっても同じことだった。

読めていても反応できない動きと言うのは、言葉の響きは簡単そうだが。

つまり、相手に反応できないということは、自分でさえ反応できないかもしれない、という考え方もできるのだ。

シンとしては、まず自分自身で、音速を優に超える速度を発揮する

デスティニーの機体を制御しなければならなかった。

しかも、無重力中と言えど、並みの航空戦闘機の数倍の速度で生じるGは、半端なものでは済まない。

少しでも気を抜けば、クルーゼの反応速度を超える前に、何もかも駄目になってしまう。

クルーゼを追い詰めているということは同時に、シン自身も追い詰められているということなのである。

だが、チャンスは今だ。

ドラグーンが再始動してしまえば、ここまで一方的に攻撃を仕掛けることはできない。

今倒しておかねば、肉体的な疲労も考えて、勝機は一気に遠のいてしまう。

「ま．．．まだだ．．．っ！！」

自分で自分の身体を、さながらずた袋のように振り回している。

そんな感覚の中でシンは、歯を食いしばりながら呻いた。

「す．．．すっごい．．．」

シンとクルーゼの凄烈なる亜光速戦闘を、傍観しながら、小傘は思わず呟いていた。

第三の眼のようなものから見える世界を通じて、脳内で直接響いた声は二つだったが、一つは、間違いなくシンのものであった。

すなわち、シンは今目まぐるしい猛攻を、あるいは防戦を繰り広げている二機のマシンのどちらか一方に乗って、戦っているのだ。

おそらく、光の翼のようなものを背中より伸ばして、縦横無尽に駆け巡っているマシンに、シンが乗っているのだろっ。

何故シンが戦うことになったのか、何故、あんな巨大な人型のマシン

ンに乗っているのかは分からなかったが、確かに言えることはあった。

シンは今、戦っているのだ。全身全霊を以って。

負けてはいけない。

負けてほしくはない。

無意識のうちに頭に思い浮かんだ言葉と共に、幻覚の世界にて、極力動かず、というか、動くことができず、デステイニーの攻撃を受け流すことしかできなかったプロヴィデンスが、動きを見せた。

再充電が完了したドラグーンシステム十一基が、再び射出される。

そして、プロヴィデンスの機体を、砲口を外側に向けて取り囲むように展開すると、全てのビーム砲を一斉発射した。

ビームの狙いは、全て、高速接近するデステイニーに定まっていた。ある種単純な突進の繰り返しでできなかったデステイニーには、突然の攻撃を回避する余裕はなかった。

咄嗟にビームシールドを展開し、一斉に襲いかかる数十の光条を受け流そうとした。

だが、ほとんど一本の巨大な火線のようになった光の束がシールドに直撃すると、強烈なエネルギーが二つの収束粒子の間で生じ、強烈なスパークを発生させる。

まるで雷に打たれたような光と共に、デステイニーの機体が、反動に大きく吹き飛ばされる。

これまでの加速度と、ミネルバの主砲、タンホイザーに匹敵する威力のビームを受けた衝撃が機体に諸にかかった。そして、その中に収まるシンの身体にも……

だがシンは、脳髓がかき混ぜられるような耐えがたいGの中でも、咄嗟に、機体の姿勢を立て直そうとした。

クルーゼが、この隙について、攻勢を仕掛けようとするのは、眼に見えていたのである。

「ああ！．．．まずいかも！？」

小傘の声と共に、プロヴィデンスは、待ちかねたように、双眸を怪しく光らせ、一気に攻勢に転じた。

エネルギー切れで再充電の隙をつくるのを防ぐために、あえて、八基ある小型ドラグーンの内の五基、三基の大型の内の一基を、あえて背部の収納し、残りのドラグーンで攻撃を仕掛ける。

こちらがエネルギー切れになれば、その分は背部に収納しつつ、あらかじめ残しておいたものを射出し攻撃することで、永久に攻撃し続けるのだ。

そして、たとえ数が減ろうと、一瞬の隙さえあれば、反抗の機会さえ与えない猛攻を加えることは可能であった。

コンマ一秒の間隔さえ空けないビームの連射が、再び火線の網となつてデステイニーを襲つた。

しかも、九発発射型の大型ドラグーンを、二機の対角線上の位置するように移動されているので、近づこうにも、厚い弾幕を張られて近づけなかった。

シンは、チャンスを逃した。今度は、彼が防戦一方に回る番だった。デステイニーガンダム動きが一気に悪くなるのが、小傘の眼にもはっきりと見えた。

「シ．．．シン．．．！」

このままではまずい。

窮地に立たされるシンの姿を見る小傘の脳裏で、あることが思い出されていた。

これまでの旅の途中、小傘は、予想以上に強い妖怪と勝負して、苦戦を強いられた。

彼女自身敵を見くびっていたこともあり、一気に窮地に立たされた。

が、そんな時、ルール違反でも何でも承知の上で、シンが助太刀に入ることで、危機は逸した。

結果的に勝負には負けたが、意地を通すことはできたのだ。

だが、別に負けてはいけない勝負ではなかったし、小傘としては、別に助けは必要ではなかった。

なのになぜ、わざわざ助けに入ってきたのか。

シンにその理由を聞いたところ、彼はこう応えた。

「あんたの困った顔が見えてな。友達が困ってるのを見るのは、あんまり好きじゃなくて、それでさ．．．俺って馬鹿で単純だからな．．．」

小傘はその言葉に、可笑しそうに笑いながら、返した。

「ホント、馬鹿だねえそれ」

今、シンは困っているはずだ。

しかもこの戦いは、ただの遊びではない。間違いなく、命をかけた戦闘だ。

友達が、命の危機に瀕して、心底困っているのだ。

小傘の中で、何かが強く固まる感覚がした。

何か、シンを助ける方法はないか？

この窮地を脱する方法は．．．？

例えば．．．今シン達が、MSという兵器に乗っているなら．．．自分も、また．．．

小傘は自分が、今こそ、最高の恐怖と、脅威と、驚愕を持って、シン達の戦いに介入する方法を思いついた。

妖怪ではなく、シンの友達である多々良 小傘として、最高の『おどろき』をもたらす方法を、である。

撃墜の危険に晒されるシンの姿は、藍にもまた見えていた。
このままでは、確実にシンは敗北する。

二人の戦闘を傍観する中で、両者の実力を判断した彼女は、脳内で、戦いの行く末を演算したのである。

そして導き出された答えこそ、シンの敗北、すなわち死だった。

このままいけば、シンは、ドラグーンの猛攻の中で消耗し、無数の光に貫かれて敗北する。

だがそれは、このまま、何の『イレギュラー』もなく事態が推移すればの話だった。

そう、シンを窮地から脱するほどのイレギュラーを、だ。

藍は、そのイレギュラーが今から発生することを、そして、それが何なのか分かった。

その瞬間、彼女の脳裏で、これまでのクルーゼの不可解な行動すべてが、一つの一貫した、彼の意味として繋がったのである。

電光が神経の中を駆け巡り、藍の中で、強烈なカタルシス的な細胞の奮えが起こった。

そこで藍は、いつの間にか、自分のすぐ傍らに、橙が立っているのに気がついた。

藍の方を向きながら、「あたし、いい事思いついたよ」という橙に、藍は、彼女もまた、今しがた自分が襲われた感覚を、同じように味わったことを察した。

「ああ、私も、橙と同じことを思いついた」

藍がそう返事をしたところで、二人は、意を決した様子で、自分達の主人、紫の下へと歩み寄っていった。

そして、その時だった・・・

『シーーーンッ!』

「っ!」

何度目かのドラグーンの猛攻。一発のビームがデステイニーの左わき腹を掠め、シンの脳裏に、死の一字が浮かび上がった時、一人の少女の声が、戦場に響き渡った。

聞き間違えるはずがない。その声は・・・

そして、声が聞こえた次の瞬間、デステイニーを取り囲んでいたドラグーンの動きが、一瞬止まった。

それもそのはずである。

シンの視界、はるか前方で身構えていたプロヴィデンスの機体が、突然の下方からの攻撃に、半ばもんどりうつように機体を逸らしていたのである。

デステイニーの攻撃ではない。

プロヴィデンスの足元から突き上げるように放たれた一条のビームは、明らかに、デステイニーのいる位置とはまったく違うところからの攻撃だった。

ドラグーンの攻撃でもない。

まさか・・・?

咄嗟に、ビームが飛来した方向に、メインカメラを向けたシンは、モニターに映る、新たなMSの機影に、思わず叫んだ。

「インパルス・・・まさか・・・小傘ーーーっ!」

「もいっちょ喰らえ!」

小傘が叫ぶと同時に、背部に巨大なフライトユニットを装備した青

と白の機体、フォースインパルスが、右腕に装備したビームライフルを数発連射する。

自身でもできると確信できなかった小傘の考えだが、見事に的中した。

シン達が戦っていたのは、幻覚の中である。

では、小傘もその幻覚を受けることで、戦場へと侵入することができるはずだった。

その幻覚の根源は、シンやクルーゼのこととは、あまり関係なさそうな、兎の耳の鈴仙の、眼にあると考えることができた。

恐らく、彼女の眼を直視するか、そうでないにせよ、彼女に対して何らかのアクションをすれば、幻覚の中に入ることができる。

だが、幻覚の中に入るだけでは駄目なのだ。

シンを助けるためには、MSの戦いに介入しなければ、そのために、小傘が、それに匹敵する力、すなわち、同じMSを有していなければならなかった。

そこで疑問になったのが、そのMSの存在である。

小傘は、MSというものを、話に聞くだけで、実際に見たことなどなかった。

話を聞いたうえで、幻覚の世界で動くヴィジョンとして視認したことで、ようやくそれがMSであるということを知ることができたが、もしMSというものの話を聞いていなければ、結局何なのか判断はできなかつただろう。

見たこともないもの、もしかしたら、話だって聞いていないようなものを、幻覚として投影することができるのだろうか？

想像だけで形作ったとしても、シン達には、違和感はない様子である。それほどの完璧な想像ができるのだろうか？

おそらく不可能であり、だとしてそこにこそ、同じくここには不釣り合いな、さとのりがいる理由があるのかもしれない。

もしかしたら、さとりが、シンの心を何らかの方法で喚起し、記憶の中にあるMSの情報を読み取ったのかもしれない。

そしてそれを、幻覚として投影したのだ。

自分の記憶の中にあるMSが幻覚として現れるのだから、違和感がないのも頷ける。

おそらく、断続的にシン達の記憶を読み取り続けることで、幻覚の空間を維持してもいるのだろう。

そしてそれが、小傘が、シンを救うべく力を得るための方法にも繋がるかもしれない。

想起された記憶、すなわち思考を読み取り、それを投影することで、MSの姿を形作るなら、つまり、MSというものを頭に思い浮かべながら幻覚の影響下に入ること、MSに乗った状態で戦場に介入することができるかもしれないのだ。

幻覚にかかろうとすれば、同時に、さとの能力の影響下にも入るため、一々さとの意識をこちらに向けさせる必要もない……はず。

現に、シンは幻覚に入り込んだ後で、己の記憶からMSを出現させた。

なので、考えながら幻覚の影響下に入りさえすれば、それでいいはずだ。

とはいえ、MSのことを考えると、そんなことは、小傘には不可能である。

想像しなければ幻覚として投影できないというのなら、ここから先は一か八かだった。

シン達の記憶の中のMSと、小傘の中でのMSの情報が合致し、都合よく幻覚を形作ってくれば、儲けものだ。

そうでなければ……もう当たって砕けるだ。

幻覚に侵入するための方法、それは、鈴仙の眼を見る。ただそれだけよかった。

小傘は、自分が、自分こそがシンの助けになるという固い意思と、そのために、何としてもMSに乗り込むという考えのみに意識を集

中させ、持続的に紅い狂気の光を発する鈴仙の眼に視線を飛ばした。同時にそのまま、小傘の意識も、鈴仙の瞳の中へと飛んでいく。

そして気付いた時は、見たこともないような鉄の塊に囲まれた、狭苦しい空間の中にいた。

人一人やつと収まりそうな空間で、固いシートに腰を落ち着ける小傘の視界いっぱい、多大なる圧迫感を持って密集する多数の計器があつた。

普通ならば、訳が分からず混乱するところであるが、小傘は、この奇妙な鉄の密林の中にいることを前提で、幻覚の中へと侵入したのだ。

恐らく、ではない。

シンとクルーゼの中にあつたMSの情報、小傘の脳裏にも、共通の事項として刻み込まれた。

だから分かる。ここは、MSのコックピットだ。

そして、操縦方法も、まるで数年もかけて身に染み込ませた熟練の技術のように、手に取るように分かつていた。

そして、小傘が思い浮かべた、MSというただの単語が、シンとクルーゼの記憶を元に、彼女の性質に似合ったMSの姿を、自然に形成していた。

それこそが、シンのかつての乗機であり、デステイニー以上に馴染みのあるマシン。高速空中戦闘と汎用性に優れたフォースインパルスだった。

インパルスが連射したビームの光が、下方よりプロヴィデンス目掛けて飛来するが、クルーゼには、新しい意思が戦場に出現し、その意思を読み取ること、その攻撃は完全に把握できた。

プロヴィデンスは、機体を急後退させ、その攻撃をなんなく回避するが、同時に、クルーゼの集中力が僅かに散漫になり、シンを襲つ

ていたドラグーンの攻勢が、眼に見えて弱くなった。

突然のインパルス、そして小傘の介入に驚愕を隠せないシンだったが、この機を逃すほど甘い性格でもなかった。

ドラグーンからの一斉攻撃に開いた一瞬の隙を見計らい、フルスロットルで包囲網を抜ける。

同時に、眼で追えるほど緩やかな動きを見せているドラグーンの内の一基に対して、腰部にマウントしたビームライフルを抜き取り、撃ち放つ。

だが、クルーゼの集中力が散漫になっているといっても、所詮はそれだけだった。

未だにその高い空間認識能力と、人の殺気を読み取る力は健在で、シンの意思を読み取ったクルーゼは、直感的にドラグーンに退避行動を取らせた。

同時に、デステイニーが包囲を抜けたことによって配置が乱れた全基を、再び機動させ、再包囲しつつ、ビームを連射する。

だが、撃ち放ったビームが回避されるのはシンにも分かっていだし、ドラグーンが再び包囲網を敷いて攻撃してくるのも分かっていた。だが、一度あの猛攻をしのぎ切れば、再び守勢に転じない限りは、問題はない。

デステイニーが、再び脅威的な速度をもって、浴びせられるビームの光線をことごとく回避していった。

同時に、インパルスの方へと接近する。

その様子を見て取ったクルーゼは、なんと、ドラグーンによる攻撃を一時中断し、全基バックパックに格納すると、プロヴィデンスの動きを一時静止させた。

インパルスの出現に警戒し、こちらの動きを見極めようとしているのか、はつきりとした理由は分からないが、シンは、相手がどういう行動を取るのか注意しつつ、この間にインパルスに乗っているであろう小傘に呼びかけようと思った。

二機が、至近距離にまで接近し、互いに静止する。

メインカメラとモニター越しに映るインパルスが、シンの知るインパルスであるなら、無線通信のための周波数も同じものであるはず。周波数を合わせて、呼びだそうと思ったが、そうする前に、小傘の方からこっちに呼びかけてきた。

（シン！辛抱たまらなくてね、助けに来たよ）

スピーカーから聞こえているので、無線を使っているのだろうが、小傘が、通信回線の周波数を知っているはずはない。

二機を物理的に接触させたりもしていないので、どうやらこの空間では、無線とは関係なしに、望めば無線のような体裁で呼びかけることができるのだろう。

思えば、最初も、クルーゼが無線のようなものを使ってこちらに呼びかけていたが、それもまた、電波を使った通信ではなかったのだろう。

が、それはともかくとしてだ。

「助けに来たって．．．一体どうしたんだ、このMS！」

（ここは幻覚の世界だから、自分の意思で幻覚を創ることで、MSに乗れると思ったの。で、うまく成功したわ）

「．．．ど、どういうことなのかよく分からないが．．．助けるとはいうが、軽い気持ちできていい所じゃないんだ。俺たちの戦いは（軽い気持ちなもんか、あたしは本気だよ。この戦いでシンが死ぬってんなら、あたしも一緒にいくよ。どうせいつぱん捨てられた無くした命、あんたのためだけに使ってみる）

「．．．そして、あわよくば、二人で生きて戻る、か．．．」

（そういうこと！）

「．．．ホントに死ぬぞ．．．覚悟はいいんだな？」

（上等上等！）

「よおし．．．」

このやり取りの間にも、プロヴィデンスは待っているかのように動きを止めていたが、その双眸の怪しい光からは、一切殺意が衰えて

いないのが見て取れる。

むしろ、新しい敵の出現に、より一層殺意を強めているようにさえ思えた。

これは一筋縄ではいかないだろう。

だがそれは、小傘が来なくても同じことだった。

いや、小傘が来なければ、シンにはまったく勝ち目がなかっただろう。

正直な話、シンは今ほど、小傘のことを頼りになると思ったことはなかった。

今、勝機は見えた。

シンは、もう少しで、頭の中で何かが弾けるというのを、実感していた。

小傘のフォースインパルスの出現を黙して傍観する紫。

現実の世界で、小傘の存在が極端に薄くなり、ほとんど見えなくなっているのも、確認した。

3機になったMSが睨み合う様子を見る紫の前に、藍と橙が歩み寄ってきた。

開口一番に、藍が言う。

「これがあなたと、クルーゼ様のお考えのようですね」

「.....」

「クルーゼ様は、シンに対し、一心の殺意を向けることで、彼に、絶対的な殺意、改心のしようもない悪に対しては、戦うしかないという覚悟を伝えようとしている...。そのためには、己を悪に仕立て上げて、純粋な破壊衝動と殺意のみで生きなければならぬ。情を捨て、敵を滅ぼし、己の野心を果たすことだけを考えなければ...」

・そしてクルーゼ様はそれを実行した。世界に絶望し、諦観と憤りに支配されていたころの自分を再現することで、シンの前に、絶对的な殺意であり、悪である自分の姿を晒したのです。そして、戦いを始めたのです」

「今頃それを・・・」

「ですが、殺意のみに支配されたクルーゼ様の力は絶対的です。シンに勝ち目はありませんでした・・・これでは、あの方の究極の目論見は、本末転倒に終わってしまいます・・・だからこそあの方は計算し、保険をかけたのです・・・小傘がシンの助けに入ることとを・・・あの方は、手加減をするのではなく、自分を不利に追いこむ状況をつくることで、本気の殺意を向けたまま、負けることができるのです」

橙の方も、すでにそのことを理解していたらしい。

紫はただ黙って、藍の言うことを聞いた。

「ですが、小傘だけではまだ不足です。彼女が加わっただけでは、まだシンとクルーゼ様との実力の差を埋めることはできません・・・ですから、紫様。これがあなたの命であるのなら・・・」

「・・・」

「我々が、その命を忠実に果たし、クルーゼ様の死の手助けをしてきましょう」

「・・・」

「ですがその前に一つだけ」

「・・・何」

「我々はあなたの式です。クルーゼ様の式ではありません。ならば、あなたの命さえあれば、それに従い、クルーゼ様の死を覆すこともしましょう・・・それだけです」

「・・・早くいきなさい」

「はい」

そのまま二人は紫に背を向け、幻覚の世界に入るべく、鈴仙の眼に視線を合わせようとしていた。

以後藍も橙も、紫に振り返るようなことは一切しなかった。

そして、現実において、二人の姿が見えなくなった時、すなわち、二人が幻覚の世界に侵入した時、一人取り残された紫は、おぼろげに思った。

人の願いを、夢や、目標でもなんでもない、ちつぱけな願いを、いとも容易く聞き入れることが、本当にその人のためになるのだろうか．．．と。

計算通りに現れたインパルスと、デステイニーの交信に対して、一切手を出さなかったのは、クルーゼの中に、まだ五分五厘の情けがあつたから、ではない。

一機だつたのが二機に増えた、という程度では、まだ十分に勝ち目があつたというだけで、要は、情けは情けでも、軽蔑の意味がこもつた情けだつたのである。

彼の中にある圧倒的な殺意が衰えていることを意味してはいない。そして、待つてやるのももう終わりだ。

シンのデステイニーはともかくとして、小傘という妖怪の操るインパルスなどは、頭数に入つてゐるだけの様な存在だ。

その気になれば、片手で倒せる。

クルーゼの殺意は、シンだけでなく、小傘に対してさえ容赦はなかった。

クルーゼは、冷静に、脳裏で、デステイニーを牽制しつつ、インパルスを撃墜するためのドラグーンの機動を頭の中で思い浮かべた。後はそれを実行するだけだ。

「ふん……」

クルーゼが冷ややかな笑みを浮かべると同時に、プロヴィデンスのバックパックより、最小限牽制ができる程度に、二基だけ残し、九基のドラグーンが放出され、包囲網を形成すべく動きはじめた。だが、その瞬間である。

クルーゼの脳裏で、新しい殺気の波が奔った。二つである。

いや、『根幹』が二つであり、それ以外にも、小さな粒のような殺

気がいくつも感じられた。

クルーゼの持つ荒々しい殺気ではない。

鋭くも、柔軟性を持った、言い方を改めれば、優しさを持った殺気だ。

シンも、小傘も放出していた奇妙な威圧感。

その波が向けられているのは、クルーゼの意思で以って操るドラグーンである。

合計、十ほどの殺気が、クルーゼ当人ではなく、彼の殺意の枝であるドラグーンへと向けられていた。

「来たか・・・」

クルーゼが人知れず呟き、同時に、九基のドラグーンは、シン達を包囲する動きを中断し、新しく出現した狂気を回避することに専念した。

ドラグーンが素早く飛びのいたその位置に、異様な速度で、弾丸が通過した。

電磁波のスパークを身にまとう、レールガンの火線だ。

それが、八発同時に、ドラグーンを襲った。

さらに、その攻撃を回避する一基のドラグーンに対して、まるで示し合わせたように、一条のビームが放たれたのである。

殺気の上に殺気を乗せることで、クルーゼにすら察知することができない、完全に予測不能の攻撃だった。

プロヴィデンス本体や、標的となるものが一つに絞られているならともかく、九基あるドラグーンの内の一基から、どれが攻撃されるのかを読み取ることなど、さすがのクルーゼにもできない。

それにしあって、完璧な予測射撃だった。

しかもそれが一度ではないのだ。

同時に、もう一つのドラグーンが、同じようにビームの閃光に射ぬかれていた。

直撃を受けた二基のドラグーンが小さな火球に転じると共に、クル

ーゼの耳に、スピーカー越しに、ある程度聞きなれた二つの声が聞こえてきた。

（シンの戦いなら！）

（あたし達も助太刀に入るよっ！）

藍と橙だ。

あの二人もまた、この戦場に介入してきたのだ。

「遅かったじゃないか．．．ふ．．．」

クルーゼは、ついに状況が『出来上がった』を感じた。

（シン！無事で！）

「今度はストライクとダガータイプ．．．藍に橙か！」

小傘のインパルスの出現に次いで、今度は、藍と橙が戦場に介入してきた。

小傘に感化されたのか、最初からそのつもりだったのか。

新たに出現した二機のMSのシルエットは大分似通っていたが、機体色は大きく異なる。

一基は、機体全体をオレンジに近い橙色で塗られたストライクダガー、ヤキンドゥーエ戦役における連合軍の主力MSだ。

もう一機は、同じくヤキンドゥーエ戦役における連合軍の、革命的新型MS、ストライクだ。藍色に染まっている。

そして二機に共通しているのが、連合軍が開発した特殊兵装、ガンバレルをバックパックとして背負っていることだった。

オレンジダガーと、インディゴストライクの、ガンバレルストライカー装備。どちらにどちらが乗っているのかは、その機体色ではつきりと判断がつく。

心の性質がMSの姿形を決定するというのなら、この場合は、小傘の場合以上に、はっきりとしていた。

二機が射出する合計八基のガンバレルが、プロヴィデンスのドラグ

ーンを牽制し、互いがもつれ合うように動き回った。

実弾兵器であるガンバレルは、対実弾のフェイズシフト装甲を持つプロヴィデンス、そしてドラグーンには一切通用しないが、そのレールガンの火線に混じって放たれるビームライフルに関してはそうではなかった。

レールガンの攻撃の合間に、いつビームが発射されるのかも分からないので、結局、あえて受けるようなこともできず、回避するしかなかった。

応射のビームを放つが、八基のガンバレルは、素早く飛びのくことで、容易く回避する。

ビームや火線がいくつも伸びているのに、それを撃つMSが見えないという、普通の兵士ならば混乱をきたしそうな光景を、シンは、混乱とは別の気持ちで眺めていた。

同時に、スピーカーから藍達の声がする。

（小傘だけじゃないぞ。私達も、あなたを助けに来た）

（友達が困ってるのを、ほっといていられるもんですか！）

「・・・・・・・・」

こんな危険な戦場に、何故勝手に入ってきた、と批難できるはずがなかった。

それ以前に最早シンには、批難しようとか、心配だとかいう気持ちを全て覆い尽くすほどの、感激と感謝の気持ちがあった。

シンは、これまでの自分の人生を、自己満足のためのちっぽけなものとして卑下にするが、確かに、そういう気持ちもあった。

だが同時に、シンには、それ以上に大きな力があった。

他人と関わることで高まっていく力。

他人のために努力し、怒り、そして時には狂うことさえできる力だ。シンとクルーゼの二人だけでの戦いになると、シンには勝機はなかった。

それは、シンが、誰のためでもなく、ましてや自分のためにも（シン自身は、クルーゼを殺したくないとさえ思っている）戦えなかったからなのである。

だが、今、小傘が、そして藍と橙が、シンのためにかけつけてくれた。

そのことで、シンの中にある力が、覚醒の時を迎えたのである。

完全に心の踏ん切りがついたシンは、藍達に叫ぶように呼びかけた。「ありがとうみんな！藍と橙はそのままそのドラグーンを牽制していてくれ。小傘も頼む、細かいことは考えず、撃って撃って撃ちまくって俺を助けてくれ！友達に当てるなよ！」

（分かった！）

（任せてシン！）

（いったれーっ！）

「見てろよクルーゼ・・・これで最後にしてやるっ！！」

デステイニーが、ビームライフルを再びマウントし、次いで、もう一度アロンドイトを引き抜き、構える。

新たなるMSの出現、そして、撃破されるドラグーン。

妖夢には、確実に、クルーゼが死へと向かっているのが、はっきりと分かった。

次なる攻防で、その時が来るかもしれないし、たとえ次でなくとも、その次、あるいはその次に、クルーゼは死ぬ。望むべくして。

そして紫が、その様を、何一言も言わずに黙視し続けているのが、とても理解できなかったし、妖夢には許せなかった。

まったく同じように、クルーゼが死んでいく様を見ているだけの自分と同じように。

紫に対して反感を示すような態度を取ることがどれほどのものなのか知らぬ妖夢ではないが、彼女の実直で不器用な心の中で爆発した感情を制御する術を、彼女自身は知らない。

掴みかかるように紫の眼前に詰め寄りながら、叫ぶように妖夢が言う。

「このままでは、本当にクルーゼ様は死んでしまいます！どうしてお止にならないんですか！？自分の気に喰わないことなら、四、五人迷惑かけてでも覆すようなお方が、どうして!？」

紫は何も言わず、ただ黙りこんで、幻覚の世界での戦いを見ているだけだった。

その眼に、一切の光なく、無限の混沌の淵を垣間見たのは、妖夢の錯覚でしかない。

「あなたは、これで良いというのですか・・・ですけどわたしは・・・

..!

「.....あなた自身で考えなさい」

「ああ.....っ?」

話すことを思い出したかのように、静かに語られた紫の言葉。

彼女らがいつも言っていた言葉だ。

真意を読み取ることのできないその言葉だが、それが、妖夢の中で、一つの決意を固めることになった。

答えに辿り着く術を知っていながら、何故自分で考えない。

何故今になって、紫やクルーゼの考えに従わねばならないという考えを持っている？

彼らの考えが気に喰わないならば、抗えればいいのだ。

抗った末に、どういう結果であれ、自分で納得できる答えに辿り着けばいい。

この命は自分だ、紫やクルーゼではないのだ。

何か大いなるものが動こうという時、人は、己で考え、己で行動しなければならない。

それが、今この時に他ならないのだ。

ガンバレルの火線がさらに強くなり、インパルスがただ無心にビームライフルを乱射するなかで、デステイニーが、最大限の加速をかけて、プロヴィデンスに接近する。

インパルスの放つビームの合間、そして、ガンバレルの砲火が網をつくるその合間に、シンの進むべき一本の道ができていた。

一拳に撃ち放たれた十数個の砲火に、さすがのクルーゼの反応も大きく鈍る。

今が、最大のチャンスだ。

「うおおおおおおおおーっ!!」

シンは叫び、フットペダルを渾身の力で踏み込んだ。

デステイニーの光の翼がより色鮮やかに輝き、その光の粒子を真空の空間に振り撒く。

そこから、プロヴィデンスに肉迫するのに、最早0.5秒の時間もかからなかった。

光と見間違ふようなデステイニーの姿が一緒眼前に迫ったかと思うと、すぐにプロヴィデンスの横を通過した。

何かが叩きつけられるような鋭い衝撃と共に。

プロヴィデンスの機体が大きく身じろぎし、その右腕が、肩の付け根からちぎれとんだ。いや、斬り飛ばされた。

通過するその一瞬、デステイニーが叩き込んだアロндаイトの一撃が、右肩を切断したのである。

すぐさま体勢を立て直し、残った左腕のビームサーベルを発振しようとした。

だが、その動きは、最大速度を発揮したデステイニーには、遅いと言えた。

プロヴィデンスが片腕で身構えるよりも早く、デステイニーはその至近にまで接近し、アロنداイトの鋭い刃をコックピットへと突き付けていた。

二機の、そして、プロヴィデンスが操るドラグーンの動きが、ぴたりと静止した。

このまま、ひと思いにアロنداイトを付きたてないのは、クルーゼの捨てた情けというのものを、シンは持っているからなのである。だからといって、シンには、若くしてベテランパイロットにも勝る経験と洞察があり、藍達に対し、「今の内に、全てのドラグーンを破壊しろ」と指示しつつ、さらにクルーゼに対しても、「残ったドラグーンも切り離せ、ただし、少しでも動かしたら、あるいはそういう素振りでも見せたら、今すぐこの剣を突き刺す」と命じた。

大人しく黙するプロヴィデンスのバックパックより、残ったドラグーンも放出され、そのまま微動だにせず、宇宙空間を漂流した。

シンの指示通りに、藍達は、完全に動かなくなったドラグーンに対し、ビームサーベルを抜き放ち、一基ずつ破壊していった。

やがて、一一基すべてのドラグーンが破壊され、使い物にならなくなる。

プロヴィデンスは、右腕ごとビームライフルを失い、最大の武器であるドラグーンも失った。

勝負は、完全についたのだ。

そこでシンは、改めて考え直した。

己の成した覚悟のことである。

そして静かに、無線のような通信越しに、クルーゼに呼びかけた。

「もう勝負はついた。あんたには、この状況をどうすることもできない．．．もしあんたが望むなら、俺は、あんたを殺さないことだってできる。というより、本当はそうしたい．．．いろいろ、考え直してくれないか？」

（．．．何をだ．．．）

「世界を滅ぼすこと．．．多くの人を殺めることをだ」

シンのその声は、クルーゼの考えは本心のもではなく、まだ、彼の考えを改める機会があるという希望があつてのものだったが、その希望に対して、クルーゼの中の意味は、揺るがなかった。

（．．．甘い、な．．．）

「う．．．っ？」

（どれほど世界が平和であろうと、かならず戦いの種子はどこかに撒かれ、いずれそれが芽を出すときはやってくる．．．その芽を素早く摘み取ることができねば、待っているのは、戦争の木、そして血と火薬の味をする破滅の実の熟成だ．．．絶対的な悪が撒く戦争の種を、君たちは、分かり合える、分かってくれるという呪いのために、放っておくつもりかね）

「．．．だ、 فقط」

（キラ・ヤマトもそうだ。分かり合えるはずという言葉を繰り返し、私という狂気の根源を滅ぼす決意ができなかった。そして少なくとも、数百、数千という命は滅ばされた．．．信じることが、絶対に正しいと言い切れぬ。そのことは、君もよく知っているだろう。

信じることで、世界を滅ぼすことになるかもしれない．．．だからこそ君達は、絶対的な悪と狂気に対して、対話を諦めることを知らねばならない。平和を真に愛するのなら、尚更のことなのだ！）クルーゼの言葉には、熱がなかった。冷たくもなかった。

人の持つ感情の迸りが。心を滾らせ、あるいは殺すことで生じる感情の熱がなかったのである。

まるで、『言葉』そのものが、空気を震わせているような気分になった。

「．．．だけど、あんたのMSはもう戦えない。あんたには、戦う力は、人を滅ぼす力は残されていない．．．あんたが人を滅ぼすことができなくなったなら、たとえあんたが狂人でも、俺はあんたを生かす．．．そして、己の狂気と、真つ向から向き合わせ、乗り越えさせる」

（．．．向きあう？．．．乗り越える？．．．それができるのならば、この世から狂人は消え去るさ．．．）

ただ、吐き捨てられるように小さく響いたその声にだけは、シンは、人の絶望がつくる冷たい温度が感じられたが、それもすぐに、無機質な温度のない言葉に戻った。

（つくづく君は甘いな．．．MSが、兵器が、銃がなければ、人は人を殺せないと考えているなどとは、滑稽だ。人は、同種を素手でも殺せる狂暴さを持っている．．．そしてそれ以上に、ただの言の葉でも、命を奪うことができる．．．精神的に追い詰めることで、あるいは、力を持つ者をけしかけることでな．．．それが、大衆の行うデモクラシーであれば、独裁政府の扇動でもあるのだ．．．私ならば、ザフトを扇動し動かすことで、今度こそアルマゲドンを引き起こすこともできる．．．それもまだ君は、私に力がないと侮り、むざむざ生かしておくというのかね？）

「．．．どうしてそこまで．．．そこまで世界を滅ぼそうとする．．．そんなに人が信じられないのか！一体どうしてそこまで頑固になれてしまうんだ、あんたらは！」

（人を滅ぼさねば．．．自分が救われんからさ．．．それだけのことなのだよ、シン）

「あんたは．．．っ！」

（私を殺してみろ！でなければ死ぬのは君達だっ！）

瞬間、プロヴィデンスの機体が、フルスロットルで急後退をかけた。眼前に迫っていた機影が、一気に遠のいていく。

だがシンは、こういう事態に対しては、あくまでも冷静だった。クルーゼがこういう行動を取るとするのは、予想自体は出来ていたのである。

プロヴィデンスが、機体の向きに対して逆噴射をかけたその瞬間には、デステイニーは動いていた。

腰部の高エネルギービーム砲が展開し、その砲口より放たれた赤黒いエネルギーの柱が、プロヴィデンスの残る左腕部も、付け根から

蒸発させていく。

ビームが通過すると同時に、プロヴィデンスの左肩から爆発が起り、機体が大きく身もだえする。

最早、語る舌も聞く耳もたない。

認めたくはなかったが、どうやら、クルーゼの言う通りらしい。

絶対的な悪に対しては対話は通用せず、残された道は、戦うことだけである。

ほんのわずかな悪が、世界全体を狂わせる前に、その予兆を取り除くために、討つ。

それもまた覚悟。平和を守るためには必要なことなのだ。

もしクルーゼが、本気で世界を滅ぼそうとしているのなら、もう迷うわけにはいかない。

「そこまで言うなら・・・止めを刺す・・・っ!」

デステイニーが、アロンダイトを両手で構える。

剣先は真っ直ぐにプロヴィデンスの方を向いており、このまま加速すれば、光の刃がコックピットを貫き、クルーゼの命は消える。

まだ、何とかなると思っていた。

だが、その何とかなるという想いは、言い方を変えれば楽観的な考えなのである。

何とかなると思いつけて、最終的に全てを駄目にする事だけは、絶対に避けなければいけない。

そのためには、時として、忌むべき行動を取ることを厭わない覚悟を持たなければならない。

クルーゼは、それを死を以って伝えようとしているのか？

ようやくシンの脳裏にも、その答えが導き出されたが、だからこそ、シンの心はもう止まらなかった。

今度こそ本当に、止めを刺す。

フットペダルを踏み込み、最後の一撃を加えるべく、デステイニーが加速を開始しようとした、その瞬間だった。

（そんなことはさせないっ！！）

凜々しい声と共に、デステイニーの直下に、突然熱源が出現したのを、シンは察知した。

咄嗟に機体の加速を逆方向に向け、後退させる。

同時に、熱源がデステイニーの至近に接近し、その正体を、シンの視界に現わせた。

日本刀のような実体剣を持つ、シン・ハイマニューバー？である。

性能的には、デステイニーとは比ぶべくもないその機体が、シンに小さな驚愕を与えるほどの、明らかにスペックを凌駕するスピードで接近し、交錯すると同時に、刀を振り上げてきたのである。

直前で機体を後退させたから、ギリギリのところまで回避できたが、まさしく、ギリギリであった。

デステイニーの頭上へと通り過ぎると同時に、体勢を整えつつ機動し、ジンが、間合いをとって、デステイニーの正面へと移動した。そして、スピーカー越しに聞こえた搭乗者の声に、シンは聞き覚えがあった。

「あんた、白玉楼の妖夢だな。一体どういっつもりだ」

（あなた方皆がクルーゼ様の敵になるというのなら、わたしだけはあの方の味方になる．．．ただそれだけのことです）

「．．．俺は正直な話、あんたとはそれほど面識はなかった．．．クルーゼに関してもそうだ．．．そんなあんたがクルーゼの味方をするっていうのは、どういうことだ？」

（あなたの知らないクルーゼ様のお心を、知っているということですよ）

「．．．そうか．．．．．だがクルーゼは、世界を滅ぼそうとして、今、俺たちの前に敵として立ちはだかっている．．．多くの人を殺めるためにだ。それでもあんたは、クルーゼの味方になるっていうんだな？」

（世界を滅ぼすだとか、敵だとか。そんなことはどうでもいいんで

す。わたしは、クルーゼ様の優しさを知り、尊敬する者として、彼の命を助けたいのです」

「そこまで言えるのならお前も、俺の敵だ……だけど、殺したりはしない。戦闘力を奪わせてもらおう」

（……っ！）

デステイニーが、両手に持ったアロンドイトの刃を、一度降ろした。そして、左腕にその柄を持ったまま、右腕は、腰にマウントしたピームライフルを掴む。

妖夢の出現には驚いたし、クルーゼのためにこうまで言つてのける彼女の声を聞けば、やはりクルーゼには、シンの知らない彼なりの事情があるのかも知れないと考えられたが、今はもう、そんなことを気にしてられる状況ではなかった。

シンもクルーゼも、かつては一人の兵士であり、戦士であった。シンの場合は、今でもそうだ。

そしてそれ以上に、二人は互いに、一人の男なのだ。一度心に命じた使命。己の果たすべく役目を最後まで果たさねばならない。

倒すべき敵は倒す、そして、通すべき意地は通す。

クルーゼの野心を止められないのなら、同じように、シンの中での覚悟を止めることはできないのだ。

妖夢も、そのことを肌で感じ取った。

だからこそシンに対して、戦いをやめるなどとは言えなかったのである。

一度心に決めたことを最後まで貫徹するというのは、士道にも通ずるものがあつたからだ。

（たった一機で、私達全員を相手にするか？）

という藍の声には、「いや、みんなは下がっていてくれ。俺一人で戦う」と返しておく。

よく分からないが、それが礼儀だと思つたのだ。

ビームライフルの銃口が、ジンに向くと同時に、デステイニーは、シンは、迷いなく引き金を引いた。

人間の背丈よりかは小さな穴から、人間数十人は軽く消滅させられる熱と光の奔流が放たれ、ジンを襲う。

いや、そうではない。

ビームライフルが撃ち放たれたその瞬間には、ジンはその場から居なくなっていた。

またしても、明らかにスペックをオーバーしている反応とスピードを以って、ビームの火線をすり抜けるようにして、デステイニーに接近していたのである。

その動きは、明らかに回避するものでは．．．逃げ腰な動きではなかった。接近しているのだから、一切物怖じする気配がないのである。

そして、シンが、かわされた、と認識したその瞬間には、ジンは、その一つ眼の異質な輝きを、シンの眼前に迫らせて肉迫していたのである。

「う．．．っ！」

さすがのシンも、驚嘆を漏らさずにはいらなかった。

このジンは、明らかに普通ではない。機動性を重視したハイマニユーパー？にしても異様だ。

だが、だからといってこのまま隙を見せるようなシンではない。

（遅いっ！）

「どうかなっ！」

そのまま頭部目掛けて横なぎに放たれた斬機刀の一閃を、デステイニーは、姿勢を低くして回避する。

そのまま続けざまに放たれた唐竹割りに対しては、かわすことさえしなかった。

ビームライフルを持ったままの右腕をかざし、その二の腕あたりの部分で、あえて真っ向から受け止めたのである。

デステイニーの装甲であるフェイズシフト装甲は、電気を流すこと

で装甲材の金属を相転移させ、そのエネルギーで物理的衝撃を無効化するものである。

実体弾による衝撃はもちろん、加重にも耐え、熱に対する防御力も向上する。

その効果は多大で、実質的に、あらゆる物理的な攻撃は無効化されるといってもおかしくはなかった。

よって、ジンの放つ斬機刀の一閃などは、直撃を受けようと何の脅威でもなかったのである。

叩きつけられた鋭い刃も、デステイニーの装甲に傷一つつけることは叶わず、二の腕にくっついただけで、ぴたりと静止した。

いや、それでは終わらなかった。

「う．．．っ!？」

ギリギリという金属が弾けるような高音と、小さなスパークが、斬機刀の切先、装甲との接触部で発生していた。

ジンは、異様な馬力で、PS装甲に喰いとめられた刃先を押しこんできたのである。

斬機刀を受け止めるデステイニーの腕が、ゆっくりと押し込まれ始めていた。

完全に力負けしていたのである。馬力においても、大きく劣っているはずのジンにだ。

ただの、時代負けしているMSごときのどこにこれほどの力がある。そもそも、これほどの力をかければ、斬機刀の刃は折れるのではないか？

だが、異様な力をこめて刀を押し込んでくるジン同様に、斬機刀の刃も、本来ならば有り得ないほどの強度を以って、まさしく万力のような力を耐えていたのである。

その鋭い刃先による小面積の接触部は、圧倒的な加重をさらに増加させて、デステイニーの装甲にめり込もうとしていた。

金属の弾ける音と、スパークの光は、許容範囲ぎりぎりの荷重に、PS装甲があげる悲鳴なのだ。

このまま押し込まれれば、まずい。このまま腕が切断されてもおかしくない。

「なんてヤツだ・・・っ！」

さすがのシンも、こればかりは焦った。

このジンは、ただのジンではない。

斬機刀の切先からは、並々ならぬ、強大な意思のようなものを感じられた。

気合い、とも言えるかもしれない。

シンは、このジンの異質な力の根幹がどこにあるのか、知ったような気がした。

このままではやらせまいと、デステイニーが、左手にもったアロンダイトの刃を、ジンにつきたてる。

だが、ジンはそれに反応し、すぐさま機体を急後退させ、先ほどと同じように、距離をとってデステイニーと睨み合った。

先ほどの藍の生意気な台詞を思い出す。

デステイニー以外の機体にも、PS装甲を持つものはいるが、その効果は無限ではない。

PS装甲を展開するための電力が無限でないのだ。

だから、さっきのように許容量限界の圧力がかかれば、一気に電力を消費して、機体そのものが機能停止に陥ってしまう。そうなれば、撃墜も同然だ。

もし総がかりで妖夢の相手をした場合、みつともない結末が待っているのではないか？

そして、スペック上絶対にあり得ない、ジンの異様な力。

信じたくはないが、シンは、その力は、妖夢の意思の意思とかかわっているのではないかと思えた。

妖夢の意思が力となって、理屈では説明できない力を、兵器にもたらしている。

本来ならば、あまりにオカルト的で信じられないことだったが、こ

これが幻覚の世界であり、望めば一からMSを創り出せるような空間であるのなら、絶対にできないことではなかった。

それにしても、デステイニーに対しては、赤子同然の力しかもたないジンに、これほどの力をもたらす妖夢の力が、計り知れない。

だが同時に、シンは、納得もできてしまっていた。

妖夢の心の力が、機体に収まりきらず、シンにも視覚できる白いオーラとなってジンの周囲に漂っていた。

その色は、いつぞや冥界で見た幽霊の色に似ていなくもなかった。

クルーゼにとっては、大きく計算違いであり、あまりに不思議な光景だった。

今自分は死んでいるはずなのだ。アロンドイトの刃に貫かれて。

何に今、何故が生きている。眼前には、M?型のジンが、その強大な力のオーラを漂わせて、佇んでいる。

さらにその前方に位置するデステイニーが、意を決したように、右腕に持ったビームライフルを投げ捨てた。

「.....」

クルーゼはただ黙って、眼の前の光景を眺めていることしかできなかった。

考えることもできなかった。

考える以上に、妖夢の意思がクルーゼの脳裏に伝わり、駆け巡り、大きなエコーを生んでいたのである。

——クルーゼ様。お聞きになつていてでしょう——

同時に、ジンの機体が、再びデステイニーに向けて突撃する。

人の動きそのままにしなる四肢で繰り出すのは、視認するのも困難なほどの斬撃の連なりであった。

その腕の動きと刃の軌道を見することはできず、ただ、切り裂かれ

た真空の空間が、真空を超越した無明の溝を作る様だけが、クルーゼの眼には映った。

そして驚くべきは、その切先をギリギリのところで見きり、アロンダイトのビームの刃で受け止めているデステイニーである。

——あなたがどれほどのことを考え、どのような高貴な意思を持っているのかは分かりません．．．ですが、わたしはわたしなりの考えを貫かせて頂きます。絶対にあなたを死なせはしません——
凄烈な攻防の中にあっても、妖夢の言葉は静かであり、同時に、力強かった。

——わたしの行動は、あなた方からすれば、考えなしで馬鹿な行動に見えるかもしれませんが．．．ですがわたしはもう、自分の心に嘘はつきたくない！あなたの命、私が預からせて頂きます！そしてわたしのこの命もまた、あなたに預けるっ！！——

「．．．ああ、分かった．．．預ける」

気がついたときには、クルーゼはそう呟いていた。

「．．．この魂魄　妖夢とクルーゼ様の命を乗せた斬機刀に、斬れないものなど．．．」

二つの刃が幾度となく衝突する中で、妖夢の斬機刀が抜きこんでた。音だけでない、光すらも置き去りにするような速度で放たれた刃が、デステイニーの頭部右側面に叩きこまれる。

PS装甲であつても完全に打ち消すことができない衝撃がデステイニーを襲い、その機体が、まるで側転でもするかのように大きく弾かれ、真空の中を回転した。

「斬れないものなど．．．っ！」

さらに妖夢は、ちょうど一回転したところで、さらにその左わき腹めがけてもう一撃叩き込む。

巨大な岩石がマツハの速度で衝突したような莫大な衝撃がデステイニーの動きを麻痺させる。PS装甲で限界まで無効化していなければ、間違いなく胴を両断されていただろう。

「何も無いっ！！」

そして、完全に動きの止まったその機体目掛けて、妖夢は、全身全霊をこめた唐竹割りを叩き込んだ。

爆音のようにさえ聞こえる鉄の衝突音が、装甲を伝わり、コックピットの中にある空気を伝わって、妖夢とシンの鼓膜を揺らし、次いで再び、鉄の爆ぜる音が響き、PS装甲がショートするスパークの光が輝いた。

このまま、一気に押し斬る！

「せやぁー！ー！ーっ！！」

妖夢の渾身の叫びと共に、ジンが、最後の力を振り絞る。だが、その瞬間だった。

「あー！ぐっ！？」

突如、背中か、あるいは股の下あたりから、突き上げるような衝撃と揺れが襲った。

何かが背後から、右脚部に命中したのである。

その衝撃と同時に、右足が大腿部から根こそぎちぎれとんだ。

デステイニーのスラッシュエッジが、いつの間にか、ジンの背後から飛来していたのである。

「ど、どうして・・・っ！？」

妖夢が疑問に思うのも無理はないが、シンは、ジンが肉迫している一瞬のうちに、妖夢に見えない死角からブーメランを飛ばしていたのである。

ある程度追尾性能があるスラッシュエッジならば、適当なところに飛ばしても、充分ジンの背後の回り込み、攻撃を加えることが可能だった。

光の刃に右足を切断され、ジンの機体が大きくのけぞる。

その隙をシンには見逃すわけがなかった。

「かわいそうだが、これで終わりだ！」

デステイニーが、この時を待っていたとばかりに、左腕のアロンドイトを構え、ジンの右肩へと突き刺した。

そのまま、右腕を挟り飛ばしながら、返す刀で左腕を縦に切断する。さらに、右足でジンの胴体を盛大に蹴る。

「はあっ！うーっ！！」

コックピットの中でうめき声を発する妖夢ごと、ジンの機体が盛大に蹴飛ばされた。

完全に戦力を殺がれ、後にできるのは、スラスターを吹かせて動き回るしかできないジンだが、それでもまだ、妖夢の意思が萎える気配はなかった。

「ま．．．まだ．．．っ！！」

動き回るしかできないのなら、せいぜい動き回って、体当たりでも浴びせてやる。

頭と左足しか残っていない身で、ジンは姿勢を立て直し、フルスロットルでデステイニーへと突進を仕掛けた。

しかし、デステイニーの右腕に戻ったスラッシュエッジが、妖夢の眼前に迫る。

メインカメラ越しに映るスラッシュエッジの刃。

高速で回転するビームの刃が、妖夢の眼には、自分の首を斬り飛ばそうとしているようにしか見えなかった。

そこでようやく、妖夢の戦意も削がれたのである。

代わりに心を満たしたのは、クルーゼの助けになろうとして、結局何もできなかった己の惨めさだった。

「くは．．．っ！！？」

スラッシュエッジが頭部に直撃し、再び妖夢の身に、叩きつけるような衝撃が襲う。

せき込むように開け放たれた妖夢の口から、思わずよだれが玉となって漏れた。

その様子は、吐血するのによく似ていた。

よだれに混じって、眼から何かがこぼれ出たが、それが何なのかは、妖夢自身にも分からなかった。

衝撃が去り、シートにもたれかかった身体からみるみる力が抜けていく中で、ただ一つ言えるのは、自分は真っ向から戦い盛大に負け、そして、結局クルーゼを助けることはできなかったということなのである。

妖夢が良くも悪くも真っ直ぐな戦い方をしてくれたおかげで助かった。

が、楽に勝てた相手でもなかった。

戦うための力を失い、最後の抵抗もやめ、完全に戦意を喪失したジンを見ながら、シンは。妖夢の戦いに敬意を表したい気分になった。だが、だからといって、彼女の意思をくみ取ることはいできない。

彼女が助けようとしたクルーゼの命を、快く繋ぎとめるわけにはいかない。

彼は人類の敵であり、その意思は揺るがない。

そしてシンも、彼の敵として戦場で相対した者として、彼に止めを刺さねばならないのだ。

だが、もしだ。

もし、まだほんのわずかの光明、希望が残っており、クルーゼが、心を改め、人類に仇成すのをやめてくれれば、シンもまた、己の中の役目を覆すこともできるのだ。

妖夢の願いも聞き入れてやることができる。

そんなことを脳裏で考えている時点で、己の決意が揺らぎ始めているというのを、シン自身よく分かった。

クルーゼに対する情けでなく、彼のためだけに、あれほどの力を發揮し、命を賭して戦える妖夢に対する情けである。

人のために生きることの大切さを知るシンには、人から尊敬され、

愛されることが、どれほど価値のあるものなのか、分かっているのだ。

誰か一人でも、慕い、尊敬する者がいてくれるだけで、命は無二のものとなる。

それが分かっているのだ。

それなら．．．

シンの脳裏で、一つの考え方が出てきた、その時だった。

幻覚の世界そのものから発せられているかのように響いた声が、まだ戦いが終わっていないことを意識させた。

『まだ終わっていないわ。シン・アスカ』

「紫か．．．？一体どこから．．．」

今度の声は紫だ。

またしてもMSで出現するのか？一体どこから．．．
紫の、あるいは紫の乗り込むMSの姿を探そうとしたシンだったが、その必要はなかった。

刹那の時、コックピットモニターを埋め尽くすように、すなわち、シンの視界を埋め尽くすように、彼にとっては忘れることのできないMSの顔が肉迫したのだから。

「．．．ス、ストライク・フリーダム．．．！」

シンの最大の仇敵の後継機であり、シンを絶望の底へと叩き込んだ、歴史上の無敵のMS。

メサイア戦役は、実質的にこの一機によって覆されたといっても過言ではなかった。

シンの体内の全細胞が、正体不明の熱を発し、シンは、己の身体が粟立つのを感じた。

価値観が変わった今でも、畏怖と、恨みと、そして闘争心を捨てることのできない、あのMS。

それに乗っているのが、紫だった。

紫はシン以上に、まず妖夢に呼びかけた。

頭部メインカメラが機能停止に陥ることで、モニターがブラックアウトし、うす暗くなったコックピットで、ほとんど気絶寸前になってシートにもたれかかっていた妖夢は、スピーカーから紫の声を聞いた。

（妖夢。よくぞここまでやってくれたわ）

「．．．紫様．．．？」

（よもや私を感化させるとは．．．幽々子のお付き風情が、随分と生意気になったものね．．．）

「．．．どういことです」

（あなたの願い、聞きいれた。今度は私がクルーゼを助ける．．．久しぶりに本気を出させてもらうわ）

「あ．．．．．ああ．．．！ようやくあなたも．．．」

（ようやくと言わないでくれる？）

妖夢は、ついに逃れることができなかった絶望をうちぬく、最後の希望の矢が放たれたのだということを感じた。

放心した身体に、再び命の実感が戻るような気分がした。

クルーゼは、ただ黙しているばかりだった。

スピーカーから響く紫の声も、ただ無心になって聞いているだけだった。

（クルーゼ。やっぱり私、あなたをお願い聞くのやめることにするわ。ごめんね）

「．．．．．」

（元々私、人の言うことをヘーこら聞くのって、嫌いだったのよね）
「・・・・・・・・」

（それに、生意気なのよ。死にたくなったら、わざわざ他人に殺してもらったの。しかもそれに意味を持たせようっていうんだから、おかしいわよ。滑稽ね・・・死んで教えを説くぐらいなら、生きて美味しいものでも食べてたほうが幸せでしょうに、あなたってもしかしてマゾヒストなのかしら）

「・・・・・・・・」

（私は今まで、多くの命を駒として扱ったこともある。しかし、その全ては、生きること必死になっていた。生きするためには、他人の命を啜りさえした。しかし、それを否定出来るものは一人もいない・・・それが、生命のアイデアだということを、誰もが皆、無意識の中で知っているのだから・・・・・・・・生きるために足掻くこと放棄した時、命に価値はなくなる。生きる価値、命を操る価値、感情を抱く価値、他者から意識される価値、他者から尊敬を受ける価値、愛を享受する価値・・・・・・・・私は、価値のない命に、情を持ち始めていた・・・そう思うと、自分自身に憤りを覚える。そしてそれ以上に、あなたを軽蔑する）

「・・・・・・・・」

（私、今回ばかりは割かし怒ったわよ。この私が、わざわざ人の自己満足のためにこうまで働かされたんだから・・・しかも、殺すためだけに・・・一言済まなかった、って言ってもらいたいものねえ。今回は特別にそれで勘弁してやるわ）

「・・・・・・・・」

（いや・・・それよりむしろ、感謝してほしいわね。ありがとうって言いなさい）

「・・・・・・・・」

（ほら、言つて）

「・・・ああ・・・感謝する・・・ありがとう」

（はい。どういたしまして・・・でも、できればもっと別の台詞を

聞きたかったわね)

「・・・どういうことだ・・・?」

(自分で考えなさい)

それだけ言つと、スピーカーは沈黙し、何も語らなくなった。

クルーゼは、身体の中から力が抜けていくのを感じた。

だが、同時に、まるで赤子のような純粋な心地よさが、細胞を満たしていくような感覚も覚えた。

馬鹿なことを考えていたらしい。そう思うことで、身体の中に、心の中にあつた重しのようなものが、消えていくような気がした。

そしてシンに関しては、彼女の声を聞く必要すらなかった。

「あんたもまた、俺の敵としてクルーゼを助ける・・・そうなんだな・・・」

その言葉に返事はなかったが、少しずつデスティニーから距離を置いていくフリーダムの姿が、紫の応答であると、シンには分かった。妖夢以上に、迸るような紫の精神力が、彼女の心を、言葉以上によく現わしていた。

シンは確信した。

クルーゼの命に宿る大きな価値を。

それを守るうとする妖夢や、紫の意思を・・・

そして今シンは、彼らの心が一心に伝わっていながらも、まだ、戦うことをやめようと思えなかった。

それは、クルーゼを討たねばならないという使命でも、意地でもない。

憎しみや殺意でもない。

もつと純粋な、生命が、己の在り様の全てをぶつけて、生きるために戦う心だった。

ただ、戦つてみたいから、戦う。命のやりとりというわけでもない。

生命が、互いの価値を伝えあうための戦いだ。

シンは、より苛烈な攻防が始まるうとしているというのを感じながらも、怖いほどに心が清らかになるような気がした。

そして、クルーゼを救おうとする者は、紫だけではなくなった。

彼女がクルーゼの味方になった以上、彼女の式である藍と橙もまた、クルーゼを救うべく立ちあがったのだ。

デステイニーと対角線上に立ったフリーダムを追い、ストライクとダガーが、青い翼の機体の両脇に移動する。

（済まないな。シン。私はあなたの友達以上に紫様の式だ。紫様がクルーゼを生かすというのなら、それを援けるのが我々の役目）

（今度は、あたし達が相手だね）

（ふふふ．．．）

紫の笑い声と共に、自由の名を冠するMSの双眸に、その名に似合わない悪魔的な光が灯る。

（な、なんかまズくなったんじゃない？）

妖夢が出現した辺りから置いてけぼりにされつつあった小傘が、疎んだような声を出す、シンには、一切の焦りや恐怖はなかった。むしろ、不思議なまでの自信が、その心に満ちていたのである。

「小傘。怖いなら下がってろ。ここは俺一人でやる」

（い、いや、そうはいかない。あたしもいくよ）

「いいんだ。俺一人でやれる．．．あんたは見ていてくれ．．．俺の本当の力を」

（え．．．？）

シンの中で、何かが弾ける音がした。

二機のガンバレルストライカーより有線式ポッドが射出され、同時に、フリーダムの翼に格納されるドラグーンが展開し、十数基の自立兵器がデステイニーを取り囲む。

だが、その瞬間だった。

言い方としてシンを裏切り、紫側に寝返った藍の眼には、デステイニーの機体が、突然いくつにも分身し、四方八方へと飛びまわったように見えた。

それは彼女の錯覚でしかなく、いくつも分身したように見えたのは、デステイニーが、亜光速で移動し、ガンバレルを攻撃する残像だった。

藍がそれを理解したその瞬間、アロنداイトに切り裂かれた八基のガンポッドが一斉に爆発するその瞬間には、彼女の眼に、大刀を振りかざすデステイニーの姿が見えた。

「う、うわ．．．ぐうんっ!？」

驚嘆の声をあげる間もなく、ギリギリ、数度振りぬかれたと視認できるアロنداイトの刃が、インディゴストライクの四肢を切断した。メインカメラだけ残されて、達磨にされてしまった。

叩きつけるようなGの中、藍としては、自分の反応速度と演算能力が間に合わないほどの速度で繰り出される未知の攻撃には、恐怖を通り越して称賛の声が頭で湧きあがるほどだった。

やられたのだと判断したその次の瞬間には、今度は橙の機体が、まったく同じように戦闘不能へと陥った。

ガンバレルを全基破壊しつつ、二機を撃破するまでの時間は、僅か三秒。

そしてデステイニーが、続けざまにストライクフリーダムに攻勢をかけるべく接近するのには、その十分の一の時間もかからなかった。アロنداイトを構え、フリーダムへと肉迫するデステイニー。

それに対してフリーダムは、機体をフルスロットルで後退させ、距離を保とうとする。

だが、デステイニーが光の翼を輝かせ、それを猛追する。

藍が交錯しようとする二機の機体を視界に納めようとしたその瞬間には、二機はさながら彗星のように、幻覚の世界の遥か彼方へと離

れていった。

先ほどのデステイニーの攻撃を回避したフリーダムドラグーンもまた、彗星となった二機の後を追っていく。

一瞬で藍達の機体のいる宙域から離脱していった二機のマシンは、数秒もしない内に、幻覚の中で輝く仮初の星々の一つとなった。

ただし、静止する星の海の中で、蛍のように絶え間なく動く、鮮やかな星にだ。

藍達を巻き添えにしなくなかったからこその行動だったのだろう。距離としては数？ほど離れたところで、二機は追いかけるのをやめ、彗星となって幾度となく衝突し合った。

「・・・驚いた・・・シンに、あれほどの力があるなんて・・・」
(ひょえ・・・)

一瞬でMSを戦闘不能に追い込むシンの力に、ただ驚嘆することしかできなかった。

星海の中で目まぐるしく動き回る二つの星のうちの 하나가、荒々しい生命のエネルギーを放出しているのが、眼に見えるようだった。

「紫っ!!」

「あははは！あっはははは！来てみなさいな！」

二人の攻防は、すでに並みの人間では視覚できない、閃光の交錯となっていた。

スラスターの光は一筋の線となって、白い軌跡を、漆黒の宇宙の中に書き殴っていく。

そして、二つあるその線が交り合う部分でこそ、デステイニーとフリーダムが衝突し、刃をぶつけあったのだ。

一秒間に二度の交錯、すなわち、二度の攻防。

その合間に、数条の光線の筋が折り重なって、紫とシンは、幾何学

模様のようなものを宇宙に描いていた。

ストライクフリーダムの放つ八基のドラグリーンが、コンマ一秒の時間差をあけて、連射される。

デステイニーの軌道を先読みし、たとえ一撃回避されたとしても、その回避の軌道をさらに読んでもう一撃、それを六度繰り返す。高速で機動しながら執拗にビームを撃ち放つドラグリーンが、多角形の模様のような火線を描く。

しかし、デステイニーは、それをことごとく回避しながら、腰部高エネルギー砲を最大出力で発射した。

しかも、ただ撃ち放つのではない、ビーム柱を吐きだすビーム砲の射線を、機体ごと大きくずらしながら照射していた。

それは最早、粒子の弾丸というより、火線の刃となって、フリーダムに、横なぎの一閃を浴びせる。

「ん．．．っ、くっ？」

回避するよりも早く迫る深紅の砲火を、紫は咄嗟に、ビームシールドを展開することで受け止める。

だが、巡洋艦の装甲をも容易に貫通するビーム砲の直撃を耐えきることはできず、打ち消しきれない衝撃が反動を生み、ストライクの機体を吹き飛ばし、ビームシールドを貫通した熱粒子が、フリーダムの左腕部装甲を炙り、焼け爛れさせていく。

「なんと．．．っ」

「逃がすか！」

うめき声をあげる紫共々、もんどりうって吹き飛ぶフリーダムの隙を逃すまいと、デステイニーが、アロンドイトを構え、猛追する。

双眸に鬼のような闘志の炎を滾らせ、フリーダムに肉迫したデステイニーが、その頭部目掛けて、光の刃を振り下ろす。

だが。

「甘いつ」

フリーダムは、大きく体勢を崩したまま、あえてフルスロットルで噴射をかけ、迫りくるデステイニーの、さらに頭上へと回り込み、その背中に蹴りを浴びせた。

今度はデステイニーが、背を向けて吹き飛ぶ番だ。

「ぐあっ！」

臓腑を押し出すような衝撃がシンを襲う。

すかさずフリーダムは、右腕に持っていたビームライフルを捨て、両手にビームサーベルを持って、デステイニーへと接近した。

しかしデステイニーは、スラスターを三本目か、四本目の足のように噴射して、体勢を立て直しつつ、素早く横に回転しながら、向きを直しつつ、スラッシュエッジを撃ち放った。

フリーダムは、止まることなく、飛来するスラッシュエッジを、左手のビームサーベルで弾き返し、同時に、デステイニーの至近に接近すると、残ったビームサーベルを縦に振りぬいた。

同時に、横なぎに振られたアロンドイトの刃が交錯し、二機の間、強烈なスパークとソニックブームが発生した。

いかすち

雷が二機のマシンの顔を青白く照らす中、フリーダムが、左手のサーベルを逆手に持ち替えて、デステイニーの頭部へと突き付ける。

しかし、そのままデステイニーの頭を焼き切るはずだった光の刃は、眩い光を発するデステイニーの左掌に阻まれた。

最大出力で放たれたパルマフィオキーナの光が、ビームサーベルの刃を、激流を割り裂くように、受け流していたのである。

拡散する熱粒子に頭部を焼かれながらも、デステイニーの双眸が、力強く煌めいた。

「外の世界の人間風情の坊やが、よくもやるわね」と紫。

「人間風情でも、MSの戦いならこっちに一日の長があるんだ。あんたなんかに負けやしないさ！」

「ほざきなさんなっ」

パルマフィオキーナとサーベルの干渉が、より眩いスパークを輝かせる中、で、この一瞬の静止は、ドラグーンを駆る紫にとっては、

最大の好機だった。

「う．．．っ！」

両手でフリーダムの攻撃を防ぎ、進退きわまったデステイニーの背後を、ドラグーンが取り囲む。

その小さな砲口は、今まさに、緑色の収束粒子を撃ち放たんとしていた。

「終わりね．．．」

「まだだっ！！」

シンが、渾身の力をこめて、フットペダルを踏み込む。

背部の光推進システム、光の翼が、より一層強く輝き、デステイニーの機体を包みこむ。

そして、六基のドラグーンから放たれる光の矢を真つ向に受けてもなお、その翼が破れることはなかった。

いつぞやのソーラーセイルと同じような原理で、光を高圧で噴射させる光の翼は、それだけで強大なエネルギーの奔流であり、ビームの膜でもあった。

最大出力で展開された光の翼が、ドラグーンの放つビームを相殺したのである。

それだけではない。

光の翼が最大出力で展開されるということはすなわち、デステイニーが、最大速度を発揮してフリーダムを押し返したということである。

突きたてられる光の刃を、根元まで押さえ込み、デステイニーの頭部が、フリーダムの顔面と激突する。

「ううー．．．っ！」

その衝撃が、紫の踏ん張りに、一瞬の弛緩を生んだ。

今度は逆に、鋭い逆噴射をかけて、フリーダムからほんのわずかに距離を取ったデステイニーは、刹那の隙を見せたフリーダムのコックピット目掛けて蹴りを放った。

「くあっ！」

さすがの紫も悲鳴をあげ、フリーダムが、身もだえしながら吹き飛ばされる。

そしてさらに、その動きを追って、先ほど吹き飛ばしたはずのスラッシュエッジが、再びフリーダムを追尾して接近してきた。

最初からこれも計算づくか・・・

フリーダムは瞬時に体勢を立て直しつつ、ビームサーベルを振り下ろし、今度は弾き飛ばしたりもせず、完全にブーメランを溶断し、爆破させた。

同時に、光の翼を、その機体よりも大きく羽ばたかせながら、デステイニーが右から回り込んでくる。

さらに、もう一発のスラッシュエッジが、左からも迫る。挟みうちだ。

「ふ・・・っ！」

額を冷や汗が流れる感覚を数十年ぶりに感じながらも紫の脳裏は、未だ冷静さを欠いてはいなかった。

八基のドラグーン全てが、猛進するデステイニーに狙いを定め、一斉射する。

八発の撃ち六発が、デステイニーからやや逸れた位置を狙っているのが、回避の軌道を殺すという意味でスペルカード的であった。

しかしデステイニーは、回避することもなく、むしろさらに速度をあげて、突進してくる。

アロンドイトを構える右腕はかばいつつ、左肩と右大腿部には、あえて直撃を受けた。

だが、ビームに対しても高い耐性を持つデステイニーの装甲を完全に破壊することはできず、左肩は、アーマーが、爆風と共に吹き飛ばだけだった。

しかし、右大腿部は、中心に直撃を受け、鋭い閃光が貫通し、爆発と共に、右脚全体を胴体から吹き飛ばした。

だが、デステイニーの突進が止まる気配はない。

「うおおおおおおおーっ!!」

「は．．．っ!？」

フリーダムは、両腕を広げるようにしてビームサーベルを振りぬき、デステイニーのアロンドイトの一閃を、そして、スラッシュエッジの斬撃を受け止めた。

だがその時こそ紫は、自分が手数の上で、いや、手数では互角でありながらも、勢いで、シンに敗北したことを悟った。

紫のフリーダムは、ドラグーンの攻撃を強引に突破され、両腕の動きを封じられた。

胴体に位置するスキュラ砲は、死角になっていて撃てない。

だがデステイニーには、未だ左腕のパルマフィオキーナと、腰部のエネルギー砲が残っていたのである。

フリーダムの頭部にデステイニーの左腕が突き出され、光を放つ掌が、人がそうするように、フリーダムの頭を掴んだ。

ゼロ距離より放出されたエネルギーが、フリーダムの頭部を破砕する。

さらに続けざまに、高エネルギー砲より放たれた光が、フリーダムの左わき腹を掠める。

高圧高温のエネルギーの奔流ならば、たとえ掠めただけでも、装甲を溶断し、内部機関をショートさせるのには充分だった。

関節が焼ききれたフリーダムの左肩と左大腿部が、付け根から爆発し、吹き飛んだ。

しかもそれだけではなく、ビームによるダメージはコックピット周囲にまでおよび、紫の眼前の計器が爆発し、爆炎が紫の肌を炙り、破片が頬を切り裂いた。

「くっ!？」

黒煙と血の玉が狭い空間を漂う中で紫は、追い込まれてもなお、戦意を失ってはいなかった。

脳裏で、未だ健在のドラグーンを動かすべく念じる。

だが、一基として、反応を示すことはなかった。

どうやら今のダメージで、ドラグーンのコントロール系が機能不全に陥ったらしい。

最早、フリーダムが強みであった自立兵器は、物言わぬ筒になりさがったのだ。

デステイニーが、フリーダムの戦力を完全に奪うべく、アロンダイトを構えて、再度突進してくる。

ここで紫は、最後の抵抗を見せた。

最後の攻撃手段である腹部スキュラと、右腰部のレールガンを突撃するデステイニーに撃ち放つ。

しかし当然、デステイニーはそれを鋭い動きで回避し、何事もなかったように再加速し、フリーダムの至近へと迫った。

だが、まだ終わりではない。

「ふ．．．っ」

紫が笑みを浮かべ、スキュラの第二射のエネルギーが、砲門に迸る。狙いはデステイニーのコックピット。

「うっ！」

まずい、とシンが思ったのは、こちらが撃墜されるという危険に対してもあるが、同時に、この距離でスキュラを放てば、フリーダムの方もただでは済まないからなのだ。

撃墜、いや、相討ちの一瞬、その刹那の時が、走馬灯のごとくスロ―になる。

シンは、ゆっくりと、例えば、雷がその場で滞留しエネルギーを蓄積していくようにも見える、スキュラのエネルギーチャージの光から、紫がいかに本気でこの戦いに臨んでいるのかを知ったような気がした。

クルーゼという他人のためだけに．．．

「柄にもないけど．．．必死というものにならせてもらっわ」

0・1秒が10秒にもなっている時の中で、シンは、紫の呟く声を聞いた気がした。

シンもまた、覚悟を決める。

デステイニーが、兵器というものを超越した反応を示し、瞬時に、左腕のビームシールドでコックピットをかばった。

丁度その次の瞬間には、フリーダムの腹部から放たれたスキュラの膨大なエネルギーが、二機の間、強力なエネルギーの渦と、それにより発生する膨張による爆発を発生させた。

通常の火薬の爆発とは違う、圧縮された重粒子が膨張、拡散することによって発生するイオンの煙が、二機を包み込む。

そして、爆破の衝撃で吹き飛ばされるフリーダムに対し、その衝撃に真っ向から逆らったデステイニーが、止めの一撃を加えるべくその双眸を真っ赤に光らせながら、接近した。

MSの装甲越しに、紫とシンの視線が交錯する。

そして、アロンドイトの一閃が、レールガンの砲身と右腕部を一拳に切断し、さらに、固く握りしめられた左拳が、腹部、スキュラの砲口にめり込んだ。

フリーダムのコックピットで二度目の爆発が起こり、内部照明が完全にブラックアウトする。

操作系統も、ショートし、機体を操作すること自体が不可能になった。

今度こそ完全に、あらゆる戦闘力を削がれたフリーダムの機体から、デステイニーが拳を引き抜く。

破片と伝導液が、さながら血のごとく、フリーダムの腹部から噴き出した。

同時に、少し遅れて、スキュラの衝撃によりショートしていたデステイニーの左腕部で爆発が起こり、手の甲から二の腕にかけて、まるで裂けるように吹き飛んだ。

フリーダムは、右脚を残して四肢がバラバラになり、腹部も碎けた。デステイニーの方も、右足と左腕部が破損し、上半身の装甲全体が焼け爛れていた。

互いにボロボロになった機体は、どちらが勝ってもおかしい戦いではなかったということを、如実に示していた。

シンが、動かぬ鉄屑と化したフリーダムの中にいる紫に向けて、静かに言った。

「．．．．．正直、勝てるかどうかは五分だった．．．今でも、信じられない」

その声に、しばらくした後、紫が応える。

（．．．この私に真っ向から戦って勝ったのは．．．あなたで二人目ね．．．）

「．．．．．」

（クルーゼが一人目よ．．．）

「．．．そうか．．．そう、か．．．」

（．．．何か、いろいろと清々したわ．．．）

「．．．どういうことだ」

（死ぬべくして死ぬ命なら、助けることもない。望むべくして散る命なら、好きに散らせるのも、また一興．．．クルーゼの命、あなたの好きになさい）

「そうか．．．」

呟くような紫の声に、ただ一言静かに応じたシンは、ほぼ全壊したフリーダムの機体を、残った右腕で抱えるようにして牽引し、遥か遠くで待つクルーゼの達の方へと、ゆっくりと機体を移動させた。

そんな中で、シンは呟く。

「もういいよ」

（．．．？）

「俺も、少し頭が固くなってたんだ．．．クルーゼが死を望み、そして、人類の敵になるなら、あいつを殺すしかない、と思っていた．．．それが俺の役割であり使命で、それを果たすのが軍人だと。平和のために必要なことだと．．．でも俺は、軍人であり、兵士である以前に、一人のちっぽけな人間なんだ．．．俺は、他人の気持ち

を裏切り、自分も裏切つてまで、人を殺したくなんてない．．．あんなや妖夢が、必死になつて戦えるような気持ちをな．．．．．本当の平和と自由というのは、あんた達のような人達を悲しませるようなことじゃないはずなんだ．．．身勝手なことかもしれないけど、俺は、たとえそのことで世界が滅ぶことになつても、そう思う気持ちを捨てられない」

（．．．．．）

「たとえ、世界を滅ぼすような狂人であつたとしても、それがかつてじゃなくて、今でもそうなんだとしても、今のクルーゼは、あんた達からの信頼で守られている．．．俺はもう、クルーゼを殺さない。殺せなくなつてしまった．．．その代わり、あいつには、責任を負つてもらう」

（．．．どんな責任を．．．？）

「生かされたという責任。人の心に生かされている、生かしてもらつているという責任．．．自分の中の負の心と真つ向から向きあつて、乗り越えていかなければならないという責任だ．．．あんたにも、クルーゼがその責任を果たせるように、頼む」

（ああ．．．そうね．．．それがいいわ）

「今の俺の台詞。クルーゼも聞いてることだろうぜ．．．俺は正直、あいつとはあんまり面識がない．．．だから、本当に大事なことは、紫から話してやったほうが、いいんだと思う」

（そうね）

自分の奥底に残つていた狂気。

それは、計算によつて体よく創られた架空の狂気ではなく、紛れもなく、クルーゼの心の中にあつたものだ。

その狂気のオーラを戦う力として放出し、シンに止めを刺してもらふことで、その果てしない憎悪共々肉体を消滅させようとしていた

のがクルーゼだ。

だが、そんな彼に待っていたのは、結局、生かされてしまったという認識だった。

自分の中の良識が最も忌み嫌う感情を心に充満させ、それが自分の本当の姿なのだと自己暗示をかけたクルーゼにとつては、どこまでも裏切られたような気分であり、自分の考えが、思想が徹底的に否定されたといつてもいいことだった。

だが、機能が停止し、精々残ったバーニアを吹かせて真空を遊泳するしかできないプロヴィデンスのコックピットで、大きな脱力感に見舞われ、シートにもたれかかるクルーゼの心には、あまり惨めな気分はなかった。

むしろ、心地よいとさえ思える、不思議な感覚で満たされていた。

心の中に残っていた全ての狂気も洗い流され、今度こそ本当に、生まれ変わったような気分だった。

そして、そんなクルーゼに対し、紫は静かに語りかける。

——さっきの言葉、聞こえていたわね——

「．．．ああ．．．よく思い知ったよ．．．私は結局、世界のためでなく、自己満足のために死を夢見ていたのだ．．．理性をもつて心の奥にある狂気を見ることを恐れ、逃げていたのだ．．．本当の自分を見つめ直すことを拒んで、最も安易な方法で全ての現実を忘れる方法へと逃げていた．．．結局それは、世界のためでもなければ、誰のためでもなく、ましてや紫達のためでもなく。この私の自己意識のためだったのだ．．．そして私は、自分のことだけを考え、私に向けられる他者の感情を意識することを忘れていたんだ」

——そう。ようやく分かったようね——

「妖夢には悪いことをした．．．そして、君に対しても．．．私は、もう逃げん．．．シンがこの幻想郷で変わることができたように．．．私も、今度こそ本当に自分を見つめ直す．．．自分の罪を認め、

悔い改め、そして、変わって見せる．．．君達の存在を意識することだな．．．．．それが、君が本当に聞きたかった言葉なのだろう?」

——．．．ええ——

全ての事に決着がついたこと感じたクルーゼは、魂を声にして言った。

『シンよ。君は私が考えていたよりも遥かに強く、そして温かい人間になったようだな．．．そして、私の中にあつたわだかまりさえも、取り払ってくれた．．．感謝する．．．そして今こそ、この私の果てなき憎悪が生みだすこの幻覚も、必要のないものとなった．．．今こそ、本来あるべき処に、戻る時だ』

クルーゼの魂が、幻覚の世界全体を鳴り響かせ、彼の魂の声を全ての者に反響させた。

同時に、幻覚の宇宙が突如、バツと輝き、眩い光の海へと姿を変える。

シン達は思わず目を閉じ、その光のカーテンから眼を逸らした。紫が、境界を越えて限りなく現実に近くなった幻覚を、改めてただの幻覚へと戻し、クルーゼやシン達の記憶を読み取ることに集中していたさとりが、その集中を解く。
鈴仙の瞳から、紅い光が引いていく。

そして、光が薄くなったのを感じ、眼を開けたシン達の視界には、先ほどまでの光景が嘘だったように、神社の境内が広がっていた。終わってみれば、何もかもあっけない。

今までの戦いが、ただの幻だったのだろうかと思えるし、それ

は事実だった。

だがシンには、たとえ先の戦いが幻であり、シュミレーションと同じ仮想的な戦いだったとしても、そこでぶつかり合った感情は、紛れもなく真実だと思っていた。

クルーゼの狂気、妖夢と紫の意思。そしてそれを感じて、シンが選んだ答え。

まるで今まで時間が静止していて、今ようやく動き出したかのよう
に、幻覚の世界が形成される直前そのままの状態で、シンの前に立
つクルーゼ。

その眼は、驚くほどに険が引き、穏やかだった。

それだけで、シンには、止まっているようだった今までの時間の中
で、紛れもなく、お互いの心が大きく変わったのだということを確
信した。

そして、これまでの幻覚に対する少しの戸惑いと、その幻覚の世界
で起こった事への心の整理のために、その場が僅かに静まりかえっ
た後、クルーゼは、シンに向かって静かに言った。

「これでもう．．．私が君を巻き込むことはなくなった．．．今こ
そ、還る時だろう．．．シン・アスカよ」

その声はすなわち、今度こそ、時間がやってきたということを意味
していた。

「ああ．．．還る」

静かに、しかし力強く応えたシンのその言葉に、未練の色はなく、
大きな決意が宿されている。

そのことは、シンのことをよく知る者誰もが、はっきりと分かった。

PHASE・21『運命の明日』

全ての命に、必ず明日はやってくる。

多くの関わりと、命の価値。

生きようと願う心、誰かの呼ぶ声がもたらしてくる、
終わらない明日が・・・

以後、シンとクルーゼが目線を合わせることはなかった。

これよりしばらく、二人は、お互いにやるべきことをやらねばならない。

シンは、コズミック・イラへと帰り、少しずつ世界を変革していく。そしてクルーゼは、シンがそうしてきたように、この幻想郷で、己の内面を、一度見つめ直すことになるのだ。

踵を返して、シンに背を向け歩きだしたクルーゼは、そのまま、博麗神社の本堂の向こう側へと去っていく。

シンは、その背中を見ることもなかった。

クルーゼとは、もううんざりするほど、戦いの中で語り合ったのだから、今更余計な言葉は必要なかったし、意識することすら、必要ではなかったものである。

クルーゼが歩きだしたその時には、シンは、紫の方に振り返り、こう言った。

「今度こそ、頼む」

その声に紫は、「分かったわ。数分だけ待ってなさい、そうすれば、すぐにでも帰してあげる」と応えると、そのまま、完全に石ころ帽子になつていた霊夢を呼び寄せると、シンから少し離れて、二人でシンの帰還の準備を始めた。

とはいえ、要は、この前聖輦船がコズミック・イラに転移した時のように、スキマを展開してその先をコズミック・イラに繋げ、そこにシンを通すだけでいいのだから、数分もかかるはずはなかった。が、紫としては、いろいろと、無くてもいい余裕が欲しかったので、わざわざ少し長めに言っただけだった。

それに、余裕が必要というのなら、シンもそうなのだから。

ついにシンが元の世界に還るという話になって、彼の下に、小傘と藍達に、さとりが駆け寄っていた。

幻覚の世界を創るためにその力が必要だったのだと納得しつつも、何故幻覚の世界をわざわざ創ったのかは理解できず、そのうえシンとは完全に初対面である鈴仙としては、その輪に入ろうとも思えず、もう帰ってもいいのか判断しかね、頭をかきながら途方に暮れている様子だった。

シンとはある程度面識のある妖夢の方も、シンの方に駆け寄ることはせず、シン以上に深いかかわりを持つ者の傍に行こうと、その後を追ひ、神社の本堂の裏へと駆けて行くのが、紫には見えた。

取り囲むようにシンの下に近寄る面々の中で、小傘が、さすがに名残惜しそうに言った。

「当分は会えないんだねえ。そう思うと寂しいよ。もっと驚いて欲しかったねえ」

シンは応える。

「もう十分驚いたさ。でも、もっと驚かせたいっていうんなら、これからもよく勉強して、俺が帰ってきたときのために備えてるよ」
「うん、そうするよ」

「楽しみにしてるからな」

今度は橙が言う。

「この前貰ったあのお箸、持ってる？」

「ああ。当たり前だろ。俺の故郷は、日本食も結構よく食べるんだ。何度でも使わせてもらうよ．．．そうだなあ．．．またここに帰って来た時、あんたの里に返しにいくのか？」

「にやっはは。いいよ、そんなの。ずっと持っていればいいよ」

次いで、藍が言う。

彼女の場合は、感慨も一人といった感じだった。

彼女自身、友達想いの性格をしているということもあるし、それ以上に理由があるのだが、それは、彼女本人が語ってくれていた。

「今回のことは、いろいろと面白かったし、考えさせられるところもあった．．．あなたと同じに、私の中の価値観も少し変わった気がする．．．あなたのことを見ていることで、人間の姿を、初めてよく見ることができた．．．それに、自分で考え、行動すること．．．それは、私が持っていなかった、あなただけの素晴らしい力だと思う．．．シンは、本当にすごいよ」

「へへ．．．あんたにそう言われると．．．妙に照れるな」

「恥ずかしがることはないよ。あなたのおかげで、私も、自分で考えることがどういうことかというのを知った。これで、私は、紫様の式として、少しだけ強くなることができた気がする。橙だってそうだ．．．いろいろ、ありがとう」

「．．．こちらこそ」

そして最後に、さとりに対しては、シンの方から呼びかけた。

「さとり。また会えてすぐなんだけど、少しの間お別れだ．．．だが、またすぐに会える」

「．．．うん」

「小傘や藍は、俺の大事な友達なんだけど、あんたは、それよりももっと大事な関係になるのも、いいかなって思ってる．．．家族とか、そういうのにさ．．．なってもいいかな？」

「・・・いいよ」

嬉しそうに微笑みながら頷くさとりに、シンは、以後言葉で語りかけることはなかった。

小傘達の前で堂々と話すには少し気恥ずかしいことを、心の中で思うことで、語りかけたのである。

——どうして、俺が、あんたの家族になりたいって思ったのか、分かるか？——

「ん・・・」

さとりは小さく首を横に振った。

——あんたが、俺と一緒に居たいって思ってくれたからなんだ・・・

俺、あんたがそう思ってくれた時、とても嬉しかった・・・俺のことを必要としてくれるのがさ、嬉しかったんだ・・・正直な話。

コズミツク・イラには、俺のことを本当に必要としてくれる人はいないんだ。一緒に居たいとか、一緒に居て楽しいと思ってくれる人はいても、必要だと思ってくれる人はさ・・・昔は一人いたけど、今はもういない。みんな俺なんかがいてもいなくても、それぞれで何事もなく生きていける・・・俺にはそれが、少し寂しかった・・・

・・・辛かった、とまでは、言わないけどさ・・・それで、あんたの寂しそうな顔を見たとき、何とかしてやりたいと思つて、それで、一緒にいてくれていいって言ってもらえた時、俺はもう、細かいことが考えられなくなって、それなら、ずっと一緒に居るとしか、思えなくなつたんだ・・・俺、自分が人から何かをされることをずっと望んでいた。家族が死んだその日から、誰か俺を慰めてくれつて、望むようになっていた。でも、最近さ、そうじゃないって思うようになってきたんだ・・・誰かに慰めて欲しいって思うより、誰かの心を慰めて、助けになってあげる方が、やっぱり心が和らぐつてのが、分かってきたよ・・・だからってわけじゃないけど・・・いや、だからかもしれないけど・・・あんたに対しては、それだけじゃない。上手く言えないけどな・・・だから、あんたがいろいろ寂しい

って言うなら、俺が助けになってやる。あんたが、もういいよって言うまで、ずっと傍にいてやる。俺が必要じゃなくなる、その時までな．．．――

「ふふ．．．」

「どうした？」

「そんなこと、ないわ．．．必要じゃなくなるなんて．．．」

「．．．そうか．．．」

「．．．私、待ってます。また帰ってきたら、すぐに来てね．．．」

「．．．ああ、すぐ行く」

「さて、そろそろ準備整ったわよ」

紫が、見計らったように、声をかけてきた。

さて、いよいよ、いよいよというわけだ。

結局霊夢に出番はなく、紫が展開したスキマの扉が、彼女の隣に穿たれていた。

シンは、小傘達に背を向けると、そのまま黙々と、スキマに向かって歩き始めた。

「コズミック・イラでやることが全て済んだら、あなたが最初に幻想郷に来た時の、あの墓標の前にきなさい。また迎え入れてあげるわ．．．そして、またコズミック・イラに帰りたくなったら、好きな時に私に頼みなさい。藍がそう頼んでいたわ」

「ああ．．．ありがとう」

紫が、彼女らしからぬ．．．いや、だからこそ心から浮かんたのであろう穏やかな笑みを浮かべながら、「必ず平和な夜を。黄金の夜明けを．．．銀河を横切るあなたに、幸あれ」と、賛辞の言葉を贈る。

スキマの扉の前に立ったシンは、一呼吸置くと、じつとこちらを見つめていた小傘達の方へ振り返って、こう呟いた。

「俺、明日を貰ったんだな．．．みんな．．．」

「え？」

「・・・また明日・・・」

そしてシンは、改めて彼女らに背を向けると、そのままひと思いに、スキマの中へと入っていった。

そしてシンは、幻想郷を去った。

冬の始まりがもたらす風だが、その肌寒さが、寂寞の念をもたらし、こともなかった。

いずれやってくる明日に、寂しさを感じる事など、無かったのである。

スキマの扉が閉じ、シンが確かにここにいたという形跡すら、消えてなくなる。

小傘達が、何故かは分からずに、空を仰ぎ見る中で、紫にとっては、今こそが始まりなのだというのを感じた。

シンのことではない。

世界に絶望し、人々を呪いながら命を散らし、この幻想郷で、再生の機会を得た一人の男のことである。

スキマの中へと足を踏み入れたシンを待っていたのは、コズミック・イラの大地ではなく、無限に広がる混沌の淵でもなかった。

温かい光に包まれていると感じられる、真っ白な空間。

眩くも柔らかく、眼を刺すような鋭さは無い光がシンを包み込み、シンの眼前で一つの纏まりとなって、遙か先に続く一本の道を形作

っていた。

戸惑いも一瞬、シンは、その道の向こうにこそ、シンが帰るべき、コズミック・イラの世界があるのだと感じ、シンは、足早に光の道を進んだ。

この道こそ、紫からシンへの、賛辞の言葉に次ぐ最後の贈り物だった。

『よお、シン。俺がいなくなっちまった間に、随分といい顔つきになっただじゃないか』

「え？」

突然。右の方から声が聞こえてきた。

何事かと言った具合に、その声のする方向へ振り向いたシンは、思わず息を呑んだ。

振り向いたその場所には、昔死別したはずの、ハイネ・ヴェステンフルスの姿があったのである。

容姿は見間違えるはずもないし、『何驚いてんだよ』という飄々とした態度は、間違いなくハイネのものであると確信できた。

頭の中が真っ白になり、何も考えられなくなって、その場に立ち尽くして固まったシンの肩に手を乗せて、ハイネは言う。

『仮にも赤服の先輩なんだぜ？ビビンじゃないよ・・・天国がどこかにあったって、何も変じゃないだろ？』

「・・・・・・・・」

その言葉に、シンは我にかえり、そして確信した。

いつか、レイに言っていた言葉だ。

人は死んだ後、どこかに向かい、そしてそこで救われる。

シンには分かった。

ここが、そこなのだ。死者が向かうべき処、おそらく、そのほんの一角。

固まっていたシンの命がゆっくりと脈動し、眼の前の現実、あるい

は幻の姿が、紅い瞳に焼きついた。

その様子を見ながら、にやりと笑ったハイネが、続ける。

『軍人てのあさ、損な役回りだよな．．．お国のために頑張るにしまったって、その方法が、人を殺すことなんだ。しかも、逆にこっちが殺される危険もある。なのに、見返りといやあ、ちよつと高めの給料ぐらいのもんだ．．．ホント、俺自身軍人だった手前こんなこと言っちゃいけないんだけど、つくづく損な役回りだよまったく．．．』

「．．．そうですね．．．」

『ほら、行こうぜ』

ハイネに促され。シンは、彼と共に、再び光の道を進み始めた。

『だけどさ。軍人ってのは、絶対誰かがやらなきゃいけない仕事なのさ。分かるだろ？シン．．．もし戦争が起こったら、誰かが戦わなきゃいけない。誰かが国のために、命をかけなきゃいけない。それが軍人の役目なのさ．．．起こっちゃった戦争にすっかり責任もって、自分の使命に誇りを持って戦う．．．損は損でも、馬鹿にしちゃいけない仕事なのさ、軍人って』

「分かります。そういうの」

『それだけじゃあない。軍人たつて、戦うだけが能じゃない。戦争が無い時代でなら、進んで国のために働いて、国民を引っ張って、それもまた軍人ってわけね』

「そうなんですよね」

『でさ．．．今のお前。その鑑だぜ』

「え．．．?」

『実はさ、俺。前はお前のこと、未熟者の坊やって思って、ちよつと馬鹿にしてたんだよね。でも今じゃ、お前の方がずっと立派に見えるぜ』

「．．．．．ヴェステンフルス隊長．．．いや、ハイネ．．．」

『先行ってるぜ、みんな待ってる』

そう言うハイネは突然、まるで消え入るように、シンから離れて、

光の道の向こう側へと向かっていった。

その動きは、宙を舞うように軽やかであった。

「ま、待ってください！待ってるって、みんなって一体・・・っ？」

『みんなはみんなさ。ほら、お前も早く来いよ』

最早そう言う声しか聞こえなくなり、ハイネの姿は、光の道の向こうへと消えていって見えなくなった。

シンは、ハイネの語るみんなという言葉に、何かを感じ、彼の後を追って、早歩きに光の道を歩いていった。

光の道は未だ続いており、その終わりは見えない。

そして、数分間歩き続けていたシンの前に、光の中から浮かびあがるように現れた光景に、シンは、再び息を呑んだ。
もう、二度と会うことはないと思っていた。

そうやって、諦めようとしていた。だが、諦めきれなかった。

「・・・父さん・・・？」

見間違えるはずはない。

「母さん・・・」

遙か昔の思い出と、何も変わってはいない。

「・・・マユ・・・」

シンの眼の前に、忘れるはずもない、家族の姿があった。

穏やかな笑みは、ずっと昔のころ、いつもシンに見せていた笑顔、そのままだった。

『お兄ちゃん。まだね、明日はあるんだよ』

妹のその言葉が、シンの心から、何かをこみ上げさせた。

涙・・・だけではない。

「ああ・・・そうだ、明日はある・・・みんなが待ってる、明日が・・・」

という、感極まった声だけでもない。

喜び、哀しみ、ありとあらゆる感情が、シンの中で無限にわき起こり、その胸中を満たした。

シンは、静かに、涙を流しながら笑みを浮かべて、こう続けた。

「．．．父さん、母さん。マユ．．．また、元気そうな顔が見れて、よかった．．．ずっと、心配だったろ。俺、辛そうにしてたもんな．．．でも、もう大丈夫だよ．．．もう．．．大丈夫だ．．．みんなも、やっぱり、ここにいてること、分かったから．．．」

『うん。また明日ね．．．ほら！みんな待つてるよ』

「．．．ああ」

家族の姿も、ハインと同じように、光の向こう側へと溶けていった。だが、消えたのではない。

ただ、少し先で待っているだけなのだ。自分達とは、少しだけ向こう側で。

早く、自分も進まなければならない。それは分かっていた。

だが、シンは、その一歩を進むのに、少しだけ時間が必要だった。心の整理をつける時間がだ。

家族ともう一度出会えた喜びと、今度こそ、これが最期なのだろうという哀しみが無い交ぜになって、心の中で渦をつくった。

「．．．う．．．くっ．．．．．うう．．．っ」

シンは、その場で立ち尽くし、うつむいたまま、拳を握りしめて啜り泣いていた。

温かい思い出は大切にしないといけない。だが、思い出のために自分を束縛してもいけない。

誰も、そんなことは望んでいないのだから。

過去を振り返りながら、また前を向こう。過去を見つめながらも、未来に進んでいくんだ。

それに、はっきりと見える姿はこれが最期でも、思い出とは、いつでも会える。

思い出だけなら、いつだって、傍で生きていてくれる。

心の中で洪水のような流れをつくっていた感情の氾濫が、一本の流れに纏まって、ひとつの真っ直ぐな川となるのを感じたシンは、泣

くのをやめて、顔をあげた。

光の道は、まだ続いている。

シンは、力強く、次なる一步を踏み出した。

その先に待っていたのは、デュランダルと、ミネルバ艦長のタリア・グラデイス、そして、レイだった。

シンの尊敬していた者、信頼していた者、そして、誰よりも友情を抱いていた者である。

その想いは、今でも変わっていない。

デュランダルもまた、世界がよりよい方向に進んでいくことを願っていたのだということは、シンにはよく分かっていた。

シンはかつて、彼らの最期に立ち会うことはできなかった。

できることなら、一目彼らの命の最期を見届けたいと思っていたが、こうやって、再開することができ、そんな後悔は吹き飛んだ。

デュランダルが、静かに言う。

『私は君に、賛辞の言葉を贈らない．．．分かるな？』

「．．．はい」

『今が終わりではない．．．むしろ今からこそ過酷になるのだ．．．君達はこれから、平和への一步を踏み出すが、それは同時に、新しい戦争の引き金にだって成り得る．．．平和と戦争は、逆の言葉だが、似通つてもいる。どちらも人が成すものであり、人の心が成すものだ．．．自由には、二面性がある．．．平等と尊重、エゴイズムと排他的思想。正と負の方向性がな．．．これから人類は、そのどちらかを歩んでいくことになる』

「そして、もし自由が負の方向に向かったら、俺たちは、責任を負わなくてはならない．．．．俺は、平和をつくる絶対的な方法が必要だと思っていました．．．でも結局、それは見つからなかった．．．」

『どう足掻いても、見つからないと分かったからだろう?』

「はい．．．だから、せめて今あるものから、平和への道しるべをつくっていかうと思ったんです．．．だけどそれには、過去の過ちを、まったく同じように繰り返す危険だってある．．．．．こんなこと言っちゃいけないと思いますけど．．．自信はあっても、やつぱり不安もあります．．．本当にこれでいいのか、と」

『．．．君自身がそう考えてはいけないな．．．自分を信じられない者が、他人を信じられるわけがない．．．それでは、私やラウと同じになってしまう．．．心を強く持つんだ．．．信じるということとを忘れるな．．．そして、常に考える。怠惰にならず、常に世界をよりよく動かしていこうと、行動するんだ。過ちを犯しそうになったら、それを変えていけばいい。人を信じれば、道は見えてくるはずだ．．．そして、自分達が成すことにどんな意味があるのか、どんな想いをこめているのかを、よく知るんだ．．．．．全ては、心の持ちようだ』

「．．．分かりました」

デュランダルの声に続いて、タリアが言う。

『世界に確かなものなんてない．．．だから、分かり切ったつもりでいるのはよくないわ。常に勉強し、考え、他人と意見をぶつける場を設けなさい．．．そして、いずれこちらの意見を通しながらも、相手を尊重し、妥協し合うことを知りなさい。決して、自分が正しいと思いこんでは駄目よ。そして、相手の話ばかり聞くのもいけない．．．それを忘れなければ、後は、あなた達が思うままに行動なさい．．．私達のことを気にする必要はないわ』

「え?」

『あなた達の世界は、生きているあなた達のもの。あなた達が自分達のために動かしていきなさい．．．私達は、記録と記憶として、遺ることができれば、それでいいわ．．．』

「．．．はい」

『あなた達がどんな世界をつくるのか．．．見守っています』

そして、レイが言う。

『シン．．．キラ・ヤマトが、俺に言ったんだ．．．この命は俺のものであり、ラウや、他の誰のものでもない、と．．．俺は、たとえ造られた命による、過ちばかりの人生でも、俺という一人の命として生きてこれたことが、嬉しい。俺が俺でいられた時は短かったが、素晴らしいものだったのだと思う．．．．．だから、シン、俺から、一つだけ頼みがある』

「．．．なんだ？」

『平和のためには、時には規律と弾圧が必要になることもあるだろう。だが、それでも。人に許された絶対的な権利と自由だけは、殺さないでくれ。自分が自分であることだけは、消さないでくれ。自分が、他の誰かになるようなことだけは、しないでくれ．．．』

「分かった．．．約束する」

『．．．ふ．．．っ』

「．．．レイ？」

『俺の人生は、過ちばかりだった．．．それでも、生きていて良かったと思えるのは、きつと、お前がいてくれたからなんだと思う．．．お前のその真っ直ぐな気持ちは、たとえ間違ったものであっても、俺の心に大事なものを刻み込んでくれた．．．．．シン。これらの人生、悔いを遺すな．．．自分を信じ、他人を信じ、生きる．．．そして、いつか俺達の側に来れた時、誇りにできる世界を創れ．．．俺達は、待っている』

「ああ．．．」

『．．．．．シン．．．俺は初めて、純粋な気持ちでこういう言葉が言える気がする．．．．．頑張れよ』

「．．．．．ああ！」

そしてレイ達も。光の向こう側へと溶けていった。

シンは、心の底から実感していた。

俺の命は、俺のものだ。

だがその『俺』を形作ってくれているのは、他人の心なのだ。誰かが、自分の命の時間を割いて、関係をつくる。

そしてその関係が、人が、自分の命と魂を分けてくれたという事実が、『俺』という命を大きくしてくれる。

生まれたとき、ほんの数kgだった『俺』の命は、家族の愛情と、別れ、そして多くの出会いと挫折、友情や恋を経て、少しずつ大きくなっていったんだ。

その終わりが見えてきた気がする光の道の向こう側をじっと見つめながら、シンは、心の中で叫んだ。

—— そうだよレイ。俺は、お前と同じように、自分の命に誇りを持っている．．．みんなの命と一緒に大きくなっていたこの命に．．．そしてそれは、他の誰だって同じことなんだ．．．俺は、そんないろんな人の命の誇りに、応えていきたい．．．俺という一人の命として．．．．．そして．．．——

シンは、再び、ゆっくりと歩きはじめた。

後もう少しで、この光の道を抜け、今度こそコズミック・イラに帰ることになるだろう。

だがその前に、シンには、あともう一人だけ、必ず会いたい人がいた。

平和とか、世界がどうかは関係なく、ただ純粹に、会って話したいと願う、一人の少女にだ。

その少女は、いよいよ一つにまとまった光の道が、往くべきところに帰結しようという、その終着点のすぐ前で、シンのことを待っていた。

「ステラー！」

『シン！』

シンは、自分の初恋の相手、ステラの姿を見た途端に、夢中になっ

て彼女の方へと駆け寄っていった。

ステラも、同じようにシンの方へと駆け寄ってくる。

「ああ！また会えた、ステラ！夢みたいだ．．．！」

『また会えた！』

そのまま二人は、固く抱き合った。

シンは、幸せをかみしめながら、全身で、彼女のぬくもりを確かめた。

「さみしくはなかった、とは言えないけど、ステラが哀しむから、辛いなんて思わなかったよ．．．でも、こうやって会えるのは、とても嬉しい！幸せだよ！」

『ステラも寂しくなかった。シンのこといつも見ていられたから』

「そうなんだよな．．．俺だって、ステラとはいつでも会えるんだ．．．これで終わりじゃないんだ。他のみんなだって、いつも、この心の中で生きてるんだ．．．そして、その思い出だけで終わりじゃない．．．いつかまた、こうやって抱きしめることができるんだ。他のみんなとも、もう一度生きていくことができるんだ．．．この世界で．．．そうさ！ステラ！俺たちはまだ終わりじゃないんだ！ずっとずっと一緒だ！」

『一緒！ずっとね』

シンは、より強く、優しくステラを抱きしめた。

このぬくもりには、いつかまた会える。家族にも、ハインや、レイ達にも、いつかまた会える。

そう思うと、シンの心の中にあつた、ありとあらゆる哀しみが、晴れていくようだった。

『ふふふ．．．』

「はは、あはは」

シンとステラは、そのまま抱きしめ会って、笑い合っていた。

幸せだった。

ステラと会えたこと、それだけじゃない。レイやルナマリアとも会えたこと。デュランダルやレイと共に、たとえ間違ったものでも信

念を貫き通してきたこと。両親が、自分という命を授かってくれたこと、そして、マユと巡り合わせてくれたこと。

自分の生きてきた全てのことに感謝できた。

そして、こう思う機会を与えてくれた、幻想郷にも。

シンは、本当は、自分は誰よりも幸せな人間なんだということを、実感した。

実際は、ほんの短い時間であつたが、二人には永遠と思える時間の中で、シンとステラは、互いの心を通わせた。

だが、それも終わりにしなければいけない。

永遠のような時間を、本当に永遠にはできない。

シンは、抱き寄せていたステラの身体を離すと、彼女と視線を合わせて、言った。

「ステラ．．．俺には、まだたくさんの友達がいる．．．ステラと同じように大切な友達がね．．．今から、その友達のところへ、戻る」

『うん。また会おうね。ステラ、待ってる』

「．．．うん．．．待っていてくれ。いつか、また会おう．．．」

そう呟き、シンは、光の終点へと、ゆっくりと歩き始めた。

そして、その身体が光に包まれ、その中に溶け込んでゆく。

その身体が完全に光の中へ溶けたとき、シンに、ステラ達との、再び長い別れがやってくるのだ。

だが、辛くはなかった。

穏やかな光と一体化しながら、シンは、ステラの方に振り返り、やさしく呟いた。

「．．．．．また明日．．．」

シンは去り、彼の幻想郷の旅も終わった。

藍は紫の式神に戻り、橙はマヨヒガへと帰っていく。

小傘は、風にさすらう（？）妖怪のひとつとなり、さとりは地の底に戻る。

鈴仙も、いろいろとよく分からないまま、とりあえず、大きな問題は起こっていなかったのを確認すると、迷いの竹林へと戻っていった。

いろいろと、終わったのだ。祭りの後の静けさというものがあつた。だが、多くの者が、それぞれの居場所に帰っていくなかで、妖夢と紫は、未だ博麗神社に留まっていた。

クルーゼがいたからである。

彼女らのやるべきことは、まだ終わっていない。

博麗神社の本堂の裏、霊夢の家の庭先に座り込むクルーゼと妖夢は、眼前に広がる、落葉し、物悲しい風体になった木々を眺めていた。

クルーゼが、小さく呟く。

「．．．私が生きていて．．．嬉しいか」

妖夢が、クルーゼと同じような、静かな口調で応える。

「．．．嬉しいですよ．．．」

「．．．そうか．．．．．私は少し惨めだ．．．この先、コスミツク・イラの時代は、平和であれ、その逆であれ、少しずつ動いていく。私はその様を、一度世界を滅ぼそうとした者として見なければならん．．．世界が変わっていくのを実感すれば、同時に、自分がかつて狂人であったことも思い出す．．．．．私はな、別に特別な人間ではないのだ．．．ただ、完璧な人間を創り出す実験体として生み出され、人の考えを読み取り、世界の姿を見ることができ

るというだけの、何も特別ではないひとりのちっぽけな人間なのだ。
．世界を埋め尽くす悪意の流れに耐え切れず、絶望するしかかった愚かな男だ．．私はこれから永遠、そういう自覚を持って生きていかなければならん．．」

「どうしてです？ そんな必要はないじゃないですか」

「．．．何？」

「そんなに嫌なら、忘れてしまえばいいんですよ。わたしは、あなたが元の世界で何をしていたかなんて知りません。だからあなたが世界を滅ぼそうとしたとか、そういうのは関係ないんです。それにあなたは、もうこの世界の住人じゃないですか。他の世界のことなんて、気にすることはありませんよ」

「．．．しかしな．．．」

「すぐにとはいけませんよ。すぐに忘れるなんて無理ですから。だから代わりに、すぐに死ぬとか言わないで欲しいんです」

「．．．．．そうか．．．済まない．．．なら、そうとまで言うてくれる君や、紫に、頼みたいことがある」

「何ですか？」

「私を．．．人間として見てくれるか．．．？ 造りものの命ではなく、英雄のクローンでもなく、完全なる人間の出来そこないでもなく．．．ラウル・クルーゼとして．．．」

「何を言ってるんです。当たり前じゃないですか」

妖夢は、笑顔を浮かべてこう言った。

彼女が、自分の気持ちに正直で、真つ直ぐな性格をしているということは、クルーゼはよく知っていた。

だからこの言葉もまた、彼女の素直な気持ちなのである。

「．．．．．そうか．．．」

それだけ言うと、クルーゼはまた黙り込んでしまったが、その横顔を見る妖夢は、その落ち着いた面持ちに、もう大丈夫だ、ということを確認した。

それから少ししたところで、クルーゼは、すくつと立ち上がった。その動きに倣うように、妖夢も神社の庭先から立ち上がる。

それとほとんど同時に、紫も、彼らの下へとやってきた。

クルーゼの表情を見て、安心した様子を見せた紫は、言う。

「落ち着くだけ落ち着いて気分は晴れたようね」

クルーゼは、小さな笑みを浮かべて、応える。

「ああ．．．落ち着いたよ．．．」

「さっきの話。聞いたわ．．．」

「そうか」

「あなたはラウ・ル・クルーゼ。それ以上でもそれ以下でもない」

「．．．ふっ．．．そうか」

ようやく、狂人としてのラウ・ル・クルーゼとしての仮面を、完全に取り払うことができたのを感じたクルーゼの気持ちは、清々しかった。

幻想郷に訪れて最初のころに感じた純粋な気持ちを、思い出すことができた。

「さて．．．白玉楼に戻るとするか．．．幽々子は今一人なんだろう？退屈しているだろうしな」

「そうね。んじゃ、早く帰るとしましょう」

クルーゼ達、心境新たに、3人揃って白玉楼へと戻っていった。

シンの旅も終り、これからまた、穏やかな日々が始まる。

クルーゼは、素直な気持ちで、ゆったりと、その日々の中を生きていこうと思った。

始めから長く生きられなかった命を、こんな形で永らえることができる。

いや、むしろ、新しい命として始めることができる。

それは、とても幸運なことなのだと感じられた。

この時は、冷たい冬の風も、その勢いを弱め、いっそ涼しい感触で、クルーゼ達を包み込んでいた。

最近は、移動するにしても紫のスキマで空間転移していたクルーゼだったが、今回は久しぶりに、空を飛んで白玉楼へ帰ることにした。吹き抜ける風と、遠くに見える地平線、眼の前にまで迫る雲海の姿が、心を清めてくれるからだ。

アスラン・ザラにとっては、あまりに突然の出来事だった。心の準備など、できているはずはない。

何の前触れもなく自宅にやってきた来訪者の姿に、彼は驚きを隠すことができなかった。

「シ．．．シン！？」

失踪から数か月。

いよいよ無事を疑われていたシン・アスカが、何喰わぬ顔をして、アスランの前に現れたのである。

そして、どこか目つきが変わった気がするシンは、開口一番に、こう言ってきた。

「いろいろ、お久しぶりです」

その声には、彼らしからぬ、落ち着いた声音があった。

FINAL・PHASE『暁への飛翔』

そして世界は動き出す。

人の手によって、人が成す歴史の歯車となって。
運命の向こう側へと向かっていく。

夜も更けてきたという時期で、空はうす暗くなっていた。

アスランとしては、あまりにも突然に現れたシンの姿に、うろたえるばかりだった。

しかし、今までずっと行方知れずだったシンが現れた以上、彼に対していろいろと聞くことがあるということは、忘れはしなかった。

「どうしたんだシン。今までどこにいていたんだ」

と問いただすアスランに、シンは、少し言いあぐねる様子を見せながらも、こう応えた。

「ちょっとね．．．みんなには分からないような、遠いところに旅にいったただけなんですよ」

その応えは曖昧なものであり、アスランとしては納得できる理由ではない以上、さらに、「遠いところってどこだ。旅って、どうして旅を始めたんだ」と問い詰めるが、それでもシンは、

「アスランさん達には、いろいろな心配をかけたけど。別に、大きな

問題に巻き込まれたとか、そういうんじゃないやありません．．．ただ本当に、長い間、旅をしてきただけなんです」

と、曖昧に応えるばかりだった。

シンにはシンなりに、何か事情があるのだろうか。

だからといって、その失踪の理由を聞いたさなわけにもいれない。

だが、アスランには、一度話せない事情がある分だと、問い詰めるのをやめてしまう優柔不断な性格があった。

しかし、シンが、周りの者達の前から姿を消して、旅をしたらいいという、その理由は聞いておこうと思った。

「シン。旅とは一体なんだ．．．何のために旅を始めたんだ」

アスランは再度強く問いかける。

シンも、このまま言い淀んでいるわけにはいかないと思ったのか、静かに応えた。

「．．．自分の心に決着をつけるため．．．そして、平和のため」

「．．．何？」

アスランが呆気にとられる中で、シンはそれ以上詳しく話すことはなかった。

そして彼は、続けざまにこう言った。

「アスランさん．．．一つ、頼みがある」

「．．．な、何だ」

「カガリ首長に会わせてくれ」

「カガリに？」

「カガリ首長だけじゃありません。キラさん達クライン派の人達ともです」

「．．．一体どうしてだ」

「俺の中で、いろいろ考えがまとまったんです」

「考え？」

「世界をよりよくしていくための」

「．．．．．」

アスランとしては、未だにシンの出現に戸惑いを隠しきれず、彼の発言を、突拍子もないものと受け取っていたが、同時に、その突拍子のない中にも、一つの筋が通っているようにも思えた。

そして、彼の中で、彼の言葉通りに、何か、大きな考えがまとまっているのを感じたアスランは、少し考え込んだ後に、「分かった。必ずとは言えないが、カガリと会わせるようにしてみる．．．キラ達は、オーブから大分離れたところにいるからいろいろと難しいが、連絡はする。当然、お前の所属するジュール艦隊にもな．．．彼らも、お前のことを探していたぞ」

「はい．．．いろいろ、迷惑をかけました」

「無事だったからそれでいいが、いろいろ問いただされることになるぞ。その時は、今みたいに曖昧に応えるんじゃなく、詳しいことを正直に話してくれ」

「．．．約束はできませんけど．．．そうします」

「．．．．．」

約束はできないというところに、アスランは、シンの中にある事情を再び察した。

結局シンは、帰ってきてからも謎を残していきそうだ。

しかし、先に言った通り、無事ならそれで十分なのだ。

アスランはひとまず、シンが何も問題ない様子で帰って来たのを素直に喜んだ。

「そういうことなら。行動は早い方がいい。今からすぐに、カガリのいる官邸の方に送っていくよ。車があるんだ、それに乗ってな」

「ありがとうございます」

かくしてアスランは、シンを車に乗せ、カガリのいる首長官邸に向けて発車させた。

オーブは、島国でありながら人口は比較的少なく、大きな建造物も少ない。

海岸線に沿って走る街道を走るアスランの車からは、整然と生い茂

る人口の樹林と、僅かな月明かりに照らされる海と、果ての見えない水平線ばかりであった。

首長官邸は市街地からは少し離れたところにあつて、アスランの家からは、10分以上走らなければならなかった。

さて、アスランが何故首長官邸でカガリと共に生活しないのかという、その理由はいろいろある。

今のカガリは、首長として忙しく、アスランが傍にいと、かえつて迷惑になるのではないかという彼の考えがあつたし、それ以上に、彼自身の持前の優柔不断な性格も関わっていた。

だが、そんな彼にも、一つの決意があつた。

シンに対する決意である。

アスランの車は屋根なしのオープンカーであり、吹き付ける風は、寒いほどだった。

風のはためく音も大きい、それでも、人の声を聞くには十分な音量であつた。

アスランは、進行方向に真っ直ぐ眼を向け、シンの方は向かず、声だけでこう切り出した。

「シン．．．いろいろ、済まなかつたな」

「何がです」

「．．．昔のことだ．．．お前が気にしていないなら、それでいいんだが．．．」

「．．．気にしてませんよ」

「．．．そうか．．．．あの頃は、俺も視野が狭かつたんだと思う。結局、自分の主張をお前に押し付けるばかりで、お前の考えを汲み取ろうという気持ちがあつたくなかつた．．．今は、あの時のお前が、ひた向きに、自分の信じるものを信じていたんだと分かる．．．だが、だからこそ、今なら言える。俺は、お前のそのひた向きだけは、間違つた方向に行つて欲しくないんだ．．．何が正しくて何が間違ひかなんて、簡単には分からない。だが、だからこ

そよく考えて欲しいんだ．．．そうすればお前は、もっと立派な男になれる．．．．．俺も、変わるように努力する」

「．．．それだけですか」

「え？」

「．．．大丈夫ですよ．．．俺。アスランさんがそう言おうと思っ
ていたってこと、分かってましたから」

その声に、アスランは思わず、シンの方に振り向きそうになったが、
前方不注意で事故をするわけにもいかず、できなかった。

シンがどんな表情をしているのか、見てみたかったが、その落ち着
いた口調からは、恐らく、彼の中で、いろいろなことが整理されて、
きれいになっているのだろうと思えた。

アスランは、自分の中にあつたシンへの心配が、いろいろと杞憂に
終わったのを理解し、自嘲気味に笑った。

「．．．そうか．．．」

そのままアスランの車は街道を走り続け、5分ほどして、道が内陸
部の方に差し掛かっていくと思うと、重厚な警備基地が、魔天楼の
ように佇む姿が、二人の視界に入ってきた。

「アスランさん．．．あんたもカガリ首長と一緒に、俺の言うこと
を聞いて、そして、考えてください．．．今はまだ俺一人の考えだ
けど、みんなに話すことで、もっといい方向に変わっていくと思う
んです」

それからシンは、まずはカガリとアスランに、続いては、プラント
に渡り、クライン派の者達を集めて、幻想郷の旅を経て得た自分の

考えを述べた。

多くの者たちは、シンのその考え以上に、突然シンが戻ってきたこと、そしてそのシンが、何を言うかと思えば、平和のための考えがある程度纏まったと言ってきたことに、驚くと同時に戸惑いを見せた。

しかしそれでも、シンの語る考えには、真剣に耳を傾けた。

シンの考えには、飛躍しすぎている部分もあるし、一部の考えには、少し選民思想的ではないか、人々の反感を買う恐れもあるという批判もあった。それも当然のことではある。

だが、同時に、これまでのキラ達には無かった、革新的な考えがあるのも確かであり、紛糾し始めていた事態を、再び纏めることができそうなアイデアでもあった。

シンの考えを汲み取りつつ、再び、クライン派臨時議会は動き始めた。

今回からは、ザフト、連合の高官にも、衛星通信で参加してもらった。

彼らが比較的素直に議会に参加したのは、クライン派に対する恐れもあったから、というのに間違いはないだろう。

シンの考えには、多くの時間を必要とするものもあったが、それでも、すぐにでも政策として結論を出せるものはあった。

例えば、クライン派の軍備拡大については、当然ながら、平和のための組織に戦力を増強することに対する批判はあったが、バルトフェルトなどは賛成を示した。

政治的な問題をクリアしていつて、世界を安定させたとしても、いずれは、ザフトか連合が反感を示し、クーデターが起こる必要がある。

そうなる前に、早い内にクライン派に組み込んでおいて、言い方は悪いが、飼いならしておくのもいいかもしれないという考えだった。

ジュール艦隊などは既に、ザフトでありながらもクライン派に賛同しており、ザフト軍の大半は、クライン派に引き込むことができるだろう。

そうなれば、結果的にはザフト軍の縮小にも繋がる。

現にザフト軍は、クライン派の考えには、軍部にしても国民にしても賛同する者は多く、必要とあれば接收であると受け入れるし、軍縮も行うという考えであった。

連合については、やはり考えを渋っているようだったが、やむをえない場合には、クライン派に従うという態度を示しているようだった。

勢力が拡大すれば、クライン派は、大きな抑止力となり、クライン派が睨みを利かせることで、連合、ザフト両軍の戦意を削ぐことができれば、結果的に、少なくとも戦争は起こらない。

たとえ最悪は事態が起こったとしても、迅速に対処して、被害を食い止めることはできる。

武力を武力で抑えつけるようではあるが、要はそれが、直接的な戦闘による行使か、威圧による行使の違い、ということである。

それにこれは、言うなれば、世界が安定するまでの間、両軍の動きを抑制するための一時的な策であり、ゆくゆくは、クライン派共々軍備は縮小するつもりだった。

戦力の接收ならば、時間はかからない。

そして、オーブに続く、中立的な政令特区の設立は、もっとも平和的ではあるが、もっとも問題の多いことでもあった。

これについても、多くの時間を必要とはしないが、本当に、ナチュラルとコーディネイターが平等に生活できる環境を作れるのか、という不安もあった。

全ての人々に対して、突然一緒に生活しろというのではないし、希望する者、あるいは適正のある者だけを共生させるのだから、不可能ではないだろう。オーブの例もある。

全てのナチュラルとコーディネイターが、互いを憎しみあっているはずではない。

憎しみ合っている者も確かにいる、ということは、逆に、それが当然のことになっている社会に疑問を持っている者も、必ずいるはずだ。

そういう者達に、機会を与えろというのなら、この考えは汲み取るべきだろう。

それに、キラ達が目指すのは、全人類がいがみ合うことなく平等に生きていける社会である。

これは、その為の一步であるのだ。

言葉だけで呼びかけ続けるより、まずは実際に行動させる。それは大事だ。

特区内での差別的行為を強く弾圧するというのは、少しやりすぎだという声もあった。

が、しかし、行き過ぎた差別は、平然と殺人がまかり通る状況をつくるし、殺人は犯罪であり、犯罪を裁くのは当然のことである。

弾圧とまではいかないが、そういうことを許さない環境をつくるということ自体には、批判はなかった。

とにかく、これは、ナチュラルとコーディネイターの確執に対する直接的な問題であり、まだ長い議論が必要ではあった。

ザフト、連合両軍の高官にしても、こればかりは今すぐに賛同することはできないようだった。

宇宙開拓に関する研究機関を設立し、そこに競争を持ちこむという考えは、冷戦下での宇宙開発競争そのままの状況をつくることになり、それが、逆行的に冷戦的体制をつくる危険もあるということで見直しが検討された。

しかし、このような研究部門の拡大は以前から検討されており、いずれ軍縮が進めば、施行しようとも考えられており、いずれ、形は変わっても実現はされそうだった。

そして、シンの考えとはまた違うが、議会には、何より大きな問題が、一つ残っていた。

議会が提案した多くの政令は、ある程度は、国民も受け入れてはくれるだろう。

だが、全てではない。

世界を少しずつ平和な方向に動かしていくことはできるだろうが、思い返してみるに、メサイア戦役の始まりは、そうやって、世界が平和に向かつて動き出そうとしていた時なのである。

その原因は、一部の軍部にはびこっていた反感である。

平和を認められない者達の手でヤキンドゥー工が落とされ、戦争が始まった。

それが、世界が少しずつ安定に向かう上で起こった一つの反感であるし、それもまた、この世界に生きる命の応えに他ならないのだ。本当の平和を創るためには、そのような者達の考えもまた、改革していかなければならない。

だが、できるのか？

仮にもし、またしてもヤキンドゥー工降下のようなテロが発生した場合、今の、正式に戦力として定着しつつあるクライン派ならば、ザフト軍との協力次第では喰いとめることができるかもしれない。だが、それでいいのだろうか。

起こってしまった事態に対処するのは当然であるが、それもまた、戦争というものの一つの形であるのだ。

そうなれば、キラ達、シン達は、自らの手で平和を放棄することになる。

もちろん、戦うことが絶対的な間違いであるとは限らない。

しかし、問題に対する解決のために、真っ先に武力を行使しようとする考え方は、絶対にしてはいけない。

それを拒むというのなら、戦争が起きない様に、まずは意識から変えていく必要があるのだ。

だが、それは可能なのだろうか。
テロリズムには思想はない。

あるのは、精神というものからかけ離れた、衝動的な破壊本能である。あるいは、意識や常識ではなく、身体に染みついた怨念。細胞が発する恨みだ。

それは最早、どれほど心を改め、理性を健全なものにしようとも、消すことはできないだろう。

例えば、親から言い伝えられ、意識として受け継がれるように、憎しみは、身体の中でも遺伝するのかもしれない。

そうなれば、憎しみなど、そう易々と消すことはできないのだ。
だが、それをやらなければならぬのがシン達だ。

クルーゼとの決着をつけたあの時、シンは、倒すべき悪であるクルーゼを、結局殺すことはなかった。

クルーゼという人間に、関わりがあることを知ったからである。

その関わりを持った者達の顔を見たことがあり、声を聞いたことがあるからである。だから殺さなかった。

殺したくなかった。

シンは、それこそ、人の心の真理なのだと信じていた。

表にある憎しみや、悪を排除しようという意識を持つことはある。

だが、その向こう側にある真理を知ることが、本当に大切なことなのだ。

それを、全ての人類に伝えなければならない。

それは、押しつけがましいことなのだろうか。

思想の強制だろうか？

『今まで殺そうとしてきた者達の顔を想像してみろ、その家族を、友人を……。彼らが人をどうやって愛し、どうやって信じてきたのかを想像してみろ……。それはきっと、自分達がしているのとそっくりなはずだ……。だから、もう少しだけ考えてみる』

そう呼びかけることが、押しつけがましいことなのだと、シンに

は思えなかった。

今までのキラ達、あるいはシン達を、そうやって呼びかけることの大切さを知っていながら、実行できることができなかった。だが、今は違うだろう。

クライン派は、戦争と言う流れに対する大きな楔となり得る。

だからこそ、もし世界が間違った方向に向かおうとしているのなら、それを力で抑えつけるのではなく、最後まで対話を求めるのだ。

今度こそ、最後まで、憎しみを超える、意地を以って。

そしてその時、人々が銃を降ろそうと考えられるような社会を創っていくのだ。

それが平和というものはずだ。

シンはそう語った。

そして、語るだけでなく、自分自身の心の中で、信じ続けた。

それが、人生の中で多くの価値観を知った自分に対する誠実さであり、今も、世界を見守っている、別の世界の者達に対する誠実さなのだから。

キラ・ヤマトとシン・アスカは、数か月振りに再会し、そして、数か月ぶりにあの墓標の前へと並び立った。

当然だが、まだシンが幻想郷に還ることはない。

ただこの地が、それだけの意味を持っているのではないということなのだ。

シンにとってこの墓標は、とてつもなく大きな意味を持っていた。

まるで、彼の人生が最期に帰結する場所のようだ。

まるでこの墓標は、シンの墓のようでさえあった。

いつぞや語りあったそのままの風景が展開する中で、今度はシンが、静かに語り出す。

「．．．俺は、世界が絶対平和になる方法を考えないといけないと思っていた．．．それが分かっていないのに、平和を語るキラさん達のことを、正直馬鹿にしていたんです．．．でも、それは間違いだったと分かった」

幻想郷の旅の中でシンは、心に対する誠実さと、温かさを手に入れた。

それと同時に、クルーゼとの戦いを経て、人の世を包む、覆すことのできない哀切も知った。

「世界が実際に平和にならなければ、絶対なんてものはない。未来のことが分からないのに、世界を変えるとか、平和を創るとか、言い切ることはできないんだ．．．だから、本当に平和な世界に変わるまでは、俺の言ってることも、ただの綺麗事だし、夢物語でしかない」

それは、どうあっても、完璧な平和への道がないという、ある種の絶望である。

だがシンは、クルーゼとは違った。それを前向きに受け止めていた。絶対的な平和がないのなら、絶対的な破滅も、絶望もない。

もちろん、破滅に向かう道もあるが、逆に、平和へと向かう道はある。

そう思えば、シンの意思が揺らぐことはなかった。

「でも、もう不安だとは言いませんよ．．．せめて心だけは、絶対に揺るがないでいたい．．．どんなことにも屈しない．．．．．」

その代わり、キラさん。そのためには．．．」

言いながら、シンは、キラの方へと振り返り、ゆつくりとその右手を差し出した。

「シン．．．君は．．．」

キラが、ハッとしたように呟く。

「そのためには、キラさんや、他の人達にも頑張ってもらわないといけないんです．．．だから今度は、俺が頼む番です．．．．俺に、力を貸してください」

固い意思を持つて発せられたシンのその声に、キラもまた、固い意思で、「喜んで」と返しつつ、差し出された右手を強く握り返す。

シンには最早、キラに対して、僅かな疑いも、恨みもなかった。

今ようやく、彼の苦悩、哀しみ、そしてそれをうち砕くほどの決意を、自分のことのように感じられたのである。

ここにまた、一つの象徴が生まれた。

かつて殺し合っていた二つの命が、本当の意味で和解し、力を一つにする姿である。

それから、世界は少しずつ動き出す。

それは、結果としてはいい方向へと向かっていつていた。

クライン派とオーブが主体となった戦後復興には、クライン派に賛同するザフト軍も協力していた。

最早その行動は、彼らがザフトではなく、クライン派の一員となっていることを暗に示していた。

しかもあえて、敵国である連合国領への復興支援にである。そうすることで、ナチュラルに対する誠実さを見せようとしていたのだ。

しかし当然、そういう目論見は知られていたし、敵からの施しを受けるのかと反感を示すものもいたが、戦後の疲弊の前には、そういう意識は薄らぎ、眼の前の支援、助けにありつくしかなかったのである。

そしてそれを、敵国であったザフトが、政治的な目論見があらうと

も為してくれるというのに、反感はありつつも、恩を感じないわけでもなかったのである。

そして、連合政府にもまた、動きがあった。

戦争商人であるロゴスの解体と、それに関係する役人達の排除により、連合政府内部でも、戦争を補助する過激派は少なくなった。

しかも、ザフト軍を半ば接収したクライン派の戦力は大きく、最早戦争で勝てる見込みはなかった。

戦争を経済活性化の手段にすることは半ば不可能になり、そうなれば、もつと他のところに眼を向けるしかない。一部のインテリがいち早くそのことに気付いたのだ。

そのためには、いち早く国土と経済の復興は必要である。

そして、連合国土の復興にザフトが協力している、すなわち恩を売っているのであれば、それに対して、恩を返さねばならない。

そのためには、ザフトと同じことをする必要があったのだ。

連合政府は、その豊富な資金力だけではなく、頼めば出してくれるオーブからの支援金を元に、戦争により破壊されたプラントの再建に着手した。

プラントは、まさしくクライン派の本拠地ともいえ、下手に破壊工作はできない。そんなことをすれば、今度こそ徹底的に滅ぼされても文句は言えないからだ。

そういう面で、クライン派は実際いい抑止力にはなっていた。

が、たとえそのつもりがなくても、プラントの市民は疑い深くなる。機を見計らって現行のプラントを破壊するのではないかという声に、当初は小さなデモが発生することもあったが、連合政府としては、そういうものを強引に抑えつけても、クライン派に眼をつけられる危険はある。

そのため、あくまでも誠実に、潔白を唱え続け、新プラントの建設を推進していくしかなかったのである。

それが結果として、プラント市民の疑いと反感をある程度落ち着けることにはなった。

デモの鎮静化に、クライン派が協力していたことも大きい。

本当に何も害を及ぼすことがなく、むしろ、人々の生活空間を復興し、多少は拡大までさせているのだから、妙に疑う必要はないと判断したのである。

ザフトは、ラクス・クラインを信じる意思の下、一時憎しみは忘れ誠意を以ってナチュラルに協力し、連合は、オーブの支援の下、最大限、その誠意に応える努力を見せる。

二度の大戦を経て、徹底的に戦力を失って、うんざりしたということもある。

しかも、夢見るお姫様が頭領だったころよりも、妙に目つきの鋭くなったクライン派が睨みを利かせる中では、軍備拡大ももうできない。

ザフトにしても連合にしても、そもそも戦争をしようという意識が根本から萎えてきはじめていたのである。

最早戦争を論議と対決の場にすることはできず、両者はその場を、経済と技術力と、議会に求めた。

両者のいがみ合いを解決するためには、絶対にお互いぶつかり合う場面は必要であり、その方法が戦争以外の方法に移行することは、クライン派の目論見であり、いい方向に動いていると言えた。

そして、シンの帰還から三年、ザフト、連合、そしてクライン派の三者を交えた、境界なき中央議会が設立した。

戦争という選択肢を失えば、強行的な政治はできない。

議会は、思いの外紛糾することなく、スムーズに進んだ。

戦争を逃げ道にできなければ、ある程度妥協と協調が必要となる。

そついう意識をお互いに持っており、議会の中心であるクライン派の政策が、プラントにもナチュラルにも与するものでないものならば、議会の焦点は、あとはその政策をよりよい方向に高めていくことである。

「それこそが、議会というものの正しい姿だ」

議会に参加したカガリ首長の言葉に、言葉を返す者はいなかった。

そしてここまで来て、シンはようやく、心の奥底では、完全に消し去ることができなかった不安が、本当の意味で薄らいでいくのを感じた。

そうして、あともうしばらくすれば、幻想郷に還ることもできそうだと考えたのが、さらに二年後のことであつた。

時が経つのはつくづく早く。

少し前までは、まだ世界の姿もよく見えていなかった子供だったのが、二十を超える大人になってしまっていた。

未だに軍人は続いているが、最近、仕事の内容が、『こういうこととするのが軍人だったけ?』というようなものに変わってきている。軍人というものの在り方の変化を感じられた。

そんな中で、ルナマリアの中でも、より現実的な方向に眼を向けようという考えも芽生える。

最早何の見込みもないアスランへの片思いも、シンに対するセンチメンタルな想いも、薄くなり始めていた。もちろん彼らは、よき先輩、友人としては大切に、そういう意識までなくなってしまうた、というわけではない。

ただ、彼女は、恋に関しても、もっと現実的に、別の方向に眼を向けようと考えていたのである。

そんな中で、だった。シンが訪れたのは。

彼も、クライン派の一員として、東奔西走する日々を送っている。年を経るごとに、顔つきが男らしくなってきた、惚れ直すかもしれない

ない、と思っただが、そんなことはなかった。

むしろ、変わっていくシンの姿を見る度に、心の内にあった恋心が、尊敬の念へと姿を変えるのを感じた。

それが、センチメンタルを薄くしていった要因であるのだろう。

「あら！シンじゃない、どうしたの？」

「まあ、久しぶりにな」

互いに忙しく、久しぶりに会った二人の態度は、かつての恋人というよりかは、完全にいい友達、というものであった。

曖昧に挨拶した後すぐに、シンはこう言った。

「今、暇なのか？ちよつと付き合ってくれよ」

ルナは応える。

「暇だけど．．．何に？」

「ちよつとした、ドライブさ．．．車はある」

「．．．また何で？」

「なんとなくさ．．．理由はないけど、なんとなくだ」

「ふうん．．．」

シンの素っ気ない応えに、同じく素っ気ない返事をするルナ。

だが、シンの言うなんとなくという表現は、よく分かる気がした。

ルナ自身、なんとなく、シンと一緒に、ドライブなり何なり、形はどうでもいいから、少しの間一緒にいたかったのだ。

シンがこう言ってきたからという理由でもない。

ただ、シンの言葉を聞いたから実感がわいたというだけで、その時になってルナは、もっと以前から自分がそう思っていたのだということを感じた。

というよりもむしろ、いずれは、こういう機会が必ずやってくるのだろうとさえ思っていた。

それが今だったのだ。

シンとルナは、シンが乗ってきたオープンカーに乗って、少しの間走ることにした。

ルナのいる家はとあるコロニーの中であり、当然、走る道もコロニーの中である。

円筒形の、狭い人口の大地では、見上げればそこにもまた人が立っていられる大地があり、少し遠くを見るだけで、世界の果てを塞ぐ『フタ』が見えた。

だが、宇宙で暮らすコーディネイターにとっては、これこそが世界の正しい姿だと思うような者もいるのだろう。

地球から見上げた空には大地はなく、どれほど遠くを見渡そうと、世界に果てはない。

そのことを知らないような者さえ、コロニーの中にはいるかもしれない。

そんな、当たり前前の光景を眺めながら、二人を乗せた車は、コロニー内の街道を走っていた。

世の中、コロニーほど見栄えがよく、それゆえ殺風景な場所はないだろう。

小奇麗にまとめられ、だからこそ、つくりものののだと感じさせる風景は、シン達の心に、特別感慨をわかせることはなかった。

だからこそ、シンが何気なく言った言葉は、コロニーの中、風に当たりながら車で走ったから出たのではない。

「俺達って、昔から比べると、変わったのかな」
ルナは応える。

「．．．さあ？そんな、驚くほど変わってはないと思うわよ。でも、何も変わっていないことはないと思う．．．特にあなたとかね」

「．．．そうか．．．俺、やっぱり変わったように見えるんだな」
「そりゃあ、多少はねえ」

「．．．自分が変わっていくのって．．．いや。他人が変わっていくのを見るのって、どんな気持ちなんだろうな」

「．．．よく分からないわねえ。別に嬉しくも、悲しくもないし．．．死んだわけじゃないんだしね」

「でもさ．．．あんまり人が変わり過ぎると、変わる以前の人が、

まるで死んだようには思っんじゃないかな．．．俺は．．．」

ルナにはシンが、自分自身のことを言っているのだろつと、なんとなく分かった。

そして、今のシンの言葉を聞いて、それが確信できた。

「知らないわよ」

シンの独白のような言葉をこう遮った後、ルナは静かに語り始めた。
「今なら、正直に言わせてもらうけど．．．私、士官学校であなたに会った時、『こいつホントに同い年なのかな?』って思ったの。

まるつきり子供だったのよ、あなた。わがままで、短気で、バカ正直だって、顔に書いてたの、はつきりと。こんな自分の気持ち丸出しで生きてるようなヤツ、初めて見たって感じだった」

「へへ、そうだったのかい」

「でもま、その印象は変わらなかったけど、付き合っていく内に、いいヤツだったってのは分かったわ。正直だったし、努力もしたし、からかう甲斐があつたし、友達でいる分には、ホントにいいヤツだったわよ．．．でも、仲良くなっていく内に、段々思ってきたの」

「．．．何を」

「多分あなたは、ただの正直者じゃないんだって．．．子供みたくに怒りっぽいけど、その分純粋な気持ちの奥で、私たちじゃ触れ様もない何かがあるっていうのが、なんとなく分かった。それが何なのかは当時は分からなかったけど、今なら分かるわ．．．」

「．．．そうか．．．」

「それで、こうも思ってたわ．．．あなたがその、心の奥にあるものを見せてくれない限り、あたし達はずっと、ただの友達のままでしかないって．．．あなたも、私のことをただの友達だとは思ってくれないって」

「．．．そうだな．．．確かにそうだった」

「でも、逆にいえば、あなたの心の奥にある全てを曝け出すことで、私達は本当の友達になれる。もしかしたら、それ以上にもなれるかも、って思ってた．．．そしてそれが現実になった」

「．．．．．」

「今こんなこと言うのはどうかと思うけど．．．あたし、一度あなたの恋人になれて、よかったと思う．．．あなたのことをよく知ることができて、本当のあなたと、どうやって付き合っていけば、向き合っていけばいいのか、分かった気がする．．．」

ルナがそこまで言ったところで、シンもまた、静かに語り始めた。

「．．．ルナ、俺たちは友達だ．．．昔は違ったけど、今は、もうただの友達だ．．．俺は変わった。そして、新しい隠し事をつくってしまった．．．だからまた、あんたとは、ただの友達になってしまった．．．」

「え？」

「ルナ．．．もし俺がまたどこか遠くへ行って、そのまま死んじゃったら、悲しいか？生きていけないか？」

「．．．．．そりゃ、悲しいわよ。でも、生きていけないほどじゃない」

「そうか．．．」

ルナには、何故シンがこういうことを聞いてくるのか、分からないように、なんとなく分かるような気がした。

シンは、静かに続ける。

「．．．．．これが終わったら、またその内会いに来る。一週間後かもしれないし、十年ぐらい後にもなるかもしれない．．．けど、さっきのはただのたとえ話だ．．．いずれ、また会いに来る．．．別にどこにもいったり、すぐ死んだりはしないから、安心してくれ．．．ただ、その代わり、これから俺達は、一生だたの友達でいることになるのかもしれない．．．でも、昔のような友達とは、ちょっと違うけど．．．」

「．．．」

「ルナ．．．済まない」

「なんで謝るの？」

「．．．そうだな。そっぴや何でだろう．．．よく分からない」

「シン、今分かった。あなたって変わったんじゃない、元から変わってるのよ」

「はは．．．そうか、なるほど」

二人は、しばらくコロニーの中を走り、その中をグルリと一周回って、ルナの家へと帰ってきた。

そしてそのままシンは、どこへともなく去っていった。

どこまでも素っ気なく、味気ないひと時だったが、ルナには不思議と、大きな価値があつて、何か、哀しみと温かみがない交ぜになったような不思議な感覚があつた。

その感覚の正体は分からなかったが、ただ一つ言えることはあつた。シンは、確かに変わった。

ルナ達が知らないところで、知らない内に、知らないほどに大きくそして、いい方向に．．．

そんな考えだけが、だからどうしたというわけでもなく、頭の中であつたのだ。

人類の平和の夜明けは、そう遠くはなかった。

オーブを中心とした、政令特区の設立され、その治安は思っていた以上に安定していた。

ナチュラルとコーディネーターが共生することに不安はあつたが、互いに望む者同士、あるいは、見込みのある者同士で生きていく分では問題はないのである。

実害はない、要は、価値観の違いだけだ。それを確信できる気がした。

そして、終戦から十年が経つのだろうか。

世界は、確実に平和へと向かっていた。
だが、それに慢心した時こそ、人類史の本当の意味での終焉はやってくる。

眼に見える範囲でも平和の向こうには、まだ戦争の火種は燻びついているのだ。

ちょうど、二度目の大戦が起きたのも、今のうちに、世界が安定し始めていたときに起こったのである。

その原因こそ、人々の中に根付いていた衝動だったのだ。
これからが過酷である。

世界が形として安定し始めたその次に成すべきことが、意識の改革だったのである。

互いの問題の解決に戦争を考える意識そのものを消し去る。

そうしなければ、真の意味での平和は訪れない。

そしてそれは、言うは易し、成すは難しだ。

世界の安定に亀裂が入るのを監視し、それを大きくなる前に埋めていく必要もあった。

それが、あと十年か、五十年か、あるいは、十の世紀を跨ぐのかは分からない。

あるいは、不可能かもしれない。

個人の考えもまた、キラ達の信じる自由というものの、一つの形なのだから。

自由が負の方向に向かう。

シンにとっては一切気が抜けなかった。

そんな中である。

すでに世界全体の指導者として成立しつつあるクライン派の幹部となっていたシンは、突然、キラに呼び出された。

いつものあの墓標の前、ではない。最近のシンは、プラントに缶詰状態になっており、地球に降りることができなかったし、それはキラも同じだった。

二人が対面したのは、プラント内にある、特殊な区画である。

プラント全体の整備を中継するための区画であり、この先あと100mほど渡って、機密扉を抜ければ、プラントの外に出られるのであったが、何故だか知らないがそこは、強化ガラスで全体を覆われており、広大な宇宙空間を見渡すことができた。

そのため、中々の絶景が拝めるとして、もの好きな観光客などはよくここに来ていた。

とはいえ、宇宙に住みなれている者達にとっては興味はないし、閉鎖的なこのご時世、そもそももの好きな観光客自体、プラントには居はしなかった。

だからこそ、この場にいるのは、シンとキラだけだった。

さすがにプラントの末端であり、整備の中継点ということで、足場はそう広くはないし、随分と殺風景だった。

周りがガラスで隔てた宇宙空間であるのだから、まるで、真空の中で浮かぶデブリの上に立っているような感覚が味わえた。

しばらくの間二人は、宇宙に浮かぶ他のプラントや、あるいは、それ以上に小さく浮かぶ地球の姿を眺めたりしていた。

ふと、キラが呟く。

「世界は、眼に見えるほどに、よくなっていると思える」

「・・・そうですね」

「でも、世界がよくなればなるほど、その先に待っている未来が分からなくなってくる。自分達が向かう場所がどこなのか、見えなくなってくる。でもそれが、正しいことなんだ」

「・・・そういうのなら、分かります」

「・・・未来は分からなくて当然なんだ。眼の前にある暗黒は、同時に、無限の可能性でもある・・・つまり、希望なんだ・・・自分達でどう考え、どう行動していくか、そして、どこに行くのか。分からないからこそそれを考えることができるというのは、とても幸せなことなんだと、僕は思う・・・そして、こんなことを言うのは

いけないかもしれないけど。人類が、僕達が、数ある可能性の中から、滅びるような結果を選び取ったとしても、どれほど抗ってもその結果を変えられなくても、僕は多分、後悔はしないと思う。それもまた、人類に託された希望の結果だったんだから．．．そういう結果もまた、人類に許された幸福の形なのかもしれない．．．．．でも僕は、後悔はしなくとも、そんな結果のために生きるつもりはない．．．あらゆる可能性と希望、そして自由があるなら、僕は、滅ぼすのではなく、生みだしていくことを選択する．．．それが僕が選んだ自由だ。そして人々には、それぞれの選ぶべき自由がある。それが滅びを選ぶことであっても、何であっても．．．自由は、誰にだってあるんだ．．．君にも」

「．．．キラさん？」

「シン．．．．．今まで君はよく頑張った．．．僕が言うのも偉そうだけど、もういいと思う．．．」

「．．．．．どういことです」

「僕にはなんとなくだけど分かる。君には、行きたいところがあるんだろう？そこに行くのも、いいと思う」

「．．．．．」

その言葉は、キラが、全てのことを知っているのではないかという予感をシンに与えたが、決してそうではない。

キラは幻想郷の存在は知らない。

ただ、普段のシンの態度から、彼が、再びキラ達の下を離れて、どこかへ行こうと願っているということを判断しただけなのである。そういうことならできてしまうのがキラという完璧な人間なのだ。シンは、そういうことを知ったと同時に、この期に及んでもまだ全てのことを話そうと考えない自分を少し情けないと感じつつも、他の世界から隔絶された幻想郷の意味を鑑みながら、口を塞ぐことを考えた。

ただ、キラの言うことを静かに聞くことにしたのだ。

「．．．僕はね。信じられないだろうけど、世界を平和にしなければ

ばいけないという使命感で生きてるんじゃないんだよ．．．世界を変えていくことに幸せを感じられるから、純粋な気持ちで、平和のために生きていけるんだ。そういう風にできてしまったからじゃない。これは、僕の本当の気持ちなんだ．．．そして君にも、平和のために生きるという心はある．．．でも君には、それ以上に大きな気持ちがあるんじゃないかな。ここではないどこかに、待っている人が、いるんじゃないか？」

「．．．いる、と思います」

だんまりを決め込んだ端からだった、シンは、このことには正直に応えた。

「なら、会いに行ってもいい。平和のことは、忘れてもいい。自由って、そういうことでもあるはずなんだ．．．．．世界のことは僕達に任せてくれたらいい。君は、平和のために生きるシンであり続けるのか、君自身の望むシンに変わるのか、自分で選んで決めてくれ．．．僕は何も言わない」

それは、念じれば、全てではなくとも、多くを知ることができるキラの、少しばかり高慢な、シンに対する情けであった。

まるで神が人間に施すような情けであった。

だが、シンにとっては、平和よりもはるかにちっぽけだが、同時に遥かに大きな望みがあるということを認識させ、そのことに感謝し、決心をさせることになった。

思えばこれまでの、平和のためのシンの行動の全ては、キラ達のためであった。

平和を望むキラ達に応えるために、シンはこれまで、深く悩んでいた。

だが、本当のことを言ってしまえば、シンは心の底から平和を望んでいたのではないのだ。心の全てに關しては。

平和という『他』のために生きていける。だが、それは心からのものではなかったのだ。

もし、本当に心から尽くせる『他』がシンにあるというのなら、そ

れがもつと別のところにある。

それは、シン自身よく分かっていた。

誰かのために熟慮し、尽力することもまた正しいことであるが、そういう心を捨てて、自分のためだけに生きていくのもまた、正しいことであるし、自由だ。

もう、十年、いや、もう少し短いか．．．

どっちにしろ、少年が大人に変わっていくような時の間、シンは自身の心を平和のために律し続けていた。

そして彼女達は待ち続けていた。今も待ち続けている。

もう行ってもいいのではないか？行ってもいいのではないか？彼女達のところに。

シンは、諦めがついたような、あるいはほつとしたような、申し訳ないような、清々したような、あるいは踏ん切りがついたような、より一層引き締まったような、不思議なため息を一つついた後、キラの方を身体全体で向き、紅い瞳を僅かに揺らしながら、静かに応えた。

まるでそこが、何かの象徴なのではないかとさえ思えてしまっていた。

ただ、何でもない、たった一つの小さな墓標であるはずなのに。

シンは再び、この場所へとやってきた。

また、この世界から去るために。

今度は、キラに対して、その想いをうち明けたのだから、大きな混乱が発生することはないだろう。

みんなはせいぜい、『またか』という具合にあきれ果てるぐらいだろう。

世界も、ある程度は安定を見せ、シン一人がいなくなったぐらいでは、大きく揺らがないところまで来ていた。

必要とされていない、とまではいらないが、シンが居てもいなくても、すでに関係はないのだ。

いや、それすなわち、必要とされていない、ということなのだろう。世界が安定し、人々の視線がもう少し前の方を向くようになったとき、シンは、自分自身、この世界で生きる価値はほとんどなくなっただと思った。

全てではない、だが、有り余るほど多く、大きいわけでもない。

だが、まだ完全な平和が実現していない以上、この世界を離れるわけにはいかないと、理性的に考えていた。

だが、キラの言葉が、そんな考えも払拭した。

最後に最後に、シンは、自分の望みだけのために、ある種エゴイスティックに行動することを選択したのである。

いつぞやと同じように、風が吹き抜ける中、墓標の前へと立ったシンは、その小さな墓標に対し一瞥をくれた後、その向こうに広がる、海原に眼を向けた。

島国であるオーブでは、見る機会の多い海というものだが、今のシンには、その姿が、随分神秘的なものに見えた。

まだ朝も早い時期である。

朝焼けに照らされる海面が、そういうことを想起させたのだろうか。だが現に、海というものは、人類にとって、神秘的なものなのだろう。

種としての命の根源であるのだから。

海とは、地球の最初の姿であり、全ての生命の源であり、侵されざる聖域であったのだ。

今では、人類の高慢さが汚染し、その底には、多くの文明の残骸が

沈んでいるが、それでも、人類にとって海は、神秘の世界であり、畏敬の対象なのかもしれない。

ふとシンは、幻想郷に海がないのは何故だろう、と考えたが、答えが思い浮かばないので、考えるのをやめることにした。

代わりに、別のことを頭に思い浮かべることにした。

いや、声をあげた、とも言えるだろう。

シンは、脳裏で、この世界と、ここではない別の世界の境界に住む紫に対して呼びかけたのだ。

そうすることで、彼女を呼び寄せることができるはずだった。

その通りに、一度呼びかければ、すぐに返事が返ってきた。

脳に直接響くような声である。

だが、クルーゼではない。紫だということは、すぐに分かった。

——随分と早かったわね．．．あと十年は来ないと思っていたわ

その声に、シンは応える。

「あと十年したら、俺はともかく、あんたらなんかは、結構な歳になっちまうんじゃないのか？」

——何を言うのかしら．．．この幻想郷を、あなた達の世界と同じに考えてはいけない。そっちが60の季節を巡る時、幻想郷は一つの春を越す．．．たとえあなたが短い生涯を終えても、私達にとっては大したことではないのよ——

「そうかい。百年も千年も、関係ないってか。そりゃ暢気に暮らせるはずだ」

——羨ましいのかしら？——

「いや、それほどでもない．．．たとえ百年しか生きられないようなちっぽけな人生でも、楽しいと思えば楽しいもんだ。あんた達から見れば、ほんのつま先ぐらいの短い人生でもな」

——そうね．．．そのつま先ほどの長さが、時として大きな存在感を出すこともある。永遠に近い人生の中の、価値ある記憶として

ね．．．そういうものの大事さぐらいなら、私達にだって分かるのよ。だから私達としては、あなたを、今度こそ歓迎します——

「俺の短い人生を？ちっばけな人生を？」

—— ええ、よい思い出として、心に残しておくために．．．みんな待っているわ。さあ、おいでませ——

シンの眼の前に、ちょうどその背丈分ほどのスキマが出現する。

相変わらず、空間が引き裂けたその向こう側には、形容しがたき力オスが広がっていたが、それは所詮、紫の趣味の悪い庭の絵ではないのだ。彼女にしか踏み入れられない境界、シンには行けるはずもない、言っなければ、次元の違う世界だ。

このスキマを抜けて、シンがこれから行く世界は、もっと別なものなのである。

シンの望む世界。

ちっばけな命が、ちっばけなりに、生きて、ちっばけなりに、思うように死んでいける世界。

小さなころに失った、何も考えなくてもいい安らかさに包まれることが出来る世界。

シンは、再びコズミック・イラから離れることを、キラ達に心の中で謝罪しつつも、自分の気持ちに正直に生きることには罪悪感は一切なかった。

いずれまた、機会があれば戻ってくる。

そう近いながら、シンは、スキマの中へと足を踏み入れた。

そして、彼の身体を呑みこんだ空間の裂け目が、ぴたりと閉まる様に消滅した時、彼は再び、重苦しさ他希望に包まれたこの世界から、姿を消した。

そしてそこで、コズミック・イラの人間としてのシン・アスカの物

語は、一旦の終わりを告げる。

これからは、新しい始まりのときだ。

「あんたは？．．．確か、シン・アスカだっけ？わたしのこと覚えてる？」

「ああ、よく覚えてるよ。レティ・ホワイトロックだろ？久しぶりだな」

「そうだねえ」

「もう冬も盛りだ。お前にとっちや、気持ちいい季節だろう」

「そうそう」

「．．．それはそうと、俺さ、お前に会ったら、言っておきたいことがあったんだ」

「なに？」

「俺、冬ってさ、好きだぜ．．．ほら、見てみるよ。いい感じに雪が積もってさ、綺麗に一面真っ白だ．．．こういうのって、やっぱりいいよ」

「へえ．．．そう．．．そうだね」

「お前が寒いのが好きっていう気持ちも、よく分かるぜ。ま、夏が嫌いってわけでもないけどな」

「ははは、そりゃ、冬が好きなら人間ってのは、大抵夏も夏で好きなんだ．．．わたしは人間じゃないけどな」

「そりゃそうだ。妖怪だもん．．．最近俺、妖怪とも結構仲良くなれるんじゃないかって思えるようになってきたよ」

「そう．．．わたしとも仲良くなれるのかな？」

「そりゃ、お互い望めば、簡単だよ」

「．．．そっか、簡単か．．．じゃあさ、友達にでもなってみようよ」

「それもいいな．．．．．あ、あいつチルノだ」

「ホントだ．．．あいつ、作り物の寒さを振り撒いてるんで、あんまり好きじゃないんだよね」

「そうか？似たもん同士に見えるんだけどなあ．．．だったらいちよ、ちよっかいでも出してみるか？」

「いいよ、めんどくさい」

「そうか．．．って、見つかった。こっち向かってきてる」

「こっちがちよっかい出さなくても、向こうが出してくるんじゃないかねえ．．．とほほ．．．」

「聖、久しぶり。俺のこと、覚えてるか？」

「あなたは？ああ、はい、覚えていますよ。シンですね。お久しぶりです」

「しっかし驚いたよ、あんたんとこのお寺。人でいっぱいじゃないか。みんなあんたのことを敬ってるんだと思うと、あんたがどういう人なのか、改めてよく分かった気がする」

「そんなことはありません。あなたのような、清らかな心の持ち主が寺院を開けば、もっとたくさんの信仰が集まりますよ。あなたもお寺を建立しては如何ですか？」

「いや、俺はいいよ。そんな大げさなことはしないし、あんたのように、大きく世の中を変えていくのも、実はあんまり好きじゃないんだ。ちよつと前まで、世界を平和にするために勉強してた身なんだけど」

「・・・そうですか。少し残念です」

「まあ、その代わり。俺には俺で好きな性分があるっていうこと、最近分かってきた。俺さ、もっと小さな範囲で、一個人を、少しずつ変えていくのが好きなんだ。たった一人か、あるいは、多くても十人ぐらいかな、それくらいの人に、いろんな幸福とか、考え方を教えていきたい。そしてその人達に、いろんなことを考えさせて、本当の自分の気持ちを知ってほしい。そうやって、俺自身も変わっていききたい・・・そういうのが好きだってこと、最近分かってきたんだ・・・あんたもそういうの、分かるかな」

「分かりますよ。素晴らしいことじゃないですか」

「やつぱり、あんたにそう言ってもらえると、嬉しいよ」

「私だって、そういう風にいつて頂けると、照れくさいです」

「・・・なるほど、お互い様なんだな」

「お互い様です」

「おーい！ちえーん！」

「シーン！久し振り！会いたかったよー！」

「ようやく暇ができてな、みんなと会いにいつてるんだ」

「元気にしてた？藍しゃまのところにもいくんだね」

「ああ、後でな。俺、ずいぶんと変わっただろ？」

「そっかなあ。そんなに変わってないと思うけど．．．でもまあ、身体とかおつきくなったよね」

「橙は何も変わらないなあ．．．なんかうれしいよ」

「またなんで？」

「いや、なんでかは知らないんだけどさ．．．そうそう、この前もらった箸さ、元の世界でも使ってたよ。今も持つてる．．．またマヨヒガで飯でも食べたいなあ．．．一緒に喰うか？」

「生憎なんだけどねえ．．．」

「ん、どうした」

「今日のシンは迷ってないからね」

「ああ、なるほど．．．」

「うらめしやー！」

「うおっ！？いきなり驚かすなよ！」

「そりゃ無理だよ、なんせあたしだからね」

「なんだ、小傘か」

「なんだじゃないでしょ、久し振りだねえ」

「その様子ならお前も、変わってないみたいだな。安心したよ」

「変わってない？逆じゃないの？見事に人を驚かせれるように変わったんじゃないかしら」

「そうだな、確かにそうだ．．．よく勉強したんだな。俺には分からないけど」

「そうそう。おかげさんでね．．．で、そっちはどうだったの？」

「．．．実はまだ、完璧ではない。でも、いい方向には向かってる。それで、俺も、いろいろと許しが出たんで、ようやくここに戻ってくる事ができたんだ」

「そっちはまあ随分と様変わりして．．．まるでおっさんじゃない」

「ばっ．．．！おっさんじゃない！まだ三十もいつてないんだぞ」

「ほーらまた驚いた。えっへへへ」

「．．．また楽しくなりそうだなあ、まったくさ」

「そうそう、また楽しくなるよ。なんならまた、一緒に行楽でも楽しめますかい？」

「そうしたいんだけど。今は待つてくれないか？いろいろ行きたいところもあるし、会っておきたい人．．．人？もいる」

「マヨヒガとか、冥界とか？」

「ああ、マヨヒガにはもう行ったし、これから冥界にも顔を出そうかなって思う。それに、そういうのもなしにして、俺にはちよつとの間、ゆつくりしていたい場所があるんだ」

「ああ、なるほどねえ。なるほど．．．そりゃ、行楽はもう少し先になるねえ」

「気が向いたら、来いよ。他の人？達はともかく、俺は歓迎するぜ」

「毎日驚かしにいくよ」

「はは、毎日困る」

「急にお邪魔してるんだが、妖夢、俺のこと覚えてるか？」

「あ、はい。クルーゼ様と同じ世界からやってきたお人なのだから、よく知っていますよ。シン・アス力さんですね」

「ああ」

「御用の赴きは？」

「いや、別に用はない。ただ、ちょっと桜でも見たいと思ったんだ」

「今は冬ですよ？」

「じゃ散歩だ。ここって落ち着くんだよ、多分」

「た、多分ですか」

「暇なら、お前も付き合ってくれるか？」

「ええ、いいですよ」

「忙しくないか？」

「はい。最近、クルーゼ様がここに住んでおられるということで、式神の藍様が掃除を手伝ってくれるんです。しかもそれがなんともてきぱきとしていて、いつもの2倍は動きが素早いんです。おかげでわたしの方も、少しだけ暇ができるようになったんです」

「へえ、あいつが・・・そういうことなら、ちよつと、ついてきてくれよ」

「最近、クルーゼの調子はどうだ？」

「とてもよいですよ。もう何の心配もいりません。全ては、あなたがあの方の命を繋いでくれたおかげです。ありがとうございます」

「別に、感謝しなくていいよ。よかれと思ってやったことだけど、見返りがほしくてやったことじゃないんだ・・・あれが西行妖か・・・

・今度は春に見に来ようって思ってたんだけど、結局冬になっちまっただな・・・」

「なら、また春に来ればいいのですよ」

「そうする・・・それはそうと、紫とか幽々子さんも元気にしてるか？」

「はい、お変わりなく」

「そうか．．．まあ、お変わりありそうな人達じゃないからな．．．お前はどうか？」

「元気ですよ。見て分かりませんか？」

「．．．そうだなあ、聞く必要なかったな．．．藍にも会っておきたい．．．今居るのか？」

「居ますよ。どこにいるのかはちょっと分かりませんが、探せば会えます．．．クルーゼ様とはお会いにならないんですか？」

「ああ。今はな．．．はつきりとは分からないんだけど。今俺みたいなヤツが、クルーゼに会う必要はないと思うんだ．．．俺は今でも、外の世界の人間なんだからな．．．あいつは多分、今の俺以上に、外の世界を捨てているんだ。というか、今捨てようとしている。あいつに会うのは、そういうのがいろいろ済んだ後でいいと思う」

「．．．．．よく分かりませんが、そうなんだと思います」

「そんじゃ、とりあえず、藍に会ってくるよ。お前も元気だな」

「はい。ごゆっくり」

「シン。久しぶりだな」

「ああ、妖夢から話は聞いたよ。あんたの方は、いろいろと変わったみたいだな」

「そうだね。良かれ悪しかれ、自分で変わったことが分かる」

「．．．．．という風に」

「自分の意思というものは、やっぱり大切なんだと思う．．．紫様は、時としてそれをバグとして抑制するけど．．．でも時には、バグとしか言いようのないものが、全てをいい方向に導いていくこと

がある。ゴースト・イン・ザ・マシーンっていうヤツだ．．．私は最近、ただのコンピューターじゃなく、意思を持った存在になってきたんだ。私という無二のものに．．．．．最近私は、自らの意思で、何をすべきなのか、何をすればいい方向に物事が進んでいくのかを、よく考えるようになった。しかも、ただ自分勝手に考えるだけじゃない。誰にどんな風に作用して、どう思っのかも、考えるようになった．．．」

「．．．それで、お前は思うんだ？そのこと」

「素晴らしいことだと思う．．．紫様は、何も言わないけれど．．．それはつまり、いい事なんだ」

「そうだな．．．俺もそう思う」

「シンは、これからどうするんだ？」

「．．．さあねえ．．．気ままに暮らすさ．．．そういうのって、今までやったことないから、よく分かんないんだけど．．．」

「簡単だ．．．何も考えなきゃいいんだよ．．．おかげで私も、気ままに生きるって、こういうことが分からない．．．それが私の気ままな生き方だ」

「．．．相変わらずよく分からないこと言うんだな」

「分からなくない。その内に分かるよ」

「．．．そうか」

「ようお空！いきなり済まんねえ！」

「うにゅ？ほひふまのおへえはんまほーひへふーみ（星熊のお姐さんがどうして急に）．．．ん？．．．うにゅーっ！」

「どうだ！びつくりしただろう。お燐とさとりちゃんも呼んで来い・
・ようやつと帰ってきやがってなあこいつ！すっかりおっさんにな
なっちまってなあ」

「だ、だからおっさんじゃない！」

「だから？」

「それよりも、早くお燐やさとりにも会わせてくれ」

「うにゆ、そりやもう、すぐにでも呼んできますわ」

「頼むぜ。とりあえず、早く一言言っておきたいんだ」

「なんて？」

「『待たせたな』って・・・後、『いろいろお土産があるから、楽
しみにしてろってさ』」

「な〜んだー・・・そういうことなら、わざわざ言う必要ないよ・
・そうだろう？」

「・・・なるほど、そうだな・・・今から、あいつの喜ぶ顔が眼に
浮かぶよ・・・気分がいいな・・・幸せだよ・・・」

FINAL・PHASE『暁への飛翔』（後書き）

ということ、ここからはあとかきの文章になります。

4か月とちょっと前に連載が開始したこの小説ですが、話しの大筋がある程度纏まりましたので、ここで一応の完結とさせていただきます。

とはいえ、あくまで一応の完結ですので、またいずれ、後日談とか、番外編的な話を折り込んでくるかもしれません。

今は、すでに新しい連載も開始して、そちらに注力しており、個人的にも忙しい時期なので、当分先のことになりそうですが。

さて、最初は、本編ではヘタレで鬱陶しいだけの敵役という形で終わってしまったシンを、もっと主人公らしく掘り下げていこうと思って連載を開始したこの小説ですが、段々と全体のテーマが重苦しく、かつ難解極まりないものになってしまつて、最終的には著者自身でもいろいろと收拾つかなくなり、支離滅裂な感じの展開になつてしまいました。

小説的にも、あまり面白くはなかったのかもしれませんが。不完全燃焼といえるかもしれません。

こういうことを言うのは、作品の生みの親として慎むべきでしょうか、自身の腕の未熟を嘆くばかりです。

作品に対して、申し訳ないことをしたとか、少しか偉そうなことを言うのをお許しください。

なんか、Vガンダムを作った後の富野監督の気持ちがちよっぴり分かった気がします・・・ってこれも大概失礼な発言だなおい。

それと、種死からの登場人物は、シンを始めとするほんの一部のキ

ヤクターだけにしようと思っていたんですが、終わってみれば、クルーゼがもう一人のメインキャラになり、登場キャラも非常に多くなってしまいました。

まあ結果的には、割かし賑やかな話しになったかもしれないですね。その分、シンの存在感が薄くなったかもしれませんが．．．それじゃ本末転倒だ．．．

そういうことで、あまり楽しめなかったという読者様には、本当に申し訳ございません。

それでも、多くの読者様にご覧になっていただいたことは、物書きの端くれとしてはこれ以上ない幸せですし、ここまで頑張って執筆を続けてきた甲斐がありました。

これまで応援してくださった皆さまには、本当に感謝しております。そして、こういう小説でも、面白かった、楽しめたと言って頂ければ、幸せです。

今回の執筆で、いろいろと学ぶことができました。

その学んだことを、次の連載では活かしていきたいと思っています。

とはいえ、結構大変な執筆活動だったので、今度は、もう少し気楽に更新していききたいと思っています。

作品全体のテーマも、あまり深く考えず、雰囲気もあまり重くせず、軽い気持ちで読んで頂けるような作品にしていきたいと思っています。

とまあ、これぐらいで、連載終了のご挨拶とさせていただきます。これまで、長い間お付き合い頂いたことに、重ねて、感謝致します。それでは．．．

勇敢なるザフト兵士のみなさん、（ry

．．．すみません。

皆様、ありがとうございます。

とまあ、実はあとちょっと残ってるんですけどねえこれが
今際の時まで、お付き合い願います。

「みなさいクルーゼ．．．世界が動いている」

「本当だな」

「これでもう、悩む必要も、悔やむ必要もない．．．世界はあなたという闇を、古の淵に置いてけぼりにした．．．．．」

「．．．．．紫よ．．．私は．．．いや、俺は．．．もう外の世界に眼を向けるのは、やめにしようと思う．．．」

「そう」

「俺は、自分を卑下にすると共に、俺が生きてきた世界に、憧れていたのだ．．．もつとまともに、あの場所で生きていたかった、と．．．だが、叶わぬ願いに想いを馳せることが無意味だということが、よく分かった．．．もう、諦めるさ．．．そういう心も、私は過去

に置いてゆく」

「諦めるの？」

「．．．．．違うところに眼を向ける．．．届かない場所ではなく．．．手を伸ばせば届く場所に．．．それがここであり、君の下だったのだ」

「そう」

「若者なら気恥ずかしがるような台詞だが．．．そちらが許してくれるのならば．．．この私を、君の下に置いてはくれないか？」

「何もかもというのなら、お断りします」

「．．．」

「あなたは幽霊であるのだから、白玉楼で幽々子達と暮らさない．．．でも、一つだけなら、私のこの身の隣に、常に置いておいてあげましょう」

「それは」

「あなたからの愛．．．．．それで不足だというなら、今この場で成仏させてあげるけど」

「．．．．．ふ．．．ふっはは．．．はははははは！」

「気でも『ふれ』たの？」

「はは、馬鹿言え．．．十分だよ、それで。十二分だ．．．ははは、何故だろうな、とても愉快的気分だ．．．まったく、どうしてだろうなあ」

「．．．実は私、今のあなた以上に愉快的なのよ？．．．そして、あなたが私を愛する以上に、あなたのことを愛しているのよ？」

「そうなのか？」

「どうでしょうね」

「嘘だろう？」

「あなたがそう思うなら」

「．．．本当なのか？」

「あなたがそう願うなら」

「．．．．．ふ．．．ふふ、ははははは．．．分かった。分かったよ」

「愉快さの理由が？」

「ああ、よく分かった．．．．．紫、これからも、いろいろとよろしく頼む」

「ええ、こちらこそ．．．」

「そのついでだ．．．．．今夜、風呂でも入らないか？一緒に」

「それは断る。あんた、そういう文句は下手ねえ．．．って言うのは嘘」

「．．．入ってくれるのか？」

「というのも嘘」

冬の冷たい風も、一面の雪景色も、いずれは終わりを告げ、春がやってくる。

春は、多くの者にとって、新しい始まりである発芽の季節であるが、それはあくまでも、そう感じるというだけ。そうなのだろうと感じているだけなのである。

ならば、だ。

もし永遠に春が訪れることがなくなった者が、せめてその心の中だけで春を迎えられるようになったとしたら。

たとえ、全ての季節が停止した永遠の無の中であろつと、春も、あるいは、夏の日差しと土の香りも、秋の穰の風も、冬の白銀も、全てを心の中で迎えることができたとすれば。

それは何よりも哀しく、しかし、短い四季の移ろいを感じるよりも

はるかに、和やかなものではないのだろうか。

そしてそれ以上に素晴らしいことは、季節が移ろう中で、また、心の中でも、その季節を楽しめること、あるいは、別の季節に想いを馳せることではないだろうか。

幽霊となることで、半ば永遠の生（と、言っているのだろうか？）を享受することになったクルーゼは、冬の神秘的な寒さを感じる中で、春の温かさを想起する時、無性に幸せになった。

だから、彼の頭にふと浮かんだこの奇妙な考えも、きっと間違いではないのだ。

あまり見る機会のない紫の胡散臭さの無い笑顔が、そのことを確かに心に刻み込んでくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5851k/>

東方紅蓮瞳 ~ Pupil with red Destiny ~

2010年10月20日18時14分発行